日本戯曲全集

第三十九巻

瀬戸英一
川村花菱
行友李風
中内蝶二
木村錦花
曾我廼家五郎
曾我廼家十郎

現代篇第七輯

東京 春陽堂版

「國定忠次」河原崎權十郎の忠次

「鼠小僧心願」澤村訥子の鼠小僧

「國定忠次」舞臺面

「花の夜語」　常磐津文字繁　花柳章太郎
鈴藤要之助　藤村秀夫

「大尉の娘」花柳章太郎の露子

「大尉の娘」井上正夫の森田愼藏

「研辰の討たれ」猿之助の研辰・友右衛門の市九郎・亀藏の才次郎

「研辰の討たれ」舞臺面

「研辰の討たれ」猿之助の研辰

「戀の研辰」舞臺面

「稽古中の研辰」　猿之助の研辰

川村花菱

中内蝶二

瀬戸英一

曾我廼家五郎

日本戯曲全集　第三十九巻　目次

川村花菱篇

瀨戸英一篇

行友李風篇

川村花菱篇

死（一幕）

人物

A　狩獵家（五十歳前後）
B　狩獵家（同）
Aの妻（三十五歳）
Aの從僕　青年

場所

Aの書齋

時

冬の宵

舞臺　狩獵家Aの書齋。狩獵家と云ふよりは、むしろ狩獵狂とも云ふべき主人を持つた一室は、一見それらしく見ゆるやうに飾られてある。
正面に、觀客向きになつた大きな入口。その左右の壁には窓あり。入口、窓共にカーテンをかけて、それをひきあけると、廣々とした庭を見る。庭には、いろ／＼の立木あり、夜のうす青い光の中に、大粒の雪が霏々として降つて居る。

室の中には、昔からのいろ／＼の銃器、獵具のやうなものを陳列し、右手に出入口、左手には造りつけの立派な暖爐あり。暖爐の前には小さな卓、そのまはりに數脚の椅子あり。天井の中央から電燈が下つて居る。壁には、凡て狩獵に關するいろ／＼の畫、又は獸の皮の類をかけてある。舞臺全體の感じは、寫實よりはむしろ裝飾的なるを主眼とし、出場人物の服裝も、勿論洋裝ではあるが、時代流行、さうしたものを超越した、美しい、そして見るからに快感を起すやうなユーモラスなものである。幕があくと、主人Aが、出獵の時そのまゝの服裝で、從僕と相對して立つて居る。ストーブの火が、赤く燃えてゐる。

A　おい、雪はまだ降つとるか？
僕　（カーテンを開いて外を見て）はア、まだ盛んに降つとります。
A　さうか、極端に降つとるか？
僕　はア、極端に降つとります。
A　（窓から外をながめて）オー、降つとる、降つとる……そら……、何時だつたかなア、己れが、熊を打つたのは、やつぱりこんなに雪の降つとつた日ぢやつたが……何時だつたかなア。
僕　はア、何時で御座いましたかなア。

A　馬鹿、己れが貴樣に訊いてるんぢやないか、その貴樣が忘れると云ふ事があるか……。

僕　はア。

A　さうだ、出獵日記についとる筈ぢや、持つて來い！

（僕、日記帳を持つて來る）さあ、少し讀んで見ろ！

僕　はア……（と讀みはじめる）○月○日藪の中の鷄を雉子と間違へて打つ。百姓にその損害を取られる……。

A　そんな處は入らん事ぢやないか……。

僕　はア。

A　どれ見せろ！（と帳面を調べて）見當らん！　然し、やはりこんな大雪ぢやつたよ。己れが、そら桑畑の中を行くと、蜼の下からひよいと顔を出したのがある。何だらうと思ふと、熊だつた！　あゝ、あの時は愉快だつたなア、あんな愉快な事はなかつた……今日だつて、咽喉を痛めさへしなければ、從弟と二人で出獵する約束をしてあつたんぢやから、又熊でも獲れたかも分らん！　己れはまだ、のどを痛めて居るから諦らめられるやうなものゝ、己れに對する信義から、丈夫な體を此の雪を見ながら、一日家の中に燻ぶつて居る從弟の奴はどんなにつまらながつて居るぢやらうな。

僕　あの御方は、今日獵に御出かけにはならなかつたでせうか？

A　勿論出やせんさ！　あいつ位、しつかりした男はないよ、あいつ位、己れの心持を知つて居て呉れる男はないよ。かなり多くの獵友もあるが、腕と云ひ人格と云ひあの從弟位なものは日本中に又とありやしない！　いつかも、二人で野をあるいて居ると、いきなり鶉が飛び出した！　ハツト思つたが、二人共打ちかけなかつた。そこでわしがおい何故打たんかと訊くと、イヤ君こそ何故打たんかつた？　矢ごろから云へば丁度君の手に落ちる鳥だ、己れは、爭つて取る事はしないのだと恁云ふぢやないか……それから又少し行くと、又鶉が出た。此度は先生ぢつとねらつたから、わしの方で遠慮してひかへて居ると、鳥はどん〳〵飛んで行く、先生は一向打たん……怎したのかと聞くと、怎も、犬の樣子が、雉子でも出さうだつたから、四號の彈丸をこめて居た。それで打てば、うづらは粉々になつて仕舞ふ、己れは、只取ればいゝと云ふ目的で、小鳥を血だらけにして取る事はイヤだと恁云ふぢやないか……恁して、彼はあゝ人道的……待てよ此の場合、人道的といつて好いかな……とにかく、えらい奴だよ。己れに對して、一度も約束をそむいた事はないからな。昨日、己れは少し咽喉を痛めて、獵に出られんから、どうか今日丈は君も我慢して出ずに居てくれと頼んでやつたから、友情にあつい彼れは、家の中で、己

れのかはりに、咽喉に濕布でもあてゝるかも分らん……あゝ、好きな奴だよ！……さあ、もう少し、練習しようよ。

（と、Aは、從僕に蠟燭を灯させ、その火を、雷管丈をこめて二連銃で打つては消す。その樣子が、さながら出獵して、獲物に對した時のやうに、あるひは、急に銃をかまへ、又は忍び足によりながら發砲する。うまく消える時もあり、又やり損ふ時もあるが、いづれにしても、その樣子は、はたから見れば、氣狂だといふ風である。然し、Aは一生懸命である。）

A　さあ、此度は、雉子だ！　少し、その火を動かしてくれ！（從僕主人の命ずるまゝにする）いゝか、此度は、山鳥の「澤下り」だ！　火を持つて、臺から飛び下りろ……。

（從僕は命令のまゝにする。主人はそれに向つて發砲する。が、怎しても當らない。）

A　當らん！　イヤ、山鳥にかけては、從弟は實にすばらしい腕を持つて居る！　水鳥と兎なら、勿論已れの方に自信があるが、雉子山鳥は、從弟の方に勝味があるよ……さうだ、此の雪で、又鳥は里の方へ下りるだらう、咽喉がなほつたら、すぐ從弟を誘ふ事にしような……。

僕　はア。

A　そして、今日一日、已れの爲に、我慢さした鬱憤を充分に晴らさしてやらう！　ほんたうにあれは、眞實のある男だ！　向うが眞實ならこちつでも眞實でなくてはならない、已れは、もし從弟の奴が、何かの事情で獵に出られないやうな事があれば、たとへ、一日でも二日でも、イヤ一ト月でもぢつと我慢して居てやる――同じ趣味の親友の心持をふみにじるなんて事は、我々狩獵家の最も忌むべき行爲ぢやからなう！

（と又練習をはじめる。）

（と庭の方て、うれし想になきさけぶ犬の聲がする。）

（Aと從僕は耳を立てる。）

（犬は盛んになく。そして段々近づく。と、しばらくして、狩獵家B體中雪にまみれ、脊中に大きな一頭の鹿を脊負ひ、眞中の入り口から登場。さながら、自家へでもかへつて來たやうに思ふがまゝに振舞ひ、先づ脊中の鹿を下ろし、體の雪をはらひ、從僕を見て、）

B　おい、已れは馬鹿に腹が減つてるんだ！　奥さんに云つて、何でもいゝ、とにかくあつたかいものを、うんと喰はして下さいと云つてくれ！

（Bは今日の獵に小鳥を打つ六號の散彈で、鹿を射止め、世界のレコードを破つたと云ふ事て、もうすつかり有頂天になつて居る。）

僕　はい。
B　それからな、今日のベア（犬の名）の働きと云つたらすばらしいもんだ！　殆ど、猟犬の働きを超越した、まあ、云つて見れば、神わざとも云ふべき程のものだつた！雪で、すつかり濡れて居るし、それに疲れて居るだらう、乾いた藁で、體中すつかり擦つてやつてな、それから毛が乾いたら、暖かくして休ましてくれ！
僕　はい。
B　それで、勿論牛乳もやつてくれ、玉子もやつてくれ……いきなり、どつさりたべさしてはよくないから、それで、少し落ついた所で、此度は、ベア（犬の名）のすきなものを、うんとやるんだ！　いゝか。
僕　はい！
A　（不愉快に堪へないと云ふ表情で居たが、たまりかねて）此所に、主人が居るんだぞ！（と怒鳴る）
B　（Aの云ふ事などには、更に頓着ないと云ふ風に）それから、とにかく、喉が、乾いてるんだ！　大きなコップへレモンをしぼつて、あつい湯を入れて來い！
僕　はい！
A　此所に、此所の家の主人が居るんだぞ！
（と以前よりは、更に大きく怒鳴る。）
B　勿論、それには、砂糖をうんと入れて、なるたけ甘くしてくれ！
僕　はい！
A　此所に、此所の家の主人が居るんだぞ！
（と更に大きく怒鳴る。）
B　（Aには頓着なく）それから、もつと、火を燃やしてくれ……
僕　はあ……（とストーブの側に行きかける）
B　（とゞめて）あゝよし！　火は己れが自分でする、とにかく、のみものを先にしてくれ！
（從僕退場。Bは、自分で、ストーブの側に行き、薪をくべようとすると、A、いきなり、その薪をひつたくつて）
A　此所は、己れの家だ！　己れは、此所の主人だ！　貴様には、此の己れが見えないのか！
（と、Bの前に、すつくと立つ）
B　ハヽヽ（と快活に笑つて）君、怎したんだい？
A　（顔面の筋肉一つゆるめずに）貴様こそ怎したんだ？
B　（不思議さうに）えゝ？
A　此所は己れの家だ！
B　それは、ちやんと知つてるよ！
A　そんならば、禮儀を知れ！
B　親類の間で、加之、君と僕との間で、何故そんなに四

角ばらたければならないのだね？

A　貴様には、まだ分らんのか。

B　何が、分らないんだよ？

A　あゝ、もう、イヤぢや！　貴様はうそつきだ！　いつはりものだ！　百姓だ！　ドラ猫だ！

B　何、ドラ猫だ？

A　さうだ！　恩知らずの、メッカチのヒョットコのドラ猫め！　ボロ／＼な、きたない電車に轢かれて、ギューたになつて死んで仕舞へ！　えゝ、畜生め！　ゴムのやうな足の、お化けのやうな、モグリめ！

B　何だと……？

A　猫！　モグリ！　お化け！　畜生！　ウーだ！（と、うなつて歯をむき出す）

B　ウハヽヽヽ（Aの氣狂じみた様子が、可笑しいので、思はずふき出す）

A　何が可笑しい？

B　君、可笑しいよ！

A　己れは、可笑しくない！　己れは、悲しいんだ！　己れは、口惜しいんだ！　（と涙をぽろぽろこぼして）　悪黨！　悪漢！

（と、Aは、感情のいらだつたまゝに、何等の囚はれもなく知れるかぎりの言葉を連發する。所へ、Aの妻が、ホットレモンのコップを二つ持つて登場。）

Aの妻　あら、入らつしやいまし！　今日は何がとれました。（と鹿を見て）　まあ、これが、獲れたんで御座いますか……！

A　こらッ！　默れ！　默れ――貴様まで、己れを氣狂にしようとするのか！

Aの妻　何ですつて？

B　奥さん、一體、今日は、怎したといふんです？

A　生意氣な事を云ふな！　己れをこんなにしたのは貴様だ！　怎したか貴様の胸に訊け！　うそつき！　不眞實！　破廉恥！　うらぎりもの！　謀反人！

B　怎したんでしよう？　（とAの妻に訊く）

Aの妻　さあ……。

A　まだ分らんのか！　馬鹿！　鈍漢！　象の皮！　鯨！　己れは、昨日何と云つた！　己れは昨日貴様に何を頼んだ！

B　あゝ……あれなのか？　（とやう／＼思ひ出す）

A　あれとは何だ？　貴様には、アレでも、己れには重大問題だぞ！

B　よく分つた！　それなら、己れがわるかつた！　然し、それには又云ひわけもある……

A　云ひわけも何も入らん事ぢや！　己れは只、親友のよ

しみを以て、己れの咽喉がなほるまで、君に獵に行く事も休んでくれとたのんだのだ！　願つたんだ！……それで、己れは、今の今まで、貴樣の信義を信じて居たんぢや。安心してゐたんぢや！　それだのに、それだのに……貴樣は、今日獵に出た！　そして加之、そのかへりに己れの家へ來た！　そして、何だ！　腹がへつたからあつたかいものを持つて來いだ？　それから、犬に牛乳と卵をやれだ！　何だ、ぬれた毛を、藁で乾くまでこすれだと……やい！　猫！　河童！　お化！　モンガア！　そんな奴か、何處にある！

B　然し……。

A　もうイヤぢや！

B　けれど……

A　あゝ、もうイヤぢやと云ふとるんぢや！

B　よし！　そんならば、仕方がない！　奥さん、失禮します……

（とかへりかける。）

A　待て！

B　何だ？（と立ちどまる。Aが、だまつて居るので、又行きかける）

A　待て！

B　何だ？　用があるのか？

A　貴樣こそ、此所へ何しに來たんぢや？

B　はなしに來たんだ！　遊びに寄つたんだ！

A　そんなら、話して行つたら宜ぢや！

B　何だと？

A　人の家へ遊びに來て、遊ばずにかへるなんて失禮な奴が何處にある。貴樣は、人の家の空氣を攪亂してそれでいゝと思ふのか？　己れも男ぢや！　そのまゝには、歸すものか！

B　ハ、、、やつぱり、遊んで行つてもらひ度いんだな！

A　己惚れるな！　己れは貴樣が可哀想だからさういふのぢや……さあ、遊ぶんなら、遊んで行け！

B　ハ、、、そんなら遊んで行く！　奥さん、すみませんが、私、腹がペコ／＼なんですから……。

Aの妻　かしこまりました！

A　然し、己れには、條件があるぞ！

B　何の條件だ？

A　今夜は、決して、獵の話は禁物だぞ！

B　獵の話は禁物だ……？

A　さうだ、それでよければ、遊んで行け！　それが守れなければ、今すぐかへつてくれ！

B　（鳥渡考へて）よしッ！　己れは、一切獵の話はせん！　そのかはり君もしてはならないぞ！

A　勿論だ。

B　二人の獵友が、二人相對して居ながらに、獵のはなしが出來ないなんて、考へて見れば、可笑しいはなしだな！

A　己れは可笑しくないよ！

B　さうかね……僕は可笑しいよ、ね――奥さん、奥さんは可笑しくありませんか。

（Aの妻笑ふ。）

A　笑つてないで、何か、うまいものでも持つて來い！

（Aの妻靜かに退場。）

（AとB、しばらく無言のまゝ相對す。一瞬時ながら、壓迫が劇場全體にたゞよふ。）

B　（室の中を見廻して）ハヽア！　英國製二連銃か……

A　（むきになつて）何？

B　イヤ、僕は只獨語を云つた丈だよ。たとへば、ブローニングは、五連發で便利だが、水鳥にはいゝが、山獵には重いといふやうなのも、つまり獨語の部に這入るやうに……

A　もうよせ！　君は、己れをからかうんだ……

B　イ、エそんな……

A　もうだまつて居てくれ玉へ！

（又しばらく沈默。）

B　つまらないね！……何かして、遊ばうぢやないか。

A　將棋をさゝう……

B　ハ、、、又負け度いのか？

B　僕は只、將棋を指さうかと云ふんぢや！（と單調に、やゝじれて云ふ）

B　失敬したね……では、願はうか。

A　教へてやらうか……

B　僕は只、願はうかと云つたのだよ。

A　えゝ、じれつたい！　とにかく、やるならやらうぢやないか！（と怒鳴る）

B　君、靜かに考へてくれ玉へ！　じれてるのは、君一人なのだよ！

A　まあいゝ！　やらう！

B　やらう！

（二人は、將棋盤を出して、相對して坐りなほし、駒をならべる。）

B　さあ、來玉へ！

A　くれ〲も云つて置くが、待つた無しぢやよ！

B　勿論さ！（輕く、スラ〱と云ふ）

A　本當にいゝな？

B　待つたなしか？　勿論さ！

A　よしッ！

B　君こそいゝな？

A　勿論！

B　さあ、來い！

（Aの妻、あたゝかい、煙の出た、オムレツを持つて來る。）

（二人將棋をはじめる。）

Aの妻　將棋ですか――

B　ハー（とAの妻を見ずに云ふ）

Aの妻　あの、オムレツを拵へてまゐりましたから、召上れ！

B　（Aの妻を見ずに）ありがたう……

Aの妻　この卵は、家の雞が生んだので御座いますから、極く／＼新らしい、おいしいので御座いますよ。

B　（Aの妻を見ずに、將棋をさしながら）ホ――？――家の雞が――？　ホ――？

Aの妻　そら、いつぞや、あなたが、つぶして喰べるやうにつて、立派な雞を一と番下さいましたらう？

B　（Aの妻を見ずに）ホ――？　つぶして喰べろつて……？　ホ――？

Aの妻　まるで、夢中で入らつしやいますね……あの鷄をね――つぶしてたべるのも、可哀想だから、その中に、何處か又、いゝ、嫁入り口があるだらう、もし訊いたら、あたべた、うまかつたつて云へばいゝつて主人が申しますんでね、そのまゝにして置く中に、たうとう飼ふ事になりましたの。

B　ホ――？（同じくAの妻を見ずに）

Aの妻　その中に卵を生む、卵がたまる、牝がトヤにつく、卵から、ひなが出來る……どうで御座いませう、今でもう、あれが、どつさり鷄になつて、それ等が、每日、十個も廿個もの卵を生む樣になりましてね、家中では、たべきれないので、他所へ下ろしてやる事もあるんで御座いますよ……

B　（同じくAの妻を見ずに）ホ――……？

A　おい、その手は鳥渡待つてくれ！

B　待つたゞ？

A　ハ、、、やりそこないぢやよ、考へて見玉へ、たれだつて、見す／＼取られるやうな所へ、自分で駒を動かす奴があるもんか……ハ、、、常識で考へたつて分るぢやないか……さあ、今取つた駒を出し玉へ……（とBの手から取られた駒を取りかへして）懲すりあいゝんぢや、それ見玉へ！　懲すりあ、怎する事も出來んぢやないか、ハ、、（と哄笑する）

B　（怎にも、Aの云ふ事が腑に落ちないと云ふ風に考へて）然し……

A　まあ、い丶ぢやないか！　さつさとやつたらい丶ぢやないか……さあ、早くやり玉へ！　待つた無しで……

B　然し、それでは、僕の方が、非常な不利になるぢやないか……

A　さうかね――？

B　（むつとして）「さうかね」だ？　よしツ！　もうい丶！兎に角勝てばい丶んだ！

A　勿論、勝てばい丶のぢや。

（二人又、前よりは、熱心に指しつゞける。）

（Aの妻、時々助言をする。AとBは、だまつて熱心に指しつゞける。）

（や丶しばらくして、Bは、ぢつと盤面を見つめて考へて居たが、やう／＼に、手に持つた駒をぴたりと打つ。）

（Aは電光石火の間に、Bの打つた駒を取る。）

B　（びつくりして）あ丶、桂馬の道とは知らなかつた、待つた待つた！　さあ、その駒をかへし玉へ！（A默つて居る）さあ、とんだ間違だ！　さあかへし玉へ！

A　（極めて冷然と、號令のやうに）待つたなし！

B　何だつて？

A　（前と同じ調子で）待つたなし！

B　ハ、、、（明るく笑つて）そりあ分つて居るよ！

A　そんなら先をやり玉へ。

B　ハ、、、（冗談だと思つて）ね――君、よく考へ玉へ、僕は今考へぬいて、その大切な飛車を打つたんだぜ！考へてやつたんだぜ、誰れが、あんなに考へて、桂馬に取られる所へ打つ奴がある？　取られるやうに打つなんて、馬鹿か氣狂だよ！

A　さうだね。

B　さうだらう？　それ見玉へ！　だから返し玉へ。（と手を出す）

A　（冷然と）待つたなし！

B　待つたぢやない、やりそこなひなんだよ。

A　やりそこなひがなければ、勝負はつかんぢやないか、待つたなしぢや！

B　然し、君は今、馬鹿か氣狂でなければしない間違ひを認めたぢやないか。

A　君は、その馬鹿か、氣狂なんぢや！

B　何だつて？

A　とにかく待つたなしぢや。

B　然し、それを取られては僕は、負けぢやないか、生死にかゝはる場合だ！　とに角待つてもらはう！　間違ひだから……

A　イヤぢや！

B　イヤぢや？　何故イヤだ？　君は、さつき僕に待つたをさせたぢやないか！　自分が待つたをしておいて、僕を待たんといふ法があるもんか。
A　イヤ、法がある！　初めから待つたなしの約束ぢや！
B　そんなら、君は何故待つた？
A　そんなら君は、何故待つたを許した！
B　何だつて？
A　己れは、あくまでも、君に待つたをたのんだのぢやないよ、君の方で許したんぢやないか。
B　そんなら、君は、人の親切をそんな風に考へるのか？（と激昂したが、又、靜かになつて）まあいゝ、とにかく此の一手は待つてくれ！
A　イヤぢや！
B　イヤ、己れは、待たして見せる、君も一度待たしたんだ！　待ち玉へ！　待ち玉へ！　その駒をかへし玉へ！
A　いかん！
B　イカン？　いかんけりやいゝさ。
A　よければ、先をやつた！
B　へん！（獨言のやうに）己れは、今まで、隨分君の爲には親切な事をしてやつたつもりだよ！
A　それが、怎したんだ。
B　いつかの、君の訴訟の時だつて、僕は證人になつて、心にもない事を云つたのは誰れの爲だと思つて居るんだ、みんな君に勝たしてやり度い爲なんだぜ。
A　ありがたう！
B　即ち、僕は君の爲に、ウソではないが、あいまいな事を云つたんだぜ！　一生消えない心のくもりを受けたんだぜ、君の爲に……
A　それが怎したんだい。その代りには、僕は、君に犬をやつたぢやないか。
B　はゝア、君はさう云ふ了簡の人かい？　人の親切と犬と取りかへつこをしようと云ふのかい？　さうかい、僕の友情を犬一疋で買へると思つて居るのかい……さうかい……そんな人かい！　そん人間かい！
A　そんな人間だよ！
B　そんな人間で、すむと思ふのかい？　いゝよ、君はさう云ふ了簡の人なら、僕もそのつもりでつきあふから。
A　そのつもりでつきあひ玉へ。然しそんな事と將棋と何の關係を持つんだ？
B　僕は君の反省を促して居るんだよ。
A　反省したら怎だと云ふんだ。
B　その手を待つだらうと思ふんだ！
A　ハ、、、女のくさつたの！　乞食のやうな事を云ふなよ、負けるならいさぎよく負けたら怎たい。

B　僕は負けやしない！
A　そんなら早くやり玉へ。
B　とに角待ち玉へ。
A　待たん！
B　それで、恥ぢないのか。
A　恥ぢないよ、君こそ、恥ぢないのか。
B　何？　あ――あ、とに角待て！　待て！　待つてくれ！
（と、Bは、むきになつて、Aの指先につまむやうに持つて居る駒を取らうとする。Aは、渡すまいとする。）
（二人しばらく、指の先に、全身の力と、感情をこめて、いがみ合ふ。）
（とゝ、Bの力が、少しAより勝つて來ると、Aは、新らしい怒りを感じて。）
A　コラッ！　何をする！　貴樣は、頭で負けて、腕力で來るのか？
B　何を……（と武者ぶりつく）
A　コラッ！　卑怯者！
B　何？　貴樣こそ、卑怯者だ！　卑怯もの！　詐僞師！
A　ズルー！
B　狡猾！
A　カタリ！
B　貴樣こそ、カタリだ！　詐僞取財！　横領！　えゝ、畜生、犬ドロボウメ!!!
A　何？　ドロボウだ？
B　さうだ、さうだ！　此の卵（オムレツを指して）だつて何だつて、貴樣は、みんな、己れのを盜んだんだ！
A　何だと？
B　何が何だ？　考へて見ろ！　己れは、何と云つて、鷄を貴樣にやつたんだ！　己れは、つぶして喰へと云つてやつたんだぞ！
A　それが怎したんぢや？
B　それを、何故つぶして喰はんのだ？
A　馬鹿、己れには、生きてゐるものを、殺して喰ふやうな、そんな、そんな、殘酷な事は出來んのぢや、己れは、貴樣のやうに鬼ぢやない！
B　此の噓つきめ！　貴樣は、えゝ、己れの鷄で、まうけようとしたんだ！　古狸め！　貴樣は、親友の好意を蹂躪した上に、雞を盜んだ事になるんだ！　ドロボウメ！　それで、オムレツを御馳走するもないもんだ！　此所の家の、雞でも卵でもみんな己れ樣のものだ！
A　此の、大かたりめ！　そんなら、今まで生かして置いた、ゑさは誰れがやつた！　何だあんな痩せつこけた鷄なんぞくれやがつて……己れが、餌をやつてやう〱鷄らしくなつたんぢや！　何だ、鳥料理の旗からぬけ出し

た骸骨のやうな鳥を持つて來やがつて……

B　あゝ、もうだまれ！　だまれ！　己れの頭は、われ想になつて來た！

A　そんな、頭は、割つて仕舞へ！

B　貴樣こそ、くたばれ！

A　何？

B　えゝ畜生！

（としがみつく。）

（AとB、熱狂して、爭ひはじめる。今まで、相變らず、又はじまつたなと云ふ風に笑つて居たAの妻は、此の時、やゝ本氣になつて、二人の間に分けて入らうとする。）

（所へ、扉を開けて、從僕登場。）

僕　旦那樣！　お庭の池へ、鴨が下りました！

（AとB、此の言葉を聞くと、電氣に打たれたやうに、スックと立ち上り、いきなり、二人共銃を持つが早いか、風のやうに室を飛び出す。）

（その後から、續いて、Aの妻も從僕も去る。）

（と、やゝしばらくして、一發の銃聲。）

（多くの鴨の一齊に飛び立つ羽音。やゝしばらくして、手に鴨の首をぶらさげた主人Aを先に、つゞいてB、Aの妻、從僕登場。）

B　あゝ實に驚いた！　何といふすばらしい手ぎはだらう！　僕もかなり多くの狩獵家を知つてゐるが、君のやうな手腕を持つた人を見た事がない！　實に、電光石火と云はうか、何と云はうか、實際、僕は、呆然として、怎する事も出來なかつたよ！　鴨と云ふ奴は、怎して、あんなに一發でころりと落ちるものぢやない！　イヤ、全く君の非凡な手腕が此の鴨を射止めたと云ふものさッ！　必ずしも彈丸が當つたから鳥が死ぬと云ふ事はない、即ち、鳥でも獸でも、狩獵家の手腕に征服されて仕舞ふのだよ！　人間だつて急所を外れゝば、いくら切られたつて死にはしないからね――。ねー君、君は何時そんなに腕を磨いたんだよ？　實に恐るべきものだよ！……君は何號の散彈で打つたのだ？

A　勿論、Bの散彈をこめたさ！　鴨は強いからねー、雉子山鳥には、四號五號……鴨は、BかBBと云ふのは、狩獵家のレコードになつてるぢやないか……

B　フーン、僕は六號をこめて出たがね。

A　六號……？　六號と云へば、小鳥打ちの彈丸ぢやないか。

B　勿論さ……

A　君、鴨を打つに六號をこめたのか。

B　それには、少し理由があるがね……まあいゝ、何でも

いゝ、とに角、君の手腕に僕は敬服したと云ふ事を云つて置くよ！
A　ハ、、そんなでもないよ！　とに角早速それを料理して、皆で食はう！　おい！（從僕に）此の鴨を料理しろ！
僕　はい！（と鴨を受取つて調べながら）おや？（と驚く）
A　怎したんぢや？
僕　はい……（と云ひ淀む）
A　怎したんぢや？
僕　旦那樣！　此の鴨は……
A　その鴨が怎したんぢや？
僕　此の鴨は、囮の鴨で御座います！　池にはなして置きました、羽毛の切つた鴨で御座います！
A　何？
僕　家の鴨で御座います！　飛べない鴨で御座います！
A　えゝ！（と驚き）已れは、それでは飛べない鴨を打つたのか？……池へ下りた鴨はみんな逃がして、已れは、自分の家の囮の鴨を殺して仕舞つたんぢや……
B　何、囮の鴨だ？
（AとBは、互に顏を見合せて、怎しても我慢出來ないと云ふ風に、大聲を上げて、明るく哄笑する。）
（Aの妻も、從僕も一所になつて、樂しく笑ひこける。）

A　あゝ、然し、已れは、狩獵家として、こんな不名譽な事はないよ！
B　そんな事はない！　已れは、死馬に譲つたと云ふものぢや！　で打ちとめたんだ！　それは、たとへ囮でも何でも、君の手腕は立派なものだよ！　兎に角君は、生きてゐる鳥を一發
（AとBは、又顏見合はして、樂し氣に笑ふ。）
僕　いかゞいたしませう？
A　ハ、、、極りがわるい！　よく、あやまつて置いてくれ！
（從僕は笑ひながら退場。）
（Aの妻もつゞいて退場。）
（Bは、自慢ばなしをするに、いゝ機會が來たと云はぬばかりに、以前の鹿を、ずる〳〵ひきずつて來てAの前に置き、ぢつとAの顏を見る。）
A　これは怎したんぢや？　君が打つたのか？
B　さうだ！　ね――、もう獵の話をしてもいゝだらう？　ねー、君、聞いてくれるかね。
A　よし、聞かう！
B　あゝ、よかつた！　僕は、さつきから、話したくつて、話したくつて、たまらなかつたんだからなア……怎だい！　立派な鹿だらう？
A　うん！　何處で取つたんぢや？

B　そこで――

A　何處だい？

B　いゝえ、そこが、はなしをし度い所なんだ。まあ、聞いてくれ玉へ……だが、先づ第一に、僕は、今日、狩獵界に於ける、世界のレコードを破つたと云ふ事を君に報告し度いんだ！　それで、此の事實は、全世界に報告して、場合に由つては、僕自分が、講演旅行をしてもいゝとさへ思つて居るんだが、ともかくも、一番の親友である君に聞いてもらはうと思つてやつて來たんだ。

A　ホー、大變な事だね、何だ、世界のレコードを破つたんだいやね？

B　つまり、散彈の效力についてのレコードを破つたのさ！

A　へー？

B　で、先づ君に訊くがね、もし、君が鹿を打ちに出かけるとしたら、銃器は何を持つてくね？

A　勿論、猛獸打ちの五連發さ！

B　彈丸は無論、散彈でなく、實彈だね？

A　あたりまへさツ！　君だつて、それに對しては、異議はあるまい。

B　昨日までは、その持論だつた！

A　昨日まで……？

B　さうさツ！

A　それで、今日は……？

B　公然その反對だ！

A　それでは大砲でも持つて行くと云ふのかね？

B　いゝや、僕は、大砲所か、實彈も持つては行かない。

A　それぢやあ、何を持つて行く？

B　只の散彈さ！　加之、六號の散彈を持つて行くのさツ。

A　鹿打ちに、六號の散彈？　おい〳〵君、何を寢ぼけやう な事を云つとるんだい？　馬鹿な事を云ふなよ！　君そんな事を云ふと笑はれるぞ！

B　ところが、さう云ふ君が、今日からは、笑はれる時代が來たんだぞ！

A　ハ、、、（と取りあはないやうに笑ふ）

B　笑ひ玉へ！　いくらでも笑ひ玉へ！　今の中笑つて置かないと、僕のはなしを聞いてもう笑ふ事は出來なくなるからなツ！　さあ、笑ひ玉へ！　笑つて置き玉へ……（間を置いて）もういゝか？

A　よろしい！

B　それぢやあ、話さう！　君、此の鹿は現に、二時間程前に、僕が、六號の散彈一發で射止めて來たんだよ。

A　（可笑しさにたへられないやうに笑ふ）ウフハ……

B　よし〳〵、その位笑つて置き玉へ！　事實に凡てのも

のに打ち勝つのだから……（Aが笑ひ止むのを見て）もういゝか？

A　君、たのむ、あんまり笑はせないでくれ玉へよ！

B　まあ待ち玉へ！　段々に君は笑はなくなるから……ともかく、初めから話さう。

A　話し玉へ！

B　さあ、何から話していゝか……さう〳〵、昨夜、君からの手紙で、今日は一日獵に出ずに居てくれと云ふので、僕はぢつと家に居るつもりで、相變らず、すつかり仕度丈はして、ぢつと只雪の降るのを見てゐた！　すると、君、鳩が一羽すつと飛んで來て、庭の枯木にとまつたぢやないか……よしッと思つて、銃を取ると、奴さん、ぴよいと、他の木に飛び移つた！　少し行くと、又ぴよいと飛ぶ……何の事はない、風に飛ばされた夏帽子を追つかけると云ふ形で、僕はその鳩を追つて行く間に、いつか、家からは、ずつとはなれた雪の中に立つてゐる事に氣がついた、畜生め、あの鳩のおかげで、已れはこんな目に合つたと思ふと、怎にでもして、その鳩を取らないと氣がすまないやうな氣がして、さうなると、君との約束も何も忘れて、僕はどん〳〵雪の中を歩いた。ベアの奴は、獵に出るんだと思つて、よろこんで、飛んで來る。僕はたうとう一里も二里も歩いて仕舞つたが、素より持つてゐるのは、小鳥打ちの散彈ばかり――見玉へ（と、腰につけた、彈帶のケースを一つづつぬいて見せて）そら、六號、六號、八號、八號、又八號……みんな、さうだらう――遠くへ行つた處で仕方がないとは思つたが、鳩には逃げられる、鳥は居ない、ほんとうに、むしやくしやして、雀でも何でもいゝ、兎に角、音丈でもさし度いと思つたが、そんな時には、駄目なもんで、小鳥の聲一つしないんだ、まさかに、空へ向つて打つわけにも行かないからね――……僕は「えゝくそ！　えゝくそッ」と口の中で、云ひながら、そら、いつか、君と二人で、兎を取つたあの土手の處までやつて來た。すると、ベアの奴、何かのかほりをかぎ出して、しきりに、雪の中を嗅いで行く、僕も長い間小鳥一つ見ないので、鳥渡驚いたが、怎もベアの樣子が、いつもとちがふんだ。何だか、氣のないやうな、驚いたやうな、かほりを失くなしたやうな、變なんだ、はじめの中こそ、僕も緊張して居たが、段々だらけて來て、出た處で、怎で大きな鳥ぢやあるまい、又兎でも居たとしても、持つてるのは六號の散彈ばかりだから、取れつこはないなんて考へながら、犬の跡をついて、土手の角をまがると、驚いた！　僕の直ぐ前に、大きな眞黒なものが立つてるぢやないか！　君、何だと思ふ？

A　知らないね！

B　それが、君、鹿なんだよ！

A　鹿だ？

B　犬は、たしかに、後足二本で立ち上つて、驚いた！　僕は人間だから、素から、二本の足で立つて居たが、ほんとうに息がつまる程驚いたよ！　ハッとすると！　鹿も驚いたらしい！　犬と人間と、鹿と、三つのものが、一どきに驚いたんだね、僕が鹿だ！　と思つた時は、鹿も人間だ！　と思つたらしい……鹿の奴、雪の中を僕に尻を向けて逃げ出した、仕方がない、兎に角、僕は、いきなりその鹿に向つて發砲したんだ。

A　びくともしまい！

B　處が、又僕は驚いた！　僕が、打つと同時に、その鹿は、雪の中にばつたとたふれたんだよ！　ベアは、いきなり跳けつけた！　僕もすぐ走つて行くと、怎だい！　雪の中に、眞紅な血が流れて、大きな鹿は、すつかりもう息が止まつて居るぢやないか！　君、鹿は、小鳥打ちの六號の散彈一發で見事に僕の手に落ちたんだ！　見玉へ！　君、その鹿は、此の鹿なんだよ！（とやう〳〵に息をついて）君、分つたらう、ね――君、僕は世界のレコードを破つて、鹿を六號のバラ彈で打ち止めたんだよ！　ね――君、驚いたらう？

A　（不愉快想に）イヤ僕は驚かない！

B　驚かない？　怎してさ？

A　僕は、ウソはきらひだからねッ！

B　それぢやあ、僕のはなしは、君うそだと云ふのかい？

A　勿論さ！　六號のバラ彈と云へば、粟粒より小さい彈だよ！　當り所に由つては、雀だつて、死なゝい事がある。そんな小さな粒で、大きな鹿が死ぬと思ふのか、死ぬ道理があると思ふのか？

B　さあ、その道理のない事が、實際あつたんだから驚くぢやないか！

A　此の宇宙の森羅萬象凡て合理的でない事は一つもない！　六號で鹿が死んだと云ふ事は、たとへば、君の眼の中に、猫が飛び込んだと云ふやうなもので、いくら本當だと力說しても、世界の人間は信ずる事が出來ないのだ！　世界の認めない事は、有る筈がない！　無い事を有るかのやうに云ふのはウソだ！　法螺だ！

B　それぢやあ、僕の云ふ事は、君は、ウソだと云ふのか？

A　勿論さ！

B　何を以て嘘だと云ふのだ？　君は、只僕のはなしを聞いて、淺薄な君の知識の上から、凡てを律しようとするのだ！　世界には、君の知らない不思議はいくらでもあるからね、兎に角、僕の云ふ事には、事實と云ふ根柢が

ある！　君一人の言葉に由つて、怎する事も出來ない事實があるんだからね。

A　その事實は、誰れが、知つて居る？

B　已れが知つて居る。現に、已れが、此の銃を、此の手で打つたんだからね。見玉へ！　だから、さつきの鶴打ちだつて、僕はちやんと六號の彈しか使はないんだ！　これ、此の通り、ちやんと六號の散彈がこめてある……（と六號の彈丸のこめてある銃を見せる）

A　ハヽヽ、いくら、そんなに力んだつて認めない事は認めないよ！

B　君一人に認められなくつても、僕は、世界に向つて、正しい事は報告するんだ！

A　世界だつて、誰れ一人認めるものはないよ！

B　そんな事はない！　たとへ、世界がみんな僕に反對しても、事實は事實だからね！

A　事實ぢや！　事實ぢや！　君が、法螺をふいてゐる事は事實ぢや！

B　コラッ（と屹となつて）君は、怎しても信じまいとするのか、よしッ！　そんならもし、僕の云ふ事が本當だつたとしたら君は怎する？

A　怎でもするさッ。

B　そんなら、今、此の鹿の體を解剖して見て、もし體の中の彈が、六號の散彈だつたら、君は僕の前に何と云つてあやまるのだ？

A　そんな事が、何の證據になる？　彈丸は、銃口から出れば、原形よりは、ずつと小さなものになつて仕舞ふと云ふ事は、君だつて知つてる筈だ！　そんな、なさけない事を云はないで、早く鹿を背負つてかへるがいゝ……

B　僕は、そんなホラは大嫌ひだ！

A　ホラぢやない、本當だ！　本當だつて事は、さうだ！　あのベアがちやんと知つて居るのだ！

B　ハヽヽ、犬が、知つて居て怎なるんだ、ハヽヽ、馬鹿め！　犬を證人にして、裁判でもするがいゝハヽヽ、ハ。

A　（もう、たまりかねたと云ふ風に）何でもいゝ！　僕は云ふ！　敢へて云ふ！　六號の散彈で鹿を射止めたと！　六號の散彈で鹿が死ぬと！

B　イヽヤ死なゝい！

A　いゝや死ぬ！　六號なら、虎も死ぬ！

B　イーヤ、六號では、雀も死なゝい！

A　獅子も死ぬ！

B　トンボだつて死なゝい！

A　イヽヤ象も死ぬ！

B　蚊も死なゝい！

B　馬鹿云へ！　貴樣なんざ、粉みぢんだぞ！

A　何？　己れが、死ぬ？　やつて見ろ！　己れは貴樣の打つ鐵砲では、どんな事があつたつて死なゝい、獅子は死んでも己れ丈は死なゝい！　象が死んでも己れ樣丈は死なゝいぞ！　打つて見ろ！　大砲でも打つて見ろ！　己れは、貴樣の腕ぢや、どんな事があつたつて死なゝいぞ！

B　貴樣なんざあ、豆鐵砲でも、くたばるんだ！

A　貴樣の腕では死ねないんだ！　打つて見ろ！　法螺ふき！　泣き蟲！　猫！　大砲でも何でも持つて來い！

B　何？

（と云ひ樣、Bは、以前の六號の散彈のこめてある銃を取るが早いか、いきなりAに向つて發砲する。Aは、ばつたり倒れ、キユーとも何とも云はずに死んで仕舞ふ。）

（これ丈の大變な事が、ほんの一瞬間の何十分の一位の間に、最も手ぎはよく、最も美しく行はれ、芝居見物も、殆ど、怎したのか分らない位でなければならない。）

（そして、Bの心持では、決して、Aを打ち殺したと云ふ事などは考へても見ずに、單に癪にさはつて、ヒシヤリと横面をひつぱたいた位の自覺しかして居ない。Aも、素より、B如きものに打ち殺されたとなどは、思つても居ない。電光石火に撲たれて、コトンと不樣に倒れたから、つらあてに、いつまでも、倒れて居てやらう位にしか考へない。）

（そして、芝居見物も、Bが、Aを打ち殺したなどとは勿論考へずに、Bが、Aを、感情の上から、ひつぱたいた位としか印象しない。）

要するに、此の脚本は、人間生活の全體から、感情生活丈を、抽き出して表現して見度いと思ふのが目的であるから、以上の注文を、完全に表はす爲には、勿論、舞臺監督の努力に待たなければならない。

B　（Aが倒れたのを見て）　ざまア見ろ！　強情張りあがつて！　二度と強情張ると承知しないぞ！

（と、Bは、まだ、以前と同じ昂奮を續けながら、自分で、鹿をかついで、正面の入口から、スタ／＼と出て行つて仕舞ふ。）

（此の間に、いつ、現はれたともなしに、Aの妻、戸口に現はれ、クス／＼笑ひながら。）

Aの妻　（Aに）　あなた！　あなた！　もう、かへつて仕

舞ひましたよ！ もう居やしませんよ！ いつまでも、そんな事をして、子供見たいに、可笑しいぢやありませんか……。

（Aの妻は、勿論、Aが、打ち殺されたとなどは考へて居ないので、もう、いゝかげんに、起き上つたら怎だと云ふ風に云ふ。）

Aの妻　あなた！ あなた！

（Aの體は、段々に冷たくなつて行く。）

（家の外の雪は、一層はげしく降りしきる。）

――幕――

國定忠次　三部曲

（三幕十二場）

第一　赤城の月

第一場　碇床の前

舞臺よき所に、碇床の店あり。廂より、紺地に碇の書を染め出した暖簾をかけ、店の外には床几を置き、左右の破目を後ろにして菊の鉢植を置き並べ、主人の丹精の程を思はせる。

床屋の店につゞいてそれ〴〵町屋つゞき、正面、町屋の屋根、火の見のはしごなどの向ふ遠く赤城山を見る。時は暮れ近き頃。

幕あく

と百姓甲、乙、連れ立つて登場。と此の時床屋の中から月代をきれいにした町のものが出て來る。

町のもの　よう、これはお揃ひで何處へ行かつしやりますな。

百姓甲　されば、今日は少しひまが有りましたで、これから揃つて、赤城山さ餅をとゞけに行つて來ていと思ひますだよ。

町のもの　赤城山と云へば、あの國定の忠次親分の所へですか。

百姓乙　さうで御座いますだよ！　大間々の町は云ふに及ばず、此邊一體あの惡代官の松井の野郎の爲めに、長い間生きてる空も無かつたのを、忠次親分があの代官屋敷を皆殺しにして下すつたばかりに私等は全くはじめて日の目を見たやうなもので御座いますだ。

百姓甲　恁した氣持で居られるのも、みんな忠次親分の御蔭で御座いますだ、が、たとへ何でも代官を殺したちうとなれば、お上の掟にふれるとかで、あゝして赤城の山さ逃げ込んで御座るが、さぞ御不自由の事だんべいと思ひまして、今二人してこれをお屆けして來べいと思ひますだ……私等のためには生神様でも、掟ををかした罪人だちうで、內所で行かねばなりましねー。

町のもの　全くなう、世はさかさまと云ひますが、これが浮世と云ふものかも知れませんよ。さあもう暮れも近い、早う行つてお出なさい。

百姓甲　はい〳〵、そんなら行つてまゐりますだ……

（と三人別れ去る。）

（所へ國定忠次、板割の淺太郎、各々頭巾にその面體

を包み、花道より登場。)

忠次　淺よ。

淺太郎　えー。

忠次　一ト月ぶりに赤城を出て、今大間々の町を見ると、何とも云へねーなつかしさが、からギユウツと胸をしめろやうだな……今日己れが、山を下つてお榮の所へ行くと云ひ出すと、日光の兄哥が何でも止せと引とめたが、案ずるよりは生むが易い！　八州の役人共が、此の忠次を召捕らうと夜の目も寢ずに居る中を、かうして女に逢ひに行く、己れの心は大名のやうだ！　淺、生きて再び會はれめいと思つて居るところに行つたら、お榮の奴はよろこぶだらうなア……

淺太郎　そりあもう、姐御はどんなにうれしがるか知れやしません、然し役人共は恐ろしい手配りをして居ると云ふから、うかつに油斷はなりますまい。親分早く行かうぢやありませんか。

忠次　なあに！　うじ蟲のやうな役人共がいくらさわいで見た所で少しも恐れる所はねーさ、網をかぶせた氣で居ても、中の魚は遊んで居る……世の中は洒落が多いわ……淺、己らあな、そこの床やへ寄つて行くから、お前はお榮の所へ先きへ行つてくれ。

淺太郎　でも親分……

忠次　まあいゝつて事よ！　久しぶりでお榮に會ふ己れの心は若々しい、赤城の山にこもつても己らあ夜盜や追ひはぎぢやあねエつもりだ。一ト月ぶりの國定忠次きれいになつて會ひていのさ……さあ、先きへ行つて、支度を云ひつけて置きねー。

淺太郎　でも親分……

忠次　淺、己れがいゝと云つてるんだ！

淺太郎　ぢや私は先きへ行つてますから、親分どうか氣をつけておくんなさい！　山のものは淺の供なら安心だとみんな思つて居やすから……

忠次　いゝよ〳〵、先きへ行きねエ。

（淺太郎心を殘して退場。）

（忠次床屋をのぞいて、）

忠次　親方、直ぐにたのめるか。

（家の中にて主人定吉の聲。）

定吉　へい、どなた樣で……

忠次　己れだ！

（忠次頭巾を取る。）

定吉　えゝ。（とおどろく）

忠次　びく〳〵するな、決してお前に迷惑はかけねーんだ、さあ、すぐにやつてくれ。

定吉　然し親分、どうしてお出なさいました。

忠次　山のくらしが退屈さに、籠の小鳥が遊びに來たのさハヽヽ。
定吉　さあ……
（と二人床店の中へ這入る。風の音。）
（日がだん／＼にくれかゝる。）
（と怪し氣な男、忍ぶやうに登場。床屋をのぞいて。）
怪しい男　親分、すぐ頼めるかね。
定吉　はい……どなたですか？
怪しい男　おゝお客さまか、ぢやあ又來らあ……
（と思入れあつて、いそぎ去る。）
（又しばらく風の音。）
（しばらくして輕やかに身ごしらへした取手二人、三人、四人、五人と、左右より床屋の店に忍びよる。）
（だん／＼其數がまして來る。とその頭らしいもの一人それと下知する。捕手のもの一齊に「忠次御用だ！」とうつてかゝる。）
（忠次店より出て立ちまはり宜しくあつて、一時一同去る。所へ花道より御室の勘助役人の頭と共に登場。）
役人　やい勘助、お前は忠次に恩があり、又お前の甥の淺太郎は國定忠次の一の乾兒だ……見事忠次が打ち取れるか？
勘助　義理と情けのしがらみのある、私に忠次を召捕れと云ふ、お上の御なさけにやあ、いやといふ事は出來ますまい。
役人　萬一後れを取るやうだと無職渡世長脇差と一つに見て、勘助貴様も忠次と同罪だぞ！
勘助　私も御室の勘助だ！　御念にや及びません！
（と急いで去る、役人もつゞく。ワーッといふ人聲、日がトップリと暮れる。）
（暗の中を焚松の火入りみだれる。しばらくして忠次大勢な相手に出て來り、トゞ床屋の屋根に上る。所へ勘助登場。）
勘助　忠次、お繩を頂戴しろ！
忠次　うぬは、勘助だな……義理も恩も忘れ果てゝ、己れに向つて繩打つ氣だな。
勘助　義理は義理、恩は恩だ！　十手捕繩をゆるされた御室の勘助は公儀のお役だ！　さあ己れが來たからには忠次を逃がすな……
忠次　何を……
勘助　さあ、用心しろ、右へ飛べば赤城へ一本道、左へ下りれば、渋ヶ手の山つゞきだ……逃がすな逃がすな……
（と暗に逃げ道を教へようとするが、取りのぼせた忠次には分らない。）
（とゞ忠次屋根をとび降りて立ちまはり、いづれとも

なく逃げる。）
（舞臺又からになる。）
（所へ身ごしらへした淺太郎いそいで登場。）
（床屋をのぞく。）
（定吉合掌しながら店から出る。）
淺太郎　親分はどうした！　御無事か……？
定吉　不動樣にお願ひしました！　親分は、のがれたやうだ！
淺太郎　さうか！
（ト安心する。）
（所へ一人の捕方忍びよる。）
捕方　御用！
（と淺太郎にかゝる。淺太郎スパリと切り倒す。）
（暗轉）

第二場　赤城、瀧澤不動

舞臺は赤城山中の頂上に近い最も深い瀧澤不動の邊、上手、下手に岩、舞臺の中心は平らになつて正面崖を越して向ふに、山又山を見渡す、上手奥に隱れ家のある心にて出入あり。
下手岩のうしろより上り道ある心にて出入あり。
夜いたく更けたる頃、

よき所にかゞりを焚き、國定忠次の乾兒、山中の勘太郎、牛若小僧辨之助等嚴重に見張り居る。
佛法僧の聲しきりにする。
しばらくして鳴子の音。
乾兒きつとなると下より、板割の淺太郎、心せきながら登場。
勘太郎　おゝ板割の兄哥か……
淺太郎　さうだ！　時に親分はどうした？　もう山へ歸んなすつたか。
勘太郎　…………
淺太郎　おい、氣かせいて居るんだ、さあ早く親分の安否を聞かしてくれ。やい、牛若、親分はまだ山へは歸らねーのか。
牛若　親分はさつきし方お歸りになつたが……
淺太郎　何、無事に歸つた！　そして何處も怪我はなかつたか？
牛若　別に怪我もねーやうだが、何しろ、大したはたらきだつたと云ふはなしで、大分つかれて居られるやうだ。
淺太郎　さうだらうとも！　然し怪我もねーとは何しろ目出度い……ぢやア己らあ鳥渡會つて來よう。
（と行きかける。）
勘太郎　待つてくれ！

淺太郎　待つてくれだ？　何を待つんだ。
勘太郎　親分は大分つかれて居るんだ。
淺太郎　そりあ云はずと分つて居るんだ、已れが、供をして已れが樣子を知つてるんだ！　疲れて居ようがどうだらうが己らあとにかく覗つて來るんだ。
（と又行きかける。）
牛若　まあ待ッてくれ！
淺太郎　そんなら、己らが直に親分の所へ行つちやいけねーと云ふのか。
牛若　さう云ふ譯ぢや無いんだが、親分の云ふにやあ、板割の兄哥が歸つて來たら知らせろつてたからなあ。
淺太郎　已れが直かに行きあ、それで文句は無いぢやねーか。
牛若　でもなア、勘太郎……
淺太郎　馬鹿野郎め！　親分の云ひつけを守るのも時と場合によりけりだ！　下でどんな事が有つたと思つてるんだ！
牛若　それだから猶更なんだ。
淺太郎　何をぬかしやがるんだ！
（と行きかける。）
（二人止めようとする淺太郎ふり切つて行かうとする所へ日光の圓藏が上手奥より登場。）

淺太郎　おゝ圓藏兄哥！
圓藏　板割か、何處へ行くんだ。
淺太郎　なあに親分の安否が氣になつて今大急ぎで歸つた處でさあ、それをこいつ等が邪魔しやがつて……
圓藏　ム、、そんなら、お前が國定のに會はうと云ふのか……そいつあ少し待つたがいゝ、國定のは今此所へ來るらしいから……
（と圓藏意味あり氣にいふ。）
（淺太郎「エッー」と思入れある。）
（所へ窶れたる忠次、高崎の重吉、清水の岩鐵、松井田の喜藏、保積の卯之助、足利の權三、成塚の三代太郎、樊噲の音藏にかこまれて靜かに登場、一同座に着く。）
淺太郎　（うれし想に）親分、只今歸りました！　山へかへる道々もどうした事かと案じられて今の今迄胸がさわいでたまらねー程でした、でもまア怪我一つ無くつて、こんな目出度い事は御座いません。
忠次　淺！　手前そりやあ御座なりか？　それとも本性で云ふ言葉か？
淺太郎　何ですつて？
忠次　何でもいゝ！　そんなら已れも云ふが、淺お前當てが外れて氣の毒だつたな！

淺太郎　えゝ？　（と驚ろく）

忠次　淺、己れが無事で山へ戻つて、手前は何か目出度いんだ、己れが龜の子のやうにしばられて引かれて行つたと聞いたらばお前は踊つて喜ぶだらうが、まだ運が盡きねーのか、さうは問屋で下ろさねーんだ！　皆聞け！　己らあ淺に賣られたんだ！　己らあ飼犬に手をかまれたんだ！

淺太郎　親分妙な事を仰有いますね、どういふ話の行違ひかは知らねーが、皆もよく聞いてくれ！　己らあ親分のお供をして大間々の町へ出ると、親分は己れは月代を當つて行くから、淺手前は一歩先きへお案の處へ行つて居ろ、何でも行けと云はれるので、己らあ姐御の所へ行つて、もう御出になる頃だと、首を長くして待つて居ると、いやに外が騷々しい、出て見ろと親分が捕床で取り卷かれたと云ふはなしで大變だと飛び出して見ると、とても傍へは寄れねーので、あつちをさがし、こつちをさがし、やう〳〵の事でたつた今山へ戻つて樣子を聞いて安心したばつかりなんだ！　親分、どう云ふ譯か知りませんが、お供をしたのは淺太郎でさあ、私ア今無事のお顏を見てうれしくつて〳〵淚がこぼれる程なんですぜ！　そんな事を云はれちや心持が惡い、親分、一體、私がどうしたと云ふんです、さあ言つて見て下さい。

忠次　どうもかうも有るもんか、己れが捕床に居る事を御室の勸助に內通して取りまかしたなア淺手前ぢやねーか。

淺太郎　えゝ……？　そりや親分あんまりだ？　何ぼ何でもあんまりだ！　己らあそんな男ぢやねー、そんなら親分、何故私を一緒に置いといちやくれなかつたんだ！　無理やりに一歩先きへやつたのは、私に難くせつける爲なんですか、私も板割の淺太郎だ！　淺まはしに云はねーで、イヤになつたらイヤになつたと、ザックバランに云つて下さりあ、私ア潔ぎよく身を引く男だ！　親分、さあ言つて下さい、一體私の何處が氣に入らねェんです。

忠次　氣に入らねーのは、手前の二タ心だ！　お前は忠次を見限つて、己れをひんなぐる考へから、日明し勸助に內通したにちげえねー。勸助はな、十年前に己れが命を助けた上、親子共に世話をしてやう〳〵男にしてやつた、其恩も忘れやがつて赤城へぬける間道迄大聲あげて手下のものに敎へやがるたあ、人間ぢやあねーんだ！　尾羽枯らした此忠次だ！　見限るなら見限つて呉れ、己れももう見限り果てた！

（淺太郎淚をこぼす。）

忠次　何を泣くんだ！　やい淺、岡星をさゝれた口惜し淚か？　えゝ、見たくもねー。

淺太郎　親分！　成程たあ、思ふに任せぬ山住ひ、親分の氣性だや、じり〳〵するのも無理あねーが、いかに云ふ目が出ねーからつて時世時節といふ事もある、こんな事の一度や二度でそんな皮肉な考へや、しがねー氣持を持たれちやあ、命をさゝげて集つた一人一人に劣りのねー、二十餘人の乾兒のものゝ大磐石の決心は、何をたよりにすりあいゝんだ！　昔を洗ふぢやねーが、堂々村の紋治親分、年を取つても世繼がねー、國定村の忠次てえなあ年は若いが見所が有る、己れの後目にたはさうと思ふが、みんなの意見はどうだと云ふ、そこで己らがイヤだと云へば、乾兒は別れ〳〵になつて、腕と運とさへありあ一ぱしの貸元になれねー事もなかつたらうが、親と思つた紋治親分、それの眼がねに適つた人だ、若からうが何だらうが親分に致しやすと、己れの言葉に從つて、そこに居る淸水の岩鐵、松井田の喜藏、高崎の寅吉、保積の卯の助、みんなおまはんの乾兒になつて、十何年の永い間己れ達が何をしたか、考へてくれたら分るでせう！　又つい先頃、國定村を立ち退く時も乾兒のものは二の足を蹈んでどうしようと云ふ奴を、親分には恩が有る。死なば一緒の了簡たと云ふと、淺兄哥がその氣なら、己れもさうだ、われもさうだと、氣持よく此處へ來た、大勢の前も恥かしい、一の乾兒とうぬぼれて居た、淺太郎が見限られちやあ、堂々村の親分も草葉の蔭で悲しからう……親分、伯父が差圖したと云ふなアよもや親分を召し捕る氣ぢやあ無かつたらうと思ひます、何かの事は後で調べて、どうかきげんよく私の顏も見て下さい！

（としみ〴〵と云ふ。）

忠次　もう能書はそれ丈か？　いくらお前がこうべつても、己れの氣持はなほらねー、もう親分でも乾兒でも無ー、さつさと山を下りて行け！　（ときつぱり云ふ）

忠次　さあ行かねーのか。

淺太郎　…………

忠次　ぐづ〳〵するとたゝき切るぞ！

淺太郎　切られやしよう！　私ア親分に切られてのめ〳〵と生きて居るよりあ、一層切られて死んだがましだ！

忠次　何を……（と立ち上る）

圓藏　まあ〳〵忠次どん！

忠次　兄弟どうか止めて下さるな、ずた〳〵にたゝき切つても、忠次の胸のくもりは晴れねー、……淺、さあ出て行け！　出て行け！　さつさと行け！

圓藏　忠次どん！　又お前の氣に逆ふやうだが私はさつきお前が山へ戻つた時、すぐに言はうと思つたが、何百人のものを對手に死に物狂ひで切りぬけて來て、氣も心もいら立つて居る處へ、いくら云つても駄目な事だ、氣が

落着いたらとつくりと云はうと、實は今迄待つて居たが、何も彼も知りぬいたお前にしちやあ、少し云ふ事がちがふやうだ、そりやたとへ親子兄弟夫婦の中と云つた所で、人の心の奥底程はかり知れねーものはない、まして親分、乾兒と云へば、元を糺せば他人同志疑ぐるのも無理はねー、ひがむのも尤だが、板割とお前の仲は、そんな仲ぢやあねー筈だつた！　くどいやうだが思ひなほして、ぢつと板割の心の奥を見ぬいてやつてくれねーぢやあ、己らあ氣の毒だと思ふのだが……

忠次　折角だが見られねー、己れのめがねが曇つたのか、淺の了簡がにごつたのか……もうイヤだ、イヤだ！　イヤだ！

淺太郎　（とじれつた想に云ふ。）ぢやあ親分、どうすりあ氣が晴れるんです、憑ならかうと言つてくれりあ、此の淺に出來る事なら何なりと仕ようぢやあねーか。お前さんも人並はづれた癇積持だ、己れも氣の短けい方ぢやア人に後れは取らねー男だ！　何なりと云つとくんなさい！

忠次　よし面白い！　ぢやあ手前は、己れの云ふ事は何でもすると吐かすんだな。

淺太郎　當り前だ。

忠次　それなら云ふが、お前と勘助と一つ心でねー證據を、たつた今見せてくれ！

淺太郎　と云ふと……

忠次　知れた事よ、これから直に御室へ下りて勘助の首を切つて來い……

淺太郎　…………

忠次　出來めえ？

淺太郎　そんなら親分は、伯父の首を持つて來たら己れを山へ置いてやらうと云ふんだな……

忠次　安心して乾兒にするんだ！

淺太郎　成程なア……何の雜作もねー事だ、後とも云はねーたつた今、御室へ下れば眞夜中だ！　世間の寢たのはモツケの幸、明け方までにや、きつと伯父の首を持つて來ますが……人間と云ふ奴は永い月日の間にはどんな間違ひがねーとも云へねー、後悔したと云ひなさんなよ！

忠次　べら棒め！　己れは物心ついてから指を啣へてひつこんだ事のねー男だ！

淺太郎　よし……

（と行きかける。）

圓藏　淺待て！　さて國定の、みんなのものも案じて居る。淺の了簡はきたなくねー、これから行つて伯父の首を切らした所で何にもならねー、此所は一つ皆にまかしてきげんを直してやつて下せい！

岩鐵　日光の兄哥の仰有る通り、一同からも御願ひで御座います。
重吉　淺兄哥の日頃の氣性で決して親分にたてつくやうな筈もなし。
喜藏　勘助の心持だつてきつと何かの譯も有らうと思ひますから、今夜のところは無事に納めて親分の無事を祝はして下さいやしな。
圓藏　首を取るなアいつでも出來る！　國定の、もういゝ加減にくだけて下せいやしな。
忠次　圓藏どん、皆のもの、心持は有難いが、此所は淺と已れとのさしむかひ、みんなつんぼで居てもらひていんだ。
淺太郎　みんなすまねー、どうか已れを男にしてくれ！…………それぢやあ親分、明け方迄がさかひ目だ！
忠次　さうだ！　お前が見事やりぬくか、已れが逆に後悔するか、あの曉の星の光が、姿を消すのが、命の瀨戸……
淺太郎　みんな、心配をかけてすまねーなア……
（とぢつと思ひ入れ、意を決して出立する。）
（圓藏深き思ひ入れ。）
忠次　おい！　酒を持つて來い！
（乾兒酒を持つて來て、忠次に注ぐ、忠次の手がふるへる、佛法想の碎……。）

第三場　御室の勘助の家

舞臺の下手に外よりの出入口、正面、奧に臺所に通ずる出這入りある勘助の家。平舞臺につくる。正面出入口の上手に佛壇あり。佛壇の下に小さき戸棚あり。
正面の下手壁には捕物に用ふるいろ／＼の道具、手丸提灯を入れたる箱、火事裝束と云ふ風なものをかけならべ、小ぎれいに住み馴れた、目明し勘助の家の作よろしくある。
夜いたく更けたる樣子にて、行燈の火ほのかにともりその下に近所の娘二人、おみよ、おとり、人形の着物など縫ひながら、勘助の歸りを待つて居る。
そのそばに小さき蒲團の中に勘助の子勘太郎がねむつて居る。
家の外は月の光皎々たり。
勘太郎ふと眼をさまし、
勘太郎　姉ちやん、お父ちやんはまだかへらないのかい？
おみよ　あゝ、まだゝよ、けどね、もうぢきにかへつて見えるから、勘ちやんはおとなしくねんねするのよ。
おとり　おとなしくねんねしないとね！　そら、さつきはなした、もゝんがあが勘ちやんのあたまを鹽をつけて食

べてしまふと云つて來ますよ。
勘太郎　そんなものは恐かあないや、己れは目明かしの勘助の子だい、そんなものは、砂糖をつけて喰つてやらあ。
おみよ　はゝゝ勘ちやんに會つちやあ、お化けも何も、かなはないわゝ。
（勘太郎またすや／＼とねむる。）
（夜まはりの拍子木の音。）
おとり　ねーおみよさん、それにしても伯父さんは大變遲いぢやないか。
おみよ　さうね！　何でも人の噂では今日國定の親分が、碇床で取りまかれたといふはなしだが、小父さんもその事できつと御手間が取れるんでせうよ。
おとり　けど、妾たちも、ねむくなつた、早くかへつて來ればいゝのにね――
（とはなして居る所へ表の戸をあけて勘助がかへつて來る。）
勘助　おゝおみよ坊よ、おとり坊……えらい遲くまでよく留守をしてくれたねー、なアにもつと早くにかへれたのだが、途中で又用が出來て、とう／＼こんなに遲くなつて仕舞つたのさ、あーあ、お前がたにも氣の毒だつたが、今日と云ふ今日は、小父さんは、つく／＼つとめがイヤになつたよ！
おみよ　怎して？　だつて、小父さんの御つとめは悪いものを縛る役で、此の町のものが安心して居られるのは、みんな小父さんの御力だつてほめられて居るぢやありませんか。
勘助　悪いものを縛る役か……小父さんはねー、今日まで自分の仕事は正しい事だと思つて居たが、縛る己れが正しいのか、縛られる方が正しいのか、一向譯が分らなくなつた……永い間のむくいとでも云ふか、小父さんは今日、自分の心にしばられて、辛い悲しい心持がする……それにつけても、此の勘太郎、行く先々は忘れても、目明かしなどにはさせたくねー、義理を生命と生きる道程つらい苦しいものはないなア、おみよ坊におとり坊、生ひ先長いおまへ達に、此の小父さんがたのんでおくが、わしももう取る年だ……明日が日にももしもの事があつたなら、勘太郎の事は頼んだよ、何と云つても己れの血を引いて居るから、人の下にや使はれめいが、忘れても無職渡世、ばくち打ちなどにならねーやうに、地道な職を覺えさして、靜かな一生の送れるやう、くれ／＼も頼みます……一生名前を殘さずとも、何不自由なく暮して行ければ、これにまさつた事はない……小父さんが御願ひだ！　二人とも、どんないゝところへお嫁に行つても、勘太郎の事は本當の弟だと思つてやつて、行く先々

の面倒を見てやつておくれ！　これが小父さんの一生一度の御願ひだ……（と懐から金を出して包み）これはほんの少しだが、花かんざしでも買つておくれ！　そしてもう早くかへつて、風を引かねーやうに休んでおくれ！

おみよ　小父さん、今日は怎したの？　小父さんがそんな事を云ひ出すと、私何だか悲しくなつて來ますから、小父さんどうぞいつまでも〳〵永生きして、妾やおとりさんの面倒を見て下さいな。

おとり　ほんとに、小父さん、いつものやうに元氣を出して歌でもうたつて下さいな……あのお酒をつけませうか？

勘助　酒も何もう要らない、さあ、早くかへつて休んでおくれ……

おみよ　そんなら小父さん！

勘助　おゝお父さんや、お母さんに、くれ〳〵もよろしくたのむよ。

（と二人の娘を送り出して、戸をしめ、佛壇に向つて合掌する。）

（時の鐘が聞える。）

勘助　貞花妙香大姉……長い間苦勞をかけた、お前に別れてまる七年、勘太郎が可愛さにあれからずつとやもめぐらし、定めてお前も見ちやあ居てくれたらうが、義理人情の、手かせ足枷、お前に言ふ日が近くなつた……（とさめ〳〵と泣いて）勘太よ！　おゝ、何にも知らずにすやすやと靜かにねむるいたいけなさ……お父さんはな、男に生れて男を立て、立派に生きていばつかりに、親子の情も恩愛も義理の爲にはふりすてゝ、可愛いゝお前を後に殘して、死なゝきやならねー破目になつた！　七ッと云やあ、いたづら盛り、西も東も知らねーものを一人殘して行く己れはどんなにつれいか分らねー、たつた一人、これから先は他人樣の御世話になつて暮らす中生みの親戀しいと思ふ事もあるだらう、さむい雪の降る晩にも誰がお前を抱いてくれる……こんなやくざな親を持つたのを不運と諦めてかんにんしてくんねー、よツよツ！　おお、親に抱かれて添乳の夢でも見て居るのか、あのくちびるの可愛らしい……勘太よ、これから先は夢でたけりや此の父親にも會へなくなるぞ！

（とさめ〳〵と泣いて居る所へ表の戸をトン〳〵とたたいて、）

淺太郎　おい伯父さん、伯父さん、淺太郎だ！　開けてくんねー。

勘助　靜かにしろ、今あけらあ……

（と表をあける。）

（淺太郎家へ這入る。）

淺太郎　伯父さん、實は大間々の町で親分が取り卷かれて己らも山へかへりはぐれ、明日の朝早く立つから今夜一晩丈泊めてくんねー。
勘助　あゝいゝとも、泊つて行け……だが今勘太郎が寢たばかりだ、どうか靜かに寢かしてやつてもらひていんだ。
淺太郎　おゝ勘太か……久しく見ねーが、すつかり大きくなりやあがつたな……伯父さん、お前さぞ可愛いゝだらうなア。
勘助　可愛いゝとも可愛いゝとも、廣い世界に我が子程可愛いゝものはありはしねー……が今も今とてその話だ、己れも御用をつとめて居れば、命は風の燈火同然、何時亡くなるか分らねー、もしさうなつたら勘太一人、女親は無し己れが居なけりあ、木から落ちた猿同然で、天地の間に賴りにするなあ、甥のお前只一人だ……淺太郎、もし己れが亡い後は勘太の事を賴んだぞ！　いゝかそして忘れても目明しなどにしてくれずに天秤棒を肩にしてなと、堅氣のものに育てゝくんねー、己らあそれが心殘りだ。
淺太郎　何の何の、己れの眼の黑い中は勘太の事は安心してもらいていんだ、たとへ火の中へ這入らうとも此の子の一生はきつと己れが守り立てゝ見せるから、伯父さんそれ丈は安心してくんねー。

勘助　いやあさうか、それを聞いて大安心だ、それぢやあ己れは飯を喰ふからお前も何ならつき合はねーか。
淺太郎　己らあ途中でやつて來たから、伯父さんゆつくり喰ふがいゝ。
勘助　そんなら己れ丈喰ふとしようか。
（と膳を出してうしろ向きにめしを喰ひはじめる。）
（淺太郎その後からすきを見て切り付けようとする、いろ〳〵あつてトゞ再び切りつけようとすると、）
勘助　野郞！　何をしやがる。
（と膳を投げつける。）
淺太郎　伯父さん！　かんにんしてくれー
（と勘助の肩を切る。）
勘助　待て！　待て！
淺太郎　伯父さん、許してくんねー。
（と再び切らうとする。）
勘助　待て！　待て！　逃げるんぢやあねー、切られる覺悟だ、待て！　待て淺、己れは手前が來ようとは思はなかつた！
淺太郎　えゝ？　そんなら伯父さんは……
勘助　打たれる覺悟で切られたんだ！　切られる前に譯を云へば、お前は己れの首は切れねー、一人の甥の男を立てたさ、目明しの勘助の義理が立てたさ、己らあとつく

に死ぬ覺悟だ。

淺太郎　え……

勘助　どうで誰かゞ來ると思つたが現在血を分けたお前をよこすたア、親分も少し血迷つたか、隨分むごい話だ！　淺よ手前に首をやるから赤城の山へ歸つたら、よく親分に譯を云つて此の心持を傳へてくれ！　今日伊勢崎から戻つて來ると大間々の宿で忠次を取り卷いた疲れて居やうが行つてくれと上役人の云ひ付けだ！　その時己らあ、本當に疲れて居たが、親分の難儀ときいて早く行つて助けていと其場にかけつけて行つて見ると、親分は碇床の屋根に乘つて大勢にかこまれてあやふい所だ！　昔の恩に助けるなら手前も忠次と同罪だと皮肉を極めた役人の難題、命は惜しくは思はねーが、昔の御恩の報じ時、十間先きの南へ下りれば赤城山へは一本道、左へ下りれば茨が手の土手つゞき、御逃げなさいと云ひ度いは山々だが、まさかにさうも云はれずに眼かほで知らして心の謎、ふだんは利口な親分だが、逆せ上つて心の裏を讀まうともせず惡口雜言、その中に日が暮れて親分は無事に落ちのびたが家へ歸つて來る間もなく門を叩くのは甥のお前だ、南無三！　己れのはからひが甥のお前に及ぼして己れの命を取りに來たと、子供の事を賴んだのも心殘りのねーやうにしていさぎよく死にていばツかり……お前の口から悵々と云つてくれりやあ、まんざらに己れも犬死にもなるめい……淺よ、あすこを見ろ！　長い間の山龍り、さぞ不自由だらうと思つて貰ひ込んだ卵とかつぶし、明日にも百姓を使ひにやつて御見舞に送らうと思つて居たがみんな仇事、それも一緒に持つて行つて己れの氣持をつたへてくれ！

淺太郎　そんな事とは思つて居たが、お前と己れと同腹で、內通したと云はれちやあ、此の淺太郎の男が立たず、意地張づくで引受けて、伯父さんの首を貰ひに來たんだ、やくざな甥を持つた因果とあきらめて伯父さんゆるしてくんねーよ。

勘助　何の〱、お前でなくとも、どうで何かゞ殺しに來る。せめてお前の手にかゝるなア己れに取つちやあ本望だ！　さあ早く切つてくれ！

淺太郎　伯父さん。すまねー、その代りにやあ勘太郎は命にかけて引き受けたぜ！

勘助　それ聞いて安心だ！

（と合掌する。）

（淺太郎、刃をふり上げる所へ勘太郎が起きて來て、）

勘太郎　やいバクチ打ちの伯父さん、お父さんをどうするんだ！　畜生！　畜生！　お父さん逃げてくれ！　逃げてくれ！　早く早く。

（と自分は手に棒を持つて淺太郎に向ふ。淺太郎はたぢ／＼とする。）

勘助　早く、早く、子供を抱いて、己れを切れ、淺太郎！男らしくすつぱりとやれ！

（と覺悟する。）

淺太郎　（子供を小脇に抱いて）伯父さんかんべんしてくんねー。

（と刀をふり上げどうしても切れないで、パッタリその手を下げる。）

勘助　（其刃をもつ手にすがつて）淺！　勘太郎をたのんだぞ！

（と云ひ樣自分でぐつと胸をつく。）

第四場　元の瀧澤不動

忠次を初め乾兒一同、居並んで居る所へ山の下から、一人の乾兒が急いて上つて來る。

乾兒　親分板割の兄哥が戻りました。

忠次　何板割が歸つて來た！　一人でか。

乾兒　手に大きな荷物を持つて、子供を背負つて參りました。

忠次　大方そんな事だらう。きつと勘助の子を人質にあやまらうと云ふのだらう、見下げ果てた了簡だ！

（と云ふ所へ板割は勘太郎を背負ひ、手に卵と鰹魚節とそれから勘助の首を持つて登場。）

淺太郎　親分、只今戻りました！

忠次　子供をかせに詫をしても、此の己れは承知しねーぞ、己れの注文は勘助の首だ、それが無ければ、言葉は要らねえ！　さつさと山を下りて行け！

淺太郎　御念にや及ばねー……惡、だれか背中の荷物をかたづけて、どつか脇に連れてつてくれ！

（乾兒の一人、勘太郎を連れて去る。）

淺太郎　親分。現在の伯父、勘助の首、とつくりと御覽下せい！

（と首を出す。）

忠次　えゝ。（と驚く）

淺太郎　此の首ぢや親分、御氣に入りませんか。

忠次　いや氣に入つた！　淺太郎。お前はさすが板割だ、己れの氣を知つて居たな、よく切つて來た！　これで己れあ胸がすいた！

淺太郎　そんなら、元々通り、此の板割は國定忠次の乾兒になつて居られますか。

忠次　さうだ！　板割はわだかまりの無い己れの乾兒だ！

淺太郎　（首に向つて）伯父さん、お前は犬死ぢやなかつたぜ！　親分、さうきまりア淺太郎の云ふ事を一通りお

聞き下せい！　山を下りるなり大急ぎで、御室に伯父をたづねた時は、伯父は切られる覺悟で居やした！

忠次　勘助は死ぬ氣で居た！

淺太郎　さうです……淺太郎の血を引いた、伯父はやつぱり男でした！　礎床の屋根の上へ、態御逃げなさいましとまともに云へネー苦しさから心と心に謎をかけたが、親分には分らなかつた、恩を報じるつもりでも先へ通しなけりや仕方がねー、どうせ誰かゞ殺しに來ようと子供の事を色々に頼み、伯父は笑つて死にました！　そして猶云ひますにやあ長い間の山籠りで、さぞかし親分は御不自由だらうと、卵と鰹魚節を買ひ込んである、それも屆けて來てくれろと此の一包みもたのまれやした！　此の板割にも伯父さんにも、親分に對して、二た心のねーしるしがお分りになりましたら、思ひちがひだつて事を、たつた一言此首に云つてやつちやあ下さいませんか……覺悟はしても非業の死だ！　宙に迷つて居ようも知れねー、親分の一言が、何にもまさつた引導でさあ、親分御願ひだ！　一言手向けてやつて下さい！

忠次（ぢつと無言で居る）

圓藏　あーあ淺ましい！　さつき云つたは此處の事だ！　意地と意地とのはりあひから、あたら人の命を失くした！　緣もゆかりも無い圓藏、人の心に泣かされやした！　御室の伯父御とやら……何にも云はねー、目先無精の天狗の圓藏、心の奥底から、念佛を申しやす！　いづれあの世でお目にかゝらうが其時こそは此圓藏に、男同志のたてひきやう、お教へなすつて御くんなせい！　南無あみだぶつ……板割、お前の心の苦しさは、己れには殘らず分つたつもりだ！　お前何故泣かねーんだ！

淺太郎　圓藏兄哥泣いてもよう御座んすか。

圓藏　泣きねー、泣きねー、それが佛への手向けの水だ！

淺太郎　親分、みんな、かんにんしてくんねーよ！……伯父さんかんにんしてくんねー。（と泣く）

（所へ勘太郎が走り出る。）

淺太郎　おゝ勘太郎、お前のお父さんはな、樣子あつてこんなになつた！　さあ早く會つてやれ！

勘太郎　あゝお父さんだ！　お父さんだ！　伯父さん、お父さんをちやんとして返してくれ！

淺太郎　勘太郎無理はねーゆるしてくれ！

（一同涙にくれる。）

忠次　板割、今こそ分つた！　己れの短氣がわるかつたなア！

淺太郎　親分、今分つてくれましたか！　御室の伯父の首を打つても打たねーでも、此の板割の淺太郎は國定忠次の乾兒の氣で安心しきつて居ましたが……あーあ、今に

なつちやあ、もう張合も無くなつた！　親分、あらためてお盃はお返し申しやせう。
忠次　淺、それぢやあ、お前は……
淺太郎　恨みや何かで云ふのぢやねー、一生かけて勘太郎を立派にするのがわツしの役だ！　子供が居ちやあこれから先、無職渡世にも足手まといでさあ。
忠次　イヤ、勘太郎の事は此の忠次が引き受けた！　これから先きの一生は今にもましてあやふいのだ、お前に行かれる此忠次はどんなに淋しいか知れやしねー、ぎけんを直して山に居て元々通りにして居てくんねー。
淺太郎　親分のお言葉ぢや、否とも云へねー私の氣性だ……只此上のお願は板割は男だと思つて下せい……
（と暗涙にむせぶ。）
圓藏　あゝ何だか心が汚れたやうだ、どりあ……
忠次　圓藏兄哥どこへ行くんだ！
圓藏　月でもながめて來ようと思ふんだ……（と空をあふいで）あゝ、東雲が近づいたか月の光がうすれて來たー
忠次　圓藏兄哥お前は山を下りる氣だな？
圓藏　さすがは忠次どん、よく己れの心を察しなすつた！　逐に知らねー淺ましい人の心の奧を見て、己らあ人間がいやになつた！　長い間の有爲轉變、此の世の中の修業丈は、かなりに積んだ氣で居たが、まだ〳〵己れは何にも知らねー。山を下りてあらためて、此の世の中へ武者修業さ。凶状持の此の圓藏を長い間よくも〳〵手あつい世話をして下すつた。それ丈は厚く御禮を云はう、今旅に出る置き土産、氣に入るめえが、一言丈云はしてもらひてい事がある。幾千幾百の百姓の死の苦しみを救つたのも、非道をこらす其爲に、代官屋敷を燒いたのも、世に有り來りの俠客には、及びもつかねー大きな仕事だつた！　忠次どん、赤城の山へこもるまでが國定忠次の全盛だつたなあ！　人間の一生は、のぼりつめれば下らにやならねー、瀧澤不動の此の平らは、赤城の山の頂上だ、もう此上の道が無ければ、進むも退くも下りるばかりだ……忠次どん……皆の衆、𢇁と生命があつたら、又いづれかで會ひませう！　どうぞ達者で居て下せい！
（と行きかける。）
忠次　圓藏兄哥行くと云ふなあかまはねーが、一體何處へ行きなさる氣だ？
圓藏　何處と云つて當てはねーさ。
忠次　それにしても旅の事だ路銀がなくちや不自由だ！　忠次のほんの志どうぞこれを持つて行つてくんねー。
圓藏　イーヤ、金は欲しくねー」
忠次　でもほんの志だ！　圓藏兄哥……
（と追ひすがるやうにして渡さうとして岩につまづき

（バツタリ倒く四ツン這ひになり生爪をはがす。）

忠次　痛い！

淺太郎　親分、どうかなさいましたか。

忠次　ナアニ、鳥渡爪をはがしたのよ！

圓藏　何、爪をはがした？（思入れ）つまづかねーやうにしねーよ！

（と圓藏靜かに去る。）

（夜がだん／＼明けようとして旅鴉の聲がきこえて來る。）

（忠次、何の聲だかイヤな聲だと云ふ思入れ。）

淺太郎　御室の伯父の魂のやうな……あゝ旅がらすの聲がする……

忠次　（ぢつと思入れ）長い長い一生を何處へ落着く家もなく、榮華の夢もたゞ一時、旅に生れて旅に死ぬ、國定忠次は旅がらすか……圓藏兄哥……（と呼んで）もう何所かへ行つて仕舞つた！

（忠次ぢつと思入れ、再び旅鴉の聲。）

（夜はだん／＼明けはなれる。）

――靜かに　幕――

第二　雪の信濃路

第一場　加部安の門前

舞臺の正面に淺く、一見大藩の邸宅を思はせる大きな茅葺きの屋根のある門、門の戸はかたく閉され、その左右は、ずつと常盤木の綠美しい生垣、垣の中には木立の間に幾戸前かの土藏の屋根見ゆ。

夜いたく更けたる樣、雪を持つた冬の空が何となく物さびしい。

犬の遠く吠ゆる聲。

幕あく

とすつかり旅姿に身をやつした國定忠次、背中に勘太郎を背負つた板割の淺太郎、松井田の喜藏ひそかに登場。

喜藏　親分……上州さへ越えりやあいゝと、山を越え谷を渡り、歩き續けにやつてきやしたが、嘸お疲れになりましたらうね。

忠次　なあに、お前達こそ本當に氣の毒だつたな、淺、お前はそんな勘太郎を背負つて人一倍の艱難辛苦た、さぞ苦しからうが、まあもう少し我慢してくんねーよ。

淺太郎　何の！　無職渡世をするからにやあ、こんな事はあり勝でさあ、ぬすとうをして逃げるぢやなし、よしひ

んなぐられるとしてからが、威張つて罪を受ける上に、一人や二人は泣いてくれるんだ……親分こそは、何のかんのと氣をもむんで、さぞかし御疲れで御座んせう……何とかして、一刻も早く氣の休める所へ落ちつきていもんですねー。

忠次　うん！　それにつけても山に殘つた奴等は怎うしたか。いくら何でも多勢に無勢だ、うまく切りぬけてくれりやあいゝがなア……

（とはなして居る所へ、後から高崎の重吉、保積の卯之助、清水の岩鐵がいそいで登場。）

岩鐵　おゝ、親分……

忠次　おゝ岩鐵か……

淺太郎　皆は怎うした？

岩鐵　なアに、足利の權三と、成塚の三代太郎が八州の役人の中へ斬り込んで、三ツ木の文藏が、この位の丸太ん棒をふりまはして役人の奴等を叩きのめして仕舞ひましたからもう後から來る氣づかひはありません。

忠次　さうか、話を聞いてもキビ／＼する、何しろ皆に怪我さへなけりや、まア／＼いゝと云はなきやならねー、おゝ雪が降つて來たな。心の湊つて居る時には、雪が降らうが雨が降らうが、別に何とも思はねーが、今國越の旅の空……己れは心からとも云へるがお前達に難儀をかけるなあ氣の毒だ、どこかに雪をしのぐ所はねーのか…そりやさうと、此處は一體何處なんだな。

岩鐵　さあ……はつきりさうとは云はれねえが、信濃へ這入る國境ひだと思ひますが……

喜藏　さうだ、此處をこのまゝ進んで行けば……親分、いよ／＼大戶のお關所ですぜ！

淺太郎　何？　大戶の關だ？　大戶の關にやあ、もう手くばりはついて居る、そこへ逃げりや袋の鼠だ……親分、一體どうしたらいゝでせうね。

忠次　上州ざかひの此の土地にも、恩を賣つてはある筈だが、そこをたづねて行くにしても、此の眞夜中ぢや怎にもならねー。

岩鐵　してその家と云ふなあ、何と云ふ家なんですね？

忠次　一佐羽、二加部、三鈴木……上州切つての三大盡、その二番目の加部安は、義理も恩も知つてゐる、そこを尋ねようと思ふのよ。

岩鐵　何！　三大盡の加部安たら此の門がまへが奴の家でさあ……

忠次　何、此處が、あの加部安の家か、地獄で佛たア此の事だ……赤城明神の祭の晩に、此處の家の娘さんが、あやふい所を助けた縁だ、堅氣の家へ氣の毒だが脊に腹はかへられねー、一つたんので見るとしようよ。

（と忠次先に、門に近付き、いろ〳〵あつて怎しても起きないと云ふ思ひ入れ。）

（遠く時のかれ。）

忠次　（指折り數へて）いかさま、更けた……

（と裏へまはらうと云ふ思ひ入れて一同を招く。）

（犬の聲しきりに。）

（暗轉）

第二場　安左衞門の居間

加部安左衞門の寢室、立派なる部屋、よき所に寢床なしき、その中に安左衞門眠り居る。しばらくして、店の番頭、傳吉、米藏の兩人、恐れなのゝきながら登場。主人に向つて何か云はうとして、歯の根も合はず、お前云へ、われ云へと手まれ、しぐさで爭ひながらばつたりたふれる。物音に主人眼なさます。

加部安　何だ〳〵、騷々しい！　二人共その風體は怎した事た！　此の夜中に夢でも見たのか……

傳吉　旦那様、タ、大變で御座います〳〵、おたづねものの、大どろぼうが、切り込みまして御座います……

加部安　何、夜盜が這入つたと云ふのか。

米藏　夜盜どころのさわぎでは御座いません！　只今天下になりひゞいた大變なものがまゐりました！

加部安　そして人數は何人程た。

傳吉　何人程たか分りません、私は眼がちら〳〵致しましたから百人ばかりに見えましたが、こつちがふるへて居た爲に、同じ人が何人にも見えたやうな氣も致しますが、その中には子供を背負つたのも居りました……

米藏　ですから私の考へますには初めどろぼうの夜逃げたと思ひましたが名前を聞いてびつくり致しましたので御座います……

加部安　何と云ふ名前なのだ……

米藏　石川五右衞門の……

加部安　これ何をくだらん事を云ふのだや、さあ早く云へ、何と云ふのだ。

傳吉　さあ、私が寢て居りますと、しきりに戸を叩きますのであけて見ますと、大の男がぬつと立つて、御主人安左衞門殿は御在宿か……わしは上州佐位郡國定村の忠次と云ふものだ……旦那様、國定忠次が參りました……

加部安　何、國定忠次の親分が見えたか……

米藏　あゝ、旦那様、お金は金藏にあるからすきな丈持つて行くやうに仰有らないと、吾々共の首まであぶなくなつてまゐります……鐚錢身につかずと申します、旦那様早くお金をおやり下さいまし……

傳吉　御願ひで御座います……
加部安　これ〳〵さわぐな！　靜かにしろ！　國定の親分が見えられたか……よく〳〵深い御緣があるのだ………（と喜ばし想に）傳吉、米藏、早速これへお通し申せ。
傳吉　えゝ？
加部安　さあ早く、早く、わしは今お出むかへをする、それから奥へ行つて娘のおまちを起して大恩人がお見えになつた、すぐ來るやうにと云つて下さい、……さあ早くしないか。
（と二人をせき立てる、二人退場。）
（加部安ドテラを羽織り支度をしながら、）
加部安　國定村の忠次親分は赤城の山で御難儀たと、風のたよりに聞いては居たが、怎しようにも堅氣の商人、案じるばかりで過してゐたが……それぢやあ運よく切りぬけられて、山を下つて御座つたらしい。
（と云ふ所へ安左衛門の妻、お節、娘おまち登場。）
（三人して待つてゐる所へ以前の忠次を先に、一同靜かに登場。座につく。）
（加部安のもの、一同、うや〳〵しく禮をする。）
（忠次も萬感交々の胸を抱いてぢつとおしだまつてゐる。）
おまち　（ぢつと忠次を見て）　親分さまおなつかしう存じます。
忠次　おゝ、おまちどのか……いつぞやはあやふい所で御座りやしたな。
加部安　赤城明神の御祭神の度毎に娘の無事を喜ぶばかりか、その後親分は怎してお暮し遊ばすかと、いつも〳〵一家のものが御案じ申してをりまするが、何を申すも恁した渡世、御恩を報ずる手だてもなしに今までのめ〳〵居りましたが、人の噂にいろ〳〵と御身の上を氣づかつて、神信心は怠らずにして居りました……深い御緣があつたればこそ、恁して又御目にかゝる事も出來ます……親分、御無事で御目出度う御座います。
忠次　御主人、もう何にも申しやせん！　あれから後の忠次の身の上、好きでなつた無職渡世、自分丈の事ならば、愚痴もくやみもありませんが、堅氣の人には恐れられ、心の奥を唯一人にも知つてもらへぬ口惜しさには、度々業を煮やしましたが、堅氣のお店へ此の夜半に、訪ねて來るさへ異なものだのに、恁うして會つて下さる丈で、忠次は此の上の事はのぞみません！　おたづねものゝ忠次一門、疊の汚れもかまはずに、揃つてお出迎へ下すつた、お志は涙が出る程うれしう御座います、かう、みんな、加部安の御主人だ御挨拶を申し上げろ！
淺太郎　板割の淺太郎……脊中の餓鬼は　大切な　甥の　勘太

鐵……

岩鐵　清水の岩鐵……

喜藏　松井田の喜藏……

卯之助　保積の卯之助……

重吉　高崎の重吉。

（と挨拶する。）

忠次　忠次の事を生命にかへて、守つてくれる身内の者で御座います。長い間の山住ひ、これから先は猶の事、谷間の岩を枕にしたり、かや野の中に露の宿、果もねー旅がらす、一晩位は疊の上で、ゆつくり寢かしてやりていと御迷惑とは知りながらも緣にすがつてやつて參りました！　なア、さつきも云ふやうに聞く通り見る通りだ、此の加部安の御宅では、まだ此の忠次は捨てられねー、だからよ、遠慮のねえのがかへつて御禮だ、長い間苦勞さしたが今日ばつかりはのんびりと、手足をのばして寢てくんねーな。（とほろりとする）

加部安　只今お風呂を沸かさせますから、どうぞしばらく御待ち下さいまし……そして又幸に離室の普請も出來ましたし、そこにおいで遊ばすなら決して他には知れませんから、どうぞいつまでも御逗留が願ひたう存じます。商人こそすれ、加部安左衛門、娘の命の大恩人、たとへ後ろに手がまはらうとも御身の上は引き受けました……さあ、御案内申し上げろ。

（と主人先に立つて行燈を持ち一同を案内して奥へ去る。）

（やゝしばらく舞臺空虚になると身ごしらへ嚴重に、すつかり覆面をした賊、上手下手より十數人たちあらはれそつと樣子を伺ふ所へ番頭、傳吉、ぼんぼりを持つて登場。）

（賊はいきなり其の火を消す、傳吉腰をぬかす。）

賊　靜かにしろ――聲を立てると命がねーぞ。

（米藏「傳さん傳さん」と云ひながら登場する、暗い中に賊の姿を見てアッと腰をぬかす。）

賊　靜かにしろ！　主人を出せ！　主人を出せ、騷ぐと首がねーぞ……

（處へ主人加部安靜かに登場。）

加部安　誰れだ。

賊　誰れでもねー、主人を出せ。

加部安　手前は富家の主人で御座いますが、貴方方はどなた樣で御座います。

賊　誰でもねー、國定忠次の身内のものだ。

加部安　えゝ？　して手前に御用は何で御座います？

賊　此度赤城を下りて國越をするについて少し路銀が入用なのだ、上州切つての三大盡、見込みをつけて來たから

にや、イヤでも應でも借りて行くが、ハイと云つておとなしく〳〵出しやよし、イヤだと云やあ力づくでも持つて行く……さあ命が惜しけりやあたつた今耳を揃へて出すがいゝぜ。

加部安　委細承知致しましたが其のお金はいか程御入用なので御座いますか。

賊　三千兩だ。

加部安　三千兩で宜しう御座いますか。

賊　さうだ三千兩出しやあよし……

加部安　イエ〳〵誰れも出さぬとは申しません！　お金は只今差し上げますが、そのかはりお願が御座います、どうぞ店のもの共のさわぎませぬやうお靜かに願ひます……傳吉、傳吉、米藏……何も恐れる事はない命を取らうと仰有るやうな、そんな小さいお方ぢやない、上州一の貸元と云はれた、國定忠次の身内の方だ……お前二人で金藏へ行つて、刻印のない小判で三千兩たつた今持つて來い、刻印のある御金では使ふそばから足がつかう……さあ、早く立て！　早く行け！　なんで立てないのか……三千兩の金くらゐで、ふるへ上つたり腰をぬかしたり、商人らしくもない奴等だ！　さあ立つて來い！

（主人二人を起して立ち上り退場。）

（此間に奥から忠次の處へ出すべき酒肴など持つて來るものがあるが此の有樣を見ておどろき逃げる、賊等その酒をのむ件あろ、としばらくして主人先に二人の番頭、三千兩を持つて登場、賊の前に置く。）

加部安　お申付けの金子三千兩、どうぞお持ち歸り下さいまし、そして國定親分に、二度と金子御入用の節には、蔓間店からお出下さるやうにと、よろしく御傳へ下さいまし。

賊　よし、そんならこりやかりて行く、取られたなんぞと恨みなさんなよ、金藏の中で出ていく〳〵と金がうなる、浮世の風にあたらしてくれと己らあ小判にたのまれたんだハヽヽヽ、あとの戸じまりを氣をつけろよ……

（賊等金を持つて退場、主人室の中に燈火をつけて居る處へ妻お節、娘おまち急いで登場。）

おまち　あのお父樣、國定の親分達が、みんな何處かへ行つておしまひになりましたが……怎した事で御座いませう。

加部安　何？　みんな離れに居なくなつたと……？

おまち　御風呂の知らせにまゐりましたら、どなたもお見えにならないで、此の子が一人しく〳〵泣いて居りました。

（と勘太郎を連れてくる。）

加部安　さうか……お前の命の大恩人、國定村の親分は、

此の世の中の貸元中の手本だと、おれもぞつこん惚れてゐたが、今夜と云ふ今夜つく〴〵愛想がつき果てた！　親分は此のわしを見そこなつてか、親分の心の底が腐れたのか、たつた今、乾児の者をよこして三千兩を取つて行かれたよ。

おまち　えゝ？　そんなら、親分は何故さつきその事を仰有らなかつたんでせうねー。

加部安　さあそこだ！

おまち　お父さんと親分の仲、殊に私の命の大恩人、嫁入支度のお金をさいても、私でさへも御恩報じは出來るだらうに……

加部安　長の苦勞で、氣がくじけて、あれ程立派な心根かなまくら刀になつてしまつたのか、取られた金は惜しくはないが、おれは國定の名が惜しい！　あゝ、人は見かけによらねーものだ！

おまち　いゝえ〳〵、それはきつとちがひます、怎考へてもあの親分に限つて、そんなさもしいお心にはなられる筈はありません！　お父さま、これはきつと何かのまちがひでせう、どうかもう一度考へなほして上げて下さい。

加部安　イヤ〳〵國定の親分は、己れの爲には守本尊、後光がさして居たのだが、今は光も消えうせた。久し振りで本當の男に會へたとよろこんで、はりつめた氣たゆるんだ故か、おれはもうがつかりした！　明け方まではまだ間もある！　いゝ夢を見たはさうよ。

おまち　あゝ怎したらいゝでせう、天にも地にもたつた一人、男の中の男と云ふのは國定の親分さまと、思ひ込んで居ましたのに、もし親分がそんな風だと私の夢はみんな仇事、神樣、どうぞ親分をお守り下さい……

加部安　おまち！　嘆くでない、男と思つた國定の、みにくい姿を初めて見たおれの心は猶さびしい……

（とぢつと思ひ入れ……。）

――幕――

第三場　狼　谷

大戸の關所の裏道、山にかこまれたる徑、雪がチラチラ降つて來る。

以前の鬼の大八をはじめ、賊共、千兩箱を持つて登場。

賊甲　ねー親分、有る所にやあるもんですねー、ちよいとおどかして三千兩、あの金藏にや、どんなにあるかわかりませんねー。

大八　うん、だからあの金藏のそばへ寄つて見ろ、眞夏でもひーやりするんだ。然しなア、國定忠次の落ち目につけ込んで、かうしてうまく取つた三千兩、これを持つて、上州へ行つて忠次のなは張りをすつかり取れば、己れ達

は一生極樂世界だ！　待てば甘露の日和といふが、こんなうめいはなしはねー、棚からぼた餅ぢやあなくつて、棚から小判と云ふ奴だ……どうだい、己れの腕前にや驚いたらう。

賊乙　イヤモウ、全く恐入りましたよ。

大八　それになア、この三千兩も忠次の名前でふんだくつたんだから、あとで、どんな事が起らうと、己れ達にはかゝりあひは無いと云ふうめい寸法だ。今まで隨分忠次の野郎にやあ苦しめられたが、これからは己れ達の正月よ……、おう、見ろやい！　三千兩、久しぶりの三千兩、千兩箱はいつ見てもわるくねーなア。

賊甲　おや……？

大八　何だ？

賊乙　何だか、ガサツて云ひましたぜ。

大八　意氣地なしめ、山の中にや、けもの位は居るだらう……

賊甲　おや……

大八　えゝ、弱蟲め！　何だ、何だ、誰れか居るのか……

（と云ふと、やぶの中から、板割の淺太郎ヌッと出る。）

大八　おや……。

淺太郎　やい、鬼の大八、かげですつかり樣子は聞いてたんだ、多分、この道を通るだらうと八幡林から此方へまはつて持つて居たんだ。うぬはよくも親分の名をかたつて、加部安から三千兩をかたり取つたな。取りもなほさずうぬ等は強盜だ！　この三千兩は、どうしても、親分の手で加部安へ返さなけりやあ義理が立たねー、さあ野郎共、その覺悟しろ。

大八　何を生意氣な、國定忠次は、兄弟分、島の伊三郎の仇だ。こゝであつたなあ丁度いゝかたきを打つから左樣思へ！

淺太郎　生意氣な事を云ふな。

賊共　何を……

（と一齊に意氣込む。）

淺太郎　さあ、皆出て、こいつらあ眠らしちまへ！

大八　何をぬかしあがる。甲州巨摩郡北上村の鬼の大八が、上州へ行く邪魔しやがるな、顏洗つて出なほして來い！

忠次　（つか／＼と出て）御託を吐かすな……さあみんな、こいつらをたゝき切つて、鬼の大八を生捕にしろ！

（と雙方入り亂れて戰ふ。）

（この時雪盛にふり出し、雪中の立ちまはりいろ／＼ある。）

（とゞ、大八と忠次との立ちまはりになり、忠次大八の刃をたゝき落し、大八のへたばる所を、逸早くひきくゝつて、）

忠次　淺よ、さあ、これを勘太の土產にしろ！
淺太郎　合點だ……
（と忠次、すつくと立つて、人を集める呼子を吹く。）
（乾兒のもの全部急いで集まり、各々、痛快だと云ふ思ひ入れ。）
忠次　みんな、怪我はなかつたか……
岩鐵　親分、相手は、豆腐を切るやうなもんでさあ……
忠次　八州の役人と云ひ、こいつらと云ひ、刀のけがれになる奴ばかりだ、國定忠次の守り神、加賀の小松の住人五郎義兼に面目ねー……（と刃を見て）淺、淸めてくれ！
（と刃を出す。）
（淺太郎、ふところ紙を出して、刃をふく。）
（雪いよ／＼しきりに降る。）

第四場　加部安の廣庭

土藏を背景にした、加部安の廣庭。
朝やう／＼明けたる頃。
下男等、水などくんで居る。
下男甲　なア、昨夜のさわぎは怎たつた。
下男乙　全くよなア、然し、人は見かけによらねーもんだ。大親分だの何だのと云ふが國定忠次は大どろぼうだ。
下男甲　それもこれも、旦那樣に金があるからの事で、こちとらのやうな下男風情ぢや、まあどろぼうには縁はうすいわ。
下男乙　さうよなア、そんな事を考へると、金もほしいが、金なんてものは、あんまりねー方がしあはせかも知れねー。
（二人笑ふ。）
（所へ、淸水の岩鐵、つか／＼と登場。）
岩鐵　御主人に云つてくれ、國定忠次がかへりましたと……
……
下男甲　ヒヤー、今度は晝間か。
岩鐵　何だと？
下男乙　いゝや何でもねー。
（といそぎ退場。）
（しばらくして、主人夫婦、娘おまち、勘太郎、番頭等恐る／＼登場。）
（待つて居ると、かげて淺太郎の聲。）
淺太郎　勘太郎よ、待ち遠だつたな、見ろおみやげに、鬼を一疋つかまへて來たよ。
（と云ひながら、鬼の大八をふんじばつて、三千兩の金を持つて、忠次以下一同登場。）
（加部安のもの皆驚く。）
淺太郎　さつき樣子を見た時に、すぐにその場でやつつけ

ようと思ひましたが、騒がせちやあすまねーと親分に云はれて、實は待ちぶせてふんじばつてまゐりました。此奴は、島の伊三郎と云ふ奴の兄弟分で、鬼の大八と云ふ野郎でさあ、なアに、親分が赤城を下りたと聞き込んで、こんなふざけたまねをしやがつて、その上この金で、上州で親分のなは張りを自分のものにしようと云ふ、ふてい了簡の奴等ですが、さうは問屋で下さねー、やい鬼の大八、顔を見せろ！　そこに御出なさるのが、國定村の貸元、忠次親分だ、ようく拜んで頭の中へ、ありがてい御すがたを刻み込んで、ふるへねーまじなひにしろい！勘太見ろ！　これが鬼だとよ！　こえいか？

勘太郎　こはいもんかい！　しばられた鬼なんてこはいもんかい。己らあ、勸助のせがれの勘太郎だが、本當は日本一の桃太郎だ！　鬼が島を征伐するぞ。

（と大八の頭をぶつ。）

（一同笑ふ。）

忠次　加部安の御主人、今淺太郎から御聞きの通りに忠次の落目につけ込んで、とんでもねー惡い事をする奴等は、斬ってすてゝもすてねーでも、私の方は同じ事だが、かりにも私の名をかたられちやあ、明りを立てにやあ死にきれません！　一夜の宿をおかり申した、深い御恩を胸にたゝんで、今から揃つて旅に出ますが、こいつの命は恕しやせう。

加部安　元から廣い親分の御心、このまゝ逃がして御やりなさるが、何かの功德にならうも知れません。どうか、さう御願ひ致します。

淺太郎　命みやうがな野郎だ！　さあ、どこへでも、うしやあがれ！

（と、いましめを解く、鬼の大八逃げ去らうとすると、）

加部安　待ちなさい！（と金を包んで出して）鬼の大八とやら、これを持つておかへりなさい！　無職渡世、けんくわ商賣、男と男のたて引なら、刃を拔くのもいゝだらうが、金の爲ぢやアきたなすぎる、この金のある中に、今夜の事を忘れずに、右か左かすきな方の正しい道をゆきなさいよ。

（と、金を渡して、大八を去らす。）

加部安　さて親分、只今親分方の御すがたが見えなくなつたと聞きました時、ほんの一時では御座いますが、今のもの共を、まことの親分の御さしづと思ひちがひ、淺ましいうたがひをさへ持ちました。さすがに娘一人丈は、親分にかぎつてはと、かたく信じて居りましたが、いゝ年をして御はづかしい。どうぞ、この安左衞門、親分をうたぐつた念ばらし、御存分になすつて下さい！

（と詫びる。）

忠次　何の〳〵、うたがはれるのもみんなもつとも！　決して何とも思ひません！

加部安　つきましては、この三千兩、これから先の御入り用に、差上げたいと存じますが……

忠次　イヤ〳〵、その御心ざしは忝けないが、金は天下のまはりもの、病みわづらひのないかぎり、生きてさへ居るなら、怎やらその日は暮されませう、御金はいたゞいたも同然ですが、御主人の情にすがり、一つ御願ひが御座いますが、どうぞ聞いて下さいまし……實は、この勘太郎、こりあ、こゝに居る淺太郎の、たつた一人の伯父になる御室の勘助の一粒種、ふとした心のひがみから、淺太郎の心をうたがひ、むざ〳〵勘助の首を打たして仕舞ひました。怎した事であゝなつたか、あの時の心持は、我と我身で分りませんが、みんな私の了簡の小さいから起つた事で、一の乾兒の心をうたがひ、一人の味方の首を取るたア、人間らしい氣持では、出來る事ぢやありません。その時、日光の圓藏兄哥は、私に愛想をつかして仕舞つて、山を下つて行き方知れず……この忠次は、淺に背負はれた勘太郎を見る度に、親のかたきはこの己れだと、いつも心でわびて居やした！　が、いくら心でわびやうと、このまゝかうして旅に居ちやあ、この子の出世は覺束ねー、御室の勘助も、よし、肩に天秤あてやうとも、堅氣にしろと淺へ遺言したと云ひます。緣にすがつて、御迷惑とは思ひますが罪もけがれもねーこの子を、あなたの手許で御育てなすつて、一ぱしの商人にしてやつては下さいませんか、恐い事もおそろしい事も、この世の中にやあ一ツもねーと、思つて居る國定忠次も、寢てもさめても忘られねー心の苦勞はこれ一ツでした！　御主人、どうか御察し下さい！

加部安　いやよく分りました！　申すまでもなく、この私に出來るかぎり、きつと、御引きうけ致しました！

忠次　あー、それで安心致しました！　淺よ！　己れの心は分つてくれたか？　あの時から今日まで、しみ〳〵お前にわびていとどんなに思つたか知れねーが、今更らしい卑怯な事だと、何にも云はずに我慢したが、心の奥ぢや泣いて居たぜ！

淺太郎　親分、何にも云はねー、ありがてい！　旦那、どうかよろしく御願ひ致します！……これ、勘太郎、今日からはな、この御方が御前の御主人だ！　何でもおつしやる通りになつて立派なものになつてくれよ！　小父さんはな、親分のお供をして、これから遠い旅に行くから、體を大切にするんだぞ！　旦那、早くから女親に別れ、男の親は非業の最後……その日まで抱かれてねて居りました故か、諦らめては居ろものゝ時々夢でも見ると見え

て、御父さん、御父さんと夜中に泣く事が御座いますが、そんな時にやこれを見せて、これが御父さんだとなだめますと、そのまゝすや〳〵寢て仕舞ふのが、くせになつて居りますから、ついでに、この伯父の位牌も御あづけ申して置きます。どうぞ、よろしく御願ひ致します……女房も持たずに子を抱いて、山のくらしの一ト月あまり、この子の事で氣がついた事は、いろ〳〵ありますが、私はもう胸が一杯で、何にも申し上げられません……勘太よ、勘太よ！　丈夫で居てくんねーよ。

（と勘太を主人にあいさつさせる。）

勘太郎　どうか御願ひ致します。

加部安　あーあ、いゝとも、此所を自分の家だと思つて、安心して居るがいゝ。淺太郎さんとやら、見事立派に仕上げて、この加部安の商ひ印、入山形に﨣と書いて、立派な絲屋が出來たと聞いたら、この子の事だと思つて下さい。

淺太郎　ありがたう御座います。勘太、勘太、もうお別れだぞ、さあもう一度、小父さんにだつこさしてくんねー……

（と淺太郎勘太郎を抱いて泣く。）

忠次　さあ、もう、心に殘る事もなくなつた。是まで云はう〳〵と思つたが、丁度いゝ折だ。ついてはみんな、これから先の旅の事だが、どこも今迄のやうにや行かれめいから、此所で一先づみんなと別れて、時節を待つとしようと思ふ。

淺太郎　それぢやあ、親分は一人にならうと云ひなさるのか。

忠次　さうだ！　長い事苦勞をかけた！　己れも一生一緒に居ていが、時世時節ぢや仕方がねー。

淺太郎　親分が云ひ出すからにやあ、深い考があつての事だ。後へ引く人ぢやあねーから、架々とは云はねーが、足手まとひにやならねーから、せめて誰か一人丈けでも、供につれて行つてくんねーな。よかれあしかれ一人ぢやあ何處のいづくに居るんだか、親分のたよりも知れず、己れ達はさびしいからなあ。

（と云ふと淺太郎以後の乾兒は、口々に「私を連れて下さい」と云ふ。）

忠次　かたじけねーが、一人で行く。みんなが己れを思つてくれる、そのあつたけい志に、しつかり抱かれて己らあ行くんだ。

淺太郎　さうか……ぢやあ、云ふまでもねーが、體を大切になア……

忠次　うん！

岩鐵　生水はのみなさんなよ。

忠次　うん！

喜藏　たとへ野宿をするやうな事があつても夜露はよけて下せいやしよ。

卯之助　こけらの青い魚丈はなる丈喰はねーやうにして……

忠次　うん！

重吉　己らなア、親分が戀しくなつたらば、宵と夜明けの明星をおつと見るから、親分もあれを見て、高崎は怎して居るかと、思ひ出して御くんなせいよ！

（とみんな泣く。）

加部安　あーあ、男同志のあつい情に、ついぞ知らない美しさを、生れてはじめて知りました。此所にある五百兩、どうぞこれ丈は皆さんへの御餞別、心持よく御受け下さい。

忠次　忝けない！　ありがたく頂戴しませう。これ淺よ、己れもまぜて皆の頭、同じやうに分けてくれ！　餘つた半端は、勘太の小遣だ……

（淺太郎金を分ける。）

忠次　さあ、みんな持つて行け！　淺、何故取らねーんだ！

淺太郎　親分、一度、此の金をお前のふところであつためてくれ！

忠次　かうか……

淺太郎　（金をうけ取つて）親分、もらふぜ！　お前の肌のぬくもりを、おらあ、おつと抱きしめて、それをお前だと思つて居るぜ！　さめるも早いこの小判か、もしもつめたくなる時は淺太郎の體もつめたくなる時だ！　親分、己らあお前に抱かれて死ぬ氣だ！　一緒に死なうと誓つた仲だ！　何處で果てるか知れねーが、骨はひろつてくんねーよ！

忠次　淺、女々しいぞ……みんな、行くぜ！

（と笠を取つて立つ。）

（一同氣味合。）

加部安　雪と人間をしのぶみのかさ……親分、どうぞ御達者で……

（と、加部安、忠次のうしろからみのをきせる。）

（二人しつとりと思ひ入れ。）

（勘太郎、たまらなくなつて「小父さん」と淺太郎にすがる。）

――靜かに　幕――

第三　權堂の花

第一場　山形屋藤藏の家

信濃國權堂の女郎屋山形屋藤藏の家。
下手に入口があつて、ずつと續いて上手、內證兼主人の居間と云ふ風に見ゆる道具。
大きなる火鉢、茶だんすなどあつて、壁には、御用の提灯、十手などかけてあり。正面やゝ廣く、定紋を染め拔いたるのれんの奧は、女郎屋の表に通ずる心。

幕あく

と、座敷の下手に、長岡吉田村の百姓喜右衛門、その娘お福（十七歲）愁はしげの面持にて、手をついてかしこまり、その側に口入屋虎藏が坐つてゐる。上手火鉢の前に、山形屋の女房おれん、やりて、乾兒伴之助、力藏、瀧次、などをしたがへて鷹揚に坐つてゐる。

おれん　そんなら、お父さん。その言葉にちがひなく、この娘さんも承知だと云ふのなら、すぐに親分に申上げて、お金は早速貸して上げるが、二人共に後で異存などはあるまいね。

喜右衛門　何のおかみさま、年貢につまつたこの喜右衛門、百兩のお金が出來なければ、この首がなくなるかも知れませんので御座いますだ。私の云ふ事さへ、きいて下されば、何の後でとやかく云ふ様なことは御座りませぬ。どうか、親方さまに仰有つて、よろしく御願ひ申しますだ！

おれん　（やり手に）ねーお熊、どうだらうねー。

お熊　さあねー、十七にしちやあ、がらもあり、國も越後種といふのですから、みがきをかけたら、ほり出しものになるかも分りません——が、お父さん、この御店の事は、何から何まで、このおかみさんがやつて御出なさるのだが、それは〳〵御慈悲深い御方で、さつきも、おまへさん達のかなしいはなしに、もらひ泣きをしてゐらしつた程なのだよ。それだからこそ、見ず知らずのおまへさんに、大枚百兩と云ふお金をかして下さらうと云ふものだ。この不景氣に、どこでも、こゝでも人べらしの今日、まだ、海のものとも山のものとも知れもしない娘さんを、かゝへる丈でも大變な御なさけだと思はないと罰が當るよ——そして、この娘の名は何と云ふのだい？

虎藏　えゝ、極くえんぎのいゝ所でお福さんと申します。

お熊　おふく……福浦さんは、家にゐるし、福助……ではおでこのやうだし、福は內、鬼は外……いつそはなれて、神代さんと云ふ名は、虎藏さん、どうだらうねー

虎藏　目出たくつて結構ですね。

喜右衛門　あの、ちよつくら伺ひますだが、さつきからの

御願ひでは、娘をかたに御金拜借は致しますだが、一年の間は、元のまんまの娘で置いて下さる筈、もしもこのお金をかへされねーその時には、お店へお出しなさらうと、決して苦情は云ひましねーだが、今から名前などきめられては、わしは悲しくつてなりましねーだ、女將さま、その事丈は、かたくお願ひ致しますだよ。

おれん　ホヽヽ、あいまい茶屋ぢやああるまいし、攤堂きつてのこの山形屋は、道のちがつた事なんざあ、これつばかしもありやあしないよ。

喜右衞門　はア、私、それ伺つて、安心致しましたよ。

おれん　そんなら、親分に、さう申し上げておくれ……

（乾兒の一人奥へ行く。とすぐに山形屋藤藏、どてらを着、たばこ盆をさげて登場。）

（おれん、喜右衞門とお福を紹介する。）

藤藏　おゝさうか、さつき、口入れの者からお前さんのはなしを聞いて、泣く兒と地頭にやかたれねーと、實はにがにがしく思つて居た所さ。と云つて、年貢は上の掟た、いかに事情が事情でも、いゝわくですごしちやあ、國のみだれと云ふものだ。まあまあ、しつかり働いて、一日も早く、娘さんを樂にしてやるがいゝ。こんな稼業こそはしてゐるが、上から十手捕繩を許されてゐる公儀のお役をつとめる山形屋藤藏は、少しあ人の情も知つた男だ。己れが、ひき受けたと云つたからにやあ、親船に乘つた氣でゐるがいゝ。わる推摩の多い所を正直一途の虎藏の手にかゝつたなあ父さんの幸はせだつた。ひどい奴の手にかゝると、どんなところへ賣られるか分りやあしねー、家へ來たのも何かのえんだらう。安心して行くがいゝよ。

喜右衞門　はいはい、ありがたう御座いますだ。そんなら、どうぞよろしくお願ひ致しますだ！　が然し、さつきもお女將さんにお願ひ致しましたやうに、お金をおかへし致すまでは、どうぞ娘はこのまゝの體で居られますやうに……

藤藏　知れた事ぢやあねーか、今も云ふ通り、この藤藏は世の中の、不法をこらす役目なのだ！　こつちに念は入らねーかはりには、そつちの金が只の一日ちがつても、娘は店へ出すがいゝかね。

喜右衞門　はい、わしも、長岡古田村の喜右衞門で御座いますだ。そりやあ、異存は御座りましねー。

藤藏　よし、そんなら虎藏、證文に判を取つてくれ！

虎藏　そら父さん、もうこれで安心だ、さあ、ちよつくらこゝへ判をしなせい。（と證文を出す）

（喜右衞門いろいろあつて、とゞ證文に判をする。）

（藤藏、手文庫から、金を出して渡す。）

（喜右衛門、皆に禮を云ふ。

喜右衛門　そんなら旦那さま、いろ〳〵と申上げてい事も御座いますだが、國の方でも待つてゐますだから、このまゝすぐにまゐりますだ、皆さんよろしく御願ひ致しますだ……これ、お福よ、父さまはな、もう行くだよ。……世が世なら、年の行かねーお前にまで、こんな苦勞はさせねーのだが、何もかもいんねんとあきらめて、我慢して、くんろよ。父さまはな、お母アと二人して、一心不亂にかせいで、一日も早くわれ迎ひに來るだから、體大切にして、待つてゐてくんろよ、いゝか……いゝか。

お福　父さま、一年と云へば、これから先、永い〳〵月日を待たなければなんねーだ、わしもなア、神さまや佛さまに願かけるだ……都合がつき次第、一日も早く迎ひに來てくだせいよー、そして、お母アに、くれ〴〵も心配するでねーと云うて下せいまし……あんまり案じわづらつて、もしも病氣にでもなるやうな事でもあつたら、わしはどんなにかなしからう、他人樣の中さ寢て、戀しい戀しい故鄕の事さ、夢にばつかり見るだんべいが、只父さんやお母アが、無事で達者でゐる事を、杖とも柱とも思つて生きてるだから、父さまも、體大切にして下せいましよ。

喜右衛門　われも體をいとうだよ！　そしてなア、たとへどんな事があつても、どんな事があらうとも、女の道に外れた事はしてなんねーぞ、又どんな事があらうとも、一年經つまでは、お前の體はお前のものだ、賣り渡したと云ふでねーから、お店へ出る事は入らねーだよ……汗水たらしてかせぎためて、われを迎ひに來た時に、お前が娘でなくなつてゞもゐやうものなら、己れは死んでも死にきれねーだ！　なんの、己ら一人の體が牢へ這入つてすむ事なら、お前に苦勞はかけねーだが、御先祖樣にすまねーと思つて、こんな苦勞をさせるだア……かんにんしてくんろよ……おお、それ〳〵、これはなア、お母アがよこしたお守りだ！これをしつかり身につけて……

お福　あい……

喜右衛門　それからなア、これは水あたりをしねーやうに。

（と藥を渡す）

お福　あゝ父さまよ、わし、イヤと云ふぢやねーけど、そんなに親切に云はれると、このまゝ別れ度くねーだ……

喜右衛門　お福よ、己らの心は、なほつらいだよ！

（二人手を取つて泣く。）

虎藏　さあ〳〵、いつまで泣いても切りがない、もう日の暮れにも間もない事だ、父さん、早く行つたがいゝぜ。

藤藏　ほんとうだ！　いくら泣いても仕方がねー、今のなみだが後の笑ひだ！　涙をこぼすその手間で、早くかせ

いで迎ひに來てやりなさい！

喜右衞門　はい！　そんならもう參じませう、くどいやうでは御座りますが、皆さん御願ひ致しますだ！

藤藏　あゝ、たのまれねーでも大切なあづかりものだー決して案じる事はねいよ。

喜右衞門　はい、ありがたう御座りますだ。

藤藏　二三日の大雨で、川は水が大層出たといふから、まはり道でも、あの辻堂の方へ行くがいゝぜ……それから夜道はなほあぶねー、家のしるしの提灯を、父さんに一つかしてやんねー。

（乾兒、ぶら提灯をさげて來て喜右衞門に渡す。）

喜右衞門　何から何まで、親方さま、かたじけなう御座りますだ……

藤藏　なアに、情は人の爲ならずよ……氣をつけて行きねーよ。

（喜右衞門、涙にくれながら、とぼ／＼と歩み出して、ものにつまづいてばつたりたふれる。）

（お福かけ寄つて介抱し、二人手を取つて泣く。）

（道具まはる）

第二場　河のほとり

正面に蛇籠をつみ上げたる川あり。川の岸には、竹やぶ、芽出しの柳などあり、春の月で美しくかゞやく。上手よりに小さき辻堂あり。道具止まると、藤藏の乾兒、伊之助、身がるなこしらへにて、急いで登場。やゝおくれて、力藏、無様な風にて、息を切りながら登場。

力藏　おう、兄哥、兄哥、もう少しゆつくりあるいてくんねーな、己らあ、せいが切れてならねーよ。

伊之助　間拔け奴！　ぐづ／＼するのも時によりけりだ、だから己らあ手前はイヤだと云つたんだ、一體、何しに來たと思つてるんだ。

力藏　何しに來たかつて、只オイキタつてかけて來たんだやねーか。

伊之助　間拔め、何しにかけて來たと思ふと云ふんだよ。

力藏　そんな事は己らあ知るもんかい。みんな兄哥が、親分から云ひつかつて來たんぢやねーか。

伊之助　それぢや手前は何にも知らねーのか？

力藏　あゝ。

伊之助　そんなら云ふがな、己れ達は、仕事に來たんだぜ。

力藏　仕事つて何だ？

伊之助　仕事つて云ふのはな、己れ達が、かうして先廻りをして、さつきの百姓のぢゝいを待ち伏せて、あの百兩を取りけえすんだ。

力藏　何？　百姓を待ちぶせて、百兩を取り返へす……

伊之助　さうよ！

力藏　だつて、あの百兩は、あのきれいな娘をかたに親分が貸してやつた金ぢやねーか……それを取り返へすなんて、そんなわるい事は出來ねーや。

伊之助　出來なくつても、しなきやあならねーんだ！　手前はまだ知るめえがな、親分は、それが商賣なんだ。

力藏　おつそろしいわるい商賣だな！　そりやあいけねー、そんな事はいけねー、己らあさつき、あのきれいな娘が泣いてるのを見て、もう胸が一杯になつちやつて、一歩か二歩ですむことなら、己らあ立てかへても助けてやりていと思つたが、百兩と聞いて、少し足りねーと思つてあきらめたんだ！　あんな娘が女郎になるさへ可哀想だと思ふんだ、それを又、待ち伏せして金を取るなんて、そんな事をしたら、あの百姓は兄哥どうなると思ふんだ。

伊之助　ヘン、人の事なんぞどうならうと、そんな事考へてちやあ、とてもこの世の中は渡れねーのよ。

力藏　渡られなけりあ、あともどりをすりあいゝ、己らあそんな事はイヤだ。

伊之助　イヤでも應でも親分のいひつけだ！　うまく行きア褒美が出るんだ、默つて云ふ通りになりやあいゝんだ。

力藏　己らあイヤだ！

伊之助　イヤだ？

力藏　あゝイヤだ！

伊之助　よし、力藏、手前、これでもイヤだとぬかすのか……（と、刀を拔いておどかす）

力藏　あゝ……兄哥、お前は、己れをころすのか……

伊之助　云ふ事さへ聞けば、ころすんぢやあねー、さあ力藏、云ふ事を聞くか。

力藏　あゝ驚いた！　聞くよ、きくよ！　けど、一體どうすりあいゝんだ。

伊之助　仕事はみんな己れが敎へてやるが、もし途中でやりそこなうと、此度こそは首が飛ぶぞ……（と耳に口をよせる力藏驚く）

（と此の時、下手から、人の來かゝる氣配に、二人、示し合はして辻堂のかげにかくれる。）

（と百姓喜右衛門、とぼ／＼と登場。）

（よき所に來かゝる時、辻堂のかげから、力藏つか／＼と出て。喜右衛門の行く手をさへぎる。）

（いろ／＼あつて喜右衛門、力藏をよけて行かうとする。力藏は常に、辻堂の後ろを見ながら、命ぜられるまゝに行動する。）

力藏　（立ちふさがつて）待て！

喜右衛門　はい／＼、何ぞ御用で御座りますか……

力藏　用はねー。

喜右衞門　左樣なら、道をいそぐもので御座りますだ。どうか、お通しなすつて下さいまし。

力藏　さうか……

（と、どいてやる。と、伊之助、かげでいろ〳〵と命ずる。力藏、恐縮したと云ふ風に、よわりながら喜右衞門の首のさい布の紐に手をかける。喜右衞門びつくりして逃げやうとする。）

（いろ〳〵あつてとゞ力藏、喜右衞門につきとばされて倒れる。その間に喜右衞門走り去る。力藏、ぼんやりしてゐると、伊之助出ておどかす。力藏、仕方なしに喜右衞門の後に走る。）

（しばらくして、力藏手に財布を持つて、あたふたと登場。眞靑になつてぶる〳〵ふるへて居る所へ伊之助出て「力藏！」と云ふ。）

（力藏更に驚く、伊之助財布を受取り力藏を連れて立ち去る。）

（と、喜右衞門、氣狂のやうに走り出て「どろぼう〳〵」と呼びながら、あちこちとたづねまはり、とゞ、誰も居ないのでがつかりしてべつたりと坐る。）

（やゝしばらくして喜右衞門恐ろしい失望のあまり、ふと心に決する所あつて、）

喜右衞門　何から何まで、みんな佛事だ……ばあさまよ、お福よ！　南無阿彌陀佛……

（と石をひろつて袂に入れ、ぢつと川の面を眺、合掌して飛び込まうとする。と、辻堂の戸をあけて、國定忠次ぢつとこの樣を見て、つか〳〵と出て、いきなり喜右衞門を捕へ、無理やりにひき据ゑる。喜右衞門更に夢を見たと言ふ風な思ひ入れ。忠次ぢつと二人のもののゝ去つた方を見込む。）

（道具まはる）

第三場　元の山形屋

道具止まると藤藏初め大勢の乾兒のもの居ならび、力藏と伊之助は藤藏から盃をもらつて酒を呑んで居る。

藤藏　力、何を眞靑な顏をしてゐるんだ？　イクヂなしめ！　そんな事でどうなるんだ！　信州一の山形屋の身内に、手前のやうた弱蟲がゐたと言はれちやあ、末代までの物笑ひだ。もつと強くなれ！　さあ、もつと酒をのんで元氣を出せ！

（力藏酒を呑む。）

藤藏　まだ顫へてゐるのか？　おい、誰か肴中でも一つどやしてやれ。

（と云ふ時、奥の方でお福の泣き叫ぶ聲がする。力藏

びつくりして逃げやうとする。所へお福しどろもどろ
になつて登場。）

藤藏　何だ〳〵何の騒ぎだ。

お福　旦那さま。わし、さつきも父さまが云ふやうに、お金のかたに、一年の間此の體をあづけるとは言ひましたが、父さまが迎ひに來るまで、何にもしねーと云ふ約束を……今からつとめに出ろ、店へ出ろ、お客を取れとせめたてゝ、わしがそんな筈でねー、そんな約束でねーと云ひますと、小母さん達が、ぶつたり、けつたり、いぢめるだ！　旦那さまあ何もかも御承知だ。そんな約束でねーちう事を、皆の前さ云つて下せいまし！　それでねーと、わし、どないになるか分んねーで御座いますだ！　旦那さま、御願ひで御座いますだ！

（と言ふ所へやりてお熊登場。）

お熊　こんな所へ逃げて來やがつたなー。

（と捕へようとする。お福逃げながら、主人のそばに行つて、助けを乞ふ。）

（主人いきなりつきはなす。）

藤藏　お福！　子供でもあるめい！　よく聞け！　娘をかたに百兩の金が要る、貸してやる、一年の間娘をあづかる……金さへ返せば娘はかへす……お前の方の都合はそれでいゝだらうが、そんなあめい人間が、この世の中にゐると思ふか。元々返せるあてはねー金だ、お前の體は買つたものだ！　怎しようとおれの勝手だ！

お福　そんなら、やつぱり、父さまとの約束はみんな噓であつたゞか。

藤藏　うそも本當もねー、云ふ事をきゝや樂になるんだ！　かまはねー連れて行け！

お熊　さあ、旦那さまもあの通りだ！　しぶとくすると、ひどい目を見せるぞ！

（と、なぐる。）

（お福泣き叫ぶ、その度に力藏たまらな想にして、とどつか〳〵と前に進み出て、）

力藏　親分、私は此金はお返へし申しやす……どうも心がとがめてなりませんから、こりやお返へし申しますから、その娘さんを、あんまりいぢめねーで御くんなせいまし、御願ひで御座います……おうみんな親分にお願ひして何とか助けてやつてくんねーな。

伊之助　馬鹿野郎！山形屋一家にはな、後生氣は大禁物だ、足りねーくせになまを云ふと手前から先へひつぱたくぞ！

力藏　ひつぱたいてくんねー、ひつぱたいてくんねー、おれをひつぱたいて、その娘さんを許してやつてくんねー、己らあお前達にぶたれねーでも、さつきから神さまや佛

さまが、己らの眼の前へちら〳〵〳〵〳〵あらはれて、力藏力藏つて、さんざひつぱたかれてるんだ！　さあ、ぶつてくれ！　なぐつてくれ！

藤藏　よし、のぞみ通り、こらしてやれ。

（他の乾兒、力藏に向つて一同立ちかゝる。本能的に、お福力藏をかばうやうにする。所へ外にて「御免下せいまし」と云ふ。藤藏一同に眼くばせする。とお熊はお福を伴之助は力藏を連れて退場。權次取り次ぎに出る。）

權次　へい。どなた様で御座います。

忠次　（田舍者に化けて）わしははあ甲州郡内矢村の彥六ちうもんでございます。親分様にちよつくら御目通りがしていと思つてやつてめいりましたゞ、どうぞ御取り次ぎを願ひますだ！

（權次その通り取り次ぐ。）

藤藏　矢村の彥六だ……そんな人は知らねーがとにかくも此所へ通せ！

（權次その通りに言ふ。）

忠次　では會つて下せいますだか、はあそんなら、ちよつくら上らしてもらひますべい……

（と座敷に通る。）

忠次　はあ、こりや親分さまで御座いますだか、わしは甲州郡内……

藤藏　今きゝました！　矢村の彥六さんと云ふのださうだが、何の用で御出なすつたね。

忠次　實はわしの伯父さまの事で折入つて御願ひしてい事があつて上りましたゞが……

藤藏　お前さんの伯父さんと云ひなさると……？

忠次　あんたは、よう知つてる人だ……（と奧に向つて）伯父様よ、さあ此所さ這入らつせいよ。

（と言ふと、以前の喜右衞門が這入つて來る。一同ギツクリする。）

藤藏　何だ、お前さんは喜右衞門さんぢやないか。

忠次　さうで御座いますよ。これはわしの伯父貴で御座います。

藤藏　それで、用と云ふのは。

忠次　はなせば長い事で御座いますだが！　まつぴら御免下せいましよ。（とうちつくろいて）實はなう、さつきわしが、あの川の所さ歩いてめいりますと、一人の老寄りが石をひろつて袂に入れて、ばあさまよ、むすめよ、先立つ罪は許るしてくんろ、やがてあの世で會ふだからと、水の中へあはや飛び込まうとするだで、わしはいきなり抱き止めて顏を見ると、此の伯父貴た。妙な所で會ふのも可怪しいが、何が悲しくつて死なしやるだ？　死

んで花實がさくでもねー、怎したわけか云つて下せいと云ふとな、年貢の金につまつて娘をかたに百兩の金を借りた所が、途中でわるものに會つて金を取られて仕舞つたゞとさめ〴〵と泣きますだ。泣いたとて仕方がねーその借りた家は何處だときくと、こちらさまだと云ひますだ。練堂の山形屋さんなら昔にひゞいた親分さまで、ことに話の分るがたゞと云ふ事は、甲州までもひゞいて居る、そんならわしが一つたのんで見て、きつとらち明けてもらつてやるだから、安心して來なさるがいゝだと、只今連れてあいりましたゞよ。まことにはア濟みましねーが、此の伯父さんの命助けて無事に國さかへれるやうにしてやつて下せいまし、御願ひで御座いますだ。

藤藏　と云ふと怎すれば、いゝのだね。

忠次　むづかしい事でねー、もう一度百兩貸してやつて御くんなせいまし。

藤藏　おい〳〵彦六さん、おまへさん何を夢の樣な事を云つて居るんだね、口でこそ百兩と云ふが、その百兩も元元そんないゝかげんな譯で貸したんぢやあねー、事情を聞いて氣の毒に思つて、出せねー所を無理に出してやつた金だ！　それを勝手に途中で取られてしまつて、又ぞろ己れに出せと云ふなあ、少し道が違つて居やしねーか。なる程そりあ困るだらうが、山形屋藤藏、金の生る木は持つちやあゐねー、そんた馬鹿な事は相談にのれるものぢやねー、お前さんも伯父甥なら、何とか他の事で伯父さんを助けてやつたがいゝ、己れの方ぢやあ御免蒙らア。

忠次　フヽン。（と笑ふ）

藤藏　何が可笑しいんだ。

忠次　可笑しいだよ。己らあはア、己らが、こんなに云はねー前に、百兩の金を出して呉れるだらうと思つたゞよ。なあ旦那、百兩出した方がよかつぺい。又その方が、お前さんの爲でねーかと思ふだよ。

藤藏　何だと？

忠次　ハヽヽヽ、餘程蟲の居所がわるいと見えて、よく怒るだね、まあ怒らつしやらずに、己らの云ふ事を聞かつしやい。ある所にの、お爲ごかしでよろこばして、思ひの外の金を持たしてかへしたあと、乾兒のものを二人、そのあとを逐つかけさして、どろぼうのやうにうばひ取らして、乾兒に少し分けてやる手を、己らあちやんと知つてゐるだ！　お前さんは、まさかにそんな事はあるめいが、まあ此所の所は百兩出したが得だんべいよ。

藤藏　何だと、今云つた事をもう一度云つて見ろ。

忠次　何遍でも云つて見るだ、お爲ごかしに、餘計な金を持たしてかへし……

藤藏　だまれ！　默れ！　他の家でそんな事を云つたら通

るかも知れねーがな、權堂の山形屋藤藏の家へ來ては、そのたわ言は通らねーんだ。少し見世の出し所がちがふだらう。ゆすりかたりを取りしまつて、ひんなぐるのが己れの役だ！　ふざけやがると承知しねーぞ！

忠次　えらく強いねー。

藤藏　何だと。

忠次　百兩出した方が、徳だらうと思ふになあ。

藤藏　よし、みんなこいつをひんなぐれ！

（一同十手を持つて「御用だ！」と打つてかゝる。）

忠次　やかましいやい！

（一同たじろぐ。）

忠次　この野郎、矢村の彦六ぢや無事に百兩出さねー氣だな、よしそんなら上州佐位郡國定忠次が、手前から百兩取らねー中はびん乏ゆるぎもしねーからさう思へ、さあ突き出すならつき出して見ろ！　御用の聲は手前にかゝるのが當然だ。やい藤藏、見損つたか！　さあ、百兩出さなきやあ己れが此の家を連雀をつけてしつちよつて行くから左樣思へ！　さあ思ふやうにして見ろい！　藤藏何をぐづ／＼してやがるんだ！

藤藏　（恭々しく手をついて）親分、誠に御見外れ申しました！　存ぜぬ事とて失禮の段は藤藏幾重にも御わびを申します。どうぞ御勘辨を願ひます。

忠次　ハヽヽヽ、御勘辨も何もねーが、話が分りやそれでいゝんだ。とにかく此の喜右衛門さんは金が要るんだ、ちよいと百兩出してくんねー。

藤藏　はい、……では親分のお顔を立てまして出しにくい所では御座いますが……

忠次　出しにくからうさナ。

藤藏　えー？

忠次　まあいゝ、云ひわけはあづかりだ！　さあ胴卷ぐるみ出してやれ。

（藤藏金を出す。）

忠次　父さん、さつき取られたなあ、この金だらう？

藤藏　親分御冗談を……

忠次　さうだ／＼恁まで云はれてはい私が泥棒ですたア、此の陰證官の手前云はれめい。さうよ／＼お前は何にも知らねーでみんな乾兒がした事さ、それでいゝ……そこで此度は、己れの注文だが、酒を一杯のましてくれ……

（藤藏それと命ずる。）

（直ちに奥より酒の道具がはこばれる。おれんも出て來る。）

おれん　國定の親分樣で御座いますか、只今は、主人がとんだ失禮を致しまして、何ともおわびの申し上げやうが御座いません……どうぞ何も御座いませんがお一口おすご

し下さいまし。

忠次　やあ、こりあとんだ御手數でした、がよもや、酒の中へ、しびれ藥が這入つてるなんて事ぢやあるめいな。

藤藏　山形屋藤藏……そこまでけちでも御座いません。何卒御安心下さいまし。

忠次　ハ、、、、あんまり安心も出來ねーな。時にさかなはきどり酌はたぼと云ふが、とてもの事に喜右衞門さんの娘さんを此所へ鳥渡連れて來てくれ！

（藤藏それを命ずる。）

（やがてお福登場。）

お福　あれ、お父さん！（と、びつくりする）

（二人思入れ。）

忠次　うん、いゝ女だ！　娘の心を察して見りやアこのまゝ置くのは可哀想だ！　己らあ滅法氣に入つた。藤藏己らあ此の娘を身受けしていが、お前が百兩現金で出したんだから、己れは一つ百五十兩で身受けした！

藤藏　いえ、百兩で結構で御座います。

忠次　何、百五十兩で身受けするが、己れも旅先だ。手つけ丈でまけてくれ！

藤藏　へい。もういかやうにも思召す通りに願ひまする……

……

忠次　よし、そんなら手つけた。（と二歩投げ出す）

藤藏　これは……

忠次　百五十兩の手つけの二歩だ！　これぢやあ不足だと云ふのかね。

藤藏　決して……

忠次　そんなら、受取りを一本書け、そしてお福の年期證文たつた今出してくれ……藤藏、不足があるなら、さつさと言へ、男同志のかけあひだ！　イヤならイヤでいゝんだぜ！

（藤藏だまつて證文を渡す。）

（忠次見てニッコリ、ビリ／＼にひき裂き。）

忠次　これですつかり胸が晴れた！　父さんお福さん、さあそこまで送らう、支度しねー。

（お福喜右衞門支度をする。）

忠次　いゝか……ぢやあ行かう……藤藏、えらい厄介になつたなあ……意地がわるいと己れを呪はずに自分の心を恨むがいゝぜ！

（とよろしくあつて立ち去る。）

（藤藏皆の去る後姿を、ぢつと見送つて無念やる方なき思ひ入れ。）

（女房おれんのそつと出す刀を取つて、我知らず身がまへる。）

（乾兒等キッとなる。）

第四場　堤の花

櫻の花の咲き亂れたる堤。

道具止まると、忠次、喜右衞門、お福連れ立つて登場。

忠次　もう大抵大丈夫だ！　いつまで行つてもきりもなし、己れもいそがしい體だから、そんなら此所で、別れるとしよう……これから先、長岡まではかなりの道だ。氣をつけて行きねーよ。云ふまでもねーが、たとへこれからどんな事があらうと、二度と娘を女郎に賣らうなんて考へは起しなさんなよ。それからお福さんも親孝行をして、仲むつまじくかせぐがいゝぜ。

喜右衞門　何から何まで、御禮の申しやうも御座りません！　御恩は死んでも忘れません！……どうぞ御體を大切に……

お福　親分さま。ありがたう御座います。長岡へお出の時はどうぞ御訪ねなすつて下せいまし。みんなで御待ち申して居りますから……

忠次　うん！　晴れた氣持でたづねるか、お前の家へ逃げ込むかの二つだ！　緣があつたら又會はうよ。

（と互ひに、なごり惜し氣に別れ去る。）

（忠次、一人思ひ入れ。）

（入り相の鐘。）

（日やう／＼とくれ、夜の暗の中に櫻の花が白くうかぶ。忠次櫻を見上げてゐる、と、身支度をした藤藏の乾兒等、大勢一度に、忠次にかゝる。）

（落花の中に、はげしき立ちまはり、とゞ忠次一人にて巧みに、全部のものをなぎたふし安心と疲れとで、よろ／＼と櫻の幹によりかゝる。）

（落花しきりに降り來り、月光物凄く刃を照らす。）

―靜かに　幕―

國定忠次旅路の秋（五場）

第一場　驛路の秋

秋風落莫、自ら人生行路の秋を思はせるやうなさびしい驛路の茶屋。茶屋の上手によせて、黄金色の葉をつけた大きな銀杏の立樹、その根方に小さい形ばかりの祠があつて、誰れが、何の願をかけたのであるか、古びた繪馬が二三枚、紙よりに束ねた髪の毛などが、根からふいた銀杏の細い若木の幹に結びつけてある。下手はすつと秋の野を見渡し、遠く續く山々の紫その上の空に、はかない根なし雲がぽつかりと浮いて居る。近くは、一體に薄原で、尾花が風に戰いで見える。尾花の間から、ところどころに黄櫨の葉が紅く光つて、何處となく渡り鳥の聲がする。茶屋のそばには、苔の青い井戸があつて、そこから清水が湧き出て居る。

幕あく。

と、茶屋の床几に、藥賣りと、人形使ひの旅藝人と、旅の小間物屋とが腰かけて居る。

茶屋の亭主　お客さま、お茶のあついのを御入れ致しませうか。

小間物屋　イヤありがたう、が、もうそろそろ出かける事にしよう、どうもかう晴れた秋の日に照らされて居ると、いつまでたつても歩く氣になれやしない。秋と云ふ奴はさびしいが、又吾々のやうな旅商人にやあ、何とも云はれない床しい味があるものだ。

藥賣り　本當にさうですね、年が年中諸國をあるいて居る中に、秋位自分の事をしみじみと考へさせられる時はありませんよ――花がさいても雪がふつても、さのみあらたまつて怎つて事もありませんが、すゝきを見たり草原の露をふんだりすると、あゝ又秋が來た、まごまごしちやあ居られないぞと、今更らしくびつくりしますよ。

小間物屋　全くだね、同じ風でも、秋風は、そつと袖口なんかゝら這入つて來て、いきなり人間の心を吹くやうだね。

人形使ひ　うまい事を仰有いますな、――私なんかも、毎日こんな子供だましの人形を踊らして居て、歌ふ文句ももうなれすぎる位になつて居ますが、この頃の時候になると、「ウミの父上、母さまは、何處にどうして御座らうぞ……」つて所へ來ると、何だかかう胸が一杯になつて、聞いて居やうが居まいが、一生懸命うまく歌つてやらう

と云ふ氣になりますよ。

小間物屋　お前さんは故鄕は何處だね。

人形使ひ　わしは、明石の生れです。

小間物屋　なるほど、明石から此の上州まで、かなり長い旅をして來たものだね、藥屋さんは富山かね？

藥賣り　左樣です。旦那は――？

小間物屋　わしは江戸だ……。

人形使ひ　江戸はよろしいさうですな、わしも一度は江戸の藝人になりたいと思ひましたが……。

藥賣り　わしは、これから江戸へ行かうと思つて居ます。

人形使ひ　羨ましいなア、……それつてば、お前さんの大切さうに持つて居なさる栗の枝は、やつぱり何かの藥にでもなるのですか。

藥賣り　なアに、こりあ今朝道ばたの林を見ると、この栗が生つて居た。木の下の草には露がじと〳〵に下りて居た。百舌鳥が鳴いて居た――私は、ふいと子供の時の事を考へて、この枝を折つて來たのさ。

人形使ひ　ウーム、子供の時の事か……子供の時分はなつかしいねー、何時になつたら、あんなに落つく事が出來るのやら。

藥賣り　本當に、わしもかうして毎日諸國へ藥を賣りあるいて居るものゝ、いつか自分で自分の藥の御厄介になる時があるだらうと思ふと心細い事がある。思ふなら人間の多いまんなかで思ひたい、もし山の奧でたつた一人病氣にでもなかつたらば、どんなにさびしいだらうと思ひますよ。

小間物屋　「故鄕へ廻る六部は氣の弱り」と云ふ川柳があるが、やつぱりそんな心を云つたんだね。

（急に百舌鳥の聲がする。）

小間物屋　さあ、御別れしませう……。

人形使ひ　氣をつけていらつしやい。

藥賣り　さよなら……。

（三人、茶屋の前に立つて、別れ、上手、下手、花道へ這入る。）

（遠く馬の鈴の音。）

（しばらくして、金比羅まゐりの風をして、背中に天狗の面を背負つた國定忠次深くあみ笠に顏をかくして登場。茶屋の奧の方に休む。）

（反對の方から、一人の田舍娘おきよがさびし想にやつて來る。）

茶屋の亭主　おゝ、おきよ坊、今頃何處へ行つて來たね。

おきよ　村の人たちが、もう一度お上へ御願ひを出すだから賣印を持つてお寺へ集まれと云つて來たゞが、父さんは此間中の苦勞で、もうどつと床について御座るで、私

が代りに行つて來ましたよ。

茶屋の亭主　さうか、そりあまあ御苦勞だつたな、一心は岩をも通すと云ふから、此度こそは、いかに分らない鬼のやうな代官でも、何とかなさけをかけて下さるだらう……。

おきよ　此度こそは、此度こそはと、もう何べんとなく願つて出ても、何の御慈悲も出ないのは、此の岩神の百姓は、みんな死なうとお上ではかまはないのだらう、百姓なんぞは人間とは思つて居ないのだらうつて、やつきとなつた人もあつたよが、泣く兒と地頭で仕方ねーだ。

茶屋の亭主　困つたゞな！　上に立つものがめくらでは、百姓共は難儀な事――だが、まあ、お茶でも一杯のんで行かねーか。

おきよ　此間から、油を買ふ事が出來ねーで、日がくれたらもう眞暗だから、早くかへつて仕事をしなけりあならねーだ。

茶屋の亭主　油を買ふ錢もなくなつたか、あゝ氣の毒にな、そんならわしの家にまだ買ひ置きが少しあるから持つて行きなさるがいゝ。

おきよ　それでは何だか濟まないから。

茶屋の亭主　何の、困る時にはお互だ……もしお客さま、おきゝのやうで御座いますから、鳥渡そこまで行つてまゐります、どうかしばらく御待ち下さいまし。

忠次　（奥の方で）　あゝ行つて來なさるがいゝ、が、わしは此の土地ははじめてだが、聞けば何か村にあつたのかね。

茶屋の亭主　はい、御客さま、初めてなら御存じもありますまいが、こゝは、この道をまつすぐに、相生から國定村へとまゐる岩神と申す所で御座いますが、あすこに見えます鹿澤山は、御案内の太田の銅山つゞきで、只でさへ、そこから流れ出る銅氣の爲に、此の邊一體の田はみんなその害を蒙ります處へ、今年はまあ、怎した事か近年にない日でりつゞきで、恐ろしい饑饉になつて仕舞ひました！　そこで、村一同は、何とかしのぎのつきますやうにと、いろ〳〵と御上へ御願ひして、お慈悲の御沙汰を待つて居りました處が、大きな聲では申されませんが、代官の松井軍兵衛と申す人は、それは〳〵非義非道な方で、百姓共が怎ならうと、そんな事にはおかまひなしで、妾を置くやら不正をするやら、もう此の村の人たちは、同じ月日の下に生れながら、まるで地獄に居るやうな苦しみをして居るので御座います！――誰れかえらい方が出て、世直しをして下さらなければ、生きてる空は御座いません！

（と悲し想にはなしをして居る所へ、百姓六藏、その

妻お夏、それに從つて來た村の男女四五人がやつて來て。)

六藏　(茶亭に)とつさま、永い間いろ〳〵と御厄介になりましたが、もう怎にも恁にもやりきれなくなりました。このまゝ夫婦してなげいて居ても明日のたべものにも困るだから何もかもあきらめて、無けなしの道具を賣りはらつて、一時夫婦別れをして、わしは江戸へ稼ぎに行き、お夏は桐生の町へ奉公に出る事にしましたゞ！　又何時になつて、此の村へかへつて來られるか分りません、どうか體を大切にして下さい！　桐生と云へば近い所だから、どうか時折りはお夏の事も案じてやつて下さいまし。

茶屋の亭主　そんなら、お前達はもうそんな覺悟をきめたのか？

お夏　生れ故郷をすてるのは、死ぬより悲しい事だけれど、かつえ死もならねーから……しばらく死んだ氣で稼ぐべいと……

六藏　御先祖さまの御位牌丈をのこして、殘らず金に代へましたゞ、こんな事になるのも、あの松井の代官に血も淚も無いからだ……。

村人甲　ほんとうにさうだ！　今日は六藏どんを送つて行く身が、明日は我身の事かも知れねー、今日の願書がきかれなけりあ、岩神村はみんな死なゝきやあならねーだ……どうか、達者で居てくんなよ。

六藏　お前もな……。

村の女甲　お夏さん、あんまりくよ〳〵するでねー、氣を大きく持つて居て下さい。わるい事ばかりもあるまいから、今にきつと二人で笑ふ事があらうよ。

六藏　そんならお夏、己らあこれから別れるだぞ！　體を大切にしてくれよ！

お夏　お前も、氣をつけて、江戸は恐ろしい所だと云ふから賴みましたよ！

六藏　お前の心持は、よく分つて居るから、丈夫でさへ居れば、又きつと會はれるからなア。

お夏　あの、お守は持つたかね。

六藏　お守か……お夏、己れはお前の志をお守だと思つて居るが、その他には、神も佛もなくなつたぞ！

お夏　あゝ、行き度くない！　殘念だ。

六藏　己れも何で行きたからうよ！

村人乙　察しるだぞ！

(と一同泣く。)

(所へ、馬の鈴の音いさましく、馬に千両箱を三ッ積んで、その上に腕利きの飛脚鬼の重兵衞をのせ、馬子がひいて出て來る。一同茶屋に待つて居てそれをやりすごす。)

馬子　もし／＼、これから先は休む所もありませんが、ここで一ぷくなすつたら怎です。

重兵衛　とかくに休みたがる奴だな、此馬の背の三千兩は、江戸瀬戸物町の島屋から、桐生の佐羽吉へ送る爲替の金だ！　明日の朝までに屆かなければ二七の市の相場が狂はうと云ふ大切な金ぢやあねーか、それだから、夜晝なしに急いで居るので、ちよろつかな飛脚ぢやあ屆けられねーから、この已れさまが宰領だ！　まあ、ついたら酒手はいくらでもやる、急げ、急げ、此の街道の馬子をして居て鬼の重兵衛を知らねーか。

馬子　へい！

重兵衛　へいぢやあねー、早く行きねー。

馬子　それぢやあ、このまゝ、夜道をかけて行くんですか。

重兵衛　うるせい奴だな、えゝ仕方がねー、そんならこゝで一杯のましてやらう、その代り此の先へ行つて苦情がましい事を吐かすと承知しねーぞ！

馬子　へい、なアに、さうはなしが分つて下されば苦情なんざあ申しません。酒の勢さへあれば、夜道はおろか、地獄まゐりのお供でも致します。

重兵衛　ハ、、、おい茶屋の亭主、酒があるだらう、酒をこゝへ持つて來い。

茶屋の亭主　旦那さま、御承知の通りの大きゝんで、村のものは、食ふものにさへ事かきますので、煙草もやめ酒もやめて居りますので……

重兵衛　ハ、、まあいゝや、そのはなしは表むきだ、のむ酒はなくつても、賣る酒はあるだらう、さあ金は前渡でくれてやる、あるだけの酒を持つて來い。ぐづ／＼云ふと已れの方で取りに行くぞ！

（亭主仕方なしに一升樽の酒を出す。）

重兵衛　よし來た！　その樽ごと出しねー（馬の上でのみ）あゝいゝ心持だ！

（他の酒を馬子がのむ。）

茶屋の亭主　然し、御飛脚、どうか氣をつけておいで下さいまし、世の中がめちやくちやになつて居ります時は、善人も惡人もみんな自分が大切で御座います。大金を持つて夜道の旅は……。

重兵衛　なアに案じる事はねーさ、此の重兵衛は、生れてからこれまで一度も恐ろしい目つて奴に會つた事のねー男だ、一度位は、キモッ玉をつぶして見ていと思ふのさ。

茶屋の亭主　然し旦那さま……途中でもしもの事でもあつては……。

重兵衛　心配は入らねー事だ、久しく殺された事がねー、一生に一度は殺されても見ていと思ふのよ！

茶屋の亭主　あくたれ口も時によります。

重兵衛　ハヽヽヽ、罰が當ると案じるのか、バチと云ふやつにも、一度はお目にかゝりていのさ――さあ飲んだら行かうぜ。

（と馬子をうながし、大聲をあげて、）

〽笠を片手に、皆さまさらば――いかいお世話になりました……。

（と馬子唄をうたひ、上氣げんで去る。）

茶屋の亭主　あゝ、ある所にはあるものだ！　桐生の二七の市の相場が狂つても、人の命にかゝはるかも知れないが、商人の心配は、金で爭ふ金の事だ！　三千兩の金があれば、幾千人の百姓の命が助かるか分らない！

六藏　愚痴を云つても仕方がない！　そんならお夏。

お夏　もう行きなさるか……。

（二人取りすがつて別れを惜しむ。）

（しばらくして、）

六藏　誰れだ！　石を投げつけたのは誰れだ！　未練と云ふか知らねーが、わしに取つては大切な時だ！　色や戀の涙ぢやないぞ！　あゝいてい！

（と下を見て、小判をひろひ。）

六藏　やあ、こりあ小判だ！

（一同、しばらく沈默。）

（忠次奥からつか／＼と出て、）

忠次　さつきからの悲しいはなし、わしは貰ひなきをして居たのだ！　此の世の中には、神も佛も無いかも知らないが、人を助ける情だけは、己れの胸にはあふれて居る！　もう江戸へ行く事も、桐生へ行く事もねー、夫婦仲よく暮らしてくんねー。

六藏　ありがたう御座います……。

お夏　うれしう御座います……。

六藏　お禮は言葉では申されません、どこのお方で御座いますか、どうぞ、御名前を御きかせ下さいまし。

お夏　お願ひで御座います。

忠次　名前を名乘る程のものでもねー、同じ上州の土に生れ、永い間の旅の空、秋の風が身にしみて故郷へかへつた旅人だ！――もう何も案じるな、岩神村の稻は枯れても、明日は黄金の花が咲くぞ！

（と忠次、ぢつと、飛脚の去つた方を見る。）

（秋の風。小鳥の聲。）

（陽が心持かげつて來る。）

――幕――

第二場　すゝきのはら

舞臺上手から下手にかけ一面の薄野原。その他何にも無い。正面、まつ黒の中に、細い月が光つて居る。

幕あく

と、前場の飛脚と千兩箱をのせた馬が、鈴をならしながらやつて來る。手に小田原提灯を下げた馬子は綱をゆるめてあるいて居る。舞臺のよき所へかゝると、忠次が薄の中からあらはれて。

忠次　待て！

（と云ふ。）

（馬子は「そら出た！」と云つて、宙をとんで逃げて仕舞ふ。）

重兵衛　待てたあ何だ！

忠次　諸人の難儀を救ふ爲に、その三千兩をかりうけたぞ！

重兵衛　何だと？　他のものなら知らねー事この鬼の重兵衛がついてるからは、そんなおどしにのるやうな事はねー、生意氣な事をして後悔するな――馬の上には鬼がのつてるんだぞ。

忠次　鬼でも蛇でもそんなものに用はねー、何でもいゝから置いて行け！

重兵衛　べらぼうめ！　此の街道で己れの名を知らねーやうなものは、もぐりの追剝だ！　怪我をしねーうちにひつこみあがれ！

忠次　己れは追剝でもぬすつとでもねー、天下の難儀を見るに見かねて、佐羽吉から三千兩かりるのだ！　桐生の町の二七の市で、相場が狂ふか知らねーが、幾千人の大切な命にはかへられねー。何にも云はずに渡して行け！

重兵衛　何を此の野郎！

（と云ひさま馬から下りて忠次にかゝる。忠次重兵衛の利き腕をねぢ上げ。）

忠次　靜かにしろ！　ほこりが立たア。

重兵衛　うぬ！

（と又かゝる。）

忠次　えゝ、聞きわけのわるい奴だな。

重兵衛　當り前だ！　手前見ていな素人にむざ〳〵金を取られちやあ、日本中の飛脚仲間の信用にかゝはるんだ！　命にかけても渡さねえから左樣思へ！

忠次　なる程感心ないゝ草だ！　それ丈譯が分るなら、己れも手前の顏を立てゝ、佐羽吉へ證文を一本書いてやらう、それを持つておとなしく行くがいゝ、己れの名を云へば、きつと承知するだらうから……

重兵衛　大きな事をぬかしあがるが、手前は一體何處の誰れだー

忠次　なんでもいゝ！（と、矢立を出して、すら〳〵と書

きしたゝめ）これを持つて行くがいゝ……

重兵衛（手紙を見て）何？ 國定忠次……（と腰をぬかして仕舞ふ）

忠次 さあ、文句は無からう、渡して行け！ ついでに金を背中へのせてくれ！

（重兵衛、千兩箱をくゝつて、忠次の背中にのせてやる。）

忠次 （立ち上つて）あゝ、大きに御苦勞だつた！ これで人がよろこぶのだ！

（と少しあるいて。）

忠次 千兩箱も重いが、己れの肩に荷なつて居る仕事はこの百倍も重いんだ！——そこに殘した天狗の面はお前にやるから持つて行きね、鬼が天狗を背負つて行けば、大抵夜道は大丈夫だ——氣をつけねーよ！

（と、ゆつたりとあるいて行く。）

——幕——

第三場　ある尼寺

庵室と云ふ感じのかやぶきの一とかまへ、正面に佛壇をしつらへ、かすかに灯がともつて居る。

庵のまはりにはいろ／＼の秋草が一杯にさき亂れ、その中に、少し葉を殘した桐の木が立つて居る。

夜のふけた心。

幕あく

としばらくして、千兩箱を背負つた忠次が奥の秋草の中から出て來る。そして、一夜の宿をかりるに丁度いい庵室があつたと云ふ思ひ入れて、その緣に休んで、やゝ久しくして、「御頼み申します！」と云ふ。

二度、三度、訪ふ。と、奥の方から、十七八の美しい尼僧がすみぞめの衣を着て靜かに登場。

忠次の姿は、常の旅人とは全く異つて居るが、別に驚いた様子もなく、何の用かとたづねる。

忠次 夜ふけて宿にとまりはぐれたもので御座います、どうか一夜の宿を御かし下さるやうに御願ひ致します。

尼 それは嘸御こまりで御座いませう、折あしく、御庵主様は、程遠いところの村のお通夜にまゐられましたが、人の難儀を御たすけ致すが出家の役で御座います。どうぞ御遠慮なく御上りなすつて下さいまし。

忠次 こりあありがたう御座いました。そんなら此のお寺に、あなた御一人で御留守をなさつておいでゝ御座いますか。

尼 はい、さうで御座います。

忠次 見ればお年も若いのに……よくまあ、寂しいとは御思ひになりませんね、こんな夜ふけに戸もたてずに……

尼　浮世を離れた出家の身には、月花が友で御座ります、此の庵室は雨戸などはたてませぬ……。

忠次　（ぢつと思ひ入れ）　なるほどなア、見るもきたねー人間の世界にもこんな靜かな世界もあるのだ。永い間の旅をして、起きるから寢る時まで、つきまとつた人間出入り。遂ぞこんないゝ心持の御はなしを伺つた事は御座いません。（と庭を見て）うん、おゝ、桔梗、かるかや、女郎花……ありや萩の花で御座いますね、あゝ私は、こゝ五六年と云ふものは、草や木にもとんだ申しわけのねーくらしをして居たのだつた！　己れが見ても見ねーでも、月はだまつて照つて居るし、花もだまつて咲いて居るのだ……落日の時も全盛の時も、春夏秋冬は、同じやうに己れの體をいたはつてくれてたんだ……！　それにもう一つ此の己れの體だ、善になつたり惡になつたり、怒つたり笑つたり、落着きのねーむら氣な心をよくまあ我慢してつきあつてくれたもんだ！　これがもし、己れの心が氣に入らねーと、己れの體が云ふ事を利かなくなつちまつたら、己れはもうとつくに死んで居たにちげえねー……己らあ、この自分の手にも足にも申しわけがねーやうだ！……さうだ！　明日この金をほどこしたらそれを最後に、久しぶりだ溫泉にでもつかつて體も心もすつかり洗ひ淸めていゝもんだ……どりや……。

（と千兩箱を肩から下ろして、庵室の上に上る。）

忠次　若い女御一人で夜中平氣で御出の所でこんな事を申し上げちやあ意氣地がねーと御笑ひになるかも知れませんが、此の金は、明日までは大切な金で御座います。又どんなものがあらはれねーとも限りませんが、何處か、かくす所は御座んすまいか……。

尼　この庵室では、お金と云ふものは全く入らないので御座いますし、それに、子供の時からの尼法師、私は遂ぞ一度もお金を持つた事も使つた事もありませんが、それ程大切なお金なら、胴卷にでも入れておいでなすつたらいかゞでせうか……その日その日を佛の力に御すがりして樂しく暮らす私達は、物をたくはへる所も持つて居りません！

忠次　なるほどナア、よごれもけがれも何にもねーお方にやあ、分らねーかも知れませんが、私が持つて來ましたお金は、岩神村の百姓の命にかゝはる難儀を救ふ爲の金で、三千兩――御らん下さい、これが千兩箱で御座います。

（と、千兩箱を見せる。）

尼　三千兩と云ひますと、大變なお寶で御座いませうね。

忠次　口で三千兩と申しますがこれ丈の金があれば、饑饉の爲に苦しみぬいて居る百姓が、何千人助かるか分りま

せん！　こんな妾はして居りますが人の難儀が見すごせねー生れつきで、求めて苦勞を致しますが、なさけは人の爲ならずと申します、これまでいろ〳〵の事をしても、怎やら恁やら生きて居られるのも、そのむくいかも知れません……

尼　御奇篤な事で御座います！　他人の難儀を御助けなさる御心は御佛の御慈悲で御座ります。深い御佛の御思召しが、あなたの御心に宿つたので御座いませう、……南無阿陀彌佛々々々々々……然し、それ程の大金を、何でまああなたお一人で、夜中に御はこびなされるので御座ります、人にほどこすお金ならば、何故、ひるの中に屆けておやりなさらぬので御座ります？

忠次　なるほど、その御疑ひは御尤もで御座います。まるで花か何ぞのやうに、うつくしい心の御出家をだますと云ふのは罪の深い事で御座います、何も彼も申し上げませう！――浮世の事を他所に見て、慾をはなれたあなたには、こんな事はお分りにならねーにきまつて居ますが、此の世の中と云ふ奴に、金のねいものが金をほしがるか金のあるものがほしがるかと云へば、金のある奴程金をほしがるもので御座います。ですから、金のねー百姓が、たとへどんなにこまらうとも、金持の大百姓は見て見ねーふりをして、一朱の金だつて出してやる氣はございません。それが爲に、小作人は生れ落ちるから死ぬまで苦しんで、大百姓は遊んで金がまうかる理屈で、これ程分り切つた理不盡をお上の役人共はやつぱり笑つて見て居るのです。私はそれが氣に入らねーで、これまで多く金持や無法なものをこらして來ましたが、實は昨日岩[illegible]村を通りますと不作の爲に夫婦別れをするものや、大切な操を金に代へて、いやしいつとめに出る娘や、いろ〳〵可哀想なはなしをきいて、持つて生れた蟲が起きて、救つてやる氣になりました！　もう御かくし申しますまい、此の金は、實は桐生の佐羽吉へ行く爲替の金を、途中でふんだくつたもので御座います。

（尼は急にびつくりして青くなる。）

忠次　びつくりなさる事は御座いません！　三千兩は盗んでも、こゝでわるい事を致さうと云ふやうなケチな男ぢやありません！　どうか御安心なすつて下さいまし、明日夜があけたらば、此の金を皆にまいてやらうと云ふ考へで御座います……

尼　あゝお前は恐ろしいお方です！　そんな、おそろしい人は、こゝに居ては困ります、さあ早く御かへり下さい！

忠次　ですから私は……

尼　いゝえ、いゝえ、こゝは佛へにつかへるものゝ住む、清い所で御座います、お前のやうなわるい人にけがされ

ては、御師匠さまにすみません！　あゝ、早く行んで下さい！　行つて下さい！　お前はけがらはしいお人だ！

忠次　えゝ、分らねー御出家だ、さつきから云ふ通り三千兩の此の金は、自分の慾で取つたのでなく、人の命を救ふ爲め淸い金だと云ふ事が分りませんか。

尼　たとへ人の命を助ける爲でも、物をぬすむと云ふ事は恐ろしい罪で御座います！

忠次　そんなら、もし此の私が助けない時には、百姓共は怎なると思ひます？　たとへ何と云はれても人の命がなくなるのを、ぢつと見て居る事は出來ませんぜ――今にきつと、此の私の心は御分りなさる時があります、私のぬすみは人を助ける爲、人の命を救ふ爲、よくねー事はして居ても、佛の道にかなつた事だと、私ア安心して居るものですぜ！

尼　それが間違つた事で御座います！　さあ、早くこゝを立ちのいて、恐ろしい罪を名のつて出て。どうぞ善人になつて下さいまし……さあ、早く名のつて出て下さいまし。

忠次　それぢやあ、私に繩にかゝれと云はれるのか。

尼　さうです！　何事も因果應報と申します、わるい仕業のむくいは受けなければなりませぬ。盜んだ人は、縛られなければなりませぬ！　あゝ、定めて取られた方は困つておいでゝ御座いませう。早く御返しなすつた上に、罪をおうけなさいまし。

忠次　なアに、上州の佐羽吉は、三千や五千の金でビクともする身代ぢやありません……年が若い御出家は、取られた一人の難儀を知つて、可哀想な幾千人の百姓の難儀も苦勞も知らないのだ、……あなたには、義と云ふ事が分りませんか、本當の男だて、命にかけても人を助ける立派な事が分りませんか。

尼　分りません！

忠次　さうか、それぢや仕方がねー。
（と忠次がつかりして、腰を掛ゑ、もう説くまいと、だまつて、煙草をのみはじめる。）

尼　おかへり下さい！　おかへり下さい！
（忠次だまつて居る。）
（若い尼は、段々と恐ろしくなつて來る。で、かたい信仰も、修養も、生れてはじめて自分の前にあらはれた人間の强さとその度胸とにたまらない怖れを感じはじめる。）

尼　かへつて下さい！
（忠次は猶だまつて居る。）

尼　さあ、早くかへつて下さい！

忠次　佛の道につかへる人だと思へばこそこれ丈深いわけ

を明かして、國定の忠次が頼んだのだ！　何にもこはい事はない、こゝで一夜を明かすだけを、何でかへれと云ふのです。

尼　佛の道にそむくものは、淸い此所には置かれません！

忠次　えゝ分らぬ人だ！　忠次は人を助けるのだ！

尼　いゝえ、いゝえ、ぬすみをしたのは、悪人です。お前は恐ろしいどろぼうだ！　恐ろしいわるい人だ！　行つて下さい！　行つて下さい！……さあ行け！　行け！　行かなければ私が訴人して來る丈だ！

（とつか〳〵と行きかける。）

忠次　訴人する？……そんなら、怎あつても、わしの云ふ事は分らねのだな、仕方がねー、此の忠次がぬすつとの名で呼ばれたのは、生れ落ちて今日はじめてだ！　いかに年が行かぬとは云へ、あまりと云へばきゝ分けがなさすぎる！　お前が佛の道を云へば、己れには俠客の道がある。大義親を滅すと云ふ、己れの行く手をさまたげればそのまゝにはすまされねーぜ！

尼　そんならお前に！

忠次　靜かにしろ！

（とおどすのを、尼は自分に何か危害を加へられるのだと思つて、思はず、「アレー」と聲を立てる。）

忠次　何もするのぢやない！　靜かにしろ！

（と、思はず刀に手をかける。）

尼　あれツ！　お前は私を……

（と逃げ出す。）

忠次　あゝ、もう駄目だ！

（と云ひさま、刀をぬいて、いきなり美しい尼を切りたふす。）

（尼は、無慘に切り殺される。）

（忠次、くわつと逆上したのが、段々にさめて來て、あゝ氣の毒な事をしたと云ふ風に尼の死骸を見る。）

（しばらくして、手水鉢の所へ來て手を洗ひ刀をきよめると、叢の中から小さい蛇が逃げ出す。）

（忠次がその蛇の行く手をぢつと見て居ると、桐の枯葉がぼそりと落ちる。）

（忠次思はず、ギヨツトする。）

（かすかに時の鐘がきこえる。）

――靜かに　幕――

第四場　國定村の名主東雲卯右衛門の家

名主卯右衛門の奥藏の中。上手の壁の高い所に明り取りの窓があつて、そこから棒のやうな光がさす。正面に屛風をたてまはし、片すみに、絹布の夜具布團をつみ上げ、手あぶり、たばこ盆、退屈をなぐさめる

爲のものゝ本、茶道具などを置く。

幕あく

と、國定忠次、故らに、あつい蒲團を外して、ぢつと物を案じて居る。こほろぎの聲がしきりにする。

しばらくすると、藏の戸のあく音。忠次はきつとなる。と、卯右衞門の子供の卯之助(十歲)お蝶(七歲)とが手に柿の實を持つて登場。

忠次　おゝこりあ坊ちやんにお孃ちやん、よく訪ねて下さいました。

卯之助　小父さん、裏の柿がこんなに赤くなつたから、小父さんに上げようと思つて持つて來た。一つたべて下さいな。

お蝶　この栗は、ばあやがさつき、昔のおはなしをしながら燒いてくれました、これもたべて下さいな。

忠次　ありがたう御座います。あゝあ、さすがは名主さまの御子さん丈あつて、ほんとうにいつも〳〵此の小父さんの面倒を見て下さいますね。小父さんはもう、うれしくつて、うれしくつて、胸が一杯になつて居るんですよー、ねー坊ちやん人になさけをほどこすと云ふ事は、一番立派な一番大切な事なのですよ、坊ちやんも大きくなつたらば、御父さんのやうに、えらい御方におなりなさい――お孃ちやんもその通り、どうか、お母さまのやうに美しいお方になつて下さいよ。

卯之助　えゝ、私もきつとえらくなりますから、小父さんも立派な人におなりなさいよ。

（忠次さびしく笑ふ。）

卯之助　小父さん、小父さんは、何故每日こんなお藏の中に居るんです？　何故外へ出ないのです？　外はいゝ氣持ですよ、田圃はまつ黃色になつて、空はまつさをで、百舌鳥の聲やひよ鳥の聲がしてあつたかいおてん當さまが光つてますよ……

忠次　あゝ、秋ばれの野の景色、思ひ出してもすが〳〵しい！……小父さんはねー、あんまりいたづらをしたものだから、お藏の中へ入れられて仕舞つたのですよ。

卯之助　そんなら、お父さんにおわびをして、早く出しておもらひなさい！　いつか私がお藏へ入れられた時は、うばが出してくれました！　うばをたのんで上げませうか。

忠次　ありがたう〳〵、いゝえそんなに親切にして下さらないでも、いつか又時節が來たら出られませうよ。

卯之助　時節つて云ふと……？　あゝ、あんなにこほろぎが鳴いて居る。

（しばらく蟲の聲。）

（ところへ、名主卯右衞門が靜かに這入つて來る。忠

次ていねいにあいさつする。）

卯右衞門　あゝ、何故、ふとんをすべつて居られるのだ！　そんな義理がたい事をされないでも、此の家の棟の下は、あなた一人の世の中だと思つて、思ふさま氣樂にふるまつて下さいまし！　心ばかりはあゝもかうもと思つても、とかく思ふにまかせないで、さぞ御不自由で御座いませう……

忠次　恐致しまして、何から何まで、御手あつい御厄介になりまして、御禮は口では申し上げられません！　突然御訪ぬ致しまして、御迷惑をかけましたのも、忠次の長い一生も怎やら終りに近づいたと觀じまして、何となく、故郷忘じがたく、自然と足が、此の國定村にむきましたのも、一度旦那に御目にかゝつて、善惡のあらひざらひ心の奥まで申上げて、それで男らしく名乘つて出たいと云ふ考へで御座いました！　御目にかゝれたらすぐに、名のつて出る覺悟を、御言葉にあまへまして、とんだ御厄介になりました！　面目次第も御座いません！

卯右衞門　なんの〳〵、わしも、かね〴〵會ひ度いと思つて居て、風のたよりに居所は分つて居ても、國定村の名主と云ふので、忠次どんに飛脚を立てる事も出來ず、實はなつかしく思つて居た所で、お前さんが來られたと聞いた時には、子供の時分の友達が、甦つて來たやうな氣がしましたよ！　凶状持の國定忠次、名主と云へば公の役目、名乘つて出ようと云ふお前さんの覺悟をきいて、感心してかくまつて置くのは、散り散りになつた乾兒の衆へも知らせたし、又それ〴〵の用意もし度し、私の心の中は、國定忠次と云はれた人の一生のしめくゝり、みじめな姿でやりたくない爲、名主の名前も家柄もすてる氣です。

忠次　忝う御座います！

（と男二人涙をながす。）

卯右衞門　さあ、子供二人は、早くお母さんの所へ行つて、小父さんに、お酒を持つて來るやうに云ひなさい。

（子供二人去る。）

卯右衞門　忠次どん、いくつになられた。

忠次　男の大厄、四十二になりました！

卯右衞門　うん！　どんな英雄豪傑でも、天の配劑と云ふものは仕方がない、人間には厄と云ふ事もあるものですよね。

忠次　昔からの云ひ來たりや、九星だの運勢などはてんで馬鹿にして居ましたが、ふいと出た後生氣から、氣がついて見るとそいつが四十二の厄年、旦那、爭はれないもんで御座います、「世の中は四尺五寸になりにけり、五尺の體置き所なし」と云ひますが國定忠次も、もう駄目で御座いますよ！

卯右衛門　たとへ世の中はめくらでも、上に立つものは、さほど目先の見えないものでもなく、お前さんのした事も、よく分つては居るだらうが……何分にも、大戸の關を破つたのが、お前さんの一生の失策だつたね。

忠次　なアに、大戸の關破りや代官屋敷への斬り込みは、掟の上の大罪で、自分ぢやちつとも心を咎めて居りませんが旦那、私は寢てもさめても、心を苦しめる事がたつた一つ御座います。

卯右衛門　そりあ何ですね？

忠次　若い、きれいな尼をたゝき切つたのが、心が亥めてやめてたまりません！

卯右衛門　尼をね？

忠次　さうです！　つまらねー事から、くわッとして、ついやつつけて仕舞ひましたが、それからこつちは、夢に見る、うつゝに見る……何を見ても惩ぢつと見つめて居ると、その尼の顏に見えて來て、何とも云へねー心持になつて來るんです。

卯右衛門　さうかい！　神經と云ふものかねー。

忠次　何だか知れませんが、その尼の顏が出ちやあ、私の先へ立つて、此の忠次の一生の道しるべをするやうな氣がします！　私は今まで、此の世の中のものは、何一ッこはいとも恐ろしいとも思つた事はありませんでしたが……あんなものに足をすくはれて、こんな苦しい思ひをするかと思ふと、殘念でたまりません‼　あゝ、とんでもねー事を致しました！

卯右衛門　それでその尼寺と云ふのは何處だね？

忠次　岩神村の街道から、少し南へ這入つた所で……萩の花が一杯さいた庵室でしたが……（と當時の事を追想すると、ふと、名主の顏が尼に見えて來る）あゝ、いけねー、いけねー、もう考へても苦しくなります。……おや（と窓の方を見て、びつくりする）あすこに人が……

卯右衛門　何處に？

忠次　あの、窓の所に……

卯右衛門　何だ、ありあ、物置の横の柿の實が月の光をあびて居るのだよ。

忠次　何だ！　さうですか。……（と汗をふく）

卯右衛門　忠次どん、それにしても、大變疲れて居るやうだね！　どうか、ゆるりと養生して下さいよ！　多くの人から男の中の男だとまで云はれた人だ！　立派な最後をしなければ、世の中にすまないよ！

忠次　えゝ、ありがたう御座います！　然しもう覺悟をきめたら一刻も早い方がいゝと思ひます！　第一長く御厄介になつては、あなたの御迷惑は大變ですから……

卯右衛門　なアに、わしも男だ！　お前さんの顏を見た時

から、私は覺悟をきめて居るよ！

忠次　え〻？

（二人しばらく沈默。）

（ところへ、卯右衞門の妻、おみち、卯之助お蝶をつれ、いづれも外出の風にて登場。）

お道　忠次さん、いろ／＼失禮を致しました！　御縁があつたら又御目にかゝりませう。どうぞ、御體を御大切に、幾久しく御繁昌なさるやうにくれ／＼も御祈り致します——さあ、小父さんに御暇乞ひをして、お父さまにも御禮を申し上げて……

卯之助　小父さん、どうか御達者で……お父さま、御きげんよう……

（母と子供二人泣く。）

（忠次驚いて、怎した事かと訊ねる。）

忠次　何の事か分りませんが、一體怎した事で御座います？

（お道、だまつて、夫から離縁狀を見せる。）

忠次　それぢやあ、御離緣になりましたか……怎云ふわけで御座います。旦那、怎した事で御座います。

卯右衞門　忠次どん、私の覺悟と云ふのはこの事です。忠次どん、お前さんは、此の國定村の生んだ人だ！　永い間、國定村は、お前さんの爲にどれ丈幸福になつたか分りません！　村のものは、生神さまと思つた事も度々ある。その恩人の國定忠次、村の名主卯右衞門は、一族などは無論の事、自分の一命にかへても、お前さんの一生は、まもり通す決心で、一つには、罪もけがれもない子供の事が不憫に思はれ、一つには、お前さんに氣がねのないやうにし度い爲に、女房を去つて子供は女房の手に渡しました！……今夜からは、心を語る男が一人！　何にも云はないで居て下さい！

（忠次、ぢつとして淚をこぼす。）

卯右衞門　さあ行きなさい！　義の爲、貴い名の爲に……よく、分つて居るだらうなア。

お道　はい！　よく分つて居ります！

卯右衞門　今更のやうではあるが、よく分つてくれました！　永年の間の心勞貞節、忝けなく思ひますよ！　隨分、體を大切にして、二人の子供の養育萬端くれ／＼も賴んだよ！

お道　はい！　旦那さまも、暑さ、さむさを御いとひあそばして、どうぞ、百年も、千年も……

卯右衞門　ありがたう……

お道　それから、朝夕の風が、大そう冷えてまゐりました！　綿の這入りましたもの一とかさね、御肌着から御襦袢までのこらず取りそろへて、たんすの上のひき出しに入れ

て置きました！　御紋つき御裃はその下に……あとは、つれ〲のあひまあひまに解きほどき、仕立てゝお屆け致しませう……

卯右衞門　千萬、忝けなく思ひますよ！

（と二人涙をこらへて泣く。）

卯之助　御父さま、鎭守の秋のお祭までには、きつとかへらして下さいまし、そして、その時には、たんとおみやげを持つて來ますから、大きな萬燈をこしらへて置いて下さいまし。

卯右衞門　おゝよし〲。

お蝶　私には、お人形と、ほゝづきと。

卯右衞門　よし〲……みんな、母さんに世話をやかすでないぞ！

卯之助　はい！

お道　そんなら、忠次さん……旦那さま……

（お道と子供二人は、靜かに去つて行く。）

（卯右衞門と忠次ぢつと押しだまつて居る。所へ、がや〲と云ふ人聲がして、淸水の岩鐵、板割の淺太郎、戍塚の三代太郎、高崎の重吉、保積の卯之助、など、忠次の乾兒が靜かに這入つて來る。）

乾兒一同　親分……おなつかしう御座います。

（忠次びつくりする。）

忠次　お前達は怎して……

卯右衞門　これは、名主卯右衞門が志、手を分けて、お前さんの居所を皆の衆に御知らせしました！

（忠次、感激のあまり、しばらくぢつと名主の顏を見て、）

忠次　御志の程は、忠次骨にこたへました！　國定忠次これで立派に死ぬ事が出來ます。永い間の旅をかけて、いろ〲と蒔いた善根があなたの深いおなさけで、我手でかり取る事が出來ました！　人のなさけの雨露で、思ひがけねー豐作だつた！　あゝ安心した！　安心した！

（とよろこぶと思ふと、いきなり、ばつたりと倒れる。）

板割　いけねー、みんな、こりあ親分は、卒中だ！

（乾兒等より添つて介抱する。）

乾兒等　えゝ？　（と驚く）

（乾兒等、親分、親分と叫ぶ。）

（忠次、半身不隨になつて、もう舌もまはらないが、ぢつとみんなを見まはして、利く方の手を出して、拜むやうな眞似をして感謝し、よろこぶ。）

板割　親分、日頃氣丈な人が、何でこんなになりました！　しつかりしておくんなさいよ！

卯右衞門　忠次どん！　耳にきこえるかね。

忠次　（うなづく）

卯右衛門　さうか、手足とたのむ、たのもしいみんなに會つて……

忠次　（さうだ〳〵と云ふ風にうなづく）

卯右衛門　一生一度の氣がゆるみなすつたな。

忠次　（心からうなづく）

（一同沈默。）

板割　あゝ、久しぶりで、親分のはなしがもつときゝていと思つて居たが……

（…………）

（一同泣く。）

（忠次、一同を見まはして、泣く。）

――幕――

第五場　卯右衛門宅の空井戸の横穴

土の穴藏の中。おしつけられるやうな、ほろ形の穴で、土にはこけが生え、所々に、宿り木のやうな日かげを好む草木の葉がたれ下るやうになつて居る。地の下には、板をしき、その上に、穴熊の毛皮をしきつめ、その上に床をしつらへて、忠次がそこに横臥して居る。枕元に刀かけがあつて、そこに五郎義兼がかけてある。形ばかりの行燈、その他の調度、いづれも卯右衛門の親切な心の程がうかがはれる。

幕あく

と忠次を中心に、淺太郎と岩鐵の二人がついて居る。

忠次、ふとねむりからさめる。

淺太郎　親分、眼がさめましたか……

忠次　（うなづく）

淺太郎　何か、ほしいものはありませんか？　さつきおいしい栗の御はんが届きましたが、少しやつて見ますかね。（忠次首をふる）ほしくねー？　さうですか、それぢやあ何か上りますか……

忠次　（まはらぬ口で）すまないが、うまいお茶をもらひ度い。

淺太郎　えゝ？　何ですつて……おひや？

忠次　（まはらぬ口で）すまないが、お茶を……

岩鐵　何ですつて？　親分、じれねーで下さいよ、おまはんの言葉が分らねーので、こつちの方が餘程じれつたく思つてるんですから、親分の氣性ぢやあ、さぞ癪にさはるでせうが、もう一度聞かして下さい……えゝ？　何？

（忠次もう一度云ふ）えゝ、分りました！

淺太郎　何だ？

岩鐵　すまねーが、お茶をくれろと仰有るんだ……

淺太郎　お茶ですか？（忠次うなづく）何だ！　親分、すまねーがなんて、そんな事を云つて下さるなよ。こちと

らはねー、親分の爲なら命も入らねーと思つてるものですぜ！　ようがすか、すまねーの氣の毒のと、そんな言葉を使はれると、悲しくつてたまりません！　それよりねー、早くなほつて、又、刀をくはへて、甲州の猿橋から飛び込んだなんて、威勢のいゝはなしをしておくんなさいましよ！

岩鐵　（茶を入れながら）本當だ！　もつと胸のすくやうなはなしをしませう、ねー親分、大戸の關を破つた時は、面白う御座いましたねー。

淺太郎　代官屋敷へ火をかけた時もようがしたが、國定村の百姓家へ、ばら〳〵ばら〳〵小判をまいてやつた時は、本當にいゝ心持でしたね！　皆もう親分のおかげで、本當の善根がほどこせたと思つたのはあの時でしたよ！　人間、いゝ事をする時の氣持は格別なものですね、もらふものはあつけに取られて居ましたが、金をまく方のものは恁う妙に胸が一杯になつて、ぼろ〳〵涙をこぼしながらまきました！　もう一度、あゝした全盛を見ませうねー親分。

岩鐵　さうだとも、見なくつて怎するもんか、ねー親分、大分體の樣子もいゝやうだから、正月までにやあ起きて下さいよ！

淺太郎　親分、へいお茶がはひりました！

（と茶を出す。忠次ぢつとその手を取つて、）

忠次　（まはらぬ口で）うれしい！　うれしい！（と茶をのんで）あゝうまい！

淺太郎　おゝ親分、茶碗が持てるやうになりましたね——もうしめたもんだ！……それでも左でよう御座んしたね、刀を持つなア右ですからねー親分……

忠次　（まはらぬ口で）淺、刀を取つて見てくれ！

（淺太郎、枕下の刀を取つて渡す。拔いて見てくれと云ふので、ぬいて渡すと、忠次、ぢつとそれをながめて、はら〳〵と涙をこぼし。）

忠次　あゝ、もう一度、なほりてい！

（としみ〴〵云ふ。）

（淺太郎も岩鐵も泣く。）

（ところへしづかに卯右衞門が下りて來る。）

（一同キツトなる。）

卯右衞門　忠次どん！　忠次どん！　いよ〳〵最後の時が來ましたよ！

一同　えゝ。（と驚く）

卯右衞門　怎した事か、上役人の知る所となつて、いよいよ召捕に向つたと云ふはなしだが、兎にも角にも國定忠次、玆が一番大切な所だ！　うかつな事は出來ませんが、切り死をするか、上の掟に從ふか……殘念至極の事に思

ふが、しつかりした考へを知らして下さい！

（一同深く考へて居る所へ、上から角萬が下りて來る。一同又驚く。）

角萬　親分、お久しぶりで御座いました！　もう駄目で御座います。どうか、日頃の御なさけで、どうぞ此の角萬の手で召捕らして下さいまし！　實はもうとつくに御願ひに出ようと思ひましたが……

岩鐵　やい角萬、手前は、どの面さげて、そんな事が云へるんだ、御用きゝが何だ！　さんざん親分の恩を受けて置きながら、親分に繩をかけに來やがるなんて、人間の風上にも置けねー奴だ、たゝき切るから覺悟しろ！

（と一同角萬を取りまく。）

角萬　お身内の衆御立腹は御尤もで御座いますが、私が申上げる事をよく御きゝ下さいまし、實は此間から、上役人は、堂々村國定村は云ふに及ばず、大間々から上州一體、殘らず手くばりをしてとう／＼こゝにおいでの事をつきとめたので御座います。そこで今にも召捕に向ひますが、つきまして此角萬が御願ひは、何卒此角萬の手で親分を捕らしていたゞきたいので御座います。そして、それがお上への奉公納め、私は無事に親分を江戸まで御送りしたら、すつぱり御用聞きはやめる覺悟で御座います。私が捕親になりていと申しますのは、親分さまへ失禮の事の無いやうに最後まで、大親分の貫祿で、立派に御身分の立ちますやうに、御身内の衆の御名前にかゝはる事のないやうに、致したいばつかりで御座います。私は今までにも、親分の御運の開く道はねーかといろ／＼に心配しましたが、もう御運の末かと存じまして、懸してまゐりましたので御座います。親分、どうぞ御あきらめ下さいまし。

忠次　（しばらくして、まはらない口で）イヤだ／＼おらあ今捕られるのは死ぬよりつらい！　日本一の國定忠次、こんな體でつかまるなアイヤだ！　角萬、己はきつともう一度元の體になつて自分で名乘つて出る氣だから、それまで己は捕まらねー、どうかさう思つて居てくんねー。

角萬　親分の御氣性では、御尤も過ぎる御言葉ですが……親分の御病氣は……

忠次　何でもいゝ！　己らあ、切り死をしても此のみつともねー姿ぢやあ捕まらねー、さあ、取れるものなら捕つてみろ！　さあみんな、氣をつけろ！

角萬　親分、どうかそんな事を仰有らないで。

忠次　イヤだ、イヤだ！　この體ぢやあイヤだ！

（と云ふ所へ、上の方で多くの人聲。）

角萬　あゝしまつた、親分、もう召捕に向ひました！　親分、私は、國定の親分を何にも知らねー奴等の手に渡し

たく御座いません。親分、とう〳〵みんなやつて來ました。

忠次　さあ、みんな、たゝき切れ、えゝ、忠次はまだ老いくちやしねんだ！

（と手あたり次第のものを投げる。）

（角萬つか〳〵と忠次のそばによリ。）

角萬　親分、どうか此の角萬の御恩報じを御受け下さいまし、さあ此の捕り繩を御らん下さい！　こんな事もあらうかと、南無阿彌陀佛と紙に書いてそれを縫つたので御座いますよ！　親分の御最後を、佛の道に導きていと、祈願をこめた此の捕繩、決してしばるやうな事は致しません！　どうか此の角萬にみんなおまかせ下さいまし！

（上の人聲。）

忠次　イヤだ〳〵、己れがイヤだと云ふのが分らねーのか。

（と云ふと、此の時、上の方て、捕手が穴藏に下りて來る氣勢がする。それを、卯右衞門が押しとゞめ。）

卯右衞門　しばらく待つて下さい。さつきも云ふ通り國定忠次は息つて居る。たとへ此のまゝにしておいても決して逃げるきづかひはありません。知つての通りの天下の俠客、見苦しい事をさし度くない、どうかしばらく待つて下さい！

役人　いゝやならん、國定忠次は、大切な科人だ。さあ、みんな時刻が延びる、下りて行つてひつくゝれ！

卯右衞門　待つて下さい、待つて下さい！　御役人、名主東雲卯右衞門がこれ程云ふのに分りませんか。

役人　公儀の御用だ、私事は許さんのだ！

卯右衞門　えゝ分らない人だ！　そんなら忠次がこゝへ來るまで、此の卯右衞門に繩打つて人質になさるがいゝ、云ひ出したからは此の卯右衞門も一足でも引く事は出來ません！　さあ、此のわしを縛つてくれ！

役人　どけ〳〵、邪魔致すな。

卯右衞門　どきません！　どきません！　國定忠次は自分の最後を知つて居る人だ、卑怯な事をするのでないとこれ程云ふのに分らないか。

役人　退け〳〵、さあ捕手のもの、容赦は入らん、ひつくくれ！

（この聲を下できいて、角萬は氣が氣でなく。）

角萬　親分、上のさわぎはあの通りで御座います。今にもこゝへやつて來ます。親分私に捕らして下さいまし、角萬は、親分のおからだにあんな下司役人に指一本もさはらしたくないのです。御身內どうぞ、親分によく仰有つて下さいまし。……（上の人聲）あゝ、早く、早く時がおくれて大變です！　あゝ下りて來る！　親分、どうぞ立派な御決心を御見せなすつて下さいまし！

岩鐵　親分、私共からもお願ひします。
重吉　私からも御願ひで御座んす！
岩鐵　親分、一同からの御願ひで御座んす！　一生一度の時で御座います。いつものやうに、立派な御姿を御見せ下さい！……みんなも御一緒にお供致しますから……
（上の人聲はげしくなる。）
（卯右衛門と役人とあらそふ聲。しばらくして「卯右衛門に繩うて！」と云ふ聲がする、忠次きつとなつて思入れ！）
岩鐵　親分、大恩人の卯右衛門さまに、繩がかゝつてもかまひませんか……
（忠次思ひ入れあつて、ポンと手に持つた獲物をなげすて。）
忠次　角萬、たのむぞ！（と觀念の眼を閉ぢる）
角萬　ありがてい！　あゝ、親分、勿體ねー、そのかはり、キツト親分のお氣に入るやうに致します！（上の人聲一層はげしくなる）靜かにしろ！　國定忠次は、國定村の角萬が召捕つたぞ！
（と忠次の前にひれふして仕舞ふ。）
（一同押しだまつて居る。恐ろしいはげしいさわぎが死んだやうに靜まつて、事もなげなる蟲の聲。）

――幕――

國定忠次御用（二幕三場）

第一幕

長岡在のあるうどん屋

正面に表からの入口があつて、舞臺全部はうどん屋の店になつて居る。上手は料理場から奥に通じ、下手小さい出入口から納屋に通ずるやうになつて居る。土間の上に形ばかりの臺、それに對して樽の腰かけあり。凡て片田舍のうどん屋の體。

幕あく

と舞臺には誰れも居ない。やゝしばらくすると、御用に追はれて國定忠次一統がなだれの如くに表口から逃げ込んで來る。

忠次　おい、喜右衞門さんの家はこゝか……喜右衞門さん……

（喜右衞門奥から靜かに出て來て、何事が起つたのかとぼんやりして居る。）

忠次　喜右衞門さん、忠次だ……

喜右衞門　おゝ、親分さま、よくまあ御訪ね下さいました。これ、お福よ、ばあさんよ、早く出て來い、國定の親分さまが御座らしつたゞ……これ、お福よ……親分さま、いつぞやは權堂で親子の難儀を御助け下さいまして、御禮の申上げやうも御座いません……これお福よ、親分さまだに……

忠次　辭儀はあとにしてもらはう、あの時お前さんに云つたやうに、晴れた氣持で訪ねるか、追はれて逃げ込むかの二つだと云つたが緣起でもね――、忠次一門、お前に助けてもらひに來た……

喜右衞門　えー？　それぢや親分さまは。

忠次　おー、御用の奴に追ひたてられて、やう〱此所まで落ちのびたが後からすぐにやつて來るだらう、喜右衞門さん、後生に一度の御願ひだ、どうか己れ達をかくまつてはくれめいか。

（喜右衞門が驚ろいて居る所へ、お福がうれしさうにかけ出して來て。）

お福　親分さま……

（と早やおろ〱する。續いて喜右衞門の女房お常が出て、これも亦。）

お常　親分さま、御初に御目にかゝります……いつぞやは娘の事で……

（と涙をこぼす。）

喜右衛門　シッ！（と制して）靜かにしろ！　ばあさまよ、お福よ、今日こそは、かね〴〵云つて居た通り、己ら達三人生命をすてる時が來たぞ……親分さまへの御恩報じ決して女々しい、事をするでねーぞ！

（と決心の色を見せて云ふ。お福お常どうした事かと案じ乍も、喜右衛門の言葉に各々決心の色を見せる。）

忠次　喜右衛門さん、忝けねー、三人のその心持で、此の忠次一門は、地獄で佛の思ひがする。かう皆、人になさけはかけていゝものだ、追ひつめられた國定一家、慈した情けに救はれやうとは、夢にも思はねえ事だつた！　みんな厚く禮を云へ！

（乾兒のもの七八人一同頭を下げる。）

喜右衛門　何の御禮など仰有られるわけは御座りません、人間恩を知らない程なら犬畜生にも劣ります。百姓こそはして居りますが此の喜右衛門は、人間で死に度いつもりで御座りますだ！

お福　ほんに父さまの云ふ通り、親分さまの御役に立つなら、たとへ此の體が怎なりませうと、厭つてなどは居りません！　親分さま、よく逃げて御座らつしやいました。

忠次　ありがてい〳〵！　何かのはなしは後にして、ともかくも體をかくす所を何とか心配してもらひ度いが……

喜右衛門　御安心なさいまし、そこの納屋には、深い穴が掘つて御座いますから、一先づそこへ御這入りなすつて下さいまし、追つての事は私等親子が考へて、必ず御心配をかけるやうな事は御座りましねえだ、さあ、早や這入らつしやいまし……お福、さあ御案内しろ。

（忠次等一同、お福に案内されて外へ出る。喜右衛門夫婦が昂奮して居る所へお福出て來る。）

喜右衛門　ばあさまよ、娘よ！　日頃云つたは此の事だぞ！　今にも追手がやつて來るだらうがさとられるやうな氣ぶりをしては成らねえだぞ！　それに御上の役人が嚴しい詮議をした上でたとへ命を取ると云つても、わるびれた所置をするではねえぞ！　一生一度の御恩報じ、それで命を取られたら來世はきつといゝむくいがあるだらう、さあ、しつかり覺悟を決めてくれ！

お福　父さま、親子三人、一つ心でつくしたら、どんな力も及ぶまい……もしも命を取ると云ふたら、わしから先へ死なして下せいましよ。

お常　何の、わしの命を先に取つてもらひますだ！

喜右衛門　案じるでねー　此の喜右衛門は男のつもりだ、わしから先に首の座に直つてやるだ！

お福　父さま、何を云はしやるだ、お前さまは男の事だ、

これから先も生きて居て、親分さまの御用を達さねえで怨するだ。

お常　こゝは爭ふ所でねえ、わしは、神さまにお願ひして、親分さまを助けていたゞくだ。

（と神棚に向つてふし拜む。）

（二人もそれに倣ふ。）

（ところへ、表てに多くの人聲、やはり忠次を追つて來た者共、喜右衛門の家に飛び込んで來る。）

（喜右衛門等三人、何事も無かつたやうに、それぞ〳〵の仕事にかゝる。）

取手の頭　親爺、神妙に致せ！　國定忠次一家が此所の家へ逃げ込んだらう……眞直に申立てろ！（喜右衛門がぼんやりとして居るので、いら立ちながら）こら、正直に申立てろと云ふのだ。

喜右衛門　へい、うどんなら、只今出來たてのが御座いますが何人さまで御座いますか……

取手頭　誰れがうどんを喰ふと云つた！　忠次一家が逃げ込んだらうと云つてるのだ。

取手共　忠次を渡せ！　隱した場所を敎へろ！

（と口々に云ふ。）

喜右衛門　御らんの通りのうどん屋渡世、別に他のものを隱してなんぞ賣るやうなものでは御座りましねえだ。

取手頭　だまれ！　さあ、家さがしをしろ！

お福（奥から出て）あのお役人さま、わしの父樣は年のせいで耳がえらく遠くなつて仕舞ひましたゞ、何の御用で御座りますか、わしに仰有つて下さいまし。

取手頭　手前は娘か……

お福　へい！

取手頭　己れ達はな、天下の科人國定忠次一家を追つて來たものだ、本街道のはづれまではたしかに姿を見て居たのだが急に見失つて仕舞つたのだ！　何處へ逃げ込む所もないから、てつきり此所だと目星をつけてやつて來たんだ！　さあ神妙に申上げねえと、手前達一家に災難がかゝるんだ！　忠次一家を何處へかくした？　何處へ逃がした！

お福　旦那さま、わしは今奥で針仕事をして居りました、父さまは、今のさき他所からかへつたばかりで御座いますが、此の店へはさつきから誰れも這入りは致しませんが……

取手甲　馬鹿を云へ！　一家揃つて逃げて來た事は、村の子供が證人なんだ！　早く白狀しろ！

取手乙　白狀しろ！　强情をはるとひつくゝるぞ！

（取手一同お福のまはりを取りまいて、十手をさしつける。）

お福　わし等は、何の科で縛られますだ！　たとへお上の御役人でも、罪のねえものを縛ると云ふ法はねえと思ひますだ！　さあ縛るなら縛つて下せいまし……

（お常奥からおろ／＼しながら出てて此の體を見て驚く。）

お常　お福よ……

お福　おつかあ、泣く事もねえ、驚く事もねえだ、御役人さまは、わし等一家のものが大事な科人をかくまつたと云はつしやるだ……父さまは耳が遠いで、わしが今そんな事は無いと云ふと、嘘を云ふと縛ると云つてわしをおどして居らつしやるだ！　しばられても殺されても知らねえものは知らねえ事だ！　おつかあ、お前からも、よく譯をはなして上げるがいゝだ！　かくまつたなんて愚かな事、わし等は國定忠次がどんな人か顔も姿も見た事はねいだ。

取手頭　もういゝ、みんな、こいつらにかまはず、そこらあたりを探して見ろ！　邪魔立したらひつくゝれ！

（一同それと立ちかゝると、喜右衛門つか／＼と出て）

喜右衛門　申し上げます、正直に申しあげます！

取手頭　國定忠次をかくまつたらう。

喜右衛門　恐入りました、お尋ねもの、國定忠次、たしかに私がかくまひました。

取手頭　それ見ろ！　そして何處へかくまつた！　奥か、納屋か……

お福　父さま、お前はまあ、氣でも狂つたゞか……あれ程かたく約束して、今更になつて……御役人さま、父さまは氣狂で御座いますだ！　あんな事はみんなうそで御座いますだ。

取手頭　だまれ／＼！

お福／お常　父さま！　なさけねえ了簡になられたゞな。

喜右衛門　御上の御威勢にはかなはねえだ！　正直な事を申しますだから、どうぞ此の一家のものゝ命丈はお助けなすつて下さいまし。

取手頭　早く云へ！　云はなければ家さがしだぞ。

喜右衛門　申上げます！　私が忠次をかくしましたが此所の家では御座いません、足ごしらへに繩のたすき、てんでに刀を引つこぬいて、忠次一家十三四人、私を取りまいて隠してくれ、イヤだと云へば殺すと云ふので、わるい事とは存じましたが屈竟な場所へ隠してやりましただ！

取手頭　それは何處だ？

喜右衛門　御役人さま、それはお寺で御座いますだ！

取手頭　寺だ？　何處の寺だ？

喜右衛門　それ、あの森のはづれにある、高い段をのぼつて行く、西念寺で御座います。

取手頭　西念寺だ？……それ！

（と手下の者に下知する。一同西念寺へ向はうとする。喜右衛門あわてゝ押し止め。）

喜右衛門　御役人様、御承知の通り國定忠次は腕きゝで御座います。それに乾兒のものも、いづれも名うての強いものばかり、そのまゝお出あそばしても取り逃がすか御怪我をなさるかきつとうまくはまゐりません……見事忠次をめし取るには、計略が大切で御座います。

取手頭　計略とは？

喜右衛門　相手に油斷をさせる事で御座います。それには、その御なりでは駄目で御座りますだ。

取手頭　ウム！　怎うすればいゝだらうナ？

喜右衛門　皆さん揃つて、乞食のなりをなさいまして、西念寺の表門と裏門とに、參詣の人を待つてるやうに坐つて御座れば、どつちかから忠次は出て來るに相違御座いません、そこを目がけておかゝりになれば、きつと取り逃がす事では御座りますまい。

取手頭　ナル程そりあいゝ考へだ！　負うた子に淺瀨のたとへだ……

喜右衛門　幸手前共に、野良仕事のぼろ着物がどつさり御座います。それを御貸し致しますから、直ぐ御支度をなさいまして……

取手頭　うん、忝けない、さうして貰はう……

喜右衛門　そんなら、御道具はみなお預り致しますだ、そのまゝ行つて、あの花賣の店で御待ち下さいまし、着物はすぐにお屆け致しますだ。

取手頭　たのむぞ。

（一同、御用の提燈やその他のものを置いて急いで表に出る。しばらく沈默。）

お福　父さま……？

喜右衛門　親分さまへの御恩返へしだ、ばあさまよ、お福よ、もう此の村には居られねえだぞ！　親分さまを御逃がし申したら、親子三人、此のまゝ何處ぞへ行かなきやなんねえ……大恩うけた親分さまへの御奉公、生れ故鄕を捨てゝ行つても、御先祖さまはきつと許して下さるべい……みれんな心を起すでねえだぞ……御先祖さまの御位牌と、賣りだめの錢を路用にして、行く處まで行つて見よう、互の心にくもりがなければ、人のなさけの國もあらう……

お福　父さん、ありがてい事云つて下さるだ！　元はと云へば私から出た事、決して案じることはねえだ！　百姓

風情の一生には、願つても出來ねえ立派な事た……土の中から生れた三人、心ばかりはおさむらひにも負けはしねえだ……

喜右衛門　お常、お福とわしは、何かの支度をして置くだで、われ、氣の毒だがボロを屆けて來てくんろ。

お常　さうだ！　そんなら行つて來るだ！　親分さまによろしく申して下さいましよ……

（とお常着物を取つて行かうとする所へ、忠次一家が現はれる。三人驚く。）

喜右衛門　親分さま……

忠次　ありがてい、忝けねえ、國定忠次、言葉で禮を云ふ事は、却つてそら／＼しいはなしだ！　親子の衆、何にも云はねえ、國をすて、生命を的に忠次一家を助けてくれた、恩義は一生忘れません！　その代りには此の忠次、眼の玉の黒い中は、親子の衆は命に代へて引きうけた……國越をして信濃へ落ちれば忠次の生きる所がある、さあ、此所を立つて貰ひませう……

喜右衛門　何の何の、親分さまは大切な御體、われ／＼共が御一緒では、足手まとひになるばかりで、猶更御苦勞を益すばかりで御座りますだ！　こゝで、お別れ致しますだ！

忠次　その遠慮には及ばねえ、體こそは別々でも、一家のものゝ心は一つ、西から朝日が出ねえかぎり、めざす所は同じ所だ！　忠次の運のひらける時は、喜右衛門さん、お前の運のひらける時だ、國定身内と思つて下せい！

お福　そんなら父さまを、乾兒に加へて下さりますだか？

忠次　左前にはなつちやあ居るが天下の運はまはり持ちだ、又花のさく事もあらうて……

お福　あゝうれしい／＼、父さま、お前は今から男達の一人になつたよ……御先祖さまの守り刀……これをさして行かつしやい。

（と佛壇から刀を出し、ちりをはらつて喜右衛門に渡す。）

喜右衛門　さうだ！

（とうれし想に、刀を持つて、右にさしたりなどする可笑しい仕科あつて、一同よろこぶ。）

お常　そんなら、一ト走り云つてくるだ！

（と退場。）

忠次　（取手共の置いて行つた御用の提燈を手に持つて）みんな、どうだ、御用の二字に追ひまはされて、寢る目も寢られぬ艱難辛苦、考へて見りあ、己れの心が己れを追ふのだ、自分で自分を追つかけて、とゞのつまりは怎うなるのだ、人の爲世間の爲と、ちつとも疚しい事はねえが、己れのやり方が手荒かつた……己らあ誰れかに會

ひてい！　本當に己れを解つてくれる人に會ひてい、そして話して話して、分るまで話しぬきてい……

（忠次深く考へる。）

（段々と日が落ちてあたりが靜かに暮れかゝる。）

——幕——

第二幕

第一場　西念寺の山門前

高い石段の上にかやぶき屋根の古い山門がある。石段の兩側は杉の大木に交つて冬木立。

幕あくと、石段の中央の平らな所からずつと上までに、乞食に變裝した捕手の者共が兩側にうづくまつて居る。

見物が倦きはてる位の間全く沈默。

粉のやうな雪がチラ／＼降つて來る。

取手甲　（やう／＼首をあげて）　おい、一向に出て來る樣子はねいぢやねえか。

取手乙　裏門の方もさつぱりその氣配がねえやうだな。

取手丙　菜場の方から逃げやしねえか。

取手丁　菜場のうしろは崕だから逃げられつこねえはずだ。

取手甲　おい、べらぼうに寒いと思つたら雪が降つて來やがつたぜ。

取手乙　ウム。

取手丙　お頭、一體怎したんで御座んせう……？

取手丁　雪が降つて來ましたが……

取手頭　暗くなつたらづらかる氣だらうが、さうなつちあやりにくい、裏門の方へ相圖をして、ヂリ／＼遠まきに卷いて見よう……きつと奴等はそとに居る氣づかひはない……住持にたのんで命乞をしてもらつて居るか、何處かの屋根の下につくなんで居るにきまつてるんだ！　己は湯灌場に居ると思ふがなア……

取手甲　私は本堂にかくれて居ると思ひますが……

取手乙　本堂にゃ居ねえ、寺の奴等をおどかして庫裡で酒でものんでるだらう……

取手頭　何でもいゝ、ともかく蟻の這ふやうに攻めて行くんだ、向うに氣取られたらこつちの負けだからなア……誰れか裏門の方へ知らして來い。

（取手の一人石段を下りて來る。）

（一同身づくろひして山門を靜かに這入る。）

（道具まはる。）

第二場　西念寺の庫裡

正面に障子をたて切つた緣側のついた屋體がある。屋體の上手下手は廣庭で、いろ〳〵の立木、その奥に墓場が見える。

雪は靜かに降つて居る。

室の中には行燈の灯がとぼり、住持と月代ののびた男の影が相對してうつつて居る。

道具が止まると、上手下手の奥から、取手の者共が這ふやうにして忍びよつて來る。

やがて、緣の下の傍まで來る。

室内の對話。

僧　あなたがどんなに逃げようとなさつても、今となつては袋の鼠ぢや！　よいかげんに覺悟なさるが御得策ぢやよ。

男　いや〳〵、これが切りぬけられぬとすれば生死にかゝはる大問題……きつと逃げて御らんに入れます。

僧　あきらめのわるいお人ぢや！　もう考へるまでもない、いさぎよくお投げなさい。

男　イヤ〳〵たとへ今宵一晩かゝらうとも、きつと逃げ切つて御らんに入れます……

（とのはなしをきゝながら、取手共、互に緊張してうなづき合ひ、相圖と共に「忠次御用だ！　神妙にしろ！」と一齊に緣に上つて、パッと障子を兩方に開放す。トタンに裏門の方からまはつた取手共は、奥の襖を開けて亂入する。と、老僧と月代の延びた武士とが平然と碁をかこんで居る。一同此の光景に互に呆然とする。）

（武士は只さへ勝負に負けて居るのでクヮッとなり。）

武士　浪人こそすれ、武士に向つて何たるふるまひ、非人乞食の分際として、返へす返へすも無禮な奴だ！　そこ動くな、手打に致す！

（取手共しきりに申しわけをしようとすると。）

老僧　皆來い！　物取りがまゐつた、強盜が押入つた……それ、早鐘をつけ！　太鼓をうて……

（と命令する。）

（と、寺の坊主共大勢驚きあわてゝ登場。場面は急轉して恐ろしい動亂の渦卷となる。）

（遠く早鐘をつく音、太鼓のひゞき、更に村の人々のふきならす非常の報らせの竹法螺の音が耳をつんざく。）

取手頭　お靜に願ひます！　お靜かに願ひます、私共は公儀の御用を承る者……おたづね者の國定忠次一家、此の西念寺に逃げ込みましたを、捕へる爲に形を變へたもので御座います！　御覽の通り十手取り繩……

武士　一層無禮至極の奴等！　公儀の者にも假にもせよ！武士に向つて御用呼ばはり、天下の法を心得居らぬか……さあ、一同並んで首を延ばせ！

取手頭　何分ともに御許しを願ひます……後刻必ず明りを立てゝ御身分にさはらぬやう……

武士　だまれ／＼！

（と云ふ所へ、村の者大勢手に手に獲物を持つてやつて來る。）

武士　狼藉ものはこいつらだ！　幸繩は自分で持つて居る……それ、一人殘らずひつくゝれ！

（いろ／＼云ひわけする取手共を村人等てんでに高手小手にいましめる。）

武士　こゝは、西念寺の境内だ！　佛の庭に血を流すのもいかゞである、命丈は助けつかはす……百姓共、村の役所へひつたてろ！

百姓一　只今、お役人を御連れ致しました！

（と、他の村人等に案内されて、御用提燈に灯をともし、國定一家がやつて來る。）

武士　御役目御苦勞ぢや！　拙者當寺の住職と碁を樂しんで居る最中に、斷りもなく亂入して土足にて寺の座敷をけがせし馬鹿もの、切つてすつべき奴なれども、一命丈は助け申した！　以上の次第、然るべく御願ひ申す！

國定の乾兒一　委細承知致しました！

國定の乾兒二　馬鹿野郎め！　面をあげろ！

（取手共一同恐る／＼顏をあげてびつくりする。）

取手甲　あツ！　手前は淸水の岩鐵たナ……

取手乙　おゝ、手前は板割の淺太郎だ……

取手丙　あツ、保積の卯之助……

取手丁　忠次が居る、忠次が居る……

（と驚きさけぶ。）

取手頭　御さむらひ樣、御用の姿を致して居りますがそれはみんな、我々共のぬぎすてたもので御座います！　うどん屋の親爺の計略で、凡てが逆になりました、そこに居ります者共こそは、天下の科人、國定忠次一家のもので御座います！　おう、あすこに立つて居りますのが國定忠次で御座います！　私共の罪は罪……どうかあれ等もお縛り下さい！　凶狀持が御用の姿で、これから先が大變で御座います！

（と泣きながら云ふ。）

武士　何？　役人共が國定一家だ？

取手頭　へい、左から三番目に笑つて居るのが國定忠次で御座います！

武士　（ぢつと忠次を見て）　馬鹿奴！　たとへ天下の科人にせよ、國家忠次は一世の俠客……自然と人品のそなは

る者……愚か者め！　國定忠次は、決してあんな顔ではないわ！

取手頭　でも御さむらひ……

武士　だまれ！

取手頭　あゝ殘念だ！　みす〳〵相手を眼前に見ながら…
……

武士　もうよい！　役人の衆、一同をひつたてられい！

國定一家の者一同　立て！

（取手共しぶ〳〵立つ。）

國定一家のもの、一同歩け！

（雪の降る中をしを〳〵と歩き出す。）

（今まで、寺のうしろにかくれて居た喜右衞門、すつかり旅人拵へとなり、刀をさしてついて來る。）

（そのあとから、お常、お福いづれも脚絆手甲の旅裝束にて面白想につき從ふ。）

（遠く、法螺の音、鐘のひゞき、雪盛んに降る中を。）

――靜かに　幕――

友達と醫者

時
初冬の夜

場　所
中流の家の茶の間

舞臺の右手正面の障子の外は臺所に通じ、右手側面の襖の外は玄關に通じ、玄關よりすぐに二階座敷に行かれるやうになつて居る。左手側面の障子の外は庭に面した縁側になつて居る。臺所に行く障子につゞいて正面の壁をへだてゝ襖あり、その奥は納戸とも云ふべき室にて、納戸の正面は女中部屋である。

正面の壁に押しつけて立派な茶だんすを置き、その上に生き／＼したダリアの花が投げ入れにした宇治銘茶と書いた焼きものゝ茶壺がある。鴨居の上には八角の柱時計、その下にカレンダーがかゝつて居る。

よき所に、上方風の大きな大和火鉢があつて、なるべく舞臺の左手によせて、七ツになる子供の寢床がある、その中に熱の高い長男太郎がメリンスの小がいまきに包まれて寢て居る。枕元には、藥ビンや散藥の袋が盆にのつて居て、その側に蓋をしたコップと森永のドロップスの箱が置いてある。本當は、頭の方にあるべきだが都合上、新らしい樣式で鳥の畫を書いた二枚折の小屛風が裾の方に立つて居る。

電燈が、臺所にも納戸にも、玄關にも、明るく灯いて居て、納戸には、たんすや、鏡臺が置いてあるのが見える。

時計は八時を過ぎて居る。

幕あく

と、火鉢に相對して、主人の妻ひさ子と友人の立川とはなしをして居る。ひさ子は、銘仙の袷を着て、丸まげに結つて居る。立川は大島紬の袷に同じ羽織を着て居る。ひさ子は三十二、立川は三十六七である。

立川　けど困りましたね太郎ちやんは――

ひさ　えゝ、熱が高いもんですから

立川　さう！　でお醫者樣は何て云ふんです？

ひさ　多分はしかに成るだらうつて事なんですけど、まだ、眼にも口の中にも何にも出て居ないんで御座いますよ

立川　まだやらなかつたんですか？

ひさ　正子がやつた時に、たしか輕いのをやつたやうでもあるんですけど、よく覺えて居りませんの。お父さんは、

たしかにやつた、己れが火の玉のやうに熱いのを一晩抱いて寢てやつたなんて云ふんですけど、それは正子の事を間違へてるんだらうと思ふんですけど……

立川　もつとも、いくらも二度やる人がありますからね

ひさ　さうでござんすつてね！　榮太郎さんはおすみんなつたんですか？

立川　えゝ、榮公は赤んぼん時えらいのをやりました。けど、はしかと極まれば大した心配はありませんけど……

ひさ　多分さうだらうつて助川先生も仰有るんですけど——何しろ、此の近所では、隨分はしかをやつてるんですから。

立川　それぢやはしかですよ。子供は何しろ何處へでも出かけるんだから、ありさへしたらすぐうつりますよ。

（太郎が眼をさまして何かぐづ／＼と云ふ。）

立川　太郎ちやん、怎したい？　苦しいかい

太郎　苦しいもんかい立川のをぢ。

立川　オー、驚いたな、相變らず元氣だね。

ひさ　此の人は、熱が高いと、そりあ、氣味のわるい程はしやぐんでござんすよ。お姉ちやんはその反對で、病氣となつたらカラいくぢがないんですけど。

立川　お姉ちやんは——？

ひさ　今、田村さんの奧さんにお風呂へ連れてつていたゞいたんです、何しろ、今日はウタに寢られちやつて、急に手がなくなつたもんですから。

立川　女中さんは何です？

ひさ　先生は咽喉だつて仰有るんです、今朝から眞赤な顏をして、ふうふう云つて御はんもたべませんから、熱をはからして見ましたら、九度の上ありましたから、すぐ寢かしたんですけど——

立川　これもはしかぢやありませんか。

ひさ　ほんとに！（と少し笑つて）實も、もしやさうぢやないかと思ひましてね、お前はしかをした事があるかいつて訊いて見ますと、何にも知らないんですつて……六つの時に兩親に別れたんでござんすつて、ほしたら實氣の毒になつちやつて……

立川　さうですね！　そんなのが、あるでせうね……いくつです？

ひさ　十七です。（納戸の方をむいて）ウタや、ウタや……（女中部屋で返辭をするのを聞いて）怎たい？　苦しいかい？

ウタ　（女中部屋で）　何ですか、あつくつて……

ひさ　あついかい……あゝ、だるいかい？……さうかい！熱があるからね……

（しばらく沈默がつゞく。）

（所へ、臺所の方から、主人の恭平が手に風呂敷包みを持つてかへつて來る。）

ひさ　あら、臺所から這入つてらしつたんですか、妾、正子かと思ひましたら。

恭平　うん、おはるさんまだ來ない？

ひさ　えゝまだ來ません

恭平　なアんだ！　すぐ來るなんて云やがつて……

ひさ　さうですか。

恭平　あゝ、から、已れ谷口にも來いつて云つてやつたんだよ、あいつも、學生時分にや少しは俳句をやつた事があるんだからね……（と風呂敷包をひさ子に渡して立川に向つて）やあ失敬！　先刻行つたんだぜ、君の妻君に今日手傳つてもらはうと思つて……

立川　それなんだよ！　實はね……

恭平　（ひさ子に向つて）　怎だい熱は？

ひさ　高いやうですよ。

恭平　計つて見ないのかい？

ひさ　えゝ……計りませうか？

恭平　いゝよ、已れが計るから、熱位計らなくつちやあね――（と獨言のやうにイラ〳〵して云ふと）

ひさ　ですから、計りますよ。

恭平　いゝよ。

（と、太郎の枕元に坐つて、檢溫器をしらべて、ふりながら、）

恭平　太郎ちやん、おやぢが歸つて來たよ、さあ、お熱を計らうねッ。（頭を押へて）うん、あつい、あつい！　今まで一人でねんねしてたのかい、もう安心をしよ、おやぢが歸つて來たから……

（立川と、ひさ子は、又例のがはじまつたと云ふやうな顏をして笑つて居る。）

立川　（首をすくめながら）　こまるね太郎ちやんがわるくつて。

恭平　うん！

立川　女中もわるいんだつてね――

恭平　あゝ、今日になつて急に倒れられたんだよ

立川　さうだつてね。

恭平　震災後初めての川柳の會をやらうとすれば急に病人が出來るなんて、實際立川君、世の中なんてそんなもんなんだね。

立川　全くだね。實はね、その家の女房さんなんだがね………

恭平　どつかわるいの？

立川　いゝえ病氣ぢやないんだがね、突然その信州から親類のものが出て來たんだよ……

恭平　君のか？
立川　僕んならいゝがね、女房さんの方の親類なんだよ。だからね、君ん所も手がない所へ病人があるんだから、一層僕ん所へ移したら怎だらうかと思つて相談に来たんだがね。
恭平　間がわるいつて奴だね。
立川　全くだよ！　今日に限つて、何も親類なんぞ来なくつたつていゝんだからね。
恭平　さう云ふもんだよ。
立川　さう云ふもんだね。
ひさ　ほんとでござんすね！
恭平　（馬鹿にするやうな風に）なアにを云つてやがるんだい！
ひさ　あなた、お熱まだですか？
恭平　さうだ！（と検温器を出して見て燈火にすかして見る）
立川　（むつ〳〵笑ひながら）老眼鏡を出さうかね。
恭平　（傍目もふらずに）いけね――九度六分ある……あ――あ、弱つたたア。
立川　はしかならその位あるよ君。
恭平　それが、まだ確定しないんだよ、此のね、こゝん所（鼻から口のまはりに指で輪を書いて）が、少し青白いから、猩紅熱にでもなりやしないかなんて云つてたがね。
立川　猩紅熱なら大變だぜ。
恭平　大變だよ。
立川　そんな事は無いだらう。
ひさ　そんな事は無いでせう。
恭平　無いでせうつてお前に分るかい。
さひ　分りませんけど、助川先生がさう仰有いましたもの。
恭平　何て？
ひさ　はしかだつて。
恭平　へ――お前にさう云つたかい？　己れにやそんな事は仰有らないよ。
ひさ　（少しぢれつたくなつて）それならもう一度伺つて見たらいゝぢやありませんか。
立川　何處？　その先生ツてのは？
恭平　すぐそばなんだよ。
立川　そんならもう一度診察してもらうさ、子供の病氣は全く分らないからね。
恭平　イヤ、そりあ大丈夫なんだ、僕は、自分が醫者の家に育つたがね、あんな科學的な、合理的な診斷をする先生はまあ無いね。
立川　さうかね。
恭平　だから、僕は、子供の病氣つて事を考へると、助川

先生を離れて他へ移して行く氣に全くなれないよ――君は何處の醫者だい？
立川　近所だがね。
恭平　助川先生に願ひ玉へ、そりあいゝから。
ひさ　本當にそりあ御親切ないゝ方ですよ。
立川　（ひさ子の言葉の方を常に深くうなづいて）　さうですか。
ひさ　えゝ家ぢやもう、まるで親類か何ぞのやうに願つてますけど、面白い奥さまで……何でも、音樂家なんですよ……ピアノですか、大變お上手なんですつて。
恭平　そんな事は怎たつていゝけど、そりあいゝぜ、何しろあれ、太郎ちやんの病氣の診斷も、一昨日の熱は腸から來たので、その時にも少し發疹があつたけど、それは自家中毒だつたから、ヒマシ油をのまして下熱した、それから後の熱と發疹は全く別なものではしかのやうでもあるがもう一日見ないと分らないから、冷やしてはいけないと恁云ふんだよ。
立川　成程ね？
恭平　それで、もし變なセキが出て、涙でも出て來るやうなら無論はしかだが、粘膜發疹の無いはしかの形もあつて、變形の奴になると全く分らない相だからね――
立川　さうだらうね――

恭平　だから、輕い猩紅熱なんぞは全くはしかと見分けがつかずに、なほつてから皮がむけて、はじめてはゝあそれでは猩紅熱だつたか知らんなんてのがいくらもある相だよ。だから、二十年前には、はしかも猩紅熱も全く區別なんか無かつたつて云ふからね。
立川　成程……
ひさ　父さん、お二階お火を入れませうか？
立川　さあ（と、うながすやうに）怎するね。
ひさ　家でやりませうよ、もうみんな用意も出來てますし、それに皆さんですもの、何にも手もかゝりませんし。
立川　さう、ぢやさう云ふ事にして、僕は一先づかへつて來よう。
恭平　何故さ？
立川　どつちみち家へ返事をしてやる約束で來たから――
恭平　さうかい。
ひさ　何なら、正子をやりますよ。
立川　イエ、鳥渡かへつて來ませう。
恭平　ぢやすぐ來てくれ玉へね！（間）皆遲いね、怎したんだらう――鈴木君なんぞは定刻には必らず來るつてハガキまでよこしたんだけど……
立川　定刻か……
（立川が、立つてかへりかける所へ、「今晩は……」と

おはるさん（二十五）が臺所から這入つて來る。銘仙の着物に、同じ羽織を着て、イキな丸髷に結つて居る。）

恭平　遲いぢやないか。

おはる　だつて人が來ちやつたんですもの、けどまだ誰れも來てないんでせう？……それ御らんなさい。（と風呂敷包みを、ひさ子に渡して）甘栗、少しばかしだけど、暖かいんですよ。

ひさ　谷口さんは？

おはる　あとから來ますつて……已れに川柳なんか出來るか知らんなんて云つてましたよ。

立川　おや、鳥渡失禮。

おはる　おやおかへり？

立川　すぐ來ます……

（立川が行きかけると、玄關の格子が、がら〳〵と開く。）

恭平　鈴木君たらう。

立川　定刻だからねハヽヽヽ。

（ひさ子が取次に出て、「愛耳さんが入らつしやいました！」と云ふ。）

恭平　愛耳さん？……さあ、お二階へ。

（玄關の客は二階へ上る音がする。立川はその間にかへつて行く。）

（「おはるさん、臺じゆうへお火を下さい」とひさが云ふ。）

おはる　はい〳〵。

（と、臺所から、臺じゆうを持つて來て、火を取つて行く。）

おはる　タアちやんこまるわね、はしか？

恭平　さうだらう。

おはる　さうだらうつて、分らないの？

恭平　とにかくイヤんなつちやつた。

おはる　でも音無しいわね――、ほんとにえらいわね、とても、他所の子なんぞ、こうぢつとしちや居ませんよ。

恭平　そりあ、已れの子だもの。

（玄關があく。）

おはる　どなた？

玄關の聲　濁浪です……金田です。

恭平　あゝ、濁さん、さあ二階へ行つて下さい！

（玄關の客は二階へ行く。）

（おはるさんも二階へ行く。）

（ひさ子が下りて來て茶を入れる。）

恭平　いろ〳〵氣の毒だね。

さひ　（明るく笑ひながら）いゝかげんに、氣げんよくなさいよねッ――二階へ入らつしやいますか。

恭平　うん！
（と、立つて、太郎の頭を壓へて見て、）
ひさ　あついね。
恭平　さうですか？
ひさ　おさへて御らん！
恭平　（太郎の頭をおさへて）　さうですね
ひさ　九度五分位あるかな。
恭平　計りませうか？
ひさ　うと〱してるから可哀相だ……
（所へ、田村さんの奥さんと、正子がお湯から出たての血色のいゝ顔で臺所から這入つて來る。奥さんは、二十四、近代的の美しい顔をして、ハイカラに結つて居る。）
（正子は、十一で、紺の洋服を着て居る。）
田村の奥さん　（廣島なまりを交ぜた東京語で）　只今……旦那さま今ばんは――
ひさ　どうも奥さま恐入ります――お姉ちやん、よかつたね、さつぱりしたでせう。
正子　えゝ、ずゐぶん垢が出たわよ。
ひさ　そのまゝで寢るまで入らつしやい、今日は川柳の會だから下へ寢なきやならないからね。
正子　はい！

（玄關が明く。）
（ひさが「どうぞお二階へ……」と云ふ。）
（「どうも遲くなりました、相すみませんでした……丁度……」と云ひながら、鈴木が襖の間から顔を出す。十九貫と云ふ立派な體に黒い洋服を着てロイド眼鏡をかけて居る。）
恭平　やあ、定刻なんてものは、遲いもんですね……
鈴木　恐入ります、そのかはり、おわびのしるしに……（と菓子折を出す）
ひさ　どうも恐入りました！
鈴木　どなたか、おわるいんですか。
ひさ　いゝえ小さい方が少し……
鈴木　そりあ、そりあ……
恭平　さあ、二階へ行つて下さい！
鈴木　はい！
（鈴木は二階に行く。）
（かくして、又客が來て二階に上る。）
（しばらくして、臺所から、立川が着物を着かへて、這入つて來る。）
立川　やあ……誰れか來た？
恭平　愛耳、青村、濁浪――
立川　ホーめづらしいね濁浪は……定刻先生は？

ひさ　今入らつしやいました！　おわびのしるしにこれですつて。（と菓子折を見せる）

立川　恩太郎はかたいね、本當にわるいと思つてるんだぜ……奥さん、へい。（と新聞の紙包みを渡す）

ひさ　何です？

立川　まつだけだ相です――信州から持つて來たんですがね――さあ、どうですかね。

恭平　東京で賣つてるなア、大抵信州ものだ相だよ。

立川　さうだつてね、味に變りはない相だが、少し香りがうすい相だね。

ひさ　（にほひをかいて）そんな事はありません、いゝにほひがしてますわ……田村さんの小母さん、旦那さまに少し燒いて御上げあそばしたら怎です。

田村の奥さん　はあ……ありがたう御座います。

ひさ　お持ちになりますか？

田村の奥さん　己れもあとから、行くなんか申しとりました。

正子　へーン、小父さんに川柳が出來るもんですか――小母さん、私川柳作つたわよ、「先生に別れがつらい卒業生」……いゝでしよ。

恭平　うるさい／＼！

（おはるさんが、二階から下りて來る。正子太郎の側に坐る。）

おはる　お茶持つてきませうか。

ひさ　どうぞ。

おはる　お菓子は――？

ひさ　（恭平に）何か買つてらつしつたんでしよ？

恭平　うん！　八百屋の前を通つたら、ギンナンがあつたから買つて來た。燒いて喰はうと思つて……

おはる　それを生で出すんですか？……實に風流だわね、第一お金がかゝらなくつていゝわ。

ひさ　これは？（と鈴木のくれた折を示す）

恭平　勿、出すのさ。

（ひさと、おはるさん、菓子折から菓子を食器にうつして居る。）

ひさ　（耳を立てゝ）ウタ？　何か云つたかい？……

（しばらく沈默。）

おはる　女中がわるいんですつてね、何處がわるいの？

ひさ　咽喉が痛んで熱があるんですよ。

おはる　おやきつと扁桃腺だ！　此頃流行るから……大變いゝ女中だのに困るわね！　十七でしよツ？――家のも十七――けど、此所の方が柄が大きいわ。

（しばらく沈默。）

恭平　今朝、「武玉川」を又讀んだがね、いゝ句があるね――

い丶句と云ふより、全く他の文藝に見出せない言葉の表現があるのに敬服するね——何て云ふか、物の見方もちゑふし、云ひあらはし方も梱樽とは全然別な感じだね——「をどりがすんで人くさい風」と云ふのは恐たね。

立川　いゝね。

恭平　「切れ盃を供が見て居る」は？

立川　成程——

恭平　「今出た海女（あま）の荒い鼻息」。

立川　何て云ふか、すごい力があるね。

恭平　「闇のとぎれるうどん屋の前」。

ひさ　いゝかげんにお二階へ入らつしやいよ。（と、入をよせて云ふ）

立川　さあ行かう。

（恭平と、立川とが二階に行く。すれちがひに、谷口が這入つて來る。谷口は、恭平と同年輩で丈のひくい男でおはるさんの亭主である。米琉（こうりう）のかすりに同じ羽織を着て、チョコンと火鉢の前に坐る。）

谷口　今日は——

ひさ　どうも、おはるさんを今日はありがたう御座いました。

谷口　なアに、——太郎ちやんがわるいんですつて？

正子　小父さん、はしかなの。

谷口　はしか——はしかさうだらうと思つた！

おはる　又駄洒落ね、此頃は、餘計ひどくなつたんですよ。

（ひさ子に）

谷口　ハ、、

（いつか、田村の奥さんも太郎の枕元へ坐つて、紙で何かを折つて居る。）

（ひさ子とおはるさんは二階へ行つたり下りたりする。）

（しばらくして、女達と、谷口とだけになつて、みんなほつとしたやうな落つきを見せる。）

（おはるさん、甘栗を皆の前に出す。二階で笑聲がする。）

おはる　大した事は無いんでせう？

ひさ　太郎ですか？……えゝ、先生はちつとも心配ないつて仰有るんですけど、何しろお父さんがイラ／＼しちやつて、病人よりその方が大變なんですよ。

谷口　一人息子だから……うん！（とひとりでうなづく）

（しばらくすると、恭平が、下りて來る。）

（皆恭平を見る。）

恭平　あの何はないかね、あのそれ、パンは——？

ひさ　パンは御座いません？

恭平　その、パンぢやないよ、そら、パーンてやる奴さ、

そら、紙をとぢるものさ。（と手の平で物を打つ眞似をする）
谷口　ホッチキスかい？
恭平　さうだ！　ホッチキス。
ひさ　どんなものでせう……
恭平　あゝ、さうだ！　分つた、やつぱり二階に有つたんだ！
（と、つか〳〵と二階へ行きかけて、此度は又ぬき足のやうに歩いて太郎のひたへに手をあてゝ見て）
恭平　（聲をひそめて）　オー、大分下つたやうだぜ！
ひさ　いゝあんばいですね。
恭平　うん、下つた！　ありがてえぞ！
おはる　大丈夫ですよ、父さんのやうに心配しちやあ、それこそ大變だわ。
恭平　さう云ふけど、せざるを得ないよ。
おはる　そりあさうだけど……
恭平　（ふいと考へて）　己れ何に下へ下りて來たんだつけ？
谷口　ホッチキス……
恭平　さうか——谷口、二階へ來いよ。
谷口　あゝ、あとで行く。
（恭平二階に上る。入れちがひに、二階から鈴木が下りて來て）
鈴木　鳥渡はばかりを拜借……
ひさ　さあ〳〵……（と立ち上つて）電氣をおつけ致しませう。
鈴木　分つとります。
（と、座敷をぬけて、下手の側面の障子の外へ出る。）
おはる　父さん、少し變ですね。
谷口　藝術家たからなナ、神經がするどいんだよ。
おはる　いくらするどいつたつて……義姉さんも大變ね——
——
ひさ　妾は、馴れてますから、いつも笑つてるんですよ。もうあつかつちやうんですねハヽヽヽヽ（と極めて無邪氣に笑ふ）
（極めて、ひそかに、田村さんの御主人が這入つて來る。）
（此の間に、鈴木は、再び二階へ行く。）
ひさ　入らつしやいまし……あの、こちらがおはるさんの旦那さまです——田村さんの御主人……
谷口　谷口です、いろ〳〵おはるが御厄介になつてます。此所の家とは、もう親類以上……
おはる　私の實家で御座います。
正子　あら嘘！　小母さんの家は麻布ですから……

おはる　うそよ、小母さん、正子さんのお母さんのおなかから出たのよ。
太郎　ウソツケ、バヽア。
田村の主人　おや、太郎さん、起きてたのだね。
太郎　なんだい、田村のぢヽい！
おはる　大變だわね、ぢゞいだのばゞアだのつて……
太郎　何だい、こん畜生！
ひさ　にくまれざかりで……
太郎　母アさアん……（と甘へる）
（ひさ子は、太郎の枕元に坐る。）
ひさ　田村の小父さま、お二階へ入らしつたらいかゞです。
田村の主人　とても〳〵！
おはる　入らつしやいましよ。
田村の主人　はア、ありがたう。
おはる　それぢやあ、栗はいかゞです……いかゞですつたつて、もう大抵皮ばかりになりましたけど……
谷口　お前の云ふ事は……
おはる　何です……？
谷口　何でもいゝよ。（と笑ふ）
田村の主人　お勤めですか……
谷口　はア、鐵道の俗吏をして居ます――今にゾクリと首を切られるでせう……
おはる　又はじまつた！
ひさ　然しよく出ますねハヽヽ。
谷口　おつとめですか？
田村の主人　はア。
正子　小父さんは、地震をしらべるお役所ね。
田村の主人　さうだね。
谷口　氣象臺の方ですか？
田村の主人　いゝえ、農商務省の、地質調査……ア、舌がまはらないハヽヽ。
田村の奥さん　自分のお役所のはなしをするのに、いつも舌がまはらないつて大笑ひなんで御座いますよハヽヽ……
……
谷口　地震の豫測つてものは出來ないものですかな……
田村の主人　怎も、ナマヅに聞くより仕方がないやうですな。
正子　アライヤーダ、地震はナマヅぢやありませんから。
田村の主人　それぢや何だね？
正子　斷層地震ですから、泥が急にヘツコムんですから……
……
（このはなしの間に、相當の時間が經つた事になる。然し、それは上演の際少し手心をすれば大してむづかしい問題では無いと思ふ。）

（「御めん——」と玄關で云ふ。）
（おはるさんが取り次ぎに出る。）
（そしてひさ子を呼びに來る。）
（ひさ子が取り次ぎに出る。）
（玄關の聲。）
（ひさ。まあ、御めづらしい、よく入らつしやいました、さあ〳〵。）
（男の聲。丁度、震災後はじめてゞすな。）
（恁云ひながら、ひさ子を先に、恭平の川柳仲間の御友達で、お醫者樣の高村綠園先生が、洋服で這入つて來る。年は四十二三、きれいに分けた頭には大分白髮が見える。）
（茶の間では、高村に蒲團だの茶だのを出す。）
ひさ　（二階に向つて）父さん、綠園先生が入らつしやいました。
（恭平が急いて二階から下りて來る。）
恭平　やあ、どうも、よく入らつしつて下さいました——今丁度宿題の撰にかゝつた所です。
高村　イヤ、今日はね、久しぶりで、只川柳氣分にひたり度いと思つて、遲いと思つたけどやつて來たんですよ——皆來て？
恭平　えゝ、放魚は來ません！
高村　怪しからんね。
恭平　怪蟲さんも見えません。
高村　吉田には會つたよ！　大阪へ行きました——勿論[illegible]次郎は來られない……
恭平　えゝ、やつぱり腰が立たない相ですから……
高村　やつぱりね！（と獨りうなづいて）結核ぢやないかと僕は思ふね。さもなけりやあゝ長いわけは無いもの。
正子　先生入らつしやい。（と御辭儀をする）
高村　おゝいゝ子、いゝ子、大きくなつたね！　ねんねですか？
ひさ　はい、少し、熱が御座いまして……
高村　はしかぢやないかね、痲疹ぢやあ……大變はやつてるから。
恭平　どうもさうらしいんですけど……
高村　出て來ませんか、恁た發疹が……？
恭平　體には出ましたけど……
高村　體には……？　ポツリ、ポツリと？
恭平　いゝえ一體にです。
高村　一體に……ハテネ？　はしかなら、先へ、變なセキをして、眼たの口中たのの粘膜を冒して來なくつちやならないんだが……

恭平　もつとも、形の變つて來るのもある相ですね。
高村　あるにやあるけど、普通痲疹と云へばね——まだたつたんですか？
ひさ　それがよく分らないんでございます。
高村　分らない？　もつとも、俗に三日はしか、風疹つてのもありますからね——
恭平　はしかと、猩紅熱とは、鳥渡分らない相ですね。
高村　さう（半ばうなづき半ば考へて）然し、發疹の形がまるでちがふさ。
恭平　そりあ代表的なものはでせう？
高村　代表的でなくつても……いつからわるいの。
正子　私の運動會の日からです。
ひさ　二十五日で御座います。
高村　二十五、二十六、二十七、……とつおしてももう、分らなくつちやならない……一ッ、拜見しやうかな。
恭平　えゝ、どうぞ。（うれし想に）
ひさ　川柳の會へ入らしたのに、ほんとに恐入りますわね。
高村　なアに……
（と小さなカバンを持つて、膝で病人の方ににじり出る。）
（おはるさん、ひさ子の耳に口をよせて「お手洗ひ……」と相談する。）
ひさ　すみません、洗面器を瓦斯へかけてわかして頂戴。（と小聲で云ふ）
（おはる、臺所へ行く。）
（高村診察をはじめる。）
（一同の氣持が緊張する。）
高村（子供を診察しながら）坊や、怎したね？——さあ、べろ出して御らん、——おゝよし／＼、御利口だね。
（と高村、喉を見やうとして、明りの工合を調べる。）
恭平　暗いですか？
高村　ナニ……
恭平　おい、懷中電氣があるだらう？　夜警の時使つた……
ひさ　さあ……
恭平　ある、己れの鐵の道具の中にある筈だ……出して御らん……
（ひさ子、仕方なさ相に、納戸の方へ這入つて、やがて懷中電氣を持つて來る。）
恭平（手をうんと延ばしながら）[illegible]箱にあつたらう？
ひさ　いゝえ、先から手だんすにあつたんです……
（恭平、高村の前に、電氣をつけやうとするが灯がつかない。）
恭平　正子、お前あすこの電氣屋へ行つて、入れかへて貰つといで。

正子　はい！（と退場する）

高村　入りません、入らん、入らん――分ります……（と、體の方の診察にかゝつて、胸をはだけて見て）イヨウ、出てるね……（と發疹をしらべ）こりあ痳疹ぢやありませんよ。

ひさ　左樣でござんすか？

高村　えゝ、痳疹の發疹はこんな形はして居ませんよ。

恭平　さうですか、お醫者さまも、その點を心配して、あるひは猩紅熱になりやしないかつて云つてましたがね……はしかでないとすると何でせう。

高村　無論猩紅熱でせう。

恭平　（わく／＼しながら）さうですか。

高村　えゝ、もう此位體に出て來て居れば、僕なら猩紅熱と斷言しますね。（と一同の顔を見て）然し、病氣としては、猩紅熱の方が、かるいですがね――何しろ、熱が高い、（と計つて見て）四十度三分――頭丈でも冷やしてやつたらいゝでせう、氷枕でもあてゝ……

（田村の奥さんは、眞青な顔をして、その主人のそばに行つて、何かはなしをして、二人臺所の方へ去る。）

高村　（恭平の顔を見て）君、心配にないよ、一週間――、さう一週間もたてばすぐなほるよ、――可哀相に、よしよし。

（おはるさんは、その間に手洗ひを出す。高村手を洗ふ。）

ひさ　どうも、恐入りました！

高村　怎しまして、御心配はありませんよ。

恭平　ありがたう――

ひさ　さあ、どうぞお二階へ――

（高村と、恭平二階に行く。）

（しばらくして、正子が懐中電氣を光らせながら這入つて來る。）

正子　田村さんの小母さんに會つてよ、氷買ひに入らつしやるんですつて――

ひさ　小父さんは――？

正子　小父さんは、助川先生の所へ行つたの。

ひさ　本當に田村さんは御親切なんですよ。

おはる　さうね――本當に出來ない事ね。

（しばらくすると、玄關があいて、和服の上に白い手術服をつけた助川先生（四十前後）が少しあわて氣味に這入つて來る。）

助川　怎かなさいましたか――

ひさ　いゝえ、別に怎つて事も御座いませんけど、……正子さん、お父さんに、先生が入らしつたつて云つてらつしやい。

（正子二階に上る。）

助川　いかゞですか？

ひさ　只、熱が高う御座いまして、只今四十度三分御座いました……

助川　發疹のある度には、怎うしても熱は高くなります——先程も申上げましたらう？

ひさ　はあ……

（二階から恭平が下りて來る。）

ひさ　今、田村さんの旦那さまが、先生を願つて下すつたんですよ。

恭平　ホー？

ひさ　それから奥さまは、氷を取りに行つて下すつたんですよ

助川　氷……？召上り度いと仰有るんですか……

恭平　いゝえ、さうぢや無いんです……實は、今日私の所に川柳の會がありまして、その會に來る人で、お醫者さんがあるんです——それが、來られて、太郎を診て下すつたんですが、さつき、先生に伺つたやうに、怎も猖紅熱のやうぢやないかつて云ふもんですから、それなら一應診ていたゞいた方がいゝと思ひまして……お休息の所を恐入りました！

助川　なアに！……で、その御方は、猖紅熱だと仰有るんですか。

恭平　いゝえ、私がさつき先生が、もしかすると、猖紅熱になつて現はれて來やしないかつて仰有つた御はなしをしたもんですから……

助川　成程、——そのお醫者さまを、呼んでいたゞきませう。

（おはる、「よし來た！」と云はぬばかり、二階に行く。間もなく高村と一所に下りて來る。）

高村　どうも、わざ〳〵恐入りますな、私は此所の家の主人の、文藝の上の友達で——今日は川柳の會に來ました所が……

助川　私は助川……（と名刺を出して）あなたの御名刺をいたゞきたう御坐います。

高村　はア恐入ります。（と名刺を出す）

（しばらく沈默。）

高村　子供は怎御覽でせうか？

助川　さあ怎御らんになりましたか？

高村　さつき、此所の主人にも申したのですがな、怎も發疹の工合が……

助川　痲疹とちがう……

高村　やうに見えるんですがな私には——

助川　もつとも、例外はいくらもありますが……

高村　そりあ勿論ですが、はしかとしたら體にあれ丈出て居らんですから、もう粘膜を冒して來なきアなりませんからね！

助川　一番最後に粘膜を冒して來るのもありますから……それは、その人の體質にもよりますし……

高村　勿論さうです……が、今も二階で主人があんまり心配して居ますから。

助川　猩紅熱と云ふ風な……

高村　まあ、たしかにと云ふんぢやないが、そんなもんぢやないだらうか……

助川　さう御診斷でしたか。

高村　診斷と云つて、御承知の通り、はしかと猩紅熱なんて奴は、全くその、怪しい奴になると最後まで分りませんけどね！

助川　ですから、私、さつきも御主人に申上げたんです、二十年前には、全く分らずに居たんだつて事を――申しましたね私。

恭平　はア、それを、高村先生にも云つたんです――それで、あなたも、その點は御心配になつて居られたからつて、私が云つたもんですから……

助川　見てもらひませう――

恭平　（何の事だか分らずに）はッ？

助川　私は、屆けますよ！

恭平　屆けるつて仰有ると――

助川　とにかく警察へ屆けませう！　猩紅熱は傳染病の中でも恐ろしく警察の方でも神經過敏に考へて居ますから……

（一同が、急に恐ろしい不安に襲はれる。）

高村　それ程の事も無いでせう。

助川　いや然し、一人でも、さう云ふ疑ひを持つて居られる人があると、私も不安ですからとにかく、私は屆けますよ！

恭平　然し……

助川　私はイヤです！　私の責任上、もしさうだとしたらインペイした事になりますからな。

恭平　然し先生は、さう云ふ風に御診斷になつたんぢやないんでせう。

助川　私はさつきも申上げたやうに、まだいづれとも確定しては居ないんです。

恭平　そんなら、よろしいぢやありませんか。

助川　私はイヤですナ……

おはる　――屆けるつて云ふと、自動車が來て、ブウッと避病院へ連れてかれちまふんでせう――そんな可哀想な事をしちや大變ですわ。

助川　然し、さう云ふ規則で、殊に、此所へ分署が出來てから大變やかましいんですから――現に、最近原宿の醫者が後から論議されて、大問題を起して居る際ですから、ともかく屆けませう、（主人に）屆けますよ。

高村　ねえ君、（主人に）規則は規則でも、そこが御近しい仲なんだから、何とか先生に御願ひして、自宅治療をしていたゞいたら、――ねえ、そりあ、こちらで、隔離室のある病院さへさがせば傳染病院に行く必要はないが――何も、今そんな必要は無いと思ふがわ！……（助川に向つて）ねえ、いかゞでせう、私からも御願ひしますが、一つ御近しい間柄ですから……

助川　御近しい仲丈に私はイヤですな――後で問題でも起きた時に――

恭平　怎云ふ問題で御座いませう。

助川　つまり、インペイです。

恭平　然し、高村さんは、猩紅熱たつて仰有つたわけぢやありませんよ。むしろ今朝程の先生の御言葉を僕が申上げたのに對して、さう云へば心配だと云ふ風な事を仰有つたのを、丁度來て居らしつた、田村さんが心配して、先生を御迎ひに行かれたんですよ――

助川　ハア――然し。

高村　本當に主人の云ふ通りです。僕は今日文藝のつきあひで偶然遊びに來ましたので、決して、主治醫のあなたがあるのに呼ばれたなんて云ふのではないのですよ！――それに、病人も、まだ咽頭部に何の變化もなし……

助川　私も、咽頭に變化さへあれば、勿論猩紅熱として屆けますが……

恭平　そんならすべて確定してからにしていただき度いと思ひます。

おはる　本當にさうしていたゞかないぢやア……

助川　そんなら防疫醫に見てもらひませう、見てもらふ丈ならいゝでせう。

恭平　防疫醫なんて、そんないゝかげんな人に子供を見せる事はイヤです。私は、先生に全部御まかせして居るんですから、先生の前に生命を投げ出して居るんですから――とにかく、凡ての事は明日に願ひませう。

助川　いけません！

恭平　怎うしてゞす？

助川　明日になつて、疑が取れたらこまりますから……

恭平　疑ひが取れたらそんないゝ事は無いぢやありませんか。

助川　然し、それでも、やつぱり私の誤診と云ふ事になりますから。

恭平　然し……

助川　いけません！
ひさ　明朝に願へませんでせうか……
助川　わしは、病坊ですから……
高村　先生、とにかく、穩便に願ひませう、要するに病人さへなほればいゝのですから。
助川　然し、今問題の起つて居る際ですから——それに、女中さんも大變ノドが痛むのですから、もし明日にでもなつて猩紅熱にでもなつたらそれこそ大變ですから、女中さんと診ていたゞきませう。
恭平　高村さんに女中なんぞを診ていたゞく必要はありません。
助川　然し、女中さんはノドが痛むのですよ。もし猩紅熱だつたら怎しますか。
高村　然し……
恭平　高村さん、よろしう御座います、とにかく二階へ入らしつて下さい。どうかさうして下さい——
高村　さう、ぢやよく御近所の事だから御願ひしてね……
（と高村二階に行く。）
（臺所で、「エヘン、エヘン」と云ふ故意とらしいせきをして、田村の奥さんが人さし指をまげてしきりに、ひさを呼ぶのが影にうつッて見える。）
（ひさ子臺所に行く。）

助川　タバコ——
おはる　はい——（と巻たばこを出す）
助川　タバコぢやありませんタバコ盆——
（おはるマッチをすつて、助川のたばこに火をつけてやる。）
恭平　先生、ともかく私からおわび致します。どうか御心持をなほして下さいませんか。高村君は、先生と私共と、こんなにお親しく願つて居ると云ふ事を知らないで、つまり、自分の方が私共の内輪のものとして先生に對して居たのですからあるひは失禮な事があつたかも知れませんが……
助川　帝大ですか？　あの方は——
恭平　さうです。
助川　たとへ、大學教授でも私は、自分の診斷を批評される事は不快です。
恭平　先生の御心持はよく分ります！　然し、高村君が批評したのでなく、私から云つたのですから、——それに、先生は、猩紅熱だとは御診斷にならないのですから、それでよろしいぢや御座いませんか。
助川　然し、疑ひはあるんですから。
恭平　そりあ分つて居ます。
助川　とに角診てもらひませう。

恭平　先生、私はこれでも相當の教養のある人間のつもりで居ります。これが初めから先生に願つて居て、どうも様子が變たから一應屆けると仰有つたのなら、私は決して女々しい事は申しません！　然し、今夜の事があつて急に先生が屆けると云ふ事を仰有ると、私は全くこまるんです！

（ひさと、田村さんの夫妻が這入つて來る。）

恭平　高村君は本當の好意でやつてくれた事が、先生の感情を害してその爲に大變な事になつては、本當に私等一家がこまります。

助川　ですから、只診てもらふ丈で、その上でさうでないと云へばい丶ぢや無いですか。

恭平　防疫醫がですか。

助川　さうです。

恭平　そんなら、私は先生の御氣に入る誰れでも呼びませう、どんな博士でも願ひませう。そしてその上でたしかめていたゞきませう――警察醫は少しの疑ひでも連れて行きさへすればその職責はすむんです。連れて行かうとする人です。私は、そんな醫者などに、我子を診察してもらひ度くはありません。

助川　然し、私は、醫者として疑ひのあるものは必らず屆けてくれと分署長からくれ〴〵も云はれて居ますから！

――それに、最近問題のあつたばかりですから……

ひさ　本當に先生御かんべん下さいませんか――

助川　いけませんな……

ひさ　――高村先生に、診ていたゞきさへしなきやよかつたんですね。

助川　坊ちやんが、病氣におなりにならなきや猶よかつたんです。（と笑ふ）

恭平　先生御屆けになるならないはともかく、感情丈しづめていたゞき度いと思ひますが……

助川　わしは、怒つては居ません、こんな事にはなれてますから……然し、もしあの方が冗談にでも他におはなしになると大問題ですからな。

恭平　何をですか。

助川　もし左様だと、インペイした事になりますからな。

恭平　高村君はそんな人ぢやありません、あの人は文學の友達なんです、決してそんな人ではありません。

ひさ　さうですとも、高村先生は――

恭平　田村さんの奧さん、僕が、先生を怒らしちやつてこまつて居るんです、どうかおわびをして下さいませんか――先生は屆けると仰有るんです。

田村の主人　何ですかよく分りませんですけれど、こちらの御主人も大變心配して居られますし……

助川　はア……

谷口　それに、子供の事となると、少し夢中になりすぎる人ですから……

助川　はア。

田村の主人　どうか、明日まで待つていたゞき度いですが……

助川　駄目ですな――

田村の主人　怎うしてもで御座いますか……

助川　私の、責任になりますからな。

おはる　意地わる！（とこらへ切れなくなつて怒鳴る。）

恭平　お屆け下さい！

（とこれもこらへ切れなくなつて殆んど同時に云ふ。）

田村の奥さん　まあ旦那さま……

谷口　おい、待てよ！　おはる、お前が何だつてそんな失禮な事を云ふんだ！

恭平　よろしい！　御屆け下さい。僕が、（と胸をつまらせて）僕が太郎を抱いて避病院に行つてやるからよござんすよ！

田村の主人　まあ然し、……ともかく、先生明朝まで御待ち下さいませんでせうか――只今すぐ相談をして御宅へ伺ひますから……

助川　わしは、決して、怒つて居るんぢやありません――只、原宿で問題になつたばかりですから……

谷口　はア、よく分りました！

助川　では、失禮します！――どうか、あの方にもよろしく、そして、此の事は、どなたにも仰有らないやうに――

（助川、谷口、田村の主人、ひさ子に送られて、玄關から退場。一同元の座に戻る。）

谷口　お前が餘計な事を云ふもんだから……

おはる　でも、父さんよくあれ丈あやまれてね――……爰本當に氣の毒になつちやつて――

恭平　太郎、太郎、何にも心配は入らないんだよ！

太郎　お父さん、僕こはい……

田村の奥さん　大丈夫、大丈夫！　何でもないから……

（二階からどや〳〵人の下りる音がして、つゞいて玄關のあく音がする。）

（しばらくして立川が一人座敷に現はれる。後から正子が來る。）

立川　みんな、かへしたよ――散會したよ……

恭平　…………

ひさ　綠園先生は――

立川　餘計な事をしたつて、大變心配して居ましたかね……あんな醫者もないつて驚いてましたよ。

おはる　本當ですね、まるで、氣狂じみてましたよ。
ひさ　もつとも、先生は酒亂でね、時々奧さんにピストルなんかむける事があるんですつて……
正子　さうよ、助川さんの小父さんは、いつかも夜警の事で、豐田さんの小父さんにピストルを出したんですつて……
立川　こまりますね、そんな醫者は――
ひさ　けど、ふだんは、ほんとに、いゝ方なんですからね、――まるで猫みたいな方なんですからね――
立川　いくら猫でも怒つちや困る。
ひさ　屆けるんでせうか。
立川　屆けやしませんよ！
ひさ　さうですかしら……
立川　屆けたつていゝぢやありませんか、その時はその時で、あとでいくらでも爭へますから……
（臺所の所で、「御めん下さい！」。）
（と女の聲がする。）
（ひさが出て、しばらくたつて茶の間へ戻る。）
ひさ　助川さんの奧さんですけど……先生が、お酒をのんでて、すぐに田村さんの奧さんと私にお茶をのみに來いつて云つてきかないんですつて……奧さんも、涙ぐんでらつしやるんですよ――怎しませう。

田村の奧さん　私こまりますわ
恭平　お前行つて見て來い！
（ひさ子臺所から去る。）
おはる　正子ちやん　ねんねしなさいね。
（と納戸の方へ連れ去る。）
（しばらく沈默がつゞく。）
（やがて、ひさは、兩手を兩袖の中に入れ、指先丈出して、袖をふるはしながら飛び込んで來る。おはるさんも座に戻る。）
立川　怎しました？
ひさ　大變ですよ、何ですか、疊のまはりにお醫者樣の本をこんなにもつみ上げて、手にも厚い本を持つて、「僕は、みなさんと爭ひます！」て云ふんですよ。
立川　誰れと爭ふんでせう。
ひさ　田村さんの奧さんと私とでせう。
田村の奧さん　まあこはい！
恭平　ちがふ、ちがふ！　それは、高村さんと爭ふと云ふんだよ、他の醫者と爭ふと云ふんだよ！
ひさ　あばれ込んで來たら怎しませう……
恭平　表の戸をしめとけ！
田村の奧さん　私達もかへりませうよ……お大切に――
（田村の主人と奧さん、そつと臺所からかへる。）

おはる　奕達も行きませう、電車が無くなるといけないから――ぢや義姉さん　又來るわ！
ひさ　さう、どうも本當にすみませんでした！
おはる　太郎ちやんを御大切に――
谷口　ぢやさよなら――
立川　どりあ――
恭平　君はもう少し居てくれよ！
（谷口夫婦玄關からかへる。）
ひさ　（玄關て）ぢや、しめときますか？
恭平　しめろ！
立川　イヤ、本當に失敬するよ――お大切に……
（と立川も玄關からかへる。）
（ひさ子が玄關をしめて、座敷へ來ると、すぐ、表をトン／＼とたゝいて「助川です、先生が御用があるからすぐ來ていたゞき度い相です……」と云ふ。）
ひさ　看護婦ですよ……
恭平　うつちやらかしとけ……
（しばらく沈默。）
（又此度は、臺所をたゝく。）
（又沈默。）
（と又しばらくして此度は、男の手て表の戸がはげしくたゝかれる。）

ひさ　先生ですよ！
（やがて、臺所がひらかれる。）
（しばらくして此度は、庭にまはつて來て、左手側面の戸をわれるばかりにたゝく。）
（つゞけざまにたゝく。）
（こらへて居たが、怎しても返事をせずには居られない程に叩く。）
恭平　どなたです？――誰れです？
ひさ　あなた、出ちやいけませんよ！
（又たゝく。）
恭平　誰れです？
外の聲　助川です。（ともう舌もまはらない程醉つた聲で云ふ）
恭平　もう寢ましたが、何か御用ですか。
外の聲　ちよつと、來て下さい！　その、問題で、……問題の事で……
恭平　明日に願ひます！　此所に、僕の家ですけれど、近所もあります、靜かにして下さい！
（又叩く。）
恭平　靜かにして下さい！
外の聲　鳥渡、鳥渡……
ひさ　出ちやいけませんよ！

恭平　(ずつと戸のそばへ寄つて)　先生！　先生！　僕等一家は、今日まで、五年も六年も先生に、みんなの生命をおあづけして居たんですよ！　先生のこんな所をはじめて見せていたゞいて、失望しました！　先生、先生、どうか御かへり下さい！　先生のお名前にかゝはりますよ！

外の聲　ダンクシエン！　ダンクシエン……知つてるでせう……

(足元もあぶなく、外の助川がかへつて行く音がする。)

ひさ　こはい、こはい、何て人でせう！

恭平　いゝ所があるんだけどなア……

(と、胸をつまらせる。)

(しばらく沈默。)

ひさ　お二階片づけませうね……

恭平　さうね——火丈取つて明日でいゝだらう……ウタは怎したらう？

ひさ　さあ。

恭平　訊いてやれよ。

ひさ　ウタ、ウタや……寢てるのかい？

恭平　ウタ！

ひさ　疲れて眠てるんでせう。

恭平　見てやれよ。

(ひさ、ウタの部屋のそばまで行つて、ウタ、ウタと云つても返事がないので、ガラッと開けて見て、)

ひさ　父さん、ウタ居ませんよ

恭平　便所ぢやないか……

ひさ　(女中の便所をしらべて)　居ません！

(と云ひながら、ギョッとして、恭平の前に立つ。)

恭平　居ない？　(と急に恐ろしい不安に、襲はれたやうに、しばらく無言で居たが、ぢつと考へた上句、女中部屋や方々をたづねあるき——)　逃げたんだ！

ひさ　えゝ？　怎して逃げたんでせう。

恭平　さつきからの事を聞いて居て、自分も警察へ屆けられでもすると思つたんだらう……ウタは他人だからね……ア弱つたナー、實に弱つたなア……助川んちきしやう……

(とつかと太郎の側へ寄つて、太郎の額をおさへて——て)

恭平　アツイよ！

ひさ　さうですか……

恭平　とてもアツイよ！

ひさ　さうですか……

恭平　アツイつて云つてるんだよ！

ひさ　（もう我慢が出来ないやうに、眼に一杯涙をためながら）それが怎したんです！

恭平　何だと？

ひさ　いくら御ぢれんなつたつてあたしのせゐぢやないぢやありませんか……

恭平　何？

ひさ　あ！　あ！（と頭をふりながら）太郎も何も死んぢやうがいゝんだ！

恭平　何？……

（二人顔を見合はせて向ひ合ふ。）

恭平　（ぢつとひさ子の顔を見て、可笑しいやうな心細いやうな氣持て）さう怒るなよ！

ひさ　（少し笑ひかけて）ほんとに、イヤんなつちやいますわ！

（と云つて、自分の言葉に悲しくなつて、涙をぽろ／＼こぼす。）

（近所で、鶏が夜鳴きをする。）

——静かに　幕——

（十三、十一、二）

うす雪（一幕二場）

登場人物

延木吉太郎　ある芝居の座主（六十四歳）
中村富三郎　舊派の俳優（三十四歳）
おたま　その妻（二十七歳）
谷口政雄　ある新聞の記者（二十五六歳）
向阪長之助　延木の家の事務員（四十五六歳）
おあい　延木の家の女中（二十四歳）

時
暮れの十六七日の夜

場所
延木の家の内外

第一場　延木家の二階座敷

數寄をこらした十疊の座敷、正面に四枚の襖がたつて居て次の間に通じ、上手に床の間とちがひだな、下手は前後三尺の壁の間ずつと腰高のまどになつて居る。向つて左手のすみには、二枚折の屏風がたてゝあつて、畫は古名優の演じた歌舞伎十八番の看板畫と云ふやうなものがはつてある。

幕あく

と、小机を前にした延木と、事務員の向阪（こうさか）とが火鉢に坐してはなしをして居る。延木は、細かい茶みじんのお召に、同じやうな無地に近い羽織を着、向阪は、結城お召の赤色の目立つ唐棧がらのザク／＼した着つけ羽織に、十枚近く襟を重ねた胸をはだけて居る。しばらくして、召使のおあいが、一枚の名刺を持つて來る。

向阪　（おあいから名刺を受取つて）何だつて……？
おあい　旦那樣にお目にかゝり度いつて仰有いましたんで御座いますけど……
延木　どなた？
（向阪だまつて名刺を見せる。）
延木　眼鏡は……と、（眼鏡をさがして、ちつと名刺を見て）谷口政雄――
向阪　○○新聞の方ですよ。
延木　あゝさう！　谷口さんか……何の御用かな――もう通信は出したんだらうね。
向阪　えゝえ、そりあもうとつくに出しました！
延木　とつくにつてお前が出したのかい？

向阪　えゝえ、そりあ、あの事務所の方でちやんとする事になつてますから……

延木　する事になつてますつたつて、ちやんとしなきや駄目ぢやないか――よく調べて下さい。

向阪　へい、おあいさん、向へ電話をかけてね、古川さん居ますかつて……

延木　そりあ後でもいゝぢやないか、今お客さまの取り次をしてるんだから。（と女中を見て）あゝ、あのね、只今から鳥渡出かけなければなりませんが、僅かの時間でよろしければお目にかゝれますつて……申上げとくれ。

おあい　はい……それでよろしいつて仰有いましたら怎致しませう。

延木　お通し申すのさ。

おあい　はい……

延木　よく生體の無いやうにするんだよ。

向阪　新聞の御方だからね。

おあい　はい。

延木　（女中の立ち去るを見て）あゝ、向阪、お前さん行つて來なさい。

向阪　へい。

（向阪女中のあとから出て行く。）

（やゝしばらくして、）

（へー、白いものがやつて來ましたかとう〳〵？――どうも、ふつきり此の二三日冷えると思ひましたら……初雪ですなア。）

（と云ふ向阪の聲がして、谷口を案内して來る。）

（谷口は、背廣の洋服を着て、かくしに折たゝんだ新聞を入れて居る。）

延木　やあ入らつしやい。

谷口　やあ、どうも、お忙しい所を……

延木　いえなに！　丁度あいにくとな――おさむいぢや御座んせんか。

向阪　とう〳〵白いものがポツ〳〵やつてまゐりました想ですよ、谷口さんから伺ひますと……

延木　ほう――？

谷口　降つて來たつて程でもありませんが風の工合で、時々風花のやうな奴が……

延木　まあ、年内に一度降る方がようがせう――さあ、お樂に！

向阪　（いかにも氣なきかしたと云ふ風に）大將、自動車は何時に來るやうに致しときませう？（と懐中時計を出して見る）

延木　（半分眞にうけ、半分いゝかげんな氣持で）さう……まあ、ようがす、云ひますから……

（おあいがお茶を持つて來る。）

（しばらくして、おあいと向阪とは靜かに次の間の襖をしめて去る。）

谷口　ちよつと愁、掉尾の大事件と云ふ問題ですな……

延木　（芝居もの〻かけひきでなく、全く只の老人の氣持て）何がです？

谷口　何がつて、もうすつかり僕には分つて居る事なんですよ。

延木　（少し輕い氣持で）ホー、何でせう？

谷口　ハ、、何でせうはよかつたなア。

延木　い〻え、本當に何の事だか分らないんですよ。

谷口　ハ、、人がわるいな。

延木　さうですか、私はあなたこそお人がわるいと思つてますよ。何です？

谷口　片野の一件で伺ひに來たんですよ。

延木　片野ね？――富三郎の事で〻すか。

谷口　さうです！（とニヤ／＼笑ひながら延木の顏をじつと見て）事實ですか、片野の脫退問題は――？

延木　（あまり事の意外なのに愕然としたのであるが、そんな事があるものかと云ふ自信に力を得て、大方い〻かげんな風說だらうと思ふと、此度は反對に谷口をだまして、その眞相をたぐり出してやらうと云ふ考へで、只だまつて、どつちつかずのやうな顏をして居る）

谷口　（そんな事とは思はずに、自分の質問が急所にふれたなと思つて）どうです、あんまり早いんでびつくりしましたか？……然しねー延木さん、此の問題については、他の社はまだ夢にも知つちや居ないんですよ。それで云はゞ僕丈が知つて居るので特種も特種、うちの社のものでも知らない事ですから、一ッあなたの御意見を聞いた上で、明日の新聞に發表しようと思つてるんですよ――もう原稿はすつかり出來てるんです。

延木　なるほど――

谷口　驚いたでせう？

延木　さあねー……

谷口　それで何ですか、片野はやつぱり此の座から脫退する事に決定したんですか？

延木　さあ、何とお返事してい〻のかなア……が然し、何處からそんな事をおきゝでした？

谷口　そいつあ云へないが……勿論極めてたしかな筋からです！

延木　たしかな筋と云ふと……？

谷口　は〻〻、まるで談が逆になつちやつた！

延木　ですけれどあなた、あなたが、どんな風に御きゝたかと思ひましてね。

谷口　然し、それは事實なんでせう、脱退の意志のあつた事は――意志ぢやない、その申出のあつた事は――？

延木　まあ、事實と云へば事實、さうでないと云へばさうでない事にもなりますが……

谷口　と云ふと怎なるんです？

延木　ですから、あなたの御調べになつてる所を伺ふんですよ……怎したと云ふ事なんです？

谷口　要(つま)り、片野は、本年ぎりでこの座を去つて、春興行には出ないことになつたと云ふんですよ。

延木　それぢやあ、此の座を出て何處へ行くと云ふんです？

谷口　それが分らない點なんだが、僕の考へでは××の方へ行くのか、さもなければ日本座の座つきにでもなるのぢやないかと思ふのですが……

延木　××の方へ行くと云つて誰れの座へ這入るんです？　まさかに××だつて富三郎頭(あたま)の座を作る事もありますまいし。

谷口　僕もさう思ふんだがね……が然し、ともかく〇〇座を去ると云ふ事丈はたしかな事實ですねッ――もう、決定したんでせう？

延木　こまりますたアさう仰有られては。ともかく此所は、私の座であつて御承知の株式ですから、私として、あなたにしつかりした御返事をすると云ふ事はどうでせう？　よかれあしかれ一座に動搖のあると云ふ事は、春興行を前にひかへて大變な不利益な事になりますし――何云つたつて、此座で、高橋、太田をぬいては片野ですからね。

谷口　さうですね、それに近頃、とても新らしい方面には認められて來て居るんだから……

延木　然し、片野は、何の理由で、出るのでせう――もし出るとしたら？　理窟がないぢやありませんか。

谷口　そこなんだ！　實に僕にもそれが分らないんです。けれど、彼が、此所を去らうとしたそも〳〵の動機は、彼自身よりも妻君の氣持に動かされたと云ふのが本當でせうね――何しろ、おたまさんはあゝ云ふ風だし、又片野と來たら、あゝ云ふ風な藝術家氣質(かたぎ)ですからね。

延木　それぢやあ、片野の家内が何か不平でもあると云ふんですかね？

谷口　不平と云ふ事は怎か知らないが、要するに、自分の亭主を日本一の俳優にし度いんだね。

延木　片野が、此の座を出れば日本一になれますか知ら――
――

谷口　イヤもつと大に活躍さしたいんでせう花々しく。

延木　女の智惠ですねつまり――

谷口　まあさうかも知れないが、僕にはさうとばかり思へ

ない點がある、と云ふのが、此度の事についてのおたまさんの態度はそりあ生命がけと云ふ位で、鳥渡悲涙ぐましいやうな氣持もあるんでね。

延木　ホー？

谷口　えゝ、とにかく眞劍ですぜ！

延木　怎眞劍なんです？

谷口　つまり、片野を立派にするためには、自分の大切な貞操を投げ出してもいゝ位の覺悟だ相だから……

延木　貞操つて谷口さん、ありあ片野と一所になる前は、半玉時代から七年も世話になつて居た旦那があつたんだから……

谷口　その旦那つてのは深川の伊勢由の大將でせう？

延木　さうです！

谷口　それが、此度の脱退問題の一番の根本になつてるんだから面白いわけさ。

延木　（はじめて、それでは此のはなしは本當の事だなと云ふ不安が急に濃厚になつて來て）なるほど……（と深くうなづく）

谷口　（極めて明るい氣持で）よく調べたでせう？

延木　恐入りました！（と相手を油斷させて）實は私も調べましたが……谷口さんは怎云ふ風に御調べになつたかな……

谷口　（調子にのせられて）つまり、それ、先月あの植木店の何が亡くなつてお葬式があつた時、おたまさんも名取りではありかた／＼片野が大阪に居て行かれなかつたもんだから、ずつとおたまさんが植木店の方へつめて居ると、お通夜の席か、お葬式の日か、そこはよく分らないが、何年ぶりかで伊勢由の大將にぴよつこり會つたんだ想だ！——でまあ、それ／＼のはなしはあつたんだらう、ふいとはなしが途切れると、「近頃、片野は怎麼工合だね？」と、伊勢由の大將がおたまさんに訊いた想だ。とおたまさんが「ありがたう御座います、御蔭さまで……」と云ふ、伊勢由が、「いゝ工合かね？」と重ねて訊く——とおたまさんが「はい！」と口で云つて、怎した譯かほろりとした想です——はなしは、そこからはじまつて、何でも伊勢由の大將とおたまさんの間に、片野の當座の事から後々の事まで面倒を見る約束が出來たつてんだが、何でもその間には、例の田毎の女將も介在して兩方のはなしをまとめたと云ふ事だが、……そんな風な事とちがふかね延木さん……？

延木　（洒蛙々々として）まあ似たやうなはなしですね。

谷口　それでつまり、おたまさんは、片野を立派にしたい一心で、自分のからだを又伊勢由の大將にまかしたとかまかすとか——まあ、そこはそれいろ／＼の何だが、元

元伊々由は、おたまさんにほれてほれてほれぬいてるんで、おたまさんが、片野と一所になる時も、伊勢由の内面的には大悲劇だつたんだ想ぢやありませんか？
延木　さあ、そいつは知りませんがね、ともかくあのおたまはやりてですよ。
谷口　やりてだ！　片野もおたまさんがあると無いとぢやゑらいちがひさ。
延木　然し、はたして片野の爲にいゝ事かわるい事か――
谷口　さう／＼、藝人の生活と云ふ點から見れば怎だか知らないが、揚くとも、自分の妻の元の旦那の力に縋つて云々と云ふやうな不純な事は、鳥渡俟等には考へられん事だし、よし又それで成功しても、果してどんな氣持だらうと思ふなア……
延木　まさかに伊勢由もそれが當てゞ怎つて事もありますまいが、もう、あの年になつて、そんな餘計な世話は、いゝぢあごあせんか、まこと氣の毒と思ふなら、いくらでもその心持の見せ方はあらうぢやごあせんか！　私なんざあ、もうそんな事は面倒臭うがすがなア――それに今更、あの人が片野の體をいぢくつて怎なるんでせう？
谷口　さあ……それつてば、はなしはちがふが、一體、片野と云ふ役者は、延木さんに對しては、我儘の云へた何ぢゃ無いんでせう？　たしか、あの人の、親の代から……

延木　えゝえ、もう、あれは、私が生まして育てゝやつたやうなもので、まあ、第二の親　―向うぢやそんな事は思つちや居ますまいが――がまあ、云つて見りあさうなんです！
谷口　それぢやあ、辭退なんぞするつて云ふのは分らんぢやありませんか？
延木　さあねッ……
（二人がしばらくぢつとだまり込んで居る所へ、向阪が紙きれに何か書いて持つて來て延木に見せる。）
延木　よしッ！　待たして置け！
谷口　さて――と、ぢや今のは、事實として發表しますよ。
延木　まあ、鳥渡待つていたゞけますまいか。
谷口　然し、萬一他の社で何されると……
延木　ですから、明朝までお待ち下さいませんか――否やは、必らず明朝御電話で御返事致しますから……
谷口　電話と云つて、家には無いんだが……
延木　そんなら、手前共へおかけ下されば必らず申上げます。
谷口　何時頃――
延木　朝ならどんなに早くつてもかまひません。
谷口　さう――ぢやあ（と立ち上つて）然し、事實は事實ですね？

延木　さあ――それも明朝まで……
谷口　ハヽヽヽいゝぢやないかナア……
延木　いけませんよ！　營業上困ります。
谷口　僕も商賣だぜ。
延木　うらやましい御商賣ですなア。
谷口　あれだ！
（谷口正面からかへる。）
延木　御めん下さいまし！
（向阪は、谷口を送つて、又戻つて來る。）
向阪　立花屋の何をこちらへつて申上げませうか？
延木　待て……大變な事だよ。
向阪　何です大將？
延木　片野が、脱退するつて事、お前何にも知らなかつたか？
向阪　立花屋さんが、〇〇座を出るんですつて？
延木　さうだ！　お前、まるでそんなはなしを知らずに居たか？
向阪　えゝ、これつぱかしも！
延木　本當か？
向阪　本當かはしどうがすよ大將、私は何を大將にかくす事がありますよ！
延木　燈臺下暗しだなア……
向阪　本當ですか？
延木　谷口さんは、それを聞きに來たんだよ！　何處で調べたかナ。
向阪　へー？
延木　氣をつけなきや駄目だな！　段々と世の中がさうなつて來たんだから。
向阪　然し、ウチを出て、何處へ行く氣でせう――まさか、キネマぢやないでせう？　けど、損ですなア、あの人なんざあ、ウチに居りあこそ何だかんだと云はれるんぢやありませんか、もし他へ行けば、それこそ下づみにされちやいますぜ。
延木　然し、當人はさうは思はないんだよ。
向阪　さうですかね……
延木　ウカ〳〵しちや居られないぞ、若いものゝ氣持つて奴は又特別な所があるからなア。
向阪　然し、立花屋は、ウチに對して、そんなふざけたまねは出來ない義理ですぜ大將！
延木　まあいゝ、ともかく、當人を此所へ通さう……何だらうね、谷口さんと、片野と下で會やしまいね。
向阪　そりあもう大丈夫、ちやんと心得てます……
延木　よし、ぢや、わしは、鳥濱、はゞかりへ行つて來るからな、此所へ通して呉れ、そして火鉢をもう一つ入れ

て……

（と、延木は、去る。）

（向阪もそこらを片づけてから去る。）

（やゝしばらくして、片野夫婦がおあいに案内されて來る。片野は、一見俳優と思はれる顔立で、頭は無雑作にのばして、紋つきに袴をはいて居る。おたまは、髪を束髪にして、小排頬がこけ、眉宇に理智のひらめきが見える。お召の着つけに紋つきの羽織を着て居る。）

（おあいは、二人にしとねをすゝめ、手あぶりを出してしづかに去る。）

富三郎　（子供のやうに、室のまはりをながめながら）何だね、元とちつともかはつてないね、額も何も……

おたま　さうですか（と、額も見ずに答へて）ねー、あなた、しつかりしなきや駄目ですよ！　本當に、一生の運の開けるか開けないかの大切な時ですからねー

富三郎　あゝ！

おたま　大丈夫ですね？

富三郎　あゝ……

（おあい、二人に茶を持つて來て、又静かに去る。）

富三郎　ねー、何だか、胸が、むか／＼するやうだねー。

（おたまだまつて居る。）

（しばらくして、延木が静かに出て來る。二人しとねをすべつてあいさつする。）

延木　やあ……大變お待たせしたね、何だか無性に寒くたつて……何だつてぢやないか、何だかチラ／＼やつて來たつてぢやないか……降つてましたかね？

おたま　いゝえ、さつきしがた少し何してまゐりましたけれど……只今の所は。

延木　降つてない？……さうかね、雪もいゝが、あとが閉口でね……さあ、敷いておくれ！　そして、ずつと火のそばへ寄つて下さい……

（しばらく沈默。）

延木　（はなしを誘ひ出すやうに）うん……

おたま　あの、實は、今日上りましたのは、少し折入つて御願ひ致したい事が御座いまして……

延木　成程……

おたま　御伺ひ致しましたので御座いますが……

延木　脱退問題のはなしかね……

（突然延木に然云はれて、片野夫婦はびつくりする。そして、怎してそれが知れたらうと云ふ事を考へる間に、二人共ぢつと押しだまつて居る。）

延木　よもや私は知つては居まいと思つて來なすつたらうが、表と裡では二百人もの人間を使つて居るわたしは、片時でもうかつな考へでなんぞ居られる譯のものではな

いんだぜ！　延木の大將は耄碌してるからと思つて居たかも知れないが、今までの事だつて、何から何まで私の知らない事つてものは何一つ無かつたつて事丈は思つてもらひ度いね——だから、お前さんの此度の考へも、實はとつくから分つては居たが、怎なるのかと思つてぢつと樣子を見て居たやうなわけで、……今日あたりはやつて來るかなと心待ちに待つてたのさ……ハヽヽ、驚いたかね？

（片野とおたまはぢつと默つて居る。）

延木　ハヽヽ、まあいゝ！　それで、二人が揃つて來たと云ふのは、やつぱり暇をくれと云ふわけかね？

おたま　（云ひにくい事を殘らず相手が云つてくれたので、氣が樂になつたと云ふ風に）はあ、實はそのお願ひに………

延木　さうか！　まあそりあいゝ！　いゝとしてだが、もし私が暇をやらないと云つたら怎するね？

おたま　さう仰有れば致し方が御座いませんが、ウチの一生の大切な場合で御座いますから、よくその譯を申上げたら決して許してやらないなんて事は仰有らないと思つて伺ひました……もう片野も今の中に怎にか成りませんと又さう云ふ機會もまゐりませんし……それに……

延木　まあそのはなしはいゝとして……知つての通り、もう初春(はる)の興行も決つて居る事だし、それ〴〵のだん取りもついてる事なんだから、そのはなしは、はなしとして、一つ春永にじつくり相談しようぢやないか……怎だね？　それがいゝぢやないか

おたま　はア……ですけれど、手前の方にも、いろ〳〵と都合も御座いまして……

延木　そりあさうだらう、さうだらうが、そつちに都合があれば、私の方にも都合もあるつて譯だからね……

おたま　そりあもう……御尤で御座います！

延木　さうだらう？　殊には、人氣商賣で、春と云へばそれ〴〵みんなが智慧をしぼつて客を呼ばうとして居るとこなんだから、藪から棒に、今になつてお暇をいただきますと云はれても實に困るつてわけだからねー

おたま　へい！

延木　まあ、もう少し考へたほして見たら怎うだね？

おたま　はア、それが、怎して申し上げにまゐりますまでには、もう、いろ〳〵と考へぬいた上の事なんで御座います……

延木　すると、此のはなしは、ずつと前から考へて居た事だと云ふんだね。

おたま　はア……

延木　さうかい！（と考へて）すると片野、お前さんは、

ずつと前から、そんな氣持で、私の芝居に働らいて居たんだね？ ずつと前から……

富三郎 …………

延木 さうだね？ まあいゝ、が、斷つておくが、お前さんの方も……？ 十一月の興行の時も、十月の興行の時はとつくの昔から此の私にそむく氣で居たかも知れないが、私は決してお前さんに對して、そんな他人がましい考へは持つては居なかつたよ！ いゝかね、私は、今日だつて、お前さんに對しては、決してわるい氣持は持つて居ないが、お前さんは、長い間、私とは別な心で居ながら、ニコ〳〵してつきあつて居たと云ふのだね……役者だね！

富三郎 へツ？ （と眼を上げる）

延木 いーえ、よく白ばつくれて居られたと云ふ事さ……吾々爽には、とてもさう云ふ藝當は出來ないね、心を包んで、何でもないやうな顏をして居ると云ふ事は……

（富三郎は、正直に延木の云ふ事をきくが、おたまは何を此の狸ぢゝいめがと云ふやうな氣持で居る。）

（しばらく沈默がつゞく。）

延木 そこで、まあ、怎云ふ事情か、どう云ふ考へか知らないが、こりや一つ思ひ止まつたら怎だね？……こりあ私の方の立場ばかりの都合でなく、お前さんの一身に取つても重大な問題なんだから、殊には、お前さんと私との間柄だし、たまえと役者と云ふ關係でなしに、赤分にねり合つた相談をしないと大變な事になると思ふのだよ。私には、理が非でも飛び出して一つうんとやらうと云ふ若い人の氣持も分るが、さて飛び出して怎なるか、飛び出すつて事は雜作なく出來ても、さてそれからがなか〳〵むづかしい問題で、何處で旗上げをするか。何處の座へ行くか知らないが、芝居と云ふものは、決して他で見る程うまく行くものではなし、そりあまあやつて見なさい、金の事も心配しなきやならない、役者の事も心配しなきやならない、衣裳かつらの事から、おはやした、小道具だ、その上舞臺の事を考へなきやならないんだから、結局心配のあまり體をわるくする位の事が落ちで、金をなくなした上に役者に裏切られて、とゞのつまりは、借金の整理の爲に又何處かへ體を賣りに行かなきやならない事になる——あのそれ、ほら、何てつたつけ、さうさう松十郎、あれなんぞ御覧、たうとう活動役者までなつちまつたぢやないか！ あれなんざあ、怎して、おつとしてりあ大歌舞伎の役者になれるんだのに、少し智恵がまはる所へ持つて來て、伯父さんてのが山貫師だもんだからたうとうあんなになつちまつて、つまりあぶ蜂取らずだからね！……此間も、家の木下が京都で會つたら、

どうか口を利く役者になりたいつて云つてた想だが、さうだらうさね、……まさか、活動の方へ行くんぢやあるまいね?
おたま　え〻、そんな事は御座いません
延木　ぢや何處へ行くんだね?……××かね?
おたま　…………
延木　日本座かね?
おたま　まだ、そんな事は、少しも決めては御座いません
延木　すると、只、此の座を出度いと云ふのかね?
富三郎　……(さうですと云ふ顔をする)
延木　怎してさ?……此所を出て怎するのさ?(富三郎と、おたま顔を見合はせる)
延木　云つて御らんな、それとも、私が邪魔でもすると思つてるのかね?
富三郎　(そんな事は考へてやしませんと云ふ顔をする)
延木　云つたつていゝぢやないか、商賣をはなれて考へれば、それがお前さんの出世になる事だつたら、私だつてうれしい事ぢやないか——ねー、何故、此所を出ると云ふのだね?
おたま　何ですか、體も大變疲れて居るやうで御座いますし、少し、靜養した方がいゝなんてお醫者さまも仰有るもんで御座いますから……

富三郎　溫泉へでも行つて來ませうと思ひまして……
延木　溫泉はいゝだらう……が、それなら何も、此の座をやめないだつていくらも行かれる事ぢやないか
おたま　え〻、でも、もう何もかもすつかり片をつけて、芝居の事をさつぱり忘れて養生したいと申すもんで御座いますから……
延木　するともう役者をやめると云ふのかね?
富三郎　怎致しまして!
延木　そんなら猶更、いくらでも休んで溫泉へでも山へでも行つて來たら怎だね?
おたま　そんな我まゝも申して居られませんし……
延木　そんなら何かね、我儘が云つて居られないから退座すると云ふのかね?……もし私がいくらでもいゝから休みなさいと云つたら思ひ止まるのかね?……ねー、片野、もうめんどくさいかけひきはやめて、本當のはなしをしようぢやないか!(とキッとなつて)結局怎だと云ふのだね?
おたま　やめさしていただきます!
延木　片野、やめるのだね?
富三郎　え〻!
延木　理由は……?
富三郎　少し、勉強致しようかすから……

延木　此所に居ては勉強が出來ないかね？

富三郎　…………

おたま　實は、今日まで、何から何まで御厄介になつて居りまして、こんな事は申上げられた義理ぢや無いので御座います事もよく存じながら、怎してもお願ひしずに居られない事情になりましたやうなわけで……どうぞ、そこをお察しの程を願ひ度いので御座います……

延木　怎察したらいゝんだね？

おたま　ヘツ？（と變なかほをする）

延木　いえねー、今お前さんは、のつぴきならない事情になつたと云ふ風に云ふが、その事情は、はたからの事情かそれともお前さんの方で故らに拵へた事情か、それに由つては、お前さんの方が都合をよくして上げるために、私つてものが大變な馬鹿にならなきやならないからねー……だから、私としては、何ぜ此の座を出たいか、それをはつきり聞けばいゝのですよ……給金の不足かね。

富三郎　めつそうな！

延木　誰れか、いゝ條件で買ひに來たかね？

おたま　そんな事は御座いません！

延木　すると、旗上げがしたくなつたかね。

おたま　まだそんな事もちつとも決つちや居らないので御座います。

延木　ふーん！　何にもあて無しで出度いと云ふのかね？

おたま　つまり、長い事、縛られて居りました……

延木　縛られて居た？……誰れが縛つた？　誰れがお前の躰を縛つて居た？　縛る[illegible]か、云はゞ、わしの方は、お前の先代との縁故があればこそ、今日まで、どの位お前の爲に面倒を見てやつたか知れやしない、縛つたとは何と云ふ云ひ草だ！　已れも、お前の躰を縛つたなんて思はれてちやあ業腹だ！　よしッ！　もう何にも云ふまい！　縛つたと云ふなら自由にしてやらう！　怎とも勝手にするがいゝ！

（延木は、恐ろしく昂奮してやたらに煙草をのむ。富三郎は余くしよげて仕舞ふ。おたまは、此の言葉を利用して、それではお暇しますと云はうとする所へ、そつと、向阪が這入つて來る。）

延木　あ！　向阪、あの何へ電話をかけて、香盤を持つてすぐ來いッて云つてくれ！　春は、富三郎は出ない事になつたから……

向阪　大將怎したつて事なんですい？　何だか一向分りませんけど……

延木　いゝよ、已れは、此の年になるが、今まで一度だつて役者を縛つて働かしたなんて事は一度だつてありやしない！　かりそめにもそんな事を云はれちやあ、已れの

額にかゝはる！

向阪　そりあもう、大將がそんな事の無いつて事は誰れだつて知つてまさあね！　まあ、そんなに御怒りにならないで……大將がそんなだと折角入らしつた向うだつて工合がわるうがすから……

おたま　いゝえ、私がつい心にも無い口をすべらしたもんですから……

向阪　さうで御座いますか、何ですか、主人は例の一徹なんだもんですから……ねー大將、きげんをなほして上げて下さいませんか

延木　いや、己らあ怒つてやしないよ、只殘念に思ふのさ！そりあ、他から見たら怎だか知らないが、さつきも云ふ通り、まつたく富三郎の出世になる事だつたら、よしんばこつちに不利益な事でも我慢する所ぢやない、むしろ手傳ひ度い位に思ふのが、わしの性分なんだから……

向阪　さうですとも！（とおたまに）本當に左樣なんですよ！

延木　それだから、此度の事だつて、只ふら／＼とのぼせ上つて何かやつて見度いと云ふのだと大變工合が悪いと思ふのさ、飛び出して何かやる、うまく行けばいゝが、必らずうまく行きつこない……

向阪　さうですとも！　何處の芝居だつて御らんなさい四苦八苦ですから、現に暮れと云ふじよう、淺草なんざあ、新聞の讀者慰安かなんかで、五錢の切符で客の頭數丈摘へてるんですが、それでもやう／＼五分六分の入りだ想です。只の五錢で見せるんですぜ、平場一圓からの芝居を……

延木　來ないかね？

向阪　來ないも來ないも、アブもたからないつてなあの事だつて、此間もガマさんと笑つたんですがね……それに大きな聲ぢや云へませんけど、△△なんざあ、三十五錢日歩の金を使つてる想ですからねー

延木　みんなそんな風だ！　ねー、だから、折角出て戰ふのもいゝが、うまく行かずに又かへつて來るか、私はいいとしても、はたの役者が何だかだつて云ふにきまつて居るから、云はゞ此度は今よりもわるい立場にならなきやならない――そりあお前、みんな上べは何でもない顏をして居るが、どうかしてのりこさう／＼と云ふ腹で居るんだからねー

向阪　本當ですよ！　御宅なんざあ、云はゞ大將の御親類格になつてるから、どんなに工合がいゝか分りやしませんけど……他の芝居へ行つて御らんなさい！　そりあもう、おはなしにも何もなりやしませんから……

延木　高橋、太田――片野――いゝ地位だと思ふがなア…

……怎だい、思ひ止まつたら……

向阪　餘計た事のやうで御座いますが、さうなさいまし！　出るのはいつでも出來ますからな……

（しばらく沈默。）

延木　怎たね？

おたま　折角で御座いますけど……

延木（おたまのはなしには取り合はぬやうにして富三郎に向つて）怎だね？

おたま　富三郎一生の事で御座いますから、いろ〳〵に考へぬきました上、參上たので御座いますし……

延木　イヤ、當人の考へは怎だね？

おたま　ですから、只今申上げましたやうに……

延木　おたまさん！　おまいさんは何だ！　お前さんは富三郎の女房さんかも知れないが、わしと富三郎との關係は、お前さんがまだ富三郎の女房さんにならない前からの事なんだよ！　さうだ、云つて見れば、まだ富三郎が此の世の中に生れ出ない、おぎんさんのお腹に居る時からの間柄で、その後此の人のお父さんが、いろ〳〵の事業に手を出して、よかつたりわるかつたり、その長い十何年の間も私はほとんど、此の人の本當の父親位にめんだうを見てやつて、現に、お父さんが長崎の方へ行つて居る時には、半年も私の家から學校へ通つた事は富三郎もよく覺えて居る筈だ！——そんな譯だから、成程お前さんは、女房だから、現在の亭主の事を案じるのはいゝとして、私は又私で、此の人の事については、心配もしなきやならないばかりでなく、どうも他人と思へない愛情があるんだ！　そんな事も知らないで、途中から來たおまへさんにまくしたてられると、私は何だかさびしい心持がする——しばらく、片野と私丈のはなしにしてもらはう！

（おたまは、何か云はうとしてだまつて仕舞ふ。）

延木　お前は、あの箱崎の家でお父さんに別れた時の事を覺えて居るかね？

富三郎　えゝ！

延木　藏のある暗い家だつたが……己らあ、あの夕方お前が、藏の白壁にぴつたりおツついてぼんやりして居たから、お父さんに別れてかなしいかと云ふと、お前はわーッと泣き出したのを今だによく覺えて居る。そして、泣きながらも、指の間に赤とんぼの羽根をはさんで居るのを見て、やつぱり子供だなアと思つたが……十……二だつたか

富三郎　一でした！

延木　十一か……十一から今まで、お前は怎して大きくなつて、怎して役者になつたか、——なア、お前もどん

なに苦勞したか分りあしない、その苦勞に對しても、今いゝかげんなかるはずみをしては何にもならないし、己れは又、お前が求めて苦勞をするのをだまつて見て居ると云ふのは、お前の死んだお父さんにすまない事になるんだ！――それに、此度の考への出た所も、又その事について力になつて金を出してくれる人も私にはちやんと分つて居るんだが、その事についても本當によく考へて見ないと大變な事になりはしまいかと思ふのだが……私の云ふ事は分るかね？

富三郎　（不審な顏をする）

延木　私は、ちやんと、その金を出してくれる人を知つてゐるんだよ！　（と意味ありげに云ふ）

富三郎　へい……

延木　それで、その金が、怎云ふ事情で怎云ふ約束で出て居るかも分つて居るんだよ！……だから、私はお前の爲お前の爲ばかりぢやないお前一家の爲に案じるのだよ！

（とぢつと富三郎を見る）

富三郎　（ます／＼變な顏をする）

延木　（自分の云つて居る事が、怎しても相手の急所をつかないのを感じながら、おたまに向つて）此度の金の出所について、富三郎の顏にかゝはるやうな事はあるまいね。

おたま　御座いません！

延木　イヤ、お前さんの考へばかりでなく、世間から見ても一向さしつかへの無い事かと云ふのだよ。

おたま　差支御座いません！

延木　何と言はれてもかね？

おたま　はい！

延木　さうかね！……？

おたま　さつきから、いろ／＼おはなしも御座いましたが、私は、片野の事につきましては、世界中のどなたさまよりも一番大切に思つて居るもので御座います！

（と、ほたり／＼涙をこぼす。）

（しばらく沈默。）

延木　なるほど（獨語のやうに）では、怎も致し方がないが……暇を上げるにしてからが、とにかく、此の芝居も會社になつて居る事だし私一個（ひとり）の考へでよろしいとも云へないが……

向阪　さうですなア……又、そこには、それ／＼のものもきれいにしていたゞくと云ふやうな事もあり、ま、すし……

おたま　拜借のものは、今日持つてまゐりましたが……

延木　さうですか……そりあまあ、誰れが見ても、當りまへの事だから、返へしてもらふとして……

おたま　それから、損害の方も一所にお納め致すつもりで

持つてまゐりました
延木　損、ね？
おたま　はい、自分の方から勝手に退座する場合は損害を出すと云ふ御約束か、ちやんと證文に書いて御座います……
　（と、金のつゝみを延木の前に出す。）
延木　そこまで、他人の心持になつて居たのかい？……ああ、それおやめう、わしは何にも云ひますまい！　が然し、いくら證文にあるからつて一延木が、お前から損害を取つたとあつては私の顏もつぶれるわけだ！　貸はもらふとして、それ丈け、あらためて、私から（富三郎に）お前さんに上げませう！　いづれ、何處かへ出るのだらうがその時はまつさきに知らしておくれ！　出來ないながらも、のぼりの一本も上げ度いからね。
富三郎　（急に悲しくなつて、泣く）
延木　あーあ、長いなじみで、お互に心やすだてから、いろいろ我儘を云つてすまなかつたね、あらためて、おわびをするよ……どうか、體を大切に、一生懸命に修業して、あつぱれの役者になつておくれ……あーあ、急に年を取つたやうな氣がして……何だか氣、力ぬけがしたやうだよ……○○座と、運命を共にしてくれる人とばつかり思つて居たが……

　（おあい登場。）
おあい　旦那さま、おでんわで御座います
延木　よろしい……
　（延木と、おあい退場。）
　（つゞいて向阪退場。）
富三郎　――ねー大將變な事云つてたね？　何だい？
おたま　お金の出所でせう？
富三郎　あゝ……
おたま　きつと、伊勢由からでも出たとでも思つたんでせう……ほんとに、此度の事だつて、あんた伊勢由に馬鹿にされたくないばつかしにした事ぢやありませんか……ほんとに、人ばかにしてる！
　（しばらく沈默。）
　（延木が出て來る。）
おたま　（まだ延木が坐らない中に）では……
延木　（立つたまゝ）さうかい！……あゝ、明日にも、高橋がきいたら、どんなに淋しがるだらうか……
富三郎　（初めて、本當の自分の考へを云ふと云ふ態度で）そんな事があるもんですか……（とおたまを見て）ねー
おたま　いゝあんばいに出て行つた位に思はれるでせう……
……
延木　え？　何かい？　そんなら、高橋に對する不平から

出るのかい？ え？ そんなら考へなほす餘地はあるぜ！ そんな事なら何でもなく解決する問題だぜ！ え？ ねー、そんな事なら打ちあけてくれゝば、すぐいゝ氣持になる事だぜ……（と坐りかけて、又說かうとする）

おたま 然し……もう何もかもすんだ事で御座いますから……

延木 ――

（三人ぢつとおし默る。）

（暗轉）

第二場 延木の家の裏口

暗い所が、段々とあかるくなると、いきな塀をめぐらした延木のかまへが上手よりにあるのが見えて來る。よき所に裏木戸があり、塀の中には二階が見えて、その窓には灯がともつて居る。下手はずつと町屋で、空には星があるが、地面にも屋根にも、うつすりと薄雪が降つて居る。

しばらくすると、裏木戸から、おあいに送られた富三郎とおたまが出て來る。二人ともあたゝか想に外套につゝまれて、富三郎は、何となく名殘惜しいと云ふ風にいろ〳〵とおあいにお世辭を云つて居る。

やがておあいは木戸をしめる。

二人、はじめて、ほつとする。

富三郎 あー、すつかりすんだ！

おたま あなた、あんな時に泣いたりしちやあだめですよ！

富三郎 （極めて明るく） さうかい！

（二人少し歩いて、）

富三郎 御らんよ！ 三ヶ月さまが出てるよ！

おたま （空を見もせずに） さうですか。

富三郎 （空を見ながら） 今頃の空はいゝねー……ねー、何か喰べてこうた。

おたま いゝえ、私は、方々へお禮に行かなくつちやあ……

富三郎 さうかい！

（二人歩み去る。）

―― 静かに 幕 ――

（一四、一、一四）

鼠小僧心願（七場）

第一場

麻布一本松。

夜ふけたさびしい往來。

舞臺の下手から中央にかけて、黑塀をめぐらした屋敷、その角を曲つて正面奥へ往來のある心、上手角からずつと土塀つゞきにて、その中は傳長寺の境内で、こんもりした森をなして居る。

正月二日の夜半過ぎ、雪を持つた空は星の影さへない。おしづまるやうな靜かな中に、遠くで犬のなく聲がする。

しばらくすると、下手の奥から、ガヤ／＼人聲がして、博奕に負けた四五人のものゝ中に鼠小僧次郎吉も交つてぶら／＼とやつて來る。

次郎吉　だから云ふぢやねーか、人盛んなれば天に勝つて……全くその通りよ、云ふ目が出て居る時にやあ、雪が降らうが、さむかあねーし、世の中がつまらねーなんて考へる事は無えからなア。己れなんぞも一としきりあ、春も夏も、全く時候つてものを感じねーで面白可笑しく暮らした事もあつたつけ、そんな時にやあ、手前であついと思はなくつても、體にやいつか上布を着て居る、ほしいなと思ふか思はねー中に、眼の前にや酒があるつてわけなんだ。

甲　エヘンツて云やあ灰ふきつて奴た……

次郎吉　さうだ！　然し、そりあみんな自分の力で生み出すんだぜ、決して人がしてくれるんぢやあねえんだぜ。

乙　さうですか？

次郎吉　それが今云ふ、人盛んなれば天に勝つて奴よ、油の乘つてる時にやあ、どんな事でもぐん／＼やれるが、一朝下つたと來た日にやあ、自分で自分の運に逆らふやうになつて來るんだからなア、當つたとなりあ、つぼ皿の中は見透しだが、外れたと來りあ、さいころが、かぶりを振つて仕舞ふんだ……人間の運なんて奴は、開けて行くのもひよつとしたきつかけだが、追ひ目になるのもくだらねーキツカケからなんだ。世の中はまるでバクチさ。

乙　全くですねー、だからこちとらあ、バクチに負けるばかりでなく世の中からも負け通しなんだ。

丙　さうた、こちとりは體を張つて世の中と博奕をしてる

やうなものだよ。
甲　それならそれで、もう身動きもならねーまでに持つてかれりあ、諦めもつくんだらうが、三度に一度は、キヤキヤと涼しい心持になる事があるんでいけねんだな。
次郎吉　さうさ、それがその心いかせだアな、春夏秋冬があるやうに、たまに色氣がなかつた日にやあ、世の中は氷のやうに冷たからうぢやねーか。
丙　ヘン、世の中なんて、都合のいゝかき目をうんと持つてやがる……
丁　愚痴を云ふなよ、上ッ方でも思ふやうにならねーなア、鴨川の流れと賽粒の目だつて云ふからよ。
丙　だけどよ、あんまり云ふ目が出なすぎるからよ……見てくんねー、寒の中に此の始末で。（と肌をぬいて入墨の胸をたゝいて見せる）
甲　おう、大分いゝ色になつたなア、ほりものゝ色が上つて來たなア。
丙　ヘン、博奕で裸にされて、文身をほめられりあおしめえだ。
次郎吉　氣の毒だなア、馬場下で、一杯やつて、夜を明かしてえと思ふんだが、今夜は己れも皆と同然で、からつきし仕方がねーんだ。
乙　餘程いけませんでしたか。
次郎吉　なアに、五十兩ばかりだが……
甲　茅場町の兄貴が五十兩負けたと云やあ百兩はたしかな所だ！　然しなんだな、百兩取られようが、二百兩取られようが、物に動じねー所が、兄貴の身上たな、一ッ太十でも伺ひやせうか。
次郎吉　ハヽヽ、義太夫か、己れが次郎太夫になる時は、いつも出來のわりい時で、まあ淨瑠璃と緣が切れりあ、己れも出世をするだらうよ。
丁　おう　皆これから怎するんだ。
丙　怎するつて歸るより仕方がねーぢやねーか。
丁　さうか、ぢやあ出かけよう……が、茅場町のは怎なさいますね。
次郎吉　己れも、歸るより仕方がねーのさ。
甲　ぢやあ、御一所にまゐりませう。（と先へ行きかける）
乙　おう、そつちへ行くのか？
甲　だつて道ぢやあねーか。
乙　冗談ぢやあねー、そこの角は、長傳寺ぢやねーか、己らあヤだよ、そこを曲りあ盲くゝりの松ぢやあねーか……
……
甲　あゝさうか――（とすかして見て）成程さうだな。
乙　正月の二日だつてのに、此の始末だ！　こんな晩に盲縊りの松の下でも通つて目ねー、上から縄が下つて來て、

吊し上げられるか分りあしねー、只でさへ、あすこの下を通ると、何でもねえとのまで、死に度くなるつて云ふ位だからなア。

丁　それが、その死に神つて奴に取りつかれるんだよ——死神に取りつかれると、どんなしつかりしたものでも、ふら／＼と死に度くなる事があるんだ想だ。自分ぢやあ、大變だ、大變だとひや汗をかいて逃れようとしながらも、體は段々唾の方へひきずられて、思はず知らず飛び込んで仕舞ふんだつてんだが、そんな時にやあ、死神が、懲ぼろ／＼の旗をふつて、こんな工合に呼んでる相だ……醫者に云はせると、シンのつかれがそんな氣を起こさせるんだつて云ふが、踏み外した日にやな、人間なんて、どんなどん底へ落ちるか分りあしねーのさ。

（このはなしの中に、妙にしんとなる。）

（と突然、丙がえらいくしやみをする。一同驚く。）

甲　えゝ、吃驚するぢやねいか！

丙　ハヽヽヽ、死に神よりあ風の神が己らの命を取るかも知れねー、うゝ寒い！　さあ行かうぢやねーか。

甲　行かう、ぢや親方、御別れしませう——

丙　ぢや御めんなすッとくんなさい。

次郎吉　おゝ、行くのか、ぢやあ、お前これを着て行きねー。（と、半纏をぬいてやる）

丙　えゝ、ありがたう御座んす、なアに、それ程でもありませんから。

次郎吉　然し、風邪をひいても、よくねーからよ。

丙　へい、まあよう御座んす。

次郎吉　懲してよ。

丙　懲してつて、私のやうな人間ならどんなこけた風體をしてたつて、誰れも何とも云ひませんが身分のある人が、すつぼろけな風をしてると、尾羽打ち枯らしたやうでいけません、それにそんなものを私が着てやあ、[illegible]に申わけがありませんや。

甲　ぢや御めんなさい！

乙　御めんなさい！

丁　氣をつけて御いでなさいましよ！

（一同暗いかげに去る。）

（一陣の風が吹き去ると、さびしい鐘の音が聞こえて來る。）

（次郎吉は、思はず身ぶるひする。）

（長い間思ふやうにならないので、恐ろしい[illegible]に陷入つて居る次郎吉は、此頃、ふいと突拍子もない事を考へる後からすぐ之れを打ち消すと云ふ二つの考へが頭の中で戰ふのが常で、今も首くゝりの松とか死神とか云ふ事から、ふいと自分が死んで仕舞つたら怎

なるだらうと云ふ考へに囚はれた。）
（とんでもない事だと、無理に自分を押しつけて考へを他に轉じようとすると、此度は、「己れは大どろばうだ」と大きな聲で云つて見たくなつた。云つたら大變だと云ふ氣持、云ひ度いと云ふ慾望、此の二つが、かなりはげしく戰つた揚句、冷汗がぐつしより出て、ふら〳〵になつて、）

次郎吉　（極めて小さな聲で）ぬすつとだ！
（と口走つた、四方には何事もなく靜かだ。）

次郎吉　（やゝ落ついて）己れはぬすつとだ！
（と云ふと、涼しい風にふかれたやうに少し氣がかるくなつた。）
（二度云つた。二度ある事は、三度あると云ふから、三度云つて見ようと思つた。）

次郎吉　己れは、ぬすつとだ！
（あたりは何事もない。次郎吉は、もう極めて靜かな氣持になつて、）

次郎吉　己れは、鼠小僧次郎吉だ！（とはつきり云つて）あゝ、誰れも聞いちやあ居ねー、この己れが、ぬすつとだつて事は、世の中の誰れも知つちやあ居ねーんだ！己れが此のまゝ死んぢまへば、世の中が無くなるまでも、己れは只の人間て事で通るんだ！　世の中なんてつまらねーもんだ！　己れがもし、首を縊つて死んだとしたら、皆は、己れが氣狂になつたとは思ふかも知れねーが、己れが、こんな心持だつたつて事は、誰一人知らねーんだ！
（と、誰れにも知らさずに、何事かを完成すると云ふ事に生れつき興味を持つて居るので、こんな考へが起きると、ぞく〳〵する程のうれしさを感じて來る）己れは此所に居るんだぞ！　鼠小僧は此所に居るんだぞ！……あゝ、靜かだ！　ハヽヽヽ（と、全く放たれた氣持に醉つて、いろ〳〵の事を云つたりしたりする）
（四方は極めて靜かである。）

次郎吉　あー、己れが、今此所で、こんな事を考へて居る事は、己れの女房も知らずに居るんだ……人間は、みんな一人つきりだ。さうだ！　一人の始末をすりあいゝんだ……（と考へて）死んでやらう……
（ふいと恁云ふと、再び自分の考へが恐ろしくなつて、どうかしてそれから逃れ出ようとして居る時、上手の蔭で「母ちやん、死んぢやいやだよ！　母ちやん！……」と云ふ子供の聲がする。）
（次郎吉思はず、悟となつて、向うを見て、本能的にその方に走り出す。）

（極めて巧みに暗轉）

第二場

夜明し茶屋。

正面に入口、上手に小座敷、下手土間づたひに料理場と云ふ作りで、猶、下手奥に、別に小座敷のある心。上手小座敷の上に、一見かけ落ちものと見ゆる若き男女、火鉢の上にうづくまつて、心元なさとさむさに心も體もふるへて居る。男も女も、町もの丶拵へである。五十格好の茶屋の主人は、板場の方で居睡りをして居る。

女　（や丶しばらくして）ねー、行きませうか……

男　何處へ……？

（女、男の顏を見て、恃りなささうに吐息をつく。しばらく沈默がつゞく。）

女　ねー、怎なるんでせう？

男　怎なるつて云はれると、私一人の荷が重くなりますけれど、御方に……

女　えゝ、ですから、さう云ふ風に取られると妾申わけがありませんけど、逐心細いもんですから……

男　私と二人で居ても、心細いと云ふんですか……？

女　いゝえ、そんな事はありません、けれどいつまでもこんな所に居て、もしも誰れかに見つけられでもした時にはと、そんな事を思ふんです……

男　そんなら怎したらいゝと云ふんです？

女　ですから伺つてるんですわ。

男　ですから考へてるんぢやありませんか……

（女、ふいと顏を上げて男を見て、下をむくと淚がはら〳〵とこぼれる。）

男　（ぢつと女を見て）怎したんです。

女　怎もしやしませんわ。

男　泣いてるぢやありませんか。

女　えゝ、だつて、急に邪見になさるんですもの……さて、御迷惑で御座いませうねー。

男　何を云つて居るんです。

女　あゝ、妾、ほんとに、なさけなくなりましたわ。

男　見つともないから靜かにして下さい！　私は、あなたのそんな姿をはじめて見た。

女　私も、そんなあなたをはじめて見ました！　きつとあなたは、私が面倒くさくなつたんでせう。

男　くだらない事を云はないで下さい。

女　私はくだらない女なんですもの……（泣く。

男　あゝ、見つともないから、靜かにして下さい。御願ひですから……

（主人ふと眼をさまして、此の二人の樣子を見て、）

主人　お互に、じれちやアいけませんぜ！　ねー、姐さんから見りあ、あんたが一番たよりなんだ、あんたから見りあ、云はれるまでもなくいろ〱の事を考へてるんだから、繁く聞かれるなアうるさいかも知れねーが、とかく女はくどいもんだ、おまはんのやさしい返事が力なんだからね、どうかやさしくして上げて下さい！　元々、重い荷物を二人で脊負出しなすつたんだ、二人でなけりあ持てない荷物だ、そんな事ではふり出しちやあ、今までの苦勞はみんな水の泡になるんだ……さあ、わるい事は云ひませんから、奥の炬燵でまあ、夜の明けるのを、お待ちなさい……さあ、おいでなさい。

（と、二人を下手奥へ案内する。）

（しばらくすると、次郎吉を先に、篠原幸次郎の妻おつや（三十前後）とその子龜吉登場。）

次郎吉　今晩は……

主人　おう、茅場町の親分で御座いますか、まあおめづらしい事で御座います――えゝお連れさまが御座んしたか……恁っと……奥の炬燵をたつた今何をして仕舞ひましたが……

次郎吉　なアに、そんなはなしで來たんぢやねーんだ。だがな、少しこみ入つた事もある、何かとお前氣をつけてくんねーよ。

主人　へい、そりあ、もう御心配は御座いません。

次郎吉　內儀さん、此所へ來りあ遠慮なしでさあ、まあ落ついて御くんなせえ。それからな、何か子供にあつたかいものと、さむさしのぎに、あつくして一本つけて持つて來てくれ！

主人　へい、かしこまりました。

（主人は見はからひの膳と酒とを持つて來る。）

次郎吉　差し上げた所で、お受けになりもしますまい、失禮してやりますぜ！（と酒をのんで）ねー、御內儀さん、藪から棒にこんな所へ御連れして、變な奴だと思召すかも知れませんが、實は、さつき、あの首くゝりの松ぢやあ、私が先へ死なうとして居た所でした！

おつや　えゝ？

次郎吉　今考へりあ、自分で自分が分らなくなりますが、俗に云ふ死神が取りついたとでも云ふ奴か、全く私も死ぬ氣になつて、とぼ〱と歩いて行く所へ、此のぼつちやんの泣き聲で、思はず我に返へりましたが、あすこであなたが死なうとなさらなけりあ、私の體はとつくの昔に冷たくなつて居たかも知れねーんです。あなたがあすこへ來なすつたのが私に取つちやあ、命の親で、その又私があなたを御助け申したのも、命の親の考へて見りあ、不思議な緣とでも云ふのでせう、內儀さん、私ア、

あなたにあつく御禮を申したいと思ひます。……厭るに足らぬー奴と思召すか知れませんが、私の心ぢやあ自分の力で出來る事であなたの命が助かるなら、どんな事でもする氣ですから、ねー、怎して死ぬ氣におなんなすつたか、どうか、御聞かせなすつておくんなさい！　いきなりと這麼事を云つて御氣にさはるか知れませんが、一度御止めしたからにあ、たとへどんな事があらうと、私の口から、なる程御尤もな次第ですお死になさいとも云へねーし、たとへ力にあまつたからつて、見す〳〵死なせる筈もありません。話しですむか金ですむか、場合に由つたら力づくでも、私はきつと、あなたが死なずにすむやうにしますから、何でも一ッ打ちあけておくんなせいまし！　金は天下のまはりもので、人の命は大切だ！　まして、こんな可愛いゝお子さんまである御體で、何で死なゝきあならねーのか、ねー内儀さん、一ッ云つて見て下さいませんか。怎云ふ私も、ついさつきは、あすこで死なうとしたものですが、考へなほせば自分で自分が恐ろしくなつて來ます。さつきにから云つてる事も、實は自分で自分を叱てるんです。さあ、云つて見てくれませんか！

おつや　いろ〳〵と御親切に、ありがたう御座います。實は、私は、但馬の出石、仙石伯耆守様の御家來、篠原幸次郎と申すものの家内で此の子は龜吉と申すもので御座いますが、良人幸次郎は仙石右京殿の爲に、圖らず主家を退身致しまして、只今は、麻布我善坊に侘しいくらしの浪人住居、唯々もう歸參の叶ふ日を、今日か、明日かと待つて居りましたが、元々貯へとても御座いませず、只今では、もうその日のものにも事缺く程になりました上、良人は、先頃より、病の床について仕舞つたので御座います。只居りましてさへ御はづかしいくらしむきを、良人の病の藥の料、手當ての代、そりあもう、おはなし致すやうなものでは御座りません。氣の弱い良人をはげまし、神佛にも信心して、何卒病のなほりますやう、歸參の叶ひますやうにと、此の寒の中を、水ごりまで取つて御祈り申しても少しも現が見えませんので御座います——家の中には、もうお金に代へるものはなし寒さをしのぐ炭もなく、素より、此の子の口に這入るものさへ無くなつて仕舞ひまして、途方に暮れたある晩の事、いろいろの心づかひは忝けなく思ふが、所詮此の病は本復覺束ない、なまじ生き永らへて居れば居る丈お前の苦勞をますばかり故、藥ものまずに壽命を待たう、それがお前への禮心だと……覺悟の見えた夫の言葉に、——何の、何の、たとへ私どもは怎なつても、きつとたほさずには置きませぬ、やがて御歸參が叶ひさへすれば、今の苦勞

は笑ひばなしと、口先丈でなくさめても、後から後から、涙が出て、二人手を取つて、泣き明かしたので御座います。と、ある人の申しますのに、夫の病に大層よい薬がある、とにもかくにもそれを買つて取らしたらと御親切な御言葉に、飛び立つやうには思ひましたが、怎する事もなりませんので、良人とも相談の上、のるかそるか、此所が一ッの運だめしと、御恥かしい事で御座いますが家重代の護のものを、手離す事に致しました。幸に、品川の貝番場に身よりのものが居りますので、近所の方に留守を御願ひしてそれをたづねてまゐりまして、やうやう金策をして貰ひましたので御座います。やれうれしや、これで良人の薬を買ひ、何卒して本復さしたいと。よろこび勇んでまゐりますと、何處をどう聞き知つてか、悪漢共に後をつけられ、命の綱のその金子をうばひ取られて仕舞つたので御座います！……人のお金をぬすむものから見ましたら、誰れのお金も同じ事かは知れませんが血の出るやうなその御金を、ぬすみ取るのは、あんまり非道で御座います。あんまり可愛想で御座います、永い間の艱難にも、誰れ人様を恨みにくんだ事などは、只の一度も御座いませんでしたが、今日ばかりは、あの人達が、にくらしい、うらめしう御座います。私のやうなものゝお金を盗まずとも、まだいくらも御座いませうに、家名にも先祖にも、代へられない大切な夫の命を助け度い爲に死ぬくるしみで作つたお金を盗み取るとは、あんまりで御座います、なさけなう御座います……もう夫には顔むけもならず、さりとて怎する事も出來ず、面目なさに、死んでお詫びをする氣になつたので御座います。御言葉にあまへまして、御恥かしい一伍一什、どうぞ御察し下さいまし……

次郎吉　聞けば聞く程御尤な御はなしだ。が、詮じつめれば、お金ですむ事のやうに思はれますが、その御金はどれ丈あればいゝんですね

おつや　はい、その金子は、あの五兩なので御座います。

次郎吉　五兩……？　なる程なア、金は五兩でも五百兩でも、つきつめた氣にかはりはねーんだ！　あゝ勿體ねー御はなしだ！　私ア、おまはんの、心持に泣かされました！

おつや　御恥しう御座います！

次郎吉　失禮ながら、その五兩は、私に貢がしていたゞきませう

おつや　でも……

次郎吉　まあ御待ちなせい、見ず知らずのものに、金を貢がれる筈はねーと仰有るかも知れねーが、他に思案があればの事、何にも云はねー、どうか、私にまかしておく

んなせえまし！……と云つて、今持ちあはせがあるちやあなし……島渡友達の所へ行つて都合して來ますから、しばらく此所で待つて下さい――おう、親爺。此所に使ひのこりが一兩ある、これをやるから、己れがかへるまで、たしかに此お方をたのんだぜ！

親爺　（恐る〳〵）でも親分！

次郎吉　えゝうるせい！　人を助ける氣になれやい！

（とフイと正面の入口から出て行く。）

（暗轉）

第三場

山崎主税助邸の女部屋。

正月二日の夜半すぎ、美しい着物を着て、若い女共が夢中になつて歌留多を取つて居る。しばらくして、正面の障子がすつと明いて、手拭で頰かぶりをした次郎吉が、のぞき込む。

よみ手が「吹くからに秋の草木のしをるれば……」と讀むと、一同が、その札を取らうとして蔽ひかぶさるやうになる。と、次郎吉が、その札を取つてかくす。女共は一心にたづねる。

次郎吉　（しばらくして）そのむべ山はこの札か……

（と皆の前に投げ出す。）

（一同驚く。）

次郎吉　ハヽヽ、あんまりみんなが、若くつてきれいなんで、己らあさつきからのぞいて居たのさ。五兩の金が入り用で、命をかけて借りに來たんだ……だが、もうその用はすんだんだ！　ハヽ、きげんよく遊びねーよ。

（と行かうとする。と今まであまりの事に驚いて居たものゝ一人が、急に我にかへつて、「狼藉もの」「狼藉者」と叫ぶ。と、一同我れに返つて、「狼藉もの」「おつめ合の御方、御出會ひ下さいまし！」などとさわぎ立てる。）

（つめ合の武士が立ちあらはれる。と、次郎吉は、極めて巧みに皆の手からのがれて逃げる。）

（いろ〳〵ある中に。）

（暗轉）

第四場

塀外。

正面に塀あつて、その奥には、松の立木數本ある。上手よりに、辻番小屋の灯が見える。何となく邸内さわがしく、

「向うへ逃げた！」「そつちだ！」などと云ふ聲が、灯の明滅する事しばらくして、次郎吉、塀の上に立ちあらはれ、あたりをうかゞうといきなり往來に飛び下り

ると、辻番中村甚五兵衛いきなり出て、手早く次郎吉を縛り上げて仕舞ふ。
次郎吉「しまつた！」と云ひながら身悶えるが怎しても逃げられない。

次郎吉　御番人、己れがわるいんだ！　すみません！　すみません！　己らあ年貢の納め時だと思つて御くんなせい！　己らあ年貢の納め時だと思つて居るが、今己れが此所でふん縛られると親子三人の命にかゝはる事が出來るんだ。勝手な事を云ふやうだが、用をすましてすぐ來るから、しばらくの間此の繩をほどいて御くんなさい、御願ひだ！　己らあ嘘はつかねーんだから……御慈悲だ、見逃がして御くんなせい！
甚五兵衛　默れ！　そんな勝手が通ると思ふか、神妙にしろ！
次郎吉　御番人、己れの云ふ事が分らねーのか、己らあきつと歸つて來ると云つてるぢやねーか。
甚五兵衛　そんなごたくが聞けると思ふか馬鹿野郎！
次郎吉　それぢやあ、怎しても駄目なんだな。
甚五兵衛　己れは只の辻番ぢやあねー己れの手にかゝつたらいゝかげんに往生しろ……
次郎吉　御番人、だからよ、御願ひだ、己れの眼を見ておくんなせい、己らあ本當に親子の命を助けなければならねーんです！　一生一度の御願ひだ！　どうか、助けさしておくんなさい！
甚五兵衛　悪い事をして、人を助けて何になる！
次郎吉　だから……
甚五兵衛　默れ！　默れ！
次郎吉　ぢや怎しても駄目なんだな！
甚五兵衛　駄目だ！
次郎吉　さうか、それぢやあ己らあ手荒な事をしなきあならなくなるんだぜ！　濟まねえが、手むかはなきあならねーんだぜ！
甚五兵衛　生意氣な事を云ふな！
次郎吉　よし、御番人、かんべんしてくんねい。
（と、いろ／＼と身悶えると、いつかぷつつり繩が切れる。甚五兵衛が、捕へようとすると、ぽんと一けりして、いづれともなく逃げさつて仕舞ふ。）
甚五兵衛　畜生！
（とその後を追ふ。）　　　　　　（暗轉）

第　五　場

元の夜明し茶屋。
元のまゝの居所で、ぢつとして居る。所へ表から次郎

吉が大急ぎで這入つて來る。)

次郎吉　あゝ、御待遠さまでした。當てにして居た友達が留守で、存外手間を取りましたが、他所に金が三十兩ありますから、これを持つてつて、早く藥を買つて御上げなさいまし。

おつや　はい、ありがたう存じます。親身も及ばないいろいろの御親切、その上こんな大枚なお金をいたゞきましては、御禮の申しやうも御座いません、それでは、一時御拜借致す事に致しませう、御恩は一生忘れません、どうぞ、御住所と御名前とを御聞かせなすつて下さいまし。

次郎吉　冗談ぢやありません、さつきも云ふ通り、私ア次郎吉てえやくざもので、商賣と云やあ博奕打、人間らしい名前のあるものぢやあありません、又御緣があつたら何處かで御目にかゝりませうがくれ〴〵も御病人を御大切に、御養生を願ひますぜ。人間は七轉び八起きとさへ云ひますから、何のいつまで惡い事が續くものですか、こんな事がきつかけで、御運がひらけて行くやうなら、私も本望と云ふものです。さあ、早くその金を仕舞つて、御出かけなすつて御くんなさい。

おつや　ありがたう存じます。——龜吉、御父さまの爲にもお母さまの爲にも、命の親は此の御方です。此の御方の事を忘れずに成人したら、きつと御恩を返へさなければなりません——さあ、御禮を仰有い。

龜吉　ありがたう御座います!

次郎吉　えゝ、勿體ねー、坊ちやん、體を丈夫に大きくなつて、立派なものになつて下さいよ。

おつや　御免下さい。

次郎吉　さよなら……氣をつけて入らつしやいよ。

(おつや、子供をつれ、いく度も禮を云つて立ち去る。)

次郎吉　おい、親爺、冷でいゝから酒を一杯持つて來てくれ!

(主人、冷酒を持つて來る。)

(次郎吉一氣にそれを飮む。)

主人　親分、私は、あの死神を御あづかりして、怎なる事かと、ぶる〳〵ふるへて居ましたぜ。

次郎吉　さうか、なアに、實は己れも、あの首くゝりの松の所で、それ程せつねー事もねーのに、ふら〳〵死ぬ氣になつたんだ。

主人　親分、おどかしちやあいけませんぜ

次郎吉　いゝや全くだ、我ともなしに、夢のやうな氣になつて、すんでの事に首をくゝらうと思ふ所へ、あの女も首をくゝりにやつて來たんだ!——己らあ、自分の事も忘れて、思はず知らず抱き止めたが、考へて見りあ、あの人を己れが助けたのか、あの人が己れを助けたのか、

人間の一生なんて考へて見ると果敢なもんだなア。

主人　へい……

次郎吉　まあいゝや、あれで、家中圓く行きやあ、それに越した事はねー、さあ、もう一杯持つて來い。

（次郎吉、酒をあふつて居る所へ、表から丑松と云ふ博奕打が登場。）

丑松　おう、親分ぢやありませんか――

次郎吉　丑か――今時分怎した！

丑松　正月早々からつきし駄目で、夜の明けるのを待つて、ほう〳〵の體で逃げて來ました！

次郎吉　もう明けたか……

丑松　へい。

次郎吉　丑、手前あの山崎の辻番を知つてるか？

丑松　いゝえ、そいつが怎かしましたか。

次郎吉　なアに、怎もしやしねーが、大層強い奴だと云ふからよ。

丑松　へい――

次郎吉　一體、どんな面をして居やがるか、己らあ一度しみじ〳〵見て行きていと思ふんだが、お前一所に行かねーか。

丑松　へい、親分のお供なら、何處へでもまゐりませう。

次郎吉　よし、ぢあ來いよ。

丑松　へい――

次郎吉　親爺、又來るぜ！

主人　へい、ありがたう存じます。

丑松　（表を見て）よー、たうとう雪になりましたぜ。

次郎吉　雪だ……？

主人　はゝア、七草まで持たなかつたな。

（鷄の聲。）　（暗轉）

第六場

辻番の前正面上手寄に辻番小屋。あたり一面の雪。辻番を中心に、町の人々、買ひ出しに行く魚屋又は青物商等多勢のものが、重なり合つて、辻番の中をのぞき込んで居る。いづれも無言。

下手から、次郎吉と丑松とが出て、何事ならんと人込みの中を覗く。と、上手奥から、人を制する聲がして、邸内から用人等が出て來る。

と、群衆は、一齊に舞臺の上手下手にひろがる、そこで、初めて辻番の中が見える。と、辻番甚五兵衛は、小屋の中で、立派に切腹して死んで居る。役人等居ならぶと。

近藤　甚五兵衛の書置きが御座ります。

高木　御讀み下され
末期に臨み書附を以つて申上奉候。私事淺からぬ御高恩を蒙り有難き仕合せに存じ居り奉り候處、御邸内より逃げ出し候盗賊一人、一度取押へ候ものを取り逃がし候事全く武邊不鍛錬の致す所御奉公等閑の罪恐れ多く、申譯の爲直ちに切腹仕候。何卒御慈悲を以つて家名の儀は御國表に罷在候伜佐吉へ仰せつけられ、半地なりとも御取り立て下し置かれ候やう、御前體宜しく御執成し願上奉候以上

中村甚五兵衞

御重役衆御中

高木（思はず、つか〳〵と甚五兵衞のそばに寄つて）適れの最後、高木心より恥ぢ入り申した。武門のほまれ、思はず落涙仕つたぞ！　常日頃より、御奉公大切に思ふそちが忠勤、殿にも御滿足に思召す折柄、此度の事は、幾重にもそちの心底つぶさに申上ぐるに由つて、何事も思ひ案ずる事はないぞよ！　心安う成佛して呉れよ！……甚五兵衞、甚五兵衞、あつぱれ美事な、武士の面目羨ましく思ふぞ！

（一同水を打つたやうに靜かにして居る。次郎吉は、いつか居なくなつて居る。）

（暗轉）

第七場

淋しい往來。
正面は土手。土手の裾は石がけになつて居て、土手からは、恐ろしい大きな木が、舞臺に向つて枝を張つて居る。その爲に、その下丈には雪がなく、他は一面に雪が薄くつもつて居る。
次郎吉、と丑松が出て來る。

次郎吉（獨言のやうに）己れが、名乘つて出た所で、延人が助かる譯ぢやあねー。さうだ、生きてるものを助けるのがせめてもの己れの功德なんだ！——かゝるはずみは出來ねーんだ。

丑松　親分、怎かなすつたんですか——

次郎吉　丑松、己らあ、今まで、神佛に願をかけた事は一度もねー、が今日こそは、一生一度の心願をかける事が出來たんだ！……お前もよく覺えて居てくれ、己れが年貢を納める時は、あの辻番の伜の繩にかゝる氣だ、それが次郎吉の心願なんだ！——丑あの辻番の伜の年はいくつだか、國から江戸までが、幾日の旅だか、お前行つて、それとなく訊いて來い！

丑松　でも……

次郎吉　早く行て訊いて來い！（丑松退場）

次郎吉　あの辻番の倅と云ふのが国から江戸へ出て來るまでが、娑婆に居られる己れの壽命だ！……あの辻番は、武士らしい形をつけた！　ぬすつとはしても己れも鼠小僧次郎吉だ！　倅の運にかゝるのが、己れに取つちやあ本當の事なんだ！　さうだ！　それが、本當なんだ！

（次郎吉は、ぢつと思入れ。）

（雪が、又一としきり降つて來る。）

―― 幕 ――

馬鹿野郎の死 （二幕三場）

序　幕

第一場　楠屋源兵衛店先

舞臺は、本所一ッ目河岸のそば屋楠屋源兵衛の店先である。舞臺を淺く正面やゝ右手よりに「うどんそば手打　楠屋源兵衛」と灯入りの行燈を出した店、同じやうに屋號とうどんそばの字を染め出したのれんをかけた出入り口がある。店は角店になつて居るので、右手家の角から奥に、本所一つ目の河岸通りが見え、小さき橋、枯柳などが見える。河の向うは町家の家藏などあり、火の見櫓が高く立つて居る。

元祿十五年十二月十四日の夜十時過ぐる頃。雪が小やみもなく降つて居る。

幕明く。

しばらくの間はこの芝居にかゝはりない人々が間を置いて雪の夜道をあゆみ去る。

雪が靜かに降りしきる。

いづれから出たか分らぬやうにして、いろ／＼に身をやつした人、あるひは三人、二人、五人、一人と云ふ風にあらはれて、いづれも源兵衛の店に極めて靜かに這入つて行く。

人の這入る度に、店の奥で、主人源兵衛の聲で、

「入らつしやいまし、えゝ、本所からの御連中樣で御座いますか……へい、もう、お待ちかねて御座います」

とよろこび迎へる。

店へ客の這入る度に、中からそばをゆでる白い湯氣がぱアッと外へ流れ出て、それに明りがさすので、降る雪が一層うつくしく見える。

大凡十人近くのものが這入つた後、一人の職人風の男が、さむ想に走つて來て、いきなり店へ這入り何か云ふ。

源兵衛　御氣の毒さまで御座いますが、今晩は賣り切れで御座います。

客　賣り切れつて、お前そこに出來てるぢやねーか、べらぼうにさむくつてたまらねーんだ、あつくしてうどんを一杯くんねー。

源兵衛　へい、御生憎さまで、今日は店は貸切りで御座います……すみませんが明日御出を願ひます。

客　べらぼうめ、江戸兒がうどんを喰ふなアよくせきだぞ、明日まで待てる位ならこんなに頼みあしねーんだ、錢はいくらでも出すぜ……

源兵衛　まことに御氣の毒さまで……

客　いけねーのか、融通はつかねーのか。

源兵衛　へい、御客さまはみんなおさむらひの御方ですから……

客　さむれいか……ぢや仕方がねー。

（客は又さむ想にしてかへる。）

源兵衛　貸切りもありがていが、フリの客も勿體ねーなア。

（主人入口の障子をしめに出て、）

（この時ふいとあらはれた一人の武士、ポンと源兵衛の肩を叩いて、）

武士　源兵衛、慾の深い事を申すな。

源兵衛　（驚いて）おゝ、旦那さまで御座いましたか。

武士　もう皆まゐられたか……

源兵衛　へい、もう御待ちかねで御座います、それで仰の通り、おヱばは御一人前六つ宛、御酒は劍菱をつけまして、もう旦那のお顔を見たらすぐ出すばかりになつて居ります……

武士　いや、いろ〳〵と忝けない――折からの此の大雪は、送別の宴には一しほゆかしさがまさると云ふもの、しんみりと話が出來てまことよい、おつつけ、加賀の邸のものが、大小二ッ三ッの荷物を持參致すであらうから、それはそのまゝ二階にあげてもらひ度い。

源兵衛　へい、かしこまりました。

武士　それから、荷物がまゐつたら店をしめて、今日丈は他の客は一切あげぬやうにしてもらひ度いぞ。

源兵衛　そりやもう、仰有るまでも御座いません、今晩はもう、御連中で總仕舞ひで御座います。

武士　うん、然しフリの客も勿體ないからのうハヽヽ。

源兵衛　へヽヽヽ、旦那、お口のわるい事を仰有いますハヽヽヽ。

武士　それで、人數は何人見えたな。

源兵衛　旦那を別に、四十五人樣で御座います。

武士　何、四十五人……？

源兵衛　へい。

武士　四十六人であらうが？

源兵衛　へい、旦那をまぜますと四十六人樣で御座います。

武士　そんな筈は無いがなア……主人の數へちがひであらう。

源兵衛　いゝえたしかに四十五人樣で御座います……その中御老體の御武士が御三人程まだ元服前の御方さまが御

一人……あとはいづれも御立派な御方ばかりで、同じやうに見えましたが、御人數はたしかに四十五人樣にちがひございません……

武士　今宵となつて、不參のものもない筈だが……

源兵衞　（不審想に）へい？

武士　イヤ〳〵、然らば〳〵あとをよくしめて置け……

（と武士はつか〳〵と店へ這入る。雪が又一としきり降りかかる。）

（暗轉）

第二場　楠屋源兵衞の二階

總二階を、いくつかの小間に仕切つたと云ふ感じの廣間、正面に襖をたてきり奥に他の室があり、左手階子段への下り口、右手に又小さい室がある、室の中には、赤穗の浪士大勢いづれも沈默の中に緊張した心持で坐つて居る。前には、そばの道具酒德利など置きならべ、人と人との間には手あぶり、よき所に灯がともつて居る。

赤穗の浪士が、吉良家討入りの夜である。永い間の艱難辛苦がやう〳〵報いられる時である。集つた人々の心は喜びが滿ちあふれ、張り切つた氣持は何ものをもうちくだいて目的を達すると云ふ力が引きしぼられた弓のやうな勢を持つて居る。そこに老若の差別もなく、階級もなく多數が只一つの力と凝り固つて、互にふと顔を見合はせてうなづきあふ心と心には、同じ思ひがひらめき合ふ。丁度今にして云へば、冒險旅行の前夜とも云ふべく、人々の眼の前には、いろ〳〵の幻影がちら〳〵して、壯擧の實行がまちきれぬと云ふ風に、若々しい心が抑へきれないはずみを持つてほとばしらうとして居る。

しばらく沈默がつゞく。

やがて、下から源兵衞の聲で、

源兵衞　旦那さま、あの御使ひの御方が御荷物を御持ちで御座います。

（一同は、それと云はぬばかりに、五六人立ちあがつて、源兵衞も共に階下から大小三つの重い荷物をはこびあげて奥の座敷に入れる。）

（中間の風をした義士寺坂吉右衞門、倉橋傳助が、汗みどろになつて上つて來る。）

武士　（堀部安兵衞）源兵衞、使ひのものに酒を取らしてくれ！

源兵衞　はいかしこまりました。

（と下に下りる。）

安兵衞　（右手奥の間に聲をかけて）お頭、滯りなく荷物

は到着致しました。

（障子をあけて、大石良雄、同主税がしづかに出て、）

大石　各々御苦勞千萬であつた。

（一同がうや〳〵しく叩頭する。）

（源兵衛があつくした酒を持つて來て、中間二人の前に置く。）

寺坂　御同席は恐入ります……手前は階下で頂戴致しませう。

大石　イヤ、今宵は、その儀には及ばん、そのまゝ寒さをしのいだらよからう。

寺坂｝
倉橋｝恐入りました――

（と酒をのむ。）

安兵衛　源兵衛。

源兵衛　へい。

安兵衛　只今、吾々御頭より御言葉がある……さい前申したやうに、表をかたく閉し、御夫婦で御出を願ひ度い。

（源兵衛退場。折りかへして、源兵衛夫婦一子久太郎（十歳）をつれ、座に着く。）

大石　當家の御夫婦か……

源兵衛　はい。

大石　浪人中は、一方ならぬ御厚情にあづかつたとの事、まことに忝けなく存じます。わけて今日は大勢の集會、年内最早日もないのに、いろ〳〵と難題を申し、吾々一同の爲に忙しない思ひをさせて何とも氣の毒の至りに堪へません。そばもよし、酒もよし、御夫婦の志の程は永く忘れる事は出來ません。これは甚だ些少ではあるがほんの志、どうか納めてもらひ度い……猶これは、内方への志……

（と二つの金包を出す。）

源兵衛　ありがたう存じます。實は、そこの御武家様、御浪々中、膏藥賣りをなさつて御居での折、ふとした御縁で御つきあひを御願ひ致しまして、子供の手習その他、何かと御厄介に相成りましたが、然した御武家さまとも存ぜず、御心やすだてから勝手次第の失禮を重ねまして、何とも御わびの申し上げやうも御座いません、どうぞ御頭さまからよろしく御わびの程を御願ひ申上げます。何もわきまへませぬ町人風情、失禮の御とがめもなく、その上莫大な下されものは此のまゝ頂戴してよろしいやら……

大石　イヤ〳〵その遠慮はかへつて無用、どうぞそのまゝ納めて下さい。

源兵衛　それでは、御辭儀なしにいたゞきます……皆さまがたどうもありがたう存じました。

(と一同に禮を云ふ。)

安兵衛　時に御夫婦、我々これから少々內談を致すに由つて、手を打つまでは二階へ來るに及ばんから……

源兵衛　へい、どうぞ御ゆるりと御談しを御願ひ申します、御用の時は何時でも御呼び下さいまし。

安兵衛　くれ〴〵も、密談であるに由つて……

源兵衛　へい、私は下で、お酒を頂戴致して居りますから……

(主人夫婦禮を云つて退場。しばらくすると大石良雄が、居ずまひをなほして座につくと、一同云ひあはせたやうにそれに對して一とかたまりに座に着く。)

大石　(おごそかな調子で)　御一同、いよ〳〵その時が來ました！　永々の間の艱難辛苦が初めてむくいられる日が來ました！

(一同は胸が一杯になつて感激の淚を流すものさへある。)

大石　亡君淺野內匠頭様、御生害の時から今日まで、方々の御苦心、殆んど譬ふるに言葉なく、一つに亡君の御心中を思ひ奉る赤誠、死するにまさる大難をきりぬけたと申すより他なく、大石良雄淚を以て感佩致すより取るべき道はありません。昨年三月十四日御主君御切腹の砌、御そば近くめしよせられ、何事も仰られず、ぢつと此の內藏介を御らんぜられた御顔ばせは今猶眼前にまのあたり拜せられ、御眼の中に御心の凡てを宿らせられました。千言萬言にもまさる御まなざし、內藏介深く御心の程を拜察、決心の程を胸にかため、御主君の御恨は、必らずむくい奉る、赤穗城中の凡ての心は一つに御主君の思召と一つのものと思召され、一重に御安堵遊ばされたしと、御眼の中を拜し奉りますと、君には初めて御安心の御様子にて、そのまゝ御生害遊ばされました。千萬無量の御思召、家臣として取るべき道は只一つと、その時すでに今日の決意は致しましたが、輕擧は却つて大なる禍の元、同じく淺野家の禄をはみながらも、心ゆるされぬ者も多く、一つに世の噂をしづめ、ひたすら靜穩に事をふるまひ、さながら復讐の心なきが如くに振舞ひましたは、只一つ大學様半地なりとも下し置かるゝ事もあらうかと、ひたすら望みをそれにつなぎ、ともかく御家永遠の事を先んじ、然る後に亡君の御怨をはらし奉らんとの存念に他ならぬのでありました。然るに、本年七月十八日、大學様には閉門の上御知行御屋敷共に召し上げられ、最早御家再興の望は全く絶えました。仇討の他なし！　私の考へはそれに向つて進みました。然しながら、日頃も申す通り、吉良家は從四位少將、天下の直參、千二百石の旗本なれば、我々浪人よし五十七十集つて事をなすと

も、たやすくその望を叶へる事は出來ません。殊に吉良家に於ては我々の擧を恐れ、嚴重なる警固怠りなく、尋常の事をもつては近づく事もなりがたく、萬一討ち損ずる事あらば、いよ／＼以て恥を天下に曝す上に、御家の爲には勿論、不忠の臣愚昧の徒として永へに笑を買はなければなりません。心はとかくにはやりますが、遠謀深慮を以つてすべしと、事々に思ひをめぐらし、あるひは同志の人の心をさへ、まどはす如き振舞ひにも出でましたが、八百萬の神々の御加護と亡君地下の御助けに由つて、今日あるを得ましたのは、御同慶たとふるものはありません。かねて行商に身をやつし寢食を忘れて吉良家の動靜をさぐられた堀部安兵衛殿、倉橋傳助、神崎與五郎兩氏、吉良家出入りの茶人山田宗遍の門にあつて、茶事に事よせしきりに吉良家日常の事をさぐられた大高源吾殿より、かれこれと吉報あり・吉良家に於ては昨十三日煤拂ひの後、本日義央自身茶事を催し大友近江守義孝を招き、宗遍もその座に列する由をたしかめられました。好機これを措いて他になく、殊には本日は十二月十四日月こそ變れ亡君御命日に當つたは、正しく弓矢八幡の御告げと感じ、直ちに意を決し、即刻人を派し、各々方に御傳へ致した次第で御座います。亡君の御命日……折からの雪もよし、堀部氏の心入れにて、送別の宴といつは

り、こゝに集まる事を得ましたは、忠臣義烈の方々の精神、天これに幸すとも申すべく、馳走の酒は伊丹の「劍菱」主人心をこめての手打そば……事々にさいさきのよろしいは最早大望成就疑ひなしと信じます……内藏介今日までの態度行狀、恐らく方々の御心に添はぬ事もありましたらう、又徒らに勇なきものと御さげすみもありましたらうが、あらゆる不滿、あらゆる苦難、今日只今總てつぐのひを得たものと思召され、心を一つに、氣を揃へ、亡君の御怨のはるゝやう、身命を賭しての働、不肖御主君になり代つてお頼み申す！……こゝに、亡君御かたみの短刀……方々の連判狀が御座ります。改めて御ちかひ下さい！

（と一同の前に、三寶の上に短刀をのせて出し、手に連判狀をひろげ、二三、義士の名を呼びその顏を見てうなづきあひ、呼ばれたものは頭を下げて赤心をその短刀に誓ふ。）

大石（連判狀を見て、）不破數右衛門、大高源吾忠雄……勝田新左衛門武堯……矢頭右門七教兼……

作者注意

大石良雄の長臺詞の間、一同の態度は全く何等の表情も無い方がいゝと思ふ。又連判狀は必ずしも一々讀む必要はなく、讀むとすれば、その名はな

ろべく人に知られた義士の名が效果多く、老人の次若々しい者をその次に武門のほまれ高きものをと云ふ順にして、よい所で、大石は口に名を云はず連判狀と人の顏とを見くらべながら、一々會心の面持にて、「おゝよく參られた、さこそ〳〵」と云ふ風な心持をあらはし、その人は大石に對して心の底の喜びを表はすやうにすべき事と思ふ。然し、他に猶一層の效果ある演出あれば、作者は喜んでその力を待つものである。

（一巡連判狀と人數とをてらしあはせて。）

大石（共に不安の面持て）　小山田庄左衛門はまだ見えませぬか……

（と一同を見まはす。）

（一同も急に不安の度を增して果して彼は何故不參であるのかと常に親しいものは焦慮の極に達し、さもないものは怎でもいゝと云ふ風な冷たい態度に出て、何となく險惡な氣がざわめき立つ。）

大石　誰れか小山田の事を御存じではありませんか……彼には夜前重要なる用向を申しつけ、金子二百兩を持たせ、本所深川の各浪宅を見まはらせ本日討入りにつき、萬一浪々中近邊に借錢あらば殘らずそれを片づくるやうに申しつけましたが……どなたか御會ひなされませなんだか？

義士の一　はい、昨夜拙宅へまゐりました……

大石　して何か申しましたか……

義士の一　御頭よりの御手あつき御言傳を承りましたが、かね〳〵名を重んずるを本旨とすべき御さとしも御座いますので、幸浪々中の借錢の不義理も仕らず、此のまゝ何時にても御供出來る用意の旨を申しますと、小山田は大層喜びそのまゝ急いで立ちかへりました！

大石　ム、、、。

義士の二　拙者宅へは八つ過ぐる頃、同じく御親切の御言葉をもたらしましたが、拙者とても同樣、此のまゝ死するも決して後指をさゝるゝ如き事無しと申しますと、御あづかりの金子は手つかず御頭に御かへし出來る事になつた、これで重い任務を果たしたと喜んで居りました。私は、然らば少しの間なりと休息致されよ、しぶ茶でも獻じやうと申しますと、これから鶴ヶ岡八幡に參詣して、武運長久の祈りをあげて、風呂に入るのだと申しまして、そのまゝとんで立ちかへりました。

大石　風呂に入る？

義士の二　はい昔、木村長門守は、いよ〳〵討死と覺悟を定めました際に、殊更丁字風呂に髮を清めました想で、小山田は、それにならふと申して居りました！　檢死の

際に、襟元に垢などについて居ては、死しての後の耻である生きながら洗濯たなどと笑ひながら戻りました！

大石　役として、さもあるべき心がけ……それにしても遅い事だ、あゝ、案じさせる奴であるなア……かね〴〵申含めてあるから、よもや酒に性根を奪はれるやうな事もあるまいが……

（下て、八ツの時計が鳴る。）

大石　よしツ！　企てのそも〳〵から、信ずる者に幾度裏切られたか數知れぬ程であつた！　最後は只一人にてもと、かねて心に誓つた事、一つ心の同志四十八人、その力は岩をも貫くべし然らば討入りの手筈を決めませう！

（一同どよめき立つ。）

大石　申すまでもなく、今宵の討入り、目ざすは吉良上野介殿只一人、味方に怪我なく、首尾よく吉良殿の首をあぐるが目的であれば、罪なきものを傷けぬやう、老弱に刃を向けず、火をいましめ、近隣に累を及ぼさぬやう、只一人の功を急がず、味方は必らず、三人四人一團となつて互に身を守り友をたすけ、心をしづかに事を計られたい。前後左右に氣を配り、暗闇(やみ)を恐れ、萬一不明の時は、山と云へば川、川に對して山と答へるを味方の合言葉としてきつとこれを守り細圖の呼子はかね〴〵申し傳へた通り、敵の首をあげたる時は、息のかぎり、つゞけ樣に三點をふきつゞけられよ！　その笛の音が聞こえたる時は、戰をやめ直ちにそこにはせ集る事……邸の中は、いろ〳〵の拔穴、横穴等の仕かけさへあるやうに承る、必らず油斷なく家の隅々までたづねさがし、夜の明くるまでに、必らず大願成就致すやうにつとめられたし！……一ツに、仇を報するが目的、同時に、義士の面目を保つ事が、亡君の御名をはづかしめぬ義と心得られよ！……大高氏、金子をこれへ。

（大高源吾が、包の中から金を出して渡す。）

大石　此の金子は萬一の用意仇討の趣意書と共に必らず肌身につけられたし、首尾よく本懐を遂げたる上は、去就悉く御上の御指圖に相待ち、天下の大法の命ずるまゝに從はなければ成りません、かりそめにも輕々しき振舞ひなきやう心がけられ度し……猶こさいの事は、それ〴〵の役目組頭の指圖に基く事、こゝに書付け置きました、凡ての手配これに由つて決する事……

（と懐中から部署々々についての役割表を出して示す。一同それに見入る。）

大石　以上、忠義の二字に生命を捧げ、亡君の御志を遂ぐるを以つて最後の眼目とせられなば、他に申すべき言葉もありません！

源吾　集まるもの一同、仰の通り一糸亂れず、亡君の御爲

に、凡ては御頭の御命令に從ふ事、弓矢八幡、刃にかけてきつと御誓言申上げます！

（一同もつゞいて頭を下げる。）

大石　不肖大石内藏介良雄、推されてかりに頭領の名を汚すも、その志、その力、同志四十八人、老弱身分の差別は素より、いづれも同じもので御座るぞ！

一同　恐入りました！

大石　然らば、身仕度に取りかゝられたい。

（一同は勢込んで奥の間に這入る。大石良雄はぢつとそれを見て居たが、）

大石　毛利氏……しばらく御待ち下さい！

（と呼ぶ。）

（毛利小平太、何事かと立ち止まる。）

大石　内藏介、折入つて御はなしが願ひ度い、しばらく御待ち下さい。

（一同は去つて仕舞ふ。）

（大石と毛利と二人相對して坐る。）

毛利　何の御用で御座りますか？

大石　かねて、御願ひ申し度いと存じましたが、實は大石良雄一生一度の御願ひが御座ります。只今心中のこらず申上げる。何卒誤解なきやう、心の底を御くみ取りが願ひ度い！　さい前も申す通り、相手は天下の直參千二百石、我々同志の力はたして本懐を遂ぐるや否や、大石の自信はありますが、武運の程は全くはかり知れませぬ、今宵討入つて、萬々一明け方までに討取る事叶はぬ時は、一同吉良邸に於て切腹致さねばなりません。その場合、我々の衷心を語るもの、此の世に一人も殘らぬ時は、再擧を計るものもなく、亡君の御うらみは永へに消ゆる時は御座いますまい。此の儀とくと御考へ下され、貴殿は此のまゝ御殘りが願ひたい……

毛利　御頭、御言葉の中ながら、然らば拙者ばかり、今宵の討入りには御加へ下さらぬとの事で御座るか？　只今神明に誓ひを立て、萬事は御心のまゝに從ふとは申しながら、御言葉返へすは失禮とも思召さうが、取るにも足らぬ毛利小平太、あるひは御邪魔かは存じませんが、浪浪中今日まで、何を樂しみ、何を願ひ碌々として命をつないで居りましたか！　あらゆる艱難と打ち戰ひ家をはなれ妻子を餓ゑさせ、生き永らへて居りましたのは、只只今日あるを心に期して居りましたは、御存じの筈と存じます。それを、今日只今となつて、此の小平太に何科あつて御供が叶はぬので御座ります。申上ぐるも愚痴の至りでは御座りますが、妻子眷族、それと申しは致しませぬが、いづれも拙者の心中を諒り、妻は夫の武士を立てたさ、伯父は忠臣義烈の甥を持ちたさに、神に念じ朝

願をこめ、あらゆる辛酸をものゝ數とも思はぬ赤心、涙の出る程で御座りました！　昨日も餘所ながら、家の樣子をながめましたが、極月の此の寒空に、妻子の菊はやぶれはてた袷一枚、倅小太郎を相手に、さゝやかなる手内職、頑是なきものに、忠臣義烈のもの語り、やがて御父樣の御本望が遂げられますその時こそは忠義のものゝ倅ぢやと、世間の人にほめられるぞ、その時をたのしみに、雪が何ぢや寒さが何ぢや、ひもじい思ひも我慢せよと口には敎へながらも、面やつれの姿を見て、思はず落涙致しました。人知れず、父は今こゝにたづねよつたぞ！　あゝ永々の心勞の忝けない今こそ笑つてもらへる日が、いよ〱明日と迫つたぞと、心の中に手をあはせて、そのまゝ立去りまゐりましたが、お頭、我身の上のことのみならず、浪士の家は同じ涙の淵で御座りますぞ！　それ程望んだ今日となつて、拙者一人義黨に漏れ何面目に生きられませう、拙者その儀はイヤで御座ります！　御斷り申上げます！

大石　（ぢつと考へて）　御心中、此の內藏介とても同じ事、御尤もの儀で御座るが、その御決心を知れば知る程、只今申す後々の大任、全く貴殿を措いて他に御願ひ申すものも御座りません。申すまでもなく、死する事ばかりが忠義とも申されず、生きての忠節がいよ〱大切の事と存じます。今宵吾々本望成就致すとも、もし御舍弟大學樣を輔佐し奉り、淺野家永遠の基礎をかたむる累代の臣なくばいかゞ致さん、又萬一本望叶はずして、吾々一同切腹の曉には、よく吾々の心を知つて再擧をはかる忠臣なくばいかにせん！　卽ちこゝが貴殿に懇願致す所、かねてより忠烈無二の貴殿、此のまゝ御殘り下さる時は、此の上なき後楯にて、何等後を顧るの患なく、一同の勇氣いやます事勿論にて、取りもなほさず此宵の壯擧、成否一つに貴殿の御力に待つものとも申すべく、御迷惑の儀と存じますれど、亡君の御爲、淺野家永代の爲、何卒生きて忠義の士となられるやう、內藏介兩手をついて御願ひ致します！

毛利　取るにも足らぬ拙者に對して、事を分けての御仰は、千萬忝けなう存じます。只これまでの心勞を、同志の者と同じくして、今更に拙者一人……

大石　さツ、それが、生きた忠節で御座る……拙者の心中は、卽ち貴殿の心中、貴殿御承引下さる時は、此の內藏介生き殘ると同じきものと思召されたし。

毛利　（深く考へて）　世にありがたき御信頼を賜はるそれがし……何事も君家の御爲、重き御信任を生命として………

大石　御承引下されるか？

毛利　及ばずながら御奉公致しまする。
大石　忝けない！
（二人手を握り合つて落涙する。）
（やゝあつて、大石良雄、奥の間から、大高源吾を呼び、何事をかさゝやくと、義士の中の重立つたもの五六人毛利小平太の前にあらはれる。）
大石　後事萬端、毛利小平太殿に御願ひ致しました。今宵の壯擧のうしろだては、一つに弓矢八幡、亡君の御加護、次に同志毛利小平太殿の御力で御座るぞ？
源吾　御迷惑なる御重任、千萬忝う存じます。我等生命を賭し、必ず貴殿の御心にむくい奉る！　君家の爲、何分よろしく御願ひ申す。百年の後、いづれは地下にて物語り致しませう、……拙者の心中、毛利氏、これを御らん下され。
（と懷中からたんざくを出して見せる。）
毛利　「何のその岩をもとほす桑の弓」………（とくりかへす。）
大石　あゝ、同志四十八人は、毛利殿の力を得て、行くべき道が分りました！……良金……
（と呼ぶ。大石主税登場。）
大石　用意は整ふたか？
良金　はい！
大石　然らば、申しつけた通り、汝は裏門より攻め入るべし、素より、生きて再び會ふべしとも思はれず、若輩未熟の汝なれば、恐らく父より先に相果つべし……只今、今生の父の遺言、亡君の御爲、武門のほまれを忘るゝなよ！
良金　父上にも、幾重にも御用心下されまして……
大石　汝も萬事に心をつけよ……
良金　はい……
（一同しばらく沈默。）
（やがて、堀部安兵衛、手を打つて主人を呼ぶ。）
（主人夫婦登場。）
大石　主人夫婦、今は何をかつゝみ申さん、我々一同赤穗の浪士、亡君の御うらみをはらさん爲、今宵吉良邸に亂入致すもの……今まで僞りつゞけし段、幾重にも御わび申す。一同の赤心に免じ夜が明くるまで、訴人など致して呉れぬやう、あらためて御たのみ申すぞ！　後事は、こゝに居られる毛利小平太殿に御頼み申した、必ず迷惑は相かけぬ、一期の情け、聞き分けてもらひ度い！　御一同……
（と呼ぶと、奥の襖を取りはづして、一同は芝居の效果を多からしむる爲に「忠臣藏」の揃の着つけに身をかため、手に手にそれ〳〵の武器をたづさへ、眼ざむ

るばかりに立ちあらはれる。源兵衞、驚いて腰をぬかして仕舞ふ。）

安兵衞　御主人、只今御頭よりの御言葉は、よく分つてくれましたか……

源兵衞　へい、私は、あんまりの事に、腰はぬけて仕舞ひましたが、これでも江戸ッ兒のはしくれで御座います！こんな事になるだらうと、心の中ぢやあ思つて居りました。立派な事で御座います！　たとへ此の首がちよんぎられようと、かたき打ちの御手傳が出來たとなれば、孫子の代まで鼻が高う御座います！　訴人處か、御供が願ひてえ位で御座います。旦那、立派におやんなすつとくんなさい！……えゝ畜生、とんでもねー時に腰がぬけやがつて……只今、お祝のお酒を……

（と立たうとして、幾度もたふれて仕舞ふ。）

大石　酒は無用、只その心が忝けない！

（と禮を云ふ。）

大石　聞かれる通り、後事一切、毛利小平太殿に御願ひ申した、淺野家永遠の謀は、何等患ふる所はありませんぞ！決死の首途、申し置かるゝ事あらば、毛利殿に云ひ殘されよ！

（一同何にも云ひ殘す事は無いと云ふ表情。大石頁雄、しばらくして、改めて座をすさり、小平太を正座に据ゑて、）

大石　毛利氏、貴殿の御志を力とたのみ、只今より出立致します！　何分よろしく……

（義士一同、うやうやしく頭をさげる。）

安兵衞　（源兵衞に向つて）永々の親切……達者でくらせよ！……

源兵衞　旦那さまも……

（二人涙をこぼす。）

毛利　あゝ勇ましい、そのいでたち、御頭……拙者もお供……

（大石只ぢつと小平太の眼を見る。）

（小平太、大石頁雄の心中を察したと云ふ心持で、そのまゝ再び座につく。）

（大石頁雄、立ち上つて身仕度にかゝる。）

――幕――

第二幕

毛利小兵太の家

舞臺のやゝ右手により、左手に出入り口ある小さき家。極めてまづしいくらして、取りたてゝ云ふべき程の家財道具も無いが、在來の歌舞伎芝居の所謂貧家の様式

に出らず、まづしい中にキチンと取りかたづいた所があつて、紙こそ古いものであるが、障子などは、一ツも破れて居ない方がよい入口には「御仕立物仕候」と女文字で書かれ、室の正面には佛壇あり、小さな火鉢、片すみによせて子供の手習机がある。時は前場の翌朝、十五日の事。

幕あく。

と、小平太の妻菊（二十六歳）近所の子供の春着を縫ふ爲に餘念なく針をうごかして居る。机の前には小太郎（八歳）がしきりに手習をして居る。

昨夜の大雪はれて、美しく朝日が障子にさして居る。雀の聲がする。

しばらくして、近所の女房登場。

女房　今日は……

菊　おや、女房さん入らつしやいまし。

女房　朝つぱらから御氣の毒ですがね、又いつもの所へこれを屆けて來てもらひ度いんですが。

菊　はい〳〵、毎度ありがたう御座います、丁度子供が家に居りますから、すぐにお屆け致させます。

女房　そんなら、御駄賃はこゝへ置きますよ。

（と一通の手紙と、少しばかりの鳥目とを置いて）

女房　然し、ほんとに大變ですねー、お前さんはさうして朝から晩まで賃仕事をして、坊ちやんは使ひあるき、遊びたい盛りを、よくまあお母さんの御手傳ひが出來ると云つて、皆感心してるんですよ！　旦那はまだ御かへりぢや無いんですか。

菊　はい、永い間の浪人を致しまして、何處ぞよい御主人を持ちたいといろ〳〵とあせつて見ましても、思ふやうにまゐりませず、只今ではもうずつと家へは戻らないので御座います。

女房　さうなんですつてねー、さぞまあ辛い事でせうねー。

菊　はい、ありがたう御座います。一合取つても武士の女房、又よい事も御座りませうと、それぱかりを樂しみにぢつと我慢をして居ります……

（とほろりとする。）

女房　近所でも皆云つてるんですよ、若い上に美しいかほかたち、勿體ない事たなんて、よるとさはると噂ばなし……ねー御新造さん、お前さんの了見一つでは、どんなお世話もしたいと云ふ方もあるんだから、くよ〳〵しないがよう御座んすよ。

菊　御親切にありがたうは御座いますが、高いも低いも、それ〳〵苦勞はありますもの、女の道にかけてまでも、生き度い事は御座いません！

女房　そりやあさうかも知れないけれど、亭主運のわるい

のは一生泣いてくらさなければならないからねー……ぢやさよなら……

（と女房退場。）

菊　小太郎、さむい所を氣の毒だが、又お使ひをたのみますよ！

小太郎　はい、すぐに行つて來ます。

菊　（小太郎に手紙を渡して）あゝ、思つたよりも雪も深い、ころばぬやうに氣をつけて……霜やけの手をあたゝめて行くのですよ！　いかに所帶のたしとは云へ小さいものに使ひはしりをさせなければ、その日の事にも事を缺く……小太郎やさぞつらいと思ふだらうが、母子二人が苦勞をするのも、御父さまの忠義の道が立てたいばつかり……やがてよろこぶ日も來よう、少しの間我慢しておくんなさいよ！

小太郎　どんなさむい所へでも使ひに行くのもいやとは云ひませんけれど、御母さまが涙をこぼしておいでだと、私もかなしくなつて來ます！　あゝお父さまは何故お歸りにならないのでせう……

菊　小太郎……

（と、赤くなつた手に息をかけてあたゝめてやる。）

（やがて小太郎は出て行く。）

（菊はその後を見送り、ふし拜むやうにする、やがて又仕事の座に戻り、）

菊　人樣の春着の出來を急ぐ針、仕立下ろしの小袖を着て、屆をあげかるたを取るを樂しみに、春の來るのを待つ人も、急ぐ心に變りはなけれど春着一枚出來るでなし、此のさむ空に袷一枚……小太郎、どうぞかんにんしておくれ！……南無弓矢八幡……夫の武運の榮えますよう、どんな苦勞もいとひませぬ、どうぞ御守り下さいまし……

（と神に念じて仕事にかゝる。）

（所へ、表口から、ならずもの强八荒々しく登場。）

强八　さあ、今日は何でも埒をあけて貰ひに來た！　のんべんだらりの云ひわけでは、此の强八は歸らねーぞ、右か左か、すつぱりときめてもらはう。

（と大胡坐をかいて、煙草をのむ。）

菊　强八さん、お前はまあ、そのやうな無理を云つて、いつも御願ひする通り……

强八　もう云ふな、無理とは何だ、何が無理だ、貸した金を返へさねーから催促するのが何處がわるい！　今更云つてきかすまでもねー、その金もな並大抵の金ぢあねー、ばくちで勝つた緣起のいゝ金なんだぞ！　それを己れは、手前が食ふものがねーとぬかすから、つい人間並の氣になつて、うつかり貸してやつたんだ！　さあ返へしてくれ！　己れも女を相手にして、つべこべ云ふなあイヤな

んだが背に腹は代へられねーんだ、手前の方の都合ばかり考へてゝは、己らのお倉に火がつくんだ、さあ、たつた今かへしてくれ！

菊　さあそれが今ある位なら……お前に願ひはしやしません……今にも夫小平太殿が……

強八　おい、そのせりふは聞きあきた、夫の出世は何時の事だ？……返事は出來めい、それぢやあ手前は此の強八をぺてんにかけ、あてのねー金を借りやがつたんだな、己れをだましてかたツたんだな。

菊　強八さん、かたりとは云ひすぎませう、なるほどお前の情にすがつて、五兩のお金は借りましたにはちがひないが、その後もいく度にか、なけなしの家の道具、頭のもの、子供のものまで度々に持つて行つたぢやありませんか、買つたら安いものかは知らねど、私に取つては血の出る品々、五兩のお金のあら方は、戻したつもりで居りました！　女一人子一人とお前はあなどつて居られようが、あんまりなさけが無さすぎます。あつてなさぬと云ふではなし、知つての通り艱難辛苦、お前はのこらず知つて居る筈、どうぞ今少しの間待つて居て下さいまし、これは急ぎの仕立物故、明日にも仕上げ、そのお金をあげませう、どうかかんべんして下さい……

強八　お前の方はそれでいゝが己れの入用は今日にせまつた金なんだ、さうだ、そんならその仕立物を借りて行かう……

（と仕立物をつかみにかゝる。）

菊　強八さん、何をなさる、これは人樣のあづかりもの……それを渡して怎なります！

強八　それを己れが知る事か……

菊　いゝえ、いけない、成りませんー

（二人爭ふ。）

（強八力づくで取らうとしても、お菊はなか〳〵渡さぬのみか、ともすると、強八の方が力が及ばなくなる。）

強八　えゝ、強情な女もあつたもんだ、そんなら怎しよう、己れも男だ、力づくでお前を負かして見た所で、自慢にもなりもしめい、なアお菊さん。なんなら己れが、五兩の金を樂にかへせて、お前の苦勞の無くなる道を一つ敎へてやらうぢやねーか。

菊　それは怎すればいゝのです。

強八　人の世話になりねーな。

菊　えゝ。

強八　妾になれと云ふ事さ……そんなにびつくりしなさんな、此の強八樣の云ふ事を聞けと云ふんぢやねー、もつとうんと金のある隱居の世話になる氣はねーかなと云ふ事さ……こりやあ己れが親切に云ふんだぜ、二言目に

ほ、夫の出世、夫の出世と云ひなさるが、此の世の中にちよつくらちよいと出世の出來るものでもなし、それに又女房子供を置き去りにして、半年あまりも姿を見せねー、そんな夫に義理をたてゝ、もしすてられたら怎するんだ！　なア、考へるまでもねー、うんと云ひねー、此の長屋の人達もお前の事を皆馬鹿だと云つてるんだぜ！　貧乏やつれがして居てさへ、その位にふめるんだ、少しやつして養つて見ねー、一生樂に暮らせるんだぜ、お前ばかりぢやねー、あの子倅だつて、使ひあるきの用を達して、一文二文と稼がずとも、立派にやつて行けるんだ！お菊さん、馬鹿と利口の別れ目はなア、了見の持ち方一ツだ、あてにならねー亭主を思つて、子供にまでうき目を見せるか、おかいこぐるみで人を使ひ、盆が來ようと暮が來ようと、のほゝんで居られるとは、お月さまとすつぽん程のちげえだぜ！　萬事は己れにまかして置きねー、わるいやうにはしねーからな、分つたらう、分らねー程馬鹿でもあるめい、一番分る理窟だからなア。

菊　強八さん、もう、けがらはしい事は云はないで下さいまし、たとへ此のまゝ死ねばとて……女の操を汚してまで、生きる未練はありません！

強八　そんなら金は怎うするんだ？　人の親切を無にしやがると、此度は己れが承知しねーぞ……

菊　強八さん、夫毛利小平太殿は、大望のある御方です、一家のものがちり〴〵ばら〴〵、怎うした苦勞を重ねるのも、その大望を遂げ度いばつかり、その願が叶ひさへすれば、此の身はたとへ怎ならうと、決していとひは致しません！　その時お金が返へせぬ時は、いやしい勤に身を賣つてなと、きつとお前に迷惑はかけません！　どうかそれまで待つて下さい！

強八　その大望とは何の事だ、天下を取らうとでも云ふのか……さあそれを云つて見ろ。

菊　それが云へる位なら、こんな苦勞は致しません！

強八　えゝ、夢のやうなはなしを聞いて大晦日がこせると思ふか、勤に出るなら猶早いや、さあ己れと一所に來い！

菊　待つて下さい！

（二人又爭ふ。）

（所へ、小太郎表から走つて來て、）

小太郎　お母さん、大變だ！　本所の吉良のお邸へ、浪人者が斬り込んだよ！

菊　えゝ？　そんならいよ〳〵……

（と云ふ所へ、表の方が、急にざわついて、）

「かたきうちだ！」「赤穗浪士のきり込みだ！」

（と云ふ聲がきこえる。）

菊　（表の樣子にぢつときゝ耳を立てゝ）　強八さん、小平

太殿は本望成就……八幡樣氏神さま、忝けなう御座います！　あゝうれしい、うれしい！　長の辛苦も殘らず晴れた！　强八さん妾の體はもう入らぬ、さあ怎うなとして、お金の足にして下さい！

强八　（何の事か少しも分らず）お菊さん怎したんだ、さあのぼせねーで氣を靜めてくれ、一體何が怎したんだ？

菊　强八さん、今は何にを包みませう、夫、毛利小平太殿は、先年松の廊下で吉良上野介殿に刄傷致され、御切腹あそばした、淺野內匠頭樣の御家來で御座ります。御家老大石內藏介樣初め、同志の人々四十何人、亡君の御うらみを晴らさうと、此の永々の御心勞、今人々の噂を聞けば、正しく赤穗の浪士の方々、吉良家へ夜討に向はれたは、御主君の御うらみ必らず御はらし遊ばしたにちがひない！　長々苦勞の甲斐あつて、此の菊は義士の女房……あゝ忝けない！　うれしい！　小太郎、御父さまは、武門の御名をあげられましたぞ！……

（と狂氣のやうに喜ぶ。）

强八　お菊さん、すまねー、今までそんな立派なお方と知らずに、いろ〳〵お前をいぢめたなア、とんでもねー事をした、此の上無理難題でも云ひかければ罰が當つて眼がつぶれよう、どうかかんべんしてくんねー……

（と云つて居る所へ、表からお菊の伯父武太夫が走つて來て、）

武太夫　お菊……水をくれ！

（と倒れる。）

（强八水を持つて來てやる。）

武太夫　あゝ、大變な事になつた！　いよ〳〵やつたぞ！　おいお菊、何處に居るんだ！

菊　こゝに居ります。

武太夫　おゝ居たか、いよ〳〵やつたぞ！　昨夜、あの大雪に、赤穗の浪士四十八人吉良邸へ切り込んで見ん事仇を打つたとよ！……そして、今勢揃をして引上げた！　町はもう讀賣が出て、義士の番附を賣つて居る。さあ出かけろ、小平太に會はう、さあ行かねーか。

菊　伯父さま、私は行きかけて居ります……

武太夫　さあ氣がせく、何故立たねーんだ……

强八　奥さんはさつきから立つておいでゞすよ、立たねーなア旦那ですよ……

武太夫　あゝ、さうか、あわてるな……えゝ畜生！　こんな時に、畜生、腰が少しぬけやがつて……

强八　（武太夫を立たして）それッ！

武太夫　あゝ立てた！　さあ行かう。

强八　怎なつたら己れも味方だー。

（と一同表に走り出す。）

（舞臺空虚である事しばらくして、喪心したやうな菊と武太夫とがかへつて來る。）

（家の中に這入るやいなや菊は取りのぼせたので、いきなり武太夫にしがみつき。）

菊　伯父さん、小平太は居りません、夫の姿が見えません、怪我でもしたので御座いませうか、伯父さん、夫はどうしたので御座いませう。

（と泣く。）

武太夫　まあ待つてくれ、己れを責めても分らないよ。まあ落ついてくれ。

菊　いゝえ、落ついては居られません、伯父さん、小平太の安否を御聞きなすつて下さいまし、あゝ怎したらいゝのでせう、伯父さん、伯父さん……

（と狂氣のやうになる。）

（武太夫もおろ〳〵して。）

武太夫　まあ待つてくれ！　小平太が御供に漏れる筈は無い、きつと深い仔細がある事だらう。

菊　どう云ふ仔細で御座います。

武太夫　だから、己れも心配して居るんぢや無いか……あゝ、胸がさわいでたまらない、お菊、一體怎したつて事なんだ。

菊　ですから、それを伺つてるのぢやありませんか……

（二人があわてふためて居る所へ極めて物静かに毛利小平太が歸つて來る。）

（小平太の心持では、貧弱な自分が大きい背景になつた爲に、殘りの同士四十七人が安心して本望を遂げたと云ふ事は此の上ないよろこびで、そこに自分の大きい力を感じ昨夜の壯擧は即ち大部分自分の力がなさせたわざであると云ふ考へもあつて、意氣揚々と引上げたつもりである。）

（菊は小平太を見るなり。）

菊　あなた、あなたは何故お供に漏れたので御座います？永の間の艱難辛苦も今日の立派なお姿を見たいばかりであつたのに、何故のめ〳〵とおかへりにはなりました、怎して漏れたので御座います、御心がにぶつたのかそれとも御役に立たなかつたのか、さあ、早く、早く、その譯を御きかせ下さいまし、あゝうらめしい御方だ、なさけない御方です！　あなたは女房子供の此の苦勞を何とも思つて居ないのですか……

（とおろ〳〵聲で夫にせまる。）

小平太　うろたへもの！　取り亂して何の樣だ！　しつかに致せ！　しづかに致せ！……伯父上、菊を御取りしづめ下され！

武太夫　いゝや、わしもお菊と同じ心だ、小平太、お前は何

で御供にもれた？　さあ、そのわけ聞かう、さあ云へ！　場合に由つては容赦はせぬぞ！

小平太　伯父上まで日頃に似ぬ、何故の御立腹、小平太身に取つて、疚しい事は少しも無い！

武太夫　何、疚しい事は無い、よし、それなら猶さら譯を聞かう！　昨夜の夜討に加はらぬは、心おくれか、死ぬのがこはくなつたのか？　此の武太夫も老い朽ちたれど武士のはしくれ、さあ、返答致せ！

（武太夫、菊端然と小平太の前に坐る。）

小平太　忝けないその御言葉、小平太決して命を惜しむ者にもあらず、又心おくれも致しませぬ！　義黨の數に漏れましたは、深い仔細のある事、どうぞ御心を御しづめさせられ。

武太夫　いゝや心は靜まらぬ、その仔細聞かう、さあ申せ！

小平太　即刻申上げてよい程なら、何の躊躇を致しませう、伯父上も、菊も、只此の小平太を御信じ下さい……毛利小平太は、赤穗の浪士四十七士と全く同じ心のものにて、立派な武士で御座りますぞ！

武太夫　えゝ、言葉巧みに何を申す、立派な武士なら、何故漏れた！　何故亡君の仇を討たぬ！

小平太　されば……只今申してよい事なら……

武太夫　もう云ひわけは聞き度くない、あゝ見下げはてたいくぢなしだ！

菊　小平太殿、御暇をいたゞきませう……

小平太　何、離縁をしろと申すのか。

菊　はい！　此の菊も武士の娘、永々の血の出るやうな苦しい思ひも、夫の武士を立てたいばつかり、その望も叶ひませねば、生きながらへて何の面目が御座りませう、御暇を願つて、小太郎ともども、皆さま方の御供をして、あの世の殿さまに不忠の御わびを致します！

武太夫　菊、よく云つた！　己れの爲にも一人の姪、せめても人の道を立てゝ、亡君への御わび御先祖さまへの申しわけ、立派に致せ！……さあ小平太此の伯父の目の前で、たゞ今菊を離縁致せ！　さあ、何故云はぬ！　返事をしろ！　さすがの腰拔武士も、女房の言葉に恥入つたか……恥を知つたら何故死なぬ、切腹が出來ないか、死ぬのがイヤなら離縁致せ！

小平太　（ちつと考へて）伯父上の御志、女房の貞節、今は何をかつゝむべき、御はなし申す、さあ、近く御より下さい！

（二人小平太の前ににじりよる。）

小平太　夜前、御頭大石内藏介殿はじめ拙者を交へて四十八人、本所一ッ目補座源兵衛方にて勢揃を仕り、凡ての手配、用意萬端調うて、いざ出立の間際に至り、内藏介

殿拙者をまねかれ、今宵の壯擧萬々不覺を取る事もあるまじけれど、萬一夜明までに敵の首級をあげざる時は、一同吉良邸に於て切腹すべし、決死の同志四十八人殘らず相果てたる後は、再擧をはかる者一人もなく、亡君地下の御怨は永へに消ゆる事なし、又首尾よく本望叶ふと雖も、御舍弟大學樣淺野家再興の時至るも、普代の忠臣一人もなければ、これ又憂慮に堪へざる次第、一に四十八士の後楯となり、淺野家永代の礎となるもの、此の小平太の他になし、迷惑ながら生きての忠義を全うして、生き殘つてくれまいかと、禮をあつくし、言葉をつくし默々との御たのみ、小平太甚だ迷惑至極、一生の思出と待ちに待ちたる事ではあり、妻子永々の苦心の的も、拙者の武士を立て度いばかり、血の出る思ひを押ししづめて、生き殘る事は出來ませぬと、重ね重ね申したれど、かねてその志を知ればこそ、死するにまさる一大事を、托すべきもの貴殿を措いて一人もなし君家の爲におたのみ申すと、重立つたる同志の方々、四十七人、拙者の前に兩手をつかれ、涙を流しての御たのみで御座いました。

武太夫　それで生き殘つたと申すか。

小平太　何事も君家の爲と、徒にはやる心を押ししづめ……

……

菊　御供にもれたと仰有るのか？

小平太　忠義の爲に涙をのみ……

武太夫　卑怯もの！　見さげはてた腰ぬけ武士、最後の決心たしかめる爲、大石殿の遠謀深慮、その試みに見事外れ、愛想をつかされ取りのこされおめ〳〵生きて歸つたのだな！

小平太　えゝ。（と妙に不安になる）

武太夫　あゝ適な大石殿は、人の心の奥を見て、貴樣をはぶいて仕舞はれたのだ！　嘘つきめ！　かたりめ！　あゝ、噂に聞けば足輕寺坂吉右衛門まで、御供のかなふその中に、重代淺野の御家來として武名をあげた毛利の家を、貴樣一人の不心得で、粉みぢんにして仕舞つたな！卑怯もの、うらぎり者、此の伯父の皺面へ、見ん事泥をぬりをつたな！

小平太　あまりと云へば、伯父上御言葉がすぎますぞ！

武太夫　言葉がすぎるとは無禮な奴だ！　武士のすたつた汝には、犬畜生と云はうとも此の腹はまだ癒えぬ！　えゝ、人非人！　犬畜生！

（と、怒りにまかせて、小平太をうち据ゑ。）

武太夫　伯父なればこそ手を下すぞ！　亡君の御いましめ御先祖樣の御叱りと、骨身にこたへ居れ！

（とうち据ゑ、うち据ゑ、仕舞ひにはたふれて涙をはら〳〵こぼす。）

小平太　あゝ御疑ひは言葉を以つて云ひ解くすべは御座りませぬ！　伯父上、此の小平太が僞りものか、誠の武士か、只今證據を御らんに入れませう。

武太夫　證據があらば今見せろ！

小平太　我々同志の、行くべき先は高輪の泉岳寺、これからすぐに御供して、昨夜の樣子、拙者の心底大石殿に御たゞしあれ！

武太夫　うん面白い、恥の上の恥をかくのは知れた事だ、諸人の前に恥かゝすも、せめてもの心ゆかせ、さうだ、行かう、菊、そなたもまゐれ……

（と云ふ時、表の方に俄の人聲がして、）

「やあ、赤穗浪士の引上げだ！」

「あゝ、義士の引上げだ！」

「大變だ／＼！」

（などと云ふ聲がきこえる。）

（武太夫、小平太、菊、それに耳をたてる。）

（と知らせなしに、靜かに道具がまはる。）

（と、雪の深く積つた往來が、ずつと見える。背景は、冬枯れの木立。）

（多くの群衆。）

（人聲。）

（やがて、靜々と、四十七士に右手奥から、左手の方へ揃つて歩んで行く。）

（中には怪我をしたものもあるが、いづれも意氣天を衝くの勢で、よろこびと武士の本懷とで極度の昂奮にのぼせ上つて居る。）

（群衆は誰れ云ふとなく、花々しい壯擧をたゝへ、歡迎と感謝のよろこびを叫んで居る、義士の行列の前後左右には、それ／＼上役人が警固の爲につき添つて居るが、これ等も皆天下の大法を犯したものを捕へると云ふ態度でなく、むしろ尊敬を以つて義士の爲に道をあけて居ると云ふ風である。行列の先が左手奥にかくれる頃、右手奥から、毛利小平太の妻菊、伯父武太夫がころぶやうに走り出て）

菊

あの、毛利小平太身よりのもので御座います……

（と義士に近よると、義士は誰れも／＼はりつめた心と、徹宵して奮戰した疲勞とで神經衰弱になつて居るので、極端に云へばよく眼も見えないと云ふ程に上ずつて居る、警固のものは近づくものを邪魔だと云つて斥ける。その間に人は歩み去ると云ふ風で、菊と武太夫とは幾度もそれをくりかへすが、いづれも認められず、その度に悲しい幻滅を感じて來る。）

（その中に、毛利小平太は右手奥から凜々しい姿で急いで來て、行列に近づき、）

小平太　近松殿……夜前は……間島氏……本望成就……小平太御よろこび申上げるぞ！

（とうれし想に呼ぶけれども、相手は菊や武太夫に對したと同じやうに一向平氣で居る。小平太は、いさゝか失望して、やゝせき込み勝に猶二三のものゝ名をよぶが、いづれも小平太を顧みない。一方、菊と武太夫とは、それ見た事かと云ふ風に科に於て小平太をせめたてる。）

（小平太いよ／＼狼狽して、）

小平太　村松氏、早水殿……毛利小平太を御忘れか……重任を帶びた、毛利小平太御喜び申すぞ！

（これでも相手は夢中て行きすぎる。）

（菊と、武太夫とは更に小平太を攻めたてる。）

小平太　御頭大石殿はいづれに御座る、御頭……大石殿……
……

（と行列について走る、菊も武太夫も續く。）

（しらせなしに舞臺は靜かにまはる。同じ往來のつゞき。）

（やがて、小平太初め三人は先頭の大石内藏介の所へ來て、）

小平太　御頭、毛利小平太で御座います！　夜前は失禮致しました！　首尾よく亡君の御うらみを報じ奉られ、小平太此の上のよろこびは御座りません！　家内のもの共、昨夜の事も存ぜずして、とかくに拙者の態度を疑ひ、……恐入りました儀で御座りますが、御頭より直々納得のまゐるやう、御言葉を賜はり度いと存じます！　御頭毛利小平太で御座ります。

（と雪に膝まづいて賴む。）

大石　（ぢつと小平太を見て）　毛利氏か……

小平太　はい！

大石　赤穗の浪士四十七人、天下の大法を犯し奉つた！　進退の儀殘らず公儀の御指圖に從つて爲すべき場合……

小平太　はい……

大石　往來中にて、私事は御遠慮下さい！

小平太　えゝ？

大石　行くべき先は亡君の御墓前、高輪の泉岳寺………御免！

（と行きすぎようとする。）

小平太　御頭、餘人に非らず、拙者で御座るぞ！　毛利小平太で御座るぞ！　夜前の御言葉に對しても、あまりと云へば御情けない……

（と、猶ゝ袖にすがらうとすると、）

警固の武士　狼藉者め！　下れ！

（とひきはなす。）

小平太　いゝや、拙者は義黨の一人にて……
警固の武士　下れ〳〵！
（と力づくで小平太をしりぞける。）
（行列は行きすぎる。）
（小平太恐ろしい幻滅を感じ、呆然として立ちつくす。）
（舞臺はしづかに元に戻り、小平太の家になる。）
（道具が止まつてからしばらくして、小平太は、のぼせ上つた面持て、ふら〳〵と立ちかへり、座敷に上つてどつかりと坐る。）
（あとから菊と、武太夫がうちしをれて從つて、家に入るなり二人とも泣き伏して、小平太をせめる力も無い。しばらくして、小平太の子小太郎、表から走つて來て。）
小太郎　お父さま……お父さまは、何故御供をなさりませぬ！　かたきうちには何故御出にはならなかつた！　お父樣、御父さまは、立派な武士では御座りませぬか、あゝ、御母さまと二人して、私もまつて居りましたのに……お父さま、御父樣は卑怯者だ悲しい事だ！　口惜しい事だ！
（と泣く。）
武太夫　小太郎、御前の云ふのはもつともだぞ！　諸人の前で恥をうけ、現在我子にはづかしめられ！　小平太武士の面目が何處にあるのだ！
小平太　何と仰られやうとも、昨夜大石内藏介殿、兩手をついて、萬一うちもらしたその時に、再擧を賴むと云はれた事は、天地神明にちかつて、小平太僞りは申しませぬ！
武太夫　愚かもの！　命を的に主君の御うらみを晴らさうと、決死を誓つた義士の心を、天道樣に通ぜぬと思ふのか、萬一不首尾に終るなどの事あつては、此の世の中に神も無い！　佛も無い、天道暗しと云ふべきもの、天の命じた昨夜の壯擧に、萬々一を懸念するが、即ち武士の魂でない！　仇を討つか死すのと二ツ、行はずしてあやぶんだが貴樣の馬鹿だ！　大馬鹿だ！
小平太　（ちつと伯父の言葉をきいて）　ム、！　小平太は馬鹿だつた！
小太郎　御父樣は、馬鹿でした！
小平太　馬鹿だ！
武太夫　馬鹿だ！　馬鹿だ！
小太郎　馬鹿です！
武太夫　馬鹿野郎だ！
小平太　さうだ、此の小平太は、大馬鹿野郎だ！
（といきなり刀をぬいて、ぐざとわき腹につきさす。）

（一同驚く。）

小平太　死するも忠、生くるも忠と大石殿の言葉を重んじ、ものゝ表裏をも辨へず、かげにかくれた義黨の一人、天下の義擧の成否をあやぶみ、死すべき場所を失つた！……伯父上の御怒りは、やがて解くべき時も御座らう、小平太決して死するを恐れしものでは無い！　菊、小太郎、馬鹿野郎の父を許してくれよ！

（小平太悲憤の涙を流して苦しむ。所へ、表から、楠屋源兵衛、あわたゞしく小平太の家はこゝだなと云ふ思入れで飛び込み、此の體を見て驚きながら。）

源兵衛　毛利樣、大高樣より御手紙で御座ります！

（と一封の手紙と小さい風呂敷づつみとを出す。）

武太夫　（その手紙を取つてひらき讀む）　取り急ぎ申進じ候。昨夜はいろ／＼と御迷惑の段、千萬忝けなく厚く御禮申上候。只今首尾よく吉良殿の首級をあげ、亡君の永き御うらみを殘らず御はらし申候。吾々一同花々しく相戰ひ、二三手傷のものも御座候へどもいづれも幸に淺手にて、討死致候もの一人も御座なく御安心下され度候。かく心殘りなく奮鬪致す事を得申候は、昨夜後事一切の重任を御引うけ下され候貴下の御うしろだてのあればこそ、吾等一同見事に本懐を遂げ申候は半ば以上貴殿の御力に由るべき事、大石殿はじめ一同深く感佩在罷候。一同引上げの勢揃致し候折、いづれも早速毛利氏へ御傳へ申上げ、泉岳寺への行列に御加はり下さるやう仕り度しと申し、拙者も勿論然るべき儀と存じ候處大石殿の仰には、此度の企て、そも／＼一ツに亡君の御うらみを報ずるにありと雖、君家永遠の事を慮ればこそ、特に毛利氏に重任を御願ひ申上候次第、今や、國禁を犯し、黨を結び、公を憚らざる罪を犯し候上は、已に一命は上の御さばきに捧ぐべきもの、もし毛利氏吾等の一味と相成る時は、同じ御咎めを受くるは必定、かくては昨夜御殘りを願ひ候事全く無意味の事と相成り候へば、今しばらく事を伏せ、その時を待つて、君が誠忠を公に致すべきが然るべく、徒らに喜びを頒つをのみ知つて、その後難をかもすは小人女子の爲すべき業故、その儀はさしひかへられたしと恐入り候御配慮、今更ながら一同大石殿の御苦心にほと／＼感じ入申候。さ候へば、吾等これよりの行動、いかゞ相成候か一ツに御命令に從ふべく、御墓前にて切腹はかねての宿願に御座候へば、いづれにもせよ一足御さきに死すべきもの、貴殿の忠烈は地下に亡君と御目通り仕候節一同よりくれ／＼も申陳じ君家永遠の事よろしく御願ひ申上げ、御武運長久草葉の陰より御いのり申すべく候。いろ／＼申上度き事御座候へども取りいそぎ幸便に托し一筆申上候次第、御判讀下され度く、猶、貴殿

の分として染出し候一着、御送り申上候匆々。
毛利小平太殿。大高源吾……
（讀み了ると、武太夫ははじめて打ち驚き、その手紙を小平太の前にひろげて見せる。）
小平太　（苦しみながらその手紙を見て）あゝ、大高氏……大高氏に會ひたかつた！　群衆の中に見失つた此の小平太は呪はれたのだ……伯父上、菊……小平太は武士であつたと、今わの際に信じて下され……
（武太夫、菊、心からすまなかつたと云ふ思入れで小平太を介抱する。）
小太郎　御父さま……
（とすがりつく。）
小平太　小太郎、父の言葉をよく聞けよ、成人の後は、弓矢取る身と相成るべきも、此の父を手本として、物の表裏を辨へて、死すべき道をあやまるなよ！　朝日に匂ふ櫻と散り、谷間の蔭の花となつて、淋しい終りをしてくれるなよ！　香りゆかしく惜まれても、此の父親は名もなき花……馬鹿野郎の死をあはれと思へ！
（と抱きかゝへ、涙ながらに云ひきかす。）
（雪の表に、早くも討入番付の呼賣りの聲がする。）
呼賣の聲　えゝ、赤穗浪士の仇討番づけ、同志の數は四十七人、上は大石内藏介……下は足輕寺坂吉右衛門……殘らず知れる、討入番附……
（その聲聞いて、小平太一層無念やる方なく再び刀を以つて腹をえぐる。）
（源兵衛、あわてゝ風呂敷を解き、中から同じ入山形を染めた揃を出して、せめて最期に着せてやれと云ふ心で菊に渡す。）
（菊は武太夫と眼を見合はせ、直ちに夫のうしろにまはつて、その着物を小平太にきせかける。）
（小平太、うれし氣に、その揃をうちながめ會心の笑をもらし、武太夫と菊と小太郎とに、代る〴〵、襟の文字を指し示す。）
（文字は、「赤穗之浪人、毛利小平太……」と白地に黒黒と書いてある。）
（一同小平太の心にうなづきながら涙を流す。）
源兵衛　（小平太の最期の近づくを見て）南無阿彌陀佛………
（と合掌する。）
（一同介抱……）
（再び呼賣の聲……）

――靜かに　幕――

瀬戸英一篇

夕顔の巻（二幕四場）

人物

蔦松葉のお葉
女將山樂のお藤
小つる 藝者
絹子 同
定子 同
かるた 半玉
瀬沼欣一
宗兵衞 父

第一幕

新橋板新道蔦松葉お葉の家

玄關を入れて三間程の家。中の間と奥の間との間に、廊下の突當りに二階に通ずる梯子段が見える。緣喜棚だの藝者家風情の飾り付けは、中の間に多く、奥の間は藝者家らしくなく、大机があつたり、卓上電話があつたり、床の間には着物が亂雜に積み重ねてあつたり、見取圖の卷いた物が五六本立てかけてあつたり、本箱があつたり、下手は事務所と云つた風な體裁となつてゐる。併しその中にも藝者屋らしい柔さはあつて、羽子板や硝子の箱に入つた人形や、さうしたものが亂雜な部屋の中にも幾分の色つぽさを添へてゐる、と思ふと曲彔が不調和に一つ置いてあつたり、早く云へば事務所と藝者家とが同居してゐる樣子、玄關の奥に臺所があるが見物席から見えない。

六月下旬晴れた日の午後。

奥の間に主人のお葉と友達の鶴三升の小つる、山樂と云ふ待合の女將のお藤とが鼎座して、話し合つてゐる、柝が鳴ると野崎の三味線を聞かしてゐる。

幕明く。

三味線が切れる。

小つる　精が出るね。（誰れに云ふともなしに云ふ）

お葉　（自分の考へに氣をとられてゐたので、小つるの云つた言葉の意味が分らない）エ、……。

小つる　お隣りさ、此暑いのに偉いよ。

お葉　三勝さんかい、なアに半分は近所へ自慢の義太夫と云ふ陽氣ぢやないね。

お藤（今迄自分の考へに屈託してゐたが、此時煙管を叩いて）おや、この話しはもうこれつ切りなんですね。

お葉　えゝ、折角ですけどお神さんのお顔をつぶして、本當に何んともすみませんが……

お藤　私の事なんか、構やしませんが……否え私だつて、餘り此話は氣が進んぢやゐないんですから、相手が相手丈けに乘切つてまとめたいと云ふ氣はないんです、けれど餘り黑澤さんが喧しくお云ひなさるのですから、そりや私だつて黑澤さんなら斷りますよ。

小つる　黑澤つてあの黑澤さんの事ですか。

（トお藤の方へ。）

お藤　エヽ、此方の絹子さんを、是非つて來たんでね。

小つる　まア何んて人だらう、づうづうしくよくそんな事が云へたもんですね、女將さん私はお神さんにも氣に入らない事があるんですよ、何んだつて、あんな黑澤さんなんかをお宅ぢやお客にしてゐるんです、私はこんな情けない話はないと思ひますよ、お宅ばかりか、土地の外聞にも係るぢやありませんか。お內儀さんはまだ御存じないんですか。本當ですとも、彼の人のお母さんと云ふのが、アメリカで洋妾をしてゐて旦那が病氣で死んだんで、其財產をすつかり貰つて、その時、皿洗ひかなんかしてゐた、今の黑澤のお父さんと夫婦になつて歸つて來た、あの黑澤は、その間に出來た、謂はゞラシヤメン成り上りの息子ぢやありませんか、成金然と大きな顏をしてゐるが、そのお金もお母さんが、ラシヤメンをして儲たお金だと思へば、聞いた丈けでも大概厭な氣がするぢやありませんか、然しその病氣で死んだと云ふ旦那が、本當に病氣で死んだんだか、疑はしいつて云ふやうな事を聞いちや誰れだつてつまはぢきするのが當然ですよ、それを女將さんがそんな者の使ひに立つて、家のおきぬちやん、なんて私、本當に女將さんを恨みますよ、第一積つても御覽なさい、此人とおきぬちやんとは姉妹と云つても、乳姉妹、此の人の死んだお母さんの、お嬢様に當るお絹ちやんを、黑澤なんかに出せると思つて被在るんですか。（懸命に云ふ）

（お葉はハラハラしてゐる。）

お藤　さう云はれると、私も自分で使ひに來たのが少し極りが悪いけど、絹子さんだつて此の商賣になつて見りや、何時までも生娘ではゐられなからうし、これは氣に障つたら御免なさい、だがお葉さんの此頃の苦しい手許は薄薄知つてゐるし、お金なら幾らでも出すと云ふ黑澤さんだから、此處でまとまつたお金が入りや、お葉さんもよし、人間はどうしてもお金が口を利く當節柄らぢや、黑澤さん程の人が付いて居りや、絹子さんも行末よからう

と思つて、それでツイ……もつとよく考へて來りやよかつたんですよ。
お葉　女將さんの御親切はよく判つてゐます、小つるさん、お神さんは全く親切で云つて下すつた事なんだから……お前さんのやうに云はれりや、私が間へ這入つて困つて了ふぢやないか。
小つる　御免よ、何も決して、お神さんに喰つてかゝらうなんて元氣は、これつぱかりもないんだけど、黒澤の事となると、ツイムカ〳〵して來るもんでね、女將さん……御免なさい。
お葉　お前さんは何せ、黒澤さんの事となると、さうムカツクんだらうね、尤も厭な人には違ひないけど。
小つる　御覽な、私は又何ぜお前さんが、縱へ平のお座敷にしろ、お絹ちやん何かを、黒澤の座敷へ出すのか不思議でならないよ、昔のお前さんなら、もう今までに黒澤に、二度と土地へ足踏みの出來ないやうな、啖呵を切つてゐる處だがね。
お葉　禁酒でも破れば知らない事、今の私しにそんな婆婆氣はないよ。
お藤　本當にお母さんの遺言とは云ひ條、あれ程好きだつたお酒が、よくぷつつり止められましたね、これ許りは本當に私も感心してますよ、自分の好きに克つと云ふ事は、よく〳〵の辛抱でなきや出來ない事ですよ、仍且平生からの勝氣が手傳ふからですね、さうぢやありませんか。（と小つるの方へ）
お葉　その勝氣が、お酒の上へも出て來るんだから、いけないんですね、醉ふに從つて氣が暴くなつて來ると云ふんだから、好いお酒ぢやありませんよ、人樣にも醜状ないから、轉んで怪我をしたと云つてますけど、此傷ね、額の此生え際の處に薄く殘つてゐるでせう。
お藤　オヤ、そんな處に傷があつたんですか、まあ今までちつとも氣が付かなかつた。
お葉　（冗談らしく）女が美いから。（笑つて）此傷だつて本當は私が十九の時、熱海へ連れて行かれた時に、仍且醉拂つてね、鐵道の工夫と喧嘩したんですよ、その時石切れでぶたれた痕なんだから、呆れちやふでせう、それから何度となく意見されても、禁める氣にならなかつたのが、お母さんの死に際の意見が身にこたへて、豐川樣へ禁酒の願をかけましたの、さてやめてしまふと、醉拂つてゐた昔が別物のやうな氣がしますね。
小つる　少とも呑みたいとは思はない。
お葉　豐川樣の御罰が恐ろしいやね。
お藤　豐川樣へかけた願を破ると、大變な祟りが來るさうですね。

お葉　さうですつて、ですから猶更愼んでゐますの。
小つる　それぢや沖も黒澤を土地から追拂ふなんて云ふ勇氣の出つこはないね。
お葉　沖も〳〵、縱しんば興川樣が許してやると云つて下すつても、私の心が許さないからね、だがお前さんは、よく〳〵黒澤さんが嫌ひだと見えるね、口說いて彈かれたんぢやないかい。
小つる　止しておくれ、あんな奴、そんな事を聞くのも耳の汚れだよ、誰れだつてあんな人非人を好きだなんて云ふ人があつたら、冗談を云つたにしても、私はお前さんとでも絶交するよ。
お葉　黒澤さんも、お前さんにはこれ程までに嫌らはれたら、嘸かし寢覺めの好い事だらうね。
小つる　だから賴むよ、彼奴の事だから、手を換へ品を變へて、やつて來るに違ひないが、決しておきぬちやんを出しておくれでないよ、何んだかおかみさんの向う面へ立つやうですみませんけど。
お藤　いゝえ、私も實は今も云つた通り、ありやうは絹子さんを、黒澤さんに出したくないんですよ、併しお葉さん、貴女は絹子さんをどうするつもりです、今の儘で、何時までも素人同樣の身體にして置くつもりなんですか。

お葉　お母さんの遺言があるもんですから。（間）お孃樣が藝者におなんなすつたのは、商賣の手違ひから、どうか お孃樣は何時までも、立派な綺麗な身體にして上げて置いておくれ、假令旦那と名のつく人が出來ても、それはお孃樣の氣に入つた方、やがては立派に奧樣になれる方でなければ、決してお客など取らして上げてくれるなと、死に際に懇々賴んで行つた言葉もありますし、私もきぬ子さんが可愛くつてね、あの綺麗な身體を見ると、ムザと男の手に觸れさせ度くない氣がします、ですから黒澤さんに限らず、何誰がお世話をして下さるにしても、絹子さんも承知の上私しも承知で、安心の行く方でなければ絹子さんは上げまいと、堅く心に決めてゐますの。
お藤　さうですか、苦しい今のお葉さんの境遇でねえ、何んども感心するやうですけど、私は本當に感心してゐましたよ。これが無暗と稼がせる、主人で在つて御らんなさい、絹子さんで、一釜も二釜も起してゐますよ、本當に全く感心ですね。
小つる　釜を起すと云やア、お前さん南洋から便りでも來たかい。
（此少し以前に噂さの主のきぬ子が靜かに歸つて來る、上品な拵へ高尙に結つてゐる、餘り靜かに這入つて來たので三人は誰も心付かない、中の間に坐つて思

案。）

お葉　（首を振る）　まだ好い芽が出ないらしいのさ、一昨日も又都合がつくなら、幾らでも送つてくれと云つて寄越して來た。

小つる　一體ゴムの栽培とか云ふのが、素人がやつて甘く行くものかね、お前さんの御亭主だけど、戸祭さんは、少し山氣が多過ぎるよ、日本にぢつとしてゐられないのかね。

お葉　私もそれを思ふんだがね、昨日お金を送る序でに、見込みのないものなら諦めて直ぐにも歸つて來てくれと手紙でさう云つてやつたのさ。

小つる　又送つたのかい、私やどうも勿體ないやうな氣がするけれど。

お葉　送つてやらなきや仕方がないもの、これを送らなかつた爲に、成功するものが成功しなかつたなんて云ふ事があつたら口惜しいからね、苦しいお金だつたけど、送つてやつたのさ。

小つる　お前さん、戸祭さんが成功すると思つてゐるのかい。

お葉　するとは云へないけれど、成功する樣な氣がしてゐるのさ、轉んでも唯起きる人ぢやないからね。

小つる　御馳走樣。

お葉　惚氣ぢやないよ。

小つる　亭主の事となると、勝氣なお前さんでも、そんなにもノロクなるものかね、お葉さん、私しは決して無理にお前さんの氣に逆らひたいんぢやないよ、だが御亭主にのろくなつてゐるのは、女房のお前さんとして結構な話としても、餘り戸祭さんの腕を信用しすぎて血の出る樣なお金まで、無理算段して注ぎ込むと云ふのは、どうだらうかと思ふよ、少しは家の事も考へないとね、おきぬちやん許りぢやない、定丸にかるたと云ふ二人の抱女の世話も見てやらなきやならない責任が、お前さんにあるんだよ。

お葉　有難う、よく云つておくれだ、私しもそれを考へないぢやない、もう來月はお盆だつて云ふのに、絹子さんは出來たが、定丸なんかには、出の着物も拵へてやらないやうな、今の始末だからね、私しは無論休むつもりぢやゐるが、定丸にまで去年の出は着せられないがね、と云つて定丸を休ませる譯には行かず、寧そ住替へをさせた方が、あの子の爲めにもいゝだらうと思ふんだけど、生憎と云ふんだか何んだか、二人とも私になついてゐてくれるんでね、斯うなると倘更、宅の人が成功して歸つて來てくれなきや困つてしまふ。

小つる　まだ戸祭さんが成功すると思つてゐるのかい。

お葉　さう云ふ氣がするんだよ、するだけに倚更身の皮をはいでもと……お前の意見を聞かないやうですまないけれど。

小つる　夫婦となりや仕方がないさ、だがお前さんが、そんな氣で定丸やかるたを住替へに出すやうだつたら、一應は私に話をしておくれ、何んとかして私もその相談にのるからね。

お葉　あゝ、その時はきつとお前さんに相談するから、何分賴むよ。

お藤　土地でも評判になつちやゐるが、本當にお葉さんと小つるさんとは仲が好いんですね、私は又感心して了ひましたよ。

小つる　又女將さん見たいに、無暗と物に感心する方はありませんね—。

お藤　癖なんですね、よくお客様にも云はれるんですけど、お前位能く何でも感心する女はないと言はれますが、自分でも成程と感心して了ふ程、感心してしまふのですよ。ホヽヽヽ、まアとんだ話しに身が這入つて、長尻をしてしまつた、ではお葉さん此事はもうこれつきりと云ふ事にしませう。

お葉　御親切を無にしてすみません。

お藤　どうかまアきぬ子さんを何時までもお孃様藝者にして上げて置いて下さい、ではどうもお喧しうムいました、左樣なら。

小つる　女將さん、其處迄御一緒に行きませう、おやお葉さん今の話は私の方で一緒に何しとくからね。

お葉　平常も御前さんにばかり、オンブしてすまないね。

小つる　姉妹だもの、當然の事だね、では左樣なら。

お葉　お早々樣。（送つて行く）

小つる　先刻の事は私の方で何をして置きますから心配しないで下さい。

お葉　いつもお前さんに、無理を云つて濟まないねエ。

小つる　（中の間へ來てきぬ子を見て）オヤきぬちやん。

お葉　え、絹子さん、まア貴方何時の間に。

きぬ子　え、たつた今、只今。（挨拶をする）

お葉　お歸んなさい、さう今歸つて來たんですか、ちつとも知らなかつた、髮は結つて來たんですか。

きぬ子　エヽ。

お藤　よく出來ましたね。さうした處はどうしてもお孃樣とより外見立てやうが有りませんか、黑澤さんが夢中になるのもむりは有りません。

きぬ子　まア、いやな女將さん。

お藤　又、黑澤さんが出ましたね、もう云ひません、では左樣なら。

小つる　左樣なら、おきぬちやん、時々遊びに被來い。
きぬ子　エヽ有り難う厶います。
お藤　さ、お先きへ。
小つる　とんでもない、女將さんから、お年役と云ふ事も有りまさあね。
お藤　ではお先へ御免んなさい。（外へ出る）
小つる（續いて外へ出て向うを見る）オヤ彼處で定丸とかるたが誰か若い男と手の引つぱりつこをして居るよ。
お葉　エ、どれ……あゝ瀨沼さんだ。
きぬ子　エヽ瀨沼さん。（と思はず玄關の方へ）
お葉　よく御覽なさい、小つるさん、其處にゐちや邪魔だよ。
きぬ子　あら嫌だ、厭な姉さん。（とバタ／＼と奧の間へ）
（お葉と小つるは顏見合せて笑ふ。）
小つる　……なのかい。
お葉　うん、矢張（やつぱり）ね、斯う云ふ處で育つと、如何に堅氣の御孃さんでも、その風がしみこんで來ると見えてね、岡惚れだとさ、大變なの。
（きぬ子は奧の間で聞耳を立てゝゐる。）
小つる　大丈夫なのかい。
お葉　相手かい、大丈夫なんだね、これも大眞面目なのさ、人間も確かだ、大して財產が有ると云ふわけぢやないけど、會社で自分の取つてゐる月給丈けは、自分の小遣ひに使つても差支へはないと云ふ身分で、考へも確（しつ）かりしてゐるし、一緒に出來るもんなら、して上げたいと思つてね、氣心を知るために、家へ遊びに來て貰つてゐるのさ。
お藤　それはまア、本當になによりですね、さう云ふ方が有るなら一日も早く、絹子さんの身を固めて上げた方がおためですよ。一遍でも身體がよごれると、一寸やそつとでは容易にまとまらないものですからね。
小つる　御らんなね、かるたが車輪になつて取組んでゐるよ、往來端で色消しだね、お酌のする事ぢやない、ぢやないか、男が此方へ來るのを極りを惡がつてゐるんだね……あれでもヲメ／＼と此處へ引張られて來るらしいよ、矢張來たいんだね……よく出來て居るだん／＼此方へやつて來た、左樣なら。
お葉　左樣なら、女將さん御免なさいまし。
お藤　御免なさい。（去る）
（きぬ子は一人ソワ／＼してゐたが、此方へ來ると云ふ事を聞いて、急に火机の前へ坐つて、何の意味もなくトランプをきり始める。）
お葉　（中の間へ引返して來て）きぬ子さん、私は今の間二階で横になつてゐますからね、階下（した）をねがひますよ。
きぬ子　ハイ。

（お葉はそのまゝ二階へ上つて行く。間。きぬ子は意味もなくトランプを並べて居る。三味線（或は下方の調べ）抱の定丸が、瀬沼欣一を引張つて出て來る。）

定丸　被來いよ、姉さんがゐたつて大丈夫よ、かるたさん何をしてゐるの、早く被來いよ。（格子を明けて）唯今、さお入んなさい、つたら。

瀬沼　イヤ、僕は本當に今日は用があるんだから、又來る、絹子さんによろしく。

定丸　アラ、逃げちや駄目よ、かるたさん逃げるのおやないの、瀬沼さんが遁げちやうわよ、きぬ子さん瀬沼さんよ、手を貸して頂ダイ、逃げちやうから。

（きぬ子はいそ〳〵して玄關の方へ行く、此時お酌のかるたがおくれ走せに驅戻つて來る。）

かるた　アラ定丸さん、何をして居るの。（此聲にきぬ子は又元の座へ坐る）

定丸　駄目なのよ、瀬沼さんが遁げちやうのよ。

かるた　駄目よ、そんな事、今更遁げるなんてづるいわ、入るのよ、おはいんなさいつたら。

（と突飛ばす、突然突飛ばされて瀬沼は、ヒヨロ〳〵と中へ飛込む。）

瀬沼　亂暴だな、何かにぶつかつて、怪我でもしたら何うする。

かるた　怪我なんか、したつて可いわよ、さ上るのよ、上るんだつたら、定丸さん手をお貸しなさい。（無理矢理に押上げ）サア奥へ行くの、きぬ子姉さん瀬沼さんよ。

きぬ子　（わざと平氣な風にて）さう。

かるた　さう……だつてふゝゝ。（首をすくめて笑ふ）

（瀬沼は手持無沙汰で、中の間でマゴ〳〵してゐる。）

定丸　奥へ被來いたら。（突飛ばす）

瀬沼　何をする、亂暴な……今日は。

きぬ子　被來い。（トランプに一心の體）

瀬沼　本當に揃ひも揃つて亂暴な連中だな。

きぬ子　どうかしたんですね。

瀬沼　人をつきとばしたり、亂暴な事をするんだ。

きぬ子　仕樣がないのね。

（定丸とかるたは中の間でいろんな身ぶりをしては、クス〳〵笑つてゐる。）

きぬ子　今日は何處へ被來つたの。

瀬沼　何處へつて、實は用か有るんだ　直く其處のあの徒處の家へ。

きぬ子　ふとんをあげて頂たいな。

かるた　ハイ。

（と、奥へ行つてふとんを進めてすぐ中の間へ引返す、そして互ひに首をすくめて笑ふ。）

瀨沼　さうしたら途中で、定丸さんとかるたさんに會つて無理に此處へ引張つて來られてしまつたんだ。
かるた　どうもすみません。
定丸　無理に茲へ引張つて來てどうもすみません。
（と、ワザと云ふ。）
きぬ子　二人共何故其方に居るの、彼方へ被來いな。
定丸　エ、でもねエ、お邪魔になると惡いんですもの。
きぬ子　そんな事云つて、其方で笑つてゐるんでせう、いいわさうやつて被來い、私が此方へ引張つて來るから……（ト立上りかゝる）
定丸　宜うござんすよ、今其處へ行くから、かるたさん行きませう。
かるた　エ、でも奧へ行つて邪魔になるより、馬にけられに行く方が、餘程ましかも知れないわ。
きぬ子　まだそんな事を云つてゐるの、
かるた　今行きます、行きます。（定丸に）さ行きませうよ。
（と奧へ行く途端に、氷屋（或は密豆屋）が氷（或は密豆）を持つて出る。）
氷屋　お待遠樣。
かるた　そら來た。（玄關へとんで行く）御苦勞樣、後で取りに來て頂戴。
氷屋　ヘイ毎度有り難うムいます。（去る）
（かるたはこれを持つて奧へ來る。）
かるた　定丸さん、喰べない。
定丸　アラ、私達丈け。
かるた　エ、其代り、きぬ子姉さんと、瀨沼さんに御禮を云ふのよ、絹子姉さん、瀨沼さん御馳走樣。
定丸　アラどうしたの。
かるた　貴方も隨分わからずやね、瀨沼さんを引張つて來りや、どうせもう御馳走樣でせう、だから先きへ二人の分丈途中であつらへて來たのよ。
きぬ子　まア、隨分狡猾なのね。
かるた　絹子姉さん、拂つて下さるでせう、絹子姉さんが拂つて下されなけや、瀨沼さんが拂つて下さるわ、ね、瀨沼さん。
瀨沼　かるたさんに逢つちや敵はないな。
かるた　金缺病でまるつきりお小遣がないんですもの、少し位商法をしないと小豆アイスなんか何時までたつたつて飮まれやしない、……アラ定丸さんたら、人に許り喋舌らして置いて、先へドン〳〵喰べてゐるんですもの、狡いわ。
定丸　貴方も早く喰べりや可いぢやないの、喋舌つて許りゐると、氷がとけちやつてよ。

かるた　エヽ食べるわ、暫く東西。（飲みにかゝる）

きぬ子　斯う云ふトランプを知つてゝ、キングを一とするの、二、三、四、五、これ丈け札をぬいて兩方の年の數丈け切つて、キングから初めて二、三、四、五、と揃ふまで札をひつくり返して行くの、スペートが男の本當の心で、ハートが本當の女の心、クラブが男の浮氣で、ダイヤが女の浮氣なの、やつて御覽なさい。

瀨沼　（此間始終指を組合せたり組み換へたりしてゐたが、此時フト輕い思ひ付きで）どの指かくした。

きぬ子　エ、さうね一寸待つてゐらつしやい。

（ト、ためつすがめつする。）

（かるたが此體を見て思はず哄笑する。）

定丸　アラ汚いわネ、（顏を拭きながら）顏にかゝつたぢやないの。

かるた　御免なさい、だつてあはゝゝゝ、お可笑しいわ、はゝゝあはゝゝゝ。あ苦しいあはゝゝゝあ苦しいあゝ可笑しい。（腹を叩く）

きぬ子　（ムツとして）失禮な人ね、何がそんなに可笑しいの。

かるた　だつて瀨沼さんが何の指かくしたはゝゝはゝゝは。

きぬ子　それが何せ可笑しいの、そんなに可笑しけりや彼方へ行つて頂戴本當に失禮だわ。

かるた　（其險幕に驚いて）アラ御免なさい、お怒んなすつたの、お怒んなすつたら御免なさい、そんなつもりで笑つたんぢやないんですから、ね、もう決して笑つたりしませんから、ね、姉さん。

きぬ子　貴方は本當に、無遠慮すぎてよ。

かるた　これから氣を附けますから、勘忍して下さい、おねがひですから。

瀨沼　勘忍しておやりな、何もそんなに怒る事はないぢやないか、全く僕がこんな大きななりをして、どの指かくしたなんてやつたら可笑しいに違ひないさ、怒るのが間違つてゐるよ。

きぬ子　だつてかるたさんのは、餘り失禮なんですもの、腹が立つてしまふわ。

瀨沼　其處がまだ君のお孃さん氣質のぬけない處さ、なんでもないことを、さう怒るもんぢやないよ、昔とは譯が違ふんだからね。

きぬ子　（急にしんみりとして）まだ昔の我慢がぬけないんですね、駄目ね、私は何時までもこんな氣でゐるから、姉さんに苦勞ばかり掛けてゐるのね、本當にすまないと思ひますわ、早く藝者氣質にならなくつちやいけませんわね。（ホロリとする）

かるた　私どうしませう。（ベソをかく）
瀬沼　（トランプを取り上げて）　兩方の年を切るんだね……十八と僕が……二十七と引つくり返して行くんだね。
かるた　（見てゐる）　あらハートのキング、女の方が大變なのね、オヤ、スペートの二男も大變なのね。
定丸　アラ又スペートの三が出たわ、男は中々熱心なのね。
かるた　またスペート、おしまひはアラハートの五、女の方が大車輪だわ、いゝぢやありませんか、兩方とも大車輪でいゝわ、お目出度う。
きぬ子　アラ、いやなかるたさん。（トニツコリ）
瀬沼　今泣いたからすが、もう笑つた。
きぬ子　貴方まで隨分ね、覺えていらつしやい。
瀬沼　はゝゝゝ。

（定丸とかるたも笑ふ。きぬ子もつり込まれて笑ふ。はては四人が聲高く笑ふ。）

（風鈴屋が奥から向うへ這入る。）

（きぬ子の父植村宗兵衛が見すぼらしき姿で出て來て此家を訪ふ。）

宗兵衛　御免！　御免！　御免下さい、御免下さい。

（お葉が下りて來る。）

お葉　誰もゐないのかい、玄關にお客様ぢやないか。
かるた　すみません、ツイ聞えなかつたもんですから。（と玄關へ行つて見て）あ、被來いまし、姉さん、きぬ子姉さんの御父様が被來いました。
お葉　エ、旦那様が。（と玄關へ行つて）まア御珍らしい、旦那様、よく被來つて下さいました、どうぞお上り遊ばして。
宗兵衛　御免下さい。
お葉　どうぞ此方へ、絹子さん其邊を片附けて、瀬沼さん被來い、まア御挨拶は後にして、貴方すみませんが、暫く二階へ行つてて下さいな。
宗兵衛　お客様ならば又出直して來ますから。
お葉　イエよろしいんでござりますよ、内輪同士の方ですから、定丸さんお前さん瀬沼さんを二階へ案内して、かるたも行つて御相手しておいで。
かるた　ハイ、ぢや行きませう。
瀬沼　では一寸失禮します。

（三人は二階へ上つて行く。）

お葉　さ旦那様、取散らかして居りますがどうぞ此處へ、其處は餘りなんですから、さどうか此方へ。
宗兵衛　いやどうかもう搆つて下さるな、此處で結構です。
お葉　まア旦那様、それでは私が高上りになりますから、どうぞ此方へ。
宗兵衛　いやもう此處で結構です、今の私には位地の高低

くを云つてゐる餘裕はない、今は殆ど絶體絶命の窮地に陥ちて居ると云つても可い位ゐに、切迫詰つた身の上となつて居るんですから。

きぬ子　何うなすつたので厶います、お父様。

宗兵衛　おきぬ、吃驚りするなよ、お前の兄の清吉は、お店の帳簿をごまかして、五千圓と云ふ大穴をあけた上、お尋ね者になつて居るのだ。

きぬ子　えゝ、お父様、それは全くで厶いますか、何うして兄様が、兄様が何うしてそんな恐しい事をなすつたので厶います。

宗兵衛　焦つた爲めだ、家運を挽回しようと、焦つて〳〵あせりぬいた末が相場へ手を出して失敗したのだ、彌縫する丈けは彌縫してゐたが、それも叶はないと見て取つたか、一昨日何處かへ姿をかくして終つたのだ。

きぬ子　えゝツ！。

宗兵衛　お前に心配させまいと、今日まで祕密にして置いたが、實は婆さんも一月程前から取る年の病氣でブラブラ寢たり起きたりして居たが、清吉の事を聞いた一昨日から、急に容體が惡くなつて、すつかり寢込んで終つて居るんだ。

きぬ子　お父様、私、何うしたら可いので厶います、今の此の場合に何を何うするのが私の勤めです、敎へて下さいまし。

宗兵衛　云ひ難い事だがお金の心配だ、それより外にお前に賴む事はない、又それが一番大事な用なんだ、清吉のお店の方では、使ひ込んだ金の問題は兎に角、諸方へ迷惑をかけて置きながら其解決を計らうともせず、姿を晦ました清吉の無責任の行爲が憎いと仰有つて、何うでも訴へると仰有るのを、明後日迄に清吉を連れて戻るからと云ふ約束で、訴へる事丈けは見合せて頂いたが、何處に居るか、自分の責任が果たし切れずに姿を隱す様な不心得者の清吉だ、此處に二千三千とまとまつた金を拵らへてお店の方へお詫びすると云ふ様な段取りにでもしてやらない事には、如何に新聞に廣告した處で容易に姿を現すまい、清吉さへ歸つてくれゝば婆さんの氣も靜まり、お店の首尾も調ふ譯だ、これは何うしてもお前の力を借りてお前の名前で新聞へ廣告して貰ふより外に道はあるまいと、實はお前よりお葉さんを賴よりに出かけて來たのだが、千圓でもいゝ至急に都合して貰へますまいか。

お葉　御都合致しませう、屹度御都合致しませう。

宗兵衛　えゝ、都合して下さるか。

お葉　えゝ、心當りがあります、これからすぐに行つて聞いて來ませう。

きぬ子　姉さん。

お葉　絹子さん、貴方は何も心配する事はありません、私が屹度引受けますから餘計な事を考へるぢやありませんよ、宜うムいますね、では旦那様、一寸行つてまゐります。

宗兵衛　お葉さん何も云ひません、これですこれです。（手を合せる）

お葉　まア何をなさいます、勿體ない、母から申し遣された事もムいます、これ位の事はするのが私としてあたり前の事でムいます、では絹子さん留守を一寸お願ひしますよ。（出て行く）

（義太夫の三味線の鈍い調子。）

宗兵衛　案ずるより産むが易いとは此の事だ、やれ〳〵これで少つとは落ち着いた、あゝあ、すつかり肩をこらして終つた。（肩を揉んで）少し重荷を卸ろした様な氣がする……おきぬ、お前は何うしたんだ、何んだつてそんな泣き相な顏をして居るんだ。

きぬ子　お父様、貴方は今のお金が姉さんの手で出來ると思つて居らつしやるんですか。

宗兵衛　何、難しいと云ふのか。

きぬ子　來月がお盆のお約束だと云ふのに、姉さんはまさかに去年の出も着て出られないといふので、その去年の出さへ家にあるか何うか知りません、來月は用事を付けて休む筈になつて居るんですよ。

宗兵衛　さうか。

きぬ子　定丸さんやかるたさんを住替へに出さうかとまで云つて居らつしやるんですよ。

宗兵衛　然うか、そんなに苦しい手許か。

きぬ子　戸祭さんの方の仕事に、今の姉さんは最う手の屆かない處まで借金して居らつしやるんです、そんな苦しいお手許でも、私へ丈けは以前の關係を思つて出來る以上の事をして下さいます、それ程にして下さる姉さんに、尚此の上の御苦勞は私としてはかけられません、今あゝして引受けて被居しても、姉さんに何處と云つて當てのない事は私しにもよく解つて居ます。屹度姉さんは困つて被居るに違ひありません、此上姉さんを困らしては、餘り私が義理知らずだと思ひますはお父さん。

宗兵衛　それはお前の云ふ通りだ、併し私は何も知らなかつた。

きぬ子　私、改めてお父様にお願ひがムいます……背いて下さいます……イエ聞かないと仰有つても聞いて頂かなければなりません、お父様私自分の身を賣つてはいけません、エ、。（一生懸命）

宗兵衛　何。

きぬ子　私の軀をお金にかへてはいけません、エ、、今迄

の私は藝者に身を賣つたとは云ふものゝ、姉さんにまもられて、姿形は變つても仍且今迄の植村絹子で居られました、その植村絹子を捨てゝはいけません、エヽ、處女の誇りをお金に換へてはいけません、えゝ。

（流石にハラ〳〵となく。）

宗兵衛　…………

きぬ子　黒澤さんと云ふお客様があるのです、私を是非と度々姉さんの處へ掛合が來て居ります、何時も、姉さんがキッパリ斷つてゐて下すつたので、今日迄無事に暮して居られましたが、最う斯うなつては處女の操も女の誇りも顧てゐられる場合ぢやないと思ひます、私が黒澤さんの云ふ事を聞けば、兄さんも助かります、お母さんも助かります、姉さんにもお金の心配を失くなして上げる事が出來ます、三方四方が都合よくなる事なのです、私、黒澤さんを旦那に取つてはいけません。

宗兵衛　何故お前は私にそんな事を聞くのだ、私にそんな答が出來ると思つて居るのか。

きぬ子　私には分りませんの、女の操は命に代へても大事な者だと聞いて居りました、命よりも大事な女の操を、お金に代へようとする私の考へは惡くないでせうか、お父様、敎へて下さいませ、私には分らないのでムいます。

（泣く）

宗兵衛　お前の考へは惡るい間違つて居る。

きぬ子　えゝ。

宗兵衛　だが許してくれ、今此の場合、私はそれを惡るい、間違つてゐるとは云はれないのだ。

きぬ子　分りました、えゝさうです、人を苦しめ、泣かせ、あらゆる物を犧牲にして、處女の操を全うしたからと云つて、それが何んで女の誇りでせう、迷ふには當らない事でした、唯お父様お母様から頂いた此身體を人に瀆していゝものか、……それが私に解らなかつたのです。（涙を拂つて）お父様、私、黒澤さんのお世話になつても、お父様は叱らないで下さいますわね、決して叱つては下さいませんわね。

宗兵衛　親らしくもない親が、こんな事を云つた筈ではないが、親と名が付けば氣にもなる、心にもかゝる、これ丈けの事を聞かしてくれ、その黒澤さんと云ふ方は善い方か。

きぬ子　……ハイ。

宗兵衛　情の深い方か。

きぬ子　ハイ。

宗兵衛　立派な紳士か。

きぬ子　……ハイ。

宗兵衛　お絹頼む、犧牲になつてくれ。

きぬ子　ハイ……（再び涙を拂つて）では私一寸電話をかけて見ますから。（卓上電話を取る）あゝモシ〳〵、京橋の×××番え、さうです、あゝモシ〳〵、貴方は山樂さんで被居いますか、あの女將さんはゐらつしやいませうか、一寸電話口まで出て頂きたいのですが……すみません……あゝモシ〳〵、女將さんでゐらつしやいますか、イエお呼び立てをしてすみません、先程は何うも失禮致しました、イエ何う致しまして……えゝ、え、あの、實は折入つて私女將さんにお賴みがあるんですけれど……誠に勝手なお願ひですけれど、今日中に黒澤さんにお目にかからして下さいませんでせうか……えー、それは少し譯がありまして、その譯ですか、それはあの、實は私が黒澤さんにお目にかゝりませんと兄さんが牢屋へ……牢屋へ行かなけりやなりませんの。（泣く）……本當なんです。（涙聲で云ひつゞける）今、お父樣からその話を聞いた許りなんです、え……姉さんが何うにかするつて、今家を出て行つたんですけれど、女將さんも御存じでせう、姉さんの今の手許では……え……え……ですから私、黒澤さんにお目にかゝつて……黒澤さんはお金は出して下さいますわね、私、唯お金が欲しいのですから……え、委しい話はお目にかゝつてしまひますけど……お母さんまで兄さんの事を苦に病んで病氣にかゝつて終つたんですつて、ですから私、お母さんの爲めにも、自分の軀なんか最う厭つては居られなくなつて終つたんですの。

（お葉が力なく歸つて來る。）

きぬ子　アラ姉さん。（電話を切つて側を離れる）

お葉　構はない、電話ならかけて被居い。

きぬ子　えゝですけれど。（鈴がなる）

お葉　ソラ、鈴が鳴つて來たぢやありませんか、お話し中を切つたんでせう。（受話器を取上げて）あゝもし〳〵、えゝさうです、え、黒澤さんが見えた……貴方、何誰です、あゝ、女將さん、先程は、私……いゝえお葉です、絹子さん、貴方今山樂の女將さんと話をしてたんですか。

きぬ子　え。（思定めて）姉さん、私出ます、モシ〳〵、どうも失禮、イエ、今、姉さんが歸つて來たもんですから……いゝえ、これは私が自分の了簡で決めた事なんですから……お父樣が承知して下すつたんです、いえ、ですから、大丈夫です……あゝさうですか、黒澤さんがお見えになつたんですか、ではすみませんけど伺つて見て下さいましな、ハイ。

（と、待つてゐる樣な樣子。）

お葉　絹子さん。（側へ寄らうとす）

宗兵衛　お葉さん。（止めて）私が許したのだ、何んにも云はずにゐてやつて下さい。

お葉　いゝえいけません、私が引受けたからにはきつと御用立します、そんな電話は切つてお了ひなさい。

宗兵衛　お葉さん、私は何んにも知らなかつた、おきぬから仔細を聞いて、それ程苦しい手許でお絹を庇つて下すつたお志し、先づ以つてお禮を云ひます、が、此上お前さんの身を詰めるやうな眞似は私にはさせられない、人に情があれば私達にも情がなければならない、お前さんの心は私にもよく判つてゐるが、私も承知の上の事だ、おきぬの思ふ通りにしてやつて下さい、頼みます。

お葉　いゝえいけません、私の苦しい手許を察して下すつてのお二人の御分別と云ふ事は私にも分つてゐます、併しそれでは私が立ちません、死んだお母さんへ私が申譯が立ちません、今更絹子さんを黒澤さんに出して私の今迄の苦勞を何うして下さるんです、いゝえ、汚れのない綺麗な身體を男の手に汚されて、絹子さん、貴方は口惜しいとは思ひませんか、旦那様、貴方は何んともお思ひになりませんか、夫は餘り無慈悲と云ふものです。

宗兵衛　無慈悲と云はれても、殘酷と云はれても、私は自分等一家の爲めに他人を苦しめるやうな義理知らずにはなりたくはない、おきぬも云ふのだ、お前さんの情に縋つて救はれる者は自分の母、自分の兄だ、他人を苦しめて自分を立て通したからと云つてそれが何の女の誇りになる、親兄を救ふ爲めには自分の操などは捨てゝ居る場合ぢやない、自分を捨てゝこそ子として、妹として、務は立つ、私は旦那を取りますと、健氣な言葉を聞いてやつて下さい、お絹に人らしい道を踏ませてやつて下さい。

お葉　それでお絹さんは立つでせう、私は何うなります、私のお母さんへの申譯は何うなります、お孃様を芸者にした事さへ濟まない〳〵と云ひ續けて死んだお母さんにお客を取らせました、私の意氣地のない爲めでしたと、何うして私の口から云はれませう、旦那様、絹子様、貴下方はまさか私をお母さんに不孝な子となさりたいお考へではないんでせう、まだ心當りがあります、御用は達します、絹子さん、其の電話を切つて下さい、その電話を……

宗兵衛　まア待つて下さいお葉さん……

お葉　放して下さい、此電話を通じさせては今迄の私の苦勞が水の泡となつて終ひます、絹子さんを黒澤さんに出して私の立つ瀬は何處にあるんでムいます。

きぬ子　あモシ〳〵、いゝえ、あの左様でムいますか、では只今急いで伺ひます、何うも色々と有難うムいます、では今程、左様なら。（電話を切つて泣く）

お葉　絹子さん、私は貴方を出しませんよ、出さないわそのつもりでゐて下さい、親兄の爲めに自分を捨てる事

が子の務め、人の道と仰有いますが何んで人の道、子の務めです、夫は畜生のする事です、獣物のする事です。

（おきぬはたまりかねて勝手へ駈け込む。）

宗兵衛　お葉さん、お絹を恥しめて下さるな、責めるなら親甲斐もない此の私を責めて下さい、私こそすべての人から責められるべきだ、罪のない娘を責めて、恥に泣かせて下さるな。

（子供の聲。）

「芋蟲コロ／＼ひやうたんぼつくりこ／＼。」

（間。）

お葉　蔦松葉のお葉も下つたものだ、此場合になつて何うする事も出來ないんだから全く芋蟲コロ／＼た、何の態だ、情けない話だ、はゝゝゝはゝゝゝ。（泣き笑ひ）

定丸　（二階のかげ）姉さん、瀨沼さんがお歸りよ。

（瀨沼が下りて來る、續いて定丸かるた、定丸とかるたは中の間へ行く、きぬ子の出て行く仕度などす。）

お葉　瀨沼さん、すつかり忘れて居た御免なさい、大概お聞きになつたでせう、御覽の通りゴタ／＼してね、まア此方へ被來い。

瀨沼　僕は最う歸ります。

お葉　まあそんな事を云はないで此方へお坐んなさい、御紹介しますから、旦那樣、此方は瀨沼欣一さんと仰つて……止しませう、今となつては最う駄目でせう。

瀨沼　やはり僕は歸つた方がよささうです、失禮しませう。

きぬ子　（臺所で）瀨沼さん一寸待つて頂戴、今すぐ其處へ行きますから。

お葉　何か話があるんでせう、待つてあげて下さいな。

（間、野崎の三味線を彈き流す、きぬ子出て來る。）

きぬ子　瀨沼さん。

瀨沼　うむ。（聲が出ない）

きぬ子　何もかも聞えてしまつたでせう、私も最う、今日から今迄の絹子ではなくなつて了ひますから、貴方も何うか其つもりで、定めしお腹も立つでせうが、私の事は忘れてしまつて下さい、お願ひですから。

瀨沼　忘れる、忘れないは僕の自由です、が、僕は決して怒つてなんぞゐやしないよ。

きぬ子　えゝ。

瀨沼　僕は實際君を氣の毒だと思ふ、定丸さんも知つて居る、先刻二階で君の爲めに泣いたんだ。

定丸　本當よ、絹子さん。

きぬ子　有難う。（泣く）

瀨沼　僕が君に會はずに歸らうとしたのもその爲めなんだ、僕は君の氣の毒な姿を見たくなかつたんだ、イヤ見られなかつたんだ、見たらきつと泣くだらうと思つてそ

れを心配して居たんだ、男の泣き顔と云ふものは餘り醜狀いゝもんぢやないからね。（と云つてる中に涙がこみ上げて來る）はゝゝゝ馬鹿だね、云ふ傍からこれだ〳〵。

きぬ子　ぢや貴方は私を憎いとは思つては下さらないんですか。

瀨沼　何うして憎いと思へよう、君は僕の一番すきな人ぢやないか。

きぬ子　貴下に一ト言も相談しないで外の人の處へ行つてもですか。

瀨沼　それは正直に云へば餘り好い心持はしやしない、何故僕に相談してくれなかつたと、それは本當に一時はさう思つたけれど、相談かけられた處で僕に何うする事も出來ないんだからね、それは君も知つて居るからそれで何とも云はないんだと直ぐ思ひ返した。

きぬ子　さう分つて下さりやそれで私も安心しました。

瀨沼　唯本當の事を云やア僕は口惜しい、何故相談に乘れるやうな金持に生れてゐなかつたらうと、それ許りが殘念だ、併し何と云つても仕方がないんだから口惜しいけれど諦めた。

きぬ子　諦めて下さいましね、その代り私は一生男には惚れません。

（縮屋の由どんが來る。）

由どん　今日は、絹子さん、山裏さん。

きぬ子　御苦勞樣。

（立つて中の間へ。）

野崎村

〽二人一緒に添はうなら、飯も焚うし、織つむぎ、どんな貧しい暮しでもわしや嬉しいと思ふもの、女子の道を背けとは、聞えぬわいのと友染の、振の袂に北時雨……。

（一同默然きぬ子は着物を着かへ初める。）

お葉　（突然叫ぶ）　あゝくさ〳〵する、誰でもお酒屋へ行つてお酒を取つて來ておくれ。

（皆々、えつとおどろく。）

お葉　豐川樣の罰も構やしない、早くお酒を取つて來ておくれ。

宗兵衞　お葉さん、お前さん乳母の遺言を忘れたすつたのか。

お葉　旦那樣、お母さんの遺言はお酒の事許りぢやなかつたんですよ。

宗兵衞　もうそれを云つて下さるな、お絹の事だけは忘れて下さい。

お葉　忘れろと仰有つても何うして之れが忘れられます、お酒も止め、猫のやうにおとなしくなつたと云はれて暮して來たのも何の爲めです、お孃樣を立派な者にしたいと、唯それ許りを張り合にして來た私ぢやありませんか、今更こんな事になるくらゐなら、お母さんの遺言を守つて今まで辛勞して來やしません、お孃樣はお孃樣として、禁酒丈けを守れと仰有るのは餘り罪な仰有りやうぢやありませんか、罪です、罪です罪です……。

（長い間、急に嗚咽する。）

（野崎村は猶つゞく。）

――靜かに　幕――

第二幕

築地山樂の廣間

道具は舞臺設計者に委れ、成可く舞臺廣く飾られたし、頃は八月下旬の夜。

浴衣姿の栗岡と呼ぶ客と、三島と呼ぶ客を中心に、前幕の小つる、梅林のぼん龍、音羽屋の勝次、それに義太夫藝者の美の家の三勝などが居並んでゐる、中にきぬ子が一人愼しやかと云ふよりは冷やかな態度で、丸て一座から離れてゐるもの丶やうな樣子て坐つて居る、そして其袴へは鮮かに他の藝者から拔き出て居る、柝なしにて幕明く。

栗岡が今何か一段義太夫を語り終つたところ、頻りと汗を拭いてゐるのをぼん龍や勝次が煽いで居る。

三島　御苦勞々々、暑かつたろ、まア一杯呑み給へ、どつちが好いビールか、酒か。

三勝　（汗をふき〳〵）有難うビールを頂きますわ。

三島　ビールか、よし（コップを差して）お酌だ。

三勝　有り難う、頂戴（受けて）すみません、（すぐのまずに飯臺の上へ置いて扇子を使ひながら）本當に旦那のお聲は好いお聲ですのね、色氣が有つて何んとも云へませんわ、是れまでにおなんなさるには餘程御修業を遊ばしたでせうね。

栗岡　ナーニ大した事もないが、サア是れで十年ばかりはけいこしたらうねえ。

三勝　十年……（わざと驚いたやうに感心して）さうでせうね、それ位お稽古を遊ばさなきや普通の素人ぢやとてもく〳〵ですわ、今夜は久しぶりで私しもお稽古をして頂きました。

栗岡　君は却々御世辭が好いねまア其積りで一杯。（ト盃をさす）

三勝　ありがたう、私しはおビールの方を。

（きわ子が酌をする。）

三勝　（一寸口をつけてコップに明け）ありがたう。（返して酌をしながら）イヽエ全くですよ、此頃は餘り義太夫等をおやりなさる方がすくないものですからね、私なんか何時でも御座敷に顔を並べてゐるだけで、三味線を持つたことがありませんか、今夜は久し振りでこの三味線も御座敷に出て、必と喜んで居るでせう。（棹をふきながら云ふ）

勝次　（わざとからかひ面）何時拜見しても本當に姐さんの三味線は結構ですのね。（栗岡に）そりや姐さんの三味線は大したもんですよ、何しろ胴は花梨で、棹が紫檀と云ふんでせう。

栗岡　美濃家の三勝、祕藏の名器と云ふ譯か。

三勝　いゝえ、そんな自慢する程のものぢやないんですけれど、唯テンジンに「うにこほる」を使つた三味線を持つて被在る方は仲間中でもありませんからねえ、それで大事にしてますの。（ト自慢たら〳〵）

三島　皮は何の皮だい。

三勝　エヽ。

三島　胴が花櫚で、棹が紫檀で、テンジンがうにこほるだつたら皮もきつと大したものが使つてあるだらう、一寸貸して見給へ。（受取つて皮を彈きながら）コリや大したもんだ、この皮だけでも大したものだ、これは猫の皮ぢやないね。

三勝　（不思議想）ヘエさうですか、三味線屋はそんな事は云つてませんでしたけど。

三島　これは素敵な皮だ。

三勝　何が使つて有ります。

三島　獺が使つてある、胴が花櫚で棹が紫檀、テンジンがうにこほるで、皮はと聞くと獺の皮さ。

壽吾六　ようよう。（親指と小指で拍子を取る）

三勝　まア、隨分お人が惡くて被在るんですねえ、何とでも仰有い、もと〳〵猫の皮だからニヤンとも思つてやしませんよ、ホヽヽ。

三島　お暑さの折柄だ、駄洒落は願ひ下げにして其のコップを明けて貰ふか。

三勝　あら、どうも失禮。（半分呑んで盃洗で雪ぐ）

壽吾六　どうせ花櫚ぢやない。

三島　花輪糖はお菓子だらう。

三勝　さては貴方は甘いね、オヤ失禮。（酌をする、塲は陰になつて居る）オヤ本當に失禮しちやつたわ。

壽吾六　只今持つて參ります。

きわ子　いゝえ、私しが持つて參りますから。（立去る）

勝次　（其跡を見送つて）すつかり變つちやつたのね、今

迄の上品な處がなくなつて、乙うお高く納つてしまつたぢやないの。

ぽん龍　本當に積に障るはね、私達とは藝者が違ふと云ふ樣な顔をしてさ、どんなにお金が在るか知らないが、黒澤に出たのがどれ丈偉いんだらう、イヤだはあんな成り上り。

栗岡　俺れは可笑しくつて仕方がないんだ。

三島　何が。

栗岡　女と云ふ奴は何處まで白化くれて居られるものか、さつきから研究してゐるんだが殆んどその底が知れないね。

三島　あゝ絹子か。

栗岡　ウム、俺は先刻から絹子の顔を見て居て、この濃厚しさうな女が黒澤とさうかと思ふと我れ知らず可笑くなつて來て耐らないんだ、女つて奴の了簡は全く僕等にや解らないわ、僕は斯うして絹子の顔を見てゐると、黒澤との事が謎の樣に思はれて仕方がないんだ、何にしてもそんな汚れた女とは思へないね。

三島　それだけに僕は尙彼奴の面が憎いんだ、君が呼ぶつて云ふから仕方がなしに呼んだが、此の頃ぢや彼奴の面を見るのも積にさはるんだ、あんな蟲も殺さないやうな顔をしてゐながら、黒澤の樣な奴の手に貞操を玩弄にさせてゐるかと思ふと、決して色氣で云ふんぢやない、藝妓の爲めの恥だと思ふんだ、大袈裟に云や俺達人類の恥だと思ふんだ。

小つる　よく皆さんが仰有いますね、今までは微塵も汚れたところのない、まるで生娘の樣な、初心な、澁な、處が可愛くつて最屓にして居たゞけに、尙更顔へ痰を引掛けられたやうな氣がする、もつと云ば泥足で顔を蹂躙られたやうな氣がするつて、お絹ちやんの話しの出る度に皆さんが口惜しがつて被在いますよ。

壽吾六　云つちやなんで厶いますが、あれだけの容姿を持つて被在りながら黒澤の旦那とは惜しう厶いますよ、モウちつとどうにかした旦那をお世話したう厶んしたな、新橋の若手で代表と云はれて被在るだけに、尙更に惜しう厶んすよ。

三島　全くだ、新橋の恥だよ、外土地へ對しても醜狀ないと思ふ、黒澤は何んぢやないか、素性が素性だけに外土地では殆んど相手にしないと云ふぢやないか、新橋は廣い爲めにあんな奴にまぎれ込ましてしまつたが、又あれ丈け怜悧で溫厚しかつた絹子が何うして黒澤なんかを旦那にとる樣な氣になつたらうな、俺には何うしても彼奴の心が分らない。

栗岡　何か事情があるんだよ、僕は確かにさうだと思ふ。

三島　君はさう云ふがね、何か事情があるなら絹子が黒澤に惚れる筈がないぢやないか、絹子は黒澤にまるつきり惚れてゐるんだとさ。

ぽん龍　そりや見ちや居られないわ、迚てもデレ〳〵して見て居る私達の方が極りが悪るくなるやうな事を平氣でしてゐるんですもの、呆れてしまふわ。

栗岡　さうかな、僕にはどうもさうは思へないが……お葉が附いてゐながら……何か譯が在るよ。

勝次　絹子さんと斯うなる爲に黒澤から一萬とか二萬とかのお金が出てゐるんですつてね。

栗岡　すると絹子はお葉の犠牲になつたと言ふ譯だね。

小つる　いゝえ、さう云ふ譯でも有りません、あの子はあの子でまア考へが有つての事でせうが、お葉さんが黒澤の手から戸祭さんの方へお金をまはして貰つてゐるのは確かなんですよ。

三勝　小鶴さんはお葉さんと隨分仲好だつたぢやないの。

小つる　エゝ、けれども今度の事が有つてからキツパリ絶交するつて云つてやつたの、私達まで賣られた形なんですもの、此處の女將が仲へ入つたと聞いたんで、此家へも餘り入らない様にして居るんですよ。

栗岡　悪評嘖々だね。

小つる　エゝ、當人が野面でゐるでせう、誰だつて小面が憎くなつて來ます、唯さへ愛嬌が無い子だつたのに、此頃は嫌にお高くとまつて、笑つちやア損見たいな顔をしてゐるんですもの、好い評判はしやアしません。

三勝　兎に角何處の御座敷でも此の噂の出ない事は有りませんね、到頭あの子も賣出し損なつてしまひましたよ、悪い方では有名にはなつたけれど。

ぽん龍　だけど何だつて言ふぢや有りませんか、絹子さんも餘り評判が悪いんで止るつて云ふ噂ですよ。

三島　止める方がいゝ、一日でも餘計出て居れば、それだけ生き恥をさらすと云ふものだ。

栗岡　併し……不思議だなア。

（きぬ子がビールと銚子を持つて入り來る。）

きぬ子　お待遠様（三島に）お酌。

三島　君のお酌は御免を蒙る。

きぬ子　さう、ぢやア濟みません。（ト他へ押しやつて平氣な顔）

小つる　お絹ちやん、お前さん引くんだつて。

きぬ子　エ、……姐さんは誰れから御聞きになりまして。

小つる　誰れに聞いたつて事はないけど、そんな評判をきいたからさ、引くのかい。

きぬ子　未だ引くと云ふ譯ぢやないんですけど、姐さんあの子供と云ふものは本當に授りものでせうか。

小つる　何んだつて。

きぬ子　私、子供が一人欲しいんですけど……さうしたら直ぐにも止める噺しになつてゐるんですけれど……授り物なんでせうか。

小つる　（呆れて）御前さん、それを眞面目にきくのかい。

きぬ子　エヽ、何故です。

小つる　何故だつて……お絹ちやん、お前さんと云ふ人は本當に變つてしまつたね。

きぬ子　さう……。

小つる　本當に何と云ふ變りやうだらう、私しは全く呆れてしまつた。

きぬ子　私は別に變つたとは思ひませんけど、皆さんが變だ／＼と仰有いますわ、そんなに私、變つたでせうか。

小つる　お葉さんはお前さんの事を何んと云つてゐたい。

きぬ子　別に何んとも云ひませんわ。

小つる　さうだらうね、張りも意氣地も外聞も恥も、何も彼も忘れてしまつて、黒澤なんかの襟元へつくお葉さんなり、お前さんなりぢアお互ひに變つて居る事は氣が付かないだらうね、でも、私達の目から見ると、お前さん達はまるで臭いものにたかる蠅か、汚いものに湧く蛆蟲みたいに變つて見えるよ。

（きぬ子は顔色も動かさず、苦笑ひとも御世辭笑ひとも名付けられない微笑を浮べて小つるの顔を見て居る。）

三島　きぬ子さん、君は一體黒澤に惚れて居るのかい。

きぬ子　（仍且唯だ笑つて居る）

三島　よくあんな奴に惚れられるね、彼奴の一體何處がいいんだい、眞逆に君だつて彼奴の人間に惚れたんぢやあるまい、金に惚れたんだらう、エヽ、金に惚れたのかい。

きぬ子　さうね、さうでもないわ。

三島　エヽ（稍張合拔けした形）何んだつて。

きぬ子　何處に惚れたつて云ふ事はありませんけど、でも私、確に惚れてますわ、三勝姐さんはよく私と旦那の御座敷へ被來るから知て被在るわね、さうぢやありませんか。

三島　（眞面目に怒つて）圖々しい奴だ、オイ絹子、お前見たいなのを白無垢鐵火と云ふんだぞ。

きぬ子　さうですか、でも旦那の惚話なら無事でせう。

小つる　駄目ですよ、何を云つたつて人間の言葉は通じやしないんですから。

三勝　（とりなす様に）絹子さん、貴方頂いていらつしやいな。

きぬ子　エヽ、ようござんすか。

（ト、三島にきく。）

三島　俺は知らない、栗岡にきいてくれ、俺はモウ絹子なんて藝者に口を開かうとも思つてないんだから。

栗岡　併し不思議だな、絹子さん、どうして君はさう變つたんだい、僕にはどうしても何か事情が在るやうに思れてならないが。

きぬ子　事情なんか有りませんわ、唯旦那が好きで、旦那になつて頂いたゞけです、そりや旦那の評判の悪い事は知つてますけど、世間で何と云はうとも私には親切な、好い旦那なんですもの、それに、何をどう威張るにしてもお金がなければ、手も足も出るもんぢやありませんわ、それには旦那はお金持です、旦那のお蔭ですつかり家の方も樂になつたんですから、旦那の御世話にならなかつたら家は今頃何うなつてゐるか……ですからどうしても大事に仕なきア罰が當りますわ。

小つる　お前さん、あの瀬沼さんとか云ふ人はどうしたんだい、お前さんの大變な岡惚れだつたぢやないか。

きぬ子　あれつきりですの、岡惚れしたつて只の岡惚れ丈けぢや何の足しにもなりませんのねえ、私、どうしてあんな人に岡惚したかと思ふと不思議で仕方ないんですの。

小つる　黒澤……御免よ、お前の大事な旦那を呼付にして、黒澤さんの方がいゝと云ふのかい。

きぬ子　エヽ、ずつと。

壽吾六　唯もう恐れ入りやす。

栗岡　違ふ、確かに違ふ、あれだけ利巧だつた君が是れ程世間から憎まれるやうになつたのは、何か深い事情があると思ふ、僕は君程の人間が世間から憎まれ者に成つて居るのが殘念で仕方がないんだ。

きぬ子　世間で何んと云はうとも自分は自分だけの事をしてゐればそれでいゝんぢやないんですの。

小つる　栗岡さん、まだその人の肩を持つて居たいんですか、そんならそれで私はお先へ頂いて行きます。

三島　不愉快だから僕も歸る。

栗岡　まア待ち給へ歸るなら一所に歸るが併し不思議だなア。

（此處へお藤が出る。）

お藤　何うもお構ひ致しませんで、お銚子は御座いますか、女中が手不足なんでつい失禮致して居ります、それからアノ誠に勝手で御座いますが、絹子さんをホンの顏出しだけで宜しいんで御座いますが頂けませんでせうか。

三島　アヽ可いとも、僕等もそれに歸るから。

お藤　オホ、お立ちでございますか、それはどうも、何か御氣に障つた事でもございますか。

三島　そんな事はない、可成り長く遊ばして貰らつたから

もう歸らう。
お藤　ではお供を申付けませう。
三島　イヤブラ／＼歩いて行くから可い、久し振りで銀ブラとしよう、ねえ栗岡。
栗岡　ウム（立上りながら）併し不思議だなア。
お藤　何かで御座います。
栗岡　何んでも無いが、實際不思議だよ。
お藤　ホヽ、又栗岡さんの不思議が出ましたね、本當によくさう物事を不思議がつて被在れると思つて、私本當に何時でも感心して居るんで厶いますよ。
小つる　女將さんも出ましたね、感心が。
お藤　オヤナル程、癖と云ふものは不思議なものでございますね。
栗岡　俺のお株を取ちまふのは甚(ひど)いな。
（皆々笑ふ、栗岡と三島は歸る支度、ぽん龍と勝次が手傳ふ。）
お藤　お立ちですよ。（聲をかける）
きぬ子　女將さん、私は。
お藤　夕顔の間ですよ。
きぬ子　さう（栗岡と三島に）どうも失禮、お近い内に。
三島　俺は斷るよ、お前見たやうな白無垢鐵火には斷じて逢はないつもりだから。
お藤　オヤ、何うかしたんでございますか。
小つる　聞くまでもない事でせう、女將さん、私達も是れから絹子さんと一座するお座敷は御斷りしますからね、蔦松葉とは皆絶交だ。
三島　俺にしても今夜限りだ、身體でも大事にするがいゝ。
きぬ子　（平氣で）有難う、栗岡さん、おや貴方も逢つて下さらないわねエ。
栗岡　俺は逢はないとは言はないがね。
きぬ子　おやアお近い内にね、握手。（手を出す）
栗岡　ウム、不思議だナア。
三島　馬鹿だなア此男は、天勝の手品でも見てゐやしまいし、無暗に不思議がる奴もあるまいぢやないか、手品の種だの、女の本體などは下らないものに極つてゐる、勿體をつけてゐるから不思議にも見えるのさ、餘り不思議がつて居ると、ヘン甘い野郎だと、蔭で舌を出される樣な目に逢はされるぜ。
（此時、部屋の外をお葉が通りかゝり、不圖立聽く。）
栗岡　さうかい、そんな事はあるまい、ねえ絹子さん。
きぬ子　何うですか、さう見える人なら仕方がありません。
三島　あの聲でとかげ喰ふか山時鳥か。
壽吾六　（唄ふ）人は見かけによらぬもの、コラ／＼と。
きぬ子　どうも有難う。（立つて行く、お葉を見て）あら姐

さん。

壽吾六　エ、姉さん。(見て)ヤ、お葉姐さん。

（お葉ズット中へ入つて、）

お葉　人は見かけによらないものですつて、エ、壽吾六さん。

小つる　お葉さん、お前さん此處へ何をしに來たの。

お葉　お禮に來たのさ、よく大勢で寄つてたかつて絹子さんを苛めてくれたね、絹子さんも好い修業になつたでせうよ、有難う、御禮を言ひますよ。

小つる　私は頂いて行きます、絶交した人間と一座はしたかアありません。

お葉　私だつて御免を蒙るよ、私は何も此處へ呼ばれたんぢやないんだからね、サア絹子さん行きませう。

三島　白面鬼待て。

お葉　何んですつて、白面鬼たア何の事です。

きぬ子　姐さん、私何と言はれたつて平氣なんですから、私には私だけの考が有るんですから、此處に居ると反つて皆さんが心持を惡くなさるばかりですから、彼方へ行きませう。

お葉　絹子さん、待つて頂戴、私も何を云はれようと氣にしちやア居ませんけど、白面鬼なんてえ言葉は初耳ですからね、參考の爲に伺つて置きませう。(ト改めて坐つて)なんです、その白面鬼と云のは。

壽吾六　好いおやアございませんか、白面鬼でも洗面器でも、はくめん、せんめん待つたとてだ。

お葉　うるさいね、さア伺ひませう、白面鬼たア何の事です。

三島　顔は綺麗だが心はジューのやうな汚い人間の事を云ふのさ、無暗と慾を乾いて、金にさへなりや客に取る女の事を云ふんだ、鬼のやうに殘忍刻薄な奴を白面鬼と云ふのだ、蔦松葉は金が殖えたさうだね、お目出度う。

お葉　貴方がたはそんなに家の絹子が黒澤さんに出た事が癪に障るんですか、癪に障るなら黒澤さん程のお金を積んで來て御覧なさい。

小つる　三島さん、お斷りなさい、お絹ちやんにかゝる御金だけなら何んだけど、南洋の野原へ肥料がはりに捨てられるやうなお金まで絞り取られてどうなるものですか。

お葉　何んだつて。

小つる　戸祭さんも好い金主が見つかつたね、蔦松葉ぢやお絹大明神樣黒澤大明神樣だらう、左樣なら、お先きへ。

（プイと立去る、お葉は口惜しさに身體がふるへてゐるのを、きぬ子が懸命になつてなぐさめる。）

栗岡　是れはすこし殺風景になつたな、お葉さん、謝る、

僕が腰を据ゑたのが悪かつたんだ、唯餘り不思議なもんだからね、女將、仍日歸ろ。

お藤　（ホッとしたやうに）お立ちで被在いますか、どうも有難う存じます、お立ちですよ。

（お葉ときぬ子を殘して一同去る、お葉が突然きぬ子に縋つて泣く。）

お葉　濟みません／＼、さぞ口惜しかつたでせう、腹が立たでせう、勘忍して下さい、勘忍して下さい、皆な私に働きがない爲めです、勘忍して下さい、濟みません／＼。

（ト、尙泣く。）

きぬ子　姐さん、私本當に何とも思つちやゐませんから、私は私で覺悟してゐるんですわ、誰が悪いと云や、世間に評判の悪い黑澤さんのお世話になつた私が一番悪いんですもの、凄いのなんのと云はれても仕方がありませんわ。

お葉　それも私に働きがない爲め……。

きぬ子　それだつて黑澤さんの御世話になる事は、姐さんが反對をなすつたのを、私が勝手にきめたんですもの、私こそその爲めに姐さんを悪く云はせてしまつたんですもの、謝るとなりや私の方からお詫をしなけりやアなりませんわ。

お葉　その反對をした私が、今ぢやア戸祭の仕事のために黑澤さんからお金まで借りるやうになつてゐるんですからね、私しは全く恥かしく思ひます。

きぬ子　でも、それで兄さんが成功して歸つて下されば、それで何も彼もうまい工合に行くぢやア有りませんか。

お葉　それが駄目なんですよ。

きぬ子　エ、……。

お葉　戸祭の仕事は駄目になつちやアつたんです、今まで注ぎ込んだお金はみんな捨て金になつてしまつたんです、それも今日手紙が來て分つたんです。

きぬ子　旦那から出た御金も無駄になつて仕まつたんですか。

お葉　えゝ。

きぬ子　まア……。

お葉　濟みません／＼。

きぬ子　仕方がないぢやありませんか、皆んな持つて生れた運です。

（きぬ子は忍び泣き。）

きぬ子　（泪を拂つて）私、夕顔へ行くのを忘れてゐました。

お葉　あゝさう／＼私も忘れて居た、さ、行きませう。

きぬ子　姐さんも一緒なんですか。

お葉　一緒ですとも。（改まつて）お客様を誰れだと思つて

彼在るんです。
きぬ子　誰方なんです。
お葉　瀬沼さんですよ。
きぬ子　エ、。
お葉　私が頼んで來て貰つたんです、貴方の樂しみになつて貰はうと思つて。
きぬ子　でも私、瀬沼さんにはもうお目にかゝらないつもりでゐたんですもの。
お葉　會つたつて差支へないぢやありませんか、それ共會はないといふ約束でもしたんですか、さうぢアないでせう、被來い、私が悪いやうにはしませんから、サ、行きませう。
きぬ子　でも私、旦那が被來つたら……。
お葉　其の時は其時です、サ、被來いと云ふのに。
きぬ子　ですけれど。
お葉　まア被來い。
（ト、捨臺詞にて、爭ふきぬ子の手を取つて廊下傳ひに離れ座敷へ行く。）　（道具廻る）

同　夕顔の間

廊下を渡つてお葉きぬ子が入り來る、お葉、きぬ子を中へ突き遣る、中にゐるのは瀬沼。
きぬ子　あら。（思はず立ちすくむ、すぐ冷かな態度となつて）暫く、まア隨分暫くでしたのね。
瀬沼　暫く。
きぬ子　何時も御無事で御目出度う。
瀬沼　貴方も御變りがなくつて何よりです、蔭ながらお噂をお葉さんから伺つて居ります。
おきぬ　姐さんから。（チラトお葉の方を見て）ぢや仍且新橋へ來て被來るんですか、そんなら偶には私にもお逢ひなさいな、それとも何か出來たんですか、それで私を避くんでせう、さうでせう、たんとそんな事をなさいよ。
お葉　絹子さん、貴方誰にそんな事を云つてゐるんです、その方、誰だか判つて居るんですか。
きぬ子　分つてますわ、瀬沼さんぢやありませんか。
お葉　その瀬沼さんに、偶にお會ひなさいなんと云つて、貴方一人で瀬沼さんに會へますか。
きぬ子　それはその、何んですわ、ですけれど私一人で會ふんぢやないんですもの、旦那に知れたつて平氣なもんですわ。
お葉　旦那の事を云つてるんぢやない、貴方の心が瀬沼さんに會つて無事でゐますか、落着てゐますが、胸に動悸の波が打つてやアしませんか。

きぬ子　いゝえ、別に。
お葉　お孃様。（トキッパリ云ふ）
きぬ子　エ、。
お葉　改めて私はお孃様と申上ます、お孃様、貴方はなせ白々しい事を仰有います、貴方は瀨沼さんに會つては無事ではゐない御自分の心を恐れて、會ひたい瀨沼さんに會はない樣にして被在るんぢやありませんか、今だつてさうぢやありませんか、會はないつもりで居ると云ふ言葉の裏には、逢つての先きの辛らさを恐れて被在るからぢやありませんか。
きぬ子　そんな事を思つては、第一旦那に濟みませんもの。
お葉　さうですか、では仕方がありません、瀨沼さん、折角貴方に來て頂きましたけれども、お孃樣が斯うして旦那に情を立てゝ被在るんでは致方がありません、貴方の御親切に御孃樣を思つてゐて下さる御心持は、私の胸だけへ藏て置きませう、申上た處で無駄でございますからねえ。
きぬ子　何んの事なんです、云ふだけ云つてくれたつていいぢやアありませんか。
お葉　イ、エ申上ますまい、旦那にばかり情を立てゝ、瀨沼さんの心持なんか、てんで振り返りもなさらないやうな方に、申上げた處で饒舌り損でございますからね。

きぬ子　そんな意地の惡い事を云はないで、誰も聞かないと云つてやしませんわ、瀨沼さんが何か仰有いましたの……何と仰有たのよ。
お葉　でも是れは貴女のやうに、久し振りで瀨沼さんに會ても、一向平氣で被在るやうな薄情な方に申上げても、仕方のないお咄でございますからね。
きぬ子　姐さん。（ト、その手を取つて胸に當て、眞赤になつて其膝に突伏す）
お葉　マア、こんなに動悸を打たせて被在りながら、ナゼ今のやうな負惜しみを仰有いました。
きぬ子　でも何と言つても旦那の御世話になつて居るのは本當なんですもの、旦那に濟まない樣な氣がしましたから。
お葉　そのお心がお愛しいから、何更瀨沼さんにお會はせしようと思つたんですの、お孃樣、私、今、瀨沼さんの心持ちをすつかり此處で伺ひましたの、瀨沼さんは今も變らず、イ、エもつと〳〵深く貴方を思つて被在るんですよ。
きぬ子　それ程思つてゐて下さるんでしたら、なぜ今迄に逢ひに來ては下さらなかつたんでせう、旦那の御世話になつても仍旦藝者には出て居たんですのに。
お葉　貴女のさう仰有るのは無理もありませんか、貴方が

旦那に濟まないと思つて被在るやうに、瀨沼さんも自分から顏を見せては、貴女にも、旦那にも、惡いと思つて控へて被在つたんですよ。

きぬ子　私が旦那に惚れて居ると云ふ、世間の評判を聞いて、それで氣を惡くして被在るんぢやアないんですか。

瀨沼　そんな事はない、外の人は知らない、僕は君が旦那に惚れて居るのは結構だと思ふ、今も君が云ふ通り、旦那の世話になつて居るのは事實なんだから、その恩誼に對して盡すのは、當然の話だと思ふ、假令その旦那が世間で評判が惡いにしろ、世話になつてゐる女までがその旦那を素氣なく扱ふといふ法はない。

（お藤が來る。）

お藤　お葉さん、大變ですよ。

お葉　大變、どうかしましたか。

お藤　困つた事が出來たんですよ、今此處へ旦那がお見えになるんですよ。

お葉　エヽ、旦那が。

お藤　今お電話で、これから行くからつて仰有つて被來つたんです。

お葉　ようござんす、未だ間が有るんでせう、被來つたら私が萬事を計ひますから一寸知らして下さい、それからとにかく家の子を呼んどいて下さいまし。

お藤　エヽ、それはようござんす、おや大丈夫ですね。

お葉　私が引受けましたから安心して被來つて下さい、絹子をと仰有つたら、一寸御約束で出てますとか、云つといて下さい。

お藤　ぢやあ賴みますよ。

（お藤、去る。）

瀨沼　察しるよきぬ子さん、口惜しいこともあるだらう、よく今迄で忍耐したね、泣き度い時も有つたらう。

きぬ子　泣き度い時はありました、膝の潤れるまで、腸をしぼるまで、泣き度い時もありました、けれども誰が私を泣かしてくれるでせう、評判の惡い旦那を取つたために泣く苦勞です、旦那に打明けられず、姐さんは一緒に泣いて下さいますが、餘り泣いて下すつて身體にでも障つてはと、姉さんの前でさへ樣子に出さない時、私はしみじみ私を慰めてくれる、柔しいけれども確乎とした男の手が欲しくなりました。

お葉　お孃樣、今日から瀨沼さんが貴方のお力になつてやらうと嬉しい事を言つて下すつたぢやありませんか、是れからはきつと私が此の家でお會はせします、此家なら女將も承知ですし、反つて人目には付きません。

きぬ子　そんな事をして、もし旦那の耳へでも入つたら。

お葉　その時は其時で、罪は私が引冠ります。

（此處へお藤が來る。）

お藤　アノお葉さん、被來いましたよ。

お葉　いらつしやいましたか、さうして何處に被在います。

お藤　階下の廣間へお通しゝて、今三勝さんと壽吾六さんとに、つないで貰らつてます、だから（一寸中を覗いて）どうなつて居るかしらないが、早くしてね。

お葉　ようござんす、私も直ぐ行きますから一寸の間願ひます、それから家の子供は來てゐますか。

お藤　エ、今、では直ぐ願ひますよ。

（去らうとする。）

お葉　ア、お神さん、夕顏が明いてましたね。

（トきぬ子にかけて云ふ、きぬ子も瀨沼も恥しさうな樣子、其の體をニコリとして亦去る。）

（道具元へ戻る）

同　元の廣間

噂の主の黑澤進三が、刀を拔き放して振りまはしてゐる、その周圍を取卷いてお藤、三勝、定丸にかるた、壽吾六などがヒヤ／＼しながら座敷を取持つて居る、飾棚にはウヰスキーが置いてある。

壽吾六　旦那、大丈夫でござんすか、何だか危かしくつて仕樣がない、そりや切れるんでござんせう。

黑澤　勿論さ、どうだ五百圓やるが御前の鼻を切り落させないか。

壽吾六　ジョ／＼御冗談もんで、此鼻でもありやこそ人間の顏にも見えますので、これがなかつたらスポンヂみたいな顏になつてしまひますアね。

黑澤　三勝、御前の三味線はどうだ。

三勝　いけませんよ旦那、此三味線は御金づくでは買へる品ぢやないんで御座いますからね、胴が花梨で棹・紫檀。

黑澤　分つた／＼、テンジンがうにこうろだらう、テンジンがうにこうるより、お前の方がうにこうろ見たいだぞ、その顏を斬たらテンジンがいくらでも出來るハヽヽヽ、女將、何か切れ味をためす物はないか、備前長舟、今日手に入れたばつかりなんだ、切れ味を試めしたいんだが。

かるた　女將さん、薪ぢやどう。

黑澤　馬鹿、生意氣な事を言ふと貴樣の首をチョン切つて仕舞ふぞ。

かるた　忌よ、首が有つたつて美人で通るんですもの、首無し美人なんかになりたかないわ。

黑澤　（四邊を見廻す）

壽吾六　旦那々々、忌ですぜデロ／＼周圍を見廻したりして、餘りウヰスキーの上がよくないね。

黑澤　エヽ。（と叫んで床柱を切る）

お藤　あら旦那。
黒澤　(懷中から紙幣束を出して投げ與へる)
壽吾六　旦那、これがあの柱の切り賃。
黒澤　ハヽヽヽ。
壽吾六　如何でござんせう、手前のこの頭の毛を二三本がところで、一寸紫一枚と云ふのは……。
黒澤　よし頭を出せ。
(ト、振り上げる、壽吾六は驚いて逃げる。)
黒澤　どうだお前もか。(ト、定丸に云ふ)
(ト、定丸もビックリして遠退く。)
三勝　旦那、およしなさいましよ、子供がこはがりますよ。
黒澤　よく切れる、氣持がいゝ程切れる、これは掘出しものだ、胸が晴々した、オイ、ウヰスキーを酌いでくれ、
(ウヰスキーを酌がせながら)　絹子はどうした馬鹿に遲いぢやないか
定丸　もう直きに來ますわ、もうすこしですわ。
壽吾六　絹ちやんは何處へ行つて被在るんです。
定丸　エヽ、御座敷。
壽吾六　御座敷は分つてますが、此家へ被來つてるんでせう。
黒澤　ナニ、此處へ來てゐる。
お藤　イヽエ、宅へは來ては居りませんのですよ、壽吾六さん、何を云つて居るのさ。
壽吾六　でも、さうだ、夕顏に被在るんぢやアありませんか。
かるた　違ふのよ兄さん、絹子さんは外のお約束へ行つて被在るのよ。
お藤　新喜樂さんの御約束が來たからつて、夕顏へも一寸顏を出したきり、直ぐ其方へ廻つて仕舞つたんだよ、餘計な事を言つちや困りますよ。
壽吾六　へヽ、左樣で、存じませんもんで、でも程なくお見えになりませう。
黒澤　何んでもいゝ、お葉はどうした、お葉は。
(お葉來る。)
お葉　何うも濟みませんおそくなりまして、被來いまし。
黒澤　オイ、絹子は何うしたんだ、何處へ行つたんだ。
お葉　オヤまだ來ませんか、もう來てゐると思つたのに、女將さん、どうしたんです、お約束でももう頂ける時分なんですから、電話をかけて催促して見て下さいませんか。
お藤　エヽ、其處は如才なく、先刻から電話をかけて催促して居るんですけれど、踊りを踊つて居るとか云つて、先方で出してくれないんです、でも今、家の男をやりましたから、當人の耳へも入つて居るのでせうから、もう近々に見えるでせう。

お葉　でも、念の爲めモウ一度催促してみて下さいませんか。
お藤　承知致しました、もう一度かけて見ませう、何卒御ゆるり。
（ト、去る。）
黑澤　（お葉に）オイ。（ウヰスキーのコップをさす）
お葉　アラ、どうなすつたんでせう、私の禁酒を御存知じやありませんか。
黑澤　親孝行で禁酒の一條か、お前親孝行か。
お葉　親孝行でせう。
黑澤　禁酒の遺言を守てゐる所は親孝行かも知れないが、もう一つ絹子の身體を保護してやらないのは、すこし遺言に背いてゐやしないか。
お葉　エ、……。
黑澤　きぬ子に俺の世話を受けさせてゐるのは、母親の遺言に背いてゐることになりはしないか。
お葉　ですけれどもそれは……そりや御母さんの遺言はさうでしたけれど、絹子さんの氣に入つた御方なら差支ないと、それも申し殘して參いつたんで御座いますから。
黑澤　絹子は俺か氣に入つて居るのか。
三勝　マア旦那あんな事を仰有つて、きぬちやんが旦那を氣に入つてゐないで何うしませう、私達なんか何時だつて當てられ通しぢやありませんか、御存じのくせに、わざとあんな事を仰有つて被在るんだよ、壽吾六さんなんか旦那、先刻きぬ子さんから旦那の惚氣で十圓商法をした位なんですよ。
壽吾六　エ、此の通り、ちやんと十圓頂いたんで。
お葉　まあさうですか、そりや私も不思議なんですよ、まるで旦那に惚れ拔いてゐるんですからね、一も旦那、二も旦那、旦那の事で持切つてゐるんですもの、これは本當の事ですよ、噓だと思ふなら定丸やかるたに聞いて御覽なさい。
かるた　姐さんの言ふ通りですわ、ねえ定丸さん、昨日だつたわね、こんな事を言つたぢやないの、私、旦那ばかりはあんな方ぢやないと思つてた、もつと厭な方……
壽吾六　エヘン。
かるた　本當なのよ、もつと厭な方……
壽吾六　エヘン。
かるた　まア話をお聞きなさいよ、もつと厭な方だと思つてゐたけどさう思うてゐたのが恥しい、餘り親切にして下さるんで、勿體なくなつて來たつて、ねえさう言つて居たわね。
黑澤　フン一つ穴の狢の言ふ事があてになるものか。
かるた　アラ狢ぢやないわ、私猫よ、だけど本當にさう云

つてましたわ。

黒澤　それ程思つてゐる絹子が、何うして今夜はおそいのだ。

お葉　それが今夜御見えになるとは知りませんものでしたので、あすこの御約束を受けさせなければよかつた、でももうすぐ參りませう、電話はどうしたんだね。

黒澤　お葉、お前も萬秋葉のお葉だらう、下手な芝居はしてくれるな、絹子は此處へ來てゐるんだ、夕顔の間で男と媾見して居るんだ。

お葉　まア旦那、とんだ事を仰有います、きぬ子は來て居やアしませんのですよ。

黒澤　來てゐる、確かに來てゐる、壽吾六の辷らした言葉は本當なのだ。

壽吾六　いゝえ、あれは全く手前の思ひ違ひで。

黒澤　思ひ違ひなら思ひ違ひにしておけ、念晴らしに俺は夕顔の間を査べて見る。

お葉　旦那、何處へ被來るんです。

黒澤　夕顔の間を査べて見るのだ。

お葉　もし絹子が來てゐなかつたら何うなさいます。

黒澤　ナニ。

お葉　貴方の御名前に關るぢやありませんか、貴方ばかりぢやありません、絹子の恥になる事ですよ。

黒澤　なぜ絹子の恥になるんだ、恥を重ねて居るのは俺なんだ、俺が世間から笑はれてゐるんだ

お葉　何故でございます、なぜ旦那が世間から笑はれ者になつて被在るんです。

黒澤　絹子だ、絹子の爲めに俺が世間から笑はれてゐるんだ。

お葉　變な事を伺ひますね、絹子が貴方を嫌つてゐれば格別、あんなに旦那に惚れて居るんぢやありませんか、こんな事を言つちやア失禮ですが、絹子が笑はれこそすれ、貴方が笑はれ者におなんなさるはずがないぢやございませんか。

黒澤　絹子が俺に惚れてゐるといふのが嘘なんだ、

お葉　何んで御座います。

黒澤　俺の世間の評判を聞いて見ろ、俺の様な世間の評判の悪い男に、絹子のやうな女が身體をなげだして來たのは、何かそこに魂膽があるはずだ、俺の世話になるのも、蔭で何事をするも便利だからだ、それで俺れに惚れた振りをしてゐるのだ。

お葉　違ひます〳〵、それは旦那のひがみと云ふものです、絹子は本當に旦那の事を思つてゐるんですよ、今夜は旦那は餘程どうかしてゐらつしやる、兎に角私が行つて連れて來ますから、此處で召上つて被在て下さいまし。

黒澤　お前が相手をすると云ふのか。

お葉　私は頂けない體ぢや御座いませんか。
黒澤　お前が相手にならずに、誰れが俺れの相手になると云ふんだ。
お葉　デモ是ればかりは遺言でございますから。
黒澤　絹子に就ての遺言は、既に破つてゐるお前ぢやアないか。
お葉　でもそれは……おやアからたすつて下さいまし、私お迎ひに行つて來ますまで、三勝さんの義太夫でもおきたすつて被在て下さいませんか。
三勝　何をお聞きに入れませうか、合邦、柳、それとも壺坂、絹子さんにちなんで帯屋でもやりませうか。
黒澤　うにこうるの義太夫なんか澤山だ。
壽吾六　では手前が左様、丁度かるたさんも居ることだ、何か掛合ひでも御聞きに入れませう、かるたさん、一寸御顔を。
黒澤　うるさい、澤山だ。
壽吾六　まアさう仰有らずに、かるたと壽吾六が揃つたところで坊ちやん泣かずにお遊びと。
黒澤　お前達はもう歸れ、俺は絹子だけに用があるんだ、もういい、俺が自分で絹子を迎れて來る。(立上る)
お葉　まア待つて下さい、旦那、絹子の來るまで私がお相手さへすりや此處に待つて居て下さるんですね。

黒澤　お前が相手をするなら……ウム、大人しく待つて居てやる。
お葉　きつとですね。
黒澤　俺の相手をするんだぞ。
お葉　エヽ。
定丸　姉さんいゝんですか。
お葉　大丈夫だよ、禁酒してゐるからつて、未だすこしのお酒に醉ふ程の私でもないだらう。
(黒澤がウヰスキーを注いだ、コップを出す、その手を取つてヂツト思入する、グツと一息に飲み干して返盃する、黒澤が干して又お葉に獻酬數次。)
お葉　(今は十二分に醉拂つて酒亂の本性を發揮してゐる)さアどうしたんです旦那、もう飲めないんですか、意氣地がありませんね、此方へお出しなさい、私が助けて上げますから。
(と、黒澤の飲み切れぬウヰスキーのコップを奪ふ、定丸とかるたが取すがる。)
かるた　アラ姐さん。
お葉　何をするんだい、(振拂ふ機みにウヰスキーが零れる)アラ、こぼれちやつたぢやないか、サア御代りを注いでおくれ、注がないのかよ、オイ、定丸。
定丸　だつてねえ。

お葉　（まれをして）だつてねえ、何がだつてねえだ、私が酔つてるといふのかい、酔ふもんかい、憚りながら蔦松葉のお葉だよ、如何に禁酒をしてお酒が弱くなつてゐるからつて、これんばかりのお酒に酔つてたまるものかい、さ、洋がないのかよ、唐變木。（ト、グラスを投げ付る）

三勝　サア大變た、又酒亂が初まつた。

お葉　酒亂、酒亂とは何んです、三勝さん、酒亂とは何んです、その譯を伺はうぢやありませんか、酒亂とは酒が亂れると書きますよ、私はお酒が亂れてますか、亂れてやアしないよ、御覧なさい、此の通りしつかりして居ますよ。

（ト、三勝にヂリ／＼詰め寄る。）

壽吉六　大丈夫ですよ、姐さんは確かに大丈夫ですよ、壽吾六が受合ひます。

お葉　大丈夫だらう、ねえ大丈夫だらう、此の通り大丈夫なんだ、それを酒亂とは何んだい、酒亂とは一體何んてえ云ひ草だ、なんたい花櫚胴の紫檀棹め、見るのも績に障らア、

（ト、つか／＼と側へ行つて、エイとばかりに三味線を踏み折る。）

三勝　アラ、三味線を……。

お葉　ざまア見ろ、うにこうゐめ、おもしろいね旦那、旦那は何處へ行つたんだい（ポン手を打つて）居たね、正に居たね、一寸旦那、どうしたんですよ、（ト側へべタべタと坐つて酔つて半眠つてゐる黒澤を起す）一寸旦那、だアんな、……どうしたのよ、もつと呑みませう、こうてば。

黒澤　もう謝る、勘忍してくれ。

お葉　謝つたつて駄目だよ、私に飲ませたなア お前さんぢやないか、謝つたつて誰が許すもんか、サアお飲み、お飲みつたら（ト無理に寝てゐる黒澤を引き起し、一緒に轉がつて仕舞ふ、漸く起上りて）駄目だね、ころがつちや、よ、どつこいしよ……サア、起きるんだよ、起きるんだつてば、ヨイトマケエンヤラ。（ト黒澤の胸倉を掴んで引起す）

黒澤　何をする、馬鹿。

お葉　あら怒つたの、およしなさいよ、怒るなんて野暮だよ、大體お前さんは野暮でいけないよ、もつと意氣にならなくちやア、先刻見たいに、絹子が來ないで萬助を起すのは野暮の骨頂だよ、第一お前さんなんか女を擁くなんてえ柄ぢやないよ。

定丸　姐さん。

お葉　さうぢやないか、此の黒澤さんなんかが女をやくの

は、トロンコトンの汚穢屋が色男氣取りで居るやうなものので、餘りつり合が取れなさ過ぎらあね、黒澤さん、私が教へといて上げるからね、よく覺えて置きなさい、貴方なんか旦那だからね、旦那は旦那らしく、何處までも氣を鷹揚に持つて、粹に碎けなけりやア駄目だよ、自分の世話をしてる女が、外に旦那を拵へたら、それにはかまはず御燒きなさい、お怒んなさい、だが色男のあるくらゐは大目に見ておやんなさい、旦那は勤めをさせる人、色男は女につとめる人、その區別が分つたら、時には色男に會はせるぐらゐの粹を通して遣らなきア、一ぱしの旦那とは云はれないよ……いけないよ、先刻見たいに家探しをするなんて、あんな事をすりや女に嫌らはれるばかりぢやないか、旦那は旦那らしく、ガツ／＼しないで、お腹が空いてもひもじうない見たいな顔をしてゐなきやけない、旦那は旦那、色男は色男、旦那で大事がらした上に、色男でほれられやうつて云ふのは餘り蟲が好ぎるよ。

黒澤　お葉、お前がそんな事を言ふのは、絹子にも外に男があると言ふなぞをかけて居るんだらう。

お葉　感心、血のめぐりがいゝね、お察しの通りさ、だが怒つちやいけないよ、今も言つた通り、旦那は旦那、色は色さ、貴方なんか旦那の中でも上等旦那の方だよ、きぬ子はそりやア貴方も大事がつて居るんだからね、色に會つてる位、大目に見ておやんなさい、すりや猶ときぬ子に大事がられますよ。

黒澤　絹子は今、男と會つてゐると云ふんだな。

お葉　實はね、私が取持つて今頃はしつぽりだらうよ、だから猶氣を大きく持つて、落着いてゐらつしやい、此處が男の見せ時だアね、さ、そのつもりで一杯。

黒澤　うるさい。（拂ひのける）

お葉　そんな事を云はないでさ。

黒澤　うるさい。（と拂ひ退けた手がお葉の體へ當る）

お葉　オヤ、私を打つたね、なんで私しを打つたんだい、なんの恨みがあつて私を打たんだ、さ、その譯を聞かうぢやないか。

黒澤　默れ、貴様のやうな奴は、打つぐらゐは愚、踏殺しても飽きたりない奴だ。

お葉　踏殺す、おもしろい、ふみ殺して貰はうぢやないか、さ殺せ、踏殺せ。

黒澤　畜生。（ト、引据ゑてめつた打ち）

お葉　打ちやアがつたな、畜生、よくも打ちやがつたな、どうするか見ろ。

（ト、フト手に當つた刀を抜くより早く黒澤に切り付

ける、一同はわツと叫んで逃げ去る、立廻り、黒澤は終に殺される、殺してしまつてからお葉はハツと我に復る。瀬沼ときぬ子が駈付ける。)

きぬ子　姐さん。

お葉　ア、きぬ子さん、私は殺してしまつた、殺してしまつた。

きぬ子　これからどうなさいます。

お葉　罰た、罰だ……瀬沼さん、私は自首して出ます、絹子さんをよろしく願ひます、何時までも添ひ遂げて……私しは牢の中から見てゐます。

きぬ子　姐さん。

お葉　仲よく、仲よく、暮して下さいね。

(騒がしい人聲。)

——幕——

花の夜語（二幕四場）

（人來鳥姉妹編）

第一

橘座の洋食堂

正面は窓、窓硝子を通じて幟りのはためいてゐるのが見える。テーブルの配置など管々しくは記さないが、たゞ多くのテーブルの中に、長方形の十人位が取り圍める大きなテーブルが欲しい。

時は一月。未だ藝妓の白襟が見られる頃。併し中にはもう縞になつてゐる藝妓もある中旬過の午後。

幕明く。

食堂には客が居ない。唯一つのテーブルだけが客が食事中に用にでも立つたと見え、洋食の皿や魔法壜などが散つたまゝになつてゐる。ボーイが四五人、繼て來る幕間の用意をしてゐる。

聽てはあらうが時々芝居の鳴物を聞かせたい。

ト、切田傳藏と云ふ脂切つた五十位の男が、養女の常磐津文字繁と入つて來る。文字繁は二十二。美人ではあるが寂しい顏立ち、始終伏眼勝ちの女。此幕では殊にそれが際だつて見えなければならない。

傳藏　オイ、ボーイさん。酒をくんねえ。お前何か喰はねえか。

文字繁　妾、澤山。

傳藏　そんな事を云はずに何か喰ひねえ。

文字繁　お父さん。話つて何なの？

傳藏　まあ待ちねえ、さう急くもんぢやねえ。

文字繁　だつて、切角見物に連れて來て貰つたのに、場所に居ないぢやア、蔦岡の女將さんに惡るいぢやないの。

傳藏　さう云ふ手前が廊下鳶をしてゐるんぢやねえかとかう云ふ譯だ。

文字繁　ええ？

傳藏　先刻、此處のボーイに探しにやつたら、手前は場所に居なかつたぢやねえか、何處へ行つてやがつた、眞逆村越の處へ電話をかけてたんぢやあるめえな。

文字繁　まあ、お父さん。

傳藏　イイヤ、俺は知つてる。手前此頃、また村越と縒を戻してゐるさうだな。

文字繁　何を云ふの、お父さん。（眞顏）

傳藏　あんなものに未練を残してて、一體どうする了簡な

んだ。成程村越はお前の旦那だつた。だが今は緣が切れてるんだぞ。手前は何と思つてるか知らねえが、俺達はもう立派に緣を切つてゐる、その村越と縒なんか戻しやがつたら、唯は置かねえからさう思へ。

文字繁　お父さん、一體まあ何を證據にそんな事を云ふの。私が村越さんと縒が戻つてるなんて、誰が云ひました。

傳藏　誰も云はねえが、さうぢやねえかと云ふのよ。

文字繁　それつぱかりの疑ひで、村越さんの事を云ふのは止して頂戴。村越さんと別れた事に就ては、私も隨分義理の惡るい人になつてます。でも、お父さんやお母さんの云ふ事を聞いて、子供は里に出す、落目になつた村越さんと別れてしまつたんぢやありませんか。少しは私の身も察してくれたつていゝでせう。

傳藏　でもよ、お前が廊下鳶ばかりしてやがるから、外に男でも出來たのか、乃至は村越と縒を戻したかと、疑ひたくもなるだらうぢやねえか。まあそんな事がねえと云ふんならいゝ。俺はお母（おつかあ）程譯の判らねえ事を云やしねえ。お前が可愛くつて仕樣がねえんだからな、まあ、一杯吞みねえ。

文字繁　止すわ。

傳藏　何だつてよ。吞めねえお前でもねえんぢやねえか。

文字繁　でも、又、こんな處をお母さんに見られると何だ彼んだつて、後が大變ですもの。

傳藏　何が大變なんだ。親子で酒を飲んでるのを、他の奴が愚圖々々云ふところはねえぢやねえか。

文字繁　親子で飲んでる分には、差支へはありませんけど……。

傳藏　おしげ、お前は何故さう母親にばかり義理を立てるんだ。母親ばかりが怖くつて、この俺はどうでもいゝと云ふのか。

文字繁　そんなことは思やしませんけど、ねえ、お父さん、私もどんな事をしても稼ぎますから、何時迄も親子夫婦で仲よく暮らして下さいな。お願ひしますから。

傳藏　伜しな、俺は痩せても枯れても一軒の家の主人だからな。俺の氣に喰はねえ奴は、娘だらうが何だらうが、叩き出しても關はねえ權利と義務を持つてゐるんだ。俺は寧ろ嬶より、お前の方が可愛いんだ。

文字繁　まアお父さん。

傳藏　ほんとに俺ア、お前のことを思つてやつてるんだぜ。何ぼ貰ひ娘だからつて、お前を無暗に稼がせようつてえ、おくにの了簡が憎くつて仕方がねえ。今度、おくにがお前に無理な旦那取りでもさせるやうだつたら、もう其時は容赦はねえ、叩き出してしまふから、安心して俺に任つてゐねえ。お前一人はどうにかしたつて樂に暮らさせ

るから。
文字繁　もうそんな事は云ひつこなしにして下さい。お父さんもお母さんも、私には大事な義理のある方なんですから、私の爲にそんな事が出來たら、私が世間に顔出しが出來ませんから、これぱつかりは頼みます。
傳藏　フーン、それ程に云ふなら、俺も何にも云ふめえ、したが俺にもそれだけの了簡があるからさう思へ。
文字繁　了簡つてお父さん。
傳藏　明日から手前は、家から一足も外へ出さねえからそのつもりでゐろ。
文字繁　お座敷がかゝつて來ても。
傳藏　そのお座敷か何だか、……手前此頃又浮氣してやがるな？　隱したつて知つてるぞ。鈴藤とか云ふ會社員と熱くなつてると云ふ評判、俺は丁と聞いて知つてるんだ。
文字繁　（眞面目）イイエ、鈴藤さんのことは違ひます。
傳藏　何を云やがる。今更違つてるて云つたつて、そんな事を眞に受ける俺ぢやねえんだ。甘くしてりやつけ上りやがつて、さう何時迄も馬鹿にされちやあ居ねえぞ。
文字繁　でも、鈴藤さんばかりは違ひます。
傳藏　まだ云やがるか。
（ト、テーブルを叩く。ボーイ吃驚した顔。傳藏の女房のおくにが入つて來る。）

おくに　オヤ、お揃ひで大變お仲の好いことですね。
（トついと離れたテーブルへ行く。）
文字繁　あ、お母さん。
おくに　ボーイさん、何でも宜う御座んすから、二皿ばかり、それにお酒を下さい。
文字繁　お母さん、そんな處にいらつしやらないで此方へ被來いな。
おくに　有難う存じます。でも切角のお話の處を、お邪魔になつても惡るう御座んすからね。
文字繁　そんなことはありやしないんですよ。そんなことを云はずに、ね。ボーイさん、そのナイフとフオークは此方。
（ト椅子を離れて取りに行く。）
おくに　餘計な事をおしでない、おしげ、そんな事で胡魔化さうたつて胡魔化される私ぢやないんだよ。ヘン、何れ二人で私の惡口でも云つてたんだらう。鳥渡お前さん、私と云ふものが邪魔になるんだつたら、邪魔になると云つておくんなさい。何時だつて出て行つてあげるんだからね。不自由つたらしい、芝居の食堂なんかでにた／＼内緒話は止して下さい。
傳藏　ヤイ、馬鹿野郎。何を云やがる、此處を何處たか知つてるのか。

おくに　知つてますとも、いくら馬鹿でも芝居の食堂位の
　ことは分りますよ。
傳藏　判つてゐるなら言葉を愼め、他人も大勢ゐるんだ。
おくに　他人に聞かれて極りが惡るいやうな事を、誰方が
　一體なすつてるんです。對者(ひと)を盲目にして置かうたつて、
　さうは行きませんからね。
傳藏　何つ。(と立上る)
文字繁　まア　お父さん。
傳藏　(態と穩に)馬鹿だな手前は。
おくに　えゝどうせ私は馬鹿ですよ、馬鹿だから亭主に浮
　氣されて……。
傳藏　ところがおしげが浮氣をしてゐるのを、俺が叱つて
　ゐるんだから面白からう。
おくに　お前さん、本當かい。
傳藏　本當だとも、まア此方へ來ねえ、お前からもウンと
　叱つてやらねえぢや癖になるぜ。
おくに　まア、何てえ畜生だらう。ボーイさん、此方へ來
　ますよ……お前さん、本當におしげが浮氣をしてゐるの
　かい、叱つてるところだなんて、私を胡魔化さうと云ふ
　んぢやないのかい。
傳藏　何故さう手前(てめえ)は物を僻んで取るんだらうな、いくら
　俺がおしげに思召をかけた所で、おしげにやとうに蟲が
　ついてゐるんだ。
おくに　まア呆れた。おしげ、お前それで濟むと思ふのか
　い?
文字繁　お母さん、お父さんの云ふ鈴蝶さんの事なら、絕
　對にうそです。そんな事はありません。
傳藏　すると外の人にしたつてあると云ふのかい。
文字繁　外の人にしたつてありません、私はそんな事の出
　來る身體ぢやないと云ふことは、自分がようく知つてゐ
　ます。私、決して浮氣なんかしてやしません。
おくに　おしげ、私やね、何もお前に浮氣をするなと云ふ
　んぢやないんだよ。浮氣をするならするやうに、私達に
　するだけの事をしてからにしておくれ。お前は一體どう
　するつもりなんだい、何時迄一人で居るなんて、餘り働
　きがなさすぎるぢやないか。お前を養女に貰つて來たの
　も、慈悲や物好きで養女に貰つて來たんぢやないんだよ。
　年老つた私達に、樂をさして貰ひ度い爲だよ。何時お前
　は私達を樂にさしてくれるんだい。
文字繁　……濟みません。
おくに　もう一人や半分、見付かりさうなもんだのに、未
　だ見付からないのかい。蔦岡へだつて、あんなに入つて
　ゐるんぢやないか。今日だつて私達とは別な棧敷で見物
　させる程、女將が可愛がつてくれてるのに、何とかなら

ないのかい。

傳藏　だがおくに、お前のやうにさう攻め立つたつて、當人の氣に入らねえものを持たせるのも、罪な話ぢやねえか。

おくに　オヤ、お前さんは又莫迦におしげの肩を持つんだね。

傳藏　肩を持つと云ふ譯ぢやねえけれどよ。

おくに　そんな風にお前さんが甘くなつてゐるから、おしげの阿魔が再勤するのは厭だなんてえ無理を通すのさ。常磐津の師匠をしてる位で、好い鴨が引掛るものか。

傳藏　藝妓に出して、浮氣でもされたら怎うするんだ。

おくに　又お前さんは、どうしておしげの浮氣をするのが、氣になるんだい。

傳藏　虻蜂取らずになつて見ねえ、お堪り小法師がねえぢやねえか。

おくに　フン、何が虻蜂取らずだか。……おしげ、何を泣いてゐるんだい。泣く手間で、自分の身じんまくでもつけたらどうだい。薄醜狀ない、イケ年をしやがつて、旦突の一匹や二匹生捕れねえベラボーがあるか。

傳藏　そりやさうだけれど、お前のやうに無理を云つても……。

おくに　何が無理なんだよ。そりやお前さんはおしげを傍へ引きつけて、眼尻を下げてりやお腹も滿くなるだらうけど、それぢや私が遣らないからね。

傳藏　何を馬鹿な事を云ふんだ。此處を何處だと思ふんだ。

おくに　芝居の食堂た位の事は知つてますよ。

傳藏　知つてゐるなら、そんな下らねえ事を云はねえでも可いぢやねえか。おしげを庇つたのが、氣に障つたら勘辨してくんねえ。娘だと思ふもんだからね。全くお前の云ふ通り、甘やかしておくから、増長しやがるんだ。碌つたらとつちめざアなるめえ。俺も手傳はう。

おくに　さう云つてくれりや、私だつて何も云ふことはないけどさ。

傳藏　おしげ、其時になつて吠面を掻くな。何も彼も自業自得だ。

おくに　鳥渡、泣いてなんぞゐないで、お酌でもしないかよ。

（ト、文字繁は涙を押へて酌をする。ボーイ達はヒソヒソ話。）

（閉幕報知のベル。）

（下谷の待合蔦廼の女將お政が入つて來る。）

お政　オヤ文字繁さん、此處へ來てゐたのかい。どうしたんだい。泣いてたね。

文字繁　女將さん、私が浮氣をしてゐるんですつて、これ

だけ愼んでゐるのに、浮氣をしてゐるんですつて……。お父さんとお母さんが。

お政　飛んでもない……。そんな事を云つて。お前さんが餘り固くしてゐるもんだから、お父さんやお母さんが、からかつたんだよ。揶揄はれて泣く奴があるものかね。私がお前さんだつたら面當てに浮氣をするがね、お前さんにや、迚もそんな事は出來まい。（傳藏とおくにに）そりやア貴方達を怖がつてゐるんですよ。餘程躾が嚴重だと見えますね。家の娘なんか、テンで私を馬鹿にしきつてね、手がつけられないんですよ。私も少し貴方達の眞似でもするといゝんですがねホホ……（ボーイのBに）あの中幕が切れたら、三人で來ますから賴みます。

（ト、此間に仕出しが入つて來る。）

ボーイB　お三人で。

お政　文字棠さん。お前さん、私達と一緒にするたらう。お父さん達と、連中は同じだが、今日は私が連れて來た人だから、どうしたつて私達の方へ交際(つきあ)つて貰はなけりや。（Bに）三人です。

B　お名前は。

お政　蔦岡です。賴みましたよ。

B　有難う存じます。

お政　文字棠さん、場所へ行かう、おさよが默つて何處かへ行つちやつたつて怒つてたよ。お母さん、今日一日は私が借り切りましたよ。さ、行かう。

（ト、促して出て行かうとする。）

（某會社の社員瀨沼欣也。栗原集治を先きに、藝妓富榮、春若、花蝶、勝子、白梅葵、半玉ぼたん、豆奴等が入つて來る。出會頭。）

お政　オヤ、又もお揃ひで、未だ召上るんですか。

瀨沼　俺達は別に召上り度くもないんだが、此奴等が食堂へ行かうつて、承知しないんだ。

栗原　殊にこの富榮なんて藝妓は、芝居を見に來たんだか、物を食ひに來たんだか、譯が判らないんだからね。先刻だつて斯うだ。あんまり來ようが遲かつたから、春若がお前さん、遲かつたねえと云ふと、えゝもう喰べちやつた、と云ふ返事さ。何ぼ食堂へ行く約束になつてるからと云つて、芝居へ來て場所へ坐るたり、突然喰べちやつたといふ臺詞はないだらう。こんな藝妓が日本に居るかと思ふと、俺は實際心細くなるよ。

富榮　（笑ひ乍ら）何んだつて好いぢやないの、貴方をお客にしてあげてるんだから、ケチ／＼してないでお奢んなさいよ。食堂でも奢んなかつたら、貴方なんか迚も藝妓やお酌さん達に、人氣の出つこはないんだよ。

お政　オヤ／＼、大變な事になりましたね。

瀨沼　何んて云つたつて、今日の賄を引受けたのが此方の不運さ。手錢で喰ふんだつたら、握り一人前で濟まして置く奴が、此方の賄と云ふので、喰ふは〳〵。

（花蝶が瀨沼を抓る。）

（傳藏とおくには去る。）

瀨沼　痛い。

ボーイA　何に致しませう。

富榮　私、紅茶、それにプリンあつて。

A　御座います。

富榮　ぢやあプリンと紅茶。

瀨沼　ケチなものを喰ふんだな。

富榮　ぢやあもつと喰べてよ。

瀨沼　謝まる〳〵。

春若　私は溫かいレモンスカッシユ。

花蝶　私は紅茶にお菓子。

勝子　私はお菓子にコーヒー。

豆奴　私も。

ぼたん　私はコーヒーにプリン。

富榮　私はミルクなしにして頂戴。

花蝶　私はあり。

勝子　私はなし。

豆奴　私は少し。

ぼたん　私はあり。

お政　ホラ〳〵大變だ。ボーイさん、一々注文を聞いてた日にや、何を云ひだすか知れやしない。好い加減に聞いとかなかつた日にや、腸を悪るくしてしまふよ。

ぼたん　まあ、隨分ひどいちやあちやんね。

お政　まあ御緩くり。

（トお政は出て行く。）

勝子　（出て行かうとする文字繁を呼び留める）　あゝお繁さん、お前さんお父さんに會つたの？

富榮　お繁さん、本當に察しるよ。

（文字繁は凝つと下を向く。）

文字繁　有難う。（口の中）

瀨沼　文字繁さん。

文字繁　えゝ。

瀨沼　（鈴を振る眞似）　これはどうしたい。

（文字繁は答へず。淋しいやうな悲しいやうな表情を殘して立去る。）

栗原　（瀨沼に）　これとは何だい。

富榮　感が悪るいのね。鈴ぢやありませんか。

栗原　あゝ鈴藤か。さう云へば彼奴どうしたんだらうな。

春若　鈴藤さんが。此三日ばかり、ブッコ抜いて休んでるぜ。

栗原　ウム。

春若　お紫さんの事を思ひ詰めて、身體でも悪るくしたんぢやないでせうか。

栗原　そんな事かも知れない。夢中と云ふよりも逆上してゐる形だからな。よくあんなに思ひ込まれたものだ。

瀨沼　俺は厭だ。

栗原　何が。

瀨沼　あんな文字紫みたいな不愛想な女、今だつて見ろ。あの愛想のない事。今は藝妓でないにしたつて、常磐津の師匠なら藝人ぢやないか。お座敷へも出るんぢやないか。そんなら少し位愛嬌を見せたつて差支へはあるまい。始終下唇を噛んで、伏眼勝ちになつて、笑つたら損だと云ふやうな顏をしてやがる。鈴藤は一體何處がよくつて、あんな女に惚れたんだか、俺にはさつぱり見當が附かない。

富榮　いやにお紫さんを悪るくいふのね。さては貴方はフラレたね。

瀨沼　莫迦な事を云ふない。あんな貧乏神の妾見たいな女。

勝子　貧乏神の妾はよかつたわね。

瀨沼　だつてさうだらう、流行らないお稻荷様といふ格で、陰々滅々としてやがる。

春若　さう悪るく云ふもんぢやないわ、お紫さんて云ふ人は元はあんな人ぢやなかつたんですもの。陰氣にならなければならない譯があるんだから、全く可哀想ねえ。（ト他を顧る）

勝子　私、此間始めて、あの人の家の事を聞いたのよ、呆れ返つて了つた。お母さんて人も隨分酷い人だけど、お父さんて人が酷過ぎると思ふわ。何んぼ貰ひつ子だからつて、お紫さんは仍且自分の子に當る人ぢやないの。その子を捉へて……。

富榮　エヘン。

栗原　何んだい、イヤに乙た咳拂ひをするね。

富榮　フフ……。何んだつて可いぢやありませんか。

栗原　だが僕も、あの文字紫は感心しないね。あれより、此の春若の方がどれだけいゝか知れやしない。

春若　どうも有難う。｝同時に云ふ
花蝶　御馳走様。

栗原　實際だよ。文字紫みたいな女は、あれは一緒になると終ひには、情死をしなけりやならなくなる女だよ。

春若　情死。（ト富榮と顏を見合はせる）

栗原　鈴藤は今の内に、諦らめた方がいゝと思ふがな。

勝子　まあ、何だつていゝぢやないの、何處か私の氣に好くつて、文字紫さんが淋しい女でも、伏眼勝ちな女でも、鈴藤さんが其處が氣に入つてるんだから、他から揣圖惣

岡餘計な干渉はしなくつたつていゝわよ。情死をしようか、入墨をしようか、當人の勝手ぢやないの。
花蝶　チョイト、自分の惚氣よ。（他に云ふ）
勝子　なアに、私が何を云つて。
花蝶　お前さん今何て云つたい。情死をしようが、入墨をしようが……フンだ。
勝子　アラ……さう云へば私の惚氣になる。
花蝶　ちよいと、これ、なあに。
（ト、勝子の右の手を取る。）
富榮　あら、少とも知らなかつた。
瀨沼　あ、入れ黒子をしてやがる。｝（同時に云ふ）
花蝶　これが云ひたさに、今見たいなことを云つたのよ。
富榮　ちよいと、何を奢る。
瀨沼　ボーイさん、此處の勘定はこの藝妓から取るんだぜ。
勝子　いゝわ。これ位の事で濟むんなら、おやすい御用だ。
春若　白粉彫といふのがあるんだつてね。私、先日、始めて聞いた。
栗原　何だい、白粉彫と云ふなア。
春若　白粉で刺靑をするのよ。平素は何ともないの。お酒を飲んだり、お湯へ入つたり、身體が溫まつて來ると、ボーッと桃色に出て來るんですつて。
栗原　乙だな。其奴は乙だ。オイ誰かして居るものは居ないか。
富榮　居ないわ。そんな事をしたらお湯へ入れないぢやないの。
瀨沼　內へ風呂をたてたら何でもあるまい。
富榮　だつて對手がなくつちや。
瀨沼　俺ぢやどうだい。
勝子　顏と相談なさいよ。
富榮　貴方にしときませうか。｝（同時に）
瀨沼　（勝子に）どうだ。（富榮に）俺にしろよ。さうしたら俺も富榮命と、白粉彫をするから。
富榮　いやよ、私の名前が澁紙色になつちやうぢやないの。
瀨沼　どう云ふ譯だい。
富榮　色の白い人なら桃色に出るかも知れないけど、貴方なんか色が黒いから、折角の白粉彫も柿色になつちやうわ。
瀨沼　ガッデムユー。
（一同笑ふ。）
（片しやぎり。）
春若　アラ、明く。
富榮　行きませう。
瀨沼　（勝子に）勘定をするんだぜ。
富榮　ケチ臭いのね。これ位拂つといたつていゝぢやない

の。
瀬沼　仍且俺が拂ふのか。
富榮　さうよ。
瀬沼　よく出來てるな。
花蝶　明く〳〵。
富榮　お先へ。
勝子　お先へ。
（「お先へ」「お先へ」と云つて、藝妓と半玉は去る。）
（取り殘された二人のつまらなさうな顏。ボーイがビルを持つて來る。）
瀬沼　いくらだ。（ト財布の中を檢めながら）オイ、君んとこに五十錢ないか。
栗原　五十錢位あると思つたが、（ト紙入れを調べて）一枚あつた。
瀬沼　鳥渡貸してくれ給へ……オイ、勘定、これは君に……行かう。（去る）
（間。ボーイは後片附け。）
（お政と水落榮吉とが入つて來る。水落は四十五六、色の淺黑い苦味走つた好い男。職業は扮する人の適宜。）
お政　本當に貴方、どうなさいました。
水落　まあおかけなさい。……しばらくでしたね。
お政　久濶く、何時東京へ出て被來いました。
水落　舊臘(くれ)にね。
お政　マア左樣でしたか。何時もお變りがなくつて何よりですわね。此方には、今度はズーッとお長く。
水落　えゝ。もう大阪を引拂つて、又東京の子になる事になりました。
お政　ぢやア、もうずうつと此方ですね。まあさうで厶いますか。いえ、其方が宜う御座いますよ。何を云つたつて、人間は生れた土地が一番ですからね。あれからもう、何年になりませう。
水落　丁度今年で七年になります。
お政　七年……そんなになりますかね。早いもんですね。尤も貴方は相變らずお若くつて被在るけど。
水落　お内儀さんこそ何時もお綺麗た……何か召上りませんか。
お政　有難う御座います。後で又何ですから、紅茶でも頂きませう。
水落　オイ、紅茶一つ。
お政　今日は御見物で。
水落　連中でね。
お政　仍且土木の方のお仲間の。
水落　ええ、久振りで東京の芝居小屋へ足を踏み入れまし

たよ。變りましたね。

お政　變つたでせう。私達でも時々考へて、今更のやうに驚ろく事があるんですから、七年も大阪へ行つて被在つたんぢやあね……何處に被在います。

水落　場所ですか。東の鶴の三に居ます。

お政　オヤ、ぢや私達は、貴方の頭の上に居るんですよ。

水落　何誰かと……。

お政　娘と……貴方、成程七年經つてる譯ですね。娘がもう十七になりましたもの。

水落　お小夜ちやん……でしたつけね。十七に、さうですかなあ、十七に……下谷も變つたでせうな。

お政　變りましたねえ。もう今、貴方が知つて被在る藝妓衆つたら、ホンの數へる程しかありますまい、何の消息(たより)をお聞きになりましたか。小染さんの。

水落　（急に眼を落して）イヽエ。何にも聞きません。今どうしてゐます。

お政　大連とかに居るさうですよ。

水落　大連に。（ト凝と物思はし氣の體）

お政　何でも大變ひどい暮しをしてゐるといふ事を誰だつたか、富松さんだつたか、誰だつたかに聞きましたよ。

（お政の娘お小夜と、文字繁とが姿を現はす。）

お政　あヽ、お小夜か來ました。お小夜。お小夜。

お小夜　あら、あんな處に居るわ、ちやあちやん、隨分捜したぢやないの。

お政　何か用かい。

お小夜　用つて、ないけど。

お政　（水落に）大きくなりましたでせう。

水落　（心を紛らされて）實際(まつたく)、これぢや途中で會つても判らない（ボーイに）紅茶をふやして。

お政　憶えてゐるかい。文字繁さんは憶えてゐるだらう。

文字繁　（入つて來た時からドギマギしてゐたが、斯う訊かれて、更に消えも入りたいやうな風情で）えヽ、水落さんでせう。

お小夜　水落さん？（ト思ひ出さうと努めてゐるらしい）

お政　お忘れになりましたか、千代龍さんですよ、貴方が小染さん時代に、可愛がつて呼んで被在つた。

水落　あヽ、千代龍、千代ちやんか。大きくなつたね。第一服裝(なり)が變つてゐるので、是はお小夜ちやん以上に判らない。

お政　それは御無理も御座いませんよ。是が藝妓にでもなつてゐると云ふなら格別、今のお師匠さんの姿になつてちやねえ。

水落　お師匠さん。

お政　えヽ、常磐津文字繁つて、土地で賣出しのお師匠さ

んでさあね。

文字繁　あら、女將さん。（ト漸く口を利く）

（水落は文字繁を見直す。文字繁は紅茶を匙で掻き廻してゐる。）

お政　（二人の樣子を見比べながら）變りましたよ。此人ばかりは本當に變りやうが烈しいんですからね。貴方が可愛がつて被在つた時分の俤は更になし、御覽になつてお解りでせう。

水落　幾歳になりました。

文字繁　二十二。

水落　二十二……するとあの時分は。

文字繁　十五でした。七年前ですから。

水落　（物の云ひつぷりを注意しながら）成程變りましたね。こんな、伏眼勝ちに物を云ふ人ぢやなかつたんだが、どうして斯う變つたんです。

お政　そりやあね、變るだけの譯はあるんですけど……。

文字繁　あゝ女將さん。

お政　いゝよ、大丈夫だよ。云やあしないよ。（水落に）まあ譯があるとだけにして置きませう。

お小夜　云はぬは云ふにいやまさる、ぢやないの。

お政　生意氣な事をお云ひでないよ。する事は出來もしない癖に、口ばかり生意氣になつて、本當に仕樣がない子だよ。まるで馬鹿にしきつてゐるんですよ。（と嬉しさうにお小夜を見てゐる）

お小夜　私が馬鹿にしてゐるんぢやない、ちやあちやんが勝手に馬鹿になつてるんだわ、親馬鹿ちやんりんつて、ねえ文字繁さん。

お政　これですもの……まあ何だいお前のその樣の眞ねやうは、鳥渡其方をお向き。

お小夜　いゝわよ、これで。

お政　これですもの、呆れてしまふぢやありませんか。

文字繁　いゝわねえ、お小夜ちやんは。（ト云つて下を向く。）

水落　どうかしたんですか。

お政　いえね、貴方も御存じでせう。此人の家があれでせう。ですから、お小夜の我儘がつらいね……。

水落　あゝさうですか。

お政　お小夜、御覽な、お前見たいな我儘な子は世間にたつてたんとありやしない。少しは文字繁さんをお見習ひ。

お小夜　ハイ……いやに今日は氣が強いのね。

お政　ツ。（ト舌打、態と怒つた顏をする。お小夜は一向平氣）

水落　私がお宅へ伺つた時分は、ホンのこれんばかりのお孃樣でしたがね。

お小夜　アラ。（ト急に眞顔になる）
水落　（感慨に堪へないもの丶やうに）イヤ實際變れば變るものですな。
文字繁　（靜に）あの、小染姐さんの事をお聞きになりまして。
水落　今、女將さんから聞きました。大連とかへ行つてるさうですね。（お政に）ひどい暮らしをしてゐるつて、どんな暮らしをしてゐるんです。
（此間、他の客は食事の濟んだものから、次第に立ち去る。）
（又入れ代りの客が來る。）
お政　どんな生活をしてゐるつて、よくは知りませんが、あの人も不運な人でしてね。あの時落籍された旦那は、間もなく別れて了ひましてね。
水落　どうして。
お政　旦那の方に飽きが來てしまつたんですよ。男つて薄情なものですね。あれだけ貴方と張合ひになつた小染さんぢやありませんか、そんなら少しは長續きがしさうなものなのに、一年經つか經たずですよ。もう外土地で浮氣をしてゐるんですからね。尤もあの人は、そんなに小染さんが氣に入つたんぢやない、謂はゞ貴方との意氣張りづくから、落籍してしまつた譯なんですけど、それにしたつて餘り切れようが早過ぎるぢやありませんか。小染さんも貴方の方へ行つてりやよかつたと、後で後悔してゐたらしう御座いますよ。
水落　どうです。紅茶をもう一ツ。
お政　いゝえ、もう澤山で御座います。餘り頂くと興奮して困りますから。
お小夜　（文字繁に）興奮だつて、生意氣な事を云つてるは。
水落　それでどうして大連へ。
お政　それから何んでも、須田町の袋物屋とかへ嫁に行つたさうですが、其處も工合が惡ろくつて、間もなく離縁になつたと云ふ事を聞きましたが、二度目の亭主、今の小染さんの旦那ですね、それが山師で、大連に見掛けた山があると云ふので、夫婦で出掛けて行つた迄はよかつたんですが、當て事と何とかで、見事向うから外れて來て、今ぢやまるで裏店住居をしてゐると云ふ事が、風の便りで私達の耳へも聞こえて來ましたが、人間は、殊に女は、最初の踏み出しが一等肝腎ですね。小染さんも貴方の方へ行つてゐれば、貴方も白粉にはおなんなさらなかつたらうし、當人だつて、どれだけいゝか知れやしなかつたんですのにね、今の苦勞も謂はゞ自業自得、何の事はない金色夜叉のお宮ですね、ホホ、、、それで貴方

は其後飛様は。
文字繁　お亡くなりになつたんですつてね。
お政　おや、お迎へになつて……文字繁さん、お前さん、よく知つてるね。どうしてお亡くなりになつた事迄……。
文字繁　ある方から伺ひましたの。
水落　小染は獲られる。家内は獲られる。二度ある事は三度あると云ひますから、今度は私の命でも取られるのでせう。ハハヽヽヽ。
お政　まあ、縁起でもない。鶴亀々々。それより貴方、水落さん、是非お近い内にお遊びに被來つて下さいな。文字繁さんにも來て貰つて、あの時分のお話でもしようぢやありませんか。偶には古戰場へも被來い。又何となく懷かしいものですよ。
水落　有難う。私も一度伺はなければならないと思つてゐるんですが、兎に角、事件のあつたお宅だけに何となくバツが惡るくつてね……今日お目にかゝつたのをキツカケに、これからチヨイ〳〵お邪魔に伺ひます。
お政　是非どうか、小染以上と云ふのを捜して置きますよ。
ホホヽヽヽ。
水落　孤獨者ですから、何分よろしく願ひます。
（下手の入口の處に、水落の義弟で鈴藤要之助と云ふのが姿を現はす。水落が認めると同時に文字繁が見る。
鈴藤はすぐ姿を隱す。）
水落　オヤ。
お政　何です。
水落　鳥渡失禮。（慌てゝ立去る）
お政　どうなすつたんだらう。
文字繁　………。
お小夜　解つた。
お政　何誰だい。
お小夜　水落さんの小父さんね。
お政　何がさ。
お小夜　此處に被在つた方。
お政　何を云つてるんだい。私はそんな事を聞いてやしないよ。
お小夜　私は一生懸命思ひ出してゐたんだわ。
お政　本當にお前は馬鹿だよ。
お小夜　馬鹿だつていゝわようだ。（唇をそらす）
（茶屋の出方が來る。）
出方　女將さん。お宅からお電話で御座います。
お政　オヤさう。何かしら。
出方　小笠原さんがお來でになりましたから、直ぐお歸り下さいますやうにつて、電話はもう切れました。
お政　アラさう。小笠原さんがお來でになつたんぢやすぐ

歸らなきやなるまい。お小夜。お前も歸るんだよ。
お小夜　あら、歸るの。
お政　歸らなきや仕樣がない。（出力に）自動車をさう云つて下さいな。
出方　ヘイ、畏りました。（去る）
お政　文字繁さん。お前さんはどうする。
文字繁　私も歸りますわ。
お政　さうかい。さうだね。ぢやアさうおし。併し、水落さんに挨拶して歸らないぢや惡るいね。あ、ボーイさん。先刻の申込みは取り消します。これはホンの少しですが。
ボーイB　どうも有難う存じます。
（水落と鈴藤とが入つて來る。鈴藤と文字繁との間に、或る緊張が起る。併し誰も心附かない。）
お政　水落さん、濟みませんが、今家から電話で、急に歸らなけりやならなくなりましたので。
水落　どうぞ御遠慮なく。
お政　どうか是非お近い中に。
水落　伺ひます。
お政　どうも御馳走樣。
お小夜　御馳走樣。
（文字繁は默つて會釋して出て行く。鈴藤は見送る。）
水落　（ボーイに）紅茶にウイスキー。（要之助に）どうしたんだ。掛けたらどうだ……。その東京に居られないわけと云ふのを聞かうぢやないか。
鈴藤　兄さん。私はもう駄目です。駄目なんです。こんな厄雜な人間がありますか。
水落　どうしたんだ。さう興奮しないで、落着いて話をしたらどうだ。私も歸つて來て未だろくに鈴藤の家も訪ねないが、何か家庭に不愉快なことでもあるんぢやないか。
鈴藤　家には何にもありません。唯私自身の運命が破壞されてしまつたのです。
水落　だから、どうして破壞されたか、其理由を聞かうぢやないか。血こそ通はないが、君は亡つた家内の弟、して見れば私にもタッタ一人の弟だ。及ばずながら力にもならうぢやないか。何なんだ。
鈴藤　女です。
水落　女。
鈴藤　可哀想な女なんです。淋しい、笑ふ事の出來ない女なんです。始終下を向いて物を考へてゐる女なんです。お酌の間に子供を生まされて、青春の時期を、もう母として暮らして來た、氣の毒な女なんです。
水落　藝妓か。
鈴藤　えゝ。尤も今は止めてゐます。二度引かされて三度目に又親達が藝妓に出さうとしたのを、泣いて賴んで漸

く常磐津の師匠にして貰つたのです。
水落　常磐津。
鈴藤　それには義理の父親の破倫極まる嫉妬から、藝妓にして多くの男と接觸させるのを、嫌つた爲もあるのです。それが又義理の母の嫉妬となつて、家庭に風波の絶え間がない、氣の毒な境遇に居る女なのです。
水落　其女は先の千代龍、今の常磐津文字繁と云ふ女ぢやないか。
鈴藤　えゝさうです。今こゝに居た女です。兄さんは御存じなんですか。
水落　お酌時代に知つてゐる。さうか、千代龍か。千代龍にお前が戀してゐるんだな。
鈴藤　さうです。
水落　千代龍はどうなんだ。
鈴藤　解りません。
水落　解らない？
鈴藤　千代龍は私の事を思つてないかも知れません。
水落　思つてゐないものを思つてゐるんだな。
鈴藤　さうです。
水落　思ひ通せるか。
鈴藤　忘れる事が出來ないのです。
水落　よろしい。そこで其續きを聞かう。それで私にも考へがある。ウヰスキーをもう一つ。

（暗轉）

同　下谷待合蔦岡の座敷

次の間附きの座敷。上手斜に床の間。正面に中庭を見る。出入り下手の廊下。
前の場面と同じ日の夜。
食卓をはさんで水落と鈴藤と文字繁、鈴藤は興奮して、文字繁は首垂れ勝ち。
舞臺明るくなる。
三味線。
水落　（盃を文字繁に差しながら）と云ふ譯で、どうしても君の事が忘れられないと云ふんだ。聞いて見ると、自分の口から云ふのも可笑しいが、可なり純な好い感情を持つてゐる。初心と云つて可い位なんだ。女の二十二と云へばもう立派に出來てゐる。斯う云ふ馬鹿正直な弟なんか、便りなく思はれるだらうが、もし君に要之助のことを何とか思ふ心があつたら、そのつもりでつきあつて貰ひ度いんだが怎うだらう。君に會へない淋しさに堪へられなくなつて、東京にも落ち着けず、と云つて、君に未練が殘つて、東京を逃げ出す事も出來ずに居ると云ふ、厄介な代物なんだ。私も繋がる緣で、さう何時迄、女で

失敗ばかりさせて置き度くないと思つて賴むんだが。ねえ、文字繁さん。どんなもんだらう。

文字繁　私見たいなものを、そんなにまで思つて頂くのは眞實に有難うございます。私も鈴藤さんの心はよく解つてゐます。私も出來る事ならと思つてゐるんですけれど、此方がねえ、餘り夢中でお騷ぎになるものですから、評判になりすぎて、それで困つてゐるんですの。

水落　何んにでも眞正直に夢中になるのが、此男の癖でね、何時もそれで失敗するんだ。が、今度は及ばずながら、私も附いてゐる事だし、お前の迷惑になるやうな事はしないから、時々は昔の話でもしにやつて來やうから、其時は賴むよ。

文字繁　眞實に被來つて下さいましな。あの時分は面白う御座んしたわね。私も未だそれ程苦勞を知りませんでしたし、貴方と小染姐さんに可愛がつて頂いて、もう一度あの時分に復つて見度いと思ひますわ。

水落　あの時分のことを考へると夢の樣だね。妹のやうに可愛がつてゐたお前さんに、今ぢや要之助が、命がけで惚れてゐるんだからな。併しこれで愈々眞實の妹となつた譯だ。

文字繁　えゝ、眞實に妹にして下さいましな。私、誰と云つて便りにする人がないんですから、心細くつてね。あの時分は兄さん〳〵つて、隨分貴方に甘垂れてましたのね。でも今兄さんと云ふと何だか變ですわね。

水落　變でもいゝ。仍日兄さんと呼ばれると、懷かしいやうな氣がするよ。あの時分から私はお前さんが好きだつた。

文字繁　私も兄さんが一番好きでしたわ。餘り兄さんが好きだつたもんで、岡惚れだつて云はれた事がありましたわ。さう〳〵、それで一度小染姐さんに叱られましたわ。

水落　そりや初耳だ。そんな事があつたのか。

文字繁　だつてあの時分、小染姐さんより、私の方が餘計會つてゐたでせう。それに私が丈長から半襟から、何から何まで貴方の紋をつけてゐたんで、尙更でしたわ。

鈴藤　盃を兄さんに返して上げたら怎うです。

文字繁　アラ、御免なさい。ツイ話に夢中になつて。（ト水落に差す）

鈴藤　（文字繁に差す）

文字繁　少し。（ト、受けて、口を當て、直ぐ盃洗に雪いで鈴藤に返す）

（鈴藤の顏付き稍不快なり。）

（お小夜が入つて來る。）

文字繁　おさよさん。此處に被來い。

お小夜　（文字繁と鈴藤の間へ坐つて見て）アラ邪魔たわ

ね。（ト立上つて席を移す）

文字繁　少つとだつて邪魔なことはありやしないわ。

お小夜　だつて、ねえ、貴方。

水落　知つてるのか。

お小夜　これを知らなきや、どうかしてゐるわ。

水落　そんなに評判なのか。

お小夜　大變な評判よ。

文字繁　だから、困つて了ひますわ。

鈴藤　そんなに困る事があるんですか。

文字繁　家へ知れると、眞實に困つてしまふんですもの。

鈴藤　それは濟みません。謝まります。これから評判を立てないやうにしますから……。

水落　それが好い。一口に隠れ遊びと云ふ位だからな。お前のやうに眞向から戀愛論を振りかざして、正々堂々と浮氣をしようとするから、何時も相手に逃げられてしまふんだ。

鈴藤　併し私の心は、決して浮氣ぢやないんです。何處迄も眞面目なんです。

水落　さう堅くなるのが不可ないと云ふんだ。

文字繁　少し敎へて上げて下さい、此方のにお目にかゝると、云つちや惡るいけど、何となしに氣寨まりで仕方かないんですもの。

鈴藤　貴方も窮屈でしたか。

文字繁　私の窮屈なことなんか關ひませんけど。

鈴藤　さうですか。どうも濟みませんでした。

文字繁　さう無暗と謝まるもんぢやありませんわ。男の癖に。

鈴藤　併し、私は一時でも自分の思つてる人に、不快な感情を持たしたと云ふ事に氣がつくと、謝まらずには居られないんです。

文字繁　怒つてばかり居るお客も困るけど、貴方のやうにさう謝まつてばかりゐるのも不可ませんわ。（水落に）何時かこんな事がありましたわね。此處たつだか彼方のお座敷だつたかで、貴方が、何だかで小染姐さんに怒つて、歸ると云つたのを、小染姐さんが足へ縋りついて留めた事があつたわね。歸る歸さないで、散々喧嘩した擧句が、漸く仲直りとなると、今度は小染姐さんが、私が足に噛り付いたのを、何故蹴飛ばしてくれなかつた。それだけ貴方は私に分け隔てをしてゐるんだつて怒つた事があつたわね。

水落　さう一々、細い事まで覺えてゐられるのは恐縮するね。

文字繁　あの時分のことなら、大概覺えてゐるわ。私此頃になつて沁々さう思ふわ。あんなのが本當に惚れ合つた

仲と云ふのだと。
お小夜　さう。さうかしら。私いやだわ。そんな荒つぽいことをするの。
文字繁　ぢやア鈴藤さんなんかの行き方が可いのね。
お小夜　アラいやだ。いやな人。隨分ね。自分の岡惚れの癖に。
水落　時に藝妓はどうしたんだ。
お小夜　今、すぐ參ります。面白いのよ、大變な近眼なの。
文字繁　誰。文松姐さん。
お小夜　え。
水落　文松。
文字繁　えゝ。貴方は御存じないわ。あの後ですもの。
水落　すると、あの時分の人と云つては、お前さん一人だね。
文字繁　私だけですわ。でも懷かしいでせう。
水落　昔の心持ちが、冴え返つて來るね。
文字繁　私も何だか、嬉しいやうな氣がしますわ。
お小夜　文字繁さんは、今夜ばかに元氣がいゝのね。
文字繁　さう。兄さんに會つたからでせう。
お小夜　岡惚れに會つたからぢやないの。
文字繁　そりやア勿論よ。（冷嘲の分子が含まれてゐる）
（鈴藤の嬉しさうな顏。）

水落　眞實に要之助のことは賴むよ。俺も何彼の力になるから。
文字繁　眞實に力になつて頂戴。私からもお願ひしますわ。
水落　可愛いゝ妹の爲だ。何處迄も力になるよ。
文字繁　ぢやア指切り。
水落　私がするのは可笑しいな。
文字繁　いゝわよ。お出しなさいよ。
（二人は指切りする。鈴藤の快々として樂しまぬ顏。）
（近眼の藝妓の文松が入つて來る。）
文松　今晩は、どうもありがたう。
文字繁　姐さん、お先きへ。
文松　文字繁さんかえ。聲で見當つけるなア不可いね。
お小夜　姐さん。眼鏡は。
文松　持つて來ちやア居るが、女の眼鏡はあんまりいゝもんぢやアないからね。
水落　かまはないからおかけなさいな。我々も客で來てゐて、顏を見知られないと云ふのも、口惜しい話た。
文松　オヤそれもさうですね。では見覺えのある眉間の黒子でも、見知らして頂きませうか。（ト、眼鏡をかけて）まア淸々した。初めまして。
水落　餘程ひどい近眼らしいぬ。
文松　えゝ、七度を掛けてゐるんですけど、まだよくハツ

キリしませんでね。
水落　お座敷なんかで、客と話をするのに困るでせう。
文松　えゝ、もうさう云ふ時は、大概なれでね。此處らあたりか畏だなと云ふ處へ見當をつけて、其處を見据ゑて話をしますから、さうお客様をテラす樣な事もありませんげと、困るのはお湯へ行つた時ですね。眼鏡はかけてはゐれず、知つた人が來てゐるのか、テンデ見當りがつかないんだから困りますよ。時によると、人の留桶へ足を突込んだり、毎日のことでお湯へ行くのが一番の苦勞ですよ。お湯と云へば、文字繁さん、お前さんもお湯がきらひだつてね。
文字繁　嫌ひつて譯もありませんけど。
文松　でも評判たよ。
文字繁　うちでお風呂が沸くんですもの。お湯へ行かないからでせう。
文松　だつて、どこかへ遊びに行つた時でも、お前さんだけは人と一緒に入らないと云ふぢやないか。それに湯上りの肌を見せた事がないと云ふのも評判たし、どう云ふ譯なんだい。
水落　小染とは始終入つてゐたぢやないか。
文字繁　えゝ、でも後では入らなくなりました。
水落　どうしてだい。

文字繁　なんでもないんです。唯ひとりで入りたいんですもの。
文松　世間では、何處か身體に曰くがあるんだらうなんて可厭なことを云つてるぢやないか。
文字繁　世間なんて何を云つたつてかまやしませんわ。とうせろくなこと云ひやしませんもの。
鈴藤　刺青をしてるんぢやないんですか。
文字繁　アラ、何だつてそんな事おつしやるの、刺青なんかしてやしません。見てごらんなさいな。
鈴藤　たゞさう思つたゞけなんですから、惡氣があつて云つたんぢやないんですから。
文字繁　いやですよ。そんな事を云はれて、さ、見て下さい。
鈴藤　氣に障つたら赦して下さい。全く何とも思はずに云つたんですから。
文松　此方は隨分氣が弱いんですね、文字繁さんも文字繁さんぢやないか。そんなにむきにならないでもの事ぢやないか。
文字繁　だつて餘りなんですもの。眞實にこんな事を云つちやあ厭ですよ。
鈴藤　濟みません。
文字繁　私、眞實は子供の時分に、盲腸炎でお腹を切つた

事があるんです。それからお腹に痕が殘つて、醜狀なくつて仕方がないんで、それでなりたけ他人と一緒に入らないやうにしてゐるんですわ。それだけですわ。

文松　眞實かい。

文字繁　眞實ですわ。

水落　私は又旦那の子供でも生んだ傷かと思つた。

文字繁　隨分ですわ。お願ひですから旦那の事なんか云はないで下さい。聞いてもゾッとしますから。

水落　薄情だな。

文字繁　だつて餘り情ないんですもの。

水落　何故だい。

文松　それだけは聞くのは止してやつて下さい。この人だつて辛いでせう。一遍は世話になつた旦那が、此人の親の慾心から、財產を滅茶々々にしたとは云へ、此土地へ時々落ちぶれた姿を見せるんですもの、堪らないでせう。だけど文字繁さん、お前さん又あの村越さんと縒を戾してゐるつてえ評判があるよ。

文字繁　アラ姐さん、何ぼ何でも。そりや私も、村越さんにはお氣の毒だと思ひます。でもそんな事をしたら、お父さんやお母さんに甚い目に會はなきやならないんですもの。義理が立たないんですけど、お腹で詫びて、會はないやうにしてゐるんです。

文松　さうかい。でも、お前さんと村越さんが、寶亭の二階で話をしてるのを、見たと云ふ人があつたけど、おや噓だつたのかしら。

文字繁　それは一遍行きました。往來で會つちやつたんです。マカロニとビフテキが喰べたいんだが、喰べさしてくれないかつて云ふんでせう。情けなくなつちやつて……それで家へ內證で……默つてゝ頂戴。

お小夜　旦那なんて、眞實にいやなものね。

文松　お小夜ちやん、又病氣にならないやうにおし。

お小夜　あら厭だ。

文松　何があら厭だい。旦那の話を聞くと直ぐ病氣になる癖に。

お小夜　厭な姐さん。アラ彼方。どうなすつたの。

水落　どうしたんだ。

鈴藤　僕は斯う云ふ話を聞くのが厭で〳〵堪らないんです。不純な、淺間しい、穢れ其ものゝやうな氣がして、不愉快で堪らないんです。

（お小夜は凝と鈴藤の顏を見てゐる。）

文字繁　ぢや私みたいな女も嫌ひでせう。

鈴藤　そんな事はありません。（慌てゝ云ふ）

文松　オヤ。（ト文字繁の顏を見る）

文字繁　いやな姐さん。眼鏡を外つて被在いよ。

(お政が來る。)

お政　どうもお闘ひ申しませんで。お小夜。お前彼方へ。小笠原さんの方のお座敷へも顔出ししなけりや、不可ないぢやないか。

お小夜　厭だわ。あんなお爺さん。

(ト鈴藤の顔を見てゐる。)

お政　又そんな事を云ふ。

文松　女將さん、今晩は。

お政　御苦勞樣。今夜はよく見えるね。

文松　何も彼も見透し、すつかり分つちやつた。先づ文字繁さんから幾らか取らなきや。

文字繁　厭だわ、姐さん。

お政　オヤ、文字繁さん、何か出す事があるのかい。

お小夜　ちやアちやん、分らないの。これよ。(鈴を振る眞似)

お政　オヤ此方が。

水落　(要之助に)　女將さんは知らないんだね。私の家内の弟です。鈴藤要之助と云つて××會社へ出てゐる男です。

お政　オヤ左樣で、始めまして。お兄樣には大變御贔屓になつて居ります。どうか貴方もこれを御緣に。

水落　どうか遊ばしてやつて下さい。さうして文字繁さんに來て貰ふやうに。どうか其處を宜しく。

お政　えゝ宜敷うございます。文字繁さん。お前さんもそのつもりで。

文字繁　えゝ。

お政　それはさうと、今年の春のお花見には、お二方とも是非。

水落　お花見と云ふのは。

お政　一昨年から始めたんで御座いますが、宅へ來て頂く方と、入つて貰ふ藝妓衆やお酌さん達と一緒に、一日暢氣に遊ぶんで御座います。

水落　ハア、そりや面白さうですな。

文字繁　(水落に)　是非被來いね。

お小夜　(鈴藤に)　貴方も是非ね。

お政　藝妓衆は皆な假裝するんで厶いますよ。

文字繁　(水落に)　私、何になりませう。

水落　私に聞くより要之助に聞いた方がいゝだらう。

文字繁　アラ。

(要之助は固くなる。お小夜は羞しさうな顔。文字繁は水落を睨む。併し其眼には媚がある。水落は唯嬉しさうに笑つてゐる。)

(藤色屋の銅鑼。拍子柝の音。)

――幕――

第二

向島百花園の花見

池を見晴らした百花園を上手に見た道具。四月の櫻の眞盛り。

待合の蔦岡でお客と出入りの藝妓を招待して、此園内に花見を催した日。藝妓半玉等は皆假裝してゐる。

幕明く。

瀨沼と栗原、伊東外にお客が二三人、藝妓の富榮、春若、雛子、花蝶、半玉のぼたん、豆奴、之れに蔦岡のお小夜に文字繁とが西洋鬼をして遊んで居る。お小夜は豕の假裝。文字繁は濱松風の小藤の假裝。文字繁は前の幕から見ろと、可也浮々してゐる。

間。

鈴藤要之助が寂しさうに出て來て、此有様を默つて見てゐる。恰度此文字繁が鬼になつてゐて、誰も捉らず、環の廻りを驅け廻つてゐるので、鈴藤の來たのを知らない。實は知つてゐるのだが、態と知らない顏をしてゐる。

春若　鈴さん。お入んなさいな。

お小夜　お入んなさいよ。文字繁さんが鬼だから、ジヤンケンさして……。文字繁さん。文字繁さん。

（文字繁は聞えない振りで驅け廻つて居る。瀨沼が立留まる。）

文字繁　あ、捉まへた。

瀨沼　不可ないノ〵。今のはタンマだよ。小夜ちやんが呼んでゐるぢやないか。

文字繁　あらさう。聞えなつかつたんです。貴方の鬼よ。

瀨沼　そんな馬鹿な奴があるものか。タンマだと云つてるぢやないか。

文字繁　こすいわ今更。貴方の鬼よ。

お小夜　文字繁さん。鈴さん。

文字繁　（漸く氣がついた振り）彼來い。遲かつたんですね。

鈴藤　先刻から來てゐたんです。

文字繁　さうですか。

お小夜　鈴さんもお入んなさいよ。

文字繁　お入んなさる。

富榮　お入んなさいよ。

春若　お入んなさいよ。

お小夜　文字繁さんとジヤンケンをなさい。

文字繁　アラ私は鬼ぢやないわ。瀨沼さんが鬼よ。

瀨沼　冗談云つちや不可ない。タンマだと云つてるぢやないか。

文字繁　捉まつてからタンマだなんて云つたつて、もう遅い事よ。貴方の鬼だから。ねえ伊東さん。

伊東　どうだか。

瀬沼　勝手な奴だな。ぢやあ鈴藤君、ジヤンケンだ。

（鈴藤は仲間へ入らうとする。）

（文字繁は四阿の方へ。）

お小夜　文字繁さん。どうしたの。

文字繁　私、ちよいと拔けてるわ、餘り駈けたんで、草臥れちやつたんだから。

お小夜　そんな事を云はずに入つて被在いよ。折角鈴さんも入るんぢやないの。

文字繁　でも眞實に草臥れちやつたんですもの。

鈴藤　私も止しませう。

お小夜　そら御覽なさいよ。鈴さんも止すつてえぢやないの。

文字繁　貴方は入つていらつしやい。私一人で休んでますから。

鈴藤　イヤ止めます。

（ト興奮して居る。）

富榮　變ねえ。

花蝶　私も止すわ。

栗原　一、拔けたと。

勝子　二、拔けたと。

お小夜　ぢやア止して何か外の事をして遊びませう。

（氣拙い沈默。）

（落花。）

栗原　酒が醒めて來な。おでんやでも襲つてやらう。

瀬沼　よからう。（伊東に）どうだい。

伊東　行かう。

文字繁　私も行くわ。

栗原　何だい、お前さんは何も俺達と一緒に來る事はあるまい。

文字繁　一緒に行つたつていゝぢやないの。

栗原　まあ御緩り。

（鈴藤と文字繁とお小夜を殘して、一同去る。）

お小夜　（其場を扱ひ兼ねて）どうしたの、二人共。變ねえ。鈴さん。何か仰有いよ。

文字繁　又何か怒つてることでもあるんですか。默つてちや分らないぢやありませんか。

鈴藤　文字繁さん……僕はどうしても君の心は解らない。

文字繁　解つてゐるぢやありませんか。

鈴藤　解らない。君の眞實の心は少ともも私には解らない。

文字繁　さう。解らなけりや仕方がありません。

鈴藤　それ、さう云ふ風に、貴方の心には熱がないんだ。

文字繁　だつて解らなけりや仕方がないぢやないの。
鈴藤　何故解る樣にしてくれないんです。
文字繁　だから解るやうに云つてるぢやありませんか。
鈴藤　眞實に僕と一緒になつてくれますね。
文字繁　えゝ。親さへ承知してくれたら、何時でも一緒になれますわ。
鈴藤　貴方はどうなんです。
文字繁　私は、一緒になれるものなら一緒に成りたいと思ひます。でも親が承知してくれなかつたら、それつきりですわ。貴方もさうなつたら、それ迄のものと諦らめて下さい。
鈴藤　さうしてどうなるんです。
文字繁　今迄通りに會つて下さい。其中に私に旦那が出來たら、改めて貴方とも浮氣をします。それで解つたでせう。
鈴藤　僕の心はよく解つてゐるんでせう。
文字繁　えゝ、解つてます。ですけど、私、今はどんな事があつても、浮氣が出來ない身體に成つてゐるんですから、旦那もないのに子供でも出來たら、私、殺されちまふかも知れないんですもの。
お小夜　全く文字繁さん家のお父さんやお母さんは、譯が解らた過ぎるわね。（鈴藤に）そりや全く文字繁さん可哀想なのよ。蹴飛ばされる時があるんですもの。
文字繁　これがお小夜さん見たいに、眞實の親子だつたら、私だつてどんな我儘だつて云ひます。義理の親なんですから、これまで大きくして貰つた恩を忘れて、自分勝手の事をしちや、世間に濟まないと思ひます。ですから貴方も、私と一緒になりたいと思つて下さるんでしたら、早く親の方へさう云つて下さいな。さうして約束が出來たら、私も其氣で、もう一度出るにしても、そのつもりで稼ぎますから。岡惚れも作へません。貴方に心配をかけるやうな事はしませんから、貴方も落着いて、勉強して下さい。唯家の親は慾張つてますから、萬と云ふお金は吹掛けるだらうと思ひます。それだけは覺悟してゐて下さい。
鈴藤　…………。
文字繁　解つて、分つたでせう。未だ解らない。
鈴藤　解らない。
文字繁　どうして。
鈴藤　てんで、出來ない相談を持ちかけてゐるんだ。僕の今の身分で萬と云ふ金が、出來るか出來ないか、考へて見たつて知れさうなものだ。
文字繁　ぢやあ、どうすりやいゝの。私だつて困つちやうぢやないの。

鈴藤　…………。

（お小夜は口も出せず唯困つてゐる。）

文字繁（お小夜に云ふともなく）でもねえ、いくら家の間違か、萬以上のお金でなきゃ承知しないと云つたつて、評判の私が、どうしてもあの人と一緒になり度いつて云つたら、親たつてどうすることも出來ないだらうと思ふわ。萬岡さんでも、外でも云はれて居るわ。もし親が餘り酷い事をするやうだつたら逃げて來いつて、私の籍だつて、抜いて抜けない事はないんですもの。私の心さへ決つてれば、大丈夫だと思ふわ。

鈴藤　眞實に、眞實に大丈夫。

文字繁　大丈夫よ。お小夜さんが證人よ。私がパーツと出來ない性分だから、貴方もたよりなく思ふんでせうけど、私は大丈夫よ。ですから兎に角、親の方へ話して下さい。それからの話たつて、出來るぢやありませんか。いゝこと。解つてね。

鈴藤　解つた。

お小夜　握手をなさいな。

（兩人握手。）

文字繁　おやア私、彼方へ行つていゝでせう。

鈴藤　何故。どうして。

文字繁　どうしてつて、こんな處を見られると、又お母さんが喧しいんですもの。今日はお母さんも呼ばれて來てるんですから。それでなくつても私を怪しい／＼つて、睨んでゐるんですもの。後で又、ゆつくりね……。今日は兄さんは被來らないんですか。

鈴藤　來るとは云つてゐたが。

文字繁　をかしいわね。私が兄さんに大變だつて云ふ評判なのよ。

お小夜　貴方聞いて。

文字繁　聞いたわ。それこそ眞實に飛んでもねえ奴だが、お宅でも女中衆が私をからかふのよ。義兄さんばかり被來つて、貴方が少とも來ないからだわ。

鈴藤　兄さんはそんなに行くんですか。

文字繁　えゝ、大抵は毎日のやうよ。あなたはお家が違ふから御存じないわね。毎日逢つてるのよ。さうしちや昔の話をしてるの。知らない人が見たらさうだと思ふかも知れないわね。……義兄さんが被來つたら、一緒にね。彼方に行つてよ。後でね。（去る）

（落花。鈴藤その後ろ姿を見る。）

お小夜　よかつたわねえ。

鈴藤　なにが？

お小夜　嘲しが解つて安心したでせう。

鈴藤　ウ、ン。（生返事）

お小夜　どうかなすつて。
鈴藤　未だよく判らないんだ。
お小夜　アラ、どうして、あんなによく判つて居るぢやありませんか。
鈴藤　雖然、あれを當人が本心で云つてゐるのか、どうだか、僕には其邊がよく判らないんだ。
お小夜　困るわね。
鈴藤　兄さんには、一體どう云ふ返事をしてゐるんだらう。
お小夜　どう云ふ返事つて？　私は別に聞かないけど。
鈴藤　そんなに大變な評判なのかい。
お小夜　義兄さんと？　えゝ。でもその事なら別に貴方は心配する事はないと思ふわ。
鈴藤　そりや勿論だが、一體文字案は僕をどう思つてゐるんだらう。
お小夜　惚れてるわ。
鈴藤　惚れてるかしら。
お小夜　えゝ、大丈夫よ。
鈴藤　僕の思つてゐる程思つちやゐないね。
お小夜　さうねえ。鈴さんのは惚れすぎちやうからいけないのよ。
鈴藤　俺は只文字案の事ばかり思つてゐる。もう此頃ぢや仕事が手につかないんだ。

お小夜　困るわね。
鈴藤　又東京を逃げ出さうかしら。
お小夜　いけないわ、そんな事をしちやア。
鈴藤　苦しくて堪らない。
お小夜　こんなに思つてゐるのにね。此方で思ふ心は其人に通じず、其人の心は又先方に通じず、世の中つてものは、色々なものね。
鈴藤　酒だ。フンダンに酔拂つてやれ。

（去る。）

（お小夜は見送つて太息。）

（落花。）

（文松と君八が池を渡つて來る。）

（文松は女學生の假裝。眼鏡をかけてゐる。）

君八　駄目だよ。お前さんは眼が近いから、何にも見えやしないんだ。
文松　だつて今日は眼鏡をかけてるよ。
君八　いくら眼鏡をかけたつて駄目だよ。あれが解らないやうぢや眼鏡なんか伊達た。
お小夜　あら、君八姐さん。
文松　お小夜さん。お前さんどうかしたの。
お小夜　え。
文松　顏色が悪るいよ。

君八　顔色が悪るいつて。
文松　御覧な、仍且私の眼は確かだらう。
お小夜　別にどうもしやしませんけれど。
君八　御覧な。お前さんの眼なんか駄目だよ。あの伊東さんと文字繁の間が解らないやうぢや、迚も駄目々々。
お小夜　えゝ、伊東さんと。
文松　又ね、此慌て者が何か云ひ出したんだよ。文字繁さんにやあねえ。お小夜さん。
お小夜　えゝ。
君八　何があるか知らないが、伊東さんには確に岡惚れしてるよ。今日の浮付き方を御覧な。
お小夜　眞實ですか。
君八　眞實だつたら。
文松　そんな事はありやしないよ。お前さんは何にも知らないんだ。文字繁には別に命がけで惚れてる人があるんだよ。
君八　ところが左にあらず。あんまり男の方がしつこいんで、文字繁の方ですつかり厭氣がさしてゐるんだとさ。私はどんな男だか知らないが、文字繁の口から嫌ひだと云ふ事を聞いたんですもの。
文松　本當かい、お前さん。
君八　本當だとも。

文松　まあ、世間てものは何を云ふか解らない。水落さんを旦那だなんて云ふ世間なら、伊藤さんの事も……お小夜さん。何でもないよ。
君八　近眼は困るねえ。
文松　慌て者には困るね。
君八　何を云つてるんだい。
文松　喧嘩をしようか。
二人　ホヽヽ。
（伊東、瀬沼、富榮、文字繁と來る。）
君八　オヤ、二組お揃ひで、文松さん。怎うだい。私の云つた事には間違ひはあるまい。文字繁さん、いくら出す。
文字繁（醉つてゐる）いくら出すつて、私に出す事なんかありやしませんわ。
君八　何んだい。そんなら今模擬店で何と云つた。伊東さんに岡惚れしたと、よくのめ〳〵とあんな事が云へたね。
文松　文字繁さん。眞實かい。
文字繁　眞實は眞實よ。でも伊東さんの方ぢや何とも思つてくれてやしないのよ。伊東さん、さうでせう。
伊東　お前こそ、鈴藤君にあんなに思つて貰つて……好い身分だ。
文字繁　よして頂戴よ……鈴さんの事なんか。鈴さんの事なんか私は少とだつて惚れてやしないわ。

お小夜　文字繁さん。

文字繁　堪忍して頂戴。私、伊東さんに岡惚れしちやつたの。

お小夜　そんな事を云つて、水落さんに濟むと思つて？

文字繁　水落さんは水落さんよ。私の兄さんですもの、鈴さんは別よ。

富榮　旦那ぢやないのかい。

文字繁　さうだつてね。馬鹿な事を云ふ人もあるのね、人の心も知らないで、でも眞實に好い兄さんよ。もうね、此頃ぢや毎日、私の顔を見ないぢや納らないつて。妹の情と云ふものを、まるつきり知らずにゐたが、斯うも可愛い者とは思はなかつたつて、眞實に可愛がつてくれるのよ。私も莫迦に嬉しくつてね。

君八　出來たての岡惚れは、景氣が惡るくなりましたね。

文字繁　あら伊東さんは仍且岡惚れよ。岡惚れしたつていいでせう。外に好い人があつたつてそんな事は關はない。岡惚れつて云ふものはそんなもんぢやない。色がある、承知で惚れた纏綿慕つてね。伊東さんは岡惚れ、水落さんは大事の兄さん。

文松　鈴藤さんは。

文字繁　唯の人。

お小夜　（怒つて）文字繁さん。

文松　人の心は解らないものだね、文字繁さん。今日のお前さんの小藤の假裝は、丁度今のお前さんに嵌つてるね。

文字繁　何故。

文松　此兵衞が何と云ふ。そちはつれなき糸なき三味よ、ひくにひかれぬ、我思ひ、片思ひは辛いものだよ。

文字繁　あーら嬉しやな、あれに戀しき人のお立あるが、松風と召され候ぞや。（身振り）

瀨沼　餘程今日はどうかしてゐるぜ。こんなに醉つたのは近來にない事だが。

富榮　何か餘程嬉しいことでもあるんでせうよ。

文字繁　違ふ。嬉しいから醉つたんぢやない、醉つたから嬉しいのよ。醉つた酒なら醒めずばなるまい。お酒が醒めると嬉しい事もなくなつちやうの。

富榮　謎見たいな事を云つてるよ。

文字繁　こがれ／＼しお姿と、繪にはかゝせはせぬものを、のろけざ惚れたが判るまいつてね。（自分の二の腕を摑んで）見せて上げませうか。

瀨沼　あゝ白粉彫だな。畜生、見せろ。見せろ。

文字繁　厭アよ。伊東さん／＼。

（ト逃げ廻る。）

（鈴藤と栗原と春若とが來る。）

瀨沼　失敬々々。オイ又一廻りして來よう。

伊東　よからう。
君八　文字槃さん。おいでな。
文字槃　えゝ行くわ。富榮さんも被來い。
　（去る。）
　（鈴藤、栗原、春若、お小夜、文松が殘る。）
栗原　（誰に云ふともなく）どうしたんだ。
お小夜　鈴さん、貴方、文字槃さんを止さない。
鈴藤　え？
お小夜　（泣き聲になつて）お願ひだから止して頂戴な。私、眞實にあんな人とは思はなかつた。賴みますから忘れて下さいね。
栗原　一體どうしたんだ。
文松　伊東さんに岡惚れしてゐるんですつて。
春若　さう云つて？
栗原　お前知つてゐるのか。
春若　えゝ、先刻私に祕密話をして、私、伊東さんに岡惚れしちやつたつて。
鈴藤　眞實ですか。
文松　眞實です。鈴藤さん。私達だつて口惜しい。口惜しいけど、あんな了簡の女は貴方がいくら思つたつた、迚も末の見込みがありません。お小夜さんの云ふ通り、今の中に諦めて下さい。私達からもお願ひします。

栗原　斯うなつてくると俺も云はなければならない。鈴藤君、惡るい事は云はないから、文字槃たけは止し給へ。あの女は全然君を思つて居ないから、君に云つてゐる事と、僕等が聞いてゐる事とは、まるで話が違つてゐるんだから。
鈴藤　話が違つてゐるとは……。
栗原　先刻西洋鬼をしてゐる時でも見給へ。君が入れば直ぐと脫けてしまふ。羽子を提へた時でも、唯伊東にばかり返事を求めてゐる。現に今も伊東さん〳〵と伊東の名ばかり呼んでゐたぢやないか。
文松　惡るい事は云ひません。文字槃さんはお止しなさい。貴方の心はまるつきり、あの人に分つちやゐないんですから。
お小夜　私ちやあちやんに云ひ付けてやるわ。私の居る前で、伊東さんに岡惚れしたつて、そんな法つてあるでせうか。鈴さん、口惜しいでせうけど止して下さい。もう逢はずに居て下さい。ね、ね。
　（蔭でデカンショを唄ふ聲。）
　（鈴藤は無言。）
春若　鈴藤さん。兄さんが被來いましたわ。
栗原　あつちい行かう。
　（栗原と春若は去る。）

（水落が來る。）

水落　（元氣好く）ヨウ。此處にゐたな。お小夜ちやん。よく似合つたぜ。文松さん、眼鏡を活かす爲の女學生は考へたね。ハヽ、、、。どうした、要之助。文字繁は何になつた。早く來ようと思つたんだが、ツイ用が立て込んでね。文字繁は怎うしたんだ。え……オイ、何をボンヤりしてゐる……文松さんもしほれて……お小夜ちやん、泣いてゐるね。

お小夜　小父さん。（取りすがつて泣く）

水落　どうしたと云ふんだ。

文松　私が云ひませう。口惜しい事があるんです。あの文字繁さんが、外に岡惚れが出來たんです。私達は何にも知りませんでしたが、さう聞けば思ひ當ります。先刻もお鮨屋の處で、伊東さんのお鮨は私が取つて上げるんだつて、大騷ぎをしたのも其爲だつたんです。

水落　伊東さんと云ふんだね。

文松　今此處へ鈴藤さんが被來るまでも、唄つたり踊つたり一人でハシヤいでゐるのを見て、私もお小夜さんもどんなに口惜しかつたか知れやしません。それにどうでせう。鈴藤さんの顏を見ると、直ぐ向うへ行つてしまつたぢやありませんか。

水落　（間。次第に激昂して來て）よし。それが事實なら文字繁の奴に、恥面を搔かせなきやならない。文字繁は何處へ行つた。滿座の中で罵倒してやらないぢや、要之助よりも私の胸が納まらない。お小夜ちやん。文字繁の居る處へ連れてつてくれ。

鈴藤　兄さん、待つて下さい。兄さんがお怒りなさるのも無理はありません。私も先刻それと聞いた時は、一時に嚇としました。が、よく考へて見ると、私があの人に惚れてゐると云ふことを、委しく知つてゐる、お小夜さんや文松さん……私の事を誰知らぬ者のない大勢の前で、外の人の惚氣を云つたのは、何か當人に深い事情があるんぢやないかと思ひます。未練なやうですが、もう一度當人の心を、聞いて見て下さいませんか。大勢の前で恥を搔かすのは、何ぼ何でも文字繁が可哀想です。私の恥や苦しみは、酒に紛らしてゞも辛抱します。文字繁を酷い目にあはせないで下さい。あれは氣の毒な身の上の女なんですから。

（文松の同情はしてゐるが呆れた顏。お小夜は唯泣いてゐる。）

水落　（深く考へて）よし。では此處へ文字繁を呼んで、しつかりとした本人の腹を聞いて見よう。お小夜ちやん。今聞く通りだ。此處へ文字繁を呼んで來ておくれでないか。私だと云つて。

文松　さうですね。水落さんと聞いたら文字繁さんも來るでせう。又來ないやうだつたら仕方がない。お小夜さん。私も行かう。

（兩人去る。）

（間。）

水落　ところでお前に聞いて置くが、此處へ文字繁が來て、どうしてもお前に氣がないと解つた時は、お前はどうする。その覺悟を聞いて置き度い。

鈴藤　（極めて長き間）會ひません。

水落　會はないか。

鈴藤　（稍長き間）私が會ひ度いと思つても、向うで會つてくれないだらうと思ひます。

水落　さうして諦められるか。

鈴藤　判りません。……諦めなければならない事です。けれども私には諦められないだらうと思ひます。

水落　それでお前はどうする。

鈴藤　獨りで思つてます。忘れる事が出來るやうになる迄思つてゐます。……何時忘れられるか、それは私には判りません。（急に昂奮して歩き廻る）

水落　文字繁が來た。私が呼ぶ迄彼方へ行つてゐろ。

鈴藤　ハイ。

水落　惡るいやうにはしないから、下らない考へを出すんぢやないぞ。

（鈴藤は無言で挨拶して去る。）

（文字繁飛ぶやうにしてやつて來る。）

文字繁　（懷かしさを十分言葉に含ませて）アラ兄さん、（ト縋り寄つて）被來い。遲かつたのね。（水落の不機嫌なのに心附き）御免なさい。私、今日少し醉つちやつたの、（嬉しさうに）でも醉つたんで嬉しかつたわ。

水落　それは嬉しいだらう。岡惚れが來てゐるからね。

文字繁　岡惚れ？　誰の事。

水落　白化くれるのかい。伊東さんと云ふ岡惚れが出來たらう。

文字繁　アラ伊東さん。

水落　嬉たと云ふのかい。

文字繁　イ、エ本當です。本當の事を云ひます。私、伊東さんに岡惚れしました。だつて私、淋しいんですもの。

水落　何、何だつて。

文字繁　私には、本當に心を打ち明けるお友達と云ふものがないんです。皆さんに評判の惡るい事も知つてゐます。私が本當に賴りに思ふのは、兄さん、貴方だけなんです。

水落　賴りになるのは私。岡惚れには別な人と云ふ譯かい。

文字繁　でも兄さんは、何處迄行つても兄さんですもの。

（淋しさうに云ふ）

水落　え。

文字繁　私たつて女です。心を紛らすものが欲しう御座んすわ。お客様に教はつて、寝衣を裏返しに着て寝る事も覺えました。夢でも見なけりや、淋しくつてゐられないんですもの。

水落　それで伊東さんに岡惚れしたと云ふ譯かい。

文字繁　えゝ、でも唯岡惚れしたゞけです。浮氣をしようとは思ひません。私は浮氣の出來ない身體なんですもの。

水落　そこで要之助は怎うなるんだ。それ程心に淋しい事のあつた時、要之助の事を少しも思つちやくれなかつたのか。それでお前濟むと思ふのかい。

文字繁　だつて……鈴藤さんは、親が承知しなかつたら、いくら私が思つても、どうする事も出來ないんですもの。

水落　見え透いた嘘は吐きつこなしに仕樣ぢやないか。如何に詭辯の流行る世の中でもそんな辯解を得心して聞く私ぢやない。仍且お前の心は變つて來たんだ。

文字繁　濟みません。本當の事を云ひます。私、どうしても鈴さんを思ふ事が出來ないんです。嫌ひぢやありません。鈴さんの心も好く解つてゐます。雖然、氣が合はないと云ふのか、性が合はないと云ふのか、私、どうしても鈴さんを思ふ事が出來ないんです。

水落　それで、外に岡惚れを拵らへたと云ふのか。

文字繁　………。

水落　私からも遠ざからうと云ふんだね。

文字繁　えゝ。

水落　私までが捨てられると云ふ譯なんだね。恰度小染の時のやうに。

文字繁　（怨めし氣に）何故そんな事を仰有るんです。私が小染姐さんでしたら……小染さんでしたら、決して兄さんを、捨てたりなんかしやしません。

水落　どうだか。要之助が嫌はれてる具合ぢやアね。

文字繁　眞實の事を云ひます。私、兄さんと鈴藤さんとの事は、すつかり別の事にして考へてゐます。それが惡るかつたんです。私が大騷ぎをしすぎた爲に、世間に兄さんの變な評判を立てさして濟みません。勘忍して下さい。

水落　併し私は其事は何とも思つてやしない。お前の爲だ……お前と要之助の爲だ。年甲斐もないと云はれやうが、お前の爲に云はれる事なら、何と云はれても、笑はれても構はない。それ程私はお前が可愛くつて仕方がないのだ。

文字繁　私も兄さんが一番好きです。

水落　それ程好きな兄さんなら、何故心の淋しい時、夢の見度い時、心を紛らしたい時に、私を思ひ出してはくれないんだ。外に好きな人を拵らへる、お前の心が判らな

い。

文字繁　兄さんは眞實に怒つて被在るんですか。

水落　怒つてゐる。飼犬に手を嚙まれたやうな氣がする。お前は兄さんが好きぢやないんだ。

文字繁　イイエ好きです。誰より彼より、兄さんが一番好きなんです。好きなればこそ……。でも眞逆、兄さんを岡惚れとも云はれませんもの。

水落　……だが、外に岡惚れが出來たと聞いては、私にしても好い心持ちはしない……勿論私は嫉妬で云ふんぢやない。要之助の爲に云ふのだ。さうだ。無論要之助の爲に云ふのだ。此頃世間で私とお前との事を、何とか彼とか云つてゐるのを聞かないでもない。雖然、私の心は要之助の爲に働らいてゐるんだ、だから、旦那と云はれやうが、岡惚れと云はれやうが、そんな事には頓着はない。

文字繁　おやア兄さんを岡惚れにして關ひませんか。

水落　關はない……。

文字繁　ぢや私、兄さんを岡惚れにします。兄さんも岡惚れになつて下さい。

水落　……併し眞實の岡惚れぢやないよ。岡惚れのつもりだよ。

文字繁　えゝ？

水落　でないと、世間の評判がうるさい。

文字繁　えゝ、それは兄さんと私の心にある事だから……ああ嬉しい。私本當は兄さんを岡惚れと云ひ度かつたんですの、でも今迄が兄さんでせう。だからツイ、一寸伊東さんに岡惚してしまつたんです。

水落　浮氣者。

文字繁　浮氣者は甚いわ。兄さんの岡惚れは眞面目よ。これから又兄さんの紋をつけても宜う御座んすね。

水落　宜いとも。

文字繁　兄さんの惚氣を云つても宜う御座んすね……好いものを見せませうか……でもお酒が醒めてしまつたから……ぢや本當ですよ。

（君八が來る。）

君八　オヤ。

文字繁　アラ。

君八　どうも御邪魔様。

文字繁　アラいやな君八姐さん。

君八　旦那。唯ぢや濟まされませんよ。

水落　何を下らない。

君八　御馳走様。（去る）

文字繁　又、必と何か云つて歩くのよ。

水落　困つた女だ。

文字繁　眞實に困つちまひますわ。又パーッとするのよ。

水落　（急に心附いたやうに）併し云はれても差支へはないさ。眞實の岡惚れと云ふのぢやなし、要之助の爲を思つてしてゐる事なんだから、要之助との縁が纏まるまでの話だ。ねえ、さうだらう。

文字繁　（急に夢から覺めたやうに）さう……さうでしたわね。

水落　（慌て出した調子て）で、どうなんだ。要之助の事は。

文字繁　え、どう云ふ話の續きでしたつけ。

水落　え。（文字繁と顔を見合せて無意味に笑ふ）ハハ、ハ、、。

文字繁　（同じく無意味に）ホホ、、、。

（間。）

水落　ねえ、怎うだらう。要之助の事は、もう一度思ひ返して見てくれる氣はないか。彼れは本當にお前の事を思ひ詰めてゐるんだからね。

文字繁　え丶、それは好く判つてゐます。

水落　判つてゐたらどうだらう。お前さんが伊東さんに岡惚れしたと聞いて、悲しい程失望してゐるんだが。

文字繁　伊東さんの事は、もう何でもないと云つて下さい。でも、ねえ。私の事をそんなに思つて下さるのは、有難いと思ふんですけど、私の心が知れないからつて、仕事も手に付かないと云ふやうぢや、行く先々が心細くつて仕様がないんですもの。

水落　然し、それだけお前の事を思ひ詰めてゐると云ふ事は、買つてやつて貰ひ度い。當人だつて馬鹿ぢやなし、お前の心が判つて、何か確かな約束でも出來れば、必と眞面目になつて働くだらうと思ふ。

文字繁　眞面目に仕事をして下されば、私はそれが一番何よりですわ。

水落　要之助の云ふ事を、聞いてやつてくれるね。

文字繁　え丶、（稍曖昧な調子）唯私ん家の親がねえ。

水落　それはお前の了簡一つにあると思ふ。若し私に出來る位の事で、お前の親が承知してくれるんだつたら、私が總てを引受けよう。何にもない。唯、何時も云ふ通り、私は小染を人に取られた。打ち込むものが何にも無いんだ。此世の中に自分と云ふものを、家内は死なした。要之助は家内の弟、お前は私が妹のやうに可愛がつてゐた女。此二人の戀を守り立て丶、樂しい生活に入らせるのを、せめて人としての仕事としたいのだ。解つてゐるだらうね。

文字繁　え丶、それはよく判つてますけど、貴方にお金を出して貰つて、鈴藤さんと一緒になつた處で、心から思へるやうになるか怎うか……うまく行かなかつたら、貴

方にお氣の毒だと思ひます。

水落　併し、どんなに思つてゐない男と女でも、夫婦になれば、自然とそこに情愛が起つて來るものさ。

文字繁　でも貴方にすみませんわ……そんなにお金を出して頂いちや……これが貴方でしたら、私にも考へがあるんですけど。

水落　考へ？

文字繁　えゝ、其代りすみませんが、貴方にも悪人になつて貰ひます……私が姿をかくしてしまへば、家の方はそれつきりですものね。今迄にも随分酷い目に會はされて來たんですもの、裁判に出したつて勝てると思ひますわ。

水落　（明かに惑亂されて）併し……そんな事を云つて……そんな事を云つたつて、私がどうする事も出來ないぢやないか。

文字繁　ですから仍且……何時迄云つても同じねえ。鈴さんと一緒になる……（考へ込む）

水落　あ、要之助が來た。頼むよ。

（鈴藤が來る。）

水落　要之助、安心しろ。話は解つた。

鈴藤　えゝ本當ですか。

水落　これは決して、お前が厭なんぢやない。唯お前が餘り熱中し過ぎて、仕事も手に附かない程夢中になつてゐるのが、便りないと云ふのだ。これは私から云ふ。仕事だけは眞面目にやつてくれ。でないと四方八方が困る譯だから。

鈴藤　えゝ。やります。必と眞面目に、今迄の二倍も三倍も働いて見せます。

文字繁　それで私も安心したわ。眞實に勉強してくれて？

鈴藤　する。必とする。

文字繁　なら私も必と。

鈴藤　約束したよ。

文字繁　貴方も約束しましたよ。

鈴藤　握手。（手を出す）

文字繁　しませう。

（握手。水落の羨ましさうな樣子。）

鈴藤　必とだよ。

文字繁　私は大丈夫だけど、私は今迄の身分が身分ですから、お宅で皆さんがどうだかと思ひます。それは貴方が締めて下さい。私は自分だけの覺悟を決めますから。

鈴藤　家は大丈夫だ。僕の女房は僕が選んで差支へない事になつてゐるんだから、親父や母親がグヅ／＼云つたら別になる分の事さ。僕は其方がいゝと思ふ。少し遠いけど郊外へ家を持つた方がいゝと思ふ。さうは思はない。

文字繁　（次第に浮されて來て）私は何處でも貴方の氣に

入つたところで宜う御座んす。
水落　（冷に）　一體それは何年計畫たね。
鈴藤　えゝ。
水落　文字繁の籍を拔くには可なりな金が要るんだが、それは一體どう云ふ事になるんだ。
鈴藤　それは兄さん……
水落　私の手で出來るだけの事はしよう。又するつもりだ。併し若し不足の場合に怎うなる。お前のお父さんが出して下さるかね。
鈴藤　…………。
水落　第一お父さんが斯う云ふ緣組を御承知なさるか、これは少し考へものだと思ふがな。
鈴藤　ハイ……（と云つた切り後は口が利けない）
水落　お前と私とは兄弟とは云ふものゝ、家内が歿くなつて見れば、それ程の深い緣はない譯だからな。その私がお前の結婚問題に深く立入ると云ふ事は、果してどうだらうかと思はれる。
文字繁　お宅が喧しいんですか。
水落　私は少し考へて來た……。
文字繁　ぢやァ駄目ですか。
水落　待つてくれ。少し考へる。
（鈴藤は不意に崖から突き落されたやうな心持て、絕望の悲哀の囚となつてしまつてゐる。眼さへ泪にぬれてゐる。）
文字繁　（鈴藤に）　貴方のお父さんがそれだつたら、お母さんは尙更でせうね……さうしたら無い緣とあきらめるより外仕樣がないわね。
鈴藤　兄さん。駄目でせうか。
水落　…………（復讐の快味を貪つてゐるらしい）
鈴藤　駄目ですか。（泣き聲）
文字繁　駄目よ。
鈴藤　駄目だ。（絕望）
（彼方へ走り去る。）
水落　（此聲に我に復る）　要之助、待て。云ふ事がある。お前は此處に待つてゐてくれ。
（跡を追ふ。）
（間。）
（文字繁は考へに沈む。）
（文字繁の先の旦那、村越淸三郞が見すぼらしい姿でやつて來て、文字繁の前に立つ。）
文字繁　アラ。
村越　今日は洋食が食べたさにやつて來たんぢやない。お前の假裝が見度かつたので、混雜に紛れて入つて來たんだ。

文字繁　旦那、村越さん、貴方そんなみすぼらしい服裝(なり)で、場所もあらうにこんな花見の場所へ出て被來つて、誰かに見られたら怎うなさいます。私の耻は兎も角も、貴方のお名前に係るぢやありませんか。

村越　耻や外聞を思つて、乞食して居られるだらうか。今の私は乞食も同じ心なんだ。名前を惜んだのは、昔、お前を引かした時分の事だ。

文字繁　夫だつて……

村越　まアさ、世間ぢや後ろ指をさして笑つてゐるだらうが、俺に云はせりや、笑ふ貴樣が可笑しいそだ。動かす事の出來ない人の心を兎にも角にも動かしたんだ。家一軒潰した位が何の事だ。人の心も極めず、中途半端なことで妥協してゐる世間の奴が、俺から見ればズツと可笑しい。ダガ今日の拵へはよう似合つたなア。

文字繁　さうですか。

村越　蔦間の花見も、俺が云ひ出したので、一つはお前に假裝をさせたさに初めた事だが、到頭俺もガツてしまふ。一昨年が最後だつたな。あれも燈火の消える前のホンの短かい明るさだつた。去年も人に隱れてお前の假裝を見た。今年も亦祕密でもいゝから一目見度くなつて來たんでね。だが俺はそれ許りぢやない。お前に少し云ひ度い事があつてやつて來たんだ。

文字繁　怎う云ふ事です。伺はして下さい。

村越　お前はフランチエスカの芝居を知つてゐるだらう。何時か帝劇の女優劇で、猿之助がやつた饗庭何とか云ふ芝居。兄さんが醜男で、美男の弟を替玉に使つて見合ひをさした結婚が、自分の妻と弟との戀になつて、到頭自分の身まで破滅さしてしまふと云ふ筋だ。一緒に見に行つた筈だ。覺えてゐるだらう。

文字繁　えゝ、悲しい芝居でしたわ。

村越　誰が可哀想だつた。

文字繁　皆な可哀想でした。兄さんも弟も、あのお嫁樣も。

村越　ところでお前は、今これからそのフランチエスカの芝居を明けようとしてゐる。お前や水落さんや鈴藤さんを、お前自身で可哀想だとは思はないかい。

文字繁　えゝ？

村越　俺は聞いてゐる。又濟まなかつたが、今の話を大略(あらまし)聞いた。お前は水落さんに惚れてゐる。水落さんもお前に惚れてゐる。そこでお前と一緒になる。鈴藤さんはどうなるだらう。あの芝居よりももつと悲しい事が起るに違ひない。それともお前は何とも思はないかい。

文字繁　私、鈴藤さんとは、眞實は一緒になり度くはないんですもの。

村越　でも、お前は鈴藤さんと約束をしてゐるぢやないか。

それは一體どう云ふ譯だ。水落さんがあるからだ。危ない。こんな危い話はない。お前は鈴藤さんと一緒になつちや不可ない。

文字繁　え丶、私も悪るいと思つてゐます。

村越　水落さんと一緒になるのは尚悪るい。

文字繁　え丶？

村越　私で知れてゐる。私が家を潰したのも心からとは云ひ乍ら、お前の親達の取込み主義に、大分土臺を崩された。水落さんと私では場合が違ふかも知れないが、いくらお前が姿をかくす、籍を抜くと云つた處で、容易く承知するお前の親ぢやない。水落さんも苦しい目に逢ふに相違ない。それでもお前義理が済むと思ふかい。俺は決して嫉妬で云ふんぢやない。お前に良い緣が定まれば、これ程嬉しい事はない。が、あの親の生きてゐる間は駄目だ。

文字繁　え丶？

村越　所詮は違ふ親を持つた身の不幸だ。あ丶云ふ所へ貰はれて來たのが、お前の身の不運だ。娘を稼がせよう、娘で儲けようと思つてゐるそれが義理ある親と來ては、氣の毒だが、お前に一生幸福の花は咲かないよ。

文字繁　（泣く）

村越　諦めるんだ。鈴藤さんの方は何でもあるまい、水落さんの事はどうしたつて諦めるんだ……諦めるのが兩方の爲だ……諦められないのか……縱ひお前の親が承知しても、鈴藤さんと斯う云ふ話が纏れて來ては、迚も水落さんとは一緒になれない。諦めなさい。諦めるんだ。

文字繁　（唯泣く）

村越　フランチエスカの芝居が判らないのか。

文字繁　判りません。兩方が思ひ合つてゐるものを、無理に中へ割り込まうとするのは、縱ひ誰であらうと、割り込んで來るものが無理です／＼。

村越　無理はお前だ……あ、誰か來る。心得違ひをしないやうに……私は歸る……い丶か。悪緣と諦めるんだぞ。（去る）

（お政が來る。）

お政　文字繁さん、聞いたよ。私もどれだけ安心したか知れやしない。お目出度う。だけど有難うよ。よくそこ迄鈴藤さんの事を思ひ直してくれたね。水落さんもどんな事をしても、まとめて見るつて、鈴藤さんに男の約束をなすつたよ。何だか此處で二人をじらしたつてえぢやないか。鈴藤さんが興奮しちやつてね。眞實に眞正直な方だね。あんな方にこれだけ思ひ込まれたお前さんは眞實に幸福と云ふもんだよ。

（水落が鈴藤の手を引張つて出て來る。）

水落　さ、もう一度握手してくれ。女將さんを證人に、俺が此緣をまとめる事を誓はう。文字繁さん。手をかしてくれ給へ。

文字繁　私、お斷りします。

三人　え。（ト驚ろく）

文字繁　どう考へても、私は鈴藤さんと一緒になれるとは思へません。

水落　思へなくても私が一緒にして見せるんだ。

文字繁　それが私に辛いんです。

お政　鈴藤さんと一緒になるのが辛いと云ふのかい。

文字繁　えゝ。

鈴藤　先刻の約束は皆な嘘だつたんですか。

文字繁　えゝ。お嫁になるかも知れないと云ふ一時の熱に浮かされて、あんな事を云つて見たゞけでした。貴方でなくとも外の人と約束しても、必とあんな事を云つたでせう。

鈴藤　何も彼もお終ひなんですか。

文字繁　えゝ、貴方とは怎うしても一緒になれない身體です。

鈴藤　外の人だつたら一緒になると云ふんですか。

文字繁　それは解りません。唯貴方とだけは、私、怎うしても一緒にはなれません。

水落　解つた……要之助、斯うなつたら仕方がない。私が惡るかつた。もう何も云はずに居てくれ。此斷罪は必とするから。文字繁さん、お前の心も私には解つてゐる。だが私はお前にはもう會ふまい。

文字繁　えゝ？

水落　斷じて會ふまい。お前も往來で會つても口なんか利いてくれるな。挨拶もしてくれるな。今日から全然赤の他人だよ。

文字繁　えゝ？

お政　文字繁さん、私も是からお前さんは餘り家へ來て貰はないやうにするからそのつもりでゐておくれ。こんな事になりはしないかと今迄も度々、もし鈴さんを釣つてるんぢやないか、そんな罪な事だけはしておくれでないと、あれ程云つて置いたのに、仍日到頭こんな事にしてしまつた。

文字繁　女將さん、私は決して鈴さんを釣つてなんどゐやしませんでした。

お政　なら何故、こんな事になつたんだい。

文字繁　あんまりお氣の毒たつたんですもの、私見度いものに夢中になつて、仕事も手につかないと仰有る顔を見ると、幾度か諦めて貰はうと思つても、お氣の毒になつて何にも云へなくなつてしまつた爲です。眞實に釣つ

てなんぞ居やしませんでした。

お政　何にしても、家へは餘り來て貰はないやうにするならね。お氣の毒だけど、私の方にもお客樣への義理があるからね。

鈴藤　女將さん待つて下さい。文字榮さんに罪はありません。文字榮さんが釣つてゐたんぢやありません。私が自分から釣られてゐたんです。兄さんが逢はないと云ふのは別として、女將さんだけは呼ばないなんて事を云はないで下さい。どうかこれ迄通り文字榮さんにお座敷をかけて上げて下さい。文字榮さんは訣がなければ、親に甚い目に逢ふ人です。私の爲に酷い目に逢はせては、私が文字榮さんに濟みません。女將さんこれだけはお願ひです。お願ひします。

お政　文字榮さん。お前さんこれでも來た鈴さんを思つて上げる事は出來ないのかい。

文字榮　勘忍して下さい。

（泣き崩れる。）

（落花。）

――ツナギ　幕――

同　返し蔦岡の帳場

帳場と居間と二間、帳場の奥は玄關。直ぐに二階へ通ずる心、室内の飾り付けは常套のもの故略す。唯何か瓶のやうなものに、櫻の枝ごと折つたものを、生けたのが欲しい。そして總ては春の夜の甘い痛さが思はれなければならない。

お政は帳場で机を前に帳合ひ。

傍に醉つた文松が長火鉢に凭れて寫眞を見てゐる。

沈んだ調子の三味線。

幕明く。

暫く三味線が聞えてゐる。

女中のおさよが入つて來る。

おさよ　女將さん、栗原さんの處へお銚子が出來ました……

……文松さん、何を見てゐるの。

文松　寫眞。

おさよ　誰の、お見せなさい……あら又……文松さん、いやだよ、若い子ぢやあるまいし、如何に惚れ合つた仲だからつて、死んだ人の寫眞を持ち歩くことはないでせう。

文松　だつて忘れさせないのよ。

おきよ　忘れさせないつたつてねえ女將さん、罪ぢやありませんか。何時迄も死んだ人の事を思つてゐると、死んだ人は、行く處へも行かれないつて云ふぢやありませんか、ねえ。

文松　だつて今日が祥月命日なんだもの。思ひ出しまさアね。思ひ出しや氣も變になる。だから飲んぢやつたの。女將さん。私、醉つてるよ。醉つちやア惡い。

お政　いゝよ／＼。唯、身體さへ壞さなけりやね。

文松　こんなガラ／＼から出た玩具見度いな身體、壞れるものなら壞しちまひたい。眞實に何だつて死んぢやつたんだらうね。鳥渡、お前さん、何だつて死んぢやつたのさ。返事しないの。馬鹿、馬鹿。（ト泣いてゐる）

お政　死んだ子の年を數へるやうなことを云つて、何時迄も諦められないお前さんの方が、餘程馬鹿さ。

文松　だつて女將さん、考へて頂戴。愈々一緒に家を持たう、持ちましようつて云ふ事になつて、約束が出來てから、タツタ十一日目に流行性感冒でコロリ。眞實に意氣地無しだね。だから私は敵討をしてやつてるの。

おきよ　どうして敵を討つんです。

文松　醉つぱらつてやるの。飲んでさへ居りや流行性感冒なんか、かゝりつこはありやしないねえ。可いだらう、女將さん。私は醉つ拂つて敵を取つてやるの。好い考へでせう。だけど今日は少し飲み過ぎちやつた。でも仕方がないでせう。思ひ出すと變な氣がして來て……眼鏡が涙でぬれて見えなくなつちやつた。

お政　お前さん見度いなガラ／＼した女に、そんなに深い情愛があるなんて云ふのは、隨分不思議な話だね。

文松　御挨拶恐れ入ります。

お政　文字樂見たいな、情の強い女もあるのにさ。本當にあの文字樂ばかりは、考へると腹が立つて仕樣がない。男一匹を滅茶々々にしてしまつて、どう思つて暮してゐるだらう。

文松　平氣さ。解らないんですよ。今の若い娘に、本當の男の心なんてものが解るものかね。何もかも勘定づくだ。尤も我々お婆ちやんにも可也勘定づくの恐れ入るのがゐるけどね。意地も名前も評判も、自分の運迄投げ出して來る男の心と云ふものは、よく／＼のものさ。女は餘程有難いと思はなきやならない。だから私も家を持たうと迄決心したのよ。死んぢやつて、馬鹿、馬鹿。

おきよ　文字樂さんの事を云つてるのかと思つたら、自分の惚氣ね。

お政　馬鹿におしなさんな。

文松　でも云はせてよう。追善供養に、ね。

お政　ぢやまア、勝手に其處で管を卷いといで。

文松　管はないでせう。ぢやアもう何にも云はない。云はないから女將さん、何處かへ寐かして。

お政　どうしたの。

文松　實は先刻から、氣持が惡るくつて堪らないの。

お政　飲み過ぎたんだらう。終ひに身體をこはすよ。
文松　いつもは愼んでゐるんだけど今日は……思ひ出すと……
お政　解つた〳〵。寐といで〳〵。
文松　冷淡だね……二階は關はないかしら。
お政　栗原さんだもの、關ふものか。おきよにさう云はしておくから。
文松　さう。ぢやア少し寐かして貰ふわ。
（ト居間の方へ。）
（格子の開く音。）
おきよ　アラ被來い。
お政　被來い。どうなさいました。
水落　飛んでもない事をしてしまつた。
お政　どうなすつたんです。
水落　人を殺してしまつた。
お政　え、貴方が、御冗談でせう。
水落　全くだ、又要之助が家出をしてしまつた。
お政　えゝ。
おきよ　まア。（同時）
水落　文字棠の事をどうしても諦め兼ねての家出と云ふ事は、充分に解つてゐる。併し其文字棠は要之助に、何の心も運んでない。女々しい戀を迷惑がつてゐる。さうしたら要之助の戀はどうなる。自滅させるより外に仕方があるまい。要之助は自殺する覺悟で家出してしまつたんだ。
お政　困つた事になりましたね。遺書でも置いて被來つたんですか。
水落　そんなものはない。が、どう思つても、文字棠の心の動かない戀で、そして當人が思ひ諦められない戀なら、死ぬより外にあるまいと思ふのだ。私が惡るかつた。二人の戀を守り立てようとして、何時か自分の心が亂れてゐた。要之助は私への義理も立てゝ、默つて死にゝ行つたに違ひない。
お政　眞實に飛んだ事になりましたね。お心當りはお聞き合せになりましたか。
水落　殘らず聞き合せた。が、何處へも立ち寄つてないのだ。併しあゝ云ふ執着の深い男だから、もし又文字棠に未練があつて、無論未練があるには相違ないが、此邊でもウロついてやしないかと思つてやつて來たんだが、此處の家へもやつて來ませんでしたか。
お政　えゝ、未だお出でになりません。お見えになりましたら、どんなにしてもお引き留めして置きますが、眞實に無分別な氣をお出しになつたものですね。
おきよ　男の方のやうぢやありませんね。男に鈴庶さんの

やうな方があるとは、私にや、どうしても眞實に出來ませんね。

水落　てんで理性と云ふものが缺けてゐるんだから。冷靜に物を考へると云ふ事はどうしても出來ないで、感情一點張りで生きて行かうと云ふんだから、此世の中に絕體に向かない男さ。冷たい理屈から云つて見れば、要之助の廾た男は、死んで行つた方が、或は當人の爲かも知れないが、と云つて無道に死に行く者を見逃す譯には行かないからね。殊に私には深い責任があるんだ。

お政　御尤です。何うでせう。文字榮さんの家へそれとなしに樣子を見せにやつて見ませうか。實は宅でも、あの花見から此方、文字榮さんを呼ばないやうにしてゐるんで、一寸此頃の樣子が判らないんですけど……

水落　有難う……さうですね……併し如何になんでも要之助が、文字榮に會ひに行くとは思へない。これだけ要之助の片思ひと云ふ事が評判になつてゐるのに、それでは要之助の男がまる潰れだから。

お政　でもあの方でしたら、自分の男の廢る事位、何とも思つちや被來らないでせう。

水落　ウム、それがあるので弱つてしまふ。何處迄弱氣なんだか、私にも全く見當が附かない。

お政　困りましたね。

（格子の開く音。）

（傳藏が入つて來る。）

傳藏　女將さん。四の五のいはずに、どうかお榮を此處へお出しなすつて下さい。

お政　オヤ、藪から棒に、文字榮さんを何うするんですつて。

傳藏　隱してねえで此處へお呼びなすつて下せえ。種はちやんと上つてゐるんだ。

お政　文字榮さんをどうして此處へ出すんです。

傳藏　白化くれちや不可ねえ。蔭で糸を引いてゐるものがあると云ふ事は、聞いて知つてるんだ。お榮は家の大事な金箱なんだ。無暗と他人の自由にされて堪るもんか。

お政　おやあ、文字榮さんが家へ來てゐると云ふんですね。

傳藏　晝出たつきり、歸つて來ねえんだ。

水落　晝出たつきり。

傳藏　空恍けつこなしにしませう。うまく引張り出しの、籍を拔かうてえんだらうがさうは行かねえ、器用に此處へ出しておくんなさい。

お政　お父さん　好い加減にしておくれ。家は待合こそすれ、他人の娘を引張り出す樣な、後暗い眞似はこれつばかりでもした事はないんだよ。文字榮さんが何處へ行つたか　らないが、家でもあの子の仕打ちで氣に入らない

事があるから、此頃はお座敷へだつて呼びはしない。お富さんも知つてるだらう。此方の弟さん、鈴藤さんが文字繁さんの爲に家出をしておしまひなすつて、今其事で心配してゐる處ぢやないの。

傳藏　畜生、愈々引張り出しやがつたな。

お政　冗談も休み／＼云つておくれ。今更鈴藤さんの呼び出しを受けて出掛けて行くやうな、文字繁さんなら、最初つから鈴藤さんを、谷底へ突き落すやうな目に逢はせやしないだらう。見當違ひな事を云ふのも好い加減にしておくれ。

傳藏　解つた。村越の奴、彼奴だ。彼奴が引張り出したに違えねえ。よし、在所を突留めて叩挫いてやらなきや氣が濟まねえ。大きにお喧しう御座んした。（去る）

お政　おきよ。波の花を播いといてお呉れ。

おきよ　本當にいけ好かない爺ですね。（入る）

お政　ねえ、水落さん、どう云ふものでせう。

水落　私は、文字繁の家出と、要之助の家出とは別問題だと思ふ。今更文字繁と要之助と……そんな事は到底有り得べからざる事ですからね。

お政　私もさう思ふんですが……これが二人一緒だつたら未だしも嬉しい事なんですがね。

水落　二人は全く因果同士なんだね……併しこんな事を云つてゐる場合ぢやない。警察へ捜索願を出す迄も、私はしなければならない事がある。女將さん、これから私はもう少し心當りを聞いて見るが、モシひよつと、そんな事はないだらうが、文字繁の家出と要之助の家出と關係があつて、何方か此處へ來るやうな事があつたら、是非引留めて置いて下さい。

お政　えゝ、それはもう確にお引受けしました。關係がないにしても文字繁が來ましたら、此事を云つて、少しは彼の女の心に重荷を置いてやります。何ぼ何でもあんまりですからね。

水落　併し、それは要之助の希望ぢやないだらう。自分は死んでも文字繁の幸福を祈つてゐたいのが、彼の男の心なんだらう。

お政　眞實に、歯がゆい程じれつたくなりますね。

水落　どうしてあんな男が生れたか……まア、何分願ひます。

お政　御心配ですね、御様子がお判りになりましたら、お知らせ下さい。

水落　無論知らせます……お小夜ちやんは？

お政　お風呂でお化粧の最中でせう。一寸出掛けますので。

水落　お小夜ちやんも要之助の事は、隨分心配してくれた

おな……さア行つて來ます。
お政　行つて被來い。（送り出す）
（常磐津となる。）
「其常磐津仇兼言」
〽ときわの松とちぎりしも、いまはあだなるかね言に、ふけ行くそらも四つ過ぎか、早九つか半七が、無常の闇にとぼ／＼と、心は行けどあしもとは、あとに引かるゝ亂れ髮、たとへおくれて死ぬるともおなじ道にと三勝が、所詮浮世を捨草の、露のはかなき命毛に、殘しおくべくも、これがかぎりと書置に、云ひつくされぬ女文字、筆のあゆみの一あしづつに、消えて行く身は惜しからねども、逍親子のわかれのきづな、切るに切られぬ恩愛の血筋の緣にしめからむ、戸口ひとへの内と外、互ひに隔つ中々にも、思ひにへだて泣く涙、墨ににじむや朧月。
（水落は去る。送り出して來てお政は帳合を止め、ホツト太息を吐く。暫く何事か考へ乍ら湯呑に茶を注いで、呑んだりしてゐたが、軈て立上りて出て行く。）
（間。）
（文字繁が來る。影のやうな姿、力のない顏、フラフラと蔦園の家の中へ入つて帳場へ通る。）

（お小夜が出て來る。）
お小夜　ア。
文字繁　今晩は。
お小夜　何時來たの。
文字繁　今。
お小夜　さう。まあお坐んなさいな……。どうして？　會つて？
文字繁　（默頭く）
お小夜　話をした？
文字繁　えゝ。（何か外の事を考へてゐるらしい）
お小夜　鈴さんは。
文字繁　會つたわ。
お小夜　話をしたの。
文字繁　えー。
お小夜　よかつたわね、鈴さんは喜んでたでせう。
文字繁　（淋しく笑ふ）
お小夜　でも默つてゝ頂戴、私が手紙を取次いだなんて云ふ事。眞實に吃驚したわ、お稽古の歸りに××の路次の處迄來ると、突然鈴さんが呼ぶんでせう。私のお稽古に行くのを三時間も往來で待つてたんですつて。どうしても諦められない。もう一度會ひ度い。もうこれつきりだからつて、そりや本當に一生懸命なんでせう。で私も、

ツイ引受けてしまつたの。でもよかつたわ、お宅に誰も居なくつて。それに、これが明日だつたら困つてしまふところだつたのよ。明日は私、家にゐないんですもの……。

文字繁　まアどうして。

お小夜　私、今夜箱根へ行かなきやならない。あの小笠原さんと……。

文字繁　え、まあお小夜さん。

お小夜　（目を逸らして）本當に鈴さんと會へてよかつたわね。鈴さんは何て云つて。

文字繁　いろんな事。

お小夜　いろんな事つて。

文字繁　私に濟みません〳〵て謝まつてね、貴女が私の爲に評判を悪くしたと云ふ事も聞きました。濟みません。貴女が悪いんぢやない、私が悪い、思はない人を思つた私が悪い。思はない人に思はれた貴女は、嘸辛かつたでせう。口惜しかつたでせう。私が憎かつたでせう。勘忍して下さい。世間が何と云つても罪は私にあるんです。私は決して貴女を恨みません。今迄にも眞實のお友達の無かつた貴女が、尙更お友達を減したらうと思ふと、私は眞底に悪い事をしたと思ひます。濟みません。勘忍して下さいつて。

お小夜　まア。

文字繁　私は此上自分の戀を打ち明けて、貴女を苦しめようとは思はない。唯今の貴女の身の上が嘸心細からうと、それが氣になる。貴女はどうか早く自分の氣に叶つた好い旦那を見付けて、樂な身分になつて下さい。さうして何時迄も好い日を送つて下さい。私はそれを祈つてゐますつて。（涙によくは聞とれない）

お小夜　それで鈴さんはどうなすつて。

文字繁　家へお歸んなすつたわ。

お小夜　家へ？　本當に。

文字繁　えゝ。

お小夜　東京を居なくなるんぢやないの。

文字繁　えゝ？

お小夜　だつて何時もそんな事を云つて被在つたんですもの。

文字繁　イヽエ、それは大丈夫。

お小夜　さうして貴女はどうなの。

文字繁　閨の戸の、いやとよ我はと云ふとこの文句を知つてゝ。

お小夜　いやとよ我は繻衣、はやぬぎすてゝうば玉の、すみのたもともたらちねの、後の世願ふぼだい心、かつしきの身に侯ぞや……文句は知つてゐるけど、何の事？　坊

さんにでもなると云ふの。

文字繁　えゝ。

お小夜　貴女が。（ト思はず大きな聲）

（文松が目を覺まして、うつ伏しながら聞いてゐる。）

文字繁　イ、エ。

お小夜　だつてさうぢやないの。

文字繁　イ、エ。私の心は洞夜叉の文句にある、三の切れたる三味線も、ひかるゝ程はひいて見ん。行くところ迄行つて見ようと思ふの。

お小夜　どう云ふ　なの。聞かして頂戴よ。

文字繁　唯それだけよ。

お小夜　どうしたの。

（三味線。）

（お政が來る。）

お政　オヤ文字繁さん、何しに來たんだい。

文字繁　女將さん、今迄は誠にすみませんでした。嘸お腹立ちでせう。みんな私が悪うお座いました。伺へた義理ぢやないんですけど、外の人は兎に角、これ迄可愛がつて頂いた女將さんだけには、お詫びして置かないと、どうしても私の心がすみませんので、厚面しくおわびに伺ひました。

お政　さうですか……お小夜、お前もう停車場へ行かなきやなるまい。彼方へ行つて誰かに手傳はして、着物を着更へておいで。

お小夜　えゝだつて。

お政　行つといでと云ふのに。

お小夜　ハイ。（ト元氣なく去る）

（文松はハッキリ眼を覺まして聞いてゐる。）

お政　文字繁さん、さうしてお前さんが謝つて來たんだから、私は何にも云ひ度くないが、もう今更お前さんが謝まつて來た處で、何も彼も後の祭なんだよ。お前さんは知るまいが、鈴さんはどうしても、お前さんの事が諦らめられないで、家出をしておしまひなすつたんだよ。

文字繁　…………。

お政　私は先刻水落さんから伺つて、どんなに吃驚したらう。お氣の毒な……。水落さんの御心配をどんなもんだとお思ひだい。

文字繁　濟みません。そのお詫びも必といたします。

お政　今更おわびをすると云つた所で、鈴さんが歸つて來ると云ふもんぢやなし、お前さん、どうしてお詫びするつもりだい。

文字繁　…………。

お政　鈴さんの心が解つたのかい。

文字繁　えゝ、勿體なくなりました。

お政　その心を何故もつと早く出してくれなかつたんだらうねえ。
文字繁　すみません。
お政　さうだつたら私もどんなに心嬉しく思はれたらうに……。眞實にお前さん、何故もつと早く解つてくれなかつたんだい。
文字繁　私が身の程知らずだつたんです。家の親があんな風でゐる間は、迚も自分の思ひ通りに行かないものを、よもやに引かされて、及びもつかない事を考へてゐたのが間違つてゐました。親が眞實の親だつたら、私も思ひ通りの事が出來たかも知れません。義理の親では何より自分を捨てゝかゝらなきやなりません。違つた親の手許に育つ者程、不幸なものはないと思ひます。鈴藤さんにあれ丈思はれて、それでも素氣なくしてゐたのは、氣が合はない、性が逢はないと云ふ、私の我儘勝手の外に、親に叱られはしないかと、ビクビク顫へる躾けた心もあつたからでした。命をかけて慕はれてゐるのに、親の折檻ばかりを怖がつてゐるそんな子供があるでせうか。私なんかどうして生れて來たんでせう。違ふ親を親としなけりやならない位なら、生んでくれない方が宜う御座んす。えゝ私は親を怨みます。勿體ないけど怨みます。
文松　（聲を上げて泣く）

お政　（のぞいて）まア此人は眼境を脫したら可いだらうに。
文字繁　女將さん。後生ですからお小夜さんを可愛がつて上げて下さい。眞實の親の手許で育つた子程、幸福なものはないと思ひます。どんな辛い奉公でも、違つた親を持つより辛いとは思はれません。私が手本です。お小夜さんを大事にして上げて下さい。私の惡かつた事は必とお詫びします。必とです。譯じやありません。眞實の事を云ふんです。女將さん。勘忍して下さい。勘忍して下さい。
文松　女將さん、私も賴む。文字繁さんを勘忍してやつて頂戴。先刻迄は、隨分心の冷たい、薄情な女だと憎らしくつて堪らなかつたけど、違ふ親を持つた苦勞を聞かされては、憎いも糞も何處かへ行つてしまつた。文字繁さん、察しるよ。私はお前さんが可哀想になつた。
文字繁　文松姐さん。有難う御座います。
文松　女將さん。勘忍してやつてくんないの。私がこんなに賴むのに、ねえ、今日が命日の佛の供養になる。女將さん。別れてから身に滲み込む男の親切と云ふものは、迚も堪つたものぢやない。會ひ度いにも見度いにも、口を利き度いにも、別れた後となつた辛さ、悲しさ。女將さん。返事をしないね。

文字榮　姐さん。女將さんは泣いてゝ下さるんです。
文松　泣いてる、さう。（ト云つてゐる中に自分も泣き出す）
（電話のベル。）
文松　喧しい〳〵。誰だい。今時分電話なんかかけて來たのは、モシ〳〵誰？　えゝさうです。え。あゝ水落さん。居ます。女將さん。水落さんから。
文字榮　女將さん。水落さんにはお目にかゝりません。何卒よろしく。
お政　あゝモシ〳〵先程は、如何でした。え、居ない。困りましたね。實は今文字榮が來て居るんですが……謝りに來てるんです。鈴藤さんの心も解つたと云つて……えゝ、本當です。今もそれを云つてるところなんです。何故もつと早く解つてくれなかつたつて……。ハイ承知しました。文字榮さん。水落さんが電話へ出てくれと。
文字榮　（間）ハイ（立つて行く）モシ〳〵。……濟みません。御免なさい。えゝ、えゝ……濟みません〳〵。（泣く）實は……今日鈴さんに逢ひました。
お政　えつ。
文字榮　えゝ、眞實です。
〽盡きぬ緣を松の紋
お政　文字榮さん。眞實かい。
文字榮　えゝ、女將さん、濟みません。（電話に向つて）えゝ、えゝ、御免なさい。えゝ。……
〽はなしに聞けばしつくりと、あうて嬉しい紅入の、嬉しい仲ぢやないかいな。
文字榮　えゝ。大丈夫です。今度は嘘はつきません。えゝ。ではお待ちしてゐます。えゝ。左樣なら。（電話を切つて暫く佇んで泣く）
お政　文字榮さん、何をしてゐるの。
文字榮　えゝ。（ト泪を押へて、電話帳の間に手紙樣のものをはさみ電話を離れる）
お政　まア、お前さん、鈴さんに逢つたのかい。
文字榮　えゝ。實は。
お政　まア何だつて、そんならさうと早く云はないのさ。馬鹿なんだよ。
文字榮　でもあんな事になつてお別れしたのに、私が勝手に會つちや、惡いと思ひましたから。
お政　何、惡い事があるものか。さう聞いて私達もどんなに嬉しいか知れやしない。ねえ文松さん。
文松　全く思へば思はれるつて、眞實だわね。そんな嬉し

い事があるのに、何だつて先刻あんなに塞いでゐたの。
文字繁　でも考へたら何だか悲しくなつたんですもの。(密と涙を拭く)
お政　で、鈴さんは今、何處に被在るの。
文字繁　寶亭に被來います。家へ歸るのが極まりが悪いつて云ふから、そんな事はない。貴方の兄さんが心配して、葛岡さんへ來て被在るに違ひないからつて、それで私が樣子を見に來たんですもの。鳥渡迎へに行つて來ますわ。
お政　お前さんが行かないでも、家の者をやつたらいゝぢやないか。
文字繁　えゝ、でも私が行かないと、鈴さんが極りを悪がるといけませんから。
お政　それもさうだね、ぢやあ、お前さん、御苦勞だけど行つて來ておくれな。それ迄にお座敷を拵らへて置くから。
文字繁　えゝ、ぢやあ鳥渡行つて來ます。姐さん、御緩り。
(出て行く)
へもはや此世に秋の月。嵐の雪と散りて行く、浮名は石碑に殘るらん。
(文字繁一散に走り去る。)
お政　まア〳〵。雨降つて地固まるとは此事だね。鈴さんも大喜びだらう。
文松　だけど、鳥渡可笑しいね。
お政　何が？
文松　最初の內の塞ぎ方が、女將さんは知らないでせうが……ソハ〳〵してゐたんだから、もしかしたら。
お政　えゝ。(と息を吞む)
(お小夜が出て來る。)
お小夜　文字繁さんは。
お政　鈴さんを迎ひに寶亭へ行つたんだがね。
お小夜　寶亭へ、寶亭に鈴さんが居るの。
お政　と云つて居たんだがね。
お小夜　嘘よ、そんな事はない。鈴さんが今迄寶亭に居る譯がない。嘘よ嘘よ。
お政　お前どうして、そんな事を知つておいでだ。
お小夜　えゝ？　實は今日ひるま、私が二人を會はしたの。
お政　えゝ？
お小夜　今聞いたら鈴さんは家へ歸つたつて、文字繁さんが此處へ來て云ふのよ。鈴さんが寶亭に居る譯がないと思ふわ。
文松　兎に角寶亭へ電話をかけて、聞いて見たらいゝでせ

う。
お政　（お小夜に）まアお前大變な事をしてくれたね。（ト電話口へ行つて）案事は何番たつけ。（ト云ひ乍ら電話帳を繰らうとして手紙に氣がつく）あ手紙。
文松　え。
お政　水落様、外皆々様へ、しげより。
お小夜　アラ。
（三人顏見合せる。）
（水落が來る。帳場へ通る。）
水落　文字繁さん〳〵。オヤ、どうしたんです。
お政　貴方。（ト手紙をつきつける）
水落　え。（ト受取り慌たゞしく讀む）
人間は何故生れて來るのでせう。生れてくればこそ、浮世の苦勞も皆負はなければなりません。生れて來ない方が幸福と存候。鈴さんも云はれ候。此人一人と思ひ込んだ心が、ピタリと向うの心に合はないやうな、そんな情ないものが人間ならば、人間を止めた方がいいと、鈴さんは云ひました。私もその通りに候。私は兄さんを思つてゐました。小染姐さんが羨しく候。其時にはつた水落命と云ふ白粉刷、私がお湯の嫌ひなのは此の譯にて候それでも兄さんとは、どうにもならない緣で御座いました。人間の心と云ふものが分りません。分らないと云ふよりこはく相成候、鈴さんもさうだと云はれ申候、鈴さんと今日あひました。今迄ふりつけてゐたのが勿體なく相成申候。相談の上、今夜二人で東京から姿をかくし申候。死ぬか生きるかそれは分りません。けれども二人一緒です。おさがし下さるまじく候。唯腕に彫つた兄さんの名は、死ぬ迄身體に貰つて參り候。皆々様おからだを大切に、唯、どなたも子供に違つた親を持たせるのは、子供が可哀想につき、お止め下されたく、これはかりくれ〴〵もお願ひ申上げます。
しげより
（一同茫然。）
（お小夜が急に泣き出す。）
（野崎の連彈。）
――幕――

新四谷怪談（二　幕）

上の卷

或る芝居小屋の樂屋

東京を遠く離れた片田舍の或る芝居小屋の樂屋三階、舞臺の大部分は大部屋、其前に廊下ありて、一方は階下に通ず、一方は突當りとなりて、此處に一部屋あり、立者の部屋なれど、今は一座の役者中山仙十郎の女房お粂の病室に充つ。但し見物よりは部屋の内は見られ得ず、大部屋は、所謂大部屋連に、衣裳附、床山等も雜居し、起臥するものなれば、衣裳葛籠等の外に小道具等もあるを要す。部屋の一隅に綱引を張り渡し、解き散らしたる鬘數個を懸く、中に白の鬘二三個あるを要す。

大部屋では五六人の役者が殘つてゐる外は、後は大抵出て行つた跡で、殘つた連中は、碁を圍んでゐるものもあり、將棋を差してゐるものもあり、お囃子の三味線を借りて氣晴しに彈いてゐるものもあり、講談本に讀み耽つてゐるものもある。床山は鬘の結ひ上げに、衣裳附は衣裳のダメを見るにそれ〲忙しい。無論夜、明日が狂言替りと云ふ日である。蚊遣りの烟濛々たり。蛙の聲が喧しい。

幕明く。

役者Ａ（碁を圍んでゐる）さアどうだ、これでもう助かる見込みにないぞ。

役者Ｂ（同じく）何、さう無暗と死んで堪まるものか、不取敢此處を斷う延びると。

Ａ　往生際の惡い奴だな、所詮助からねえ命と諦めて、潔く往生しちまへよ。

Ｂ　何、どうしてこんな事で死んで詰まるものか、浮世に未練は充分ある、そらどうだ。

Ａ　チヨツ執念深え奴だな、こんな奴が死んでから化けて出たりするんだぜ。

Ｂ　生き代り死に代り、怨みを晴らさで置くべきか。

Ａ　怨めしい伊右衛門殿か。

Ｂ　旦那樣、藥下さい。（小平の調子で云ふ）

Ａ　斃り損ひめ、可い加減に息を引取れ。

（おみねの病室から お關が出て來る、衣裳附の女房なり。）

お關 （AとBに） 一寸、何を云つてゐるんです。

A 何か。

お關 先刻から聞いてゐりや、往生際が悪いの、甕り損ひだのと、病人が聞いてゝどんな氣がします。

A 聞えたかい。

お關 今は寢てゐるけど。

A おやあ大丈夫だ。

お關 大丈夫ぢやありませんよ。それでなくつてさへ、仙十郎さんが邪慳にするんで氣が僻んでゐるところぢやありませんか、今見たいなことを聞いて御覽なさい、何んな風になるか分りやしませんよ。

A 決して仙さんのお内儀さんに當付けた譯ぢやないが、あけなんこに云や、全く甕り損ひだからな。

B 仙さんも薄情たらうが、お内儀さんも少し執拗いぜ。内儀さんとしての用が立たなくなつてゐるところへ、あの顔だ。仙さんだつて外に女もこしらへたくならア、斯うして旅から旅へ、引張つて歩いてゐるのも、女房だと思へばこそだぜ。

お關 だから男は薄情だと云ふのさ。仙さんだつて、お内儀さんと斯うなつた抑々から、今、お内儀さんがあんな病人になつた原因を考へたら、餘り邪慳な仕打も出來ない筈さ。

A 態々楽屋でも四谷怪談が始まるか。

B 舞臺の伊右衞門が楽屋まで伊右衞門なのも面白いな。

お關 何面白いものですか、實錄の四谷怪談なんか眞平ですよ。

（と立つて男の衣裳屋の傍へ。）

役者D （三味線を弾いてゐる手を休めて） だけど、皆なはどう思ふ、明日からの四谷怪談。

役者E （将棋を差してゐる） どう思ふとは。

D 初日を開けないうちからもうたゝりがあつたぢやないか。

A 誰が。

D 誰がつて聞くまでもない。（病室を顎で指つて見せて） 病人さ、狂言が四谷怪談、役割が仙さんの伊右衞門と決つた晩のあの怪我だぜ。長の病ひで、足腰がフラ〱してゐたとは云ふものゝ、あの晩に限つて二階から墜こつたと云ふのは、もうお岩様のお祟りがあるんぢやないかと思ふ。

B 迷信だアな、下らねえ。

D いや、下らないとは云つてゐられないよ。そりや、迷信と云へば迷信かも知れないが、昔から此四谷怪談を出

すと、伊右衛門をやる役者に必と何か祟りがあると云ふからな。
A　そんなら仙さんに祟りさうなもんぢやねえか。仙さんのお内儀さんに祟ると云ふのは受取れねえ理窟だね。
D　だからさ、私は之か何かの前徴で、今度の芝居に何かありやしないかと思ふのさ。
B　下らねえ。今時、そんた箆棒な事があつて堪るものか。
役者C（講談本に讀み耽つてゐたが、此時不圖何物かを見て）あゝ。
（と叫んで其處を飛退く、皆は驚いて聲する方を見る。）
A　何だ〳〵。
B　どうしたんだ。
C　蜘蛛だ。
A　え。
C　蜘蛛だ、夜の蜘蛛は親でも殺せと云ふからな。
（と本で叩き廻る。）
B　何だ下らねえ。大きな聲をするから、何事が始まつたかと、吃驚しちまつたぢやねえか。
C　だつて、蜘蛛は魔物だもの。
A　殺したか。
C　ウン、大きな奴だ。
A　氣をつけねえ、今に祟られるぜ。
C　眞個かしら。
A　蜘蛛は魔物だと、自分で云つたぢやねえか。
お關　お止しなさいよ、下らない事を云つて揶揄ふの、大丈夫だよ、そんな事はありやしないよ。
床山　だけど、斯う云ふのは何て云ふんでせう。
A　ホーラ宿屋の仇討とお出でなすつた。何を話さうつて云ふんだ、坊主々々山の噺か。
床山　實は、お岩樣の日鬘が見えなくなつてしまつたんです。
お關　山さん、本當。
床山　えゝ、先刻から云はうか云ふまいか、考へてゐたんですが、夕方まで確にあつたのが、急に見えなくなつてしまつたんです。
E　何處かへ置き忘れたんぢやないかい。
床山　私もね、何處かへ紛れ込んでゐるんぢやないのかと思つて、先刻からチョイ〳〵搜してはゐるんですがね、物が物だけに、實は私も不氣味で搜せないんです。明日になつたら晝間の中に搜さうと思つてゐるんですが、變ですよ。
C　仇討、あの蜘蛛が何かの兆らせだつたんだ。大體牡丹

燈籠を出した後へ四谷怪談を出すなんてえのが間違つてゐる。何ぼ夏向きだからつて、怪談ものばかりやる法はない、必と何かの魔が差したんだ。

A　だつて、そんな分らねえ話はねえ。德ちやん、お前、そんな事を云つて騷ぐんぢやねえか。

床山　こんな事、騷いだところで仕樣がないぢやありませんか。私もね、此の芝居は餘り好かないんで、お岩樣の分だけは甍間に打つて、藏つといんたんですよ、夕方まで確に置いてあつたんです。

（途端に薄ドロ。）

D　オヤ。

E　變たぜ。

（床山のゐるあたり、衣裳行李の積み重ねてあるあたりから幽靈が現はれる。）

お關　（同時に、キヤツ。

（Aは夢中で碁石を投げつける。と幽靈は痛いと叫ぶ。）

A　オヤ、好之助さんぢやねえか。

役者G　（好之助と呼ばれたる役者、幽靈なり）判つたかい。

A　判るとも莫迦々々しい、好い加減にしねえな。

G　判つちやつちや仕樣がない。では正體を現はすべえか。

（と幽靈の目鬘衣裳をかなぐり捨てる。）

C　何た好之助さんか。

G　吃驚したかい。

C　冗談ぢやないぜ。それでなくつてさへビクビクしてゐるところだ。

お關　本當に下らない人だね。

床山　好之助さん、うまく行きましたね。

E　何だい、德ちやんもグルかい。

お關　（眞人なる衣裳屋に向つて）お前さんも一緒になつてお岩樣の衣裳を貸したんだらう。

衣裳屋　いゝや、俺は一寸も知らなかつた。何時の間に衣裳を持出したんですい。

お關　まア呆れ返つた人だよ。衣裳を持出されるのを知らないなんて。

衣裳屋　だつて、本當のことは本當だからな。

B　薄ドロを入れたのは誰だい。

役者H　其仔細、唯今それにて申すで御座らう。

（と云ひながら出て來る。）

A　何だい、お前も相棒か。

H　好さん、至るところ大當りだね。

D　至るところつて、外でもやつて來たのかい、呆れ返つ

た奴だな。何處でやつて來たんだ。

H　春の家さ。

A　春の家、仙さんの小指のところか。仙さんのお座敷だな。

G　さうよ。其處で、唯行くのも興がないから、二人、牒し合せて、お岩樣の宣傳と云ふ奴をやつて來たのよ、大當りだつたぜ。

D　大當りは好いが、此方等まで驚かせるのは罪が深いぜ。

G　其奴も前からの打合せで、德床に怪談の筋を振つといて貰ふ約束だつたんだ。

A　下らねえ人騷がせをするぜ。

G　下らないつたつて、これでもお使者に立つたんだぜ。

A　何のお使者だ。

H　仙十郎さんのお使者さ。遊んでゐる奴に春の家へ來いと云ふ。

B　德さん、甜め棒を貸してくんね。

G　え氣の早え男だな、どうだ來るか。

A　行くとも。

G　外はどうだ。

C　贊成。

H　臆病な癖に、斯う云ふ事には氣が早えな、其方はどうだ。

E　御他聞には漏れないね。

D　私は少し考へるよ。

H　どうして、厭なのか。

D　厭ぢやないけどね、春の家がいやなんだ。

E　どうして。

D　仙十郎さんとお富とイチヤ／＼するのが見てゐられないんだ。

B　其奴は全くだ。あの二人のデレつきやうは、どうしたつて大向うの半疊物だ。

C　仙十郎さんはお内儀さんをどうする氣だらう。

A　死ぬのを待つてゐるのさ。

お關　叱。

（と立つて、彼方の室の樣子を窺ふ。）

A　出掛けよう。

H　德ちやん。

床山　私もですか。

G　總盤振舞ひよ、お富さんの奢りだアな。

床山　日と出ましたね。では手を洗つて來ませう。

お關　（頁人に）お前さんは行かないだらうね。

衣裳屋　いけないかい。

お關　いけなかないけど。

A　妬けるかい。
お關　そんなんなら頼母しいんですけどね。
衣裳屋　ぢや行つたつていゝだらう。
お關　私一人ぢや不氣味だもの。
A　いゝ加減に斃つちまへばいゝに、薬屋が陰氣で仕方がねえ。
お關　そんな可哀想な……。でもね、あの顏で、仙さんの事を聞かれると、實は私もゾッとするのさ。
H　仙さんも、いゝ加減に片をつけてしまへばいゝのに。
お關　片を附けるつて。
H　何とか、金の少しでもやつて、東京へ歸してしまふとか、さ。
お關　今更そんな事、お內儀さんがどうして東京へ歸れます。
A　おや何とか自分で片をつければいゝに、娑婆ふさげたとは思はねえのかな。
B　お待遠。
（と立つて行く。）
G　何だ、さん〴〵待たしといて、先きへ行くのか。
B　一寸階下で顏を洗つて行くのよ。階下で待つてるぜ。
（と降りて行く。）
H　いやにめかしやがるな。

（床山が來る。）
床山　お待遠樣。
G　ぢや出掛けよう。
衣裳屋　オイ行つちやいけねえか。
お關　いけないよ。
衣裳屋　つまらねえな、彼處のお花と云ふ奴が、一寸俺に思召があるらしいんだがな。
お關　馬鹿だねえ、此の人は、鏡を見たことがないのかねえ。
衣裳屋　そんなでもねえぜ。
お關　背負つてるよ。（皆に）どうか皆さん。
A　ぢやアまア勝さん、後で水入らずで樂しみねえ。
衣裳屋　つまらねえな。
（一同は出て行く。）
（衣裳屋はつまらなさうに見送る。）
衣裳屋　つまらねえな。
お關　そりやつまらないだらうけどさ、私だつて一人ゐるのは厭ぢやないか。その代り一合買ふからさ。
衣裳屋　買つてくれるか。
お關　あゝ、一走り行つて來よう。
衣裳屋　有難え、持つべきものは女房だな。
お關　急にお世辭がよくなつたね。
（一寸身繕ひ。）

（仙十郎の女房のお米が出て來る。跛行、半面に痣あり、病衰。されど、服裝は整へり、外出姿。）

お關　オヤ、お内儀さん、何處へ。

（お米默つて階下へ行かうとする。）

お關　お内儀さん、何處へ行くんです。

お米　春の家へ。

お關　え、春の家へ。

お米　仙十郎に會ひに行つて來ます。

衣裳屋　と、飛んでもない。お内儀さん、下らない事を云つちやいけません。お内儀さんの其の身體で、どうして春の家へ行けるもんですか、仙十郎さんに用があるなら歸つて來るのをお待ちなさい。

お米　あの人が歸つて來ますか、此の土地へ來てから、まるで春の家へ入り浸り、樂屋入りしたつて、私ん處へ見舞ひにも來てくれないぢやありませんか。

衣裳屋　そりやお内儀さんが其の顏……いえ、それはまアそれだが、仙十郎さんだつて、さう春の家へばかり入り浸つてもゐられないでせう。其の中には歸つておいでなさるでせうから。

お米　あの人の歸つて來るのを待つちやゐられません。

お關　そんな急た用が出來たんですか。

お米　えゝ。

お關　どんな用……

お米　片を附けて貰ふんです。

お關　えゝ？

お米　私に愛憎が盡きたら盡きたで、捨てるとか、殺して貰ふとか、お富と云ふ女のゐる前で、立派に話をつけて貰ひます。

（と行きかゝる。）

お關　お内儀さん、それはいけません。何と云つてもそれはいけません。今の話が聞えた腹立ちでせうが、そんな事で春の家へ行つたら、反つて仙十郎さんを怒らせるやうなものですから、それは私が何と云つても留めます。

お米　（急に泣き出す）お關さん、口惜しい。

お關　お察しします、お察しします。

お米　私がこんな利かない身體になつた原因は、仙十郎に罪があるんぢやありませんか。それを私がこんな身體になつたからと云つて、外の女に見替へて、此頃の邪慳な仕打ちは何です。厭がられてゐるのに、無理にくつついてゐようとは思ひません。自分で死ぬか、あの人に殺されるか、何方にしても、仙十郎に會はなきやなりません。私見たいなものがゐては、外の方にもお氣の毒です。

お關　困つたねえ、あんな餘計な事を云ふから。ですけれ

ど、お內儀さん、皆が皆、そんな氣でゐるんぢやないんですから、仙十郎さんだつて、お內儀さんをお內儀さんと思へばこそ別れもしず、斯うして一緒に歩いてゐなさるんですから、少しの事は大目に見て……。

お峯　いゝえ、今度と云ふ今度、私ももう辛抱が出來ないんです。何處を見て、私と仙十郎が夫婦だと云へます。行く先き／＼で女を拵へて……私を大事に思つてくれるなら、浮氣なんか出來ない筈です。

衣裳屋　それは併し人間、生身だからな。

お關　餘計なことはお云ひでない。それは仙十郎さんがいいとは云はれません。外の時は兎に角、斯うして病つてゐるお內儀さんを打捨らかして浮氣をしてゐるのは確に仙十郎さんが惡う御座んす。だから、之は私も及ばずながら、仙十郎さんに意見しませうから、今夜春の家へ行くと云ふのは……

お峯　私にはもう待てないんです。今夜と云ふ今夜、何も彼もキツパリ極めてしまはなけりや、私の氣持ちが堪らないんです。捨てると云ふなら捨てられます。捨てられりや、どうせ、こんな身體になつたんですもの、死ぬより外に道はありません。（ヒステリツクになつて）えゝ、死にますとも、必と死んで見せます。あの人は私の死ぬのを待つてゐるんです。殺してしまひたいと思つても、殺せば、自分が罪人になるから、それで今日まで私を生かして置いたんです。死にますとも、お富の前で死んでやります。

お關　まア、さう取逆上ないで、お富の前で死ぬと云つたつて、眞逆に仙十郎さんだつて見殺しにはしないでせう。さうでなりや、唯下らなく騷ぎを大きくするばかりで、反つて恥をかゝなきやならない理窟ですから。では斯うしませう、お內儀さんも、其處まで突詰めて考へておいでなんですから、此處へ仙十郎さんに歸つて來て貰つて、私も一緒に仙十郎さんの了簡を聞かうぢやありませんか。何も春の家へ行かなくつたつて、此處でも、話は極められるんですから、ね、お內儀さんの今の其の顏で……。さう云つちや何ですけど、反つて人に笑はれるやうなものですから。

お峯　仙十郎が歸つて來るでせうか。

お關　えゝ、それは、家の人に行つて貰つて。

衣裳屋　ウム、行つて來よう。

お關　待つといでよ、今の、此の話を詳しく話して貰つたら、何ぼ何でも仙十郎さんだつて歸る氣になるでせう、お前さん……

衣裳屋　よし、心得た。

お關　仙十郎さんによく、此事を話してね。

衣裳屋　ウム、行つて來る。
お關　一寸、遊びに行くんぢやないんだよ。仙十郎さんを連れ出しに行くんだよ。
衣裳屋　ウム、分つてる。
お關　ミイラ取りになつちやいけないよ。
衣裳屋　でも仙十郎さんが一人で歸ろと云つたら……
お關　いけないよ、お前も一緒に歸つて來るんだよ。
衣裳屋　オヤ〳〵、つまらねえな。
（と、去る。）
（間。）
お關　家の人が行つたら、仙十郎さんだつて歸つて來るでせうから、それまで、彼方でお休みなさいな。
お粂　（無言、考へ込んでゐる）
（間。）
（お關も手持不沙汰。）
（寺の鐘。）
お粂　（つと顏を上げる）お關さん、仍且私が行きませう。
お關　え、何處へ。
お粂　春の家へ。お富と云ふ女にも怨みを云つてやらなきや氣が濟みません。
お關　だつて、今、内の人が迎へに行つてるところですから。
お粂　迎へが行つて歸つて來るやうな人なら、今までに、私をこんな邪慳な目に遇はしてやしません。仙十郎の薄情な事は私が一番好く知つてます。私が春の家へ行かなきや話は何時までも極りません。
お關　だつて、折角内の人が迎へに行つたのに、もう少しお待ちなさい。仙十郎さんが折角歸らうと云ふ氣になつたところへ、お内儀さんが、其姿でお出でなすつたら、歸らうと思つたものも歸らなくなるに極つてます。男つてものは、みんなそんなものですからね。
お粂　顏の痣が醜狀ないと云ふんですか。
お關　と云ふと、氣を惡くなさるか知りませんが……
お粂　痣をかくして行けばいゝでせう。
お關　えゝ。
お粂　成程、私がこんな顏で春の家なんかへ行つたら、反つて仙十郎の恥になりませう。切めて女の身嗜み、白粉でかくれないこともないでせう。髮を撫でつけて、お關さん、手傳つて下さいな。
お關　ぢやあ、どうしても出掛けるんですか。
お粂　行かなきや、私の氣が晴れません。とは云ふものゝ、私が顏を直してゐる間に仙十郎が歸つて來たら、お關さんの心配もなくなるでせう。

お關　さうですね、眞實にさうですね。さはなりたけ、御ゆつくり、私もお手傳ひしませう。

お峯　蚊やりをもつといぶして下さいな。

（と化粧にかゝる。）

（此間四谷怪談の髪梳きにある程の段取りは全部用ふるを可とする。）

お峯　お關さん、これぢや私かお岩樣ね、ホ、、、。

（と物凄く笑ふ。）

（痣を隱す爲め、白粉を濃く塗つた爲め、顏がノッペラポウのやうになる。唇へ紅をつけると、之が莫迦に赤く目立つ。）

（猫の聲。）

お關　叱、叱、氣味の惡い猫たよ。

（蛙の聲。）

（長い間。）

（電燈が消える。）

お關　オヤ、停電かしら。

（又點く。）

（猫の聲。）

お關　叱、叱。

（お峯の顏が段々凄くなつて行く。）

お關　お內儀さん、もう好い加減にしといたらどうです。

（お峯、默つて髪を梳く。）

お關　（或る物を見て、あつ。

（と叫ぶ。）

お峯　どうしたんです。

お關　（恐く、すかし見る）あゝ、吃驚した。あの、白髪のかつらがお化見たいに見えたんです。

お峯　あ、痛。

お關　え。

お峯　お關さん。一寸、毛が櫛に引かゝつて、あ、痛、一寸、引張つて頂戴。

（お關、傍へ寄つて櫛を引く。）

お峯　あ、痛、あ、痛。

（お關、夢中で引張る。櫛に毛がついて取れる。）

お關　やつと取れました。

お峯　まア、こんなに毛が脫けて、段々お岩樣になつて來たわね。

お關　お內儀さん、もう止して下さいな。

（衣裳屋が歸つて來る。お峯の顏を見てわつと叫んで倒れる。お關は其人の歸つて來たのを知らないので、其聲に驚いて、キヤツと叫ぶ。お峯も其の聲に脅かされて、思はず鏡臺から飛退く。）

（仙十郞とお富が來る。二人共醉つてゐる。）

仙十郎　どうしたんだ。（お峯の顏を見て）お峯。どうしたんだ、其の顏は。

お富　親方、一體、これはなアに、大病人だ大病人だつて云ふお内儀さんが、髮の飾りに化粧して、飛んだ七段目のお輕を氣取つてゐるぢやありませんか。

仙十郎　お富、歸らう。

（と引返さうとする。）

お峯　お前さん、待つて下さい。

仙十郎　何だ。

お峯　お前さん、私を捨てる氣かえ。

仙十郎　さうよたア、そんな事は考へたことがねえ。

お峯　何たつて。

仙十郎　捨てるとか、愛憎が盡きるとか云ふのは、未だ何か關係のある間柄で使ふ言葉だ。手前見てえな女は、今更捨てるの何のと云ふだけが無駄見たいだ。

（お峯、矢庭にお富に飛びかゝる。）

仙十郎　何をする。

（と引倒す。）

仙十郎　氣狂ひだ。お富、彼方へ行つてろ。

お峯　（片手にお富の袖を掴み、片手に仙十郎の裾を掴んで）お前さん、私を投げたね、此奴のゐる前で、私に恥をかゝして、もう命は投げ出してゐるんだ、こん畜生。

（と又お富につかみかゝる、一寸立廻り、仙十郎が取つて押へる。）

仙十郎　馬鹿、何てえ眞似をするんだ。

お峯　さア殺せ〳〵。

お關　親方、お内儀さんは氣が立つてゐるんですから、餘り手荒な事をなさらないで。

仙十郎　お關さん、打捨といてくれ。巫山戲やがつて、ヤイ、お富に指一本でも差して見ろ、其分には置かねえぞ。

お峯　お前さん、お前さんはそんなにまで此女が氣に入つて……それはお前さん、餘りぢやないか。もう、昔の事はお忘れか。

仙十郎　又昔談のお浚ひか。昔は昔、今は今よ。柳橋で一流と立てられた、築家の峯吉だから惚れたのよ、口說きもしたのよ。深山の奧の侘住居、手鍋下げてもと時代な文句も並べたのよ。すがれて味も素つ氣もなくなつた、今のお峯に誰が心を殘すものか。俺はお前とは、疾くの昔に緣が切れてると思つてるんだぜ。

お關　まア親方、そんな愛憎盡かしを云はないで、親方だつて、お内儀さんだと思へばこそ、斯うして連れてお歩きに……

仙十郎　オイ〳〵お關さん、下らねえ事は云はねえやうに

してくんな。お前さん達がそんな氣休めを云ふから、此奴が除々自惚れるんだ。俺が此奴を連れて歩いてゐるのは、お囃子だからよ。下座に調法するからよ、それだつて、此頃のやうに病氣勝ぢや、無用倒れだ。首にしようかとも思つてるところよ。

お關　そりや親方、あんまりお内儀さんが可哀さうぢやありませんか。私達も知つてる柳橋の峯吉さん、最初峯吉さんの方ぢや何ともなかつたのを、親方の方から惚れてかゝつて、其の爲めに使つたお金で東京にゐられなくなり、ドロンをしようとした最後の晩、それ程までに思つてゐてくれたかと、初めて峯吉さんの心も動いて、旅へ出るのを引留めて、それから峯吉さんが入れ上げる、評判は高くなる、旦那とは切れる、お座敷は減る、借金は殖える、最後に到頭、又旅へ出た二人ぢやありませんか。お内儀さんの身體が利かないのも、親方の道樂の酬ぢやありませんか。それを思つたら親方だつて……

仙十郎　だからこれまで飼殺し同樣にして置いてやつてるぢやねえか。元々が浮氣だ、樂しむだけ樂しんだら、それで文句はねえ筈だ。自分に色香の失くなつたことは棚に上げて、何時まで男の心を引きつけて置かうとするなア、手前勝手だ、身の程知らずだ。蒼蠅えから默つてりやいゝ氣になりやがつて、何時まで女房氣取りでゐやがるんだ。ヤイ、お峯、ハッキリ云つてやらあ、俺の今の女房は此のお富だ。いゝか、手前は唯のお囃子の三味線彈だ。これから女房氣取りで四の五の云やがつたら直ぐに首だぞ。いゝか、折角の酒がさめて來た。お富、行かう。

お峯　お前さん待つて。

（何時の間にか、先刻、Bが鬚を剃る時に使つた剃刀を手にしてゐたお峯が、仙十郎を呼び留めたかと思ふと、突然斬つてかゝる。）

仙十郎　危ねえ。何だ、刄物なんか持ち出しやがつて、お富、先きへ行け。

お關　お内儀さん、危い。

衣裳屋　親方、お逃げなさい。

仙十郎　頼むぜ。

（と逃げて行く。）

お峯　待て、畜生、離して。

お關　お内儀さん、いけません。

（と捨臺詞で爭ひ止める。）

衣裳屋　お内儀さん、親方は行つてしまひましたよ。

お峯　行つてしまつた。

（とグッタリとなる。）

（衣裳屋とお關はホッとする。）

（と、突然、お峯が剃刀で咽喉を突く。一息に突ききれないので苦しむ。此間髪を容れない。）

衣裳屋　大變た、醫者た〳〵。

お關　私が行つて來る、お内儀さんを頼むよ。

（と出て行く。）

（お峯が苦しむので、衣裳屋は傍へ寄れない。）

（不圖鬘の毛が首にさはる。思はずキヤットー叫んで倒れる。）

（お峯は段々に死んで行く。）

——幕——

下の卷

或る町の旗亭の控家

前幕より三年を經たる日の灯點し頃。下手に玄關、中央に茶の間、上手に離屋あり、周圍は庭、井戸あり。緣側に牡丹燈籠。

幕明く。

此の家の女房お八重、所在なげに坐りゐる。

死んだお峯が突然訪れ來る。

お峯　御免下さいまし。

お八重　ハイ、（出迎へる）被來いまし。

お峯　あの、元役者をしておいでの、中山仙十郎さんのお宅は此方で御座いますね。

お八重　ハイ、左樣でございます。唯今は止めて居りますが、仙十郎の宅で御座います。

お峯　お目にかゝつて、お話したい事があつてわざ〳〵遠方から參つたもので御座いますが、お目にかゝらして下さいませんか。

お八重　ハイ、あの、生憎、唯今留守でございますが。

（とぢつとお八重の顏を見る。）

お八重　何誰樣で被在いませうか。

お峯　お峯と申すものでございます。

お八重　お峯さん。

お峯　さう申せば、仙十郎さんにはお分りになります。三年前にお別れして、今日久し振りでお話しのしたい事があつて伺ひました。お歸りまで待たして頂きたう御座いますが。

お八重　ハイ……。

（と躊躇。）

お峯　是非お目にかゝりたいので御座います。

（とキツパリ云ふ。）

お八重（茶なすゝめなどする）

お粂　どうぞもうお關ひ下さいませんやうに。あの、失禮た事を申すやうで御座いますが、貴方が今の仙十郎さんのお内儀さんで。

お八重　申し遲れました、八重と申します、何分よろしく。

お粂　では、あのお富さんも矢張り捨てられたんですね。

お八重　お富さんのことをよく御存じですね。

お粂　それは知るだけの譯があつて知つて居ります。仙十郎さんはよくお内儀さんをお取換へなさいますね。

お八重（ムッとする）失禮ですが、どう云ふ御用でおいでになりました。

お粂　仙十郎さんにチイット折入つてお話ししたい事が御座いまして……。何方へ行つておいでになります。

お八重　一寸用達に參りました。

お粂　一寸用達……さう云つて昔はよく外の女の處へ行つたものでしたがね。お内儀さん、貴方もお氣をつけなさらないと、いくら口惜しがつても追付かないやうなことがお出來上りますよ。

お八重（益々ムッとして）貴方がどう云ふ御用で被來つたか知りませんが、貴方の口から良人の事を彼是伺ひたくは御座いません。

お粂　左樣で御座いますか、でもね。（と氣味惡く笑ふ）

お八重　私、しかけた用事が御座いますので、仙十郎の歸りますまで、彼方でお待ち下さいまし、御案内致します。

お粂　私は何方でも構ひませんけれど、では其方で待たして頂きます。

（と離屋に入る。）

（お八重は出て來て思案。）

（此家の入夫となつた仙十郎が歸つて來る。）

仙十郎　オイ、今、歸つた。オイ、お八重。

お八重　ハイ。

仙十郎　どうしたんだ、暗いところで、電氣は來てゐるんだぜ。

お八重　オヤ、さうですか。

（と立つてスヰッチを捻ぢる、點かない。）

お八重　オヤ故障かしら。

仙十郎　外の家は點いてゐるんだが、直ぐ誰かを電燈會社へやつたらどうだ。

お八重　さうしませう。お福、お福。居ないのかねえ。

仙十郎　仕樣がねえなア。

（と立つて燈籠に灯を入れる。お八重の變つた樣子に

目をつける。)
仙十郎　オイ、どうしたんだ。ボンヤリ考へ込んで、何かあつたのか。
お八重　お前さん、お峯と云ふ人を知つておいでだらうね。
仙十郎　何、お峯。(とギヨッとする)
お八重　知らないとは云はせないよ。
仙十郎　知つてゐりや、どうなんだ。
お八重　一體どう云ふ關係の人なの。
仙十郎　俺の以前の女房だ。
お八重　女房？　お前さんの女房は、私の知つてゐる限りぢや、あのお富と云ふ女だつたがね。
仙十郎　お富の前の女だ。
お八重　ヘエー、あの女がね。跛者で痣のある、あのお化け見たいな女がね。
仙十郎　オイ、お前はお峯のことを誰に聞いた。
お八重　誰にも聞きやしませんよ。分る時には自然に分るものですからね。
仙十郎　莫迦な事を云へ、お前がお峯の顏の痣や、跛者のことまで知る道理がない。と云つてお峯が死んで三年。
お八重　え、死んだ。
仙十郎　ウム、死んだんだ。此處等でお峯を知つてるものは一人もゐない筈だがな。
お八重　お前さん、何は私が薄ノロだつて、胡魔化すのも大槪にして下さい。
仙十郎　何。
お八重　お峯さんが死んだなんて、何處まで白化れてゐるんです。
仙十郎　オイ、お八重、お前、何を云つてるんだ。何か感違ひしてやしないか、お峯と云ふのは、顏の此處のところに痣のある。
お八重　えゝ。
仙十郎　跛者の。
お八重　えゝ。
仙十郎　なら三年前に死んでしまつた。
お八重　だつて、私は會つたんですもの。
仙十郎　何。
お八重　此處へ訪ねて來ましたもの。
仙十郎　えゝ、お峯が。
お八重　えゝ。
仙十郎　お峯と云つたか。
お八重　えゝ。
仙十郎　そんなことはない、お峯は確に死んだんだ、咽喉を突いて。

お八重　變死ですか。
仙十郎　ウム。
お八重　ぢやあ彼處にゐるお峯さんは誰だらう。
仙十郎　何、來てゐるのか。
お八重　彼處でお前さんの歸りを待つてますよ。
仙十郎　本當に來たのか。
お八重　兎に角此處へ呼んで來ませう。
仙十郎　オイ、待つてくれ……そんな筈はない。お峯が訪ねて來る、そんな事のある筈がない。俺の知らない人ぢやないか。
お八重　いゝえ、お峯と云へば分るつて云つてました。さう／＼三年前にお別れして、今日久し振りでお目にかゝつてお話があるつて云つてました。
仙十郎　三年前……
お八重　兎に角呼んで來ませう。
（と離屋へ行く。）
お八重　（聲）オヤ、何處へ行つたんだらう。お峯さん、お峯さん。
（離屋から出て來る。）
お八重　どうしたんだらう。歸るなら、此處を通らなきやならないんだけど。
仙十郎　間違ひだ、お前が何か、間違へたんだ。死んだお峯の來る筈がない。
お八重　だつて確に來たんですよ。
仙十郎　どうして來た。
お八重　どうしてつて、ちやんと歩いて、來た證據には下駄がある筈だ。
（と玄關へ行く。）
お八重　オヤ。
仙十郎　どうした。
お八重　ない。
仙十郎　えゝ。
お八重　確に此處へ脱いで、私が小脇へ片附けて置いたんだ……お前さん、お峯さんが變死をしたと云つたね――キヤツ。
（と叫んで仙十郎に取縋る。）
仙十郎　そんな筈はない。今時、幽靈があつて堪まるものか。お前が何かの見違へか、思ひ違ひをしたんだ。何しろ、暗いのがいけない。早く電燈の故障を直さなければ、誰もゐないのか。
お八重　私、自分で行つて來ます。
仙十郎　ウム、さうしてくれ。
お八重　其の間お前さんは、――
仙十郎　其の間、酒でも飲んで……イヤ、それよりに寢よ

う。床を敷いて行つてくれ。
お八重　ハイ。
（とお八重、床を敷いて出て行く。）
（仙十郎は寢ても寢苦しく、寢たり起きたりする。）
（雨。）
（燈籠の灯が消える。）
（お峯の幽靈が顯はれる。）
（これより樣々の仕掛けにて、仙十郎はお峯の幽靈に苦しめられ、跪き苦しんだ末、庭の井戸へ墜落しようとした一刹那、舞臺暗くなる。）
（舞臺明るくなる。）
（電燈の光り燦い下に仙十郎が蒲團の上に起き上つてゐる。）
（傍にお八重。）
お八重　（團扇の風を送りながら）どうしたのさ、うなされて。
仙十郎　夢でよかつた。
お八重　どんな夢を見たのさ。
仙十郎　だが併し。今日、俺の處へ訪ねて來たものはなかつたな。
お八重　えゝ、誰も。
仙十郎　顏に痣のある、跛者の女は……
お八重　（笑つて）來ませんよ。
仙十郎　今日、電燈に故障はなかつたか。
お八重　いゝえ。
仙十郎　俺は今日、どうして寢たんだつけな。
お八重　いやですね。よそから歸つて來ると、氣分が惡いと云つて、直ぐ床を取らして寢てしまつたんぢやありませんか。
仙十郎　さうか。
お八重　大變な汗ぢやありませんか、寢衣もグショ〳〵だ。着替へる前に井戸で身體でも拭いたらどうです。
仙十郎　井戸。（とギヨッとする）
お八重　どうしたんです。
仙十郎　今、實はあの井戸へ墜ちた夢を見たんだ。
お八重　どうしてゞす。
仙十郎　幽靈に苦しめられてね。
お八重　まア莫迦々々しい。今時幽靈の夢を見るなんて、餘程どうかしてますね。さ、拭いて上げませう、庭へお出なさい。
（と仙十郎を促して庭へ降りる。）
お八重　あ、金盥とタオルが入るね、女中はもう皆な寢ちやつたらう。

峯の聲（お峯に[illegible]儀）お内儀さん、御用ですか。
仙十郎（ギヨツとする）誰だ。
お八重　まア、何てえ聲を出すんでせうね。今日、貴方の留守に御目見得に來た女中ですよ。
仙十郎　女中（と訝しさう）何と云ふんだ。
お八重　お峯と云ふんです。
仙十郎　お峯、お峯と云ふ女中が來たのか……。オイ、本當に今日電燈に故障はなかつたか。
お八重　何を云つてるんですね。お靜、お前未た起きてゐるんなら、金盥とタオルを持つて來ておくれでないか。
お靜　ハイ。
仙十郎　オイ、本當に誰も訪ねて來なかつたか。
お八重　來ませんと云ふのに。
お靜　お待遠樣。
（と、金盥にタオルを添へて、持つて出る。恙のないお峯の顏にそつくり。）
仙十郎　あゝ。
（と叫ぶ途端に井戸繩を持つてゐた手が外れて、眞逆樣に井戸へ墜ちる。）
お八重　あれ、大變、誰か來て、お靜、早く皆なを呼んで來ておくれ。
（お靜は面喰つて中へ入る。）

お八重　貴方、貴方。
（此時、蒼白い光が宙を飛ぶ。）
（お八重は氣を失つて倒れる。）
（お峯の物凄い笑ひ聲が聞える。）

——幕——

大正十四年七月五日全部脱稿
於大阪ますや

夜の鳥（一幕）

人

岸澤理作
妻　お滑
長女　お繁
次女　靜枝
長男　賢太郎
丸茂釧之助
中井　均
太吉
岩井家お縫
其他近所の若い者

時

現代、九月上旬より中旬に至る

所

神明に近い、芝片門前の岸澤理作の家。

平家建、華奢に見える地所は、下の方が稍廣く、八疊と六疊程の二間、何れも小かな庭に面してゐる。下手の奥の正面上手寄りに出入り、襖は取外して、其の半分だけの幅の簾が吊してあるので、見物席から尙其の奥が見通せる。其處は一疊程の疊廊下とも云はれない程のものが下手へ延びて行つて、其疊の終つてゐるところが玄關の上り口となつてゐる。然し此の玄關の上り口は、下手の部屋の壁の蔭となつてゐるので見物席からは見えない。疊廊下の奥は正面に半戸棚を持つた壁、下手へ折曲つて稍奥に出入り、此處は障子が閉まつてゐて、其の奥は見えない。此障子も見物席からは其の一端しか見えない。下手の部屋の横は、其半分程が床の間、此の床の間ゐ床の間として用ひず、上下に半分に板で仕切つて、下に箪笥や用箪笥などを入れ、上に神棚や、緣起棚や、娘を藝妓に出したことを、それ程の恥とも思つてゐない親達の……寧ろは親の浮氣つぽい派手好きな趣味を表はし　樣々の品を所狹しと並べてある。床の間に半分取られた後の半分は下が地袋、上が出窓、窓には簾が吊してある。

上手の部屋は正面が壁、但し此の壁も同じく上の方に半戸棚と佛壇とを持つてゐる。佛壇の大きさは半戸棚の三分の一程で、相當古びがついてゐて、由緒あり氣に思はれる。

横は其半分が襖、半分が床の間、部屋と部屋との間に

は三尺程の簾を吊す。下手の疊廊下と上手の部屋とは三尺の開き襖て出入りが出來るやうになつてゐる。此の各々の部屋は何れも庭に面して緣側を持つてゐるが、下手の方は軒に風鈴を吊し、岐阜提灯を吊し、蟲籠を吊し、緣側に金魚鉢を置き、絹糸草の鉢などが置いてあるのに、上手の緣側の方は、軒に皮砥がポンヤリ吊下つてゐるだけで、上手と下手と、住む主が違ふかと思はれるまでに、部屋の飾り付けが相違してゐる。唯上手の床の間に、雜誌が其背中を見せて堆高く積み重ねられてある隣に、其の雜誌と異樣な對照を示して、鏡臺は左のみ立派ではないが、鏡臺掛けの派手なのが、殺風景な上手の部屋を非常に明るく見せてゐる。そして、可哀想に何時も床の間に片附けられてある机が、部屋の隅に佛壇の前に邪魔らしく押付けられてゐる。

其の一

神明樣のお祭りが軈て始まらうとする頃の午後。

近所に長唄の師匠があるらしく、陽氣な三味線の音に打混つて、仍且近所かららしい、熱苦しい鍛冶屋の鐵を叩く音が聞えて來る。

下手の部屋で主人の理作と、其の次女の靜枝——藝名を關綱と云ふ——と關綱の抱主の岩井家のお縫とが對座して話をしてゐる。各々の膝の前には空になつた氷水のコップが置いてある。外に一つ主のないコップが仍且空になつた儘、靜枝とお縫との間に置かれてある。

幕開く。

話が不圖途切れたところ、三人が各自の物思ひに耽つてゐる。

短い間。

お縫　（三十四五、商賣人とは見えない温厚しい拵へ、煙草を叩いて）さア、もう何時かしら。（四邊を見廻す）

理作　（五十歳前後、底意地の惡さうな利己的な男）さア、宜しいでせう、もう少しお談しなすつて被在い。（奥の方へ向つて）お増、お増。

お増　（聲）ハイ、唯今。（軈て氷の打掻きの入つた鉢とコップとを載せた盆を片手に持ち、片手にシトロンの壜を二本程提げて出て來る。四十七八、何處かに派手好きな色つぽい樣子が見える。殆ど無教育で稼業買ひの間違だらけの理窟を、猾巧振つて饒舌り立てる傾がある）

お縫　あら、お母さん、私なら、もうどうかお構ひなく。

お増　（お縫と靜枝の間に坐つて）あら、厭ですね姐さん、そんな事を仰有つちや。お構ひをするどころか、眞實に

失禮ばかりしまして、何かと思ひましても眞實に何にもないところでしてね。

お縫　いゝえ、もう、どうか那樣御心配はなさらずに、そろ〳〵もうお暇をしなけりやなりませんから。

お増　まア、宜敷いぢや御座いませんか。やつと片蔭が出來たばかりで、往來の暑さと云つたらそりや迚も大變ですわ。まアもうちつと御緩りなさいまし。

お縫　えゝ、有難う。

お増　眞實に何時までお暑いんで御座いませう。それでも朝夕は少しはましで御座いますけど、日中のお暑さはね、去年より今年の方がお暑さが嚴しいやうぢや御座いませんか、もう神明樣のお祭りだと申しますのにね。

お縫　あゝさうですね、もう神明樣のお祭りですね。（成ろべくお増の相手になるまいとしてゐる樣子）

お増　今年はどうか餘り降らしたくないもので御座いますわね。

お縫　全くですね。

お増　えゝ、今日見たいにお暑い日には一降り欲しいと思ひますけど、又此の神明樣のダラ〳〵祭のダラ〳〵雨と來ては眞實に鬱々してしまひますもの、ね。でも二百十日も無事でしたし二百二十日も無事らしさうですから、今年はそんなきつい降りも御座いますまい。

お縫　だと結構ですね。

お増　暫く洪水の話も聞きませんけど、聞いて結構なお話ぢや御座いませんからね。

お縫　眞實にね。

お増　洪水ぢや隨分可哀想なお話も御座いましたね。これは私が本所の知つてゐる人から聞いた話で御座いますけど……。

（理作の苦々し氣な顏。）

靜枝　（二十五、上品な女、然し藝妓としての色つぽさは持つてゐる。溫和な美しい顏形、殊に其目が同情の深い事を明白に語つてゐる）お増さん。

お増　え。

靜枝　（無言）

お増　何だい、どうしたのさ。

（靜枝は密と父の方へ視線を送る。）

理作　（苦り切て）下らん話は止めなさい。

お増　オヤ、さうですか。（膨れる）

お縫　（稍慌てゝ）いゝえ、そんな事はありませんよ。私は面白く伺つてるんですから。

（極く短い間。）

（氣不味い沈默。）

（嬰兒の泣く聲。）

靜枝　アラ（思はず宙腰になる）お母さん、敏さんぢやなくつて。

お増（倘不平らしく）さうかも知れないね。

お縫　敏さんは。（心持ち周圍を見る）

靜枝　戸外へ行つてますの、太吉さんが抱いてつたんですけど。（ソハ〳〵してゐる）

お縫　たきさんて云ふと……。

靜枝　近所の人ですの、指物屋の職人なんですの。（急に眩しくなつたやうな顔をする）

お縫（其樣子を見て）執拗く聞くやうですけど、敏さんは質實でせうね。

靜枝　え。

お縫　丸茂さんの子ですね。

靜枝　あら、姐さんは太吉さんの事を變に思つて被在るんぢやありませんの。厭ですわ、あんな足りない人。

お縫　え。（聞き返さうとする）

お増（先刻から物を云ひたさうにムヅ〳〵してゐたが、耐らなくなつたやうに口を出す）太吉さんなら大丈夫でございますよ、そりやあ、此娘に惚れてゐることはゐるんでございますが、それが貴方、馬鹿で……まア、白痴といふ程ぢやないんですけど、まア足りないんで御座いますね。

靜枝　あらお母さん。

お増（機嫌よく調子づいて）そりや可笑しいんでございますよ。此娘の爲めと云ふと、自分の仕事なんか打捨かしにしといて働いてくれますの。一度見て御覧なさいまし、此娘の前へ出ると、斯ういふ風な形に畏つてしまひましてね、ホヽヽ、まるで犬でございますね。でも、白痴ながらも及ばぬ戀と云ふ事はよく知つてゐると見えまして、好きだとは云つてますものゝ、淫らしい事一つ云つた事はございません。そりや敏を可愛がりましてね、まるで自分の子供のやうにしてゐるんで御座います。早く云やあ此娘に惚れてゐるんで敏を可愛がる理窟なんですけど、白痴なりに些と可愛いゝ處があるぢやございませんか。

（理作は愈々不快氣に。）

（靜枝も苦々しい顔をしてゐる。）

（鍛冶屋の鐵を叩く音。）

（色つぽい三味線の音色が緩に響く。）

お縫（お増に調子を合せる事に努めて）まア、可愛い人ですね。いゝえ、さう云ふ人達にはよくそんな事があるものですよ。自分の思つてゐる女が外に好きな人があらうが、嬰兒を産まうが嫉妬らしい事一つ云はずに、自分ばかりは其人を思ひ續けてゐるなんて云ふのが。……さ

うですね、そんな人は仍且足りないと云ふのか、ズバ抜けてゐると云ふのか、何方にしても普通の人にやありませんね、普通の人だとどうしても嫉妬になりますからね。

静枝　旦那はそんなに鋭ぐつて被在るんですか。

お縫　今も云ふ通りどうしても俺の子ぢやないつて承知をなさらないのさ。

静枝　だつてお七夜に名前まで自分で敏と附けて來て下すつたんぢやありませんか。

お縫　それがさ、誰かにしやくられたらしいんだよ。闘彌さんには外に好い人があつて、それが眞實の敏さんのお父さんだなんて、下らない事を云ふ人があつてね。

静枝　まア、誰でせう。

お縫　大概は見當は附くぢやないか、お前さんと丸茂の旦那を競爭した人さ。

静枝　あ、あの人。

お縫　極つてらあね、お前さんは少しも騒いぢやゐなかつたけど、あの人は可也猛烈に旦那を騒いでたからね。それを到頭お前さんに取られたんだから。尤もお前さんの方ぢや餘り氣が進んでゐなかつたけど、まア、そんなこんなで嫉みもあらうし、好い評判はしたがらないものでね。妹の闘彌さんは土地でも一流の賣れつ妓だけど、姉さんの絹香さんと來たら……いえ、下らない事を云ひたがるもので、それもつまりはお前さんが賣れつ妓だからさ。

静枝　私も全く、あの旦那のお世話にならないか、お宅の御厄介にならなかつたら宜う御座んしたわ。

お増　まア、お前何を云ふだんね。どうか姐さん、氣を悪くなさらないで、血の道の加減で時々變な事を申しますので。

静枝　いゝえ、お母さん、姐さんは私の心持ちをよく御存じですわ。ねえ、お父さん、姉さんを早くどうにかして上げる事は出來ないんでせうか。

理作　何を云ふんだ、藪から棒に。

静枝　姉さんだつて先日から廢めたい／＼つて云つて來てるぢやありませんか、あれだけ稼いだんですもの、もう親許身受けにしても大したお金でなく濟むだらうと思ひますわ、姉さんに出てられるのは、私もまつたく辛いのよ。

理作　それはお前の辛いのはよく知つてゐます。

静枝　知つて、下さるんなら姉さんをどうにかして上げて下さいな。新橋は廣いから姉さんを私の姉さんと知つてゐる人はそれ程は居ませんけど、でも闘彌さんは姉さんが不見轉ですもの、旦那の二人や三人取るのは、何でも

ないでしようよなんて、有る事無い事蔭口を利くんですもの。こんだの事だつて必とそんな事を云つて旦那を焚きつけたのに違ひありませんわ。

理作　だが併し、私は別にお繁を不見轉にするつもりで藝妓にした覺えはありません。

靜枝　まア、それぢや姉さんが勝手に不見轉を始めたと仰有るの、それはお父さん餘りと云ふものよ。

理作　餘りとは何が餘りだ。一體此頃はお前にしろ、廣太郎にしろ、殊に廣太郎は二言目には親が餘りだと云ふ。私がどう云ふ事をしたと云ふんだ。一家が立つか潰れるかと云ふ境に娘を藝妓にしたのが間違つてゐると云ふのか。

靜枝　私はそんな事を云つてるんぢやありません、お父さんの仰有り方が餘りだと云ふんですわ。

お増　まア、何だね、人樣の前で、涙を零したりして醜狀ない。姉さんをどうにかするにしたつて肝腎の丸茂の旦那のお心をどうにかしなければ明日からでも、忽ち私達が困つてしまふぢやないか。

靜枝　旦那なんかどうでも宜う御座んすわ。旦那の子でないなら私一人の子にして立派に育てゝ行きますから。其代り旦那にお世話にもなりません。

お増　まア、下らない、何てえ事を云ふ子だらうね、今時、旦那が無くつてどうしてやつて行けるつもりだい、一人でもやつて行けないのに、子供を抱へてどう暮せると云ふんだらう、冗談も大概にしてお置き。（お縫に）斯う云ふ一酷な子ですから、必と旦那もそんな事でお腹をお立てになつて被在るんでせう、其處んところは、姐さんからよくお取做し下すつて。何と云つたつて、あの子は旦那の子に違ひないんで御座いますから。

お縫　それは私も云つてるんですよ、何と云つたつて、貴方に似てゐるのが何より確な證據ぢやありませんかつて云つても、そんな事が何の證據になる、他人の空似といふこともある。と斯うですもの。

お増　困りましたね。貴方、何とか好い智慧はないもんでせうか。

靜枝　子供が出來たから、それで旦那の方で逃げを打つてゐるのよ、大概判つてるわ。

お縫　私もさう思ふのさ、それぢや仕方が餘りだからね、手を切るなら切るやうにして切て貰はなきや藝妓をしてゐるものが耐らない、確に丸茂さんの子だと云ふんなら、私の方でも掛合ひやうがあるからね、私は又たにかと思つたから。

（理作、靜枝の顏を見る。併しそれには大した意味はない。）

靜枝　あら……斷然そんな事はありません。

お縫　大變堅く出たね。ぢや、何誰も此事は私に任しといて下さい。殊によつたら、此處へ丸茂さんをお連れして來るかも分りませんから、それでよく話を附けませう。私も實は腹を立つてゐるんですよ。何ぼ何だつて餘り卑怯ですからね。子供が生れると云ふのは、遊びや冗談ぢやないんですからね、假にも親と名が附くんぢやありませんか、さうしたらもう少し考へさうなもんですがね。そんな親が得てして後で親風を吹かせたがるもんですよ。子供こそ頂實に好い災難ですね……まア圖に乘つて大變お饒舌をしてしまひました。では今の事は萬事私に任して下さい。

お増　（稍不氣味さうな顏）左樣で御座いますか、では何分お願ひ致します、頂實にお構ひも致しませんで。

お縫　阿彌さん、身體を氣をつけてね、產後を大事にしないと、取返しのつかない身體になつてしまつたりするさうだからね。

靜枝　えゝ、有難う、姐さんもお大事に。皆さんに宜しく。早く私もお宅へ歸りたう御座いますわ。

お縫　皆なも待つてるよ。ではお父さん、御免なさい。

理作　（苦い顏をしたまゝ）御免下さい。

（お縫出て行く。三人送り出す。格子の開く音。閉まる音。）

（左樣なら、御免なさいと云ふ聲。三人が引返して來る。）

（理作は緣側に出て絹糸草を觸つて見たりしてゐる。心の中では今お縫に云はれた親風を吹かす云々の事と、靜枝が餘りだと云つた事とを思ひ出して一人プリプリしてゐる。お増はシトロンの瓶など片附けて臺所に行く。）

（靜枝は凝と物思ひ。父親の姿を見詰めては何か云ひたさゝうにしては機會が附かないので幾度か默つてしまふ。）

靜枝　（思ひ切て何か云はうとする）

理作　（偶然遮るやうに）お増、手拭と石鹸を出してくれ。顏を剃つて湯へ行つて來るから。お増。聞えないのか。

お増　ハイ。（聲だけ）

理作　（暫く靜枝が突立つた儘見詰めてゐる。軈て出て行かうとする）

靜枝　お父さん。

理作　何だ。

靜枝　頂實に姉さんをどうとかして上げて下さる譯には行かないんですか。

理作　行きません。今の私の身分で何が出來ると思ふ。お前達に世話はして貰つてる身分ぢやないか。

靜枝　ですから猶更して上げなければならないと思ひますわ。姉さんは何も好きこのんで自分から藝妓になつたんぢやないんですよ。

理作　そんな事は云はれなくつても知つてます。

靜枝　知つてたら……。

理作　靜枝、おしげはもう二十七だぞ、何時まで親の厄介にならうと云ふんだ。自分の身の始末は自分でつけられる筈だ。

靜枝　だつて……。

理作　二十以上の子供が三人もあつたら、私も、もう好い加減に樂をさして貰つていゝ筈だ。してやりたかつたら、お前がしてやんなさい。お前が家内中で一番收入の多い身體ぢやないか。

靜枝　（無言）

理作　（勝誇つたやうに出て行く）

お増　（蔭で）靜枝、鳥渡買物に行つて來るからね。

（間。）

（八幡巻賣りの聲。）

（靜枝は沈と物思ひ、不圖顏を上げて窓の方を見る。）

靜枝　アラ（ト立つて行く）なアさん、此處よ、此處よ、何處へ行つたの。

中井　（聲だけ）此處かい、お前の家は。

靜枝　えゝ、此處よ。片門前で、知つてるぢやありませんか。

中井　さう／＼、ついうつかりしてゐた。

靜枝　上つてかない。

中井　誰か居るんぢやない。

靜枝　いゝえ、誰れも。居たつて可いぢやないの。

中井　家の人に顏を見られると少し極りが惡いからな。

靜枝　大丈夫よ。お父さんはお湯へ行つたし、お母さんはお使ひに行つたし、私一人きりだから。

中井　ぢやア、寄つて行かうか。

靜枝　えゝ、お入んなさい。（窓の側を離れる。座布團など敷いて待つ）

（中井均が入つて來る。）

中井　（二十五六、會社員）好い家だね。

靜枝　被來い。

中井　（些と改まつて）今日は。

靜枝　どうして。

中井　どうもしない。

靜枝　變な返事。

中井　何故。

靜枝　どうしてつて云ふのに、どうもしないつて。
中井　だつてどうもしないもの。お前こそどうしたい。
靜枝　私。私は……私だつてどうもしない。（笑つてゐる）
中井　必とどうもしないか。
靜枝　えゝ。煙草持つてない。
中井　ウム（袋ごと渡す）身體はどうだい、もうすつかり快い。
靜枝　えゝ、有難う、お蔭樣で。（一本吸つて中井に渡す）
中井　見ろ。
靜枝　何を。
中井　どうもしないつて、どうもしてるぢやないか。
靜枝　ぢやあ貴方だつてどうしたの。どうしてこんな處を通つたの。
中井　用があつたからさ。
靜枝　どんな用。
中井　どんな用つて。
靜枝　知つてゝよ。
中井　云つて御覽。
靜枝　家の前を通つて見たんぢやない。かう、外に用があるやうな振りをして。
中井　背負つてらあ。
靜枝　違ふ。

中井　實は。
靜枝　そら御覽なさい。
中井　だつて仕方がないぢやないか、隨分會はないもの。切めて、どんな家だか、家だけでも見て置きたいと思つてね。併し我ながら意氣地がないと思つたね。此處だなと思つたら急に胸がドキ〳〵して來たんだからね。
靜枝　だから私も直ぐ聲をかけたのよ、テレなかつたでせう。
中井　うむ。
靜枝　仍且夢見が何實だつたんだわ。昨夜夢を見たのよ。
中井　俺なんか毎晩だ。
靜枝　ヨタ。毎晩夢が見られて。
中井　見られるとも、寢衣を裏返しに着て寢るんだ。
靜枝　なアに、お呪ひ。
中井　小町の歌にあるんだ、いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣を返してぞぬる。それから出來た歌で、思ふ事そのまゝ告げよ枕神、我衣手を返してぞ寢ると云ふ歌を枕に三度云つて寢ると、必と思ふ人の夢が見られるんだ。
靜枝　見られた。
中井　見てゐるのが證據ぢやないか。
靜枝　何てえ歌。

中井　思ふ事其まゝ告げよ枕神。
靜枝　思ふ事其まゝ告げよ枕神。
中井　我衣手を返してぞ寢る。
靜枝　我衣手を返してぞ寢る。……思ふ事其まゝ告げよ枕神、我衣手を返してぞねる。（反覆す）覺えた……だけど寢衣を裏返しに着るのが大變ね。極りが惡いな弟にでもそんなところを見られたら……困つちやふわ。
中井　弟は。
靜枝　未だ歸つて來ません。貴方、毎日會社へ行つてる。
中井　ウム。
靜枝　眞面目に仕事をして下さい。
中井　ウム……先日巫女を寄せに行つた。
靜枝　アラ、そんな事ばつかしてんのね。何日頃。
中井　先月の二十二日だ。
靜枝　晝間の三時頃ぢやない。
中井　ウム。よく知つてるね。
靜枝　それでだ、私、其時分に眠くつてね。
中井　おや當つてるのかしら。
靜枝　あの前の晩が暑かつたでしよ。寢苦しくつて、迚も寢てられないので、夜明けに起きちやつたの。それで眠いんだと思つてたら、貴方が巫女を寄せたのね、隨分甚いと思つちやふわ。

中井　俺も最初はそんな氣ぢやなかつたんだが、龜井戸へ行つたついでに、ついフラ／＼と飛込んでしまつたのさ。入つてつた時は可成り極りが惡かつたけど、思ひ切てね、生き口を寄せて頂きたいんですがと云つたの、すると、では此方へてんで二階へ通されたのさ、二階座敷があつて、其一間に神樣が祭つてあるのさ。
靜枝　巫子つて、どんな人。
中井　普通のお婆さんさ。二階へ通されて、生き口をお寄せになるのは男の方ですか、女の方ですかつて云ふのさ、極りが惡かつたが女ですつて云ふと、其方とは會へない事情になつてるんですねと云ふからさうだつて云つてやつた。すると、婆は……自分の事を婆々つて云ふんだ、婆はお頼みを受けて口を寄せは致しますが、私の口から先きの方の本心が知れて、それが貴方にとつて都合の惡い事でもお怒りなすつたりなんかしちやあいけません、婆は唯若い方の迷ひを晴らす爲めに口をお寄せするんですから、どうか其おつもりで。婆が今口を寄せますと、其方のエレキが婆の身體に通じて、婆の身體は其方にお貸ししたも同じ事ですから、私を其方だと思つて、貴方が迷つて被在る事をどし／＼お尋ねなさいましと斯う云ふんだ。
靜枝　眞實かしら。

中井　さう云ふんだね。それで、烏帽子を冠つて、直垂を着て、初めたよ。

靜枝　何を聞いたの。

中井　何にも聞かなかつた。

靜枝　あら。どうして。

中井　だつて莫迦々々しいんだもの。斯う御幣を持つて、何だか祝詞見たいな事を云つたかと思ふと、呼鈴を鳴らしたんだもの、チン〳〵と。

靜枝　呼鈴を。

中井　ウム、何ぼ今時の世の中だからつて、口を寄せるのに呼鈴を鳴らす奴もないぢやないか、それに幾らお前と思へつたつて、鐵蓋茶のお婆さんを、お前と思へつこがないもの。

靜枝　それでどうして。

中井　呼鈴を鳴らして、又何だか唱へてると、お前のエレキがかゝつて來たんだね。御幣を持つた儘身體がガタガタ顫へて來たんだ。

靜枝　アラ、いけ好かないの。何て云つて。

中井　突然怒られちやつた。

靜枝　誰に、私に。

中井　ウム。私の心を知つてる癖に、何だつて口を寄せたりするんだつて。

靜枝　（獨語のやうに）そりやさうだわ。

中井　（靜枝の獨語を些と聞きはぐつて）先方だつて商賣人だアね、巧く尻尾を掴まれないやうに、突然私の心を知つてる癖にと怒られたら、何にも聞けなくなつちやはあね。

靜枝　（中井の顔を窺ふやうに見ながら）よく〳〵子供の事を聞かなかつたわね。

中井　何故さ……聞かなきやならないことかい。

靜枝　（口籠つて）さうぢやないけど……。

中井　俺の子と云ふ事が解つてゐるのに、下手な事を聞いて、其巫子が、又どうした緣で丸茂さんと知り合ひでないとも限らないのに、そんな下らないことが聞かれるかい。

靜枝　それもさうね。

中井　それとも俺の子ぢやないと云ふのかい。

靜枝　あら、そんな事はありやしないわ。

中井　そんなら何だつてそんなことを聞くんだい。

靜枝　えゝ唯何んとなく……何でもないのよ。

中井　（深くは咎めず）それに、眞實にお前と云ふものが乘憑つてゐるのかどうだか怪しいーね。こんな事を云つたんだ。俺がね、嘘か眞實か試してやらうと思つて、そんなにお前が俺を思つてゐるなら、今晩何處でも可い、

往來でも可い、俺がお前の家の近所まで行つても可いから、何處かで會はうつて云ふと、そりや私も會ひたい、會ひたいのは山々だが、今、そんな事をしてはお互ひの爲めにならないから、もう少し辛抱しませう、それとも貴方がどうしても會ひたいと云ふんなら、私も貴方の云ふ處へ出掛けて行きますと云ふんだ。さう云はれて見りや、俺たつて、お前の病氣の事を知つてゝ、會はうとは云へないぢやないか、巧く尻尾を捉まらないやうに云ひ拔けをしてゐるんだね。それでもう聞く事は何にもないと云ふと、何とかしてさらばぞやてな事を云つて神は上らせ給ひけりさ。だけどこんな事を云つたぜ、唯今お寄せした方は、どんな方か存じませんが、貴方が苦勞して被在るよりもつと大きい苦勞をして被在います、婆の身體に感じたエレキは並大抵のものでは御座いませんつて。

靜枝　それは眞實だわ、だけどもう、口を寄せたりするの、お止しなさい、何方にしたつて罪だから。（暗い顏）

中井　それに就て俺は少し眞面目な相談があるんだが……
……。

（格子の開く音。閉まる音。）

（噂の主の太吉が靜枝の子の徹を抱いて入つて來る。愚直らしい男。）

太吉　靜枝さん、徹さんが寢てしまつた。

靜枝　あら寢てしまつて。どうも濟みませんでした。（抱き取る）寢かしてやりませう。（中井に）貴方、濟みませんが其蒲團を。

太吉　蒲團かい。（と素早く六疊の一隅に疊んであつた季節の薄蒲團を取つて）何處が可いだらう。涼しい處が可い……此處が可いだらう。（蒲團を敷く）

中井　（靜枝の抱いてゐる徹の寢顏を覗き込んでゐる。其顏には不思議さうな、又懷しさうな感情の動いてゐるのがよく見える）此子だね。

靜枝　（極く短い間）えゝ。

中井　フーン。（と飽かず見入つてゐる。些と頰邊を觸らうとする）

靜枝　（其手を叩いで押し除ける）不可ませんよ、眼を覺ますぢやありませんか。

中井　目を覺ましたつて構ふまい、眞實のお父さんの……。

（靜枝は思はずハツトして顏を赤くする。中井も飛んだ事を云つたといふやうな顏で太吉の顏を見る。太吉は何にも知らず、床を敷いた處に枕蚊帳をかけてゐる。靜枝は默つて徹を寢かして枕蚊帳をかける。そして元の席へ戻る。鍛冶屋の鐵を打つ音。）

太吉　（緣側へ出て）騷々しいな、折角徹さんが寢ついた

ところなのにな。
靜枝　商賣なら仕方がないぢやないの。
太吉　だつて敏さんに蟲でも出たら怎うするんだ。
中井　誰だい。
靜枝　近所の人。そりや敏さんを可愛がつてゐてくれるんです。
中井　さうかい。（短い間）俺は少し相談があるんだがな。
靜枝　（今までとは氣分に變化を生じたらしい調子で）なアに……。
中井　（太吉の方へ眼を遣り）可いのかい。
靜枝　可けなければ……。
中井　二人切りの話にしたいんだ。
靜枝　さう……。太吉さん。
太吉　ウム。（枕蚊帳を覗きながら返事をする）
靜枝　濟みませんけど、今、些と、お客樣と話があるんですけど。
太吉　可いとも。
靜枝　濟みませんが……。
太吉　可いよ。
靜枝　些と此處を外して頂戴な。
太吉　あゝ、さうか。ぢやあ又來る。（出て行く）
（格子の開く音。）

蔭の聲　今日はお祭の提灯を置いて參ります。
太吉　（提灯と花飾りを持つて姿を現す）提灯が屆いて來たよ。（二品を置いて去る）
（格子の閉まる音。）
（間。）
靜枝　なアに、相談て云ふの。
中井　外の事ぢやない、あの子供だがね。
靜枝　………。
中井　僕は色々考へて見たんだ、どうもあの子を丸茂さんの方へやると云ふのは、好い事ぢやないと思ふ、親としてこんな間違つた話はないと思ふんだ。そりや成程丸茂さんの子供と云ふ事になれば物質的にはあの子も幸福かも知れない。併し貧賃のお父さんでもないものをお父さんに持たなきやならないつて云ふのは、子供としてこんな不幸な事はないと思ふ。こんな事から考へて來たらそんな物質的の幸福なんて云ふものは何でもないと思ふんだがね。又僕にしたところで親として、現在の自分の子を、他人に押付けて知らない顔をしてゐるといふのは、僕の良心が許さなくなつて來るんだ。其處で相談なんだが……。
靜枝　敏さんを貴方が引取らうと云ふの。
中井　敏さんばかりぢやない、お前もだ。親子三人で暮さ

なけりや、俺の心が濟まなくなつて來たんだ。

靜枝　だつて家の親が承知しなかつたら困つちやふぢやないの。

中井　それはお前の心一つだ。お前さへ其氣になれば、お父さんや、お母さんは又どうにでもして承知して貰へやうぢやないか。

靜枝　それが駄目なのよ、家のお父さんやお母さんと來たら、何よりお金が一番大事なんだから、お金の爲めには親子も何も無くなつてしまふんですもの。旦那を捨てゝ貴方と一緒になると云つたら、必とそれだけのお金を出せと云ふのに極つてるわ。

中井　（稍急き込んで）ぢやあ、お前は何かい、俺と一緒になるのが厭になつたと云ふのかい。

靜枝　厭になつたと誰が云つて。憚樣ですけど、私は貴方より外に思つた人つてへのは、一人だつてあるんぢやないんですからね。

中井　（勢ひ稍挫けて）なら何故親の反對を畏れるんだい。お前がそれ程に思つてゐてくれて、現に敏と云ふ子供まで出來てゐるものなら、譯を話したら、お前のお父さんやお母さんだつて、さう頑固な事も云はれない筈ぢやないか。

靜枝　それがさうぢやないのよ。……困つちやふわね。家の親と云ふものは世間の親とまるで別物なんだから。それにあの敏さんだつて旦那の子と云ふ事になつてるし、貴方の事は……困つちやふわ。

中井　敏を丸茂さんの子にしたと云ふのも、つまりは之から働かなければならない俺の手足纏ひになつてはいけないからと云ふお前の計らひなんぢやないか。

靜枝　えゝ、さうよ。

中井　併し俺はどうしても敏を引取る。足手纏ひになつても可い、敏はお前と一緒に俺が引取る。

靜枝　それが困るつて云ふのよ。

中井　困る事情を聞かして御覽。

靜枝　今云つたぢやないの。

中井　そんな事は理由にはならない。

靜枝　困るわ、何故今日は又そんな無鐵砲な事を云ひ出したの。今まで隨分温和しく時節の來るのを待つてゐてくれたのに。

中井　子供が出來たからさ。

靜枝　えゝ。

中井　子供が出來たんで、俺の考がガラッと變つてしまつたんだ。此上お前を丸茂なんてえ人に渡して置くのが厭になつて來たんだ。厭と云ふより恥かしいんだ。自分の女房とする女に旦那がある。……俺はもう耐らなく厭な

んだ。だからどんなにでもして働くから親子三人水入らずに暮したいんだ。

静枝　若し、私がどうしても行かれないとしたら。

中井　行かれないとしたら。よし。分つた。それで分つた。

静枝　分つたつて。

中井　もう會はないから其のつもりでゐてくれ。

静枝　厭アよ、そんな事。

中井　厭でも、仕方がない、お前がさう仕向けるんだから、左様なら。（と云つて直ぐには立上らない）

静枝　（眞實に左様ならだと思つて慌てゝ）あら、待つて頂戴。眞實に怒つたの、怒つたんなら御免なさい。なるわ、必と一緒になるわ、だけど、もう少し待つて頂戴、私の身體が眞實によくなるまで、其時までなら可いでせう、ね、それまでに貴方も其準備をして頂戴、ね、怒らないで、ね、後生一生、賴むわ。

中井　必とだね。

静枝　えゝ、必とよ。

（嬰兒が泣く。）

静枝　あら、目を覺ましたわ、小便かも知れない、襁褓は。……お母さんが居ないから困つたわね。……貴方濟みませんが、其戸棚の下の行李に襁褓が入つてますから、およし〳〵今直ぐ取替へて上げるよ。早くして頂戴よ。

（中井が面喰つて襁褓を取出す。枕蚊帳の蔭で襁褓を取替へる。格子の開く音、又閉まる音。）

（理作が歸つて來る。）

静枝　（稍狼狽へて）あ、お父さん。

理作　（苦り切つて）お客様か。

静枝　（中井を顧る）え、えゝ。

理作　（畳みかけて）何誰だ。

静枝　え、えゝ。（躊躇）

中井　僕はお暇しよう。

理作　左様ですか、ではどうぞ。宅の娘でも、主人から預つて居りますと、謂はゞ大事な預り物でございますからな、間違ひでも起りますと、親だけに尙更旦那にも申譯の立たないことになりますから。

中井　分つてます、歸ります。失禮致しました。

（出て行く。静枝が見送る。）

（夕方を思はせる物賣りの聲。）

（間。）

理作　（忌々しさうに舌打ちをして）静枝、何をしてゐる。

静枝　（聲）ハイ（間）おや、左様なら。

（格子の開く音、又閉まる音、静枝が引返して來る。）

理作　今の男は何だ。

静枝　何でもありません、何時も呼んで下さるお客様です

わ。

理作　お客か、お客ならお客で可い、だが一言お前に念の爲めに云つて置くが、お前が蔭でどんな事をしようと、好きな人を拵へようと、それはお前の勝手だが、それが爲めに旦那を失策るやうな事があつたら、其時は私が承知をしないから、可いか、これだけはハッキリ云つて置く。一方で大金を出して世話をしてゐるものを、金も出さず口先きだけで自由にするといふのは、實に不公平極る話だ。それでは藝妓の親として旦那に濟まない、さうだらう、それとも私が斯う云ふのが間違つてゐると云ふのなら其仔細を聞かして貰はう。家が今日これだけの暮しが出來ると云ふのも、つまりは丸茂の旦那のお蔭だぞ、その旦那を袖にして、外の男と痴話狂つたり、縱しんば今の男がさうでないにしろ、外の男の事で旦那の疑ぐりを受けて、此儘手切れと云ふやうな事になつたら、お前も勿論その覺悟はしてゐるだらうが、それだけの事はして貰はなければならないから。……可いな、分つてゐるだらうな……。親を捨てゝお前の好き勝手は斷じてさせないから、之は今から覺悟して居て貰ひます。

靜枝　ぢやあどんなに心から私を思つてゐてくれる人があつても、今の旦那だけの事をしてくれる人でなければ、お嫁にもやつて貰へないんですのね。

理作　私は其の心で思ふとか何とかいふ奴が嫌ひだ。これまでに丹誠して大きくした娘を、心で思つてゐる位のことで嫁に貰はれてしまつては、これまで苦勞をして來た、親の立つ瀬が何處にあると思ふ。と云つて、私は決して子供で儲けようと云ふんぢやない。が少しは樂をさせて貰はないでは親は踏んだり蹴たりだ、可いか、分つたか。

靜枝　ハイ。（密と泣く）

格子の開く音。又閉まる音。靜枝の弟の廣太郎が歸つて來る。）

廣太郎　（二十三、勤め人）唯今。

靜枝　お歸んなさい。（力が無い）

（廣太郎は直ぐに今までにあつた親子の氣不味い爭ひを知る。そして自分も氣不味さうに、手早く詰襟の洋服を脱いで、シャツ一枚になつて臺所へ行く。）

（水道の水の金盥に當る音、手拭を揉み出す音。）

（長い間。電燈點火。）

太吉　（窓の處から聲だけ掛ける）靜枝さん、靜枝さん、敏さんは。

靜枝　えゝ。あ、又睡つてますわ。

太吉　これ、敏さんが目を覺ましたら見せてやつて下さい。（風車を出す）

靜枝　（立つて行く）あらどうも濟みません。上つて被在いな。

太吉　有難う、先刻のお客樣は。

靜枝　もう歸つたの、お茶でも飲んで被在いな。

太吉　お父さんが居るんだね、止さう、又後にしよう、左樣なら。

理作　馬鹿が。

廣太郎　（聲）姉さん、お母さんは。

靜枝　（六疊へ敏を寢かしつけに行つてるので聞えない）

廣太郎　お母さんは。

理作　靜枝。

靜枝　えゝ。

理作　廣太郎が何か聞いてゐる。

靜枝　（敏を寢かし、又枕蚊帳をかけて）何、廣ちやん。

（と云ひながら臺所へ行く）

廣太郎　お母さんは。

靜枝　（蔭）お使ひよ。

廣太郎　よく出歩くんだな。

（格子の開く音。又閉まる音。）

靜枝　（聲）お歸んなさい。

廣太郎　（聲）お母さん、直ぐ御飯にして下さい、腹がペコ／＼なんだから。

理作　（岐阜提灯に灯を入れながら）お增、私も先刻から待つてるんだ、早く支度をしてくれ。

お增　（突慳貪な調子）まア待つて下さい、私だつて、今お使ひから歸つて來たばかりで、さう／＼手が廻りやしません、私だつて手は二本きやないんですからね。

理作　（舌打ち、苦い顏）

（廣太郎が姿を見せる。）

お增　廣太郎、お前、其方へ行くなら、手ブラで行かずに、お膳位持つてゝくれたらどうだい。

（廣太郎は引返して、直ぐ食卓を持つて來て八疊の間へ置く、そして自分で洋服の始末をして、戸棚から浴衣を出して着更へる。）

お增　（聲）靜枝、可いよ、私がするから、お前は彼方へ行つといで。可いからさ、未だお前は本當の身體ぢやないんだから。

靜枝　（聲）いゝえ、宜う御座んすよ。（飯櫃の上に茶碗などを載せたのを持つて出て來る。食卓の側へ置いて又引返す）

（格子の開く音。）

靜枝　アラ、姉さん。お父さん、姉さん（蔭の聲）お母さん、姉さんよ。

お增　（聲）オヤ、お繁、お前、今時分どうしたんだい。

まア、お上りな。

（格子の閉まる音。）

（靜枝が盆に香の物の丼や二品三品お茶を載せて持つて出て來る。）

靜枝　姉さん、此方へ被來いな。

（靜枝の姉で藝名を絹香と呼ぶ、お繁が入つて來る。）

（理作と廣太郎とは此間、廣太郎は六疊の方の、理作は八疊の方の緣側に蹲踞んで頰杖を突いて、思ひ思ひの心で庭を見てゐる。）

お繁　（二十七、荐褪めた顏の色を白粉と紅で派手やかに作つてゐる。身體の全體に疲れが見える）お父さん、今晩は、御無沙汰致しました。

理作　（緣側に、見物の方に側面を見せて腰を下して）どうしたんだ、今時分。

廣太郎　（姉と聞いて懷しさうに、八疊と六疊の敷居の處あたりまで出迎へてゐたが、此時）姉さん、被來い。

お繁　今晩は。

靜枝　（茶などを並べながら）姉さん、お飯は。

お繁　もう濟んだの。

靜枝　皆なと一緒に喰べない、喰べると可いのに、ね。（廣太郎に顧る）

廣太郎　姉さん、喰べない。

お繁　眞實に濟んだの。

お增　（鍋を持つて來る）あ、お椀を忘れた。廣太郎お椀を持つて來ておくれ、それに醬油入れが出てない、ついでに持つて來ておくれ、醬油がなかつたら片口にあるから。

靜枝　私がするわ、廣ちやんに、そんな事をさせるの……。

（廣太郎は臺所へ行く。）

お增　可いよ、お前はお客様なんだから、丁としといで。

お繁、お前は。

お繁　御飯なら、私、濟みました。

靜枝　久し振りだから、皆なと一緒に喰べると可いのにね。

お繁　どうか關はずに喰べて下さい、私は他さんのお守りでもしてゐませう。

（廣太郎がお椀と醬油入れとを持つて來る。）

お增　貴方、お待遠様。

（理作も食卓に着く。食事が始まる。お繁は風車を見詰めて物思ひ。靜枝と廣太郎は始終お繁の方を氣にしてゐる。）

（蟲の音。間。）

お增　（顏のあたりを拂ふ）荐總い蚊だね、お繁お前、濟まないけど、臺所へ行くと蚊燻しがあるから……。

廣太郎　（皆まで云はせず）姉さん、可いよ。（立つて行く）
お増　（どうでも勝手にしろと云ふ調子で構はず食事を續ける）
廣太郎　（蚊燻しを持つて來る）
（間。）
（何處かで唱歌の蓄音器をかけてゐる。）
理作　お繁、お前、何か用があつて來たのか。
お繁　えゝ。
理作　フーン。（それつきり無言）
お繁　（風車を弄りながら、思ひ切つたやうな調子で）お父さん、私が此間からお願してゐたこと、あれ、どうでせう。
理作　（無言）
廣太郎　お父さん。
理作　（咬みつくやうに）分つてゐる。
お繁　眞實に我儘なお願ひなんですけど、私、全く此商賣が厭になつて來たんですから。
お増　自分で我儘だと思つてゐるなら、そんな事は云はないのが當然だと思ふけどね。我儘と承知しながら我儘を通さうとするのは、少し理窟が違つてやしないか、と、お母さんは思ふけど、さうぢやないか。
靜枝　お母さん、まア、姉さんに云はしてお上げなさいな。
理作　商賣をやめて、お前はどうする積りなんだ。
お繁　家でおさんどんをしてもよう御座んすし、何でもしますから、お願ひです。
理作　嫁にでも行きたくなつたと云ふのか。
お繁　（急に泣き出す）私、もう一生お嫁に行かうとは思ひません。
お増　お前、そんな事を云つたつて、久保木の淸さんとの約束をどうするつもりだい。
お繁　淸さんは、もう私を貰つてくれる氣なんかありません。
お増　そんな馬鹿な事を云つて……。お前の云ふのはお前が此の稼業になつたから、それで遠慮してそんな事を云ふんだらうけど、お前が藝妓になるのは向うだつて承知の上ぢやないか。お父さんが相場で損をなすつて、お前を藝妓に賣らなきやならなくなつた時、本當を云へば手前共で、何とかお助けしなければならないので御座いますが、手前共も御存知の通りの手許で、どうする事も出來ません、其代りお繁さんが藝妓におなんなすつたからと云つて、決して約束を變更するやうな事は御座いません、私の方でもそれだけの餘裕がつき、お繁さんに來て

やらうと云ふ思召があつたら、必と私の方で身受けを致しますと、立派に清さんの お父さんが云ひ なすつたのは、お前だつて知つてる筈ぢやないか。それがあんな事になつて清さん家は夜逃げ同様に何處かへ行つ てしまふ。家も引續き工合が惡くつて、靜枝まで藝妓に出すやうな事になつてしまつたけど、お前が藝妓をやめたいと云ふのがお嫁に行きたいと云ふんぢやないんならお母さんは不賛成だね。切めて、清さんの行衞の分るまで稼いでゐるのが、道なり順だらうと思ふんだがね。

お繁　清さんは、東京へ歸つて來て被在います。立派になつて。

お増　へエー、お前は又どうしてそれを知つておゐでだ。

お繁　私、一月ばかり前に、丁度靜ちやんのお產のあつた前後に、清さんに抱月さんで呼ばれたんです。

靜枝　抱月……姉さん、貴方、偵適清さんに出たんぢやないでせうね。

お繁　え、えゝ。

靜枝　出やしないのね。

お増　厭な子だね、何だつてそんなに念を押すのさ。

靜枝　だつてお母さん、抱月はそれの家ですもの。清さんは姉さんと知らずに呼んだんでせう。

お繁　えゝ。

靜枝　大丈夫だつたのね、大事なことよ。

お繁　…………（泣く）

靜枝　姉さん。

（間。食事は何時か終つてゐる。）

お繁　……私も最初は斷つたのよ、何と云つても厭だつて云ひ張つたのよ、でも、二人は約束のある身體ぢやないか、遲かれ早かれ、一緒になると極つてゐる身體なら構ふことはあるまいと、清さんにも云はれ、抱月さんの女將さんにも云はれて、それに彼處の女將さんには色々可愛がつて貰つてゐるんで……皆な私が惡かつたんです。

お増　なに、それ位の事なら善いも惡いもないぢやないか。東京へ歸つて來てゐながら、家へ顏を出さないと云ふのが、少し腑に落ちないけど。……それで、お前は、清さんと談を極めたんだらうね、それでやめたくなつたんだらう。

お繁　それが口惜しいんです。

お増　口惜しいつて。

お繁　私も云ひました。それでなくても、此商賣が厭になつてるんですから、早く夫婦になつて下さい、貴方に足りないお金は親許身受けにでも何にでもして貰ひますから、早く足を洗はして下さいつて一月ばかりの間、逢ふたんびに一生懸命賴みました。

お增　さうしたら、淸さんは何と云つたえ。泣いてたつて分らないぢやないか。

お繁　頑迷不見轉を女房にする事も出來ないからなつて……そんなに賣崩してゐながら、人の女房になろうと云ふのは押しが太いつて……。

庸太郎　畜生。

お繁　靜ちやんの事を聞いて知つてゝ、關彌さんなら何時でも女房さんにするよつて……。お父さん、お願ひです、藝妓をやめさして下さい、お願ひします。

靜枝　姉さん、だから私が云はない事ぢやないぢやありませんか。若し姉さんが淸さんに出なかつて御覧なさい、淸さんは必と姉さんを女房さんにしたのよ。男つてものが皆なそれよ、私の旦那だつてさうだわ、男が女を親切にするのは、自分の所有にならない間だけよ、それを姉さんは、一寸樂しい事や、爲めになるやうな事を云はれると、直ぐ乘つてしまふんですもの。姉さんは大體氣が弱くつて、人が好過ぎるから駄目なのよ。私が斯う云つたら此人が困りやしないか、あゝしたら、あの人が困りやしないかつて、他人に氣兼ね氣苦勞して、自分と云ふものは、何時も打捨り放しにしてゐるから、今見たいな事が出來るんだわ。今、姉さんの居る家は、格だつて、そりやそんなに良くはないけど、さう姉さんのやうに出先きの云ふ事ばかり肯いてゐなくつたつて濟む家なのよ、それを自分の弱氣から段々さうでなくしてしまつたんですもの、頑實にもう少し確乎して頂戴な、新橋にや、どんな醜男でも大事に取扱つて歸してくれる藝妓があるさうだなんて、私が姉さんの妹と知つて態々揶揄面で云ふお客もあるんですもの、姉さん、少しは私の身にもなつて頂戴、腹の立つ程悲しい時があつてよ。お願ひだから、もつと確乎して頂戴な。賴むわ。

お繁　（口惜しさに聲を顫はせて）靜ちやん、何ぼ何だつて、そんなに云はないだつて可いぢやないの。それは貴方は名妓よ、私は不見轉よ、不見轉を姉さんに持つて、お氣の毒樣ね。

お增　お繁、お前は何と云ふ事をお云ひだ。

お繁　お母さん、私にだつて、偶にはこれ位の事を云はして下さい。私だつて、自分から無理に不見轉をしてるんぢやありませんよ、靜ちやんに比べりや、器量は惡いし、出る時の家の事情が事情だつたから、看板の良い否いなんか云つてられずに、今の家から出るやうになつたんです。出れば出たで稼がなければ主人に惡いし、稼ぐとなれば家が家だけに、出先きの無理も聞かなければならず、そんなこんなで、今の身の上になつちやつたんぢやありませんか、でも私が最初に出て居たればこそ土地の

様子も知れ、家の都合も好くなつたので、靜ちやんは岩井家から出られるやうになつたんぢやありませんか。それを今更私が不見轉たから自分までが恥を掻くなんて、餘りな云ひ草ぢやありませんか。私は靜ちやんが、そんな人ぢやないと思つてゐた。

靜枝　（泣いて）　姉さん、そりや姉さんこそ餘りだわ、私が姉さんに恥を掻かすつもりで今見たいな事を云つたと思つてゐるの。私は姉さんの爲めを思つて云つたのよ、姉さん見たいに氣が弱くつちや、此世の中は渡つて行けないと思ふから云ふんぢやありませんか、私一人の恥なら辛抱をするわ、姉さんの恥を掻いてゐるのが辛いから云ふのよ、それをそんな風に取るのは、姉さんこそ私、そんなんぢやないと思つた。

廣太郎　お榮姉さんの爲めを思つて云つたのか知れないけど、今のは靜枝姉さんが云ひ過ぎてゐる。

お増　これ、お前までが一緒になつて。

靜枝　廣ちやん、私がどう云ひ過ぎて、さ、それを聞かして頂戴。

廣太郎　大體姉さんに、大姉さんの恥を憤慨する資格があるかい、自分こそもつと大きな恥を背負つてるぢやないか。

靜枝　何故よ、何故、何故。

廣太郎　（枕蚊帳を指す）　あの緞ご。あれは姉さんの大きな恥の塊ぢやないかしら、姉さんは自分ではさうは思はないかい。僕は云ふのも厭だけど、大姉さんの方が、姉さんよりズツと神聖だと思ふ、姉さんは惚れてもしない旦那の赤ん坊を産んでるぢやないか。

お増　これ、廣太郎。

廣太郎　僕はこんな汚しい事はないと思ふんだ、大姉さんはそんな身の上でも、赤ん坊なんか産んでやしないよ、恥ぢやなきやならないのは姉さん、自分ぢやないか。

靜枝　お母さん、私、口惜しい。（泣く）

お増　貴方、廣太郎を叱つて下さい、何てえ事を云ひ出すんだらう。

理作　廣太郎、靜枝に謝れ。

廣太郎　僕は謝りません、何處までも云ひます。たゞ云ひますとも、僕は今日まで、此恥を何處まで苦しんで來たか分らないんです。出來ることなら今日、何も彼も打ち撒けて、岸澤の家を根本から改革したいんです。

理作　生意氣な事を云ふな、貴樣がそんな事の云へる身分か。

廣太郎　云へます。僕だつて僅な月給から家へ食扶持を拂つてゐるんですもの、立派に云へると思ひます。

理作　貴樣の拂つてゐる食扶持位が、家の暮しの何の役に

立つ。

廣太郎　役に立つても立たなくても、家族の一人には選びないぢやないんですか。お父さんやお母さんは旦那のある姉さんが大事なんでせうけれど、僅しか食扶持を拂はない人間だつて正當の理窟は云へる筈です。大體こんな事になつた原因はと云へばお父さん、皆な貴方の責任なんです。

理作　何、責任だと。それが親たる私に向つて云へる言葉か。

廣太郎　親だから云ふんです。今の岸澤の家のものが、こんな侮辱を受けると云ふのも、畢竟はお父さん、貴方の黄金崇拜の罪ですよ。

理作　何、もう一度云うて見い。

太吉　（聲）今晩は、どうしたんです、大きな聲を出して。戸外へ人が群つてますよ、醜狀ないぢやありませんか。靜枝さん、徹さんは寢てますか、え、泣いてるんですか、どうしたんです、え、皆さん。

（誰も答へない。理作は苦り切つてゐる。お增は廣太郎の權幕に面喰つた樣子。靜枝は未だ泣いてゐる。お繁は靜枝が氣の毒になつて來たらしい樣子。凝つと父と睨み合つてゐた廣太郎の眼が濕んで來たかと思ふと、次第に泣き聲が高くなつて來る。二人の姉は更に新な涙に誘はれる。）

（蟲の聲。）

——幕——

その二

場面は前幕と變りがない。

前幕から三日ばかり經つた。曇り勝ちの日の午前十時頃。

六疊の間に靜枝が鏡臺に向つて、お繁が其頭髮を結ひかけてゐるところ。八疊の間に廣太郎が革砥で西洋剃刀を砥いでゐる。傍に徹が寢かしてあつて、枕頭に風車が突き立てゝある。

小道具になければ仕方がないが、緣起棚にチギ箱を飾りたい。

幕開く。

蔭でワッショイ〳〵と云ふ聲。

お繁　（空を見る）お祭の日曜だと云ふのに、降らしたくないわね。

靜枝　全くね。

お繁　私も暫く振りで神明樣のお祭りに打突つたけど、こんな心持ぢや、お詣りに行く氣も出やしない。

靜枝　私だつて。
お繁　靜ちやん、眞實にもう怒つてない。
靜枝　怒つてなんか居やしないつたら。
お繁　さう、そんなら可いけど、眞實に御免なさい。
靜枝　私こそ姉さんの心持ちを知つてるながら、あんなに
　喰つてかゝつて。御免なさい。
廣太郎　馬鹿に仲が好いな、すつかり和睦かい。
お繁　廣ちやん、お前さんもお謝り。
廣太郎　ウム、謝らう。酷い事を云ひ過ぎて御免よ。
お繁　それで濟んだの。
廣太郎　ウム。
お繁　高いお詫びね。（鏡に寫つてゐる靜枝の顏に）勘忍し
　てやる。
靜枝　勘忍するもしないもないけど、廣ちやんに云はれた
　時は、私、眞實にカーツとしてしまつたわ。だけど、考
　へて見りや廣ちやんの云ふ通りかも知れないんだから、
　怒つた私が間違つてるかも知れない。
廣太郎　さう云はれると、僕も非常に辛いんだ。決して姉
　さんが憎らしいと云ふんぢやないけど、旦那のお蔭で、
　今日が暮せるといふやうな考へで、それで姉さんを大事
　がるお父さんや、お母さんが癪に障つてね。これで姉さ
　んが交換手か女工なんかしてゐるんだつて御覽、決して
　今見たいに大事にしやしないから。子供でも出來て御
　覽、お前は親に樂もさせないで男狂ひの出來る身分かと
　來るからね、勝手なものさ、それが平生から癪に障つて
　ゐたんでね、お父さんに喰つてかゝるつもりの奴が、つ
　い姉さんの方へ逸れてしまつたのさ、御免よ。
靜枝　まア、私こそ好い災難ね。
お繁　だけどねえ廣ちやん、折角斯うして私達は仲が好く
　なつたんだから、お前さんもついでにお父さんとも仲を
　直してくれない。一昨日、昨日今日と、あの晩からまる
　で口も利かずに睨み合つてゐるんだから。お前さんは晝
　間會社へ行つてるから可いけど、それに一昨日は何處の
　カフエーで飲んだんだか、あんなに遲く醉拂つて歸つて
　來るし、お前さんはそれで可いだらうけど、家に居るも
　のが眞實に耐らないんだもの、どうにかして家の穩にな
　るやうにしてくれない。
廣太郎　駄目だ。今更そんな妥協する位なら、あの晩、あ
　んな騷ぎまで持上げやしない。此處で全部の建直しをし
　なきや、此處のうちは何時までたつたつてよくなりつこ
　はありやしない。今の此の家は、唯一軒の家と云ふだけ
　で、決して立派な家庭とは云はれないんだからね。
お繁　それはさうだらうけど、今見たいな調子で行つたら、
　倘と、お前さんの云ふ家庭は出來上らないと思ふよ。そ

れに、私も、新橋へ歸らないとなると、此家の食客だからね、此二三日のやうな様子ぢや、全く針の蓆だもの、お父さんの顔も碌に見られないんだもの、辛くつて仕様がありやしない。

廣太郎　何も、そんな氣兼ねをする必要は ないぢや ないか、それが姉さんの氣が弱いと云ふもんだよ、自分の家へ歸つて來てるんぢやないか、然も今までに家の爲めに辛い勤めをして來てるんぢやないか、威張つて踏反り返つて居たつて、此家ぢや、誰も何とも云ふ事が出來ない筈なんだ、少くともお父さんやお母さんにそんな資格なんかあるものか。

お繁　さうは行かないよ、何と云つたつて親は親だもの。

廣太郎　なに構ふものか、子供と喧嘩して理窟に負けたからつて、何も面當てに家を外にするところはないぢやないか、え、さうだらう、それにどうだい、お父さんは毎日朝から將棋を差しに行く、お母さんはお使ひにばかり出掛けてゐる。何がお使ひだい、そんな子供に面當てをするやうな親に遠慮するセキがあるもんか。

お繁　お前さんは何でも理窟で物事を押して行くけど、世の中と云ふものは、さう理窟でばかり行くものぢやないよ。

廣太郎　理窟が通らない世の中なら、そんな世の中は捨てちまつた方がいゝや。

お繁　お前さんは少し短氣過ぎるよ、さう云つちまつたら身も蓋もないぢやないか、あの晩だつて、子供の方から生んで下さいと云つて頼んだ覺えはない、親が勝手に生んだんだなんて、あんな事を云ふんだもの。

廣太郎　さうぢやないか、子供と云ふものは親が勝手にこしらへたもんぢやないか、もしかしたらこしらへやうなんてことを思はずに、ハズミでこしらへてしまつたものかも知れないぢやないか、其の原因も忘れて、子の義務ばかりを強ひようとするのは不合理極まる話だ。

お繁　理窟はさうだらうけど、さう云ふ親なら仕方がないぢやないか、お前さんは少し諦めが惡いと思ふよ、さう云ふ親を持つたのが自分の不運と諦めて、どうにか家の中を穩にして行くやうに考へなければなるまいと思ふけど。

廣太郎　それは姉さん、卑屈過ぎると思ふね、僕は何處までも理窟に立つて行く、あゝ立つて行くとも、親が理窟に合はない事をしてゐれば、堂々と議論をしても、正しい道へ入らせるのが、子としての義務ぢやないか、其の爲めには、家ん中の氣不味さなんか僅かな間の犠牲として諦めなければならないね。

お繁　（鏡を覗き込んで）靜ちやんはどう思ふ。

靜枝　私は少し廣ちやんが親を當てにし過ぎてると思ふわ、親の責任がどうの斯うのと云ふのは、親に養つてゝ貰ひたいと云ふ氣があるからぢやないかしら。

廣太郎　（稍躍起となつて）だつて、子供が二十以上になつたから働かなくても可いなんてえ、そんな無責任な親がゐるだらうか。

靜枝　それはさう云ふ親は惡いだらうけれど、それを責めたところで親子で居る以上仕方がないぢやないの。

廣太郎　ぢやあ姉さんはどうだつて云ふの。

靜枝　さうねえ、斯うして見ると三人の中で私が一番人が惡いのかも知れないわ。私はね、形こそ親子でゐるけど、心の中ぢや他人と交際つてゐるつもりでゐるの、それが一番間違ひがないと思ふわ。

廣太郎　そりや、姉さんの身分だから出來るんだ。旦那に引取られりや、厭でも他人になれるんだからな。大姉さんだつてさう云ふ機會が來ないとも限らない、僕だけはさうは行かないんだ、男は駄目だ、第一に長男と來てゐる。今度の世には女に生れて來ることだ。

（氣不味い沈默。）

お繁　（結ひ終る）どう。

靜枝　（合せ鏡などして）結構。どうも有難う。

お繁　氣味が惡いだらうけど。辛抱して頂戴。

靜枝　そんな事はないわ。よく結へてゐるわ。

廣太郎　其處が明いたんなら、顏を剃るから。

靜枝　待つて頂戴、片附けて一遍掃くから。

お繁　私が片附けてよ、掃除も私がするから。

靜枝　いや、姉さん、頭を結はせたり、掃除をさせたりしちや罰が當るわ。

お繁　だつてお母さんが……。

靜枝　姉さん。

お繁　御免なさい。

靜枝　いや、何故謝るの。（涙）

廣太郎　（彼を見る）ハ、アン笑つてらあ、風車が見えるかホーラ廻る〳〵、罪がないな。こんな罪のない子供でも、今に世の中に生れて來た事を歎くかと思ふと人間は生れて來ない方が幸福だな。

靜枝　いやあよ、緣起でもない。私はそんな子には育てないわ。（片附けてゐる）

廣太郎　さう育つよ。姉さんが育てないつたつて、自然とさうなるよ、ならなかつたら僕が教育して、さう云ふ人間にして見せらあ。

靜枝　下らない事を云ふ人ね。

廣太郎　なア、敏、お前も氣難しい人間になるんだな、いいか、氣難しい人間になるんだぞ。

静枝　馬鹿ね。（筆を取りに行かうとする）
廣太郎　描くんなら僕が描くから。もういゝんだね。（鏡臺の前へ坐つて鬚を剃り始める）
（静枝とお繁は彼の枕頭へ。）
お繁　彼さん、一つお笑ひなさい。まア、笑つてるわ、可愛いわね。可愛いでせう。
静枝　そりやあ。（とうつとり）
お繁　いゝわ、貴方に斯うして張合ひのあるものが出來たんだから。私は駄目ね。
静枝　そんな事はないわ、姉さんだつて出來てよ。
お繁　駄目よ、今までが今までだから。
静枝　だつて、お嫁に行つたら、どうだか分らないわ。
お繁　それこそ尚駄目だわ。こんな身體を誰が貰つてくれるものですか。
静枝　さうとばかりは云へないわ、世の中の男がみんな清さんばかりぢやなし。
お繁　清さんの事は云はない約束でせう。
静枝　さうだつたわね、御免なさい。
お繁　（間）私、仍且新橋へ歸らうかしら。
静枝　何故、どうして。
お繁　家に居ても仕樣がないんですもの。こんな身體を何處に貰ひ手がある譯ぢやなし、お父さんやお母さんの機嫌の悪いのも、一つは私が藝妓をやめたいつて云ひ出したからですもの。私が藝妓に出てれば、お父さんだつてお母さんだつて、さう機嫌は悪くないと思ふわ、さうすりや、少しは家の中も靜になつて、近所へだつて外聞もよくなるでせう。此二三日見たいに、何か事があると、直ぐ大聲で怒鳴りつこするんぢや、眞實に醜状（みつとも）なくつて仕樣がないんですもの。
静枝　そりやさうだけど、私はそれは少し考へものだと思ふわ。此處で姉さんが又彼處（あすこ）の家へ歸つたら、今まで通りと少とも變らないんですもの。廣ちやんぢやないけど、折角此處まで來たんだから、もう少し勇氣を出して辛抱したらどう。姉さんを今みたいにして置くのが、生意氣つて云はれるかも知れないけど、私、實はそれが厭なの、氣の毒で仕方がないんですもの、ですから、もう少し待つて頂戴な、旦那の方が話がついたら、出過ぎるやうだけど、旦那に頼むか、姐さんに頼むかして必と私がどうにかしますから、それまで待つて頂戴な。
廣太郎　（石鹸を塗つた顔を静枝の方へ向けて）姉さん、姉さんの旦那は丸茂つて云つたんだね。（不意に訊く）
静枝　えゝ。
廣太郎　どんな人だい。
静枝　どうしたの、藪から棒に。

廣太郎　一昨日カフエーで丸茂といふ男と喧嘩をしたからさ。

静枝　喧嘩。

廣太郎　餘り癪に障つたもんでね。

静枝　どうしたの。

廣太郎　そりや實に高慢ちきな奴なのさ。椅子に踏ん反り返つて、バアメイドをオイ／＼なんて、顋で呼ぶんだ。バアメイドだつて普通の人間ぢやないか、チップを貰ふからつて、何處の馬の骨か分らない奴に奴隷ぢやあるまいし、オイ／＼なんて顋で呼ばれるわけはないぢやないか。

静枝　分つた、廣ちやんの岡惚れがオイ／＼つて呼ばれたわけなのね。

廣太郎　どうでも可いや。どんな男だい、肥つた男ぢやない。

静枝　さう、赭ら顔の。

廣太郎　頭の毛を此處等邊の處から分けた。

静枝　えゝ、髯を生やかしてゝよ。

廣太郎　あゝ、ぢや、さうだ。丸茂さん／＼て、皆がちやほやしてたから、殊によるとさうぢやないかと思つてたんだが……ぢや、仍且さうだつたんだ。

お繁　それに此頃は、新橋で遊ぶ人がよくカフエーに行くさうぢやないの。

静枝　どうしたの、打ちでもしたの。

廣太郎　腰車で叩き付けてやつたんだ。

静枝　アラ。

廣太郎　さうだとすると困つたな。此方も酔つてたし、前の晩の事で胸はムシヤクシヤしてるし、世の中が何も彼も癪に障つて、大喧嘩をやりたいと思つてた處へ、オイオイと來たんだらう、何だか知らないが急にカチンと來てしまつたんだ、でも、最初の中はそれでも辛抱をしてゐたんだが終ひには辛抱がしきれなくなつてね、こんな傲慢な奴は一遍懲らしてやらないと癖になるやうな氣がして、まア此方から喧嘩を賣つたんだね、何でも無暗と其奴を揶揄つたよ、すると其奴が向つて來たぢやないか、いきなり僕の胸倉を取つたのさ、糞、と思つたから其手を外すなり床へ叩き付けて勘定もそこ／＼に逃げ出して來たんだが、彼れが姉さんの旦那だとすると、困つたな。

静枝　困ることはないわ、廣ちやんを私の同胞とは知らないんでせう。

廣太郎　無論。

静枝　そんなら知れつこはないわ、可いわよ、偶には稀になるから、そんなカフエーへ出掛けるからはいづれ誰か

に思召があるんでせう。

廣太郎　其奴は確にさうなんだ。

靜枝　そんなら可いわ。そんな目に遇つたら、もう其處へも行けなくなるだらうし、女一人が助かるといふもんだから。

お繁　まア、靜ちやん。

（格子の開く音。）

お増　（聲）　さあ、どうか此方へ、靜枝、旦那と姐さんが被來つたよ。（入つて來る）

（廣太郎の大狼狽。格子の閉まる音。お縫と曉通りの丸茂釧之助とが入つて來る。廣太郎は鏡臺な楯になるたけ顏な隱すやうにしてゐる。）

靜枝　（丸茂に）被來いまし。（お縫に）先日は失禮致しました。

お繁　被來いまし。（何方つかず）

お縫　オヤ、貴方も歸つて被在つたの。

お繁　えゝ、鳥渡工合が悪いものですから。

お増　お繁、お茶の支度をしておくれ。

お繁　ハイ。（ト臺所へ）

お増　まア、鏡臺ぐらゐ片附けて置いたら可いだらうに、（立つて行く）　オヤ、廣太郎。

廣太郎　（鏡臺の蔭から無暗と叩頭する）　一昨晩は何とも濟みません、醉つてましたし、貴方と云ふ事は少しも知りませんでしたので、誠に申譯が御座いません、以來氣を附けますから、どうか何分お赦しを。

（廣太郎が無暗と叩頭するので、丸茂の方では其の顏を見ることが出來ない。）

お縫　（靜枝に）　弟さんでせう（丸茂に）旦那は御存知なんですか。

丸茂　（四十五六、會社の重役と云つた風）　イヤ一向に知らんね。

廣太郎　（安堵したらしく）御存知ありませんか。（顏を振り上げる）

丸茂　（初めて顏を見る）　あ。

お縫　御存知なんですか。

廣太郎　濟みませんでした、どうか御勘辨下さい。

丸茂　君は闘覇の……さうか。

お増　お前、旦那に何か失禮な事でもしたのかい。

丸茂　なアに何んでもないことさ、お互ひの誤解だつたんだ。併し以來はあゝ云ふ事のないやうにしよう。

廣太郎　は、氣を附けます。

丸茂　併し君は却々愉快だよ、偶には遊びに來給へ。

廣太郎　は、有難う。

お増　イエ、もうどんな事が御座いましたか存知ません

が、一向に無骨者で、迚もお邸なぞへ上れるものでは御座いません。

丸茂　そんな遠慮は要らんよ、姉が世話になつとる人の邸へ弟が出入りするのに不思議はないさ、寧ろ禮儀としても當然の事さ。閑はんから來給へ、（靜枝に）これから寄越すやうにするが可い、又何だつたら吾輩の方の會社へ使つてもいゝから。

お増　まア左樣で御座いますか、有難う存じます。廣太郎お禮を申上げないか。いえね、唯今、これの參つて居ります會社と云ふのが……。

靜枝　お母さん。（聞き辛さう）

お増　（心附かず、外の意味に取つて）え、何に。あ、未だお茶も差上げませんで、お繁は何をしてゐるんだらうね。

お繁　（聲）唯今、お湯が沸いてませんものでしたから。

お増　（舌打）何だつて又お湯を沸かしとかなかつたんだらうね、眞實に愚圖だよ。どうも失禮致します、廣太郎、お前大至急で、酒屋へ行つてシトロンの冷えたのを貰つて來ておくれ。

お縫　お母さん、もう宜う御座んすよ。

お増　いえ、何に、直ぐ其處ですから。大急ぎで行つて來ておくれ。

（廣太郎は默つて出て行く。入れ違ひにお繁が茶を持つて來る。）

（格子の開く音。又閉まる音。）

お増　仕樣がない人だね、何の爲めに留守をしてるんだらう。粗茶で御座います。

丸茂　そこで、此人から色々話を聞いて、大凡その事は判つた。此子も俺の子として認める。併し、と云つて俺の邸へ引取ると云ふ事は、俺の方にも困る事情があるから、當分はお前の手許で養育して貰ひたい。無論それだけの手當は俺の方から出す、それなら可いだらう。

お増　えゝ、もうそれなら何にも申すことは御座いません、よく分つたお話で御座います。

丸茂　それから、お前の身體に就ても、こゝから話があつたが、お前はどうする。引きたいと云ふなら此まゝ引かしてやる、又出たいと云ふなら、引續き世話をしてやる、何方ともお前の考へ一つだ。

お増　まア、眞實に何と云ふ結構なお話で御座いましよう。靜枝、お前、眞實に旦那を有難いと思はなければ罰が當るよ。

（格子の開く音。又閉まる音。理作が歸つて來る。）

お増　あ、貴方、好い所へ歸つて來て下さいました。旦那が被來て被在るんですよ。靜枝の父で御座います。

（お繁は父に湯所が讓つて臺所へ行く。）
理作　これは初めまして、私が靜枝の父で御座います。娘が一方ならない御世話になりまして有難う存じます。
（靜枝は始終情なさゝうな顏。）
丸茂　やあ。
お増　それに貴方、來たお禮を申上げなきやならない事があるんですよ、敏さんも旦那の子といふことを御承知下さいましたし、靜枝の身の上に就ても、引きたければ引かしてやらう、出て居たければ今まで通りに世話をしてやらうと仰有つて下さるんです。こんな結構な話てえのがあるでせうか。
理作　重ね〴〵、何んともお禮の申上げやうも御座いません、有難う存じます。
丸茂　併し、これに就ては一つの條件があるんだが。
お縫　條件ですつて。
丸茂　之は態とお前にも話さなかつたが、外の事でもない、當人が居るたけに此處では鳥渡云ひ難い事だが、引くにしても、出るにしても、吾輩の世話を受ける限り、關彌と絹香の緣を切て貰ひたいんだ。
（間。）
丸茂　どうもね、吾輩の世話してゐる女の姉が不見轉……その、さう云ふ階級に屬してゐると云ふのが甚だ工合の惡い事でね、人に聞かれても困る事ではあるし、引いては吾輩の體面にも關すると云ふ譯になる。そこで姉妹の緣を切て貰ひたいのだ。緣を切ると云ふと大袈裟に聞えるが、つまり今後一切交際はないと云ふことを、當人は無論お父さんお母さんからも責任を持つて誓つて貰ひたいのだ。
お増　まア、それ位の事でしたら、貴方、何でも御座いません、私共がそんな事は決して致させませんでございます。
丸茂　當人はどうだらうな。
靜枝　私、お斷り致します。
丸茂　何。
靜枝　何であらうと姉さんは姉さんです。私一人の出世の爲めに、姉さんを捨てるやうな、鬼見たいた眞似は私には出來ません。
お増　これ。
靜枝　姉さんと緣を切らなきや、世話して下さらないと云ふなら、私、お世話になりたかありません。
廣太郎　（飛込んで來る）姉さん、よく云つた、それが眞實だ。
お増　まア、お前は何時の間に。
廣太郎　先刻歸つて來て大概の話は聞きました。

理作　廣太郎、お前は彼方（あつち）へ行つてゐなさい。

廣太郎　行けと云ふなら行きもしますが、お父さんもお母さんも、家（うち）がこれだけ侮辱を受けてるのに、未だ平氣で居るんですか、何てえ情ない事なんです。

理作　お前なんかの出る幕ぢやない、彼方（あつち）へ行つてなさいと云ふに。

靜枝　廣ちやん、彼方へ行つてゝ頂戴、姉さんが……

廣太郎　あゝさうだ。（臺所へ行く）姉さん、何を泣くんだ、泣くことはないよ、安心おし、靜枝姉さんだつて人間だ。あんな獸の云ふことを肯くものか、生意氣な事を云つたら又投げ飛ばしてやるから。

丸茂　お前は俺の世話を受けたくはないと云ふんだな。

靜枝　えゝ、姉さんと緣を切れなんてえ事を仰有るんなら、お世話になりたかありません。

丸茂　よし、それでは俺も世話はしない。

お增　まア、旦那……。

丸茂　今日限り斷然緣を切る。

靜枝　えゝ、結構です、もうお目にはかゝりません。

丸茂　俺も會ふまい、其代り、俺が今まで作（こしら）へてやつたものは全部返して貰はう。

靜枝　えゝ、お返しゝます。新橋の家にありますから、直ぐお返しゝます。

お增　お前、そんな事を云つて、これから先きをどうするつもりなんだよ。（泣き聲）

靜枝　どうなつたつて構（かま）ひません、私にだつて少しは意地もあります。

お增　姐さん、何とか仰有つて。貴方も默つて被在らないでさ。旦那も、お腹立ちで御座いませうが敏さんに免じてどうか御勘辨を、何を申しましたつて、もう貴方のお胤まで生んだものゝ事で御座いますから、緣を切るなんて、そんな短氣な事は仰有らずに。御願ひで御座います。

お縫　眞實に、關ちやんも、姉さんと緣を切れといふので腹も立つたらうが、今はもう鎹の敏さんまで出來た仲なんだから、もう逢はないなんて云ふ事は云はないでさ、どうしたつて深い緣が繫がつてゐるんだもの、姉さんの事は旦那にも考へ直して頂く事にして、笑ひ顏になつておくれ、ね、旦那も旦那ぢやありませんか、貴方、敏さんが可愛くはないんですか。

丸茂　此奴（こいつ）だつて誰の子だか判るものか。

お縫　まだそんな事を仰有るんですか、何にも知らずに笑つてゐる此顏を御覽なさい、貴方に酷似（そつくり）ぢやありませんか、ホラ／＼貴方の顏を見て笑つてゐる。何日親子の情が通へばこそぢやありませんか、これでも貴方の子ぢや

ないと仰有るんですか。

丸茂 (子供の愛を感じて來て、稍柔和な顏になる) ウム、よし、敏は俺が引取つて行く、其代り作へてやつたものは返すには及ばない。

靜枝 いゝえ、お返しゝます。

お增 まア、お前、折角旦那があゝ仰有つて被在るのに。

靜枝 敏さんは旦那の子ぢやありません。

丸茂 何。

靜枝 其の子は貴方の子ぢやありません。

お縫 まア鬮ちやん、何を云ふの。敏さんが旦那の子でなくつて、誰の子だと云ふのさ。下らない事をお云ひでない、月と云ひ、何と云ひ、旦那の子でなくつてどうするんだい。

靜枝 姐さん、敏の父親が誰だてえことは、誰が何と云つたつて私程知つてゐるものはありますまい。月ぐらゐのことで分るもんでせうか。如何にさうだからつて、出來た子供をよくさう輕々しく自分の子だと思へますね、私の祕密も知らずに。……貴方に敎へて上げますけど、子供の眞實の父親が誰だつてえことは、女親たけしか知らない祕密なんですよ。(と丸茂に、稍狂的なり)

丸茂 よし、それまで聞けば澤山だ、勝手にしろ。

(憤然として出て行く。手荒く格子を開けた音。閉まつた音は聞えない。)

お縫 鬮ちやん、お前さんは眞實に……。

靜枝 (次第にヒステリツクになつて) 敏さんは私の子です、誰の子でもありません、私一人の子です、敏さん、敏さん。(抱き上げ、强く抱き占める)

(敏が泣く。)

お增 (喫驚して) まア、お前は何と云ふ事を……。(奪ふやうに抱き取る)

(靜枝は其處に聲を立てゝ泣き伏す。眼を泣き腫らしたお繁と廣太郎が出て來る。)

お增 (お縫に) どうかしたんぢやないでせうか。

お縫 さうですね、血の加減かも知れませんね。眞實にどうしたつて云ふんでせう、あれだけ、自分では間違ひはないと云つてた敏さんを旦那の子ぢやないなんて、確に血の加減ですよ、醫者に診せたらどうです。

お繁 私、迎へに行つて來ませう。

理作 待て、醫者なんか呼ぶ必要はない。

廣太郎 何故です、お父さん。

理作 私には大概分つてゐる。仍且先日來た男がさうだつたんだ、私が戶外で立聞きをしてゐるのも知らずに夫婦約束なんかしてゐた。怪しい〳〵と思つてゐたら案の定だ、折角の旦那の眼を掠めて、あんな靑二才と乳繰合つ

て子供まで生む。……靜枝、お前はどうしてさう間拔けなんだ、丸茂さんが引取らうとしてゐる皺のことまでペラ／＼饒舌つてしまつて、お前は此先きどうするつもりなんだ。お滑や姐さんは血の加減と云ふだらうが、私は現場を見てゐるだけに其の手は食はない、これだけのことを惹起すからには、お前にもそれだけの了簡があつてしたことだらう、其了簡を聞かう、一體お前はこれから私達をどうしようと云ふんだ。

お縫　仍且中井さんだつたんだね。（獨語のやうに云ふ）

理作　中井と云ひますか、二十五六の、一寸ノッペリした會社員風の男でした。

お縫　關ちやん、私は、お前さんが、どうかしてると思ふから今日は何にも云はずに歸るけど、工合の好い日に一度家へ來ておくれ。私にだけでも眞實の事を云つてくればいゝのに、私が餘り好い氣持ちぢやないことだけを云つて置くよ。（お增に）では私も失禮しますから。飛んだ事になりましたね。（出て行く）

（誰もポカンとして送り出すものがない。理作一人が苦り切つてゐる）

（格子の閉る音。）

（太吉が入つて來る。）

太吉　今日は。あ、靜枝さん、鳥渡、祕密の用だ、此方へ來ておくれ。

靜枝　（默つて太吉の顏を見る）

太吉　鳥渡、賴まれて來たんだから。

お增　誰にだい。

太吉　お母さんの知らない人だ。靜枝さん、鳥渡來ておくれな、此間晝間來た人の話だから。

（お繁と廣太郎のハッとした顏。）

お增　晝間來た人。

理作　中井といふ奴だ。呼出しに來たに違ひない。太吉さん、何處で賴まれて來た。

太吉　其處の泰明軒で。

お增　靜枝、お前と云ふ子は呆れた子だね、斯うなると、お繁の方がズーッと增しだ。

太吉　靜枝さん、待つてるんだよ。

理作　宜しい、私が行く。

靜枝　え、お父さんが。

理作　これから出掛けて行つて恥を搔かして、二度と此の近所をウロつけないやうにしてやらう。人の娘を誘惑しようとは怪しからん奴だ。

お繁　お父さん、待つて下さい。

理作　何だ。

お繁　私、お願ひがあります、些と待つて下さい。太吉さ

ん、濟みませんけど、貴方、もう一遍お使ひをして下さいな。

太吉　何處へ行くんだい。

お繁　其の泰明軒へ行つてね、中井さんと云ふ方にもう少し經つてから、家へ被來つて下さいつて、さう云つて頂戴な。

靜枝　姉さん。

お繁　まア可いから、さう云つて來て頂戴な。

太吉　ぢやさう云つて來よう。（出て行く）

お繁　急いで行つて來て頂戴。

（格子の開いて閉まる音。）

（お增は嬰兒を寢かす。）

お繁　お父さん、私、勝手なやうですけど、又新橋の家へ歸ります。

理作　それで。

お繁　どんな事があつても、もう藝妓をやめようとは云ひません。其代り、これがお願ひなんです、靜ちやんと、その中井さんとを一緒にして上げて下さい。

靜枝　まア姉さん。

お繁　靜ちやん、私、貴方にお詫びをするは、私の爲めに旦那と別れさして、眞實に濟まないことをしてしまつたわね。それに私を庇つてくれて。……私、泣いてよ。靜ちやんがそれまで私を思つてくれてんのに、私が靜ちやんに盡さない法はない、それで私又藝妓に出て、どんな辛い辛抱でもする、さうしてどうしても靜ちやんと、中井さんとを一緒にして上げなけりや姉としての道が立たないと思つたの、もう心に堅く極めたんだから留めないで頂戴。

靜枝　姉さんそんなこと駄目、それぢや私が濟まなくなつて來るぢやないの。

お繁　濟む濟まないを云つてる場合ぢやないのよ。貴方ばかりぢやない、敏さんの事も考へて御覽なさい、貴方が中井さんと一緒になつて、眞實のお父さん、眞實のお母さんを持たせてやるのが、貴方の敏さんに對する義務ぢやない。

靜枝　（急に下を向く）

お繁　何にも知らない子供に違つた親を持たせる位罪な事はないのよ、貴方、さうは思はない、お願ひだから敏さんに眞實のお父さんを持たして上げて頂戴、ね。（理作に）私、どんな事をしてもお父さんお母さんを困らせるやうな事はしません、必と稼ぎますから靜ちやんを好きな人と一緒にさしてやつて下さい。お願ひしますから。

廣太郎　僕もお願ひします。中井と云ふ人がどんな人か知りませんが、眞實に姉さんを思つてゐる眞面目な人だつ

たら、お父さん、お母さんの生活を助けること位は必とするだらうと思ふんです。僕も筆耕位の内職はします。さうしたら、毎日店屋物を取つてゐるやうな不經濟な生活を止めたら、暮して行けない事はないと思ひます。

理作　宜しい。斯う云ふ事になつて來たのだから私も何時までも分らない事は云ふまい、靜枝は其の中井と云ふ男にやらう。

お增　あら、貴方、靜枝だつて出さへすればどんな好い旦那か出來ないとも限らないのに、そんな會社員なんかに、無益らないぢやありませんか。

理作　まア默つてゐなさい。お前がさう云ふ事を云ふから廣太郎なんかゞ娘で儲けると云ふやうな事を云ふのだ。そこで靜枝は其男にやるが、其代り每月二百圓宛補助をして貰ひたい。

廣太郎　そんなお父さん。

お繁　まア廣ちやん。……それだけの事でしたら、靜ちやんを呼んで新橋で遊ぶ程の方ですもの必と出來ると思ひますわ。靜ちやん、出來るわね。

靜枝　（微に首背く）

お繁　それさへ出來れば可いんですね、それで私もやつと安心しましたわ。

（格子の開く音。）

お增　さうぢやないのかい。

中井　（聲）御免。

お繁　ハイ（出て行く）被來いまし、中井さんで被在いますか。

中井　さうです。

お繁　お待ち申して居りました。さ、どうぞ此方へ。（先きに立つて出て來る）

理作　私は遠慮してゐよう。（臺所へ行く）

（お增と廣太郎も續いて行く。）

（洋服姿の中井が入つて來る。）

（靜枝はちつと徹な見てゐる。）

中井　御免下さい。

お繁　さ、どうぞ此方へ。初めまして、私は靜枝の姉で御座います。

中井　私は中井、何分よろしく。

お繁　私こそ、靜ちやんどうしたのよ。

靜枝　被來い。（浮かぬ顏）

中井　今日は。

お繁　（靜枝の浮かぬ樣を見て）どうしたの。

靜枝　どうもしない。

お繁　可笑た人ね、嬉しい話なのに。私かしませうか。

靜枝　（無言）

お繁　ぢやあしてよ……早速で御座いますが。
中井　は。（と固くなる）
お繁　貴方の事は妹から伺ひました。
中井　面目次第もありません。
お繁　それにつきまして、御相談が御座いますが。
中井　どう云ふ御相談で。
お繁　實は……。
靜枝　姉さん、鳥渡。
お繁　なアに。
靜枝　私、其の前に云ふ事があるの。
お繁　さう、ならお云ひなさいな。
靜枝　貴方、ねえ、若し、私があの敏さんが貴方の子ぢやないと云つたらどうして。
中井　何を云ふんだ、下らない。
靜枝　いゝえ、下らなかないのよ、眞面目よ。
中井　何か眞面目だい、下らない事を云ふものぢやない、（お繁に）其の御相談と云ふのは。
靜枝　敏さん貴方の子ぢやないのよ。（物凄いばかり眞劍な調子）
中井　さうかよ。
靜枝　さうかよぢやない、眞實よ。
お繁　靜枝さん、貴方、何を云つてゐるの。
靜枝　姉さん、此話は成立たないわよ。
お繁　どうして。
靜枝　敏さんは旦那の子なんですもの。（中井に）貴方、巫子の處へ行つて口を寄せて御覧なさい、必と貴方の子ぢやないと云ふから。
お繁　何を云つてんのね、眞實に下らない事を云ふのね。
靜枝　だつて眞實なんですもの、敏さんは實は矢張り旦那の子なのよ。
中井　冗談ぢやないのかい。
靜枝　私、謝ります。敏さんは貴方の子ぢやありません。旦那の子なんです。
中井　本當かい。
靜枝　貴方に嫌はれるのが辛かつたんで……、それでつい貴方の子だと云つて居たんです。濟みません勘忍して下さい。
お繁　……嘘……嘘。貴方、眞面目にお取んなすつたら後で靜ちやんに笑はれますよ。
靜枝　姉さん、全く眞實なの。
お繁　ぢや、何故先刻旦那にあんな嘘を吐いたの。
靜枝　旦那が悄らしかつたから。（間）私、丸茂さんの世話になるやうになつてから、今まで隨分侮辱されて來てよ、辛抱が出來ない程恥かしい事を云はれたりして、別

れてしまはうと思つた事が幾度びあつたか知れなかつたわ。でも家の事を考へて、今まで辛抱して來たの。今日と云ふ今日、到頭辛抱がし切れなくなつて別れてしまつたけど眞成は敏さんは仍且旦那の子なの。

お繁　それを又どうして……。

靜枝　今までの敵討をしてやつたのよ、旦那は厭で〳〵堪らないけど、敏さんは可愛くつて可愛くつてどうしても、別れんのが厭だつたから、旦那の子ぢやないと云つてやつたの、自分の子だと思つてゐるところをさうぢやないと云はれたら、丸茂さんは必と鼻つ面を拳固で撲られたやうな氣がして歸つて行つたでせう、それで今までの敵が討てたんで私は胸が清々しましたけど、姉さん、と云つたでせう、あの言葉が胸に思ひ當つて此上噓を吐いてゐるのが恐ろしくなつて來たんです。如何に貴方が自分の子だと思つてゐるからとは云へ、私が默つて一緒になつちやあ、貴方にも、敏さんにも罪だと思つて、私それで、懺悔する氣になつたんです、姉さんにも濟みません、貴方にも濟みません、私が惡いんです、勘忍して下さい。(泣く)

中井　ぢやあ、お前は俺を瞞してたんだね。

靜枝　いゝえ瞞してなんぞゐやしません。

中井　瞞してゐたんぢやないか、それは俺に嫌はれるのが厭だつたからと云ふだらうが、俺の子でないものを子だと云つて、結局俺を瞞してゐたんだ。

靜枝　それや違ひますわ、私、決して貴方を瞞したりなんぞして來やしません。瞞してなければこそ、貴方の子ぢやないと正直に白狀したんです、瞞してゐるんだつたら、此儘何にも云はず、貴方の內儀さんにして貰ひます。何も彼も打明けたのが貴方を瞞してゐない證據ぢやありませんか、瞞したなんて、そんな、そんなひどいことを云ふもんぢやありませんわ。

中井　今更ら打明けられたところで、それが一體何になるんだ。

靜枝　でも打明けなければ私の氣が濟まなくなつて來たんです。

中井　それで俺はどうなりやいゝんだ。

靜枝　もう私を貰つちやくれないでせう。

中井　……嫉妬と云はれるかも知れない、又嫉妬かも知れない、雖然俺は外の男の胤を宿した女を自分の女房にする氣にはどうしてもなれないんだ。

靜枝　それは私も覺悟してゐました。それが厭さに祕してゐたんですけど、もう仕方がありません。浮氣をした罰と諦めます。

中井　俺は浮氣ぢやなかつた。
靜枝　私も浮氣ぢやありませんでした。でも仍且浮氣と云ふことになつてしまひました。
中井　嘘ぢやないだらうな。
靜枝　嘘ぢやありません。
中井　さうか。
（間。）
（祭の囃子。）
中井　お暇しよう。
靜枝　（無言、泣いてゐる）
中井　（お繁に）失禮しました。何か申し上げたい事があるやうな氣がしますが、何を云つていゝんだか分らなくなつて來ました。何れ又お目にかゝることもありませうが、今日はこれで失禮さして頂きます。
お繁　（默つてお辭儀だけする）
中井　左樣なら、又逢ふ時もあるだらう、兎に角身體を大事にしたまへ。（出て行きかける）
お繁　靜ちやん。（注意する）
靜枝　貴方。（ト立ち上つて傍へ）
（堅く握手。）
中井　左樣なら。（振り放す）
靜枝　（もう一度其手を取つて）左樣なら。

（中井は出て行く。お繁が見送る。靜枝は其處に聲を忍んで泣き伏す。格子の力無く開く音。又閉まる音。）
（理作とお增と出て來る。續いてお繁、廣太郎。）
お增　眞實に呆れ返つて物が云へやしない、靜枝、お前と云ふ子はまア、どうすりやさう馬鹿に出來上つてゐるんだらう。仍且旦那の子なんぢやないか、それをあんなにしてしまつてこれから先きはどうするつもりなんだい。
理作　どうするも斯うするもない、何も彼も打明けて、旦那と撚りを戻して貰ふか、鐵を引取つて貰ふか、二つに一つの道を取るより外はない。
靜枝　お父さん、お願ひですからそれだけは勘忍して下さい。私旦那と撚りを戻すことはどうしても厭なんですから、鐵さんと別れるのも厭です。後生ですから鐵さんは何時までも私の傍に置いといて下さい。
お增　馬鹿な事をお云ひでない、今時、子供を育てるのにどれだけのお金がかゝると思つてるんだい、タツタ一人だつて生易しいお金で出來るものぢやないんだよ、それは私がお前達を大きくして來たんだつて分つてる。女の細腕一本で子供を一人前にするなんてえ事が出來るもんか出來ないもんかつもりにしたつて知れさうなもんぢやないか。第一子供を抱へてたら、お前出るのにだつて邪魔ぢやないか。

静枝　私、出ることなら、もう出たくないと思ひます。

お増　何だつて、お前。

静枝　徹さんが物心がついて来た時分に私が藝妓なんかをしてゐたら、徹さんが無顏かない事たらうと思ひます。切めてお師匠さんにでもなつて、私、此の先きを堅く世の中を渡つて行きたいんですの。

理作　飛んでもない、此の世智辛い世の中に、子供を抱へて女が遊藝の師匠ぐらゐでどうして食つて行けると思ふ、私は絶對に不賛成だ。

静枝　おやおお父さんは、どうしても私が藝妓に出て旦那を取らなきや不可いと仰有るんですか。

（怨めし氣に父を見る。）

お増　何だね、そんな顏をして。お父さんだつて何もお前、無理に旦那を取れと仰有るんぢやない、手近に丸茂の旦那があるんぢやないか、お前が縒を戻す氣になりさへすりや、何も彼も事無く濟むことぢやないか。

静枝　私、丸茂さんだけは、どうしても厭です。お斷りします。

お増　どうして又、あの旦那がそんなに厭なんだらう、餘り譯が分らなさ過ぎるよ。

廣太郎　お母さんこそ譯が分らないぢやありませんか。姉さんが何て云ひました。丸茂さんに侮辱されて來たと云つてるんです。世の中にはイヤ人間には忍耐の出來る侮辱と、迚も忍耐の出來ない侮辱があるんですよ、唾を引かけられたり撲られたりしたのは未だ忍耐が出來ます、無形の侮辱……何と云つたらお母さんに分るか。……心に加へられる侮辱は迚も忍耐の出來るもんぢやありません。魂を蹂躙られるのも同じことなんですから。

お増　ヘエー、可笑しな事を聞きましたね、お前は學者だから分るんだらうが、一體魂がどうして蹂躙られるんだい、蹂躙りやうがないぢやないか、縦しんば踏みにじられるにしてからが、魂なんて目に見えないものなら、踏みにじられたつて、別に外聞の悪いこともないぢやないか。

廣太郎　お母さんには分らないんだ。

お増　お前が分らないことを云ふんぢやないか、碌すつぽう金も取れない癖に、生意氣な事をお云ひでない。

廣太郎　又お金ですか、お母さんには此世の中にお金より外に貴いものはないんですね。

お増　當然ぢやないか、此世の中にお金より有難いものが外に何處にあるんだい。

廣太郎　お母さんには人間の道が分らないんだ。

理作　廣太郎、親に向つて人間の道が分らないとは何と云ふ云ひ草だ。（廣太郎[illegible]）

廣太郎　（興奮して來る）　だつてさうぢやありませんか、魂を踏みにじられてもお金さへ取れゝば、有難いと云ふやうな人は、人間であつて人間ぢやないんだ。

お繁　廣ちやん。（とハラ〳〵してゐる）

理作　又それに相違なからう、人間と云ふものは先づ生きて行かなければならない、生きて行く爲めには、自分の持つて居るあらゆる特點を利用しなければならないのだ。

廣太郎　つまり、親が娘の貞操を利用することなんですね。

お繁　廣ちやん。

理作　（同時に）　何、もう一度云うて見い。

廣太郎　云ひますとも、お父さん、それで貴方、人の親と云はれますか、世間の親は、縱へ正當に結婚した夫婦でも、良人が娘に辛ければ、離緣を取つても、其娘を手許へ引取りますよ。況して之は結婚と云ふぢやない、金で買はれてゐる、恥づべき境涯に娘が置かれて居るんです。普通の親だつたら娘に恥ぢ、世間に恥ぢ、どうにでもして、泥水稼業から救つてやるのが當然です、それを、貴方がたは、尙其上に泥の中に突込まうとしてゐるんです。そんな親がありますか、

理作　貴樣のやうな世間知らずに世間の事が何が分る。人を突き倒しても先きへ出ようとする今の世の中だ。下らない人情なんかにこだはつて、折角來た運を取逃すやうなことがあつたら、それこそ世間のものわらひの種だ。何にでも多少の犧牲は要る、だから憂き世と云ふんだ。

廣太郎　さうしてお父さんは、それで姉さん達を藝妓にしといて、少しも恥しいとは思はないのですか。

理作　世間を見ろ、世間を。世間の藝妓の親が、娘を藝妓にしたことを恥しがつてゐるか、藝妓の弟でお前のやうな理窟を捏ね廻してゐるものは一人もないぞ、皆な平氣でゐるぢやないか、お前の云つてることを聞くと、私がまるで惡人のやうに聞えるが、それとも私を惡人とでも云ふのか。

廣太郎　僕がお父さんを何時惡人と云ひました、唯理窟に違つてゐるから云ふんです。今もお父さんが仰有いましただ世間の親が恥ぢないから貴方がたも恥ぢなくていゝと云ふのが、それがもう間違つた理窟です。成程世間の藝妓の中には藝妓になりたいと思つて藝妓になつたものもあるでせう、藝妓は好い商賣だと思つてゐる人もありませう、賣つ妓を娘に持つて自慢してゐる親もゐませう、が中には又何を云ひたくつても云へないので仕方なしに藝妓になつてゐるものがないとも限りません、殊に家の場合では、姉さん達が藝妓を厭がつてゐるんだから、僕はお父さんとしても考へなきやならない事だらう

と云ふんです。
お繁　廣ちやん、私は出てよ。
廣太郎　姉さんは默つて被在い、厭がるものを強ひるのは亂暴ぢやありませんか、親の權利ぢやなくつて暴力だ。
理作　廣太郎、それを貴樣は親に向つて云ふんだな。
廣太郎　親だから云ふんです。大槪家の親は子供に頼り過ぎる。子供が二十以上になつたから親は樂をしても可いと云ふやうな、そんな間違つた考へがあるものぢやない。
理作　するとお前の理窟では、親は子供が親を養へるだけの年頃になつても、未だ自分は自分で働かなければならないと云ふのか。
廣太郎　當然ぢやりませんか、働く爲めに出來て居る世の中です。子供が大きくなつたから、親が樂をしても可いと云ふ、そんな箆棒な理窟はありません。
理作　親が子供を育てるのは年老つてから子供に樂をさせて貰ひたいからだ。大體貴樣は親を樂にさせるだけの働きがないから、さう云ふ屁理窟を捏ねるんだ。
廣太郎　それぢやお父さんは子供を育てることゝ、商人が商賣に資本を注ぎ込むのと同一に見てゐるんですね。僕達は岸澤の家の子供ぢやなくつて資本なんだ。
理作　私に親の情愛がないと云ふのか。
廣太郎　あるかないかは知りません、がお父さんの態度には餘り打算的ぢやないかと云ふんです。親が子供を育てるのに勘定づくでやられちや、子供は耐つたものぢやありません、もう少し温情的には行かないもんでせうか、僕はそれが云ひたいんです。
理作　今、廣太郎が云つたことは廣太郎一人の意見ぢやあるまい。
廣太郎　勿論です、姉さんも皆な同意見です
お繁　いゝえ違ひます。
理作　（嘲るやうに）よし、貴樣達がさう云ふ了簡なら、もう私は貴樣達の世話は受けん、貴樣達は貴樣達の勝手にしろ、私は私の勝手にする。
お繁　お父さん、違ひます。
理作　違ふも違はんもない、親の情愛がないと云ふ樣な子供の傍には居たくない、私は此家を出て行く。
お繁　違ひます、そんな事はありません。
理作　これまで大きくして來た親の苦勞はどれだけだと思ふ。其苦勞も思はずに、一人立ちが出來るやうになれば、親を邪魔物扱ひにする、そんな不孝な子供の傍に居たくない、私さへ居なくなれば お前達は幸福なんだらう。よし、出て行く。（多少芝居がかり）
お繁　待つて下さい。お母さん、留めて下さい。お父さん、

待つて下さい。

理作　蒼蠅い、離せ、離せ。私さへ出て行けば文句はないんだ、離せ、離さないか。（お繁を振り放して出て行く）

（荒々しく格子を開けた音。バラ〳〵雨。）

お繁　あ、お母さん、留めて下さい、早く。

（お増は面喰つて出て行く。）

お繁　廣ちやん、貴方、何故さうなの。假にも親と名のつく人ぢやありませんか。お父さんだつて、そりやお腹ん中では濟まないと思つて被在るに違ひない、でも道に親として子供に濟まないとも云はれないから、つい心にもない事を云ふやうになるのよ。だから廣ちやんも理窟でばかりお父さんを責めないで、勞はつて上げるやうにして頂戴、私が頼むから、ね。

廣太郎　そりや、僕だつてお父さんと喧嘩はしたくない、心の中ぢや、親に對して、濟まない〳〵と思つて……思つてゐるんだが、……そんなことを云つてたら何時になつて……喧嘩がしたいんぢやないんだよ……お父さんが……お父さんだからねえ、だから僕は……僕は。（泣き出す）

靜枝　廣ちやん、辛抱をしませうよ、私も仍且藝妓に出るわ。私達さへ辛抱をすれば、家の中は無事なんですもの。

お繁　さうよ、さうして私達だけで何時までも仲好くして行きませう。

靜枝　唯、敏さんがねえ。

お繁　靜ちやん。

靜枝　姉さん。

（姉の膝に取縋る。弟は差し俯いて涙。）

（バラ〳〵雨。）

（太吉が提灯と花飾りを持つて入つて來る。）

太吉　雨が降つて來たのに、提灯を吊つといたら滅茶々々になつてしまふぢやないか。

（三人は涙を紛らす。）

太吉　どうしたんです。（怪訝さうに坐る）

（ワッショイ〳〵のかけ聲。）

――幕――

因果はめぐる　怪談小車草紙（一幕）

本所割下水邊の、ある一軒立ちの家、周圍は藪疊で、時折、燐火が燃える、眞蛛子が斷續的に聞える、四つの鐘、幕明く、

ト、此の家の主人の幸次が蚊帳の中で獨酌をしてゐる。寢てゐる。

幸次　四つだな、婦の奴、何をしてゐやがるか、出て行つたのは彼是六つだつたから、もう二刻は經つてゐるだらう……又ポンポコやつてやがるな、狸は化けると云ふが、一番生捕つて、賽コロに化けさしてやらうか、此頃のやうに云ふ目が出なくつちや、イカサマ賽でも使はにや、お釜の起しやうがねえ、それにしても、お房は何をしてやがるんだらう、待つ程の女でもねえが、金といふヘウキンもの丶爲めに待つ身に辛き蚊帳の中と來やがら。

（ト、呟きつ丶、膳を引寄せて、一升德利を振つてみる。）

幸次　ウム、未だ殘つてゐた。

（ト、手酌で飮む、ト、此時、藪疊の間を縫つて幸次の女房のお房が歸つて來る。）

幸次　やつと歸つて來やがつた。御苦勞々々々、外は蚊がうるせえから中へ入んね（ト、云はれてお房は其儘にスーッと蚊帳の中に入る）さうして金は出來たのか。

（お房頭を振る。）

幸次　（矢庭にお房を蹴倒す）醜婦、何を愚圖々々してゐやがんだ、人を散々待たして置きやがつて……出來ねえなら出來ねえと早く云へ、此方は手前が算段して來ると思つて、首を長くして待つてゐたんだ。

（お房、怨めしげに幸次を見る。）

幸次　何だ／＼、其の面は何だ、業面白くもねえ、僅一兩や二兩の金の工面も出來ねえで、女房面が凄じいや、俺が見立てた通り手前より、妹の方が餘程氣働きがあらあ、下らねえ意地づくで、手前を女房にしたのが一生涯の俺の仕損ひだ、仕方がねえ、誰か友達をせびりや、今夜の資本ぐれえは出來るだらう、景氣よく出掛けるとしようか。

（ト、身仕度、帶を締め直さうとする。お房が留める、但し、その科は直接的でなく、坐つた儘の、思入れだけでありたい。）

幸次　引張りやがる、軍の門出に、ケチをつけやがんな。

ト、振切つた思入れで、又締め直さうとする。又引

張られる。）

幸次　又留めやがるか、博奕は止めてくれと、何度意見されても背かねえ俺だよ、氣障な眞似をするな。

（ト、漸く帶を締め直して蚊帳の外へ出る。又引張られる。）

幸次　えゝ、小じれつてえ、引込んでろい。

（ト、蹴飛ばす、途端にお房の姿が消える。）

幸次　すつとんぢまやがつた、他愛のねえ阿魔だ。

（雨の音。）

幸次　オヤ、又降り出しやがつたな、厄介だな、降るのに出掛けるでもあるめえか、今夜は見合せやうかな、だが、敵に背後を見せるのも癪だし、出かけようかな、併し資本の無えのに弱つたな。

（ト、此處へ、同じ遊び仲間の萬吉が來る。）

萬吉　兄い、ゐるか。

幸次　誰だ。

萬吉　俺だ。

幸次　萬公か、入んねえ。

萬吉　（入つて來る）どうしたんだ、餘りお前の來やうが遲いので、迎へに來たんだ。

幸次　其奴は濟まねえ、なにの、疾うに出掛けようと思つたんだが、お前も知つてる通り、此頃は負け軍で、資本が不足してゐるんで、出掛けてえにも出掛けられず、嬶を里へ工面にやつたが、不器用な奴で、一文も持たずに歸つて來やがつたのよ、それでまア出そびれてゐたのよ。

萬吉　其奴はまア、何だが、併し、兄い、お前、女房さんに博奕の資本を算段させるのは、何ぼ何でも殺生だぜ。

幸次　何故よ、どうしてだ。

萬吉　どうしてつたつて、お前、女房さんは、お前と違つて素つ堅氣の人間……。

幸次　まア、いゝや〳〵、昔話のお浚ひは、これまで女房のお談義で聞き飽きた、それより、折角お前も迎へに來てくれたことだ、何處かで、月ありでもいゝ、金を都合してくれる處はねえか。

萬吉　さうよなア、ねえこともねえが、日歩が高えぜ。

幸次　其奴は承知よ、ぢや、出掛けるとしよう。

（ト、萬吉と共に出て行かうとする。ト、此處へお房の妹のおつやが來る。）

萬吉　此處は此のまゝでいゝのか。

幸次　あとで嬶が片附けるだらうよ。

萬吉　何だ、乙なものがあるな。

幸次　未だ殘つてるだらう、お茶代りに飲んだらどうだ。

萬吉　此處ぢや飲むめえ賭場へ持つて行かう、えてして夜中には足りなくなる奴さ。

幸次　世帶染みてやがるな。

（萬吉、蚊帳の隅を一つ外して一升徳利を取出して持つ。）

幸次　おや、出掛けよう。

（ト、萬吉を先きに出て行かうとする。）

幸次　（又蚊帳の中から引戻されて）ヤイ何をしやがる。

萬吉　えゝ

幸次　蚊帳の中から引張りやがるんだ、離せ。

（ト、蹴る、出て行かうとする又引張られる。）

幸次　未だ留めやがるか、よし。

（ト、唐突に蚊帳の釣手を外す。）

萬吉　兄い、どうするんだ。

幸次　嬶の悪留めで氣がついた、何も彼も賣き盡して、殘つてゐるなあ此の蚊帳ぐれえたもの質屋へ曲げりやいくらか資本の足しにはなるだらう。

萬吉　それぢやお内儀さんが大變だらう。

幸次　なアに、こんな血の通はねえ奴は蚊の方でも御免を蒙るとよ。

萬吉　飛んだ民谷伊右衛門だな。

（ト、云ひながら外へ出ようとする。）

（ト、出會頭にお房の妹のおつや。）

萬吉　わつ。

（ト、叫んで徳利を落す、音に幸次もおつやも驚く。）

幸次　何だ。

萬吉　お内儀さん、お前何時の間に。

幸次　何、嬶か（ト見て）あ、お房。

おつや　え。

幸次　いゝ加減に人を驚かすな。

おつや　何を云つてるんですよ、兄さん私ですよ、中の郷のおつやですよ。

幸次　え、おつやさんか。

おつや　兄さん、姉さんはゐますか。

幸次　萬さん驚くのは道理だ、俺せえ吃驚するくれえだから、女房の妹だ。

萬吉　え、よく似てゐるな、まるで瓜二つだ。

おつや　兄さん、姉さんは家にゐますか。

幸次　ゐるよ、今しがた、お前の家から歸つて來たばかりだ。ト蚊帳を外しながら　お房、おつやさんが來たぜ。

（ト、聲をかけたが其處にはお房は居ない。）

萬吉　兄い、居ねえぜ。

幸次　奧へでも逃げ込みやがつたんだらう、おつやさん、お前持つて來てくれたのか。

おつや　え、何を。

幸次　金の都合がついたんで、持つて來てくれたんぢやね

えのか。
おつや　何を云つてるのさ、兄さん、姉さんは家へなんか來やしないよ。
幸次　何、行かねえ。
おつや　えゝと、あれは、さう〳〵先月の五日の日だつた、久し振りで家へ來て、兄さんの事を話して行つたぎり、來やしないよ。
幸次　何、俺の話、定めし惡く云つたらうな。
おつや　私はそれで兄さんに云ひたいことがある。
幸次　何。
おつや　ま、それより、本當に姉さんは家にゐますか。
幸次　ゐるよ、だからお前の家から歸つて來たばかりだと云つてるぢやねえか。
おつや　それが來ないと云ふのにさ。
幸次　畜生、あの阿魔、俺に噓をつきやがつたな、ヤイ、お房、お房。
おつや　そんな大きな聲をしないで、私が呼んで來ますよ。
（ト、暖簾口へ入る。）
萬吉　姉妹とは云ひながら、あゝも似るもんかな、あの人だね、お前が最初見初めたのは。
幸次　下らねえことを云ふな。
（おつやが出て來る。）
おつや　兄さん、姉さんは居やしないぢやないか。
幸次　居ねえ、そんな奴があるものか、現に俺が蹴り込んだんだから。
おつや　え、姉さんを。
幸次　（一寸テレて）何しろ、一方口の俺の家だ、出て行かれる譯はねえがな。
おつや　論より證據、來て御覽な。
幸次　何處か、戸棚の中か何かで泣いてるんぢやねえかな。
（ト、云ひながら、おつやと共に暖簾口へ入る。）
萬吉　成程、あれなら俺も妹の方を取るな、姐御の方はどうも陰氣でいけねえ。
（ト、云ふ途端、佛壇が急に輝いて、直ぐ暗くなる。）
萬吉　わつ。
（ト、叫ぶ、途端に幸次と、おつやが出て來る、幸次は顔色が變つてゐる。）
幸次　萬公、どうした。
萬吉　光り物、光り物、今、此のお佛壇が急にパツト明るくなつたんだ。
幸次　何、佛壇が。
おつや　兄さん。
萬吉　さうして、姐さんは。
幸次　居ねえ。

萬吉　えゝ。

幸次　確に歸つて來たんだがな。

おつや　兄さん、又、何か、姉さんを苛めたね。

幸次　（稍口吃りつゝ）何、なに苛めるもんか。

おつや　姉さんは死んでるよ。

幸次　何。

おつや　確に、必と死んでるよ。

幸次　オイ／＼、下らねえことを云ふな、今まで、確に此處にゐた……。

おつや　その姉さんが、煙ぢやあるまいし、消えたやうに居なくなつてゐるのはどうしたもんだらう、

萬吉　一寸、々々、嚇かしちや困るな。

おつや　兄さん、姉さんはそりやお前の身持ちを苦にしてゐたよ。

幸次　だからどうしたと云ふんだ。

おつや　姉さんは、必と兄さんの身持ちを苦に病んで、身を投げたか、首を縊つたか、どつちにしても死んだのに違ひないよ。

幸次　下らねえことを云ふな。

おつや　先刻、家のお佛壇が急に明るくなつたと思ふと……

……

萬吉　嚇かしちや困るな。

おつや　誰も鳴らさないのに、鉦がだしぬけに鳴つたぢやありませんか。

萬吉　俺は歸らうぜ。

おつや　姉さんは確に死んだに違ひありません、兄さん、お前さんと云ふ人は。

（ト、云ひかけて、耐らなくなつて泣く、ト、此處へ番太郎が慌たゞしく駈けて來る。）

番太郎　幸次さん、幸次さん、大變だ、お前さん處のおかみさんが、今、其處の井戸へ身を投げて死んでゐる、早く來ておくんなさい。

（ト、云ひ捨てゝ去る。）

（幸次、おつやと顏を見合はせる、萬吉はブル／＼顫へてゐる。燐火飛ぶ、狸囃子、時鐘、此の間一年經過。

（前と同じ道具であるが、小道具などの置き方の相違に年の隔たりを見せたい、前の場と同じく雨の夜、狸囃子、舞臺明るくなる。）

（ト、萬吉がおつやの酌で飲んでゐる。）

萬吉　だが全く考へて見ると早いもんですねえ、姉さんが死んで今日がもう一周忌、何にも知らずに來た私は、全く口果報があつたと云ふものさ。

おつや　まあ、そんなお追従はどうでもいゝから、ゆつくり飲んで下さいな、家の人は居ず、折角作へたものが無駄になつてしまひますから。

萬吉　よう、出ましたね、家の人と。

おつや　あら、いやな。

萬吉　へゝゝ、いやは無いでせう、元々兄いとは思ひ思はれた戀仲同士、姉さんと云ふ邪魔者があつた爲めに一所になれなかつたのが、斯う云ふ事になつて、禍變じて福來る、へゝゝ、お目出たいことで。

おつや　萬さん、後生だからそれは云はないことにして下さい、姉さんが變死をして、其の後片附けや何や彼や、あの人一人の手に餘らうと……。

萬吉　手傳ひに來たのが緣となり（と、臺辭めかして云つて）分つてますよ、今も云ふ通り、元々が戀仲だ、何の不思議もありやしねえ。

おつや　お前さんは直ぐさうはぐらかしておしまひだが、私も、姉さんは別として、私と一所になつたら少しはよくなるだらうと思つたあの人の身持ちは、以前に倍して惡くなり、自惚れてゐたのが耻しくなつて來ましたよ。

萬吉　姉さんの怨みが取憑ついてるんぢやねえかな。

おつや　えゝ。

萬吉　いやさ、姉さんが怨み死に死んだのも、兄いの身を苦にしてのこと、兄いももう堅くなつてもいゝ時分だがな。

おつや　お前さんは又、すつかり變つておしまひだね。

萬吉　おつやさんの前だが、人間地道に稼ぐに越したことはありませんね、不義の富貴は浮べる雲だ、博奕で儲けた錢が、世帶の足しになつた例はありやしません。

おつや　家の人も、早く其處へ氣がついてくれゝばいゝんだがねえ。

（ト、ホロリとなる。ト、此處へ裸同樣の姿で、幸次が、茶屋女お久、遊び人仲間の正太、釜吉、秀助を引張つて歸つて來る、幸次の裸體同樣の拵へと云ふのは、夏祭の芝居の、團七の家の場の、一寸德兵衛が着物を脱いだ時の程度でありたい、無論幸次は醉つてゐる。）

幸次　ヤイ、我君樣のお歸りだぞ。

（ト云ひながら入つて來る。）

萬吉　兄い、歸んなすつたか。

おつや　まアお前さん、其のなりは。

幸次　蒼蠅え、さア、皆な此方へ入んな。

萬吉　（門口を覗いて）オヤ、惡い奴が一緒だな。

正太　何を、萬公、生ア云ふねえ、手前、此頃、俺達と附合はねえやうになつて、變に高慢ちきになりやがつたな、以前の仲間をつかめえて、惡い奴とは何てえ云ひ草だ。

幸次　さうだ〳〵、もつと云つてやれ、こんな奴が得てして、眞面目さうな面をして人の女房をちよろまかしたりするもんだ。

萬吉　オイ〳〵、兄い、云ふことゝ云はねえことゝあるぜ、現在、此處におつやさんと云ふ人を控へて……。

釜吉　だから、兄いが裸體になつてしまつたんだ。

萬吉　釜州、冗談も休み〳〵云つて貰はう、俺がどうしたつて云ふんだ。

釜吉　お前と、おつやさんとの間について氣に入らねえことがあるんで、斯うしてスッテン〳〵になるまで飲んじまつたんだ。

萬吉　釜、手前、それを眞面目で云つてるのか。

おつや　萬さん、默つてゐて下さい、なアに分つてますよ、博奕には負ける、負け腹で一杯飲んだ家の勘定は出來ない、そこで裸體になつて來て、何か云ひがゝりをつけて、私にお金を算段させようと云ふ趣向なんですよ。

幸次　よいしよ、序(ついで)にお手の筋、お前は物分りがいゝな、では早速頂戴針箱鋏箱と出かけようか。

おつや　何さ、手を出して、今日は姉さんの一週忌、生臭物の章魚(たこ)肴はありませんよ。

幸次　惡く洒落やがつたな、ヤイ、亭主が外で恥を掻いて來たんだ、其の仕埒をつけるのが、女房としてあたりめえだらうぢやねえか。

おつや　亭主なら亭主らしく、ちやんとしたことをして下さいな。

幸次　何を。

（ト、氣色ばむ。）

おつや　私が知らないと思つて、一體此の女は何なんです。

幸次　此奴は兩國の藤し野の女中よ、勘定の不足を取りに來たんだ。

おつや　白化(しら)くれなさんな、私は何も彼も知つてますよ。

幸次　（萬吉をジロリと見る）知つてりやどうなんだ。

おつや　おふざけなさんなと云ふ事ですよ。

幸次　何がどうした。

おつや　お前さん、今日を何だと思つてゐるんです、今日は姉さんの一週忌ですよ、姉さんの一週忌に、こんな女を引張り込んで來て。

お久　こんな女とは御挨拶ですね、私は勘定を取りに來いとお云ひなさるから一緒に附いて來たまでゝすよ。

おつや　ふん、いゝ加減な事をお云ひでない、人から金を出さして、何處かへシケ込まうと云ふ趣向だらう、此の惡黨共を取卷きにして。

幸次　（おつやを蹴倒す）

おつや　何をするんです。

幸次　亭主の友達をつらめえて、兇黨とは何てえ云ひ草だ。
おつや　此の人達が善い人ですか。
幸次　善人であらうとなからうと、手前の差圖は受けねえ。
おつや　いゝえ、私はお前さんの女房として以後こんな人達の出入りは斷りますよ。
秀吉　それ程のお邸でもねえかな。
おつや　何だつて。
萬吉　まア〳〵、おつやさん、秀、お前も何てえ事を云ふんだ。
秀吉　俺が何を云つたつて云ふんだ、ヤイ、戸外へ出ろ、何時か一遍はのしてやらうと思つてゐたんだ、皆な、手を貸してくれ。
正太／釜吉　心得た。（ト、立ちかゝる）
おつや　待つておくれ。（ト、萬吉を庇ふ）
幸次　ヤイ、何だつて萬公を庇やがる、手前、愈々をかしいぞ。
おつや　お前さん、お前さんはさう云つて、死んだ姉さんを苦しめたんだね。
お久　幸さん、私は此處にゐてどうするのさ。
おつや　どうも斯うもない、さつさとお歸り、此處は私の家なんだからね。
お久　おや、歸れるやうに御勘定を下げて下さいな。
おつや　お氣の毒さま、お前にやるお金なんか持ち合はせはないよ。
お久　幸さん、これぢや話が違ふぢやないか。
幸次　ヤイ、出て行け。
おつや　何だつて。
幸次　家風に合はねえ、出て行け。
おつや　家風だつて、博奕を打つたり、引張り見たいな女を連れ込んだりする家に、家風なんてものがあるもんでせうかね。
幸次　何。
（ト、云ひざま、おつやの襟髪を取つて引据ゑ、亂打する。）
おつや　さア、殺せ、殺せ、殺すなら殺せ。
幸次　よし、殺してやる。（ト、打たうとする）
萬吉　まア待ちねえ。
正太　萬公が仲へ入るのはをかしいな。
萬吉　默つてろい、まア、兄い、待つてくれ。
おつや　萬さん、かまはないでおくれ、お前さんがかまつてくれゝば、反つて家の人が變に思ふんだから。
萬吉　變に思はれたところで、何の事もなければ云ひ開きは立つ、それよりおつやさん、お前はまア、一體どうし

た事だ。

釜吉　兄いに意見をするのかと思つたら、おつやさんに意見をするのは珍らしいな。

萬吉　うるせえ、默つてろ、おつやさん、お前、今夜はどうかしてやしねえかい、そりや成程、兄いがこんな女を引張つて來て……

お久　こんな女は御挨拶だね。

萬吉　出て行けの何のと云はれりや、腹の立つのも無理はねえが、お前だつて、姉さんの後を引受けて一緒になつた夫婦ぢやねえか、云ふまでもねえ、お前の方が姉さんよりは兄いに惚れてゐたんだ、殺せの、何のは穩でねえ、又兄いも兄いぢやねえか……。

幸次　オウ、萬公、お前、何時の間に人に意見をするやうな貫祿になつたんだ、生ア云ふと承知しねえぞ。

萬吉　（ムツとして）へエ、俺が生意氣かね、どう云ふ譯で生意氣だい。

おつや　萬さん、可惜口に風だ、こんな人には何を云つたつて通じやしないんだから、私も諦めた、お前さん、今出て行けと云つたね、私は出て行くよ、此の家の世帶道具、姉さんが死んでからは、大概私の手で買ひ揃へたんだけど、これまで持つてつちや、明日からにも困るだらう、道具だけは勘辨して上げるから、其の代り、お前さんの博奕の資本に、七つ屋へ曲げた私の着物、帶を揃へて返しておくれ。

正太　オイ〳〵さうなると、俺達の貸はどうなるんだえ。

お久　私の來はりも、序に始末して貰ひませうか、おつやに都合させると云つたから從いて來たんだよ。

秀助　此の仕埒をつけねえぢや、兄いとは云はせねえぞ。

幸次　喧しい、靜にしろ、俺も男だ、借りたものを返されえとは云はねえ。

釜吉　そんなら此の場で返して貰はうぢやねえか。

萬吉　オイ〳〵、お前達も目先きが見えなさ過ぎるな、成程、お前達はおつやさんをあてに幸さんに貸したんだらうから、其おつやさんが離緣を取ると聞きや、此の先き貸の取れるあてがねえから、せつつくのも無理はねえが、何と云つても、もう一年も連れ添つて來た夫婦仲だ、何と云つたつて、さう易々と別れられるものぢやねえ、今夜はお互ひの機みでこんな事になつたんだから、此處のところは俺に預けて、今夜は此まゝ歸つてくんねえ。

正太　それもさうだな、元々おつやさんをあてに貸した金だ、おつやさんに他人になられてしまつたら、虻蜂取らずだからな。

釜吉　全くだ、久坊、お前も今夜は歸れねえ。

お久　私は何だか癪に障るね。

秀助　妬く程でもねえ癖に。
お久　あら、私は幸さんに惚れてるんだよ。
（おつや、之を聞いてカツとなる。）
萬吉　（慌てゝ）何を下らねえことを云つてるんだ、歸るときまつたら早く歸んねえ。
お久　幸さん、明日は必とだよ。
釜吉　勘定の派はりの方か、それとも顔を見せに來いの方の必とか。
お久　知れてるぢやないか、顔の方だよ、幸さん、明日顔を見せないと、私は浮氣をしてしまふよ。
萬吉　未だぐつ〱云つてやがる、早く歸れ。
お久　野暮に遇つちや敵はないね、そんなら皆さん。
釜吉　どりや御神輿をかき上げようか。
正太　兄い、明日又やつて來るぜ。
（ト、これにて皆々歸つて行く。）
萬吉　ヤレ〱大風の吹いたあとのやうだ、大風と云へば、俺も降りの強くならない間に歸るとしよう、本當を云や、此處で御夫婦の仲を取結んでお開きにするのが本役だらうが、何も彼も知り拔いてゐるお二人さんだ、下手の仲人口を利くでもあるめえ、おつやさんも機嫌を直して、御亭主に風を引かせねえやうにしなせえ、左樣なら、おやすみ。
（ト、挨拶して立つて行く、狸囃子。）
萬吉　オヤ、又ポンポコやつてやがるな、化かされねえやうに、氣をつけて歸らう。
（ト、云ひながら歸つて行く。）
（篝火、雨。）
（おつや、立つて、奧から女物の衣類を取出して來て幸次に着せる、一寸思入れ。）
おつや　お前さん。
幸次　分つた〱、今夜は俺が惡かつた。
おつや　今夜ばかりぢやないよ、お前さん、どうしても身持ちを直すことは出きないのかえ。
幸次　濟まねえ、俺も心を入れけえようとは不素思つてゐるんだが、どうも今見てえな惡玉がゐてな。
おつや　友達のせゐばかりぢやないよ。
幸次　だが、俺がこんな身持ちになつたのも、一つはお房の爲めなり、お前の爲めだぜ。
おつや　それはもう云ひつこなしの約束ぢやないか。
幸次　手前の旗色が惡くなると、直ぐごま化してしまやがる。
おつや　ごま化すわけぢやないけどさ、あれは誰が惡いと云ふんぢやないんだもの。
幸次　それはさうかも知れねえが、俺は元々お前に惚れて

た。
おつや　そりや私たつて同じことぢやないか。
（ト、段々色つぽくなつて來る。）
幸次　俺はお前と一緒になりてえと願をかけてゐた。
おつや　私もさうは思つてゐたけど、姉さんがお前さんと一緒になりたいと先きへ云ひ出してしまつた。
幸次　ところがお房は傷物だつた、出入先なり、棟梁から頭ごなしの云ひ付けだ、お祝ひとして、讃岐屋の隱居から出た金が三十兩、珍らしいことゝ思つたら、お房は月足らずの餓鬼を生みやがつた。
おつや　だけど、それを云つてやつちや姉さんが可哀さうだよ、其の爲めに姉さんは、隨分辛い我慢をして來たぢやないか。
幸次　だが其奴が俺の癪に障るんだ、手前に恥しいところがなけりや、もつと活々してりやいゝんだ、主人に叱られた犬つころ見てえに、年中人の顏色を見てゐる、お房の目付きが氣に入らなかつた。
おつや　だつて、お前さん見たいに、年がら年中、質屋の使ひ、金の算段、姉さんをコキ使ひ過ぎたんだもの、姉さんだつていぢけて來らあね。
幸次　ところへ持つて來て、俺が一緒になりてえと思つたお前は……

おつや　それだけは云ひつこなし、私たつて惚れてたお前を姉さんに讓つたんだもの、少しは自棄にもならうぢやないか。
幸次　お前があの時踏張つてくれりや、俺たつて、こんな身持ちにはなりやしなかつたんだ。
おつや　そりや、お前さんの心持ちは察しるけど、大工でゐりや一ぱしの腕があるのに、ヤクザ者に身を持ち崩して、私までに苦勞をさせるとは、何てえ情ない人なんだらうね。
（ト、此時、仕掛けで鼓遣りの火が燃える。）
幸次　お前、俺に意見する氣か。
おつや　意見をしたくもならうぢやないか。
幸次　手前、お房だな。
おつや　何だつて。
幸次　お房だ、お房だ、お房、手前、おつやに乘り憑りやがつたな。
おつや　一寸、氣味の惡い事をお云ひでないよ。
幸次　手前、確におつやか。
おつや　私だよ、しつかりしておくれよ。
幸次　確におつやだな、そんならいゝが、どうも、今の意見のしつぷりがお房に酷似（そつくり）だつたからな。
おつや　だつてそりや姉妹だもの、似るのは當然（あたりまへ）だらうぢ

やないか。
幸次　お房は俺を怨んでるだらうな。
おつや　お前さんを怨むより、私を怨んでゐるだらうよ。
幸次　どうして。
おつや　だつて、一週忌も經たない中に。
幸次　お前、確におつやだな。
おつや　私が姉さんだつたらどうするのさ。
幸次　手前、仍且お房か。
おつや　私が姉さんであるにしろないにしろ、幸さん私はお前に怨みがあるよ。
幸次　ナ、何。
おつや　よく姉さんを苛め殺してくれたねえ。
幸次　お房なら浮んでくれ、俺が惡かつた、此の通りだ。（ト、手を合せる）
おつや　滅多には浮ばれないよ、月足らずの子供を生んだからと云つて、それからのお前の殘りやう、成程、あの子は讃岐屋の御隱居の胤には違ひないが、手込め同様に遇つたものに罪はない筈、それをとつこにお前の邪慳な處置振り、博奕の資本の工面に困らせて、到頭人一人を苛め殺してしまつたぢやないか。
幸次　オイ、お前、本當におつやだな。
おつや　（凄味に）怨めしい、幸次さん。
幸次　お房か、勘忍してくれ、俺が惡かつた。
おつや　（笑ひ出す）馬鹿だねえ、お前さんは。
幸次　何だ、やつぱりおつやか。
おつや　當然ぢやないか、此の世の中に幽靈なんてものがあるものかね、今のは先刻の敵討ちさ、あんな女を引張り込んで來て、私だつて癪に障らあね。
幸次　あゝ、驚かしやがつた。
おつや　好い氣味だね。
幸次　下らねえ眞似をするな。
おつや　でも、お前さんでも、姉さんのことが氣に咎めるかね。
幸次　そりやあたりきぢやねえか、今もお前が云つた、一週忌も經たねえ中に此の始末だもの。
おつや　だけど、私だつて惚れてたんだもの、仕方がないぢやないか。
幸次　割合ひに姉不孝だな。
おつや　姉さんの怨みも忘れて、一緒になつたんだもの、先刻見たいな女を引張り込んだりされちや、私だつて、何とか云ひたくもなるぢやないか。
幸次　彼奴はあやまり、つい、一寸した出來心でな。
おつや　何が出來心か、お前さんは著豆だからね。（ト、抓らうとする）

幸次　（其の手を押さへて）草場の蔭でお房がこんな處を見たら、直ぐにも化けて出るだらうな。
おつや　化けて出たらどうおしだ。
幸次　お前と一緒にとり殺されるまでよ。
おつや　うまく云ふねえ。
（風音、雨音。）
おつや　去年の今夜もこんな晩だつたねえ。
幸次　よせ〳〵、そんな話は。
おつや　お前さん、本當に婦さんの幽靈を見たのかい。
幸次　よせつてことよ。
おつや　だけど、本當の幽靈の出るものなら、今夜あたり出さうなもんだがね。
幸次　よせと云ふのに、下らねえ、ウ、、急に寒くなつて來た。酒はあるのか。
（ト、以前、萬吉が飲んでゐた德利を取上げる。）
幸次　無えな、オイ、酒の取り置きはねえのか。
おつや　よくそんな事が云へるね、お前、角の酒屋にいくらお拂ひがたまつてゐると思ひだえ。
幸次　そんな事は云ふねえ、里心がつかあ。
おつや　おや、未だ嬉し野にゐるつもりだよ。
幸次　船中にて左樣な事は申さぬものにて候、それより、お前、錢を持つてゐるか。
おつや　少し位はあるけれど。
幸次　有難え、どうでえ、何處かへ飲みに行かうぢやねえか。
おつや　どうしてさ。
幸次　何だか、どうも今夜は不氣味でいけねえ、久し振りで、お前と何處かへ行つて一パイやりてえのよ。
おつや　オヤ、急にお世辭のおよろしいこと。
幸次　洒落てねえで、出掛けやうぢやねえか。
おつや　お前、そのなりでお出掛けか。
幸次　俺のトバと來たら、皆な七つ屋へ曲げてしまつて、何にも引掛けるものはねえだらう。
おつや　ふん、相手を誰だと思つておいでだえ、戀女房のおつやさんだよ。
幸次　何か、仕立てゝあるのか。
おつや　まア、默つておいで。
（ト、云つて奥へ入り、男物の着物を持つて來る。）
幸次　オヤ、こんなものが何時の間に。
おつや　私を粗末にすると罰が當るよ。
（ト、捨臺辭にて着更へさせる。）
幸次　お前はそれでいゝのか。
おつや　いゝだらう、お洒落をしたところでお久さんのやうには行かないだらうね。

幸次　禁句は云ひつこなし、だがどうにか片づけたらどうだ

おつや　さうだねえ、ぢや、一寸待つてゝおくれ。

（ト、奥へ入る。）

幸次　（戸外の様子を窺つて）雨はやんでゐるらしいな、だが用心に一本持つて行かう……二本持つて行かうと云つたつて、俺の傘なんぞはねえんだからな。

（ト、苦笑しつゝ女持ちの傘を手にする、天井を暴れ騒ぐ鼠の足音。）

幸次　叱、叱、畜生、静かにしろい、ニヤーゴ、ニヤーゴ。

（ト、猫のなき聲を眞似る、途端に眞物の猫の鳴き聲。）

幸次　わあ、吃驚した、猫は魔物と云ふが下らねえ鳴き眞似なんぞ、するもんぢやねえ。

（ト、又鼠の暴れる足音。）

幸次　（怕くなつて來て）おつや、俺は戸外で待つてるぜ。

（ト、出て行かうとする、風、幸次は引戻されたやうな形にヨロ／＼となる。）

幸次　ひでえ風だな。

（ト、又出て行かうとする、又風、幸次は又後退なする、二度三度。）

幸次　誰だか俺を引張つてるやうな氣がするが、おつやは居ねえし、變だぞ。

（不圖お房のことを思ひ出して、ハツとしてツカ／＼行く前方におつやと思はれるお房の立姿。）

幸次　（心附かず）あ、おつや、何だなお前、人が悪いぜ。俺を出し抜くなんて、併し、お前着更へるならもつと派手なものを着りやいゝに、それぢやまるでお房見てえぢやねえか。

（ト、云つて不圖お房の顔を見る。）

幸次　あ、手前はお房。

（ト、云ふなり、傘を投げ出し臺所から出刃庖丁を取出して來てお房に斬りつける、一寸立廻りお房を我家へ引張り込んで壁へ押付け一抉り抉る、ト、思ふとお房の姿は消えてゐる。幸次は心附かない。）

おつや　お待遠樣。

（ト、明るい聲と共に着更へたおつやが出て來る。）

幸次　迂奴、未だ迷つてやがるか。

（ト、斬つてかゝる。）

おつや　何をするんだよ、私だよ、おつやだよ、人違ひをしちや困るよ。

幸次　人違ひも糞もあるものか。

（ト、何も斬つてかゝる、立廻り、トヾおつやは脇腹を刺される機みに幸次も引倒さ竹に脇腹を貫かれて落入る。）

（雨、狸囃子。）

——幕——

附記、上演の際には臺辭に多少の變更あるべし。

つゆ空（三幕）

人

圓枝　落語家（五十歳前後）
初太郎　不良青年、圓枝の息子（廿五六歳）
おきん　其の妹（二十歳前後）
おはま　圓枝の女房（四十七八歳）
柳雀　落語家　四十二三歳）
民三郎　料理屋琴富貴の主人（二十七八歳）
おふぢ　其の女房（二十一二歳）
馬淵　常磐津文太夫の番頭（四十七八歳）
外に刑事、客など

第一幕

馬道邊の落語家圓枝の家、平舞臺を三角形に飾り、下手斜奥に玄關、續いて下手に臺所に通ずるそれ〳〵の出入口あり、上手斜奥に小かなる庭、塀にて見切る、續いて上手は壁、總體に小ざつぱりした好み、梅雨時には珍らしくカラリと晴れた月の正午頃。幕開く。ト、縁側近くへ膳を持出して、圓枝と柳雀が向ひ合つて酒を飲んでゐる。が、幕が開いた其の時は、圓枝は新聞を讀み、柳雀は居眠りをしてゐる。三味線。

臺所からおはま、燗徳利を持つて入つて來る。

おはま　お待遠樣、熱いのが燗きましたよ、おや、柳雀さん。

（柳雀、ハツとして目を覺ます、同時に圓枝が新聞から目を離す。）

圓枝　何だ。

おはま　いえさ、柳雀さんが、ホ、、、。

柳雀　漕いでましたかい。

おはま　（酒を勸めながら）コクリ〳〵、好い心持ちさうでしたよ。

柳雀　いや、年は老りたくねえものさ、タツタ一夜の合戰で、此の通りのお疲れ樣なんだから。

おはま　相變らず成八。

柳雀　もちさ。

おはま　呆れるねえ、どうして何時までさうなんだらう。

柳雀　今更、兄貴みてえに堅くなつても始まらずさ。

おはま　お內儀さん泣かせだね。

柳雀　女房にや云ひ渡してありますあね、俺はお前を捨て

つこはねえ、俺が何處で浮氣しようと、俺の女房はお前一人なんだから、路頭に迷はせるやうなことはしねえから安心しろと。

おはま　よくそれでお内儀さんが默つてますね。

柳雀　餘り默つちやゐませんがね。

おはま　さうでせうつて、餘り安心の出來る風ぢやないからね、私だつて默つちやゐませんよ、そりや浮氣をするのは男の働きだから仕方がないとして、何か、斯う、心の目的になるやうな、確乎したものを渡しといて貰はないぢやあ。

柳雀　おいでなすつた、貯金宣傳週間とね、もう一萬も貯りましたかい。

おはま　馬鹿におしなさんな。

柳雀　馬鹿にする譯ぢやねえけれど、そりや此處の家のやうに、貯めようとしねえでも自然貯まつて行く家は格別だが、私共なんか、一寸でもそんな了簡になつて御覽なせえ、忽ち老い込みでさあ、だから私は嬶にさう云つてありますのさ、俺が遊ぶのは何も浮氣ばかりぢやねえとね、偶にはカフエーの氣分も味はゝねえぢやあ、世間様から取殘されちやいますさね、何しろ七三、耳かくしだからね、大變だね、あの頭は。私は考へたね、今にあゝでもねえ、斯うでもねえと考へた末が、女の一つ籠なんかゞ出て來やしねえかとね。

（此時圓枝、讀んでゐた新聞を投げ出して盃を干す。）

おはま　（酌をしながら良人の顏色を窺つて）何か出てますか。

圓枝　（首肯く）

おはま　え、村太郎のことが。

圓枝　（首を振る）

おはま　ぢやあ、藏前の家のことが。

圓枝　（首を振る）

おはま　何が出てゐるんです。

（ト、新聞を取上げる。）

圓枝　何にも出ちやあゐねえよ。

おはま　だつて今お前さん……。

圓枝　昨夜吉原に三人斬があつたと云ふだけよ。

柳雀　え、もう出てるかい。

圓枝　お前、知つてるのか。

柳雀　そりや、其の、盛八の關係でね、そりや凄いもんだつたね、斬つた奴は一人、斬られた奴は三人、何方も不良青年なんだね。

圓枝　斬つた奴は逃げてしまつたと云ふぢやねえか。

柳雀　逃げたも逃げた、早えの、何のつて、喧嘩になつたと思ふと、ピカリ匕首を拔いたね、あつ、きやつ、きゆ

う、パタ〳〵さ、目にも留まらぬ早業さ、キネマの
傳明にだつて出來ない藝當だね、もう江戸一は血の海さ。
圓枝　江戸一、新聞には角町と出てゐるか。
柳雀　あ、さうかい、ぢや、角町の間違ひだ。
圓枝　何だ、お前、見てゐたんぢやねえのか。
柳雀　どう致しまして、御覽の如く成八の丹次郎だあね、
家の藝にない血塗れ仕事なんか見てゐられるものか。
圓枝　受け賣りか。
柳雀　モチ。
圓枝　そんなことだらうと思つた。（苦笑、酒を飲む）
おはま　斬つた男と云ふのは捕まらないんですか。
圓枝　非常線は張つたが、未だ捕縛に至らねえと出てゐる。
おはま　それで、不良青年なんですか。
圓枝　斬られた奴から推して、加害者も不良青年の見込みだと書いてある。（又酒）
おはま　柳雀さん、貴方、其の事で、何か、何處かで聞込んだことはありませんか。
柳雀　聞込んだ事と云ふと。
おはま　何か、その、不良青年のことで……別に初太郎のこと、云ふ譯ぢやありませんけど。
柳雀　初ちやんのことなら心配するがものはねえ、あれは軟派の方だつて云ふからな、（と云つて氣が附いて）いや、別に聞込んだといふことはねえが、何でも、其の喧嘩を見てゐた人の話と云ふのを聞くと、斬られた方の奴が最初喧嘩を吹かけたんださうだ、斬つた方の男に理窟があると云ふ話だ。
（間、三味線。）
圓枝　おはま、明日から新聞を斷つてくんねえか。
おはま　え。
圓枝　讀まなきや世間が分らねえが、俺は此頃新聞を讀むのが可怖くつて仕樣がねえ。
（おはまも柳雀も默つてゐる。）
圓枝　今も、柳雀がさう云つたが、初の野郎には、同じ不良でも軟派だと云ふし、そんな血腥え事の出來る度胸はねえと思ふが、それでも、ヒヨイと新聞を見て、不良青年といふ字が目に入ると、ギクッとする、毎日新聞を見るのが思ひなんだ、それでゐて三面が早く見てえんだ、此頃ぢや新聞を讀む前に心の中で金神樣を拜んでゐるくれえだ、はゝゝゝ、そんな思ひをしてまで新聞を讀む必要もなからうと思ふんだ。
おはま　だつて、お前さん、それは。
圓枝　彼奴が何かを仕出來しや、新聞を見なくつたつて世間の人が知らしてくれる、世間の人が知らしてくれるまで、俺は何も知りたくねえんだ、此頃ぢや、毎日が瘦せ

る思ひだ。
柳雀　そりやまア、兄貴の云ふのは道理だが、どうも、この、何でね、俺達の稼業も、世間を知らねえぢや、自然に取殘されるといふ譯だからね、その、つまり七三、耳かくしなんて奴があるからね。
（ト、どう云つて慰めていゝか分らない心持ち。）
圓枝　お前が讀みてえんだつたら、お前だけ讀みねえ、但し、俺の目に觸れるやうな所で讀むのは勿論、新聞を置いといてもくれるな、これだけは云つとくぞ。
おはま　そりや、お前さんがそんなに厭がるものを、私だつて別に讀みたかないけど、新聞を讀まなきや、世間のことが分らないからね、例へば藏前の家の樣子だつて、日常餘り往來をしないんだもの、新聞でも見なきや、藏前の家の人達が今度は何處へ出るのか、さつぱり分らないぢやないか。
柳雀　藏前と云やあ、昨日の夕刊を讀みましたかい。（と云つて、飛んだことを云つた樣子で）あ。
おはま　いゝえ、何か出てゐたんですか。
柳雀　いや、見てないんならいゝんです。別に大したことぢやないんですから。
おはま　大したことぢやないつて、氣になるぢやありませんか、云つちまつたもんなら聞かして下さいな、柳雀さんが云はなくつたつて、何處かで借りて讀めば同じなんだから。
柳雀　どうも飛んだことを云つてしまつたな、どうも酔ふと口が輕いんで困る。
おはま　藏前がどうかしたんですか、お父さんが……浮びつきでもしたんぢやないんですか。
柳雀　いや、文太夫さんのことぢやないんで。
おはま　ぢや、鳴門さんの方ですね、鳴門さんがどうしたんです、艶種ですか。
柳雀　まア、さうなんで。
おはま　今度は誰です。
柳雀　誰でもねえんで。
おはま　えゝ、ぢやあ、未だあの人と。
柳雀　まア、新聞の艶種つて奴は濟んだことを今更らしく書いたり、ヨタが多いからアテにはなりませんけどね。
おはま　本當かしら。
柳雀　アテにはなりませんよ。
おはま　本當だつたら、お前さん、藏前の家も隨分ぢやないか。
圓枝　だから新聞は讀みたくねえと云ふんだ。
おはま　お前さん、知つてるのかい。
圓枝　ウム。

おはま　其の新聞、何處にある。
圓枝　乘合の中で、隣の人の讀んでるのを、止しやよかつたんだ、うつかり覗き込んでしまつたんだ。
おはま　まア。
圓枝　知らずにゐる程樂なことはねえと云ふのは此處の事だ。
おはま　本當かしら。
圓枝　分らねえ、本當かも知れねえ。
おはま　本當かも知れないなんて、濟ましてゐられちやおきんが可哀さうぢやないか。
圓枝　可哀想でも、何でも、おきんは藏前の家の娘だ、俺達の娘ぢやねえ。
おはま　だけど、そりや、先きへ行つて鳴門さんのお嫁にすると云ふ約束で養女にやつたんだよ。
圓枝　雖然息子の氣に入らなきや仕方がねえ。
おはま　仕方がないつて、お前さん、濟ましてゐられるのかい。
圓枝　最初から嫁に行つた娘なら、掛合ひをつける法もあるだらう、藏前のお父さんはおきんの師匠だ、藝を懇望で娘に貰はれて行つたんだ、鳴門太夫の嫁にすると云ふことは、文太夫さんや、俺達の心持ちにあつたゞけのことなんだ、鳴門太夫がおきんが氣に入らねえからつたつて、何處へも苦情の持つて行きどころはねえ、仲の惡い兄妹は世間にだつて珍らしかねえ。
おはま　お前さんはそれだから困るんだよ。
圓枝　法に外れたことは俺はしたくねえ。
柳雀　兄貴見てえな生眞面目な人に、どうして初ちやんのやうな息子が出來たらうな。
（途端に初太郎が入つて來る、神經的な眼の鋭い青年、疲れてゐる風が見える。）
柳雀　おや、初ちやん。
おはま　まア、お前。
（ト同時に云ふ。）
初太郎　（座敷の眞中にドタリと坐つて）　御機嫌よう。
圓枝　初、貴樣、どうして歸つて來た。
初太郎　お父さん、お願ひだ、暫く何にも云はないでおくれ、俺は少し考へがあつて歸つて來たんだ。
圓枝　何、何が考へだ、貴樣のやうな奴を家へ入れては世間樣へ申譯がない、さ、出て行け、直ぐ出て行け。
おはま　まア、お前さん、折角考へがあるからと云つて歸つて來たんぢやないか、どんな考へか、それを聞くぐらゐは、ねえ、柳雀さん。
圓枝　おはま、お前がさう云ふ風に甘いことを云ふから、此奴が段々不良になつて行くんだ、こんな奴を家へ入れ

て、若し人殺しでもして來たんだつたらどうする。

おはま　そんな馬鹿な、此の子にそんな度胸がありますか、お前さんだつて今さう云つてたぢやないか、それがお前さんの悪いとこなんだよ、お腹ん中ぢや心配してゐながら、初の顔を見ると怒鳴り散らす、初だつて家にゐられやしないよ。

圓枝　居て貰はなくつて澤山だ、出て行け、出て行かねえか。

（ト、立かゝる、柳雀とおはまお留める。）

初太郎　仕方がねえ、おや、左樣なら、お母さん、おきんによろしく。

（ト、出て行かうとする。）

おはま　まア、お前、何だね、折角歸つて來たのに、直ぐ出て行くなんて、お父さんはあゝは云つても、お腹ん中ぢや、そりやお前のことを心配してゐるんだからね、毎朝お前のことが出てやしないかと、新聞を見るのが心配だなんて……

圓枝　おはま、いゝ加減なことを云へ。

柳雀　まア、兄貴。

おはま　本當なんだよ、今も今、さう云つてたところなんだよ、だからね、お前もいづれ、お父さんに詫びを入れるつもりで歸つて來たんだらうから、よくお父さんに謝つてね。

圓枝　誰が、誰が、そんな奴の詫言を聞くもんか。

柳雀　兄貴、お前も一概に云ひ過ぎる、初ちやんの樣子を見ねえ、何時もの初ちやんぢやねえぞ、何か眞面目に考へて、これから孝行でもしようと云ふんだらうから、俺に免じて、まア、其の考へと云ふ奴を聞いてやつてくんねえ、俺の頼みだ。

おはま　柳雀さん、よく云つてやつてくれました、初や柳雀さんにお禮を云はないのかい。

初太郎　遠ふんだ。

おはま　え。

初太郎　禮を云へと云ふんなら云つてもいゝけど、俺の考へは違ふんだ。

（おはまも柳雀も呆れる。）

圓枝　それ、さう云ふ奴だ、野郎。

（ト、再び立かゝらうとするのを柳雀が留める。）

柳雀　まア、待ちねえ。

圓枝　離してくれ、折角のお前の親切を無にする奴だ、度性骨を叩きのめしてやるんだ。

柳雀　まア、待ちねえ、俺が一言云ふ事があるから、初ちやん、俺はお前の今日の素振りが變つてゐるから、今見てえな口を利いたんだが、違ふつてえなら、其考へと云

ふ奴を聞かして貰はうぢやねえか。
おはま　さうだ、其の考へを聞かしておくれ。
初太郎　云はう。
（途端に、「圓枝さん、藏前から電話ですよ」と呼ぶ聲。）
おはま　毎度有難う存じます、何だらう。
初太郎　おきんの家だね。
おはま　あゝ。
初太郎　おきんにも話したいんだがな、居たら、一寸寄越して貰へないかしら。
おはま（圓枝に）いゝかしら。
圓枝　何しろ早く出たらどうだ。
おはま　ハイ、初や、お前、お母さんの歸つて來るまで居ておくれ。
初太郎　大丈夫だよ、それまでは何にも話をしないから。
おはま　必とだよ。
（ト、臺所の方から出て行く、間、三味線。）
柳雀　冷めたかな。（ト、徳利に觸つて）初ちやん、一つ行かう。
初太郎　有難う。
（ト、受けて返す、柳雀、顎で父に差せと教へる、初太郎一寸考へて俯き勝ちに默つて差す、圓枝一寸躊躇ふ、柳雀、徳利を持つて圓枝に受けろと催促する、圓枝引奪るやうにして盃を取る、柳雀、酌をする、圓枝之を膝の上に置いて考へ込む、柳雀、同じく徳利を持つた儘、開けろと催促する、圓枝干して柳雀に差す、柳雀受取らず、初太郎に差せと差圖する、圓枝尚も柳雀に差し付ける、柳雀引奪くつて初太郎に渡して酌をする、圓枝稍テレた形、初太郎が口をつけようとした時、玄關の方からおきんが悄然と入つて來る。）
初太郎　おや、おきん。
おきん　あら、兄さん。
圓枝　どうしたんだ、今、藏前の家から電話がかゝつて來たが。
おきん　え、藏前から。
圓枝　今、おはまが出てゐるが。
おきん　お母さんが。
圓枝　どうしたんだ。
（おきん、突然泣き出す。）
初太郎（側へ寄つて）おい、どうしたんだ、おゝ、どうしたんだと云ふのに。
おはま　お前さん、大變な事が出來たよ。（と云ひながら驅け込んで來る）おきんが……オヤ、おきん、お前、まア。
（おきん、倚聲高く泣く。）
圓枝（おはまに）オイ、どうしたんだ。

おはま　(圓枝には答へず、おきんに)　お前、何てえ無分別なことをしてくれたんだい。
圓枝　無分別、何が無分別だ。
おはま　遺書を書いて家出してしまつたんですよ。
圓枝　誰が。
おはま　おきんがですよ。
圓枝　おきんは此處にゐるぢやないか。
おはま　だから、藏前の家をですよ。
圓枝　藏前の家を。
おはま　昨夜からどうも樣子が可笑かつたんですつて、それに、今朝出掛ける時の樣子が變だつたので、部屋を調べたら、死ぬつてえ遺書が出て來たんで、吃驚して、直ぐ方々へ人を出したり、此方へは番頭の馬淵を寄越したが、それまでに立寄るやうな事があつたら、何處へも出さずに置いてくれつて、文太夫さんの電話なんです。
圓枝　おきん、本當か。
(おきん、尙泣く。)
おはま　お前、まア、死ぬなんてえ短氣を出して、後に殘る私達のことなんか、お前考へてくれないのかい、それや、おきん餘りひどいぢやないか。
おきん　だから、一目逢つて行きたいと思つて……
おはま　暇乞ひに來たのかい、久し振りで來といて、暇乞ひなんて、そりやひどいよ、ひどいよ、ひど過ぎる、ひど過ぎる。(泣く)
おきん　でも、お父さんやお母さんの顏を見たら、私、死ぬのがいやになつて來ました。
(ト、尙泣く。)
おはま　死ぬのは思ひ止まつておくれか、有難う、お前さん、もう死ぬのは思ひ止まりましたとさ。
おきん　もう死なうとは云ひませんから、其の代り私を此處の家へ歸らして下さい、これだけがお願ひです。
おはま　あゝ、いゝとも、それ位なことなら何でもない、何も死ぬ程厭な思ひをしてまで藏前の家にゐるセキはありやしない、今に番頭の馬淵が來るつて云ふから、其の時、お父さんに話して貰つて、立派に此方へ引取つて貰つて上げるからね。
圓枝　馬鹿、好い年をして何を下らねえことを云つてゐるんだ、一體お前は何處まで子供に甘いんだ、お前がそんな風だから、初太郎と云ひ、おきんまでが我儘を云ふんだ、第一おきんは俺達の子供ぢやねえぞ。
おはま　そりや分つてますよ、だけど一旦養女にやつたからつて、取戾せない法はないでせう。
圓枝　何を不足で取戾さうと云ふんだ、又、何が不足で、おきん、お前は死なうなんてえ氣を出したんだ。

おはま　そりや分つてるぢやありませんか、賴みに思ふ鳴門さんが……

圓枝　お前に聞いてやしねえ、おきんに聞いてゐるんだ、おきん、お前は常磐津文太夫の家へ娘に貰はれて行つたんだぞ、鳴門太夫の嫁に貰はれて行つたんぢやないんだぞ、縱しんば其後藏前のお父さんやお母さんが、お前を鳴門太夫の嫁にする氣になつたところで、息子がお前を嫌ひなら致し方がねえぢやねえか、お前は何處までも文太夫の娘で、兩親の差圖を受けなきやならない身體なんだ、自儘に家を飛出したり、何の醜態だ、親不孝者。

おきん　だつてお父さん、私も藏前の兄さんが好きなんですもの。

圓枝　好きならどうした。

おきん　好きな兄さんを他人に奪られて私、默つて見てはゐられません、然も綺麗に別れた筈の女に奪られて……此方は唯兄さん一人を信用してゐるのに……此頃ぢや向うへ入浸つて、まるつきり歸つて來やしません……餘り踏みつけた仕方だと思つて……

おはま　全くだよ、何もお情けで貰つてもらつたんぢやないんだからね。

圓枝　默つてゐろ。

おきん　私、今日までに何度藏前の家を出ようと思つたか分りません、雖然そんなことをしちや、此方の家へも心配をかけると思つて、出來ない辛抱もして來ました、雖然、お前のある爲めに好きな女と一緒になれないの、妹としては可愛がられるが、女房としては可愛がられないのつて云はれちや……。

おはま　そんなことを鳴門さんが云つたのかい。

圓枝　又口を出す。

おきん　一緒になるなんてえ事を聞きさへしなけりや……私だつて、何とも思はなかつたかも知れません。

圓枝　誰がお前にそんなことを云つた。

おきん　私、何時までも子供ぢやありません、自然に耳に入ることもあります。

圓枝　縱しんばだ、縱しんば、それが本當であつても、息子がお前を嫌ふのは、お前に嫌はれるだけの不調法があるからだ。

おはま　おきんの何處に不調法があります。

圓枝　お前に云つてやしねえ、おきんに云つてゐるんだ。

おきん　ですから、私、そんなに嫌はれてまで、彼處にゐたくはありません。

圓枝　だがお前の家は藏前の家より外にねえんだぞ。

おはま　何を云つてるんです、現に斯うして。

圓枝　おはま、お前はどうしてさう物が分らねえんだ、何

と云つても、おきんは俺達の子ぢやねえんだ、藏前から離緣でもされてくれば知らねえこと、俺の方から取戻すなんてえ氣は、俺にはこれつぱかりもねえんだ、おきん、よく聞けよ、今も云ふ通りお前は藏前の家へ娘に貰はれて行つたんだぞ、高座へ出さうと思つて習はした常磐津の性質がいゝんで懇望された養女緣組だ、高座へ出すより、あゝ云ふ家の養女になつて置けばお前の身の出世になることゝ思つたからだ、文太夫さんはお前に取つちや、師匠で親た、二重の恩がある、恩を忘れて濟むと思ふか、息子の事は忘れて、何故兩親に盡さうと云ふ氣にはなつてくれねえんだ。お前、恩知らずになりてえのか。

初太郎　おきんは若いんだ、若い女を義理人情で縛らうとするなア、縛る方が無理た。

圓枝　ヤイ、初、手前、此の事に口出しをしやあがると唯は置かねえぞ。

初太郎　だが、無理なものは無理と云ふより仕樣がないな。

圓枝　何、不良の癖に生意氣なことを云ふな。

初太郎　不良だつて理窟は云へるね。

圓枝　不良青年の理窟が世の中に通るか。

初太郎　餘り頑固過ぎる理窟も、世間にや困りもんだ。

圓枝　頑固でも、舊弊でも、間違つた理窟は云はねえぞ。

初太郎　ところが間違つてゐるから笑はせらあ。

圓枝　何だと。

初太郎　お前の理窟は、一を知つて二を知らねえと云ふもんだ、成程恩を忘れちや犬畜生にも劣ると云ふんだな、だがよ、おきんは若いんだぜ、生きてゐるんだ。

圓枝　野郎、俺を死んだものに扱やがるな。

初太郎　冗談云つちやいけねえ、お前だつて生きてらアな、其證據に、其の通り口を利いてるぢやねえか。

圓枝　出て行け。

（ト、有り合ふものを投げつける。）

おはま　まア、お前さん、初や、お前も口が過ぎるよ。

初太郎　だつてお袋、さうだらうぢやねえか、お前は女たからおきんの氣持ちは分る筈だ、おきんの今の口吻ぢや、可也藏前のに惚れてるらしい、惚れた男に嫌はれて、踏みつけにされちや、其處の家に居にくいのは當然だ。

圓枝　不孝者、親をどうする、恩をどうする。

初太郎　おきんを藏前へ歸したら、三方四方、丸く納まると思つてるんだらうが、丸く納まるどころかイビツなものが出來上るぜ、第一におきんの心が定まらねえ、今の若え女に酒屋のおそのになれと云ふなア、云ふ方が無理だ、藏前の親達だつておきんに濟まねえものが出來上る、息子だつて好きた女と一緒にもなれず自暴になる、皆が皆、毎日をお互ひに睨み合つて、落着きのねえ心持で暮

さなきやならねえ、落着きのねえ暮らし程、人間を滅茶滅茶にするものはねえぜ。
圓枝　畜生え、そんな不良靑年のお談義なんか聞いてゐる耳は持ち合せねえ、おきん、今も云ふ通りだ、恩を忘れちや、人間、道が立たねえ、息子のことなんか諦めて、藏前へ歸んねえ、縱しんばお前が引取つてくれと云つたところで、俺は決してお前を引取らねえ、引取らねえばかりぢやねえ、今後こんなことで二度と家の閾を跨いだら、俺が承知しねえからさう思へ。
おはま　お前さん、何を云ふんだねえ、そんな事を云つたらおきんは死んでしまふぢやないか。
圓枝　死ぬなら勝手に死ね、色戀に恩を忘れるやうな人非人は死んだつて俺は惜しいとは思はねえ。
おきん　ぢやあどうしても、藏前の家に歸つてゐなければならないんですか。
圓枝　お前の家は彼處より外はぬえ、お前の身の始末を附けてくれるものは、彼處の兩親だけだ。
初太郎　大變なお芝居だ。
圓枝　何たと。
初太郎　お父さん、お前、何故、さう心にもねえことばかり云ひたがるんだ、俺にはお前の心はよく分つてゐる、お前は世間の義理や掟に縛られて、心にもねえ芝居をしてゐるんだ、お前、本當におきんが死んでも惜しかあねえか。
圓枝　……親の恩師匠の義理を忘れるやうな犬畜生は、死んだつて、俺は惜しかアねえ。
初太郎　おきん、死んぢまへ。
おはま　まアお前。
初太郎　親父が惜しかねえと云つてるんだ、面當に死んでやれ、フン、後で吠面掻くのを見てやりてえ。
圓枝　何。
初太郎　本當に死んだら泣く癖に、何處まで負惜しみが強いんだらう。
おはま　これ、初や。
初太郎　云ふとも、云ふとも、俺は何處までも云ふつもりで歸つて來たんだ。
圓枝　何。（ト、無色ばむ）
（「御免下さい」と訪ふ聲。）
柳雀　あ、お客様だ。
（「御免下さい」と再び。）
柳雀　番頭さんぢやねえのかい。
おはま　あゝさうだ、お前さん。（どうしようと問ふ心）
圓枝　お通しゝねえ、迎へに來て下すつたんだ。
（おはま、玄關へ出る。）

圓枝　おきん、歸るんだぞ、ハッキリ云つて置く、此處はお前の家ぢやねえ、お前の家は越前一軒きりだ。

（おはまに案内されて馬淵が入つて來る。）

馬淵　ヘイ、どうも、何誰も。

（ト、挨拶する。）

おはま　お敷きなすつて。

馬淵　どうかまア、お關ひなく。

圓枝　こんなところで失禮します。

（柳雀も挨拶する。）

馬淵　どうぞ、御遠慮なくおやんなすつて。

圓枝　オイ、番頭さんは晝飯は未だゞらう、何か取つて上げたら。

馬淵　いえ、もう手前ならどうぞお關ひなく、何しろ胸が一パイで……えゝ、偖、此度は何とも申譯けのない不しだらで、何とお詫びを申上げてよろしいか、誠にどうも相濟みませんことで御座います。

圓枝　何の、濟まねえと云ふのは此方で云ふことで、おきんの不了簡から……まア、御免なせえ、其方へ上げりや、其方の娘さんだ、他人様の娘を呼びつけにするといふ法はねえが、今日んところは勘辨しておくんなさい。

馬淵　恐れ入ります、さう云ふ義理堅い師匠のことで御座いますから、猶更此方からお詫びの申上げやうもないので、でも、おきんちやん、よく生きてゝ下さいましたね、これで貴方に萬一のことでもあられたら、家の師匠初め、何とも申譯のしやうがありやしません、眞實によく無事でゐて下さいました。

圓枝　手前の不束は棚に上げて、何てえ人騷がせをする奴だと、今も散々小言を云つてたところです。

馬淵　いえ、おきんちやんに決して無理は御座いません、皆な手前共の息子が悪いので御座います、男らしくもない、綺麗に別れると云ひ切つた女と、未だ關係を續けてゐるなんて、こりや全くおきんちやんを踏みつけた仕方でございます、師匠も大變な立腹なんでございます。

おはま　聞きや、まるで入浸りだと云ふぢやありませんか、文太夫さんもこれまでになるまでに、何とか、鳴門さんに云つて下すつてもよさゝうなもんですのにね。

圓枝　又のさばり出やがる、手前なんかの出る幕ぢやねえ。

馬淵　いえ、之はお内儀さんの仰有るのが御道理で、師匠も、それを申すのは充分分つて居りますが、相手の家と申しますのが、御存じでも御座いませうが、あの土地で組合の役員をして居ります、土地にお弟子を持つてゐる關係上、役員の機嫌も取つて置きませんことには、會などを催しますにも色々妨げが御座いますので、今日云はう、明日云はうが、こんな事になつてしまひましたので、

誠に面目次第も御座いません。

おはま　そんなことでしたら、寧そおきんを歸して下さればいゝのに。

馬淵　飛んでもない、今更そんな事が出來ますものか、今は、藝の方で師匠が片腕と頼んでゐるおきんちやん、素人のお弟子さん達に評判はよし、殊には三遊亭圓枝と云ふ立派な看板の娘さんを、そんなことでお歸しするやうな事になつては、家の師匠が藝人社會へ顔出しが出來ません、世間へ合せる顔がありません。

初太郎　何方を向いても世間の義理だ。

圓枝　初。

馬淵　併し假令、相手が土地の役員の娘でも、謂はゞ浮氣同士、おきんちやんは嫁にと思つて貰つた娘、向うを立てゝ此方を捨てるなんてえ法はない、今度といふ今度は、斷然手を切らせて、おきんちやんと式を擧げさせるから、どうか、おきんちやんの行方を探し出して來て、もう一遍家へ歸つて來て貰つてくれ、此方のお二人にもよくお詫びして、大概は此方へ、おきんちやんが來てゐようから、是非連れて歸つて來てくれと、態々師匠から吩咐けられて伺ひました譯で、定めし御立腹でも御座いませうが、もう一度御不承下さいまして、おきんちやんを今まで通り、藏前の家へお歸し下さる譯には參りませんでせうか。

圓枝　歸すも歸さねえもありません、元々おきんは文太夫さんに上げた娘だ、煮て食はうと、燒いて食はうと、文太夫さんの御隨意だ、何卒連れて歸つておくんなさい。

馬淵　で、御座いますか、今の一言を家の師匠が聞いたらどんなに喜びますか、有難う存じます、お内儀さんは如何でございます。

おはま　本當ですか、式を擧げるといふのは。

馬淵　そりやもう、これが間違ひましたら、私の首を差上げます。

おはま　鳴門さんと一緒になれゝば、元々其つもりで上げた娘ですし、娘だつて鳴門さんには惚れてゐるんだから。

おきん　お母さん。（ト、眞赤になる）

おはま　式を擧げると云ふのが本當なら、世間體もあることだし、私に否やはありませんが。

馬淵　おきんちやんは如何です、歸つて下さいますか。

（おきんは唯モヂ／＼。）

圓枝　そりや御安心なせえ、息子さんと一緒になれると聞いたら、私共が歸るなと云つたつて、歸らねえでゐる女ぢやありません、馬淵さん、これだけは察してやつて下せえ、此奴も息子さんには惚れてゐるんだから。（ト、ポロリとなつて）だが、おきん、今度藏前へ歸つて、又候

こんな騒ぎを仕出來したら、其の時は假令お前に理分があつても、二度と再び此の家の閾を跨がすこつちやあねえぞ、いゝか、これだけは云つて置くぞ、鳴門さんに他の女が出來るのは、お前の誠が足りねえからだ、其處をよく考へて鳴門さんにも盡して、お父さん、お母さんにも孝行したけりやいけねえ、此處にゐる俺達を親だと思ふな、お前の親は藏前の夫婦、お前の家は藏前に一軒あるつきりだぞ、忘れるな。

おきん　ハイ。

（ト、泣いてゐる、おはまも共に涙。）

圓枝　どうも飛んだ芝居がかりでハヽヽヽ、おや、どうかまア何分よろしくお願ひします。

馬淵　では、急ぐやうですが、藏前でも心配してゐませうから、今日はこれで失禮致します、何れ改めて、師匠と共に今日のお詫びに伺ひます。

圓枝　なアに、お詫びだなんて、反つて困ります、どうか文太夫さんにもよろしく云つておくんなさい、寺小屋のお千代ぢやねえが、形は大きうても、未だ頑是がござりませぬだ、ハヽヽヽ。

馬淵　ぢやあおきんちやん、歸りませう。

おきん　ぢや、お父さん。

圓枝　それも今日限りだぞ。

おきん　ハイ、色々御心配かけて濟みませんでした、お母さん、御機嫌よう。

おはま　お前も身體を氣をつけて、藏前へ歸つたら、よくお詫びをするんだよ、色々御心配をかけたんだから。

おきん　ハイ、兄さん、左樣なら。

（初太郎は答へない。）

圓枝　初太郎。

初太郎　まア行つて來な。

おきん　柳雀さん、左樣なら。

柳雀　左樣なら、今度逢ふ時は赤い手絡に大丸髷か、お目出たう。

おきん　いやな、柳雀さん。

（ト、欣々として出て行く、馬淵も見送つて圓枝夫婦も出て行く。）

（初太郎は默々としてゐる。）

（間。）

（圓枝夫婦が引返して來る。）

柳雀　いや、先づお目出度たう、之が雨降つて地固まるか、ハヽヽヽ。

圓枝　おはま、何か肴を取替へて、新しく熱い奴をつけてくれ。

おはま　ハイ。

（と臺所へ。）

柳雀　初ちやん、お前も此處へ來てやつたらどうだ。

初太郎　俺は歸らう。

（ト立上る。）

柳雀　何だな、初ちやん、折角おきんちやんの話が纏まつた目出てえところだ、笑つて飲んで行きねえな。

圓枝　イヤ、こんな奴は歸した方がいゝ、いやに俺の向ふ面へ廻りやがつて、俺の積に障るやうなことばかり云やがる、折角の酒が不味くなるばかりだ、初、歸れ、もう二度と再び閾を跨いでくれるな。

初太郎　（坐つて）お父さん、お前、今、おきんにも、同じやうなことを云つたが、俺は、成程不良だ、閾を跨がせねえと云ふなア無理もねえ、俺も又、二度と再び跨ぐ氣はねえが、お前、本當におきんが、又、今日のやうな事で歸つて來ても、家の閾を跨がせねえつもりか。

圓枝　さう云ふことが俺の積だと云ふんだ、目出てえ事にケチをつけようとしやアがる。

初太郎　目出てえとは何が目出てえんだ。

（おはま、德利と、何か小皿盛を盆に載せて持つて出て來る。）

おはま　初、いゝ加減におしな、これが何でお目出たくないと云へるんだい。

初太郎　どうして又、お前はこれが目出てえと云へるんだい。

おはま　お目出たいぢやないか、おきんの身が固まつたんぢやないか。

初太郎　お前、そんな事が云ひ切れるのか。

おはま　何だつて。

初太郎　おきんの身が固まつたか、固らねえか、最後へ來て見なけりや分らねえ、それをお前は云ひ切れるのか。

柳雀　だが、固まらないとも云ひ切れまい、して見りや五分々々だ。

初太郎　さうよ、五分々々よ、五分々々のことを最初から云ひ切てしまふと云ふなアよくねえこつた、早え話が俺だ。

圓枝　手前がどうした。

初太郎　お前は俺を寄席藝人にしようとしたな。

圓枝　落語家の子だから落語家にしようとした。

柳雀　蛙の子は蛙だ。

初太郎　ところが俺は今不良青年だ。

圓枝　手前がヤクザだからよ。

初太郎　違ふ、お前に子供を見る目がなかつたからよ、海のものとも、山のものともつかねえ子供の行く末を落語家になるものと、お前が見切りをつけたからよ、おきん

の身が固まるものと云ひ切てしまつたやうによ、柳雀さんが、蛙の子は蛙だと云つたが、お前は全く蛙の向う不見だ。

圓枝　何。

（ト云ふより早く初太郎に組み付く、最初の幾度びかは初太郎に突き倒されてゐたが、どうしたものか、急に初太郎が手出しをしなくなつたので、透かさず引据ゑて亂打する。柳雀は呆れて、おはまは唯オロ／＼してゐる。）

初太郎　撲れ、撲つてくれ、氣の濟むまで撲つてくれ。

圓枝　よし、音を上げるな。（と、尙撲る）

初太郎　音は上げねえ、云ふ事がある。

圓枝　何。

初太郎　氣の濟むまで撲つたら、俺の方でも云ふことがある。

圓枝　よし、聞かう。

初太郎　俺は子供の時は落語家(はなしか)だつた。

柳雀　所謂麒麟兒つてえ奴だつたがな。

初太郎　さう云つて柳雀さんや、大人達に煽てられたのが不可(いけ)なかつた。

柳雀　餘人は知らず、此の柳雀は煽てやしねえ、心底天才だと感心したんだ。

初太郎　俺も好い氣になつてべら／＼饒舌つて暮してゐる中に、もう取返しの附かない深味へ嵌つてゐた。

柳雀　深味へ、深味へ濱千鳥は解せない辻占だね。

初太郎　落語家でござい、興でござい、手前から自分を蔑扱ひにする奴がある、手前の面の讒訴をして客の可笑味を買ふ奴がある、態と奇妙な躰を出す奴がある、學問もねえのに漢語や英語を使つて田舍者を擽ぐる奴がある、いけぞんざいなのを江戸前と心得てゐる泥臭い奴がある、巧くもねえのに名人氣取りでゐる奴がある、俺はこんな下らねえお饒舌をしてゐて、終ひにどうなる、これが生涯續けて行く稼業なのか、これが男一匹の生涯の仕事か、さう考へた時、俺は情なかつた、淚が流れた、出直さなけりやならぬえと思つた時はもう遲過ぎた、俺は落語家の世界より外に何にも知らなかつた、俺が世間に向つて何か云へるのは、落し話たけだつた。

圓枝　さう考が附いたら、何故其儘落語家の勉強をしなかつた、勉強してゐりや、そんな事を考へるゆとりはねえ、そんな事を考へるのは、手前に心の隙があつたからだ、俺は此の年になるまで、一度だつて、そんな事は考へたことがねえ。

初太郎　お前と、俺とぢや時世が違ふ、考へが違ふ、俺は自分に信用が置けなくなつた、大それたことを云ふやう

だが、俺は小さんになれるか、圓右になれるか、いやお前程にもなれるか、疑はしくなつて來た、止めよう、止めなきやいけねえ、さう思つてゐる中に、今見てえなヤクザになつてしまつた。

圓枝　馬鹿野郎、落語家を止めたくつて、不良青年になる奴があるか。

初太郎　其の間違ひの初まりは、お父さん、お前が俺を落語家にしたことだ、何の見とめもつかねえ俺を、落語家になるものと、見切りをつけたのがいけなかつたんだ。

圓枝　それ程嫌ひな落語家なら、何故最初から厭だと云はなかつた。

初太郎　親と子だ、今なら知らず、餓鬼の時分に親の命令を反くことが出來るか、小僧に行けと云はれりや厭でも行かなきやならねえ俺だ、落語を覺えろ、ヘイ、踊を稽古しろ、ヘイ、俺は尋常小學だつて滿足に行つてやしねえんだぜ。

圓枝　親の稼業を子に繼がせようとしたんだ、俺の間違ひはねえ筈だ、假に間違つてゐるとしても、不良青年に墮落するにや及ばねえことだ。

初太郎　其處だ、其處をお父さん、聞いてくれ、俺は河童小僧の時分から高座で大人の作へた話を、大人に饒舌つてゐたんだぜ、俺は餓鬼の時分から、吉原のあることを知つてゐる、女郎が廻しを取ることを知つてゐる、振ると云ふことを知つてゐる、もてるといふ事も知つてゐる。妾といふものがどんなものだか段々分つて來た、博奕が分つて來た、戀病ひ、駈落、心中、分つて來れば來る程、知らねえ世界が見たくなるぢやねえか、知りたくなつても來るぢやねえか。

柳雀　成程、早熟だつた譯だ。

初太郎　素人が見たら未だ子供だと思ふ時分から俺はグレ出した、女を知つた、さア面白い、枝を渡る小鳥のやうに、俺は次ぎから次ぎへ女を作へて行つた、落語家稼業が厭になるに從つて、俺の道樂は段々嵩じて行つた、席は拔く、家は明ける、偶に歸つて來りや、お前には口汚くやつつけられる。

圓枝　又、それが當然だらう、何處の世界に道樂者を褒め稱す馬鹿な親がゐるか。

初太郎　自分を眞面目に考へると、恐ろしくつて、不安心で耐らねえ、それを紛らす女だ、酒だ、だが、女も酒も、一時は紛れても、何時まで紛れさしてゐてはくれねえ、本心がヒョイと頭を持上げると、俺はこんなことをしてゐていゝのか、何故もつと眞面目になつて考へねえ、女と酒に一時を紛らしてゐる自分の心が情なくつて、女の膝を枕に、醉つて泣いてゐる時が幾度びあつたらう、考

へよう、落着いて眞面目に考へよう、さう思つて歸つて來りや、お前は頭ごなしにガミついて、不良青年だ、のらくら者だと、世間ぢやそれ程思つてゐねえものを、親のお前の口から御吹聽だ、面白くねえから、又家を飛出す、女だ、酒だ、俺の心の持つて行き場に其處より外にねえ、俺ら自分の不良だつてえことはよく知つてゐる、だが良くねえことでもしてゐなけりや、俺の心の捌け口がねえ、儀否ることより外に何にも能のねえ俺なんだからな。（泣く）

圓枝　それが何んの辯解になる、自分で勝手にグレ出して、不良青年に墮落した手前だ、手前の爲めに、どれだけ迷惑してゐる人があるか分らねえぞ、そんな奴を無暗に家へ入れて、世間樣へ申譯が立つか。

初太郎　又、世間だ。

圓枝　何。

初太郎　お父さん、お前、その、世間と云ふ繩から拔けることは出來ねえか、二言目には世間の掟だ、浮世の義理だ、一體世間が何をしてくれる、浮世が何を庇つてくれる。

圓枝　手前、理窟を云ふ氣か。

初太郎　理窟ぢやねえ、世間體なんてえ下らねえもの丶爲めに、子供を玉なしにしなさんなと云ふことよ。

圓枝　手前なんか、子供とは思つちやゐねえ。

初太郎　俺のことを云つてゐんぢやねえ、俺は自分で落着いて考へる場所を昨夜やつと見つけた、だから俺なんかどうでもい丶、おきんのことだ、お前も、お袋も、おきんの身が固まつたと安心してゐるが、今も云つた通りだ、一寸先きはくらやみの世の中に、どうしてそんな見通しがつく、俺はケチをつけるんぢやねえ、おきんがあの儘幸福に行つてくれ丶ばこんな嬉しい事はねえ、だが、ハツキリ幸福に行くと誰が云ひ切れる、若しも、願はねえことだがおきんが、又先刻見てえな事で歸つて來たら、世間體なんか構はずに直ぐ家へ入れてやつてくんねえ、これが頼みなんだ。

（「御免」と訪ふ聲。）

おはま　ハイ。

（と立つて行く。）

蔭の聲　俺は日本堤の警察のものだが、今、此の家へ、お前んとこの初太郎が立廻りやしなかつたかな。

おはま　はい……。

蔭の聲　祕すと爲めにならんよ。

初太郎　旦那、居ります、どうぞお上んなすつて、今自首して出ようと思つたところなんで。

（おはま、刑事を案内して來る。）

初太郎　御苦勞樣です、御手數をかけて恐れ入りました、逃げ廻つてゐた譯ぢや御座いません、兩親に一目別れを告げたいと思ひましたんで、ヘイ。
おはま　お前、まア。
（ト、泣き伏す。）
初太郎　お袋、勘忍してくんねえ、此の泣きを見せめえと、直ぐ名乘つて出ようと思つたが、不良でも不孝でも、イザとなりや、お前達が戀しくなつてねえ……長話の爲めに到頭泣きを見せてしまつた、昨夜吉原で三人も叩き斬つたんだ。
柳雀　初ちやんか。
初太郎　婆婆にゐちや、俺の心はイラ〳〵するばかりだ、出るに出られねえ所へ行つて、靜に落着いて考へてえ、さう思つてゐる矢先きへ吹掛けられた昨夜の喧嘩だ、俺の落着ける場所は此處だなと思つた、それでなきや、そんな度胸のある俺ぢやねえ、お父さん、お願ひだ、若しもおきんが歸つて來るやうな事があつたら、直ぐ家へ入れてやつてくんねえ、自分の家程落着けるところはねえんだからな、頼むよ、頼むよ。
（おはま聲高く泣く。）

――幕――

第二幕

仲見世裏あたりの小料理屋琴富貴の店先き、何處その店の寫生でありたし、前幕より三年後の曇り勝ちなる夜。幕開く。
ト、滅切り年を老つた圓枝が數本の酒を傾けた醉ひに乘じて落語をやつてゐるのを、主人の民三郎におふぢが、面白がつて聞いてゐる外に、見物に背中を見せて醉ひ潰れてゐる男がある。初太郎である。が、圓枝は少しもそれを知らない。
（圓枝の落語はなるべく賑なものが可い。）
戸外にバラ〳〵雨。
圓枝　オヤ、又降つて來たかな。
（柳雀が鼻歌で入つて來る、これは前幕と餘り變りがない。）
柳雀　今晩は。
民三郎　被來い。
圓枝　オヤ。
柳雀　オヤ。
圓枝　珍らしい人に逢ふもんだね。
柳雀　全く、一別以來だね、二年になるかな。
圓枝　ウム、丸二年になる、相變らず若いな。

柳雀　お前も、と云ひてえところだが、老けたな。
圓枝　ウム、すつかり考ひ込んぢやつた。
柳雀　無理もねえ、色んな事があり過ぎたからな。
圓枝　…………。
柳雀　ところで、お早いところで一本願ひますかな。
圓枝　（民三郎に）柳雀さんは初めてかい。
民三郎　ヘエ、高座でお顔は拜見してますが、
柳雀　拜見は恐れ入りやしたね。
圓枝　此の人が此處の親方だ。
民三郎　何分よろしく御贔屓に、師匠には何時も御厄介になつて居ります。
柳雀　どうも恐れ入ります。
圓枝　こちらがお內儀さんだ、夫婦に成り立ての、芋ならポツポと煙が立つてゐようといふところだ。
おふだ　いやなお師匠さんね。
圓枝　これからチョイ〳〵來てやつてくれ。
民三郎　どうぞこれを御緣にチョイ〳〵でなく度々被來つて。
柳雀　來ますよ、來ますとも、唯こんな美いお內儀さんを持つてるのがチイッとばかり癪だが。
民三郎　御冗談ばつかり、何か差上げますか。
柳雀　左ゝですな、〇〇と〇〇を頂きませうか。
民三郎　ヘイ、畏りました。
柳雀　その前に不取敢、河童の御新香を頂きませうか。
民三郎　畏りました。
圓枝　どうだい、相變らず出掛けるかい。
柳雀　吉原かい、時々。
圓枝　餘り時々でもなささうだぜ、景氣はどうだい。
柳雀　暇らしいな。
圓枝　何でも吉原へ話を持つて行きやあがる。
柳雀　違ふのか。
圓枝　當然ぢやねえか、俺が吉原の景氣を聞いてどうなる。
柳雀　我々の方か。
圓枝　さうよ。
柳雀　駄目。
圓枝　簡單だな、そんなか。
柳雀　お話にならないね、お前はいゝ時に引退したよ。
圓枝　餘りいゝ時でもないぜ。
柳雀　さう云やさうだが、禍轉して福となるさ、何しろ滅茶々だからね、眞實に落語を知つてる奴つてえのは、我々の仲間にもホンの僅だからね、いけぞんざいなのを江戸前だと心得てゐる泥臭いのや、次ぎから次ぎへと金魚の糞のやうに當世の言葉を連發して、客を擽ぐるのが

新しい落語家だと云はれてる當世ぢや、もう我々も引退さ、何しろオートバイで驅持ちするやうなのが現はれちや、未だ目を廻さないのが不思議な位さ。

圓枝　其奴は大變だな。

柳雀　ラヂオだよ、モダーンガールだよ、毛蟲だよ、腋臭だよ、江戸前も糞もあるものか。

おふぢ　ホヽヽ。

圓枝　ひどくお冠りだな、併し、さうかなあ、二年ばかりの間にそんなに變るものかなあ、立山ぢやないか、浮世を離れて見ると、昔の世界が戀しくつてな。

柳雀　（一寸唄ふ）鶉の啼く聲か、鷗にや違えねえや、ハハヽヽ。

圓枝　今も昔を思ひ出して、〇〇を饒舌つてゐたところよ。

柳雀　其奴は聞物だつたらうな。

おふぢ　お腹を抱へて笑つてしまひましたわ。

民三郎　上り。（膳）

おふぢ　ハイ。

（ト、取りに行く。）

圓枝　さうかな、そんなかなあ。

柳雀　さう云へば、おきんちやんは未だ行方知れずか。

おふぢ　お待遠樣。

柳雀　（一寸おふぢの方へ顧を捻つて）思ひ出すだらう。

おふぢ　何で御座います。

柳雀　斯うして若夫婦共稼ぎのところを見ると、昔が思ひ出されると云ふのさ。

おふぢ　まア、いやですね。

柳雀　（唄ふ）聞けば昔が戀しゆてならぬさ。

おふぢ　まア、乙な咽喉をして被在いますのね、お師匠さんの代りに何か聞かして下さいな。

民三郎　おふぢ、今の間に失禮して御飯にしてしまはう。

柳雀　御亭主が妬いてるぜ。

おふぢ　御冗談ばつかり、一寸御免下さいまし。

柳雀　仍日傍がいゝと見えるな。

おふぢ　憎らしい。

（ト、料理場の中に入る、雨。）

柳雀　一年ばかりだつたな、おきんちやんのあんな初々しい丸髷姿の見られたのも、何處からも便りはないかい。

圓枝　ない。

柳雀　察しるよ、初ちやんはあんなことになる、おきんちやんはあんなことになる、女房には死に別れる、俺は、もうお前の顔が見られなくなつたんだ、そいで、今日まで聾の道を極め込んでしまつたんだ、薄情で訪ねなかつたんぢやないんだからな。

圓枝　分つてるよ。

柳雀　俺もさう思つてた、お前には、俺の心持が分つてるてくれると。
圓枝　分つてるよ。
柳雀　だが、おきんちやんがどうしてそんな氣になつたんだらうな、あんなことの出來る人ぢやないんだがな。
圓枝　もう、そんな話は止さう、それより、飲まう。
柳雀　うん、飲まう、親方、燗いてますかい。
民三郎　ヘイ。
（ト、答へて口をモグ〳〵させながら、徳利を持つて出て來る。）
民三郎　どうもお構ひ致しませんで。
（ト、酌をする。）
柳雀　どうか、御遠慮なく、四寸づつに召上つて下さい。
民三郎　恐れ入りました、では一寸。
（ト、愛想笑ひをして入る。）
柳雀　さ。（ト、酌をし、自分にも注いで、口の邊まで持つて行つて、一寸考へて、猪口を下に置く）だが、思ひ出すだらうな。
圓枝　（微に首肯く）
柳雀　さうだらう、だが、どうしてゐるだらう。
圓枝　捨てられてるに極つてる、どうせ弟子と駈落するやうな奴だ。

柳雀　叱。
（ト初太郎の方を見る、初太郎は身動きだもしない。）
柳雀　よく寢てるな。
圓枝　先刻から寢てるんだ。
柳雀　此處の家でも迷惑だらうに、起してやらうか。
圓枝　まアいゝ、打捨つて置きねえ、看板になつたら、此の家で起すだらう、俺で慣れてるから。
柳雀　お前は、此の家とは餘程懇意なのか。
圓枝　開業當日から缺かさずの御定連だ、家で飲むより世話がねえからな。
柳雀　無理もねえ、一人ぢや淋しいだらうからな、どうだえ、これから俺に附合はねえか、千束町に一寸俺の知つてる家があるんだ、安値なる待合だがね、其處でわつと騒いで、今夜はお前の慰安會をやらうぢやねえか。
圓枝　有難え、御馳走にならう。
柳雀　さうと極れば善は急げだ、直ぐ出かけよう。
（此の時分に民三郎とおふぢとは店へ出てゐる。）
民三郎　大分いゝ御相談で。
柳雀　親方も一緒にと誘ひてえところだが、お内儀さんが離すめえ。
おふぢ　いゝえ、どうぞお連れなすつて。
柳雀　まア、葡萄棚が倒れるといけねえから止めにしよう。

圓枝　親方、皆な一緒に。
民三郞　畏りました、毎度有難う存じます。
柳雀　（戶外へ出て）止んだらしいな。
圓枝　止んだとすると傘が荷厄介になる奴よ。
民三郞　置いておいでになりますか。
圓枝　まア持つて行かう、何處で又ポツ／＼やつて來ねえとも限らねえから、お邪魔樣。
民三郞　有難う存じます。
柳雀　又、來ますよ。
民三郞　どうぞお近い中に。
（兩人は去る、夫婦は後片附け。）
おふぢ　おや、こんなものが。
民三郞　圓枝さんが忘れて行つたんだらう。
おふぢ　屆けて來て上げようか。
民三郞　ナーニ、明日の晩來なすつた時に渡しやいゝだらう。
（初太郞目を覺ます。）
初太郞　あゝ、よく寢ちやつた。
民三郞　お目覺めで御座いますか。
初太郞　どうも濟みません、すつかり寢込んぢやつて。
民三郞　どう致しまして、お起ししようと思ひましたが餘りよく寢込んで被在るので。
初太郞　濟みませんでした、如何程です。
民三郞　お歸りで御座いますか、まア、お顏でもお拭きになつて（おふぢに）手拭を絞つて來て上げな。
おふぢ　ハイ。
（ト、中に入る。）
（道具廻る）

第三幕

辨天山の鐘撞堂附近、寫生によりたし、道具納まる。
ト、壽賀野の方から客が四五人、藝妓に送られて賑に出て來る、反對の方角から圓枝に柳雀が出て來る。
客甲　やア、柳雀さんぢやないか。
柳雀　オヤ、これはお揃ひで、何方へ。
客乙　これからオリエントへ行かうと云ふんだ、附合はないか。
客丙　柳雀さんをオリエントへ連れて行くのは可哀さうだよ、吉原でなければ、ねえ、柳雀さん。
客甲　ぢやあ吉原へ行かう。
藝妓甲　アラ、私達も行つていゝんでせう。
客乙　駄目だ／＼、お前達は歸るんだ、彼處は女の來るところぢやない。

藝妓乙　アラ、隨分失禮しちやふのね。
客甲　ぢや、自動車をさう云はなきや、其處まで歩かう。
客丙　どうしたんだい、柳雀さん。
柳雀　へイ、實は友達と一緒なんで。
客丙　誰だい。
柳雀　圓枝なんで。
客甲　圓枝さんなら俺達も寄席で知つてゐる、いゝぢやないか、一緒に行かう。
柳雀　どうするい。
圓枝　俺は失禮しよう、どうも吉原はね。
客乙　いゝぢやないか。
圓枝　折角でござんすが、まア、柳雀だけお連れなすつて。
柳雀　だが、それぢやア折角俺が慰安會をしようと思つたのに。
圓枝　そりや此次ぎにして貰ふことにしよう、まア、お前だけお供をして來ねえ。
柳雀　濟まねえな、どうも。
圓枝　まア、いゝから行つて來ねえ。
客甲　ぢやあ、行かう。
藝妓丙　私達も行くわよ。
客乙　お前達は歸るんだ。
藝妓甲　いゝわよ、何處までも從いて行くから。

柳雀　ぢやあ、何れ又。
（ト、捨臺詞にて、賑に立去る、圓枝が一人淋しく取殘される、軈て悲しさうな後ろ姿を見せて立去る。）
（物蔭から窶れ果てたおきんが出て來る、立去つた圓枝の後ろ姿を見送る、軈てシク〳〵泣き出す。）
（初太郎が來る、おきんを見て訝る、おきんも初太郎を透かし視る。）
おきん　兄さん。
初太郎　おきん。
（おきんが逃げ出さうとするを引戻して。）
初太郎　オイ、何故逃げる。
おきん　兄さん、勘忍して。
初太郎　勘忍してとは、何を勘忍するのだ、三年振りで逢つた俺に、最初の挨拶が勘忍してとは、お前はどんな罪を犯したんだ。
おきん　勘忍して、勘忍して、お詫びは死んでしますから。
初太郎　死ななきやなるまい、俺は聞いたぞ、俺はお父さんの口からハツキリ聞いたぞ。
おきん　お父さんに逢つたんですか。
初太郎　逢つた、いや、見たんだ、お父さんは氣が附かなかつたが、おい、お父さんは年を老つたぞ、窶れたぞ、俺は最初、お父さんの姿を見た時、俺濟まないと思つた、

寢たふりをして段々話を聞いてゐると、お前までが、お前までが、お父さんに苦勞をかけてゐようとは、俺は夢にも思つてゐなかつた。
おきん　濟みません、勘忍して。
初太郎　勿論、お前のあれからが、幸福だとは俺には思へなかつた、だから俺はあの日、お前の爲めにお父さんに賴んだ、歸つて來たらば家へ入れてやつてくれ、自分の家程落着ける場所はないと、取組合ひの喧嘩までして賴んでやつたんだ、成程今の話の様子では歸れまい、又、歸つてもお父さんは家へ入れまい、俺にしても、お前を家へ入れることは出來ないからな、俺は心の底からお前を憎む、輕蔑する。
おきん　兄さん、私、口惜しい。（と縋りつく）
初太郎　（振拂つて）何が口惜しい、オイ、口惜しいとは何が口惜しいんだ、お前ばかりはそんな女ぢやないと思つてゐた、人の子を育てるのも、狗の子を育てるのも、同じやうに考へてゐる親父の爲めに、さうして世間體ばかりを考へてゐる親父の爲めに、こんなに墮落してしまつた俺の二の舞ひをさせたくないと、俺はお前の爲めに親父と最後まで喧嘩をした、其お前が、亭主のある身で弟子と駈落するやうな女だつたとは、俺は夢にも知らなかつた、今の俺の口惜しさが、お前に分るか、おい、お前に分るか。
おきん　道理です、けれども之には譯があります、私、其の男に欺されてゐたんです。
初太郎　何。
おきん　其の男は私の處へ來て、若師匠は未だあの女と別れてはゐない、未だに祕密で會つてゐる、馬道のお父さんへの義理に、夫婦になつたやうなもの丶、其中に私に難癖をつけて逐出して、後へあの女を入れるつもりだと、親切に教へてくれたんです。
初太郎　さうして、それは本當だつたのか。
おきん　本當でもあり、嘘でもあつたんです。
初太郎　何だつて。
おきん　私と一緒になつてからあの人は、未だ暫くあの女と別れませんでした、其の中に、女の方で、あの人に、私と云ふものが出來た爲めに面當でせう、外の人と一緒になつてしまひました、それを知らなかつたのが私の馬鹿だつたんです、私は何時までもあの人が別れずにゐるんだとばかり思つてました。
初太郎　それで、其の男に欺されたと云ふんだな。
おきん　さうなんです、雖然、私、お父さんに云はれた事があるんで、一生懸命辛抱しました、あの時辛抱しなかつたら、今、こんな日蔭者にはなつてゐなかつたらうと、

勿體ないやうですけれど、お父さんを怨めしいと思つたこともありました。
初太郎　それでどうした。
おきん　でも、心ん中ぢや口惜しくつて口惜しくつて仕様がありませんでした、其處へ其の男が來て親切ごかしに油をかけるんです、到頭、其男と……魔が差したんです、魔が差したんです。
初太郎　何處へ逃げたんだ。
おきん　大阪へ逃げました。
初太郎　大阪で捨てられたのか。
おきん　私が身重になつたものですから。
初太郎　お前が。
おきん　一目お父さんに、逢へたら兄さんにもと、思つた願ひが叶ひました、お母さんのことは風の便りに聞きました、私、これからお母さんの傍へ行つて來ます、左様なら。
初太郎　待て。
おきん　一日生きてゐれば、一日お腹の子供の大きくなるのが分ります、早く私が死んでやらなけりや、生れようとしてゐる子供が可哀さうです。
初太郎　子供が可愛いか。
おきん　男は憎くつても、子供は可愛いゝものだと初めて分りました。
初太郎　お父さんの處へ行かう。
おきん　えゝ。
初太郎　お父さんの處へ行つて相談しよう。
おきん　そりや駄目に極つてますわ。
初太郎　俺が話をする、お前の爲にぢやない、お前の子供の爲めにだ、何にも知らずに生れて來る子供にまで、罪を背負はせるのは殘酷だ、兎に角來い。
（ト、行きかゝる、圓枝が出て來るのに行き逢ふ、おきんは我知らず隱れる。）
初太郎　お父さん。
圓枝　初太郎か、お前、出て來たのか。
初太郎　出て來ました。
圓枝　出て來て、何故親の家へ歸つて來ない。
初太郎　えゝ。
圓枝　俺はお前の考を聞きてえと、どんなに心待ちに待つてゐたか知れねえぞ。
初太郎　だが、私は前科者だ。
圓枝　前科者が何だ、悪いことをした、だからそれだけの年貢を納めて來た、それでいゝぢやねえか、大手を振つて歸つて來い。
初太郎　有難え、お父さん、よく云つてくれた、有難え、

有難え。

圓枝　俺は今、其處の琴富貴と云ふ家へ一寸大事な物を忘れて來たんで、それを取りに行くところだ、一寸此處に待つてゝくれ、直ぐ引返して來るから。

初太郎　其の前に、俺は一寸頼みがあるんだが。

圓枝　何だ。

初太郎　肯いてくれるか。

圓枝　おきんの事の外はな。

初太郎　えゝ。

圓枝　おきんのことなら可惜口に風だ、止しにしな。

初太郎　ま、待つてくんねえ、成程おきんのした事は悪い、だが聞いて見りや、可哀さうなところもある、おきんは男に欺されたんだぜ。

圓枝　それは知つてゐる、おきんが逃げた時、藏前の家から口上で、今度のことは、おきんが欺されたに違ひない、それと云ふのも息子に以前のことがあるから、こんな間違ひになつたんだ、おきんに罪はねえ、此方では別に訴へもどうもしねえ、但しおきんの籍は返します、もしおきんが其方へ尋ねて行つたら、快く家へ入れてやつてくれと立派な口上だ、その口上に對して、どうしてオメオメおきんが家へ入れられるか。

初太郎　未だ世間の掟に浮世の義理か。

圓枝　初、お前は、俺が世間體を大事がるのを、下らねえことのやうに云ふが、世間の人間が、皆なお前のやうに、自分の我を通さうとしたら、世の中はどうなる、浮世の義理も、大事にしなけりやならねえものだぜ。

初太郎　おきんは、お前にも俺にも會つたので、お袋の傍へ行かうと云つてるんだぜ、お前、おきんを見殺しにする氣か。

圓枝　…………

初太郎　おきんばかりか、腹の中の子まで。

圓枝　え、子供。

初太郎　おきんは身重なんだぜ。

圓枝　…………

初太郎　お前の言葉を守つて辛抱した爲めに、おきんはこんなことになつたんだぜ。

圓枝　…………

初太郎　お父さん、お前、今、俺に大手を振つて歸つて來いと云つてくれたな、嬉しかつたぜ、俺は本當に嬉しかつた、だが、お願ひだ、俺にかけてくれる其の情を、おきんにもかけてやつてくれねえか、俺は男だ、どうにでもなれる、又どうなつても構はねえ、おきんは女だ、殊に身重だ、お前、おきんは憎からう、だが腹ん中の子供まで憎くはあるめえ、憎いかい、え、お父さん、憎いか

い、お前には孫だよ、初めての孫だよ、そりや成程、生まれて来る孫の親父のことを考へると腹も立つて來るだらう、腹の立つのが當然だ、俺にしたつて、タツタ一人の妹をこんな目に遭はした男だ、面を見たら撲り倒すかも知れねえ、イヤ殺すかも知れねえ。だが、出來た子供は、出來た子供は何にも知らねえと思ふんだ、こゝでお前までがおきんを見放したら、子供はどうなる、罪も報いもねえ子供に親の罪を背負はせるのは、俺はチイツト殘酷ぢやねえかと思ふんだ、おきんも云つてゐるんた、男は憎いが子供は可愛いと、お前、孫は可愛いかねえかい、初孫の顏を見たかねえかい。

（おきん、耐らず泣く。）

初太郎　俺もおきんもヒヾの入つた身體だ、それも云や愚痴になるから云はねえが、兎に角お前は、子供の育て方を間違へて、二人まで玉なしにしてしまつたんだ、せめて、孫だけでも立派に育てようとは思はねえかい、好い親父さんだと云はれたかねえかい、え、お父さん。

圓枝　…………

（急に雨が降り出す。）

初太郎　あゝ、此奴はいけねえ。

（ト、木の下へ駈け込む、圓枝は傘を擴げて、）

圓枝　おきん、此處へ入んな、梅雨の雨は身體に毒だ、初、お前も入んな。

（初太郎とおきん、雙方から駈寄る。）

初太郎　お父さん。

おきん　お父さん、濟みません。

圓枝　おきん、何も云はねえ、身體を大事にして、早く孫の顏を見せてくれ。

（おきん、聲高く泣く。）

（辨天山の鐘の音。）

――幕――

わくら葉（一幕）

（或る事實譚による）

人

萩原留吉（五十五六歳）
長男 啓一（三十歳前後）
次男 浩二（二十五六歳）
長女 おさよ（二十歳前後）
刑事 鹽崎（四十歳前後）

時

現代

所

向島曳舟邊のある小かな家、往來面よりは低く、垣根で圍まれてゐる、八疊程の一間と、四疊半程の一間と、臺所と、それだけの家、つまり、八疊が玄關でもあり、座敷でもあり、四疊半が奥の間で、茶の間に當たる形になつてゐる、四疊半の奥が臺所の心、小かな庭があるが、直ぐ側に裏の家との境界の板塀が立つてゐるので、臺所からは出入りは出來ない、塵埃箱も表にある、往來からダラ／＼降りて來たところは稍廣い空地になつてゐて、此處へ八疊から床が張出せるやうになつてゐるので、狹い家が稍廣く、三間に使へるやうになつてゐる。家は狹いが、箪笥、鏡臺等は總體に小綺麗な品が使はれてある、柱には活動の女優の繪葉書を、聯のやうに吊してあつたり、机には机かけが懸けてあつて、婦人雜誌が積んであつたり、特に女に關する諸道具は小ざつぱりとしてゐるが、長火鉢や、さう云つた生活上の諸道具、男に關する諸道具は數も少ないし、全體に古びてゐる、垣根に蔓をまつはらせてゐる朝顏は、見事な花を咲き揃はせて、四邊を非常に明るく、派手にしてゐる。何處かの小學校で唄つてゐるのか、小さな生徒の歌が聞えてゐる。

幕明く。

ト、留吉と啓一と浩二が今、朝の食事を終つたところ、留吉は年より疲れてゐる、啓一は右の片腕が無い、浩二は肺を侵されてゐるので、始終沈欝ではあるが、頭は非常に明敏である。浩二が後片附をする、留吉は始終默々としてゐる。

啓一　オイ、お父さんのお辨當は出來てないのかい。
浩二　（食器を洗ひながら）うゝん、おさよが詰めて行つた、何故だい。
啓一　いゝや、何でもないが、お父さん、もうとつくに八時過ぎましたぜ。
（留吉はいげに柱時計を見上げる。）
啓一　かまはないんですか。
留吉　いゝや、出掛けるよ、併し、未だゆつくりしてもいいんだ。
啓一　さうですか。
留吉　（自分から辯解するやうに）××橋の架橋工事も一段落附いたんで、そんなに早くから現場へ行かなくつともいゝんだ。
啓一　さうですか。
留吉　併し、そろ〳〵出掛けるとしようかな。
啓一　お父さん、貴方、何處か、工合が惡いんぢやないんですか。
留吉　いゝや。
啓一　さうですか。
留吉　どうして。
啓一　何だか此頃、出張所へ出掛けるのが億劫らしいから。
留吉　さうかな、自分ぢやさうとは思つてないが、年の故だらう。
啓一　休んで差支へないんだつたら、休んだらどうです。
留吉　（間）まア、出掛けるとしよう、無暗に怠けて馘にでもなると大變だからな、ハヽヽヽ。
（ト淋しく笑つて、洋服と着更へる爲めに立上る。）
（豆腐屋のラッパ、さつま揚の賣聲。）
（おさよが歸つて來る、入口の處に立留まつて、入つて來ない、此間に浩二が洗ひ物を終つて、六疊の方へ來てゐる、父の洋服の着更への手傳ひなどしてゐたが、不圖おさよの入口に立つてゐる姿に心附く。）
浩二　おさよ。
（啓一も、留吉も不思議さうにおさよの方を見る。）
啓一　どうしたんだ、今時分、店へは行かなかつたのか。
（おさよは默つてゐる。）
留吉　工合でも惡くなつて、途中で歸つて來たんぢやないか、そんなら、店へ電話をかけといてやらなきや。
（ト、浩二を顧る。）
浩二　かけて來てやらう。
（ト、外へ出ようとする。）
おさよ　兄さん、いゝんです、私、もう、お店へ行かれなくなつてしまつたんです。
（「何」と云ふ聲が三人の口から漏れる、おさよは家の

内へ走り入つて、わつと泣き伏す。）
（「おい、どうしたんだ」「何かあつたのか」「何か、口惜しいことでもあつたのか」「泣いてゐちや分らないぢやないか」などと云ふ言葉が、三人の口から吐かれる。）
おさよ　私、お店を斷られて來ました。
（再び「何」「何だつて」といふ聲が聞える。）
おさよ　お店の風儀を紊したと云ふんで、馘にされてしまひました。
啓一　風儀を紊した、お前がか、おさよ、お前、本當に風儀を紊したのか。
おさよ　私は知りません、雖然、支配人がさう云ふんです。
啓一　何。
（郵便配達が一葉の葉書を投げ込んで行く、留吉が取上げて見る。）
留吉　あ、店からだ。
おさよ　それでせう、支配人が、昨夜斷りの葉書を出したと云つてましたから。
留吉　（讀む）都合により、明日より御出勤に及ばず候。
おさよ　それを知らなかつたものですから、今朝行つて恥を搔いて來ました。
啓一　併し、お前が風儀を紊したと云ふのは本當か。

おさよ　兄さん、兄さんにも、私がそんな女に見えますか。
浩二　さうは思はないから、兄さんも譯を聞いてるんぢやないか。
おさよ　（泣いて）私が馬鹿だつたんです、私に何の考へもなかつた爲めに、お友達に中傷されたんです。
清二　と、云ふと。
おさよ　私が夜遲く、お客と向島へ行つたと云ふんです。
浩二　誰が。
おさよ　お客がです、自動車で行くのを見た人があると云ふんです。
浩二　行つたのか。
おさよ　送つて來て貰つたんです、先々月の十日の晩でした、遲番のところへ、醉拂ひのお客がゐて、何時までも歸らないので、到頭電車をなくなしてしまひました、此の曳舟までぢや、自動車も高いし、結局今日は唯働きかと思つて悲觀してゐたところへ、松村さんと云ふお客が……何時も店へ來るお客なんです……僕はこれから水神へ行くんだが、何なら途中まで乘つて行かないかつて云つて下すつたもんですから。
清二　それを誰かに見られたんだな。
おさよ　見られただけなら未だいゝんです、其の松村さんか、私を送つて來たことを、さも意味ありさうに、自分

のお友達に饒舌つたらしいんです。
浩二　下らない奴たな。
おさよ　それを又、其友達がお店へ來て、お店の人に饒舌つたんです、雖然、私は何でもないんですから、何を云はれても平氣でゐました、さうすると、それを圖々しいの、腕が凄いのつて、皆が知らないお客にまで吹聽するんです。
啓一　そんならさうと、何故早く支配人に云つけなかつたんだ。
おさよ　餘計、皆に憎まれますもの、それでなくつても、店へ來るお客が、皆な、私を何た彼たつて云ふもんですから、其の嫉妬もあるんです、チップだつて、私の番の時に下さるチップと、外の人の番の時にやるチップとは違ふもんですから、今までゝも、そりや隨分蔭口が脊媚かつたんです。
啓一　併し、唯單にそれだけのことなら、風儀を紊したとは云へないぢやないか。
おさよ　お客の方も脊媚くなつて來たんです、おさよもいいが、無暗に金を欲しがるんで困るとか、僕は五圓取られたの、僕は十圓取られたのつて、支配人だの、酒場の男の人に饒舌り散らすんです。
啓一　お前は又、取つたことがあるのか。

おさよ　ありません。
啓一　ないものが、又、どうしてそんな事を云はれるんだ。
おさよ　向うで下さるから、貰つただけです。
啓一　何故、又、そんな金を貰ふんだ。
おさよ　何故つて、おさよさん、君は大變なんだつてねえ、お父さんと、兄さん二人を、君一人で養つてゐるんだつてねえ……
（ト、云はれて、啓一も浩二も暗い顏をする、留吉の更に更に暗い顏、おさよは慌てゝ。）
おさよ　私が悪かつたんです、云はなくつてもいゝことを、彼處へ入る時に、支配人に、家庭の事情を一寸話したのが、何時の間にか皆に傳はつてしまつたらしいんです、濟みません、恥をかゝして。
浩二　併し、其通りなんだから仕方がない、兄さんは此の通り腕無し、俺は肺病なんだ、お前が働いてくれなかつたら、俺達は餓死（うゑじに）だ。
おさよ　（聲上げて泣く）
浩二　（慌てゝ、そして柔しく）オイ、俺は決して皮肉で云つたんぢやないんだよ、其の通りだから、其の通りのことを云つたまでなんだから氣を悪くしないでおくれ。
おさよ　でも、お父さんだつて、勤めて被在るんぢやありませんか、それを私ばかりが働いてゐるかのやうに……。

留吉　おさよ、お前は決して、そんなに謙遜するには當らないんだ、事實、俺達は、お前がカフェーで働いて來るお金で生活を保證されてゐるんだから、私の月給なんて、何の足しにもなるものぢやないんだからな、併し、お前があのカフェーを斷られたとなると、私達は、もう今月の生活に困らなければならないな。

おさよ　いゝえ、お父さん、何も、彼處ばかりがカフェーぢやありません、未だ外にいくらも、彼處より、收入の多いカフェーもありますから、私、これからにでも行つて、何處か、口を搜して來ます。

啓一　だが、待て、風儀を紊した爲めに馘になつたといふことになると、お前の今後にも關係することだ、今の話の續きを聞かう、お前に、風儀を紊した覺えがないとすれば、お前の名譽の爲めに彼處の支配人に掛合はなければならない、客は、お前に同情して、金をくれるのか、お前の方からくれろと云つた覺えはないんだな。

おさよ　ありません、何時も、お客の方で勝手にくれるんです。

啓一　勝手に。

おさよ　勝手にです、勝手に同情して、何かお買ひと云つて、無理にくれるんです。

啓一　それをどうしてそんなことを云ふんだ。

おさよ　私が、お金を貰ふだけで、何處へも行かないからです。

啓一　其の金で誘惑しようとするんだな。

おさよ　さうです、松屋の休憩室で待つてゐるから晝の休みに出て來ないかとか、松坂屋の横町で待つてゐるから歸りに何處かへ行かないとか、私達が其のお金を貰ふことが、其人達には或る事の承諾の意味に取れるんです、これを私がキッパリ斷るもんですから、一旦くれたお金を返してくれとも云へない腹癒せから、中には品物でくれた人は返してくれと云ふ人もあります、取られたとか、腕が凄いとか、そんなことを云ひ觸らすんです。

啓一　さう云ふ意味の籠つてゐる金と知つてゝ、何故お前はそれを貰つたりするんだ、知つてゝ貰ふのはお前が惡い、凄いと云はれても仕方がないぢやないか。

おさよ　だつて兄さん、私、お金が欲しいんですもの。

啓一　何。

おさよ　又、兄さん達の氣を惡くするか知れませんけど、私、お父さんを樂にして上げたいと思ひます、お父さんの今の年で、毎日の勤めは、必と樂ぢやないと思ひます。小さい兄さんにも、もつと藥を服まして上げたいんです、出來ればこんな空氣の惡いところでなく、もつと、空氣の好い海岸へやつて上げたいと思ひます、兄さん、貴方

にも氣兼ねなく、遊んでゐて貰ひたいんです、兄さんが始終達者にして被在るのを、私、見るのが辛いんです。

（誰からとなく溜息が漏れる。）

おさよ　承知してゝ、そんなお金を貰ふのは、私が悪いかも知れません、腕が凄いのかも知れません、雖然、此の頃のやうに不景氣ぢや、お客も少いし、お金なしぢや生きて行かれないんですもの。

留吉　俺に意氣地がないからだ、おさよが悪いんぢやない、みんな俺の責任だ。

啓一　俺は何故あの時、器械に卷き込まれて死んでしまはなかつたらうな、助け出されたのが、今ぢや怨みだ。

浩二　僕こそ、どうしてこんな病氣に取つかれたんだらう、死んでしまへ、穀潰し。

おさよ　いや、兄さん、そんなことを云つちや、私、必と兄さんの病氣は治して見せますから、イラ〳〵しないで、氣永に養生して頂戴、いゝこと。

啓一　おさよの云ふ通りだ、俺と違つて、お前には健康體に復せる希望があるんだ、おさよの爲めに快くなる工夫をして、俺と二人分、おさよに恩返しをしてくれなくつちや困る。

おさよ　小さい兄さんのことばかり心配してゐるやうで、兄さんには濟みませんが。

啓一　如何にお前が兄思ひでも、なくなつた片腕は、元々通りにはならないからな、それより、今、此の場合で云ふのも可笑しいが、浩二の身體の方を賴む、それにお父さんをな。

おさよ　ハイ。

（浩二が屹と啓一の顏を見る。）

留吉　どうだらう、私がもう一遍店へ行つて支配人に賴んでみたら、今聞いたゞけでは、別に彼處の風儀を紊したと云はれるやうな事實もないが。

おさよ　それはお父さん、後生ですから止めて下さい、私を馘にするか、外のウエトレッス全部を馘にするかつて、支配人に持出した人があるんですから。

留吉　そんなに憎まれてゐるのか。

おさよ　女の連中にばかりぢやありません、男の人達にも憎まれてゐるんですもの。

留吉　どうして。

おさよ　云ふことを聞かないからです。

留吉　さうか、苦勞をさせたなあ。

（間、微にラヂオが聞えて來る。）

おさよ　（不圖心附く）お父さん、出張所へ行かなくつてもいゝんですか。

留吉　（之も心附く）いや、出掛けるよ、今、出掛けると

ころだつた。
おさよ　ぢや、背開道路まで一緒に行きませう。
留吉　お前、何處へ行くんだ。
おさよ　先、お店にゐたお友達がクリサンテームにゐますから、彼處へ行つてアキはないか、聞いて來ますわ、彼處なら一流だし、上品で、時間も樂だから、反つていゝかも知れません。
留吉　さうか、本來云やあ暫く家にゐて遊んでゐろと云ふところだが、何分、今の此の場合だからな、これで、俺が病氣にでもなつたら、一家殘らず野倒死だからな。
おさよ　まア、そんな緣起でもない。
留吉　併し、俺にしても、何時職にならないとも限らないからな、お前一人に頼つて濟まないが、おさよ、何分頼む。
（ト、泣いてゐる。）
おさよ　いやですわ、お父さん、そんな心細いことを云つて、それよか、出掛けませう。
留吉　ウム。
（ト、力無く立上る。）
おさよ　ぢや、行つて參ります。
（ト、留吉共に出て行かうとする。）
啓一　おさよ。
おさよ　え、
啓一　…………
おさよ　え、なアに、兄さん。
啓一　いゝや、何でもない、行つといで。
おさよ　ハイ。
（ト、留吉と共に出て行く。）
（汽笛、汽車の走り去る音。）
（ラヂオが暫く聞えてゐる、其の間兄弟二人は沈默してゐる、唯浩二の視線が啓一に鋭く注がれてゐるが、啓一の方は浩二の方には全然無關心で、外のことを考へてゐる。不圖、立上つて外へ出て行かうとする。）
浩二　兄さん、何處へ行くの。
啓一　ウム、一寸、其處まで。
浩二　僕も一緒に行かう。
啓一　何を云つてるんだ、お前までが出掛けたら、家が空つぽになつてしまふぢやないか、直ぐ歸つて來る。
浩二　駄目だよ、兄さんこそ何を云つてるんだ、兄さんは今出かけたら、二度と再び此の家へは歸つて來ないぢゃないか。
啓一　どうしてさ。
浩二　隱したつて駄目だよ、兄さんは死ぬつもりなんぢゃないか、だから、先刻もおさよにあんなことを云つたり、

今も、出掛けにおさよを呼び留めたのは、兄さん、おさよに別れを告げたんぢやないか。

啓一　…………

浩二　兄さん、死ぬなら僕も一緒に死なう、僕も此上おさよに心配をかけたくないんだ。

啓一　…………

浩二　さ、行かう。

啓一　待て、俺は死にやしない。

浩二　え。

啓一　いや、或は死ぬかも知らない、が、今は唯、此の家を出て行くだけだ。

浩二　だから僕も一緒に出て行かうと云ふんだ。

啓一　お前はいけない、お前は殘つてゐなければならない。

浩二　何故さ、どうしてさ。

啓一　おさよの爲めにだ。

浩二　おさよの爲めに。

啓一　さうだ、おさよの張合ひの爲めにだ、おさよはお前の病氣を治さうと云ふ希望を持つてゐる。

浩二　兄さんには持つてゐないと云ふのかい、おさよはそんな片手落の女ぢやない。

啓一　だが、俺の此の腕は繋がらない。

浩二　巫山戯てるのかい、兄さん、洒落を云つてるのかい。

啓一　決して洒落を云つてるんぢやない、實際の事を云つてるんだ、おさよも、俺にも希望を持たたからう、だが、魔法使ひでも出來ない限り、俺の腕は生えつこはないのだ、然もないのは右の腕だ、左ぎつちよなら知らず、右の腕で仕事をすることに慣れて來たものが、其の右腕をなくして何が出來よう、生き甲斐のない人間と云ふのは、俺のやうな人間を云ふんだ。

浩二　そんな事を云やあ僕だつて。

啓一　だが、お前の肺病は治らないとは云ひ切れない、おさよも其處に希望を繋いでゐる、おさよの爲めに、お前は生きてゐてやらなければならない。

浩二　そりや兄さん、自分勝手だ。

啓一　自分勝手と云ふのは少し可笑しいな。

浩二　いゝや少とも可笑かない、兄さんは自己主義が過ぎる。

啓一　どうして俺が自己主義だ。

浩二　自己主義ぢやないか、弟と妹の爲めに身を捨てる、兄として立派な行爲だらう、雖然、後に殘るものゝ歎きを思はないのは自己主義に過ぎやしないかい。

啓一　併し俺は、おさよの事を考へてゐる、おさよの爲めに、お前は殘れと云つてゐるんだ、強ち自己主義はかりではないと思ふ、俺は冷靜な心持ちで云つてるんだ、い

いか、おさよはお前に希望を持つてゐる、俺には持ちたくつても持てないんだ、おさよに希望を持たせることの出來ない俺だつたら、切めておさよの身體を少しでも樂にしてやるのが、兄として、俺の義務ぢやないだらうか。

浩二　兄さんは僻んでるんだ、拗ねてゐるんだ、忌味を云つてるんだ。

啓一　神樣に誓つてもいゝ、決して俺は僻んでやしない、拗ねてもゐない、忌味を云つてるんでもない、俺もお前に藥を服ませたいんだ、治してやりたいんだ、だが、今の俺に、どうしてお前に藥を服ませてやる事が出來る、今の俺に出來ることと云つたら、俺の毎日にかゝる生活費を、お前に振向けることだけだ、つまり俺が此の家を出て行けば、俺にかゝる金を、お前の藥代に當てる事が出來、お前の本復も早くなり、健康體になれば、何か働くことも出來るだらうから、それだけおさよも樂になるといふものだ、俺が毎日を生きて行くと云ふのは實際無駄なことなんだ、之が本當の無駄飯食ひなんだ。

浩二　いやだ、僕はそんな金で僕の病氣を治さうとは思はない、それ位なら反つて毒を服んだ方がましだ。

啓一　おさよの苦勞を考へてやらないのか。

浩二　おさよだつて、兄さんを見捨てゝ、僕だけに藥を服まさうとは云ふまいと思ふ。

啓一　それは云ふまい、云はないだけに、おさよにかける苦勞は大きいぢやないか、お父さんの取つてる月給はあれだけだ、纖弱いおさよ一人に生活の苦しみを味はゝせて行くのは、兄弟として、餘り殘酷ぢやないか。

浩二　だから、兄さんは出て行くと云ふんだらうから、僕も出て行くと云ふんだ。

啓一　おさよがお前に希望を持つてゐることが分らないのか、おさよが毎月の生活の苦しみに耐へてゐるのも、今の生活狀態を、よりよきものにしたいと云ふ、希望と光明を持つてゐるからだ、其の希望と光明を奪つて、唯生活の苦しみだけを殘して行つてしまふのは、之も餘り殘酷ぢやないか。

浩二　そんなら兄さんも出て行くには當らない。

啓一　俺はよりよきものになり得る望みが絶えてゐることが分らないのか。

浩二　分らない、兄さんは、僕を思ひ、おさよを思つて出て行かうと云ふ。

啓一　それだけ分つてゐるんぢやないか。

浩二　だが、後に殘るものゝ悲しみがどんなものだか、兄さんには分らないんだ、分らないのは、僕ぢやなくつて反つて、兄さんなんだ。

啓一　今日のおさよは、昨日までのおさよぢやないんだぜ、

縦しんば、今日直ぐに就職口があつたにもしろ、新参のことだ、之まで通りの收入があるかないかは分らないんだ、就職口がなかつた場合を想像して見ろ、一週間、十日、一月、此の一家を抱へておさよの苦惱はどれ程だと思ふ、俺にはそれが見てゐられないんだ。

浩二　兄さんに見てゐられないものは、僕にも見てゐられない。

啓一　お前はおさよの希望だと云ふのが分らないのか。

浩二　兄さんが分らないんだ。

啓一　分らずや。

浩二　分らずや。

啓一　分らずや。

浩二　分らずや。

（ト、さう云ひ合つてゐる中に、二人とも聲を立てゝ泣いてしまふ。）

啓一　（稍あつて）オイ、もう泣くなよ、醜状ない。

浩二　（涙を納めて）兄さんが泣かすんぢやないか。

啓一　もう此の話は打切らう、若しかすると俺達は、殊に俺は、考へ過ぎてゐるかも知れない。

浩二　さうだよ、兄さんのは、餘り惡く考へ過ぎてゐる。

啓一　意氣地のないことを云ふやうだが、結局今の問題はおさよの今後を見てから決しても遲くはないことだ。

浩二　だが、兄さん、今から云つて置くよ、おさよの方が思はしくなくつて、又、僕に知らさずに兄さんが家出を實行しても、兄さんの家出といふことが分つたら、僕も此の家には居ないからね、兄さんに身を捨てさせて服む藥が、どうして僕に效驗があると云ふんだらう。

啓一　分つた、分つた、だが、浩二、お前はどうしてさうだらう。

浩二　何がさ。

啓一　いえさ、お前はどうしてさう俺のことを思つてくれるんだらう。

浩二　兄さんだつて、僕やおさよのことを思つてくれてるぢやないか。

啓一　もう少し仲が惡くつてもいゝんだがな、家の同胞は全體に仲が好過ぎるよ。

浩二　だから反つて悲劇が起り易いんだ。

啓一　さうだ、仲が好い爲めに、互ひに庇ひ合ふ爲めに、一人の不幸が三人の不幸になるんだ。

浩二　其の代り一人の幸福が三人の幸福になることもある。

啓一　そんな時は滅多にないな。

浩二　結局可哀さうなのはおさよ一人だ。

啓一　全くだ、おさよは惠まれない女だ。俺達は、どんな

ことをしても、先づ第一におさよの幸福を計つてやらなきやならない。
浩二　もうこんな話は止さう、又元へ戻りさうだ、何か外の話をしようよ。
啓一　あ痛。
浩二　どうしたんだい。
啓一　急に下腹が痛み出して來たんだ。
浩二　藥を買つて來てやらうか……駄目だよ、兄さん、そんなことを云つて、僕に藥を買ひにやつといて、其の間に何處かへ行つてしまはうと云ふんだらう、そんな芝居をしたつて駄目だよ。
啓一　馬鹿を云へ、本當に痛むんだ、だが、藥には及ばない、厠へ行つたら治るだらう。
（ト、厠へ立つ。）
浩二　本當かい、本當に痛むのかい、藥を買つて來ようか、だが心配だな、兄さん、下るのかい、何か藥はなかつたかな。
（ト、探し廻る、ト、留吉がアタフタと驅け戻つて來る。）
浩二　あ、お父さん、丁度好いところだつた、僕、一寸藥屋まで行つて來ますから、兄さんが腹痛を起したんです。
（ト、父の樣子には氣を附かず、其の儘急いで出て行く。）
（ト、留吉は注意深く四邊を見廻し、上衣の下から折鞄を取出し、簞笥の抽斗の底深く忍ばせる。）
（ト、此時厠から啓一が出て來て、此の樣子を見る、留吉が一息吐いたのを見て、傍に行く。）
啓一　お歸んなさい、今日は大變早かつたんですね。
留吉　うん、うん。
啓一　何かあつたんですか。
留吉　いや、別に、何にもない。
啓一　どうして、今日は歸りが早かつたんです。
留吉　そんなことはどうでもいゝぢやないか、偶には私だつて早く歸つて來ることがある。
啓一　そりやさうでせうが、今、簞笥へ何か藏つて被在いましたね。
留吉　えゝ。
啓一　顏色も變つてゐます、何かあつたんぢやないんですか。
（留吉は默つてしまふ、浩二が歸つて來る。）
啓一　あ、おい、一寸濟まないが、其の簞笥の一番下の抽斗を開けて見てくれ。
浩二　どうしたんだい。
啓一　開けて見りや分るんだ、早く開けてくれ。

（浩二、箪笥の抽斗を開ける。）

啓一　何か入つてやしないかい。

浩二　いや、別に。

啓一　よく探して御覧、底の方まで。

浩二　こんなものが入つてゐた。

（ト、鞄を取出す。）

啓一　中を調べて御覧。

浩二　あ、お金だ。

啓一　お金。

（緊張した間、蟬の聲が急に喧しくなる。）

啓一　お父さん。

留吉　云ふな、分つてゐる、私が盗んで來たに相違ない。

浩二　えゝ。

（ト、驚いたが本能的に之を隱す。）

留吉　もう、斯うなつたから云ふ、私は、實は、もう職を失つてゐるんだよ、失業者なんだよ。

啓一　何ですつて。

留吉　先月限りお拂ひ箱になつたんだ、又私のやうな老朽が、此の不景氣の世の中に、今まで馘にならずにゐたのが不思議な位さ。

啓一　それぢや今月へ入つて今日まで、一體何をしてゐたんです。

留吉　毎日出頭所へ行くと見せかけて、俺は毎日唯歩いて居た、馘になつたと、お前達に打明ける勇氣がなかつたんだ、殊におさよに對して、どうしても云ひ辛かつた、おさよがこしらへてくれる辨當を、俺は木の下や、人の目に觸れない公園のベンチで、獨りで毎日喰べてゐたんだ、どうで今月の晦日になりや知れることだ、こんな馬鹿な眞似をしてゐないで、早く打明けよう、今日云はう、明日云はうと思つてゐる中に、今日のおさよの問題だ、盗みを働いた俺の心持ちは分るだらう。

啓一　何處で、之を、取つて來たんです。

（ト、云ひ難さうに云ふ。）

留吉　おさよもこんな事になる、直ぐに口が見附かつてくれりやあだが、若し何處にも口がないとしたら、今月の晦日をどうすりやいゝんだ、そりや、今月一月ぐらゐ、家にあるものを質に入れたら間に合はないことはあるまい、と云つて、何時までそんな事がしてゐられる、切めて、家の小遣ぐらゐでも俺が稼がなかつたらと、駄目を承知で、事務所へ頼みに行つたんだ、さうすると、之が目に入つたんだ。

啓一　誰も居なかつたんですか。

留吉　誰も居なかつた、さうして、私が之を持つて出て來るまで、誰にも見附からなかつた、だが、啓一、お前は

（前略）俺を非難しやしまいな、盜むと云ふことはよくないに極つてゐる、だが盜まなければ生きて行かれないものはどうなるんだ、一文の收入もないのだ、收入がなければ食つて行けないのだ、食へなければ、結果は餓死だ、盜まなければ食へないやうな人間は片端から死んでしまへと云ふのか、一方ぢや八百善だ、竹葉だ、彼處のビフテキは堅いの、此處の天麩羅は油が惡いのと、贅澤を云つてゐる人間のゐる世の中だ、これぢや餘り不公平ぢやないか。

浩二　不公平です。

留吉　浩二、お前はさう思ふか。

浩二　さう思ひます、世の中は不公平過ぎます、例へばおさよの場合です、金をくれたのは、くれた客に無駄な金があつたからでせう、だがおさよにはそれは生活の上に無くてはならない金なのです、自動車でおさよを送つて來た客といふのも、食ふに困らない、餘裕があるからそんな事がしてゐられるのでせう、だが、おさよにしては、自動車に乘れば、其日一日の稼ぎを棒に振つてしまふことになるのです、と、云つて歩いて歸つてゐては明日の稼業に差支へる、送つて來たのは客の勝手ですが、送られて來たおさよは生活上止むを得ない場合に置かれてゐるのです、ところがそれ等の客の勝手な行爲が、忽ち私達の生活に影響して來るのです、首を切たのは、先方の勝手だが、其の爲めに、お父さんは、もう、既に、既に罪を犯して被在る。

啓一　浩二。

浩二　我々が路頭に迷ひ、野倒死をするやうなことになつたら、それは、其奴等が殺したことになるんだ、大體今の社會は、貧しいものを無視し過ぎてゐる、粗末に取扱ひ過ぎる。

啓一　オイ。

浩二　兄さんの場合だつてどうだつた、會社は兄さんにどれだけの慰藉をした、右の腕を失くなして、癈人同樣の身となつた兄さんに、どれだけの生活の保證をしたかい、器械を取扱つてゐるものは何時でも命を懸けてゐるんだ、重役なんて奴に、どれだけの眞劍味があるんだ、此の世の中は、危險率の多い、責任の重い職務にある者程、財布は何時も輕いんだ、こんな不公平な世の中なんか、もう一度大地震が來て、片端から潰して行くがいゝんだ。

啓一　さう無暗に興奮するものぢやない。

浩二　ぢや、兄さんは、此の不公平な世の中を認めるのかい。

啓一　今は議論してゐる場合ぢやない、お父さんの仕た事に就て考へなきやならない時だ。

留吉　お前は私を非難するのか。
啓一　之を持つて歸つて被來つた、お父さんの考へが聞きたいんです。
留吉　今も云ふ通りだ、誰も居なかつた、誰にも見附からなかつたんだ、目立たないやうにポツ〳〵使つて行けば、假令おさよの口が見付からなくつても、私も今まで通り辨當を持つて出かけて行つてゐれば、人に怪しまれることはあるまいと思ふ、盜んだのは惡い、だが、私達は生きて行かなければならないんだ。
啓一　そんなにまでして、生きて行かなきやならないものでせうか。
留吉　命數なら仕方もない、だが、こんな不公平な世の中に負けて、野倒死をするのは厭だ、折角生れて來た命を、ムザと私は捨てたくない、又お前達にも捨てさせたくない、お前達に迷惑はかけない、罪は俺一人が引受ける、それが、親としての、私の責任だ。
啓一　誰にも見附からなかつたんですね。
留吉　見附からなかつた。
啓一　誰も居なかつたんですね。
留吉　誰も居なかつた。
啓二　（考へて）宜う御座んす、オイ、其の鞄を此處へ出せ。
浩二　どうするんだい。
啓一　金だけ取つて置いて、鞄は捨てゝしまふんだ。
留吉　おや、お前は、私の仕た事に非難は加へないんだな。
啓一　其處までお父さんが私達の生活を心配してゐて下さるんです、お父さん一人に罪を背負はせようとは思ひません、私も罪人の一人になりませう。
浩二　お父さん、僕もなります。
留吉　さうか、だが、おさよに此事は祕密だぞ、俺の職になつてゐることもな、金は俺が事務所から借りて來たことにして置け。
啓一　ハイ。
留吉　おさよが萬一此の事を知つたら……
啓一　私はおさよだけが可哀さうです。
留吉　（突然泣き出す）
啓一　どうしたんです。
留吉　私も淺猿しい人間になつてしまつたな、勘忍してくれよ、浩二も勘忍してくれ。
浩二　それも、皆な世の中の罪なんだ、貧乏人を粗末にする、金持の我儘の罪なんだ。
（鹽崎刑事が來る。）
鹽崎　御免よ。

（三人は思はずハッとする、浩二は慌てゝ鞄を隱す。）

鹽崎　萩原留吉さんの家は此處だね。

啓一　ハイ。

鹽崎　僕は斯う云ふものだが。

（ト、名刺を出す。）

啓一　（受取つて讀む）××署刑事鹽崎……

鹽崎　君が留吉さんかね。

啓一　いゝえ。

鹽崎　留吉さんは留守かね。

啓一　…………

鹽崎　（留吉に）君かね。

留吉　はい……いゝえ。（ト、思はず云ふ）

鹽崎　はゝゝゝ、祕しても駄目だよ、君が留吉さんであることは、一目見て直ぐ分る、一寸署まで來て貰ひたいんだが。

啓一　申譯がありません、鞄は私が盜みました。

留吉　オイ、啓一。

啓一　父は何も存じません、私が盜んだのに相違ございません。

浩二　何を云ふんだ、兄さん、鞄は斯うして僕が此處に隱して持つて居るんぢやないか、鞄を盜んだのは兄さんぢやありません、僕です。

鹽崎　君達が何を盜んだか、知らないが、僕は萩原留吉さんを同行するやうに、上司から命令されて來たんだから、兎に角留吉さんに來て貰はなくちや困る。

啓一　それが鞄を盜んだ事件に就てゞ御座いませう、それなら、私が盜んだに相違ございません。

鹽崎　僕は、よくは知らないがね、其處の土木局の第三出張所で、主任の鞄が盜まれたと云ふ訴へがあつたんださうだ。

浩二　ですから、其の鞄は、此處に……僕が盜んだんです。

鹽崎　ところが、其の盜難に遭つた時間に前後して、出張所の近所で、留吉さんに會つた人があるんだ、何か急いでゐたと見えて、其の人が頻りに聲をかけたんだが、耳にもかけずに、イヤ一向に氣が附かない樣子で駈けて行つたと云ふ申立てをしたものがあるので、僕が留吉さんを同行する役目を吩咐つて來たといふやうな譯なんだ、だから留吉さん、兎に角署まで一緒に來て貰はう。

啓一　蚤の盜み、出來心などと、それに相違はございませんが、そんな卑怯な申譯は致しません、唯御覽の通りの老人でございます、此儘刑務所へでも入るやうなことになりましたら、一たまりもあるまいと思ひます、私は此の通りの不具、生きてゝ用のない身體でございます、格別のお取計ひで、私を御同行下さい、お情です。

鹽崎　そりや君、困るよ、僕は上司の命令でやつて來たんだから、命令を實行しなけりやならない。

浩二　雖然、お父さんを見たと云ふ人の見違りもありませう、現に、此處に斯うして、盜んだ鞄を持つてゐる男がゐるんぢやありませんか、僕を同行するのが當然ぢやありませんか、第一、兄さん、兄さんのやうなことを云ふから、お父さんが犯人のやうに思はれてしまふぢやないか、兄さんは何も知らないんだ、僕が實はあの出張所から盜んで來たんだ、何の過失もないお父さんを馘にした、彼處の主任が憎らしかつたからね。

鹽崎　兎に角、犯人は誰であらうと、それは僕の知つたことぢやない、僕は、容疑者として、萩原留吉さんを引致するやうに命令されて來たのだから、留吉さんに同行して貰ふより外はない。

浩二　だから眞犯人だと云つて、僕を捕縛して行つたら、貴方の手柄になるぢやありませんか。

鹽崎　僕は盲目ぢやないからね、眞犯人でないものを、眞犯人だと云つて、署長の前へは連れて行けないからね。

浩二　濟みません、では、此の鞄をお返しします、一錢も手を附けてはありません、これをお返ししたら、父も罪にはならないでせう。

鹽崎　罪になるか、ならないかは、それを裁斷する人の心にあることだ、僕は唯、君の、多分お父さんだらう、お父さんを署まで連れて行つて、主任警部に會はせれば、それで濟む人なんだ、謂はゞ呼出狀代りさ、薄ぺらな奴さ。

浩二　併し、法律と云ふものは罪人を作る爲めに出來てゐるものぢやないでせう、犯罪を豫防する爲めに出來てゐるものぢやないんですか、して見れば、この通り、罪に顫へてゐる上に、盜んだ金錢には一錢も手を附けずにお返しする以上、如何に命令とは云へ、無理やりに父を引致するには當らないぢやありませんか。

鹽崎　どうも、君見たいな無茶な人に逢つちや敵はんね。

浩二　何が無茶です、大體父がこんな罪を犯すやうになつたのも、上に厚く、下に薄い現在社會制度の缺陷……

鹽崎　分つた〳〵僕は君の演說を聞きに來たんぢやないんだから、これでね、僕だからいゝやうなもの、君、刑事でも一個の官吏なんだからね。

浩二　官吏侮辱で拘引しようと云ふんですか。

鹽崎　どうも君は興奮し易いね、君達のやうな人が、無理に法律に引かゝつて來るんだ、氣を附けないと不可いよ。

浩二　大きにお世話です。

鹽崎　はゝゝ、困つたね、兎に角、君、留吉さん、僕と一緒に署まで行つてくれ給へ。

啓一　どうしてもお連れになるんですか。

鹽崎　どうも、命令で動く人間であつて見れば致し方がないからね、先刻からの樣子を見ると、君はお父さんを庇ひ、又、弟さんは、お父さんを庇ひ、併せて君を庇つてゐる、人情の上から見て、非常に麗はしいことだと思つてゐる、同時に之には複雜した事情、生活難だとか、失業苦だとか、そんな事が絡みついて生れ出た犯罪だと、僕だけには思はれる、僕も、僕が今、目撃した事實をありのまゝ上司に上申しよう、留吉さんも、犯罪の動機を精しく自白してみたまへ、情狀酌量といふこともあるからな、昔の目明し、岡引きだとか云ふ輩だつたら、又目零しと云ふ手もあつたらうが、今ぢやそんな事は全然許されちやゐないんだからね、そんなことをしてみたまへ、忽ち此方が馘だ、自分が職務の曠廢で馘になるのは致し方がないにしても、妻子だけは路頭に迷はしたくないからね、僕が又、留吉さんの二の舞を演じたら大變だからね、ハヽヽヽ。

（ト、併し淋しく笑ふ、留吉父子三人は共に泣いてゐる。）

留吉　色々お手數をかけて恐れ入りました、どうぞお連れなすつて下さい。

鹽崎　行つてくれるか。

留吉　精しいお話は、署へ行つてから致します、啓一、浩二。

兩人　ハイ。

留吉　心配をかけて濟まなかつた、誰にも見られなかつたと思つたのは、此方が逆上してゐた爲めだつたらう、仍日惡いことは出來ないものだ、俺はもう覺悟をしてゐる、唯、可哀さうなのはおさよだ。

兩人　ハイ。（泣いてゐる）

留吉　今頃は何にも知らずに、口を探してゐるだらう、どうか、あれの身の爲めを計らつてやつてくれ、これだけは賴む。

兩人　ハイ。

留吉　お前達も、私の身を考へる暇に、おさよの行く末の幸福を考へてやつてくれ、又、おさよにも、私のことなどは心配せずに、自分の立身出世を考へろと、いゝな。

兩人　ハイ。

留吉　今日まで苦勞のかけ放しで濟まなかつたと、私が呉々も詫びてゐたと、傳へてくれ。

兩人　ハイ。

留吉　お前達まで日蔭者にしてしまつて、濟まないな。

兩人　お父さん。

留吉　（鹽崎に）お待遠樣でございました。

鹽崎　未だゆつくりでも構はないぜ。
留吉　いえ、もう結構でございます。
鹽崎　では行かうか、其の鞄も預かつて行かう。
（ト、鞄を受取り、留吉と共に去る。）
（汽笛、汽車の走り去る音。）
浩二　どうしよう、兄さん。
啓一　あゝ、疲れた。
（ト、横になる。）
浩二　おさよには、兄さんから云つてくれるだらうね。
啓一　…………
浩二　可哀さうだな、おさよは、どんなに吃驚するだらう。
啓一　…………
浩二　お父さんは刑務所へ行かなければならないだらうか。
啓一　オイ、お前、濟まないが手紙を書いてくれ。
浩二　誰に。
啓一　おさよに。
浩二　おさよに、遺書かい。
啓一　ウム。
浩二　又、死ぬ氣になつたね。
啓一　死にやあしない、お父さんの身體が極るまでは、唯、おさよから別れようと思ふ、俺達が居ないものと極つたら、おさよも、又考へ直して、多少は自分の幸福を求めるやうになるだらうと思ふ。
浩二　俺達つて、僕もかい。
啓一　お前はいやか。
浩二　決して。
啓一　俺も、今までは、お前がおさよの希望だと思つてゐたが、お父さんが斯うなつて見ると、お前は反つておさよに重荷だ。
浩二　さうだとも。
啓一　あれは、若くて美しい、榮ある前途が待ち設けてゐるやうな氣がする。
浩二　だが、一人で大丈夫かしら。
啓一　それは、おさよの聰明に信頼しようぢやないか、薄情なやうだが、お父さんだつて、今見たやうな事になるんだ、俺達が傍に居たつて、間違ふ時は間違ふものだ。
浩二　それはさうかも知れない。
啓一　おさよが、今まで稼いでゐた金は、おさよ一人の生活には有り餘る程の收入だ、おさよだつて若い女だ、戀はあらう、美しく着飾りたい事もあるだらう、俺達の爲めに總てを實生活に捧げて來たんだ、俺達から解決してやるのが、兄としての最後の務めぢやないだらうか。
浩二　さうだ、兄さん、其の通りだ。

啓一　唯、此儘姿を隱したんぢやおさよにも合點が行くまい、お父さんのことを知らせて、俺達の心持を書いて行かうと云ふんだ。

浩二　歸つて來やしないかい、それより、何處か、外から、手紙で知らした方がよくはないかい。

啓一　さうだな、其の方がいゝかも知れない、俺も斯うは云つたものゝ、心が騷いで、何をどう書いていゝか見當が附かないんだ、此處でおさよに左樣ならを云つて、此儘出て行くとしよう。

浩二　併し、大丈夫かしら、開け放しにして、おさよのものを盜まれちや、後でおさよが可哀さうだからな。

啓一　戸を閉めて、お隣へ賴んで行けば大丈夫だらう。

浩二　うむ、大丈夫だらう。

啓一　何處かにおさよの寫眞があつた筈だな。

浩二　ウム、ある。

啓一　二枚出してくれ。

（浩二取出す。）

啓一　一枚はお前が持つてゐてやつてくれ、一枚は俺が持つ。

（ト、寫眞に向つて。）

啓一　おさよ、お前一人を置去りにして行く、俺達を怨んでくれるな、理由は手紙で知らせるが、お前を置去りにすることが、お前を幸福にする捷徑（ちかみち）なのだ、お父さんが斯う云ふことになつたら、俺達がお前の傍にゐて、お前を保護してやるのが兄としての義務なり、責任だらうが、俺達にはそれだけの資格がない人だ、反つて僕達が側にゐる方が、お前を苦しめる種となるのだ、俺はお前が墮落する女でないと信じてゐる、だから安心して、お前一人を殘して行くんだ、幸福でゐておくれ、俺達は、蔭ながらそれを祈つてゐる、左樣なら。

浩二　僕も永久に左樣ならだ。

啓一　俺がこんな氣持ちになつたのは、今に始まつたことぢやない、が、今、これを決行するのは、お父さんの事件で、光明も希望も奪はれた、悲慘なお前が見てゐられないからだ、お父さんもお前の幸福を祈つて被在つた、俺達もお前を幸福にする爲めに、お前から遠ざかるのだ、いゝかい、怨んでくれるな、達者でゐておくれ、別れてゐても、俺は、斯うして始終お前を肌身で溫めてゐるよ。

（微に、又ラヂオの放送。）

啓一　行かう。

浩二　戸締りは俺がするよ。

（ト、戸締りをする。）

啓一　（家に向つて）ぢやあもう一度、左樣なら。

（浩二も默禮、そして其儘二人は出て行く、ラヂオは

尙續く。）

（間。）

（おさよいそ〳〵して歸つて來る。）

おさよ　（隣の家の人と話してゐる心）　あら、さうですか。どうも有難う存じました、何處へ行つたのかしら。

（ト、云ひながら戶を開けて內に入る。）

おさよ　いやあねえ、折角好い話を持つて歸つて來たのに、家の中を眞暗にしといたりして。

（ト、云ひながら、全部の戶を開け放つ。）

おさよ　萬歲だつたわ、こんな好い口つてものは滅多にあるもんぢやないわ、これなら、お父さんが何時免職になつたつて大丈夫だし、小さい兄さんにも養生さして上げられるし、大きい兄さんにも、少し經つたら義手を買つて上げる位の餘裕が出來るかも知れない、朝顏の綺麗なこと。

（ト、云ひながら、小聲に歌を唄つてゐる中に、それが喜びに溢れて、次第に聲高くなつて來る、途端に消防自動車のサイレン。）

おさよ　あら、火事よ、いやあねえ。

―幕―

行友李風篇

新撰組（五幕）

劇中の主要人物

（新撰組隊士）近藤勇、土方歳三、大石鍬次郎
伊藤甲子太郎、鈴木三樹三郎、服部武雄、佐野
七五三太郎、島田魁、篠原泰之進、齋藤一、茨
木司、中村五郎、富山十郎、原田佐之助、岸島
芳太郎、大櫻義臣、神谷林藏、横倉甚五郎、沖
田總司、植島京之進、藤堂平助、近藤周平
（その他）桝屋喜右衛門實は古高俊太郎、桂小
五郎、宮部鼎藏、松田重助、吉田稔麿、池田屋
の番頭伊八、馬丁文吉、青木惣三郎、古高の娘
おみの、永井玄蕃頭、後藤象二郎
新撰組隊士、勤王志士、池田屋の下女、甘酒
賣、供の仲間、祭りの男、義太夫語り、魚屋、
所化、飛脚、仲居、公用人、女の童、踊りの
舞子

序幕

洛西壬生の南部屋敷

元治元年五月下旬の夜
俗に地藏寺の奥座敷、高二重廻り緣附き、正面が襖、二重の前側は庭先になり、稍上手寄に一株の蘇鐵が植ゑられ、下手に石燈籠、垣根には紫陽花が咲いて居る。緣側の庇に唐銅の釣燈籠、座敷には眞鍮の大燭臺を點す。
新撰組屯所の一室、夏の夜の四ツに近き頃。
組の浪士茨木司、中村五郎、服部武雄、富山十郎の四人、燭臺を眞中に、銘々一刀を拔き放ち、互ひに白刃を見較べて居り、佐野七五三太郎は、釣燈籠の許に突立ち手紙を讀んで居り、更に島田魁は緣側にて木劍を側つて居る。勤行の聲、木魚が聞えて、幕開く。

茨木　見受けた所、流石に各々鈍刀は持て居ないやうだな。

中村　勿論、新撰組の隊士としての表道具、時に天誅の刃となり、時に降魔の劍ともなる。

富山　どうだ、拙者の差料は、細川正義の二ツ胴。

服部　俺の一刀は祖父傳來の助宗、身分に過ぎて聊か腰が

痛いぞ。

茨木　如何さま、斬味も左こそと思はれるた、拙者の一口は無銘の新刀だが、折紙の代りには健か生血を吸つて居る。

富山　然ういへば中村のも新刀らしいな。

中村　ウム、これか、物は試し鑑定を願ひたい。

佐野　（手紙を讀み終り懐中して傍に寄り）ホー、大分上作らしいの。

服部　されば、地肌の錆ひといひ、氣品の工合といひ、誰であらう。

茨木　サア？

（一同徐と刀を視る。）

中村　解るまい、いはゆる十五枚甲伏の鍛法、乃ち水戸の大村治郎左衛門加卜だ。

服部　加卜！

富山　フーム。（感心）

服部　ダガお互ひに此の業物が、將來どんな働きをするであらうか。

中村　活劍、敵を屠り、死劍、己れの命を斷つ、それも銘の心次第腕次第。

服部　佐野、貴公先刻から大層長い手紙を讀んで居たが、何か變つた音信でもあつたのか、島原や祇園邊りの紅筆の痕とも違ふやうだが……。

佐野　ナアニ、國許の朋友から寄越した音信だ。

島田　手紙といへば佐野、貴公の所へは近頃又しても、怪しい手紙が何處からともなく、舞込んで來るといふ取沙汰だな。

佐野　（怫として）何？　怪しい手紙だ？　怪しいとは何が怪しい、貴様確かに怪しいといふ證據を握つて云つて居るのか、不禮た事を申すな！

島田　怪しくなければないで可い、俺は貴公達を相手に無駄な喧嘩なぞしたくない。

佐野　したくなければ横合から、要らぬ餘計た口出をするな、不肖なれども佐野七五三太郎は俯仰天地に恥づる所なく、怪しい秘密なぞは有て居ない。

島田　なければそれ迄、論は無益だ、貴様は貴様の思ふ通り、手紙を讀むとも刀の講釋をするとも勝手次第、俺はかうして木劍を削つてさへ居れば可いのだ。

服部　オイ〳〵お互ひに詰らぬ爭論は宜しくない、時に、世間も大分騷々しくなつたやうだし、富屋敷の出入も何だか急に繁くなつたやうだな。

中村　吾新撰組の活躍すべき、時節いよ〳〵到來したのかも知れんぞ。

茨木　無駄な論議をするよりも、役目が大事、今夜の宿直

が肝要だ。
富山　それだ、皆な仲よく賑やかに、又お極りの眠氣醒しに、武勇談でも初めるか。
佐野　武勇談といへば妖怪退治の自慢較べか。
中村　貴公達の退治る妖怪なら、どうせ白粉臭い魔性であらう。
一同　アハヽヽヽヽ。
（奥にて拍子木の音。）
佐野　ア、どうやら夜食の用意が整つたらしい。
富山　一同揃つて喰べて來よう、オイ島田、貴公も一緒に。
島田　俺は欲くないからモット後にする。
中村　欲くない？
島田　各々勝手に喰べて來い。
佐野　オヽ勝手にする、サア出掛けよう。
（島田を殘して一同奥へ入る。）
島田　（後を見送り）何奴も此奴も獅子身中の蟲、今に見て居れ。
（獨り木劍を打振る。上手より覆面黒裝束の浪士大石鍬次郎が出て來り。）
大石　宿直は誰だ？
島田　拙者！
大石　貴公一人ではあるまい。
島田　他の奴等は夜食を使ひに參つた、が、何か用か？
大石　獲物だ、隊長へ直々に取次いでくれ給へ、火急の一大事。
島田　それは近頃耳寄りな話らしい、ヨシ、直ぐに隊長へ申し入れよう。
大石　早い事にして、何分頼む。
島田　心得た！
（島田は奥へ、大石は上手へ入る。蟲の音、上手より娘おみの、手拭にて面を包み、忍び足に出て來り、四邊を伺ひ、人の氣配に愕き、蘇鐵の小蔭へ身を隱す。上手より大石が先に立ち。）
大石　宜いからズッと此方へ運んでくれ給へ、隊長直々に取調べて貰ふ積りだから。
（後に續いて覆面黒裝束の浪士原田佐之助、岸島芳太郎、大槻義臣、神谷林藏の四人、大長持を舁いて出で來り眞中に据ゑる。之と同時に正面の襖を開いて浪士土方歳三、伊藤甲子太郎、藤堂平助、鈴木三樹三郎、篠原泰之進、横倉甚五郎、以前の島田、富山等が出て來り。）
土方　御苦勞であつた。
伊藤　思ひの外早かつたのう。
大石　隊長は？

土方　ウム、直ぐに見える筈だが、一應拙者が調べて置かう、曳き出し給へ。
原田　ハツ。
（原田、岸島等長持の蓋を開け、中より縄付きの桝屋喜右衛門を曳出し正面に据ゑる。）
伊藤　四條小橋の町人、古道具商ひ、桝屋喜右衛門と申すは其方か？
喜右衛門　ハイ、仰せの通り桝屋喜右衛門は、私奴にござります。
伊藤　ウム、取調べの件と申すは餘の儀でもない、近頃其方の宅へ勤王倒幕を口にする、諸國の浪人共が出入いたし、何事か非望の企てに及ぶ由、旣に訴人をいたす者があつて罪狀逐一明白だ、包み隱すも無駄なこと、速かにその有の儘を白狀しろ。
喜右衛門　これはマタ何事の仰せかと存じますれば、思ひも寄りませぬお言葉、譬へどのやうなお尋ねに與りませうとも、私身に取りまして毫頭覺えのござりませぬ事、白狀の致しやうとてもござりませぬ。
藤堂　何、身に覺えがないと申すのか？
伊藤　駄目ぢや、幾ら包み隱さうとて已に動かぬ證據まで上つて居る、別けて長州藩の浪士共と氣脈を通じ、容易ならざる相談に與つて居る筈ぢや。
喜右衛門　よしや如何樣の證據がござりませうとも、恐れながらそれは何かのお間違ひ、其樣に仰せ下さりましては、唯々迷惑をいたすの外はござりませぬ。
伊藤　ウム？
喜右衛門　御覽の通り私奴は些やかな道具の商ひに、細々その日を送りまする町人、勤王とやら倒幕とやら、左樣な事には一向に用のない身分の者、平に御賢察の程を願はしう存じまする。
土方　ヤア手緩い〳〵、左樣な事で易々と口を割る程生優しい面魂ではない、拙者が代つて調べて見よう、島田、その木劍を貸してくれい。
（木劍を把て庭に降り。）
土方　ヤイ町人、拙者は土方歳三だ、少々調べは手嚴しいが、美事强情に堪へて見るか。
喜右衛門　（その顏を視上げ）土方樣とはお前樣でござりますか、假令土方樣のお調べでも、誰方樣のお調べでも、此の身に取りましては寸分微塵も覺えのない事、申し上げる筋に二ツはござりませぬ。
土方　ダ默れ、桝屋喜右衛門とは公儀を瞞る假の名前、眞は其方武士であらう？
喜右衛門　エッ？
土方　會津桑名の二藩へ對し、怨みを構へる浪人共の手先

となり、竊に武器弾薬の類を貯へて居よう？
喜右衛門　毫頭！（首を振る）
土方　汝の宅から引揚げた證據の品々に對しても、飽まで知らぬと申し張るか？
喜右衛門　山程證據を積れませうとも、更に覺えはござりませぬ。
土方　知らぬとなら知らぬでよい、貴様は口を割らずとも此の責道具が口を利く。
喜右衛門　火水の御折檻を受ければとて、嘘を眞と白狀が致されませうぞ。
土方　申したな汝、その廣言を忘れるな！
（木劍にて一撃。）
土方　これでもか？
喜右衛門　知らぬ存ぜぬ！
土方　（また一撃）是れでもか？
喜右衛門　エ、ツく、どい！
土方　よし、吐くなよ、口を割るなよ白狀するなよ、汝、是でもか。（續け撃）
喜右衛門　ウ、ウーム！
土方　汝、々、々！
（喜右衛門を亂打する。小蔭にて　おみのが ワッと泣く。）

土方　あの聲？
藤堂　油斷はならぬぞ！
（岸島早くも小蔭を透し。）
岸島　茲に女が忍んで居る。
土方　ます〳〵怪しい、曳出し給へ。
大石　それ！
（大石以下、おみのを引立て出て來る。おみのは喜右衛門の姿に目を注け。）
おみの　父さん！
（ト縋りついて泣く。）
土方　フーム、其方は是なる喜右衛門の娘だな？
おみの　ハ、ハイ。
藤堂　見れば繊弱い小娘の身で、大それた不埒な奴。
伊藤　何用があつて當屋敷の奧深くまで忍び込んだ？
おみの　ハイ、そ、それは。
土方　エ、ツ何が爲に邸内へ忍び入つたか？
おみの　その儀は？
喜右衛門　これ、みの、必ず何も云うては成らぬぞ、假令此身が、此親が、責め苛まれて骨は碎け肉は裂け、此まま空しく相果てるとも、知らぬ事は飽まで知らぬと云張るまでぢや、血迷うて覺えもないことを、必らず云ふなよ。

おみの　ハイ。
喜右衛門　大義の爲には親をも滅する、親が何か、この喜右衛門の命が何か、御國のために死ねば死花。
おみの　………。
喜右衛門　宜いか、孝行の道を踏違へて親の命を助けたいなぞと、夢にも思ふな、それこそ却つて恨みだぞ、俺は和女を恨みに思ふ、判つたか？
おみの　ハイ。（泣く）
土方　又しても汝、諷刺がましい憎い囈語、その息の根を！
（土方、喜右衛門を打つ。）
おみの　あれ！（父を庇うて遮らんとする）
土方　妨げするな、退け／＼！
（烈しく亂打す。喜右衛門遂に氣絶する。）
おみの　待て下され、待て下され。
土方　待てとは汝、マダ此上に邪魔立いたすのか？
おみの　イ、エ、お願ひ、お願ひでござります、僅た一人の父さんを何うこの儘で見殺しに成りませう、大望の逐一何も彼も妾の口から申し上げます、殘らず白狀いたしまする。
土方　何、和女が白狀いたすとな。
おみの　その代りには父さんの、命をどうぞお助けなされて。
土方　ウム、新撰組の屯所とて鬼や悪魔の棲家ではない、武士としての慈悲も辨へ、物の情も心得て居る、其方に孝行の眞があれば拙者にも男の義理がある、如何にも望みの通り喜右衛門の、命は確と助け遣はさう。
おみの　それでは妾の願ひ通り、父さんの命をお助け下さりますか。あゝ有難う存じまする。
土方　シテ大望と申すは如何なる仔細？
おみの　（喜右衛門に向ひ）父様、どうぞ赦して下されませ、親子とはいへ生さぬ仲の、恩も義理も人一倍……みのは何うでも不孝者にならねば成りませぬ、（土方に）委細の事はこの手紙に委しう書いてござります。
（懐中より手紙を出して渡す。）
土方　ナニ手紙とな（開いて）ウム宛名は古高俊太郎殿へ……桂小五郎、宮部鼎藏、松田重助。
（讀みかけ、偶と氣注いて巻納め懐中する。）
伊藤　土方氏、どんな手紙だ？
土方　マア宜いさ、君達は この喜右衛門を 奥へ連れて往き、手厚く介抱をして遣るがよい。
原田　承知いたした。
土方　娘、其方も共々父の介抱をするがよからう。
おみの　有難う存じます。

（原田、岸島等氣絶せる喜右衛門を手舁ぎにし、おみの附添ひ、上手へ入る。）

土方　この書狀に據ると我々の推量にも勝る由々しき一大事ぢや。

鈴木　土方、我々にもその手紙の委細を打明けて聞かせてくれ。

伊藤　勿體らしく貴公一人（ひとり）が、呑込んで居るにも及ぶまい。

土方　拙者の意見としては一應隊長に見せた上、改めて隊長から示されろのが順序だと思ふ。

伊藤　それは聊か馬鹿念と申すもの。

土方　併し、國家の大問題。

鈴木　ダカラ少しも早く聞きたいのだ、幾ら國家の大事にもせよ、同志たる我々に打明けられぬといふ法はあるまい。

土方　ダガ祕密は固く祕密として守らればならぬ。

篠原　同じ新撰組といふ名の許にも、蔭日向があつては面白くない。

鈴木　油に水が混つては何時（いつ）まで同じ器（うつは）の中にも住まれまい。

伊藤　退席しよう。

（伊藤、鈴木、篠原揃つて緣側を下手へ入る。）

土方　去る者は勝手に去れ、横倉、この手紙を隊長に見せてくれ。

横倉　承知いたした。

（横倉手紙を受取り正面奥へ入る。）

藤堂　土方氏、伊藤や鈴木の一派は近頃、大分氣持を惡くしてゐる鹽梅だぞ。

大石　格別の事もあるまいが、マヽ用心に若（し）くはなし。

島田　拙者もその邊を心得てゐるから、聊かも油斷をしないのだ。

土方　ナアニ、奴等（やつら）一派の肚の底は俺（おれ）が疾うから見拔いてゐる。

藤堂　併しお互ひに、それ〴〵立脚點（たちば）の違ふ以上、自然心持も違つて來るからなア。

島田　イヽヤ立脚點（たちば）がどうでも同じ新撰組の傘下（さんか）に屬（ぞく）してゐながら、野心を挾むは宜しくないよ。

土方　チツ、順逆の時には容赦なく、片ッ端から斬てしまふ。

藤堂　拙者は只、組のために惜むのだ。

藤堂　成程、玉も瓦も一緒に敲き碎いてしまふ、土方氏の奧の手らしいな。

土方　徒らに心配をする程の事柄ではない、それよりも差當つて、富山、今の娘をモウ一度これへ曳出してくれ。

富山　畏つた。

（富山上手へ入る。同時に正面奥より隊長近藤勇、以前の手紙を持ち、浪士青木惣三郎を從へ出て來る。）

大石　隊長。

土方　待かねて居た。

近藤　何より屈竟な證據が手に入つて滿足ぢや。

島田　餘程、大仕掛の企圖らしいな?

近藤　天柱は碎け地軸は裂けようともぢや、我新撰組のあらん限り、痩浪人の飯事遊び何の恐るゝに足らう事か、正に龍車に向ふ蟷螂の斧に同じ、鴨の川風に一陣血煙の渦を卷けば立處に骨灰微塵ぢや、時に、藤堂大石島田の三君は三方に別れて今宵の裡に、會津桑名の藩邸と所司代の手へ、一應通達して貰ひたい。

島田　心得たがその通達の趣きと申すは。

近藤　今夜首尾よく勤王黨陰謀の確證が手に入りましたから御安心下さいと、差當りそれだけで宜からう。

藤堂　承知いたした、直ぐに出向きませう。

大石　デハ御免。

（三人揃つて下手へ入る。）

青木　私も退席いたしませう。

土方　如何さま大切な密議だからな。

青木　御免を蒙ります。（立掛る）

近藤　イヤそれには及ぶまい、廊下で見張を致して居れ。

土方　成程、ヤ青木は隊長が秘藏の子飼だからな。

（青木緣側に出る。）

土方　隊長、書狀は殘らず御覽になつたか?

近藤　讀んだ、我曾津中將を附け狙ふはマダしも、青蓮院中川の宮家へ火を放たうなぞとは畏れ多い極みぢや、これで陰謀の發頭人は概略判つたが、さて爰で大袈裟な浪人狩を行ふとして、その躁が容易でない、遠くは慶長關ケ原の削封以來、鬱勃たる覇氣と野心とに培れ、三百年間雌伏して來た防長二箇國の猪武者が、果して朝敵の名に甘んじ、徐として居るだらうか、時勢はダン／＼物凄くなる。

土方　仰せの通り何の途にも、之が驚天動地の火蓋かも知れんて。

近藤　將軍家は下向せられ、越前家は御歸國、薩州侯も居られない、その虚に乘じて事を舉げようとする、右も左も皆敵ぢや、油斷はならぬ、今夜の枡屋喜右衞門でさへ肚からの町人ではない、嘗ては山科毘沙門堂の門跡に仕へた、眞は江州浪人古高俊太郎と相解つた。

土方　ナニ江州浪人、流石に思ひも寄らなかつたか。

近藤　德川家譜代の家柄、近くば開國佐幕の犠牲となられ

た井伊大老の領地から、恁樣な輩が飛出して來る。
土方　これも時勢の罪といへやう。
近藤　世の罪か人の罪か、それとも遷り行く時の勢ひか、
宗廟の社稷も案じられるぞ。
土方　ハテ、案じたとて何うならう、我々は無二無三に、
小積な時勢と戰ふのだ。
近藤　オヽ！　右も左も前も後も、只滅茶々々に斬倒し、
そして潔く幕府のために斃れるか。
土方　士は己を識る者の爲に死す、それが男子の本懐ぢや。
近藤　本懐といへばその、枡屋喜右衞門はどうした？
土方　別間へ下げて休ませてあるが、勿論生しては置けぬ
奴、夜の明けぬ裡に殺てしまうか？
近藤　それには及ばぬ。
土方　先刻娘の前では命を助けろと請合つたが、それは方
便、拙者は既に浪人狩の血祭りと極めて居るのだ。
近藤　それにしてもマダ早い、急ぐ程の代物でもなから
う。
青木　（上手を見込み）先生、誰か參りました。
近藤　ウム！
（上手より富山、おみのを連れて出で來る。）
富山　喜右衞門の娘を連れて參つた。
近藤　近う寄れ。
おみの　ハイ。
土方　遠慮なく進んだがよい。
おみの　恐れ入ります。
土方　どうだ、父は正氣に復つたか。
おみの　皆樣の御介抱でヤッと只今氣が注きました。
近藤　それは重疊、シテ其方の名は？
おみの　みのと申しまする。
近藤　健氣にも父に代つて、勤王黨陰謀の證據を差出した
る段神妙ぢや、それに就て一應問ひ糺したいは、この手
紙の文言の中に「市中賑はひの當夜」とあるが、その町
の賑ふ夜とは何日の事ぢや。
おみの　ハイ、あの、それは？
土方　包まず柔順に申し立てろ！
おみの　……來月六日、祇園祭りの宵宮の晩にとか、父の
申したは聞き覺えて居りまする。
近藤　シテ、同志の者が會合の場所は？
おみの　三條小橋の池田屋といふ宿屋の二階で勢揃ひし
て。
土方　オヽ、三條の池田屋か。（愕く）
近藤　頭立つた同志の人々は誰と誰だ？
おみの　女の身ゆゑ左樣な事までは、知つてゐよう筈もご
ざりませぬ。

土方　デハ其方の宅へ近頃しげ〳〵出入を致す重立つた人達は？
おみの　それなれば、長州の桂様。
近藤　桂小五郎！
おみの　久坂様。
土方　久坂義助！
おみの　吉田様。
土方　ナニ吉田？
近藤　吉田稔麿の事であらう。
おみの　土佐の辰巳様。
近藤　それは變名、坂本龍馬かも知れんな？
おみの　肥後の宮部様、松田様。
土方　これは解つた。
おみの　その外は一向に知らぬ方ばかり。
近藤　ウム、相解つた、よく申した、何か褒美を取らせたいが、望みの品を云つて見ろ。
おみの　有難いお言葉、望みといへばタツタ一ツ、父様の命を助けて、罪をお赦し下さりませ。
土方　喜右衛門の命をか？
近藤　諾々、確かに引受けた。
土方　ダガ大切な血祭りを？
近藤　イヤ親に代つて娘の口から、殘らず白狀いたして見れば、喜右衛門自身に返り忠をしたも同じ事だ、差詰立派な生證據、せい〴〵いたはつて取らすが宜い。
（奥より横倉驅け出でゝ）
横倉　隊長副隊長、喜右衛門が自害致した。
富山　何、自害？
横倉　見張の者の油斷を窺ひ、舌を咬切つて相果てた。
おみの　エッ、父さんが舌を嚙切て、あの父さんが？（泣入る）
土方　到頭自滅しをつたな。
近藤　喜右衛門も矢張武士になつて死んだのだ、流石は古高俊太郎の最期ぢや、娘歎くな、其方の父を殺したものは誰でもない、勤王の夢、倒幕の幻……治まる御代を攪き亂さうとする、野謀の渦に溺れたのぢや。
おみの　イ、エ違ひまする、何の、何の、父さんを殺したのは誰でもない此のおみの、妾に違ひござりませぬ、どうぞして危いお命をお助け申さう淺智恵から、前後の考へもなく、吩咐けられた言葉に背いて裏切つた罪、生きての不孝死んでの不孝、ア、愚かな女の無分別から、この口一ツに大恩ある親の命を縮めました、ア、何うしたら、どうしたら、許して下され父さん、父さん。（泣倒れる）
近藤　泣くな、嘆けばとて屍が息を吹き返さう筈もなし、其方達父娘の忠義に依て幕府の壽命がよし三日でも保ち

堪へられたとすれば、それこそ本懷至極ではないか、諦めて父の死顏に一目名殘を惜むがよい。

おみの　（發作的に）　オ、然うぢや、矢ッ張この儘父とさんを一人では死なされぬ、不孝の罪の詫言に、妾も後から追附いて。

（おみの土方の差添刀に手をかけ自殺の覺悟、土方素早く娘を取て押へ。）

土方　エ、ッ何をするのだ、寧そ此奴も冥途の生贄。

近藤　マア待て、籠鳥の雛を仕止めたとて、獵人の手柄とは云はれまい、止し給へ。

土方　無益の殺生か、それも道理ぢや！　（おみの　を突放す）

近藤　青木、この娘を勦つてやれ。

青木　ハッ！

（下手緣側の杉戸の奥にて。）

島田の聲　イ、ヤ貴樣立聞を致して居つた。

中村の聲　立聞きとは怪しからん、用があるから參つたのだ。

島田の聲　不埒者待て！

中村の聲　何を汝が！

島田の聲　待んか汝！

（叫びつゝ中村、島田が爭ひながら出で來る。）

富山　何だ／＼この場合に、下らない眞似は止せ、隊長も之にお在だ。

島田　オ、ッ隊長、油斷は成りませんぞ此奴先刻から杉戸の小蔭で、この場の始終を立ち聞きいたし居りましたぞ。

土方　立聞きだ？

中村　イ、ヤそれは島田の僞言でござる、汝何の恨があつて左樣な暴言を。

島田　默れ、暴言とは貴樣の事だ。

中村　何を？

近藤　（大喝）　退け！

中村　隊長拙者は。（と進み出る）

近藤　奸賊！　（拔討に斬下げる）

中村　ウーム。（と仆れる）

土方　美事！

近藤　此奴が眞の血祭りぢや、アツハヽヽヽヽヽ。

（土方懷紙に血刀を拭ふ、近藤徐と中村の屍を視る、おみの我を忘れて青木に縋りつく。寥、蛙の聲。）

―― 幕 ――

二幕目

三條小橋池田屋戸外

同年六月六日の夜。

三條大橋と小橋の中間、正面に鴨河を距てゝ東山一帶の翠微を望む書割、上手に大橋の一部を見せ、橋の袂に柳の樹、開帳札なぞ。

中央より下手、稍斜めに瓦屋根二階家の一部を見せる。二階は緣附、障子が閉り、階下は千本の出格子「諸國御定宿」横手に「池田屋」と記した懸行燈。夏の夜もマダ宵の裡。

(柳の根方に赤行燈の甘酒屋が荷を卸し、流しの義太夫語り三味線を抱え、祭禮の若い者甲、乙が立掛り、更に出格子の下に乞食體の男一人菰を冠つて寢て居る。祇園祭禮の鉾の囃子が途切々々に聞えて、幕開く。)

若者甲　オイお爺さん甘酒のお替りだよ、生薑をドッサリ張込んでおくれ。

甘酒屋　ハイ／＼畏りました。

義太夫語り　ダガ斯うどうも世並が悪くなつては、祇園祭りも一向に賑ひませんな。

若者乙　それやアその筈さ、毎日毎晩血腥い風が吹き續けて居るんだ、宵宮も渡御もあつた物ぢやアねえ。

同甲　さう云やア鉾の囃子も何となく濕ッぽいやな、此奴ばかりは神樣の御威徳でも儘にならねえかなア。

義太夫語り　茲歳はかりは磧の納涼でさへ、人の出るのは宵の裡ばかり、四ッを過ぎると宛で灯の消えたも同じですよ。

甘酒屋　三條四條の通りでさへ、日が暮れると急に寂しくなり。

若者乙　この三條の橋の下で、河鹿の啼く音が聞えるといふんだから。

同甲　違ひねえ、道理と磧の輕業や水機關も疾くに打出してしまつたが、イヤにヒッソリして來たやうだ。

甘酒屋　これぢやア太夫さんなぞも稼業にやア成りますまい。

義太夫語り　全く商賣は足上りさ。

甘酒屋　イヤ御同樣、足の上るはマダしもの事、場所柄だけにこの邊は、悪くすると首が飛びますからネエ。

若者乙　相も變らず、意趣斬、闇討、決鬪か。

同甲　薄ッ氣味の悪い流行物か。

甘酒屋　命懸けぢやア堪りませんよ。

若者乙　ヤその流行物に出遇さねえ内、此方も橋を渡るとしよう。

若者甲　お爺さん、勘定だよ。(錢を拂ふ)

甘酒屋　ハイ〳〵有難うございます。

（若者二人上手奥の方へ入る。）

義太夫語り　サア私もソロ〳〵出掛けませう。

甘酒屋　今夜は何方へ廻んなさるんだネ。

義太夫語り　三本樹から二條新地を流して見ませうよ。

甘酒屋　氣を注けて、澤とお稼ぎなさい。

義太夫語り　アイ左様なら。

（三味線を彈きながら下手に入り、撥音次第に遠ざかると、池田屋の戸の口にて。）

おなべの聲　へエ〳〵宜しおすえ。

（云ひながら戸を開けて、下女のお鍋が出て來り。）

おなべ　オヽ涼しやの、夜の風は何處ともなし冷りして、晝間の暑いのに較べたら宛で、生れ變つたやうな宜え氣持。

（磧にて花火が揚る。）

おなべ　マア今頃まで花火が揚つて、大概五條の磧え。（甘酒屋の傍へ寄り）爺さん熱いのんお呉れやす。

甘酒屋　へイ〳〵毎度御贔屓になりまして、有難うございます。

おなべ　アラ、怪體な爺さん、そない大きな聲を出したら宅へ聞えるえ。

甘酒屋　御免なさい、へイお待遠さま。

（又花火が揚る。）

おなべ　オ、綺麗、枝垂柳どすえなア。（頻りに甘酒を啜る）

（池田屋の奥より。）

伊八の聲　お鍋どん、〳〵。

（お鍋あわてゝ飲み終る。上手より新撰組の浪士富山十郎辻占賣に化けて出て來り、池田屋の内の様子を伺ふ。）

おなべ　へーイ！

（富山愕き。）

富山　運勢縁談、待人戀の辻占――。

（下手奥、池田屋の背後へ入る。番頭の伊八、内より戸を開けて。）

伊八　この忙しいのに今頃何處へ往たんだらう、眞實に困つた女中だ、（戸外に出て）お鍋どん、そんな所に何をして居るんだ。

おなべ　何にもして居い致しまへんえ、餘り暑をすのんで一寸……風に吹かれて居るのんどすえ。

伊八　コレ〳〵今頃そんな暢氣な事をいつて居ては困りますよ、サア〳〵早く勝手の仕舞事を、エ、直ぐに歸つておくれ。

おなべ　へエ〳〵直きに歸らして戴きますえ。

伊八　彼いへば恁ういふと、何といふ口の減らない女だら
う、お歸り〳〵。
（懸行燈を外し伊八内へ持て入る。）
おなべ　ふツ、口は減らんかてお肚が減るよつてなア爺さ
ん、今夜のん借とくえ、ア、美味かつた。
（向うより新撰組の浪士茨木司、飛脚に化けて急ぎ足
に出て來り。）
茨木　エ、鳥渡伺ひます、三條の池田屋さんといふ旅舍は
御當家ですかい？
おなべ　ヘエ然うどすえ。
茨木　モシヤ今晩、長州の桂さんといふ方がお見えに成つ
ては居りますまいか？
おなべ　エッ長州の桂はん、桂はん、イ、エそないな噺家
見たいなお方、お越やおへんえ。
茨木　屹とお見えには成りませんネ？
おなべ　ヘエ然うどす。
茨木　（一寸考へ）イヤお邪魔を致しました。
（ト下手へ入る。）
おなべ　何や氣味の悪い人、オ、恐！
（内へ駈込み、戸を閉める。假花道より新撰組の浪士
齋藤一、鈴木三樹三郎、沖田總司等の一隊、いづれも
武裝して出て來り、そのまゝ下手へ入る。甘酒屋氣味
悪げに荷を擔いで上手へ入ると直ぐ、上手奧より勤王
の志士吉田稔麿、宮部鼎藏、松田重吉、供の仲間を從
へ出て來り、仲間が池田屋の戸を敲いて。）
仲間　エ、御免なさい、御免なさい。
（内より伊八が。）
伊八の聲　ヘイ〳〵モウ眠みましたが誰方樣で？
仲間　モシ池田屋さん、繩手の魚品からお客樣をお送り申
して參りました。
（出格子の横の小窓を開けて伊八が顏を出す。）
宮部　オイ番頭、拙者だ〳〵！
伊八　オ、ツこれは飛んだ失禮を、只今直ぐに、少々お待
を願ひます、（戸を開いて）皆樣モウ宵の程よりお待兼
でございます。
宮部　（吉田等に）お先へ。
吉田　（松田と共に會釋して）御免。
（兩人内へ入る。）
宮部　（仲間に對ひ）大儀であつた、立歸つたら、殘つて
居らるゝ諸君によろしく申し傳へてくれ。
仲間　畏りました。
宮部　番頭、遲かけに雜作をかけて相濟まんな。
伊八　どう致しまして。
（宮部も續いて内に入る。）

仲間　左樣なら御免なさいまし。

伊八　御苦勞さま。

（伊八內より戶を閉める。二階にて琴と尺八の合奏が初まり、出格子の下に寢て居た男が起き上り、菰を刎ねると乞食姿に身を窶した新撰組の浪士藤堂平助、往きかゝる仲間を呼び止め。）

藤堂　オツ、兄哥々々？

仲間　誰だい汝、何か用か？

藤堂　お前これから、繩手の魚品へ引返すんだッてねえ？

仲間　それが何うしたといふんだ？

藤堂　向ふにやア旦那方ア、マダ幾人位殘つて居るんだい？

仲間　ウム、お前お菰だな、俺アそんな事ア知らねえよ。

（往きかゝる）

藤堂　オイ待ちねえツたら、マダ用があるんだ待つてくれ。

（と引戾す）

仲間　エ、ツ知らねえツたら。

藤堂　靜かにしろ！（頰冠りを除る）

仲間　アツお侍ツ……何をするんだ俺ア何に知らねえんだよ。

藤堂　ヤイ、只今貴樣の送つて來た侍は、何處の何といふ人だ？

仲間　エツ。

藤堂　さ、姓名を云へ？

仲間　俺ア知らねえ。

藤堂　吐さぬな汝？

仲間　ウアツ！

（藤堂焦つて仲間を開帳札の蔭へ引擦り込み、咽喉を締めて絕命させ、菰に包みし大刀を取出し、一散に下手へ駈け込む。刻の鐘。上手奧より新撰組の浪士土方歲三、大石鍬次郎等の一隊、いづれも武裝して出で來り、互ひに二階を視上げ首肯合うて下手奧へ入る。直ぐ向うより更に新撰組近藤勇、伊藤甲子太郎、佐野七五三太郎、近藤周平、島田魁等の一隊いづれも同じく武裝して出で來り。）

島田　推量通り、大分集つてゐるやうだな。

伊藤　ダガ悠長に琴を彈じ、尺八を吹いて居るやうでは、陰謀の密談なぞとは思へないが？

近藤　イヤ、それが人目を晦ます手段ぢや、やがて一網卸したら雜魚一尾も餘さずに、同じ釜中に煮られるとも知らずなう。

（下手奧より富山、下手より橫倉甚五郎が馳せ出て、いづれも近藤の耳に囁き、入れ違ひに取て返す。）

近藤　やれ！（輕く指圖する）

（佐野と周平が戸口に近づき。）

佐野　（戸を敲き）池田屋々々々。

（内より伊八が。）

伊八の聲　ハイ〱、モウ眠みましたが、誰方樣でございます？

佐野　町方見廻りの旅人調べぢや。

伊八の聲　旅人のお調べ……ハイ只今。

周平　早く開けろ、早く〱。

伊八の聲　ハイ〱。

（戸を開けて吃驚。）

伊八　アツ！　（叫ぶ）

周平　エヽツ聲を立てるな！

（伊八尻餅を搗て逃込む。）

近藤　ソレ！

（一同雪崩れて戸口より躍り入る。之と同時に土方等の一隊は家根を傳ひ二階の障子を蹴破つて斬込む。内にて大勢の悲鳴叫喚、人の足音、物の倒れる音、刀の刃音が入亂れ、大石と橫倉出格子を突破り宮部と鬪ひながら出て來り、橫倉眞先に負傷し、三人烈しく斬結んで下手奧へ入る。續いて敵味方、二階或ひは下座敷より、三人五人宛幾組かに別れて亂戰し、追ひつ追はれつ、上手、下手へ入る。戸口より伊藤、佐野の兩人いづれも拔刀にて出て來り。）

佐野　敵も味方もナカ〱働いて居るやうだなア。

伊藤　壯烈といへば壯烈、悲慘といへば悲慘、同じ日本に生れた同士が、敵となり味方となつて斬る斬らるゝの殘虐、之が果して幕府へ對するどれだけの忠義になるのか……拙者は嫌な氣持がする。

佐野　この場合に貴公、そんな事が考へられるか？

伊藤　考へられるとも、惻々として胸に迫る物がある、忠義といふ名を藉りさへすれば、どんな罪惡を犯さうともそれが正しい行爲と云へるのか、幕府に盡すといふ事が直ちに以て國家を愛するの至誠であらうか……近頃の拙者の心持は一日々々と暗くなるばかりだ。

佐野　併し、一圖に左樣な事ばかり考へたり云つたりしてゐる時でもなからうと思ふが。

伊藤　然うだ、我々は今夜働かねばならぬ務があるのだ。

（屋内にて太刀音、悲鳴、兩人上手へ入る。戸口より勤王の志士桂小五郎、頭から印絆纏を引冠りソッと窺ひ出る。小蔭より新撰組の浪士二人、物をも云はず斬て掛るを、桂身を交しざま苦もなく兩方へ斬て落し花道へかゝらんとする。此時上手より佐野、下手より茨木が駈け出て。）

茨木　待て！

（雙方から颯と斬込み顏を視合はせ。）

桂　ヤツ、貴公茨木だな？

茨木　オヽツ桂か！

佐野　何、長州の桂？

桂　叱！

茨木　拙者は貴公一人の安否を氣遣うて居たぞ。

桂　危急の折柄、國家の爲に見遁してくれ。

茨木　ウム、それは勿論だが。（四邊へ氣を配る）

佐野　宜しい、同志の者に見つからぬやう。

桂　忝けない。

茨木　サア、この道が安全だ！

桂　達者でゐてくれ。

茨木　貴公こそ。

桂　さらば！

（桂一散に向うへ入る。佐野と茨木は點頭き合うて上手へ引返す。續いて土方と宮部戰ひながら下手奥より駈け出て、烈しく斬結び土方遂に宮部を斃し。）

土方　（大音に）宮部鼎藏を討取つたぞ！

（下手奥にて。）

富山の聲　土方――、土方――。

土方　オヽツ。

（土方下手奥へ入る。直ぐ上手より大石、橫倉、齋藤が出て來り。）

大石　橫倉、疵はどうだ？

橫倉　ナアニ大丈夫だ、案じるには及ばぬ。

大石　齋藤、手を貸してくれ。

（齋藤、舞臺に倒れて居る浪士の死骸を開帳札の蔭へ運び。）

齋藤　ヤ、爰にも一人誰か倒れてゐる。

島田　拙者だ、島田だ。

大石　（かけ寄り）斬られたのか？

島田　松田重助を斬つた機會に、高股を斬られて歩行に困る。

齋藤　よし、俺が介抱してやる、確乎せい。

（齋藤甲斐々々しく島田を肩にかけ下手へ、大石、橫倉は下手奥へ入る。直ぐに屋內より。）

周平の聲　逃げるな待て――！

（周平、吉田を追うて出て、二三合斬結び、周平稍危き體、屋內より近藤が出て來り。）

近藤　見苦しいぞ周平、一人の敵を持て餘すとは何たる不覺、斬れ〳〵、只一刀に斬つてしまへ！

周平　ハツ！

吉田　（戰ひながら）近藤勇か、望む對手だ童ば（周平をいふ）退け！

近藤　望みとあれば、周平退け！
周平　ハッ！
近藤　イデ理心流の手並を見い！
（斬合ひ忽ち吉田を斬跳し。）
周平　ハッ！
近藤　首を擧げい。
（周平吉田の死骸を引摺り下手奥へ入る。上手、下手より志士四人、一度に近藤へ斬て掛る。近藤忽ちその悉くを美事に斬て捨てる。周平首を抱いて出て來る。）
近藤　周平、虎徹に斬れるのう？
周平　ハッ。
（下手奥より土方が出て來り。）
土方　隊長、大體片附きました、モウこの邊で切上げては如何？
近藤　宜からう、シテ味方の死人、怪我人は？
土方　よくは調べないが、大した事はないと思ふ。
近藤　敵方は？
土方　死人十九名、傷者が八名、その他自刃割腹した者もあるが、まるで大嵐の後のやうだ。
近藤　ウム、明け易い夏の夜ぢや、ソロ／＼壬生へ引揚げよう。
土方　デハ一同を集めませう。

（合圖の呼子笛を吹鳴す。忽ち上手、下手等より以前の浪士一同馳せ集まる。）
近藤　揃つたか？
土方　オヽ、藤堂が居ない？
大石　成程居ない。
近藤　あの腕前なら、殺られる筈はないのだが？
周平　私が見て參りませう（戸口へ近づき）藤堂氏、藤堂氏！
（池田屋の戸口の奥にて。）
藤堂　オーイ！
（藤堂聊か昂奮して出て來り。）
藤堂　隊長以下御一同、誠に殘念、惜い事をした。
土方　惜い事とは？
藤堂　折角張廻した網の目から、空しく呑舟の魚を逸した、陰謀の張本桂小五郎、久坂義助の二人がどうしても居ない、草を分けても彼奴等の所在を突止めたいと、八方へ駈廻つて搜し索めた末、甚だ奇怪な話を耳にした。
齋藤　奇怪な話とは？
藤堂　我々組の同志の内に、桂小五郎と承知の上、わざ／＼逃した奴がある！
大石　オイ／＼、そんな馬鹿氣たことのある筈はない、苟くも籍を新撰組に置いて幕府の祿を食む程の者が、見す

見す敵の大將と知つてソレを逭がして遣るなぞと、理窟の上から考へても出來得べき事でないと思ふ。

藤堂　拙者も一應は然うと疑つて見たが、それが事實に相違ないから奇怪たと申すのだ。

土方　何者か、それは？

藤堂　當家の番頭で伊八といふ臆病者、逃げ後れて表の間の押入の隅に隱れてゐたを引摺り出し、いろ〳〵糺明したところが、長州の桂といふお侍は確かに宵から二階の座敷へ來合せてお在になり、騷ぎが初まると直ぐに臺所へ逃げ込み、隙を測つて表の間から印絆纏を引冠り戸外へ出られたと申して居る。

近藤　それから？

藤堂　然るに戸口で、桂に斬つて掛つた味方があり、彼奴の手並に兩人までも傷けられた。

齋藤　大概甲賀、坪田の兩名であらう？

藤堂　ところがソノ後へマタ駈附けて來た他の同志がある、伊八の申すには何分低聲であつたから委い仔細は聞けなかつたが、正に新撰組の隊士で、桂と何か二三話をして居られたが、斬合も初まらず、挨拶をした上に、怪しからんのは逭路までも敎へてやつた鹽梅だと、當人堅く申して居る。

土方　ウム、言語道斷、敵將に欵を通じて味方の策戰を裏切るとは不埒千萬、沙汰の限り、土方歳三只一刀のもとに成敗いたしくれん、その裏切者は誰だ？　この同志のうちに居るべき筈ぢや、潔く名乘つて出い、出ぬか卑怯者！

島田　エ、ッ此期に臨んでマダ阿女々々、隱し通さうとする性根の淺猿しさ、云はずば拙者、名前を指さうか？

近藤　マア待て、成敗は敢て今夜にも限るまい、が今度の陰謀の發頭人、久坂は兎に角桂の奴を逸したは返す〳〵も殘念ぢや、彼一人を取逃したは千人の敵を逭走せしめたにも勝る味方の不覺ぢや！

土方　その口惜さは御同樣、如何にも殘念！

（宮神樂の太鼓の音。）

近藤　あの太鼓は？

大石　祇園の社の朝神樂でござらう。

近藤　なる程、明くれば今日は祇園會の賑ひ、綾や錦に飾られる京の巷に、血刃の行列でもあるまい、夜の明けぬ裡に退散しよう。

土方　イザ一同！

近藤　引揚げい！

（土方を先登に隊士一同二列、その中央に近藤を挾み、肅々として向うへ入る。漸次に曉の色が漂ひ舞臺少しづつ明くなる。上手奥より新撰組の浪士靑木惣三郎と

枡屋の嫁おみのが駈出し、戸口を窺ひ、溜息して顔を見合はせ。）

青木　おみの殿、ア、遅れました。

おみの　既に遅くなりました、女の足の捗取らず、新撰組の人達は。

青木　早や引揚げた後と見え、この痛ましい有様は？

おみの　屍の山、血汐の海、まるで現世の修羅地獄、勤王同志の方々は皆な殘らずお死なされたと見えます。

青木　亡くなられた親御へ對し、濟まぬ〳〵と泣き通し、嘆きつゞける和女の心が不愍さに、せめて古高殿の遺志を承け繼がせ、池田屋の同志に內通して事を未前に防がんと、親にも勝して大恩ある近藤先生の命に背いて屋敷を脱出し、駈けつけて見れば後の祭り、思ひも望みも鶍の嘴、水の泡に成りました。

おみの　それもこれも原因は妾の不束から、どう取返しのつかぬ騷ぎを視せ、父さんばかりか大勢の人達までお死せ申した、罪の報いも空怖しう。

青木　イヤその罪はこの惣三郎も同じこと、大切な預り者の和女を無斷で連れ出した上は、再び壬生へ歸れもせず……若氣の血迷ひ、生涯の道を踏み違へた。

おみの　濟みませぬ、〳〵、どうぞお許し下さりませ。

青木　サテこれからの身の落着、和女は不孝、拙者は不義、寂しう日蔭を辿るにしても。

おみの　妾は寧そ死にたうござんす。

青木　それは若氣の一圖といふ物、兎にも角にも身を隱して。

おみの　併し、非道な新撰組。

青木　ア、これ！

（下手より生魚商人二人、話しながら出て來る。兩人柳の蔭に隱れる。商人は偶と道端の死骸に目を注け、更に戸口を覗き、キヤツと叫んで打倒れる。青木、おみのを關うて窺ひ出て隻手にて死骸を拜む。神樂の音空ダン〳〵に白み渡る。）

――幕――

三幕目

南部屋敷の大廣間

同年七月上旬の或日

大廣間、正面奧に通じて緣側、泉水築山が見え、眞夏の日がギラ〳〵と青葉へ照りつける。座敷の右に床の間、違ひ棚、左は襖の出入。

（上手に新撰組の土方と大石、下手に伊藤、鈴木、服部植島京之進の四人が對座し、頻りに論爭しつゝあり、

（蟬の聲が聞え、幕開く。）

土方　強て用談と申すのなら、我々、兩名が代つて承はらう。

大石　隊長は唯今公用中であるから。

伊藤　ダカラ我々もその御用の濟むまで、お待ち申すといつて居るではないか。

土方　伊藤、隊長は今朝來、食事をせられる暇もない程に多忙で居られるのだ、火急を要する話なら我々が取次でやらうと先程から、口を酸ぱくして申して居る、それが貴公達に解らぬのか。

伊藤　解つては居るが取次は無駄なこと、徒らにべん〳〵と御用濟を待て居ては果しがつかぬ、是非に及ばず、押掛けて面談するばかりぢや。

土方　默れ、押掛の面談なぞと傍若無人の申し條、仕儀に依ては赦さんぞ？

鈴木　面白い、赦さぬと云つて何うするのだ、左樣な脅かしに慄えるやうな腰拔ではないわ！

大石　よし、貴樣達いよ〳〵强談にひとしき振舞をいたすな、立てるなら此座を立つて見い。

（四人屹と息組む。）

土方　拔けるなら拔いて見ろ、斬れるなら斬つて見ろ！

鈴木　チツ、拙者の切尖が受けられるか？

大石　何？

伊藤　議論に及ばず、それ！

土方　來い！

（雙方柄に手を掛ける。上手奥より近藤周平が出て來り。）

周平　控へさつしやい、控へさつしやい、隊長これへお越でござる！

（一同座に復る。上手奥より近藤、苦り切つた不機嫌の體にて出て來り。）

近藤　又しても騷々しく、このイラ〳〵とした蒸暑さに、大人氣もない爭論は止い！

鈴木　併し隊長！

近藤　喧しい！　大きな聲をせんでも話は解る。（座に着く）

土方　御公用繁多の折柄、我々事を好みは致さぬが、餘りにも無謀な振舞を仕向けられては、組の掟として等閑に附し兼ねまするので。

服部　掟とは何か掟、我々の望みを妨げ鬼面人を脅かすが組の規律か、バ、馬鹿な。

大石　馬鹿とは何だ？

土方　待て、イヤ隊長、火急の要談だと申すに依り、我々が取次がうと申したを耳にもかけず、押掛の面談なぞと

不穏の雜言。

近藤　ウム、伊藤、鈴木、強て拙者に話したいといふ要件を述べるが宜い、但し、近藤は忙しい身體ぢや、成たけ簡單に話して貰ひたい。

伊藤　承知いたした、デハ率直に、要を盡して只一言。

近藤　ウム？

伊藤　我々四人今日限り、當隊を脱退いたさうと存ずる。

土方　新撰組を脱退する？

近藤　何か、氣に入らぬ事でもあるのか？

伊藤　イヤ別段氣に入らぬ廉があつてと申すのではない、少々他に思ひ立つた儀もあるので。

近藤　それを隱さず、云つて見ては何うだ？

伊藤　左樣……忌憚なく申せば新撰組の主義綱領に慊焉たるからだ。

大石　ナニ？

伊藤　天下の形勢は日一日、晦澹たる闇に掩はれんとし、その闇の底へ根深く喰入つて皇國萬年の礎を固めんとするのが勤王志士等の大計で、今にも燦然たる光、輝きとなつて新しい日本を築き上げようとして居る、それには一派の長州藩士が死物狂ひの躍動もあり、遷り變る機運の力はモウ權勢威望の伴はぬ幕府の策動や命令で左右せられる程弱い物ではなくなつた。一にも武力二にも劍戟と、血を流して國を治めようとする新撰組の遣口は、決して時代に順應した措置だとは思へない。

大石　フーム、貴樣もマタ淸川八郎の亞流だな？

伊藤　淸川は淸川、我等は我等、新しい組織の許に働きたい覺悟だ。

土方　オイ伊藤、デハ貴樣我新撰組の執り來つた手段、方法を只殺伐だ只殘忍だと主張するのか、勤王といふ美名を賣物に己が野心を充さんとする輩の惡足掻きを[illegible]居たとは思はないか、業に先月十六日には一橋家の番頭平岡圓四郎が暗殺せられ、超えて十八日には同家の御用人中村惠十郎が斃された、之は一體何者の所業か？

伊藤　それとても貞逆三條の池田屋を襲撃した慘虐さとは比べ物になるまい。

大石　ウム？

伊藤　兎にも角にも我々四人は、今日只今志を決して、潔く袂別いたしたいのだ。

近藤　宜からう！

土方　エッ？

近藤　承知した、意の向くまゝに行動するが可からう。

土方　デハ、許すのだな？

近藤　去る者は追はず、況て志は奪ふべからずぢや。

伊藤　有難い、然らば直ぐに。

鈴木　出立しよう。

近藤　マア待て、せめて首途に心持よく一獻過して往け。

鈴木　別れの盃か？

近藤　周平、酒を持て。

周平　ハッ。

（周平上手奥へ入る。）

近藤　想へば君達とも隨分永い交りであつたのう、將軍家初度の上洛に先んじて、鵜殿鳩翁に引率せられ、江戸を發たは文久の三年……オヽ、落花の雪を征衣に浴びて、一行二百三十餘名。

伊藤　然うだ、中仙道の霞を破つて京へ上り、この寺に落着いた時は朧月夜の菜の花盛り、我も人も、皆な賴母しい氣がしたなア。

鈴木　賴母しいと云へばあの頃は、淸川八郞も居た、芹澤鴨も居た。

土方　佐々木唯三郞も居た、新見錦も居た、山南敬助も居た、その外いろ／＼の人物が集つた。

近藤　それが一人離れ二人去り、今また貴公達とも別れるのだ、愚痴ではないが思ひ出は深いぞ。

伊藤　御同樣、轉た今昔の感に堪へずぢや。

（周平、銚子盃を持ち出づる。）

近藤　（盃を把り）　森見ぢや、酌げ！

周平　ハッ！

近藤　馳走をする程裕かな手許ではないが、酒ばかりは底なしの泉ぢや、周平後をドシ／＼持つて來い。

（周平銚子を運び、盃事になる。）

伊藤　御芳志千萬忝けない、遠慮なしに頂戴して參る。

近藤　各々充分に飲んでくれ。

土方　伊藤、酒ばかりの餞別では、貴公達聊か物足りなからう。

伊藤　何か變つた下物でも振舞はうと申すのか？

大石　オヽッ、劍の舞の一手を美事賞翫して見るか？

鈴木　これは近頃勇ましい趣向だ、未熟ながら拙者、その舞の相手をしよう。

土方　ホー、連舞か？

服部　土方、鈴木の兩氏をシテとして、大石氏と拙者がワキを勤めよう。

近藤　まるで鴻門の會を見るやうぢやの。

伊藤　其方が項羽だか劉邦だか？

近藤　この上に樊噲までは飛出すまい、思ひ出に拙者が朗吟しよう。

服部　それは一段と面白い。

近藤　何を舞ふのだ。

土方　何でもよい。

近藤　デハ、荊軻の詩を吟じよう。
（マア土方と鈴木とが構へる。）
近藤　（立上つて高らかに）風蕭々として易水寒し。
（續いて大石と服部が加はり、四人劍を拔いて舞ひ、土方、大石は隙を窺ひ伊藤を斬らんとする。鈴木、服部は之を遮ぎり入亂れる。）
近藤　羽聲慷慨皆驚り、白虹日を貫て鬼神を哭かしむ、孤身直ちに入る虎狼の秦、一刀秦を刺して事既に大なり。
（最後に土方飛掛り伊藤を刺さんとする刹那、近藤持たる鐵扇を投げて遮り、詩終る。）
近藤　イヤ近頃になく面白く見物した。
伊藤　別けて土方、大石の劍には生きた魂が籠つて居た。
土方　イヤ我ながら思はず入つた。
鈴木　我等も失禮をいたした。
伊藤　手厚い歡待にあづかり過分に頂戴いたした、これで退席いたす。
近藤　モウ往くのか、貴公達もせい〳〵自重するが宜い。
鈴木　御一同へも、宜しくお傳へを願ふ。
伊藤　お別れ申す。
鈴木　之で失禮。
大石　門外まで見送らう。
服部　それは恐縮ぢや。

（四人一禮して下手へ入る。大石これに續く。）
土方　隊長、彼奴等の心腹を御存じか？
近藤　それか、何うした？
土方　伊藤、鈴木の同志一派は薩摩の大久保市藏等と密かに氣脈を通じて居るのだ、拙者は劍舞に托せて斬つて仕舞うと存じたに惜い事をした、叛逆の企をナゼ見免しにせられるのだ。
近藤　ナア二彼な奴等を初めから同志だと思ふのが間違つてゐる、假に新撰組の名を藉ると雖も、その內心は紛れもない倒幕論者と、俺は疾うから見拔いて居た。
土方　御存じなれば尚以て、殺てしまふが萬全でござらう。
近藤　彼奴等五人や十人を、殺せばとて生せばとて、この差詰つた大局が何とならう、俺は誅すべき時に當つて殺戮の刃を揮ふが、その以外には血を見たくない、近頃トンと人を斬るのが嫌になつた。
（下手奥より島田が慌しく出て來り。）
島田　オ、隊長これにお在か、一大事出來！
土方　一大事？
島田　佐久間象山先生が、刺客のために殺られました。
近藤　（愕然として）エッ象山先生が、場所は何處だ？
島田　三條の木屋町で、馬に乘つて居られたを刺客の奴、

下から一刀脾腹へ突刺し、その儘姿を晦ましましたさうで。

近藤　シテ〳〵時刻は？

島田　ツイ今し方、先生は即時御落命、松代の藩邸は申すに及ばず、所司代屋敷はまるで鼎の湧くやうな騒ぎ。

近藤　又しても幕府を支へる大切な柱が一本伐り倒されたか、公武御一和に力を盡さるゝ先生が、白晝而も京の街の路傍に屍を晒されるとは、返す〴〵も殘念だ！

土方　察する所水戸、或ひは長州の手の廻し者に違ひあるまい。

近藤　いよ〳〵憎い痩浪人ども、今に見てゐろ近藤勇のある限り、我新撰組のある限り、血に依て得たる幕府の怨恨は一ツ一ツ、その幾倍かの血に依て贖はんのみぢや！

（下手より大石狀箱を持て出て來り。）

大石　只今會津屋敷の老臣方より火急と申して、使ひの者が持參致した。

土方　會津屋敷から。

大石　隊長直々に御覽下さるやうとの副口上。

（近藤手紙を開いて一氣に讀下し。）

近藤　オ、いよ〳〵火の手が揚つたな、池田屋に流した血の波が、更に大きな海嘯となつて寄せ返した！

大石　何事か、起つたと見えるな？

近藤　起つたどころではない、三條橋畔の小さな騒ぎが導火となつて、京洛の天地を覆へさん程の大きな動亂が起るかも知れんぞ、マア之を見給へ、昨夜長州の藩兵が嵯峨の天龍寺に屯集した。

土方　（手紙を受取て讀み）ウ、ウム……洛中に蔓る浪藉者を鎭撫いたすべくとの名目にて、河原町の藩邸を繰出し、いづれも鉢巻、拔身の槍を引さげ、又は鐵砲を持ち旗差物を飜へし。

近藤　出陣同樣の有樣ぢや、ソノ他伏見、山崎に兵を配り、福原越後、國司信濃、久坂義助、筑後の眞木和泉等各隊を指揮し、參謀格として桂小五郎……チ、皆桂奴の詭策ぢや。

島田　桂が？

近藤　あの長州猿一疋を討洩したばツかりに、この成行を見ようとは、口惜いとも殘念とも、居ても起ても堪へられぬ程口惜いぞ！　此上は彼奴に內通して！　ムザ〳〵網を破らせた裏切者を成敗するがせめての念晴し、三人を是へ引出せい。

島田、大石　ハツ！

（兩人下手へ入る。）

土方　成程之は面白い、少しは組の面目も相立つ。

近藤　面目どころではない、今の拙者はイヤこの勇は、身

も魂も只一筋幕府のために投出して、噛み盡せば盡す程、その行爲の一ツ〳〵が却つて幕府の禍となる、京へ上つて一年有半、この鯉口は何のために切つた、大勢の人の命は何のために取つた、馬鹿だ、馬鹿だ、俺は天下の大馬鹿者だ！（悶える）

土方　ソ、そんな氣の弱い事を云つてくれるな、日頃の氣性のやうにもない、我々は我々の信ずるがまゝ傍目も觸らず驀地に突進する、ソレが正しい武士道ではあるまいか？

近藤　ウム、我身の榮達をも打忘れ、只一筋に張弓の弦、それを武邊の極意とも心得るが？

土方　正法に迷ひなし、意に疚しき影を宿さず、行ひに表裏の隈なければ、譬へ成行はどう變はうとも、それで滿足ではないか？

近藤　其所だ、眞の勝は敵にありて味方にあらずと、劍法の戒めも想ひ合はされる、迷つてはならぬ、疑うてはならぬ、俺の身命は唯幕府の前に捧げてゐればそれで可いのだ。

（下手より大石、島田、横倉、原田、岸島が茨木、佐野、富山の三人を曳き出す。）

大石　サ、ズツと前へ出ろ前へ！

茨木　オ、何處へでも出る！

土方　參つたな三人、それへ坐れ。

佐野　改まつて、何か御用か？

土方　佐野、茨木、貴様達も既に潔く、武士らしい覺悟は極めてゐるだらう、假にも新撰組の恩祿を食みながら、反逆の巨魁と目指す桂小五郎を庇護する剰へ、活路を與へて逃走させるとは言語道斷、富山も竊かに兩名へ荷擔した證據のある以上、此期に臨んで辯疏の道はあるまい。

富山　勿論、過失の有無に關はらず、今更らしい辯疏だの云譯なぞ、致すべき要はない！

茨木　桂の危急を救つたは強ち私人の友情のみではない、天下國家のため、幕府將來の爲を考へたからだ。

近藤　幕府の政體をその根本から覆へさうとする奸賊を、生かして置くがナゼ幕府の爲なのだ？

茨木　左樣、今差當つては禍となるかも知れんが、遠き未來を慮かれば自ら解る時が來よう。

近藤　小悧い事を云ふな、遠き未來の慮りどころか、内憂外患、天下の急は焦眉に迫つて居る、刻下の策動を何と考へるか！

土方　隊長々々、こんな奴等に問答は無益ぢや。

大石　速かに制裁の刃を下すまで！

近藤　ウム、改めて申し渡す、武士の情、三名とも此場に

おいて潔く割腹しろ！

佐野　肚を切れと？

島田　よし、刃物は拙者が用意して取らせる。

（島田上手奥へ入る。）

土方　割腹宜からう、介錯は土方歳三が、友達甲斐に引受けて遣はす。

佐野　折角ながら、左様な申し渡しは平に御免を蒙らう。

土方　介錯が氣に入らぬと申すのか。

茨木　介錯ではない、切腹を御免蒙るのだ。

横倉　命が惜いか？

茨木　左様、一向に死にたくもなし、死なねばならぬ理由もないと考へる。

大石　ダ默れ、それが武士の口にすべき言葉か、少しは恥を知れ恥を。

佐野　武士道に外れた恥は恥でない、大事な身體をムザムザと犬死が出來ろか！

土方　デハ隊長の命令に背き、組の制裁に服せぬと云ふのだな？

茨木　その制裁が既に間違つて居る、一にも命二にも命と、人間を蟲螻同様に心得る、無名の刃に屍は晒したくない。

近藤　貴様、徒らに人を殺すとは、誰に向つて申す言葉だ。

茨木　誰でもない、新撰組といふ惡鬼羅刹の群に申すのだ。

近藤　（大喝）馬鹿々々！　貴様達の目にはこの近藤が惡鬼と見えるかこの勇が羅刹と思はれるか、俺の劍は世の中の綻びを縫ふ針も同様、その綻びは軈て破れてズタズタに引千斷られる時が來ようとも、破れるまでは縫はねばならぬ、千斷れるまでは繕はねばならぬ、今更悔めばとて悔めばとて、助かり得べき命ではない、男らしく自決せい！

（島田三寶に腹切刀三口を載せて持ち出で。）

島田　略式ながら切腹の作法は作法、肚の切りやう位は存じて居よう、サア、用意せい！

大石　モウこの上に愚痴や未練は聞きたくない、早く切れ！

横倉　死ね！

原田　サアどうだ！

土方　否も應もない介錯は拙者だ。（一刀を拔いて立上る）

島田　ナゼ九寸五分を受取らぬ？

茨木　否だ！

島田　何？

茨木　飽まで否だ！（三寶を突飛ばす）

島田　汝！

（島田飛掛り短刀にて茨木の脾腹を突く。佐野別を短刀を拾ひ近藤へ飛掛らんとするを大石が引捕へ、原田は富山を捕へて短刀を突刺す。三人狂ひながら遂に斃れる。）

土方　何奴も此奴も浅ましい死態をしだなア。

近藤　念のため、懐中を検めい？

（三人の懐中を探り。）

佐野　両人とも何も所持いたさぬ。

横倉　ア、何かある。

（横倉、佐野の懐中より一葉の短册を取出し。）

横倉　怪様な物を。（近藤に渡す）

近藤　辞世の一首らしい。

土方　和歌だな？

近藤　二筋の弓引くまじと武士の、たゞ一筋に思ひ切る太刀……伊藤や鈴木その外の奴等に比べて少しは勝だや、屍は懇ろに葬つて遣れ。

一同　ハツ。

（島田以下三人の死骸を奥へ運び、残るは近藤、土方の二人。）

土方　今日一日に七人まで、組の同志を失つたな。

近藤　三人殺れ五人殺れ、やがて新撰組の名の許に、残るは土方、貴公と二人限りになるかも知れんぞ。（考へに沈む）

土方　ナアニ高が烏合の寄合世帯、雑人居なくなつたとて、氣を腐らせる程の事か。マヅ、一盞酌をしよう。

（周平慌しく出て來り。）

周平　藤堂氏が居なく成りましたぞ。

土方　平助が？

周平　座敷の壁に只一筆、感ずる所あり脱退すると書き残して。

近藤　伊藤や鈴木、佐野、茨木を失つたは惜むに足らぬが、股肱と恃み生死を誓うた藤堂にまで見放されようとは、……嚢には青木愁三郎去り、今マタ藤堂平助去る、俺はいよ〳〵モウ駄目なのか、新撰組の威力、近藤勇の英気は衰へたのか？

土方　ナ、何を下らない！

近藤　土方、俺はそれ程頼みにならぬ男であらうか……藤堂、々々！

土方　隊長！

周平　重ねてお酌を。

（周平酌をする、近藤一口飲み。）

近藤　ア、ー不味い酒だ！

（盃を置く、土方銚子を取つて口移しに飲む、蝉の聲。）

——幕——

四幕目

鳥羽街道四ツ塚の竹藪

同年七月十八日の夜
上手寄に藁葺屋根の水車小屋があり、戸が締り、竹格子の窓からボッと灯影が射し、水車は停止されて居る。その下手は一面に鬱蒼たる藪疊、竹の幹に白張燈籠が吊し點されて居る。薄月夜。

遠くに大砲の響き、豆を煎るやうな小銃の音聞えて幕開く。

上手より近所の寺の所化「安樂寺」と記した提灯を提げて出て來り。

所化　どうぢや此の騷ぎは、六齋念佛も地藏盆もあつた物ではない、京の街ばかりかこの在所まで合戰の傍杖、禁裡樣のお膝元とも心得ぬ、本能寺以來といふ物ぢや。

（下手より飛脚、小田原提灯を提げて出て來り、往き違うて。）

飛脚　モシ、少々物を伺ひますが。

所化　ハイ〳〵。

飛脚　手前はズッとこの兩國筋を往來する定飛脚でございますが、一體この騷ぎは何うした事でございますな？

所化　何うも慈ぅもない京の町にはソレあの通り、戰が始まつて居ますのぢや。

飛脚　スルと柳の馬場の六角邊へは、迚も今からは寄り附けますまいな。

所化　この鹽梅ではマヅ覺束ないと思はれるが、然うぢや、兎も角東寺まで往かッしやれば、確かな樣子が知れるであらう。

飛脚　如何さま、せめて六條邊まで往つて見た上の事、イヤ有難うございました。

所化　氣を注けてお在なされや。

（飛脚は上手へ、所化は下手へ入る。小屋の中より戸を開けて横倉が出て來り。）

横倉　オ、いよ〳〵熾んに撃出したな、敵か味方か竹田街道を鏡取稍の方角へ、早馬が飛ぶ提灯の影が宛で星のやうに流れて往くぞ！

（同じく小屋の中より齋藤と原田が出て來り。）

原田　どうだ、隊長はマダか？

横倉　ウム、一向に見えさうもないな。

（下手より近藤の馬丁文吉、額に疵を受けて手拭を卷き、息を切つて駈け出て。）

文吉　大變だ〳〵、先生、タ、タ、大變ですぜ！

横倉　文吉ではないか。

原田　相變らず粗忽しいのう。

文吉　へ、オヤ先生は居なさらねえんですかい？

横倉　隊長は不在だ！

文吉　お不在、へー其奴ア殘念だねえ。

原田　その後の形勢はどうだ。

文吉　何しろどうも大變な騷ぎになツちまひましたぜ、長州の奴等嵯峨の天龍寺で勢揃ひさ、それから繰出して御所の、中立賣御門と蛤御門の兩方から一度にドツと攻掛る、此方は會津、桑名に薩摩の同勢だ、御門を固めて三方挾み擊ち、孰方も全く死物狂ひの働きですよ。

原田　デハ、今が勝敗の分目といふ時だな？

文吉　所が長州の仲間にもナカ／＼どうして偉え奴が居ますぜ、有栖川宮樣が御參內をなさると其後から御所へドン／＼大砲を擊込みやアがるんで、私やね、烏丸の通りへ出てマゴ／＼する內にホラこの通り。

横倉　可哀想に、傷られたのか？

文吉　仕樣がねえや、直ぐ引返し御注進と出かけた譯なんで。

齋藤　ソレは御苦勞、小屋に入つて休息しろ。

原田　その內に隊長も歸られるだらう。

文吉　へイ、ぢやア暫く御免を蒙ります、オ、痛え／＼。

（文吉小屋へ入る。）

齋藤　サテ恁うなると貧乏籤は我々だな、この街道を固めて既に二日になる。

原田　何時までこんな藪の蔭に、案山子も同樣ボンヤリと腕を撫つてゐる事かなア。

（上手より大石が出て來り。）

大石　オイ、土方氏はマダ歸らないか？

横倉　ウム、マダ歸つて來ないが肝腎の近藤隊長は？

大石　ナニ隊長は今、薄田殿と策戰の手筈を極めて居らるるが、蛤御門の形勢いよ／＼亂軍となり、彥根、藤堂の兩藩が横槍を入れたぞ。

原田　痛快々々！

大石　ソコで遲くも夜半までには、追擊戰に移る筈で、敵の奴等多くは山崎へ退却するだらうとの見込みだ、就ては貴公達拙者と共に、西國街道の咽喉たる下大津の口を固めるやうにと隊長よりの命令だ。

齋藤　有難いな、長州勢亂離骨灰の爲體か？　これで幾らか目醒しい働きも出來よう。

大石　出來るとも、謂はば敵の主力を要擊するのだ、我新撰組奮鬪の時機、サ、直ぐに出掛けよう。

横倉　出掛けるにしても此小屋へ、誰か留守番が要るだらう？

大石　誰か、居ないかなア？

原田　幸ひ、馬丁の文吉が居るんだが。
大石　丁度宜い、彼奴なら大丈夫。
齋藤　オーイ、文吉々々？
文吉　ヘーイ！
（小屋の中から出て來る。）
文吉　何か御用ですかい？
大石　貴様、どうしたその傷は？
文吉　ヘツ、之やその、ナ、何、何でもねえんで。
大石　皆な揃つて出掛けるから、隊長の歸つて來られるまで、貴樣この小屋を守つて居ろ、宜いな？
文吉　宜しうございい、後は私が引受けますから、皆さん確り手戰とくんねえ。
大石　デハ近道から。
原田　拙者が案内する。
（四人揃つて下手へ入る。近く小銃の音、文吉悄としてて小屋の中へ駈込む。月雲に隱れる。下手より服部及びその同志三人、覆面して銘々手に白刃を携へ忍び出で、服部一刀に竹の幹の吊綱を切る、燈籠落ちて灯が消える。小屋の戸口へ窺ひ寄り、三人に囁き、一同藪の中に隱れる。ト、刻の鐘。上手より青木惣三郎、桝屋の娘おみの、いづれも西國巡禮の姿、おみのが病氣に惱むを青木が介抱しながら出て來り。）

青木　サ、苦しからうがモウ少しの辛抱、せめて黒門まで參つたら、騷ぎの裡にも今宵一夜の宿を見付けて落着いた上、醫者や藥も何とかして養生の致しやうもあらう、これ、氣を確かに、おみの殿。
おみの　ハイ、それも能う解つては居りますが、この強い差込では、どう辛抱をして見ても、ア痛、イタ、、、、タ。
青木　時も時なり場所柄なり、街道筋は劍呑ゆゑ態と撰んだこの裏道で、ア、困つたなア、何彼につけて不自由ながら、伏見の町へはモウ半里、出來るだけ我慢をしてな。
おみの　然うして茲は、何といふ所でござります。
青木　拙者も委しい事は存ぜぬが、確か四ツ塚鳥羽の繩手、向うが竹田、此方の杜が安樂壽院、せめて掛茶屋でも起きてゐて呉れゝばぢやが。
おみの　ア、又胸先が、イタ、、、、、。
青木　痛みまするかこれおみの殿、氣を確かに、な、確乎して。
（青木頻りに介抱する。小屋の中より顏を出し。）
文吉　オヤ、何だか妙に婦女の泣聲が聞えると思つたら、見れや巡禮の衆らしいが、今頃に一體どうしたんだ。（傍に寄る）
青木　御覽の通り連れの女が持病の苦しみ、夜分といひ此

の邊の勝手は存ぜず、甚だ難澁いたし居りまする。

文吉　ウム／＼然うだらう、鐵砲玉が中つた次第ぢやなからうと思つたが、何にしても其奴ア氣の毒だ、ヨシヨシ、今水を持つて來て遣るから待つて居ねえ。

（文吉小屋へ入る。砲聲一頻り殷々と轟き亙る。）

青木　マタ撃出したな、あの大砲の一發々々に幕府の礎が崩れるのか、イヤ新らしい國士が固まるのか、戰爭の樣子も氣に懸る。

（文吉馬干杓に水を汲んで持つて出で。）

文吉　サ、早く一杯飲んで見るが宜い、時に取つての氣注け藥代り、少しは藥になるかも知れねえ。

青木　御親切にいろ／＼と有難う存じまする。

（青木おみのに水を與へ介抱する。文吉ジッと闇を透して。）

文吉　オヤッ、お前、青木さんぢやアねえか？

青木　エッ？

文吉　違えねえ矢ッ張り然うだ、新撰組の色若衆、青木惣三郎さんぢやア有りませんか。

青木　（初めて氣が注き）オヽッ、此方は確か近藤先生に附いて居た？

文吉　へイ／＼その馬子の文吉ですよ、それにお連れの御婦人も、一度何處かで見掛けたやうだが、オヽ然うだ、和女桝屋の娘ッ子だな？

おみの　アッ！

文吉　何でも祇園祭の宵宮の晩に、人質同樣の大切な此の娘ッ子を連出して、駈落しなすッたといふ事は、組の人達から聞いて居ましたッけがナ、この照梅ぢやア噂の通り、大分お安くねえ寸法らしいね青木さん、へ、、、、へ。

青木　ア、これ靜かにしないか、如何にもこれは桝屋の娘御、亡くなられた喜右衛門殿の忘れ形身のおみの殿、之には深い仔細あつて、先生を首め組の同志の方々にも、御恩を仇に重々の不義理を重ねた惣三郎が身の成る果、シテ此方は今頃斯樣な場所に何をして居るのだ。

文吉　何も彼もねえ茲所は今夜、新撰組の見張所で、皆な大勢居なすッたんだが、ツイ僅た今、揃つて何處かへ出掛けたばかりさ。

青木　デハ、茲が組の見張所？

文吉　こんな小汚ね水車小屋でも近藤先生の御本陣、追付けお歸んなさるだらうぜ。

青木　エッ、先生が今夜この小屋へ？

文吉　ナール程此奴ア氣が注かなかつた、お前は先生に、遇つちやアばつの悪い人なんだな。

青木　察しの通り、どの面下げて、阿女々々と御一同にお

目に懸れよう、唯何事も內分にいたしくれるやう。

文吉　宜いツて事よ、若い內にやア誰しも覺えのある筋道だ、それ程野暮な文吉ぢやアねえ、見て見ねえ振萬事沙汰なしさ、ぢやアマア遲くならねえ內に出掛けなさるが宜いや。

青木　忝けない、おみの殿マダ痛みまするか？

おみの　お蔭で餘ッ程樂になりました。

青木　デハ夜の更けぬ內に、急ぎませう。

おみの　でもアノ、青木樣、今このお方の話では、今夜新撰組の隊長樣がこの小屋へ。

青木　ア、これ！　それで尙更急がねば相成らぬ、何事も拙者の胸中に。

おみの　然うでござります、何事も凡て急がねば成りませぬ、日頃の願ひを今宵の裡に。

文吉　エツ？

青木　イヤ、今宵の裡に何も彼も、人目を忍んで裏道から。

文吉　用が斯つた、危ねえぜ。

おみの　いかいお世話に與りまして有難う存じまする。

青木　然らば文吉。

文吉　早く宿屋へ落着きなさいまし。

青木　御免を蒙る。

（青木、おみのゝ手を曳き、互ひに思ひを殘し、下手奧の方へ入る。文吉後を見送り。）

文吉　ヘツ、水の出花の若氣とはいへ、沍落の果が巡禮とまで、成り下りやア世話アねえ、ダガこれも功德た、端更惡くも酬ふめえ、それにしても先生は大層悠然だなア、ドレ、モウ一休みだ。

（獨語して小屋へ入る。下手より土方が出て來る、藪の中より服部等四人が窺ひ出で。）

服部　土方待て！

土方　何者だ？

服部　脫退黨の一人服部武雄だ！

土方　それが拙者に用でもあるのか？

服部　ある、貴樣の命を貰ふのだ！

土方　何？

服部　覺悟せい！

（四人一度に斬つて掛る。）

土方　猪小才なり、イデ！

（土方四人を敵として鬪ひ、忽ち四人を斬斃す。上手より近藤、馬提灯を携へ出で來り、ジッと樣子を窺ふ。）

土方　隊長！

近藤　大分烈しい太刀先だッたが、相手は誰だ？

土方　脫退をした服部の奴と、外に二三名居たやうだ。

近藤　皆な殺たか？

土方　確とは解らぬが手應へはあつた。

近藤　（提灯に死骸を照し）オヽ、服部武雄に相違ない。

土方　馬鹿な奴等だ。

近藤　大概長州の諜者にでも成り居つたか、斯ういふ向う見ずが多いので、兎角世間が騷がしくなる、困つた奴だ。

土方　拙者に對してすらこの始末、隊長の身體は一層の用心が肝要だて。

近藤　文吉、々々！

文吉　ヘイ、ホ、お歸りなさいまし。

（小屋から文吉が出て來る。）

近藤　貴樣のその疵は何うしたのだ？

文吉　ヘツこれやア何、烏丸の通りを駈出して來ますと、ソノ、鐵砲玉の奴が飛んで來やアがつて鳥渡かすりましたんで、大した事ではありません。

近藤　鐵砲玉に目はないぞ。

文吉　ヘイ。

近藤　之からは充分に氣を注けろ。

文吉　ヘイ。

近藤　この死骸を片附けい。

文吉　畏りました。

（屍骸を叢蔭へ運ぶ。）

土方　大分靜かに成つたやうだが、その後の形勢は？

近藤　されば、戰ひは今正に酣だが、就ては貴公御苦勞ながら、竹田街道を高瀬川に沿うて取仕切つてくれまいか。

土方　それは雜作もない事だが、シテ我軍の方略は？

近藤　ウム、今洛中に火の手が揚がる筈、それが會津の苦肉の策で、敵の策源地たる鷹司邸に火を放つのだ、スルト敵兵は必らず南へ潰走する、イヤそれより外に道筋はない、ソコを途中に要擊すれば、ナアニ一溜りもなく全滅するに極つて居る……尤も鳥羽、伏見の兩道へは既に充分の手配りが致してあるから、袋の鼠も同じこと、勝敗の決今一刻だ。

土方　承知いたした、ではと、文吉を暫時貸して貰ひたいのだが？

近藤　何にするのだ？

土方　彼奴は足が達者だから、隊長の許になり大石等の隊へ、使ひの役を勤めさせたい。

近藤　宜からう、差支へない、連れて往くがよい。

土方　文吉々々。

文吉　ヘイ。（叢蔭から出て來る）

土方　直ぐに仕度をしろ、拙者と一緒に出掛けるのだ。

近藤　土方氏のお供をしろ。

文吉　へい。

土方　早く用意をせい。

文吉　用意も何もありませんや、此まゝでお供を致しませう。

近藤　土方氏の吩咐を守つて、麁忽な眞似なぞしては成らぬぞ。

文吉　畏りました。

土方　オヽ空も次第に怪しくなつた。

近藤　この提灯を持つて往け。

文吉　ザッと一雨來るかも知れませんな。

土方　テハ。（近藤に會釋）

文吉　お供をしませう。

（提灯を持つて文吉先に立ち、土方下手へ入る。蛙の啼く聲。遠く小銃の音。）

近藤　（獨語）德川幕府三百年の社稷か、興るも廢るもこの一戰、今一刻の運命と迫つた、東照權現も照覽あれ、勝てよ、勝てよと此の勇の、肉は戰き血は沸り、アヽ胸が高鳴る、どよめく、はためく！

（この內青木とおみのが窺ひ出て、物をもいはず短刀ヽ拔き、サッと雙方より斬掛る。近藤隙さず身を開き兩人の利腕を掴んで左右に引据ゑ。）

近藤　ハテ、一人は女のやうだな、何者だマヅ名を名乘れ？

おみの　オヽ名乘らいでか。

近藤　ウム？

おみの　其方の爲めに生捕られて、非業に斃れた枡屋喜右衞門の恨み！

近藤　ナニ、枡屋喜右衞門？

おみの　古高俊太郎の、無念を承け繼ぐ娘おみのがヽ刃の手の內、汝！（藻掻く）

近藤　さては日外壬生の屯所へ訴人した娘御か……殊に繋かる今一人は、貴樣青木たな惣三郎に違ひあるまい、マア待て騷ぐな。（兩人を突放し）愚かにも其方達の瘦腕に討果される勇だと思ふか、宜いから俺の云ふ事を、性根に入れてよく聞け！

青木　イヽヤ斯くなる上は何事も承はるには及びませぬ、新撰組の掟に背いて、預けられたる大切な生證據の娘を盜み出し、須彌蒼海とも比べやうなき先生の御恩を忘れ、刃向ひまでした青木惣三郎、事破れなば命は素より亡き物と覺悟の上の浪藉、サ潔くこの首を、先生のお手に御成敗。

おみの　妾とても父樣を首め同志一味の仇敵に、恩や情は受けたうない、仕損じたは此身の不覺、青木樣と同じやうに、殺して下され、死なせて下され。

青木　先生、速かにお手討、サ、早く。

おみの　青木様。

（おみの青木に寄添ひ覺悟の體。）

近藤　イ、ヤそれは成らぬ、俺は好んで其方達に恩を賣らう、情を強ひようとする者ではない、マア落着いて聞け……のう青木、隊士の内でも貴様とは取分け深い縁といはうか、その貴様達は今徒らに血氣に驅られて進むべき路を過つて居る、娘御とてもおや、能く成行を考へて見られい、古高氏を殺したは、新撰組の敵としてゞも、マタ私人の怨みの爲でもなく、池田屋の襲撃、浪人共の斬殺、皆以て德川家への御奉公、天下の輿論は一にも二にも罪を幕府の失政に歸せんとするが、假令些少の過失や落度があるにもしろ、三百年兵馬の大權を預り奉つた功績は功績、況て拙者は幕臣た、宗家の爲には身命をも捧げて事に當らねばならぬ、あらゆる世上の人達から怨まれようと憎まれようと、只敢然として盡すべきに盡すが眞の武士道ではあるまいか、勤王に勤王の至誠があれば佐幕には佐幕の純情がある、怨む意に武士の切なる思ひをナゼ構れとは察して呉れぬのだ？

（大砲の響き、近藤向うを見込んで。）

近藤　又撃出したな、街道筋を炬火の燦々として南へ續くは、味方　勝利！

青木　エツ？

近藤　有難や德川家の傾く御運を盛返したぞ、拙者に寄て我事のやうに、嬉しくて、ウ、嬉しくて！（泣き歔ぶ）

青木　先生！　相濟みませぬ、御教訓一々膽に銘じました、我ながら愚かにも大義名分の理を過まち、踏ならぬ道に眼眩んで。

近藤　戀？

青木　假にも大恩ある先生に、ア、何といふ勿體ない。（泣く）

おみの　眞に淨らかなお心を承はりましては、端たない簡似がお恥かしう。

近藤　待て、オ、誰か此方へ參る氣配、見つけられてはたらぬ、幸ひこの水車小屋へ、暫し隱れて休むが宜い。

青木　併しこの上御迷惑にでも相成ましては。

近藤　よいから早く、娘御も一緒に。

青木　左様なれば仰せに從ひ。

おみの　お詫はいづれ改めまして。

近藤　早く〳〵。

青木　御免。

（青木、おみの小屋の内へ入る。小銃、大砲の響き、上手より島田が出て來り。）

島田　隊長、味方勝利に蘇りましたぞ。

近藤　どうだ、その後の戰況は。

島田　さしもの敵も總崩れ。

（上手にて火の手上る。）

島田　オ、、あれは？

近藤　長州勢の陣營に火の手が揚つた、夜風に焔が漲り渦卷く、今洛中を照す光にやがて日本の夜が明けよう、シテ敵の主力は。

島田　蛤御門の亂軍に來島又兵衞、入江九一等、鷹司邸の猛火の中に久坂義助、寺島忠三郎等枕を竝べて戰死いたした

近藤　フーム、敵には敵の忠義がある、いづれも立派な武門の士ぢや。

（下手より文吉が驅出し。）

文吉　先生、竹田街道でも戰爭が初まりました！

近藤　土方からの注進か？

文吉　所で私やア鳥渡小屋ん中へ。

（ト小屋へ入り。）

文吉の聲　ウワツ！

（消魂しく叫ぶ。）

島田　どうした文吉？

文吉の聲　男と女と、心中だア！

（と轉がり出る。）

島田　心中、何を馬鹿な？

（島田小屋へ入る。）

近藤　騷ぐな〳〵、兩人は戀に死んだのだ。

文吉　へツ？

近藤　孰方を見ても、泣いて遣りたい人達ばかり。

（近藤憮然として聲を飲む。砲聲更に近く烈しく鳴りつゞけて。）

――幕――

大詰

島原輪違ひ屋孔雀の間

同年八月中旬の或夜。

正面上手寄に、塗框の上段の間、續いて簾子窓のある壁、前が下段の間、廊下の口が見え、左右綺襖、大衝立、凡て極彩色の孔雀が描いてある。島原の揚屋の座敷、秋の夜の暮れて間もなき頃。

煌々たる燭臺を連ね、岸島、原田、横倉、近藤周平が仲居を相手に酒宴半ばの體。花やかな鳴物にて、幕開く。

岸島　オイお初、今夜はマタ近頃に珍らしい景氣だなア。

お初　ハイ、大廣間のお振舞に、殿樣の御注文で賑やかな

舞子衆の總踊り、それが評判になつて御覽の通りどのお座敷も一時になり、湧き返るやうな騷ぎでござります。

原田　成程今歳は例の長討騷ぎで、お流れになつた盆踊を、廓に移して賞翫するとは流石に御趣向、風流の催しとでも申すかの？

周平　早いな、如何にもモウ一月になる、あの日の戰ひの烈しさは、拙者マダ目前に殘つて居る、敵を天王山へ追擊した時の愉快さは？

横倉　がその代りに京の街の慘目さは、燒かれた家が四萬三千戸、火焔の波は延長三里半に寄せ返して、只茫々たる焦土と化してしまつたからなア。

岸島　併し日出度く勝鬨が揚つて見れば、矢張り德川幕府の世の中、天下は忽ちこの通り泰平無事になる。

原田　それでこそ今宵の如き大振舞も出來るのだが、當時閣老をも凌ぐばかりの永井公の御威勢、隨つて來客の顏觸れもナカ／＼廣い、種んな人物が集つたやうだの。

横倉　種々な人物といへば先刻廊下で、伊藤甲子太郎、鈴木三樹三郞の姿をチラと見受けたぞ。

岸島　ウーム時節柄、油斷のならぬ人物だが、どうして今夜招かれたのか。

仲居　イヽエそのお武家樣なら別のお座敷、確か薩摩屋敷の御連中でござりませう。

横倉　何にしても一應は、隊長の耳へも入れて置きたいな。

（奥にて踊の鳴物。）

仲居　どうやら踊が初まつたと見えます。

原田　オヽ、浮き立つやうな三味線太鼓、これが兵燹の巷に近い京洛の夜といへようか？

周平　シテその踊は何處で初まつて居る？

仲居　廊下傳ひァ、それ／＼、漸々此方へ踊つて參ります。

（簾子窓の向うを通つて廊下の口より、大勢の舞妓が揃ひの衣裳、唄に合せて華やかに踊りながら出て來り、踊りつゞけて上手へ入る。）

岸島　濃婉華麗、繪も又及ばずか、面白いな。

横倉　ナアニもう斯うなれば天下も國家も議論も戰爭も要るものか、池田伊丹の美酒に醉うて都乙女の舞姿に興がる、之が人の世の極樂ぢや、

周平　廣間の酒席は窮屈だが、此所は一切不禮講。

原田　ウム、梁山泊に限るよ、オイ酒だ／＼。

仲居　ハイ／＼畏りました。

横倉　ドシ／＼持つて來てくれい。

仲居　直ぐに熱いのを持つて參りまする。

（仲居下手へ入る。）

土方の聲　オーイ横倉、岸島、何處へ參つた。
周平　あの聲は土方氏？
原田　永く廣間に席を外したから、それで探して居るので
　あらう。
土方の聲　原田々々、周平まで居ない。
岸島　デハもう一度、元の席へ。
横倉　此儘消えてしまふも失禮、揃つて出掛けよう。
周平　同道いたさう。
（四人揃つて上手へ入る。獨吟になり、上段の間の襖を開けて近藤、强か醉ひ潰れて、蹌めき／＼出で來り、殘れる酒を手酌にて呷り、左も苦し氣に、脇息を引寄せ倚りかゝり居眠る。廊下の口より切禿の女の童甲、乙、いづれも銚子を携へ忍び足に出で來り、近藤の樣子を窺ひ、何やら囁き合ひ、傍に寄ると銚子を置いて、甲、近藤の背後へ廻り兩手で目隱しをする。）
近藤　（他愛なく）誰ぢや、／＼、マタ惡戯をし居るな、
　誰ぢや。
（乙は膝に縋り。）
童乙　隊長さま。
近藤　ウム。
（甲目隱しを解き肩越しに。）
童甲　妾！

近藤　ハヽヽヽ、これは可愛い曲者奴、何時の間に忍び込
　まれたか、すんでに寢首を掻かれる所であつたなア。
童乙　デモ隊長樣を、探して來いと吩咐られまして。
近藤　ナニ、俺を探しに參つたのか、イヤそれは御苦勞、
　ダガ拙者は少々咽喉が乾いて困る。
童甲　エヽそれで、お土產を持つて來ましたえ。
近藤　ホヽウ土產とは有難いな、シテその品は何ぢや？
童乙　いつもお好きな。
同甲　これえ。
（銚子を出す。）
近藤　ヤこれは／＼、さて心憎い賜り物、然らば直ぐに一
　杯初めるとしよう。
兩人　お酌。（雙方より銚子を差出し一度に酌をする）
近藤　二人掛りのお酌とは面白い、そして廣間の人達は、
　マダ賑やかに騷いで居るだらうな？
童乙　皆な浮れて面白さうに。
同甲　唄うたり、踊つたり。
近藤　ウム、頭に更ける秋の夜を、島原の揚屋か奧座敷に、
　禿を相手の小酒宴、恁うして居れば勇も亦一介の風流才
　子、獅子とも虎とも狼とも、危ながられる荒武者の胸に
　も、矢張り優しい人間の血が通つて居るのだ。
童乙　早う彼方へ。

同甲　往きませう。

近藤　ア、ー何時も斯樣な柔らかな氣持に成つて居られたらなア。

童乙　サア早う。

近藤　待て／＼、俺は可愛い和女達と遊んで居るのが何よりの樂み、サア、もう一杯注いでくれ。

（童に注がせて酒を飲む。この内下手より伊藤、鈴木が出で來り、樣子を窺ひ。）

伊藤　近藤氏、久々でお目に懸る。

近藤　オゝ誰かと思へば、伊藤に鈴木か？

伊藤　今宵計らず當家へ來合はせ、貴公もお越と承はり、御挨拶かた／＼御意得に參つた。

鈴木　お樂み中、妨げを致して相濟まん。

（近藤、目配せして童二人に去れと知らせる。童等うなづき、打連れて廊下口へ入る。伊藤、鈴木は絶えず四邊へ氣を配る。）

近藤　どうぢや、世間は面白いか？

鈴木　面白いとも、凡てが面白い、只面白くないのは當時日蔭者の我々ばかり。

伊藤　その日蔭者が一獻お酌をしよう。

鈴木　組の方々は皆御無事でござるか？

近藤　ウム、皆も達者だ、時に何はどうした、服部は？

（伊藤の酌て酒を飲む）

鈴木　エッ？

伊藤　服部は暗殺された。

近藤　暗殺？　バ、馬鹿な、彼奴を暗殺するやうな物數奇が何處にあらう、大方天誅の刃にでも斃れたのだらう。

鈴木　……天誅だと？

近藤　ハ、、、、、せめて骨でも拾つて遣るさ、ソレが朋友の交誼だ、貴公達も以來セイ／＼氣を注けるが可い、世の中は怖いぞ。

伊藤　何？

近藤　アー、宵から餘りに飲み續けた故か、少々眠くなつて來た。

伊藤　ダガ、今一獻？

近藤　イ、ヤもう澤山、俺は寢るぞ。

（近藤其儘横になる。兩人乾と顏を見合はせ。）

伊藤　風邪を引いてはいかん、近藤氏、近藤氏！

近藤　ウ、ウーム！

伊藤　酒が廻つて白河夜船だ。

（伊藤、近藤の刀を奪はんとする。途端に近藤夢中にバッタリ刀の上に寢返へる。伊藤愕いて手を引く、上手の襖を細目に開いて土方が覗く。鈴木焦つて近藤に斬付けんとするを伊藤が止めて、兩人目と目の合圖、

示し合せて廊下口へ入る。土方襖を開いて出て來り。）
土方　隊長、隊長、御老職のお越しだ。
近藤　（ガバと刎起き）ナニ、永井侯が、それは〳〵取亂して恐れ入る。
（近藤居住居を直す。上手より若年寄永井玄蕃頭、公用人村上重左衛門、望月隼人、續いて大石以下新撰組の浪人一同從うて出て來る。）
近藤　（慇懃に）御覽の通り、取亂しまする迄に頂戴仕りまして、失禮の段平にお許しを。
永井　イヤ〳〵取亂したとて性根の狂ふ其方ではない、前後不覺になるまで打寛いで飲んでくれ。
近藤　恐れ入りまする。
永井　のう近藤、其方が積年辛苦の程は重々察し入るぞ、一身の榮達を餘所にして死に勝る苦節に堪へ、天下の爲に盡しくれたる志は將軍家におかせられても殊の外の御滿足である、が、遷りゆく時勢の汐先は何とも致し方なく、いよ〳〵大政奉還の議が整つた。
近藤　何と仰せられます？
永井　三百年恩顧の幕臣としては、我人共に、申しさうもなく只管に殘念至極ぢやが、將に崩壞れんとする幕府の礎を保ち支へるの途として、眞に已むを得ざる次第。
近藤　シテ、宗嗣の行末はこの先何となりませう？
永井　國家の政權を畏き邊りへ返上いたすまでのこと、德川の家名は萬代不易と心得る。
近藤　何事も君家のお爲とござりますれば、輕輩微臣の輕輕しく口を挿むべきではござりませぬが、東照神君以來御歴代、武門の棟梁として彌榮えましたる德川の流れの末を思ひますれば、悔恨悲痛、胸も張裂くるばかりにござります。
永井　誠忠一徹の其方の心には然うも響かうが、大勢は逐に動かすべからず、凡ては時節と諦めるより外ない、實はそれ等の要談もあり、今宵は多く樣々な人を招いたが、宜き折柄、是非とも其方に紹介せたい人物がある。
近藤　ソレは何人にござりまするな。
永井　かね〴〵噂にも聞き及んで居よう、土佐の後藤象二郞ぢや。
土方　土佐の後藤？
永井　どうぢや、逢うて見るか？
近藤　逢ひまする。
永井　ナカ〳〵の才物、斬味も鋭い、試して見るが宜い、隼人、彼の人を之へ。
望月　畏りました。
（望月上手へ引返す。）
永井　其方の意に協ふか協はぬか、今にこれへ參つたら、

胸襟を開いて語り合ふも宜しからう、我等は公用の都合もあり、殘り惜いが退席いたす。

土方　ソレお見送りを。

（浪士一同腰を上げる。）

永井　イヤそれには及ばぬ、そのまゝ。

近藤　ハツ、御厚志千萬！　（一禮）

（永井、村上を從へ下手に入る。）

大石　隊長、いよ／＼無念な日が參つた。

一同　今にして大政奉還とは、徳川宗家の手や足を斬放されるも同じこと、俺は俄に目の先が晦くなつた。

（一同黯然として差俯向く。上手より望月が出て來り。）

望月　後藤氏は、直ぐお越になります。

近藤　御苦勞に存ずる。

（望月また上手へ入る。）

土方　その奉還の橋渡しを勸めた後藤といふ奴、謂はば幕府の蠹蟲も同樣、仕儀に依ては斬つてしまはうか？

近藤　マア待て、一應篤と面魂を見極めた上でも遲くはない、何時もの通り。

土方　心得た、各々。

一同　オ、ツ！

（浪士一同刀を拔いて切尖を揃へ身構へる。上手より後藤象二郎無造作に出て來り。）

後藤　壬生新撰組の隊長近藤氏はいづれに居らるゝ？

大石　シテ其許御身分御姓名は？

後藤　土州山內藩、後藤象二郎。

近藤　お尋ねの近藤勇はこれに。

後藤　左樣か、御免を蒙る。

（後藤前へ進み出る。一同刀を納める。）

土方　存ぜぬ事とて失禮をいたしました。

後藤　ソレは御同樣、別けて酒席に無禮講と申す。

（一同座に復す。）

近藤　周平、改めて酒を持て。

周平　ハツ！

（周平廊下口へ入る。）

近藤　改めて御意を得申す、お見掛けの如く邊境に育つた武骨者、以後は宜しく。

後藤　それは手前より申すこと、何の辨へもなき田舍侍、此上ともにお引廻しの儀をお願ひ申す。

（周平直ぐ銚子盃を持ち出で後藤に勸める。）

近藤　場所柄といひ甚だ失禮とは存じまするが、お近づきの印に一盞。

後藤　お歡待にあづかり、有難く頂戴いたす。

近藤　此度はマタ容易ならざるお骨折、御配慮の段恭く存

じまする。

後藤　大要は既に永井侯からお聞及びかと存ずるが、天朝のお爲、幕府のお爲、開けゆく我日本の國士の爲、この場合マヅ當然の處置かと存じましてな。

土方　當然？　ウーム果してそれが當然の處置でござらうかの？

後藤　强て議論を戰はす日になれば、諸說紛々、理不理の批判もありませうが、就中最も穩當な手段方法ではござるまいか。

土方　然らば一言お尋ね申す、初めに公武の合體を極力主張せられた貴藩が、宛で掌を返したやうに、進んで此度の斡旋に努められたるは？

後藤　イヤその點に就ても唯一口に、要を盡して說明の出來る程簡短平易な問題ではありませぬ、遷り行く時勢、人心の向背、それやこれやを參酌して、考慮に考慮を重ねました結果で、今、德川家の危急を救ふ唯一無二の良策と信じたからで、これは象二郎一人の聲でなく、天下萬民の聲ともお聞き下さるやう。

近藤　イヤ、經國の途に疎き武邊一圖の我々には、事の善惡利害よりも、その成行の餘りにも慘目な態を見るが口惜しさ、今も今とて隊士一同無念の泪に暮れ申した、拙者も新撰組なぞに加盟せず、寧ろ勤王の志士達の仲間入でも致して居つたら、恁樣な苦しい思出もござるまいもの。

後藤　何の其所が貴公達の正義の貴さ、順逆の利害に關らず、只盡すべきに盡すが眞の武士道……俯仰天地に恥づるなくんば己れに省みて悔も憾みもない筈ぢや、達觀せられい、超越せられい。

近藤　忝けない、が。鬼と呼ばれたこの勇も愚痴や涙が出るやうになつてはモウ無駄だ、京へ登つて二年越、何一ツ仕出かした手柄もなく、幕臣共の働きは悉く却つて幕府の禍の種となりました。

後藤　併し近藤氏、貴公は幕府の最後を飾る德川武士の第一人、成敗に論なく貴公の魂は、我日本の武道を守る光となつて萬世に照り輝きませう。

近藤　お禮を申す、生前一人の知己を得た上は、それで泉下に瞑する事も出來ませうが、萬世は愚か五十年、百年の後には、智慧の足りない豬武者、盲忠義の大馬鹿者と嘲り罵り嗤はれもしよう、イヤ愚痴にまぎれて折角の酒が水になりさう、サ、重ねて一盞。

後藤　御厚志は忝けないが、些と急ぎの用もありまするし、殘念ながら今宵はお預け申さう。

近藤　ダガまだ宵の裡、別けて夜長の折柄と申し。

後藤　イヤそれに折惡しく、宿に來客もありまするで。

土方　何、御來客とは？

後藤　京の美人が待て居る、雨は美しいのに限りますからな、ハヽヽヽヽ。

近藤　なる程、さう承はつてはこの以上、野暮な止め立ても致されまい。

大石　デハ一同揃つてお見送り致さう！

後藤　それは御苦勞、近藤氏、他日重ねて。

近藤　失禮いたす。

（近藤一人を殘して、後藤を先に一同下手へ入る。）

近藤　流石に傑物、而も當世の幸福者、ソレに比べて俺は生涯の不倖、彼の心には春風がそよぎ、俺の胸には厚氷が張つて居る、アヽ、遣瀨ない。（憂悶）

（廊下の口より伊藤、鈴木が拔刀して忍び出て。）

鈴木　奸賊！

（雙方より斬つて掛る。近藤兩人を仰向けに倒し、重ねて上から一刀田樂刺に突通す。下手より土方、大夫の裲襠を抱へて出で來り。）

土方　隊長、殺たな？

近藤　血を見てヤツと、胸の痞へが下つたやうだ！

（上手より惣踊りの舞子が踊りながら出て來る。兩人愕き裲襠を死骸に冠せる。舞子は輪になつて踊る。近藤刀を隠し踊りの中に入り、醉うた振をして不器用に踊り狂ふ。唯一杯に賑やかな鳴物にて。）

――幕――

（大正十二年八月東京公園劇場新國劇初演）

延命院秘事（二幕五場）

時
享和三年の春

人物

日　當　延命院の住職（二十四歳）
柳　全　同　納所（三十三歳）
良　賢　同　所化（二十五歳）
妙　光　同　同　（同　）
銀兵衛　同　寺男（六十歳位）
小松屋三四郎　目明し（四十歳位）
倉　吉　手　先（二十五六歳）
おころ　町の娘（十七歳）
粂　村　奥女中（二十六歳）
脇坂淡路守　寺社奉行（四十歳）
根岸肥前守　町奉行（四十五歳）
鹽山喜内　脇坂の臣

序幕

谷中延命院七面堂の櫻花

享和三年の春、晴れたる日の晝、八ツ下り

正面下手より上手へ七分通りまで屋根附の寺の筋塀、下手塀に續いて稍斜めに屋根附の小さき門（地上より一段高く、扉は開いたまゝ）門の上手に直ぐ「七面大明神」と彫附けし立石を建てる。塀の端より上手は、奥深き一面の櫻林、花滿開、その前に「痳疹除御祈禱修法當山」と記せし開帳札を立てる。

塀の前には二三本太き櫻の樹を植ゑ、その下蔭に接待の茶道具（茶釜臺、茶碗等）を据ゑ、紙に「ばん茶せつたい」と記して貼付ける、傍に床几二脚を並べ、尙門の左右、塀の前、上手前側等に奉納の石燈籠を一對づつ、都合四組八基を配置す。

塀の向うに七面堂の側面を見せる。

目明し小松屋三四郎克明さうな町人風に化け、床几に腰かけ莨を呑んで居り、手先の倉吉職人風の扮裝頻りに接待の茶を呑んで居る。

賑やかな題目太鼓、それに鍔口の音、見世物小屋の鳴

物、等混多に聞えて。
幕明く。
直ぐ下手より町家の娘、甲、乙。

甲　美いちやん、早くさ、肝腎のお祖師様へお詣りをしなければ何にもならないんだからさ。

乙　ダッテ妾、阿母さんの代りにお百度を踏んで居たんだもの。

甲　遲くなつては大變よ、それこそ道が遠いんだから。

乙　歸りは裏門からね、日暮里へ抜けるのが近道なんだよ。

（これと同時に上手より武家の女房、供の下女が喘しながら出る。娘兩人の臺詞と入れ亂れになるやう）。

女房　杉や、呪禁の御守札を受けるのはどちらであらうの。

下女　ハイ〳〵此の御門の內とか申して居りましたが。

女房　彼方は定めし一段と人込み……はぐれないやうに氣をつけてね。

下女　ハイ、それは大丈夫でござります。

（雙方上手、下手へ入る。）

倉吉　旦那、どうですい、此の景氣は些つと馬鹿々々し過ぎる位の物ですぜ。

三四郎　ハヽヽ、接待のお茶ア肚サンザ飲んで置いて、寺の惡口でもあるまいが、陽氣は宜いし櫻は見頃、それにお上人樣は活佛とさへ評判のある偉い方、發向するのが當り前だよ。

倉吉　併し、かう見た所が詣つて居るのは大抵婦女ばかりのやうですが。

三四郎　（四邊を見廻し）倉吉、汝えも其所へ氣が注いたか？

倉吉　矢張り親分何かしら……。

三四郎　叱ッ、無駄ア云ふ暇にモウ一度（顎で下手を示し）星の附くだけ當つて見ろよ。

倉吉　違えねえ、何處に御利益がオツ落ちて居ねえとも限らねえや、おやア後方。

（目・目を見合せ、倉吉下手へ入る。見世物の鳴物にて、上手より町家の老人と丁稚と出て來り、下手より供先の腰元兩人出で來り、通り流し、左右へ入る。直ぐ下手より講中の男女四人。）

四人　（太鼓を叩き）南無妙法蓮華經、〳〵。

（題目を唱へる、上手より十二三の娘の子泣きながら。）

迷子の娘　姉ちやーん、〳〵〳〵。

（と雙方上、下へ入る。）

（上手より世話人の若い者一、二、三が喘しながら出

て來り。)
一 どうですい戲屋の、から忙しく、つちやア世話人も講中も堪らないねえ。
二 全くどうも、碌スッポ息を吐く間がないんだからなア。
三 闘やアしないよ、油も少々は賣つて見るさ。(茶釜の下から其の火をつけ、床几へかける)
(ト、一、二は茶を呑み。)
一 その油より接待の番茶の方がよく賣れるやうだ、所で是れから門前を一廻り。
二 今日は隨分出し店の數も多いやうだから、お賽錢の上りもウンとある筈だ。
三 何しろ高物がだん／＼多くなり、小屋がけの地割が割り切れないといふからな。
一 成程然う云へば輕業に力持、地獄極樂。
二 評判の鷄娘にろくろ首、珍らしくはないが景氣になりますよ。
(この內下手より寺男の銀兵衛、水の入りたる手桶を重さうに携へ出て來る。)
三 オ、ツ、銀兵衛爺さん。
銀兵衛 ア、これは旦那方でございますか。
一 昨日今日のこの賑はひで、歳をとつたお前まで隨分骨が折れるだらう?
銀兵衛 ナアニ、お前これも皆なお祖師樣のお利益、お上人樣のお力だと思やア別段苦勞にもなりませんよ。
(ト水を茶釜に汲入れる。)
二 相變らず達者な爺さんだぜ、なる程接待のお茶の二番煎じといふ奴だな。
銀兵衛 ヘイ、恁うして釜の下ア氣をつけて置きせえすれやア、大勢のお詣りの衆が、どんなに悦ぶかも知れませんからね。
三 ぢやア銀兵衛さんに負けねえやう。
二 俺達も揃つて出掛けやう。
一 ウム、今が出盛り、丁度潮時だ。
(三人捨臺詞にて下手へ入る。)
(銀兵衛釜の下の炭を直す。)
三四郎 (此內銀兵衛の顏を見て兎角不審の思入れ) 銀兵衛さんといふ名前を聞いて思ひ出したが、もし間違つてゐたら御免なさい、お前さん下谷の山崎町に居なすつた八百屋の銀兵衛さんぢやアねえか?
銀兵衛 ヘッ、イ、如何にも被仰います通りその銀兵衛でございますが。
三四郎 イヤ、どうも先刻から、確かに見た事のある老人だと思つては居たんだが、矢つ張り然うだよ、何しろ隨

分久しッ振りだからなア。
銀兵衛　へー、私を御存じだと被仰います、お前様は一體誰方様で。
三四郎　無理はねエ、歳の若けえ俺でせえ見外れたんだ、名前を云つたら思ひだせるだらうな、坂本二丁目の小松屋だ、御用聞きの三四郎。
銀兵衛　オヽツ、坂本の親分！　おゝ親分！
三四郎　判つたかい。
銀兵衛　これはまア飛んでもねえ御無禮を致しまして、親分さんだ、親分さんだ、その節は種々と御厄介に成りまして、何時もながら御機嫌よろしう。
三四郎　お前も達者で何よりだが、マ、茲へ掛けるがいゝ、噺は山々だ。
銀兵衛　それぢやア御免を蒙りますが（腰をかけ）お目に掛るもお耻かしいこんな惨目な容になりまして。
三四郎　ナアニお前、どんな身上に成らうとも命があつて遇はれりや目出たい、併し全く怎んな所に世間を隠れて居ようたア、今日の今まで知らなかつたが。
銀兵衛　ヘイ、イヤお話にも何にも成りません、歳を老つて若い奴等に死に後れたが、因業の種、ソコには深い成行もございまして、スツカリ娑婆に愛想が盡き、三年前からこの寺のお上人様のお情けで引取られ、どうにかまア惜しくもねえ命を繋いで居りますんで。
三四郎　イヤ重ね〳〵お前の不幸も、蔭ながら聞かねえぢやなかつたが、併し浮世を捨てた氣になり、毎日毎晩有難えお題目の御利益に生きると云ふのも結句幸福だぜ。
銀兵衛　然うして親分、今日は何かマヽ御用の筋でゝも。
三四郎　ナアに、そんな野暮用どころぢやアねえ、餘まり此の寺の評判が高けえから、急に思ひついた俄か信心遊山半分といふ奴なんだが、さて出掛けて見ると驚いた、噂にまさる參詣の群衆、ソレニ町方ばかりでなく、武家屋敷の奥向きからも隨分お詣りがあるやうだなア。
銀兵衛　ヘイ〳〵、三組五組、毎日のやうに御參詣がございます、今日も何處かの若いお屋敷様が先刻内陣へお入りになりましたよ。
三四郎　それとても皆な日當といふお上人様が偉えからだ、時々は御本丸なぞへもお上りに成るさうだな？
銀兵衛　そウ始終でございます、若い坊さんたちの話では、今日も程なく芝口とやらのお大名屋敷へお越しだとか。
三四郎　芝口、フーム、（氣を替へ）ヤ、何にしても結構結構。
銀兵衛　所で親分はそウ、御本堂へ御參詣に成りましたのでございますか。

三四郎　イ、ヤ、マダこれからなんだよ。
（題目太鼓、拍子木が聞える。）
銀兵衛　オ、ツ、丁度今から御祈禱の初まり、では私が御案内いたしませう。
三四郎　然うかい、ヤ、其奴ア何より忝けねえ、せめて尊いお上人のお顔なりとも拜みてえんだ。（と立上る）
銀兵衛　この騒ぎでは御本堂へ、ナカ〳〵寄り附けないかも知れませんが。
（と銀兵衛先きに三四郎上手へ入る。）
（直ぐ下手より以前の迷子の娘がウロ〳〵と泣きながら出て來り。）
迷ひ子　姉ちやん——姉、姉ちやん——
（と上手へ入る。）
（上手奥、櫻の立木の間より。）
眞眞　コレ何をするのだ。
妙光　不可ません〳〵。
おころ　イ、エ〳〵、退いて、放して。
眞眞　成りません〳〵。
妙光　サ、部屋へ下らつしやれ。
（所化眞眞、妙光が町の娘おころを支へながら、押戻して出て來る。おころは狂亂の如く夢中にて上手へ、氣な事はれ。）

おころ　後生、お願ひ、切望、妾を御本堂へ遣つて下さい、往かせておくんなさい、タッタ一言お上人樣へ、誰にも云へない内證の相談がしたいばつかり、ソ、それを樂しみに遠い道を、わざ〳〵尋ねて來ました者、この通りでございます。（と拜む）
眞眞　何を馬鹿な事を云はつしやるのだ、あの通りお上人樣は今、御修法の眞最中。
妙光　貴い御祈禱の濟むまでは、取りも直さず活佛樣、傍へ寄るさへ勿體ないのぢや。
おころ　イ、エ、そんな事妾些つとも構やアしない、活佛だつて何だつて、矢ッ張り妾の可愛いお人、往きます、妾、どうしてもお傍へ往かないでは。
眞眞　串戲を云はつしやるな、それこそ罰が中りますする。
妙光　第一が御法要の妨げ、サ、歸つた。
（と兩僧おころを引立てる、おころ其手を振り拂ひ。）
おころ　嫌や……
兩僧　何？
おころ　妾死んだつて歸るのは嫌や、邪魔にされゝばされる程、意地になつても附き纏つてやるんだ、蛇のやうに執拗くあのお上人へ。
眞眞　まるで狂人の沙汰だ。
妙光　イヤ眞者の狂人かも知れんよ。

おころ　エ、狂人だとも、恥も慮外も忘れてしまつた婦女の執念、どうしてもお傍へやつてくれなければ、然うだ、妾、勝手にあの御祈禱場へ。（駈け出す）
眞眞　（袖を捕へて）滅相な、大それたにも程がある。
妙光　待たつしやらぬか、コレ。
おころ　エ、ツ、放して遣つて……
眞眞　飛んでもない。
おころ　イ、エ、どうしても妾。
妙光　これは大變な力たな。
眞眞　放してはならぬ、放してはならぬ。（上手へ往かんとする）
（おころを兩人にて引戻し絡みになる。この內下手より納所柳全が出で來り樣子を窺ひ、宜き程に傍へ進み。）
柳全　コレ〳〵待たつしやい。
三人　アツ。（と愕く）
柳全　何とした事だ、斯樣な所で猥らがましい娘の子をぞ引つ捕へ。
眞眞　これは御納所、宜い所へ。
妙光　何も我々が好き好んで致して居るのではござりませぬ。
柳全　どちらにしても穩やかならぬ振舞、別けても今日は大切なお日柄……。
眞眞　左樣でござります、その邊を心得まして、この女を是非引き留めたいと存じまするので……
柳全　一體、如何いたした次第ぢやの。
妙光　マダ御存じはござりますまいが、今朝早くから、彼の銀兵衞爺やの部屋へ參つて居りますもので。
眞眞　淺綠とか知り合ひだとか云つて居りますが、參る早早我々に附きまとうて、是非お上人樣に逢はせてくれと煩さく申しまするので……。
妙光　外ならぬ御祈禱中の御上人、左樣な譯には參り兼ねると、縷々と申し聞けましたが何としても承知致しません。
眞眞　果ては唯今、御本堂へ飛込み、是非お傍へ參るのだと申して。
柳全　それはちと亂暴たな。
妙光　宛で狂人同樣の仕末にホト〳〵呆れ果てゝ居ります所。
おころ　（柳全に向ひ）貴僧、お願ひ申します、どうぞ妾をお上人樣のお傍へお遣し下さいまし……
柳全　よし〳〵ア、――何なりとも望みの通りにかなへて遣はすぞ。
おころ　マ、それは貴僧、眞實の事でござりますか。

柳全　わしは法衣を纏うてゐる、出家は嘘を申さぬものぢや。

おころ　ハイ。

柳全　安心を致すがよい。

おころ　有難うございます、ア、、ヤレ〳〵。

柳全　ソコでと、此の娘の事はな、愚僧引受け申すに依り、御身達は御本堂へ……。

眞量　如何樣、御祈禱も半ばを過ぎました。

妙光　では……參りませう。

（兩僧柳全に會釋して上手へ入る、輕業の鳴物。）

柳全　コレ娘御や。

おころ　ハイ。

柳全　幸ひ四邊に誰も居ないやうだし、改めて少し聞いて置きたい筋がある、マヅこれへ掛けるがよい。（柳全腰をおろす）

おころ　ハイ、それでは。（おころ別な床几に掛ける）

柳全　どうして此方、あの寺男の銀兵衛とは、身寄りかそれとも只の知合ひかな。

おころ　（安心をすると言葉が粗野になり）えゝ知つてゐると云つても、亡くなつたお父さんの古いお友達といふだけなんだから。

柳全　ウーム、宅は何處だ、此方の住居は。

おころ　淺草の馬道つて所。

柳全　馬道？

おころ　貴僧御存じ？

柳全　平素一向に用のないところ、名前だけは存じて居るが、シテ、此方の名は？

おころ　妾し、おころ。

柳全　おころとは珍らしいな、デ、お上人樣とは何時ごろ、何處でどうして知り合になつたのぢやな。

おころ　それは彼の、ずつと前方――子供の時には妾の宅が靈岸島にあつたものだから八丁堀の中村のお師匠さん所で、一緒に踊を習つて居て。

柳全　踊りの稽古を？

おころ　その時分には兄さん〳〵て云つてました、兄さんはまだ丑之助と云つて舞臺へ出て居た子供役者。

柳全　エヘン〳〵。

おころ　今度逢つたのは去年の春、お母さんに連れられて下谷の伯母さんの宅へ往つた時、兄さんは立派な御出家の姿になつて居て。

柳全　娘御、此方が話すその御人と、當延命院の御院主たる日當上人とは似ても似つかぬ人違ひぢや。

おころ　イヽエ、違つては居ませんとも、妾、その時から毎日々々寢ても覺めても此のお寺の事、御上人樣の事は

かり、思ひ續けて忘れる暇もなく、焦れ、慕うて居ましたが。

柳全　エ、ツ。

おころ　あんまり戀しさやるせなさに、あの銀兵衛伯父さんの事まで思ひ出し、當分宅へは歸らない積りでお上人樣のお傍へ置いて戴きたくお慕ひ申して來ました妾、ねエ貴僧、どうぞ何時までも戀しいお方のお傍に附いて居られますやう、お願ひ、お願ひでございます。

柳全　ヤ委細逐一承つて見れば滿更に人違ひでもなささうぢやが、掟きびしい本門法華の道場へ、女を圍ふといふことは……。

おころ　エツ、出來ないのでござんすか。

柳全　イヤ、マ出來ぬとは申さぬが、さて、容易ではないそれに就いては此方どんなに苦しい辛抱我慢でも……

おころ　えゝ、厭ひませんとも。屹つと望みの叶ふ事なら。

柳全　凡て愚僧の指圖通りに、必らずみんな事守つて見やるか。

おころ　佛になりと鬼になりと成つて見せます女の念力、シテその辛抱、我慢と仰しやいますは？

柳全　身不肖なれども當山の納所を勤むる柳全が、血肉を搾つた計略、不惑な其方の念願を成就させるその前方、精進堅固な上人に誘ひの水の掛引きは。（とおころに囁く）

おころ　えつ、では日參の御殿女中を……。

柳全　叱ツ！　大きな聲をしては成らぬ。（と立上る）

（上手より銀兵衛が出て來る。）

おころ　オヽ、伯父さん。（と傍へかけ寄る）

銀兵衛　和女また悠んだ所に、ナ、納所樣、エ、まだ申上げませんで居りましたが、此の娘つ子は……

柳全　イヤ唯今樣子は承はつた、お前の知邊の人ださうだな。

銀兵衛　左樣でございます、押掛けに當分厄介に成りたいと申してまゐりまして。

柳全　それは一向差支へない義だが、成るべくお前の部屋から外へは出さないやうに氣をつけること、時節柄といひ、兎角に世間の口がうるさい。

銀兵衛　畏りました、有難う存じます。

柳全　但し大目に見てつかはすは愚僧の情、御院主には内内だぞ。

銀兵衛　ヘイ／＼、それも承知いたしました、おやおころさんや、御免を蒙つて俺の部屋へ。

おころ　エヽ、歸りませう、あの、納所樣。

柳全　ウム。（首肯く）

銀兵衛　サア／＼歸ろう／＼。

（と銀兵衞、おころを促して下手へ入る。）
（柳全後を見送りニヤリと微笑み、ヂッと思入れ、釣鐘が鳴り、櫻ハラ〳〵と散る。）
（上手より奥女中粂村、好みの扮裝、先に立ち、腰元四人（内二人は前に上手へ通り流したのと、同人）供侍兩人附添ひ出て來り。）
粂村　柳全樣。
柳全　オ、これは〳〵、最早や御隱館に入りまするか。
粂村　日々の參詣いつも乍ら、大い御造作に預りました。
柳全　何と致しまして、只々御奇特千萬に存じまする。
粂村　お蔭を持ちまして、妾の御代參ももうあと一日にて滿願、明日こそは御本堂の内陣へ通夜のお籠りを致し、夜もすがらお上人樣より有難い、法華八軸祕法の御祈禱を頂きまするがこの身の本懷、御利益の程も如何ばかりかと存じまする。
柳全　それぞ現世の法華得佛、妙法の功德、必ず共に利益洪大無邊でござりませう。
粂村　左樣なれば、今日はこれにて失禮を。
柳全　お目立ちましてはと御見送りを差控へまする、混雜の折柄お氣をつけられて。
粂村　忝けなうござりまする。
柳全　お供方御苦勞……。
粂村　御院主によろしく。
柳全　御機嫌よろしく。
（と釣鐘……落花する。）
粂村　（空を見上げ）オ、散るは〳〵、まるで吹雪と渦卷いて、花の命も人間の命も……
柳全　エッ！
粂村　イエ、罪な嵐でござりまするなア、おさらば……
（と氣を變へ先に供廻り一同を連れて向うへ入る。）
（柳全後を見送り。）
柳全　禮儀作法は云ふに及ばず、物腰格好褄外れ、自然と備はる氣高さは、御本丸か西丸か、大々名の御主殿か、明かさぬだけに尙更奧床しい、歲は二十歲を三ツ四ツ、艶と齊の乘り盛り、チッ椎茸髱には惜しい物だが。
（上手より以前の頁眞が駈け出で。）
頁眞　御納所々々、柳全殿！
柳全　（ハッとして）エ、ッ吃驚致した何か用か。
頁眞　お上人樣が芝口へ、お出掛けに成りまする。
柳全　オ、それは。
（上手より院主、日當緋の法衣に金襴の袈裟、水晶の珠數を持ち、續いて所化妙光、外二人（これに頁眞が加はり四人になる）供侍一人を引連れ出で來る、侍は

附際より向うへ。）
侍　お乘物……。
揚幕にて聲　ハッ……。
柳全　芝口までとは餘程の道程、遠路御苦勞に存じまする。
日當　何の〳〵、宗法の榮えは高祖菩薩の導き、更に苦勞とも存ぜぬが、外ならぬお係り寺社奉行のお屋敷へ、痲疹新禱のお招きとは。
柳全　では汐留の、脇坂樣でござりまするか。
日當　されば、聊か合點は參らねど、脇坂家は愚か如何なる高貴の御前なりとて、此の身に心に一點のやましい影を有たぬ氣安さ、本門法華經の行者お弟子日當坊と名乘つて通るまでの事、必らず心配いたさぬやう。
（下手より以前のおころが窺ひ出てツカ〳〵と駈け寄り。）
おころ　丑之助樣！（と法衣の袖を取る）
日當　アッ！（と愕き振り拂ひ法衣の袖で見ぬやうに遮ぎる）
おころ　貴郎！（と、また駈寄る）
柳全　コーレ！（と引戻し袖で圍ふ）
（日當ギックリ、靜かに珠數にて身體を拂ひ、往き掛る。）
（柳全の袖の蔭にておころ、ワッと泣く。）
（日當思入れ。）
（珠數を持直す。）
（木の頭。）
（おころ泣き入る。）
柳全　叱ッ！　叱ッ〳〵。（と制しながら見送る）
（日當先きに所化、侍一同向うへ入る。同時にツナギ幕を引きつける。）

序幕返し

芝口脇坂家上屋敷離座敷

前場と同日、夕方前より日の暮れる頃。

正面、藁葺屋根の風雅なる座敷、庇附き三方廻り椽（並二重）兩方とも椽の突當り袖戸の出入、座敷正面上手床の間、下手は壁にて瓦洞口に襖の出入、上手横椽側にだけ障子を建てる。

座敷の下手は廣く汐入の泉水を見せ、下手より石橋を架け、泉水の周圍凡べて山吹の満開、橋の下手奥は磨竹の塀、僅かに座敷が見える。

座敷の上手は惣植込、雪見燈籠、稍大きな椿の樹、花

が赤く咲いて居り、飛石傳ひに上手へ出入、その他手水鉢、いろ／＼の植木、飛石、沓脱石、橋の袂に青柳が一本水に枝垂れてゐる。

（座敷に町奉行根岸肥前守が、脇坂の家臣鹽山喜内と對談中の體、琴胡弓の合奏が聞えて幕明く。）

鹽山　長々とお待せ致しまして恐縮に存じまする。

根岸　イヤ／＼御病中とは存じながら、お招きに依つて取敢へず推參致した、シテ昨今の御容態は。

鹽山　お蔭を持ちまして最早や全快同樣にござりまする。

根岸　それは大慶、時に先程より風のまにまに妙なる音色の聞えるは？

鹽山　お濱御殿に大奥の女中達が汐干狩の催しかに聞き及びまする。

根岸　如何樣汐干、泰平の世の春は一段と長閑ぢやな。

（正面瓦洞口より寺社奉行脇坂淡路守、小姓甲が褥、同じく乙が脇息を持ち出て來り、席を造る。）

脇坂　お待せ申した。

根岸　オヽツこれは／＼。

脇坂　病中、失禮を仕つる。

根岸　お構ひなく、併し御血色も餘程お見直し申したやうで。

脇坂　マヅ、此分なれば命に別條もござるまいて、ハハ、ハ。

根岸　ハハヽヽヽ。（と座につく）

（小姓一禮して入る。）

脇坂　喜内。

鹽山　ハヽツ。

脇坂　祈禱の修法が相濟んだら、かの僧をこれへ案内致すやう。

鹽山　畏りました、御免。

（と根岸に一禮し、緣側下手奥へ入る。）

根岸　委細御書状にて拜見仕つたがいよ／＼當人をお召出しに相成りましたな。

脇坂　それも役儀の表からでなく、祈禱に事寄せ人物を、試した上にと存じての小細工。

根岸　何樣世上の取沙汰に依れば、餘程怪しき振舞もある樣子、毫頭の油斷もなりませぬ。

脇坂　サヽ、その取沙汰が噓か眞か、實否はやがて目の前。

根岸　尙お心得のため一應お耳に入れ置きまするが、彼奴近頃では堂内へ數多の婦人を曳入れて、色慾の兩道、言語道斷沙汰の限りの破戒無殘を行ひ居る由。

脇坂　それも薄々存ぜぬではない、取別けて戒律嚴しき宗門にて、女犯の罪とは容易ならぬ次第、マヅ百聞は一見

の譬へ、銀か錫かお互ひの眼力。

根岸　役目違ひとは申せ、我等にとつても此上なき後學と成り申さう。

（下手より鹽山が先に日當が出る。）

鹽山　仰せに從ひ、彼の御僧を御案内仕りました。

（鹽山椽先に近づき。）

脇坂　苦しうない、これへ／＼。

鹽山　イザ、お席へ。

日當　御案内、御苦勞に存じまする。

（鹽山下手へ入る。）

根岸　サヽ、ズツと是れへ。

日當　失禮を仕りまする。

（日當末座に着き頭を下げる。）

（鶯の聲、琴の音。）

脇坂　宜う見えたの、予は寺社奉行脇坂淡路守ぢや。

根岸　我等は町奉行勤役罷りある根岸肥前守、確と見知り置かるゝやう。

日當　ハヽツ、これは／＼思ひがけなきお召し出しに預り、お歷々樣お目通り仰せ附けられましたる段、沙門身に取り、大慶何物かこれに過ぎませうや、申し後れました、拙僧儀は谷中寶珠山延命院々主日當、以後お見知り置き下さりますやう。

脇坂　別けて只今は、有難き祈禱の修法、大儀に存じ申す。

日當　恐れ入りまする。

脇坂　就ては誠に宜い折柄、近附きかた／＼粗茶一服進ぜやうと存じての。（と手を鳴らす）

（椽側下手奥より茶坊主林齊出て來り。）

林齊　お召し。

脇坂　コレよ、上人に一服參らせい。

林齊　畏りました。

（林齊、奥へ入る。）

脇坂　さて、今日は寺社奉行とか町奉行とか申す堅苦しい、表立ての役儀格式は別と致し、只の脇坂、唯の根岸で打寛ろぎ、罪も他愛もない言葉敵に相成らうと存じ申すが。

根岸　それは／＼打解けての交はりにこそ、自ら眞の親しみも生ずる道理、上人にも萬事心措きなく。

日當　御懇の仰せ、冥加至極に存じまする。

（下手奥椽側より林齊茶碗を帛紗に乘せ持出て日當の前に置く。）

（日當徐かに飲み終る、と直ぐ林齊受取り下手奥へ入る。）

根岸　時に上人は、當年何歳に成らるゝな。

日當　二十四歳にござりまする。

脇坂　若いな、佛門の修業もマダこれからぢや。
根岸　何歳にして剃髪得度致された?
日當　十六歳にして双親に死別れ、寄る邊なき身を御佛の法衣の袖に救はれまして、先代院主日曉の徒弟と相成り、初めて法華の行法に入りました。
脇坂　シテその法門修業の次第は?
日當　初め、赤坂圓通寺において學ぶこと二年、更に本山たる京都妙顯寺の僧堂に入つて、マヅ觀心本尊鈔守護國家鈔その外三百有餘卷の教義に祖師の高徳無邊なることを悟り、師の坊病氣の知らせに依つて歸山いたしたが二十一歳の折。
根岸　院主を繼承せられしは?
日當　それも同年、師の坊示寂せられしに就き觸れ頭たる谷中瑞林寺よりして公儀、お係りへ願ひを立て、法燈相次ぎ十六代の院主と相成る。
脇坂　延命院草創の來由はの?
日當　素、眞言宗寶珠寺の遺跡なるが故に、用ひて山號を寶珠山と稱へ、慶安元年開基日長甫めて一字を建立致した。
根岸　境内に安置せらるゝ七面天女の緣起と申すは?
日當　それぞ日蓮法華の守護神にして、慶安三年、御本丸大奥の老女三澤の局、心願に依つて甲州身延七面山に一千日の參籠中、或る夜の靈夢に龍の鱗一枚を感得し、これを境内にて七面大明神として勸請仕つた。
脇坂　上人々々!
日當　ハッ。
脇坂　其許の宗門において祕法とか祕密とか人に知らさぬ不思議の祕行もあるやに承はるが、それは如何やうな儀を申すのぢやな。
日當　お尋ねではござりまするが、祕法、祕密はこれ畢竟ずる心に映る影にして、行ひの上の形にあらず、三大の祕法は乃ち法華經の根本にして、又宗教の五綱ともいひ、七字の題目にも八軸の祕奥を包む、皆、教への上より說きましたる稱へかと心得まする。
根岸　次手ながら貴僧の昔のお身分は?
日當　ハッ。(當惑)
根岸　出世の土地は何處ぢや?
日當　生れは京の町、父は浪華の歌舞伎役者、拙僧幼少の砌りは子供役者として紅白粉に裝ひを凝し舞臺の上に立ちましたる、眞にお耻かしき身の素性、消えも入りたう存じまするが、お歷々樣お尋ねに對し、隱しまするも失禮、と只有りのまゝをお答へ仕りまする、その餘の事は幾重にも御賢察願はしう。(と差俯向く)
(兩人ソッと顏を見合はせる。)

脇坂　イヤ〳〵、人と人との交りに、身分素性の高下なぞは論外、卑下謙遜には及はぬこと。
根岸　我れながら持病の些と詮索が過ぎ申したの、上人、必らず意にかけられぬやう。
日當　どう仕りまして、出家の身には過越し方の、果敢ない夢でござりました。
（時計の音六ツ。）
脇坂　オ、暮六ツか。
日當　思はぬ長座、愚僧はこれにてお暇を。
根岸　モウ參らるゝか。
脇坂　何の風情もなく、却つて迷惑致されたであらうの。
日當　恐れ入りまする、失禮幾重にも、お許しを。（と立ち上り、縁から降りる）
（パタ〳〵と、椿の花落ちる。）
根岸　花の色香の美しさも一盛り、やがて腐れて落ち椿。
日當　エ、？（椿を見る）
根岸　醜い姿ぢや。
日當　これを三世の數相と申しまする、美しいが眞か、醜いが眞か、花の心は花より外に知る物なく、人の心は己れ自身に顧みるより外はござりますまい、御免下され。
（と悠々下手へ入る。）
根岸　さて、何と見らるゝ。
脇坂　マヅ尊公のお鑑定から。
根岸　イヤ〳〵、強てより相學のお嗜み深しと聞き及ぶ貴公樣の御批判は。
脇坂　人品骨格賤しからず、天晴器量あるべき才物、なれどその器量と申すが怖しい。
根岸　ウーム、デ此上の御才覺は？
脇坂　いよ〳〵我等が非常の奥の手、一兩日の内には何分かの處置をとり申さう。
根岸　さらば、他所ながらにお手際を拜見いたすとして、拙者も御免を蒙らう。
脇坂　御歸館とな、それは。（と手を鳴らす）
（下手より以前の鹽山が出て來る。）
鹽山　ハ、ア。
脇坂　玄關までお見送りを。
鹽山　心得ました、イザ。
根岸　大儀でござるな、御病中尙御大切に。
脇坂　失禮を仕る。
（鹽山先に根岸下手へ入る。）
（脇坂立て縁側へ出で。）
脇坂　オ、、長閑な裡にも一日々々と、焦立たしう春は暮れて逝く、あの老功な肥前守、役違ひの事に遠慮して、何にも云はずに立歸つたが、……さて此の上の取るべき

道は……。（と考へる）

（この内縁側上手奥より中老粂村、手雪洞を袖にて囲ひ、忍び足に出で来り、障子の蔭にて様子を窺ひゐ）

粂村　御前様。

脇坂　誰ぢや？

粂村　妾にござりまする。（と前へ出る）

脇坂　オヽ粂村であつたか。

粂村　延命院の上人様は。

脇坂　既に先刻、歸山致した。

粂村　恐れながら御前様、お思召の儀は？

脇坂　それに就て、近うよれ。

粂村　オヽ暗うなりましたに、マダ御灯も……

脇坂　イヽヤ宜い／＼、灯はなくとも話は解る、和女が日日の辛勞もさこそとは存じ居るが、天下萬民のため、寺社奉行といふ大役の表。

粂村　では飽くまでも日當上人を。

脇坂　疑うてかゝるも大事の上の大事と思へばこそぢや、初めて逢ふたる彼の相好、天停平かにして人中狭り、下層裕なるは人に敬ひ愛せらるゝの象、さり乍ら、瞼に薄き曇りを帯び、眼の内潤みて察官に亂れあり、遂に女色に身を滅ぼす。

粂村　エヽ女の色香に取亂し、あの命までも滅しまするとな。

脇坂　慘忍、邪婬の大惡相、此上は猶豫に及ばず、獣に齊しき彼奴が本性、延命院一山の加持祈禱の祕密を發らず曝き立て、日に物見せてくれようばかり、婦人の信仰特に篤く、通夜參籠に町家武家方の女達數多入込むなぞ、唯事ならざる世上の噂。

粂村　シテお召捕のお手筈は。

脇坂　組の與力に申しつけ、オッ取り圍んで只一網と、手配り萬端相定まつたが、此上は動かぬ證據、その糸口の蔓一筋。

粂村　御安心を遊ばしませ、それ程堅い思召となら、不束ながら粂村が、二ッなき身に代へまして。

脇坂　仕遂げて見せるか。

粂村　幸い明夜は滿願の　お籠り、その節屹と賣僧の祕密を。

脇坂　なれども彼は悧巧者、只かりそめの口先では、なう。

粂村　それも覺悟を致して居ります、婦女の身には男に負けぬ強い力がござりまする。

脇坂　さては愈々。

粂村　忠義の爲めには代へられませぬ。（泣く）

脇坂　左様か、よく申しくれた、過分に存ずる、此度の手

衲は淡路守の働きでたく和女の賜物、これにて寺社奉行勤役以來の御奉公も出來ると申すもの、改めて禮を申す。
粂村　それは餘りに恐れ多く、勿體なう存じまする。
脇坂　（脇差を抜き）女一生に一度の大役、予が餞別ぢや。
（粂村に與へる）
粂村　（押戴き）天下の爲めにお盡し遊ばします御前樣の御心に肖かりますやう、有難く頂戴いたしまする。
脇坂　恁樣な所に何時まで長話も致し居られまい、人目にかゝらぬ内、部屋へ退つて休息いたすがよい。
粂村　ハイ。
（上手奥より、家來一人出て來り。）
家來　ア、御前、マダ此方にお在でゝございますか、エ、御灯の用意を……
脇坂　それには及ぶまい。
家來　ハツ。
脇坂　何か用か。
家來　お食事の用意が整ひまして。
脇坂　オヽ、デハ居間へ歸つて。
家來　お供を仕りまする。
（脇坂、思ひを殘し家來を連れて上手奥へ入る。）
粂村　（脇差を取直し）四年以來お仕へ申したこのお邸の御奉公も、後一日……明日の夜半に見る事は、地獄か、但しは極樂か。（脇差を抜いて見入る）
（瓦洞口が開いて脇坂が樣子を窺ふ。粂村偶と顏見合はせ、愕いて雪洞を吹き消す。）
（木の頭。）
（瓦洞口閉る。）
（粂村鞘に納め、脇差を抱へて思入れ。）
（誂への鳴物、拍子木。）

――幕――

二幕目

延命院祖師堂内陣の裏座敷

前幕の翌日、春の夜五ツ時より。
前側、總欄間、正面眞中が貼壁、所々に御簾の掛りし黑塗の日く窓、その上手が床の間、貼壁の上手は奥に廊下（上、下へ通ふ）を見せ、その向ふ内陣の裏手の壁、黑塗の櫺窓。
上手横、同じく櫺窓に貼壁。
下手横同じく壁にて、下部が押入、大形の襖戸、その下手が杉戸の出入、鐵の金網の行燈。
所化頁眞、妙光が差向ひになり机の上にて守札を折り

重ねてゐる。
　片隅に常盤津色文字が真鍮を控へ、真を燻らして居る。
　　題目の拍子木だけ聞えて幕明く。
真眞　妙光さん、兎に角、是れ位にして置いて御納所に見て貰ひませう。
妙光　天氣の悪い故か、今夜は大分參詣が少ないやうぢやな。
色文字　マア、これでお詣りが少ないんですつて。
妙光　多い時にはこの本堂へ一杯、足も踏み込めないやうに成りまする。
色文字　へー、驚きましたねエ、何といふ素晴らしい人氣なんだらう、淺草の太郎稻荷様だつて、恁んなではありませんからねエ。
真眞　色文字さん、只今お說法が初まつて居りますから、御聽聞なされては。
色文字　嫌な事〳〵妾お說敎なんか眞ツ平ですよ、お祖師様の信心よりは、お上人様のお顔を見に來るんだから。
妙光　コレは怪しからぬ。
色文字　價値さ、あれでお上人様か、モツと小意氣だと、ネエそれこそウントお詣りがあるんだが、顔に似合はぬ野暮堅いつたら全く始末に終へないんだからネエ。
真眞　アア若し左樣なお話は。
色文字　アラ不可ないの？
妙光　茲は御本堂の內で御座いますから。
色文字　オーヤオヤ師匠が師匠ならお弟子も御弟子、粹も甘いもありやアしない。
　（廊下の上手より弟子の娘△、□が顏を出し。）
△　アラお師匠さんはマタ恁んな所に。
□　早く彼方へ被來いよう。
色文字　ダツテさ、舞臺ばかりぢや詰らない、恁うして楽屋へ入浸るのが眞の贔屓と云ふ物なんだよ。
△　皆も待つてゐるんだから。
□　妾達と一緒に行きませう。
色文字　仕樣がないねえ、岡惚も三年つて事があるからマア、穴の開く程お上人の顔見たゞけで得心するか。
△　サア早く〳〵。
色文字　今往きますよ、アイ大きにお邪魔をいたしました。
　（と立上り△、□と共に廊下を上手に入る。）
真眞　彼の女は何處から來るのであらう。
妙光　金杉邊とか云ふ事だが、色狂人にも困つたものぢや。
真眞　困ると云へば彼のやうな嫌らしい參詣人が、多くなる程お上人様の御機嫌が悪るくなる。

妙光　然うぢや、近頃はとんと浮かぬ顔、何か大きな心配事でもお有りなさるのではなからうか。

亘眞　どうぞお身體に障りなぞしなければ宜いがなア。

（下手の杉戸を開けて寺男銀兵衛が出て來り。）

銀兵衛　ハテナ、此方にも、居ねえやうだなア。

妙光　爺や、今頃に居ないとは何がぢや。

銀兵衛　彼のおころと云ふ娘つ子が、マタ部屋ン中から飛び出したんだ。

亘眞　オヽ、そのおころとかいふ娘なら、ツイヨの暮前、題目石の蔭で柳全さんとタッタ二人立噺しをして居たやうだが。

銀兵衛　へー、納所様と、所かその納所様も急に何處かへ出かけなすつたか、庫裏にも姿が見えないのでネ。

（上手奥にて大勢の參詣者が口々に題目を唱へる聲。）

妙光　どうやらお說法もお仕舞になつたらしいな。

銀兵衛　おやアソロ〳〵お夜食の支度に掛るとして、始末に終へねえ厄介娘、餘計な世話まで燒かせやアがる。

（と銀兵衛つぶやきながら杉戸の内へ入る。）

亘眞　デハ私達もこの間に一休み。

妙光　彼方で暫く、寛ぎませう。

（兩人打連れ廊下を下手へ入る。）

（題目太鼓。）

（杉戸を開けて納所柳全が健か酒に醉ひ、貧乏徳利を法衣の下に隱し態とらしう裝うて出て來り。）

柳全　大層森然いたして居ると思つたら、ナ誰も居ない、所化達はド何う致したのだ、ウーイ。（と押入へ目を注け、襖戸へ手を觸れようとする）

（ハズミに杉戸より銀兵衛が、茶碗へ水を入れ、片手に風呂敷包みを携げて顔を出し。）

銀兵衛　納所様！

（柳全驚き押入の前に坐る。）

銀兵衛　お冷水を持つて參りました。

柳全　銀兵衛か、や忝けない、（受取つて飲み）アー美味いな、正に甘露。（飲み干す）

銀兵衛　それにタッた今、お前様の後から、見た事もねえ妙な男が、これを納所様にお屆け申してくれと、包みのまゝで置いて往きました。

柳全　解つた〳〵、イヤ宜しい確かに受取つた御苦勞御苦勞。

銀兵衛　ダガお前様、今夜は御酒を召上つていらつしやる御様子。

柳全　（空嘯き）左様かな。

銀兵衛　左様かなでは御座いません、假且にも大切な御說最中に。

柳全　般若湯か不可ぬと申すのか。
銀兵衛　お宗旨の事は何も彼も、よく御存じのお前様からして、左様なことをなされてはお上人様に濟みますまいかと。
柳全　ウ煩いな、宗門の講釋を寺男の貴様風情に聞かせて貰ふ柳全ではない、白痴奴。
銀兵衛　へイ、オ、お氣に觸りましたらどうかまア御勘辨下さいますやう。
柳全　餘計な世話を燒く暇に、部屋へ歸つて内職の、草鞋の紐でも綯ふがよいわ、退れ〱。
銀兵衛　失禮な事を申しました、御免下さいまし。（往さかゝる）
柳全　待て〱銀兵衛。
銀兵衛　へイ。
柳全　何日もの、ソラ、美しい奧女中な。
銀兵衛　へイ〱日參をなさる、お局樣でございますか。
柳全　今夜も定めし、御參詣になつて居るであらうな。
銀兵衛　宵の裡からお見えで御座います。
柳全　一七日滿願のお通夜か、イヤ退つて宜しい。
銀兵衛　左樣でございますか。
（銀兵衛始終柳全の擧動を怪しみながら杉戸の内へ入る。）

柳全　ウーイ、近頃になくいゝ氣持だ、どの道今夜は一か八か、破れかぶれの法衣の袖、どれ。（袖を捲り、胡座を掻き、徳利を出して手酌で茶碗に注ぎ、飲み初める）
（廊下の上手より院主日當、今夜法を終りし體にて出で來り、偶と柳全を見て、立ち縮む。）
柳全　オ、之はお上人、エ、日々の御修法、ゴ御苦勞千萬に存じまする。
日當　柳全此方、場所柄の辨へもなく、この光景は？
柳全　ハ、、、イヤ何とも早や、實は先刻、久し振りにて小林平兵衛と申す昔の友人が訪ね參り、餘りのなつかしさツイ門前の煮賣店にて一盞飲み交し、その節お上人が日夜の御戒行、定めて御疲れの程もとお察し申し、お氣晴しにと御覽の通り需めて參つた般若湯、御鬱散のため、一口きこし召されては。
日當　何、愚僧に飲めとな！
柳全　柳全、オ、お酌を仕りまする。
（ト茶碗を出す。）
日當　さては此方、この日當に目前、五戒を破れと申すのぢやな。
柳全　ドド、どう仕まりして、御意に召さぬを承知の上、強つてとは申しませぬが、お上人へ、俄坊主の柳全は在家の凡夫も同じこと、好きな酒でも飲まねえぢやアムシ

ヤクシヤ肚が治まりませんからねえ。
日當　デハ大枚の金子の強請を斷つた、愚僧へ對しての面當てにか。
柳全　然う氣取られては是非がねえ、眉毛に火のつく金の工面、モシお上人樣、ぢやア百兩金のお願ひは、何うしても出來ねえとお斷りなさるので御座いますか。
日當　コレ其方も納所を預かつて大抵樣子は解りもしよう、檀家と申せば數へる程、別に寺領のあるではなし、寄進供物の賽錢の上りも乏しい貧乏寺、今度の痲疹の祈禱にせよ、愚僧は強ち利慾の爲めにするのでなく、諸人の難儀を助けよう眞實の慈悲心から。
柳全　勿體ねえなア、貴い佛の御心と申すのでハ、、、併しながらお上人、眞の御慈悲か存じませぬが、今度の祈禱で一儲けと仕組みを立てたは此の柳全。
日當　それも諸入費差ッ引いて若干か手許へ殘つた中を、右から左へ三兩貸せ、五兩貸せとの此方の無心、が積つて彼是二十兩。
柳全　フーム、ぢやア御院主、お前樣それを今更洗ひ立てして、愛想盡しをしようと成さるんだね。
日當　何の／＼此方に愛想は盡かさねども、金子の事は此場限り、キツパリとお斷り申す。
柳全　默らつせい。

日當　ウム……？
柳全　ヤイ日當、汝昔を忘れたのか？　圓い頭で緋の法衣に鷹爪らしく珠數を爪繰り、今日蓮だのイヤ活佛だのと、人に敬ひ崇まれる、その化の皮を引つ剝がして汝の舊惡洗えざれえ。
日當　コレ柳、ナ、ナ何を申す。（廊下へ氣を配る）
柳全　ビク／＼するねえ、納所坊主の柳全なら斯んな御託は吐かねえが、還俗すりやア天下の直參、御家人習田長十郎、拙者は武士だぞ。
日當　ヘイ。
柳全　汝如きの青二才、一夜造りの賣僧野郞に、安く見られて堪る物か、こう日當、ヤレ道心堅固たの、イヤ戒律不犯だのと、口幅つてえ汝の蔭の行爲を、今日の前にさらけ出し、破戒無殘の動かぬ證據を見せてやるから待つてゐろ。
日當　ナニ愚僧を破戒だ、無殘だとは？
柳全　無殘も無殘、女犯の亂行。（押入の戸を開ける）
（中よりおころが轉び出で。）
おころ　お上人樣。
日當　アツ！
おころ　逢ひたかつた、逢ひたかつた／＼。（おころ夢中になつて日當に取縋る）

日當　和女はおころ殿、何うして今頃斯樣な所に。
おころ　どうも斯うも有やアしない、急に逢ひたくなつて逢ひたくつて、それこそ妾堪らなくたつたから貴僧の傍へ附いてゐる氣で昨日から。
日當　（法衣の袖を拂ひ）何を馴々しい戲れ言、コレ、左樣なことは申さぬもの。
おころ　イ、エ串談では有りません、お別れ申してそれから後は每日夢にも現にも、貴僧ばかりを思ひ通して忘れる暇のない妾、可哀想だと思召して。
柳全　どうだ生臭、此奴ばかりは拔差なるめえ。
おころ　戀しい、戀しいお上人樣。（おころ又傍へ寄る）
日當　（突退け）エ、ツ寄るな、寄てはならぬ、戒行未熟の日當なれども、淫らがましき女人の近附きなぞさらさら此身に覺えはない。
おころ　イ、エ、イ、エそれは御卑怯、薄情といふもの、今更妾を知らないなぞと。
日當　成程此方は幼少よりの見知越し幼馴染と申すまで、その後お目に掛つたなれど。
おころ　えゝその時に、その時に……
日當　イ、ヤ別段深い親しみが有らう筈なき我等に對し、夢にも覺えぬ云ひかかりは、僧侶の身として眞に迷惑！
おころ　何の、それは嘘、皆な嘘。

日當　愚僧が嘘を申したと……。
おころ　去年下谷の伯母さんの宅で、圖らずお出逢ひ申した時、貴僧は優しいそのお口から妾を染々可愛い娘ぢやと。
日當　馬鹿な、馬鹿な、何といふ恐ろしい僞りを。
おころ　モウ、恁うなつたら妾、離れやしない、離れやしない、死んでもお傍を離れやしない。（ト又縋りつく）
日當　（おころを取つて押へて）清淨無色に身を固め、專念法華の行者たる此日當を生きながらに、十惡五逆の畜生道へ蹴落さんとする、世にも情ない淫猥しい企圖、汝は惡魔、夜叉、外道奴。（おころを疊に捺付け思はず珠數を振り上げる）
柳全　ヤイ待て、汝その娘をどうするつもりだ。
日當　アッ。（振り上げた手を下す）
柳全　今振り上げた珠數の手は何だ。
日當　アッ。
柳全　上行菩薩を拜んだ手で纖弱い女を打擲するのが、正しい僧侶の行ひか、毆るなら毆れ、殺すなら殺して見ろ、サア打て、ナゼ打たネエ、女が怖くて打てねえのか。
日當　ウーム、ア、仕方はねえ（苦しみ、力なくおころを突放して涙を拭ひ氣を變へ）モシ、岩田の旦那へ。
柳全　何？

日當　仕方アございません、モウ此上は、延命院の院主日當でなく、ヘイ昔ながらの歌舞伎役者丑之助になつてお話を致します、どうかマア私のいふ事をお聞きなすつてお吳んなさい。

柳全　之ぢやア面白い、汝がソコまで碎けて出れやア長十郎何にも申すまい、どんな事だか云つて見ろ。

日當　ネエ旦那へ、御承知の通り丑之助は肚ン中からの役者氣質、年端のいかねえ時分から色の戀のと面白可笑しく淫な眞似を仕つくした揚句が、お定まりの三陀羅煩惱、女を蕩すばかりでなく、種んな惡事に此の首はダン〳〵細くなつて來る、此奴ア何うやら世の中が剱呑だと、怖氣え慄つて居る矢先へ、親父が死んでしまひまして。

柳全　それは拙者も存じてゐる。

日當　母親の方は疾に亡くなつたし惡黨にも似合はねえ、變に心細いやうな氣が出ると、今度は我身のして來たことが怖くなり、或賣卜者に見て貰つた所が、お前さんには女難の相がある。

柳全　ハヽヽ、色男は違つたもんだなア。

日當　茶化しては不可ません、油斷をすると女のために懸替のねえ命まで亡くなると、言はれた言葉がこの胸へピーンと徹へたんでソコで生涯女には緣を有たねえ、出家になつて佛門へ入らう、一つは吾身の罪障消滅親兄弟の後世の菩提と、かう考へて此寺へは飛び込ましたが其日を限り、之ぢや嘘でも、僞りでもございませんよ、馴れない修業やお經の稽古に骨ざつぱらの憂い辛い目、五戒を守つて一生懸命、艱難苦勞をした甲斐にヤッと是まで漕ぎつけて來ましたが、ネエ、それに今更旦那の口から昔の疵を突つかれ、此の娘つ子からは覺えもねえ女犯の寃罪を云ひ立てられ、是が世間へ表向きに取り沙汰をされた曉の、私の身體はどうなりませう。

柳全　ウム！

日當　永エ月日の辛抱苦勞も水の泡、それこそ泣くにも泣かれません……ネエ旦那、後生なんで、可哀想な坊主を一人救つてやらう不憫がつてやらうと思召し、今夜のところは何分にも御勘辨を下さいますやう……

柳全　ぢや一切何にも云はねえで、許してくれと申すのだな。

日當　兩手を突いて此の通りお願ひを申上げます、おころさん、お前さんにも日當が折入つてお願ひ申す。

おころ　でも妾は眞實貴僧の事を、ソそれに茲へは柳全樣が入つて居らうと被仰つて。

柳全　えゝつ、ベラ〳〵と汝の口を出す幕ぢやアねえ。

おころ　ダツて妾の賴んだ首尾を……。

柳全　引込んで居ろい、所で成程巧えものだなア。

日當　えつ？
柳全　汝は役者だ、芝居はお手のもの、涙を流して俺達兩人を泣き落しの手にかけやうたつてドッコイ然うは拔けさせねえ、そりやア成程、拙者にしてもよく〳〵深え緣なればこそ、身の置所のねえ中から汝を使つて此の寺へ納所奉公、幾らか恩義はあるにもせよ、それとこれとの咄しは別物、岩田長十郎の口一つが左程劍呑だと思つたら、小判を詰めて盞をしろ、高が百兩かけ引なしだ。
日當　サーそれが手元にある位なら、七重の膝を八重には折りません。
柳全　何たなアオッ、宜い惡黨にも似合はねえ、意氣地のねえ事を申すなよ、譬へにも云ふ通り坊主丸儲けと、百兩は愚か三百兩か五百兩でも、ツイ目の前に轉がつてゐるんだ。
日當　百兩の金が目の前に……
柳全　解らなけりやア訓讀してやるが、姐や。
おころ　え、妾……
柳全　誰ぞ來ねえか、暫く廊下を見張つてゐてくれ。
おころ　アイ。（と廊下へ出る）
柳全　談は內證だ、耳を貸しねえ。（と日當に囁く）
柳全　ナ、とマア云つた寸法よ。（囁きつゞける）
日當　（吃驚）ゲッ、あの滿願の與女中を……
おころ　え、女中？（おころ屹つとなる）
柳全　どうだ一番、この柳全を軍師に使つて女人濟度の生佛と榮華の花を咲かせて見るか、但しいやなら俺の口から、人の知らねえ汝の惡事を根こそげ世間へ云ひ觸らせる、マタ一方には此の娘が戀の叶はぬ意趣晴しに、女犯の罪を吹聽すれやア、汝の身體もこの延命院の屋臺骨も骨灰微塵に碎けて奈落へ眞逆樣、オイ姐や〳〵和女だつて此程まで戀慕つてゐる坊さんに見棄てられては此まゝに泣いて我慢も出來ねえだらう。
おころ　當り前さ、お上人樣に嫌はれたら妾や面當に茲のお寺でシ死んでやるから。
日當　えゝつ。（擽とする）
柳全　さ、戀と無情の追分道。
おころ　（泣く）妾は生きるか死ぬるかの境。
柳全　何方へ足を踏み出すんだ。
日當　ウム、祖師の利益に見放されたが絕對絕命、（ト珠數の緖を切り）八萬地獄へ一足飛び、旦那一杯頂きませう。（ト胡座になる）
柳全　それぢやア汝。（茶碗を指す）
日當　おころさん、酌をたのむぜ。
おころ　アイ。
（トおころ酌をする。）

日當　法華行者の日當から、今業平の丑之助へ還俗すりやア氣が強い、オツ柳全、そウ手前なんぞに這屈み泣つ面下げちやア居ねえんだぞ。
柳全　ぢやアオやるか、やるのか。
日當　どんな種でも持つて來い、只一口に咬み碎き、片つ端から料つて見せらア。
柳全　（と飛上り）偉え、偉え腕も度胸も天下一後光の射した大惡黨、話が極まりや祝ひの印、之を下物で後で一杯（風呂敷の中より山鳥の死骸を取出し）ソーラ、燒いて食ふとも、煮て食ふとも今が宵の乘り盛り。
日當　殺生次手にこの命鳥。
（おころを引寄せる。）
おころ　えゝつ。
日當　安心をしねえ、今から昔の丑之助だ、幼馴染の和女とも、仲よくしようぜ。
おころ　それで妾の嬉しい願も。
（上手奧にて。）
粂村の聲　お上人樣、お上人樣。
柳全　ア、あの聲は……
日當　通夜のお女中。
柳全　ゲ、ツ、其奴ア大變、オツ姐や、和女は暫く外した外した院主、宜いかい、德利を早く片付けてくれよ姐やア此方だ。
おころ　だつて妾は……
柳全　えゝツ愚圖々々しちやア居られねえんだ。
（柳全、無理におころを杉戸の中へ押入れ居住居を直す。）
（日當は德利、山鳥を押入へ仕舞ひなぞする。）
（奧女中粂村廊下の上手より出で來り。）
粂村　御院主樣、柳全樣もこれにお在でござりましたか。
柳全　オヽ〳〵これはお局、日々遠路の御參詣、イヤ御奇特に存じまする、別けて今宵は御滿願、定めし御利益も洪大と先づ以て祝着申上げまする。
粂村　お蔭を持ちまして、代參の儀も滯りなく相濟み、主人の心願もどうやら成就に近づきました、これ皆高祖大菩薩の御加護、二つにはお上人樣お骨折、その御禮のため今宵一夜の參籠にござります。
日當　その並々ならぬ御信心に、やがて妙法蓮華の花咲き實をも結びませう、これを佛果と申しまする、皆具圓滿。
粂村　就きましてはかね〳〵仰せられましたる八軸祕法の御祈禱を、是非御修法下さりまするやう。
日當　そりや宗門の三大祕法をそれ程までに御所望とな。
粂村　所望いたさねばなりませぬ、命にかけての信心でござりますもの。

柳全　如何様これはたゞあるべきこと、お上人様、善は急げでござりまするな。

日當　心得申した、さらば之より別室において……（立上る）

条村　いよ〳〵望みの時節到來。

柳全　えッ。

条村　嬉し涙が先に立ち。（泣く）

日當　（苦悶）愚僧は元の修羅煩惱。

条村　何と仰せられます。

日當　イヤ、素より煩惱即菩提、イザ、修法をいたし申さう。

条村　さらばお供を致しませう。

（銘々、それ〳〵思入れ、日當先に条村、廊下を下手に入る。）

（柳全、その後を窺ひ、元の座に復し、酒を飲み始める。杉戸が開けておころ駈け出て、廊下口を眺めシクシク泣き出す。）

柳全　オヤ、どうした、何が悲しくつて泣いてゐるんだ。

おころ　妾、口惜しい、どう、どう考へても……

柳全　口惜しい？

おころ　妾の大事なお上人様を、彼へ一時半時だつて、あんな、あんな綺麗なお女中なんかの自まゝにはさせられない、妾や嫌だ〳〵〳〵。

柳全　冗、冗談云つちやアいけねえ、な、俺が昨日から、あれ程諄く云つて聞かせてあるぢやアねえか、今夜を無事に過したら、明日からきつとお上人の身體はお前一人の好き自由、それを承知で先刻のやうにあんな色つぽい言ひがかりをつけ、俺が敎へてやつた通りにさんざお上人を困らせたんぢやアねえか。

おころ　先刻はその氣でゐたんだけれど、考へて見れば口惜しくつて、口惜しくつて、立つても居ても居られない、矢張り妾やア嫌なんだから。

柳全　今になつてお前、そんな無理を云つたつて仕やうはねえ。

おころ　えゝもう此上はどうしてやらう、どうしてやらう、さうだ、これから妾、お上人の傍に附會て居て。……

柳全　げツ。

おころ　離れやしない、眞實に離れやしない、意地から邪魔をしてやるんだ他に仕様はありやしない、さうだ。（と廊下へ駈け出す）

柳全　（驚き）エ、何、何をしやアがるんだ。（と引き戻す）

（おころよろめき押入の前へ倒れる、氣注いて押入の中より刀を取出し。）

おころ　止めたつて止る物か、恨めしいとも惜いのは彼の奥女中の奴、いつそ殺して。（駈け出す）

柳全　エヽ、ツ座出蹴るねえ、此の阿魔つ女奴……第一危い……

おころ　イイえ、往かして、往かしておくれ。

柳全　何をいふんだ刃物が危ねえ、離せよ。

おころ　往かせて……。

柳全　えゝ、離せつたら……。

おころ　死んでも妾……。

柳全　邪、邪魔するねえ。

（と突放す、おころは刀の鞘だけ抱いて下手へ倒れ泣き入る、柳全の手に白刃が殘り、廊下の敷居際に突立つ。この見得よろしく、雨の音にて。）

（道具廻る）

二幕目

同じく院主日當の居間

正面、上手に床の間、違ひ棚、下手が二枚建の大形な襖、上手横は蓮台の書院障子、それを開けると内縁、雨戸が締まつてゐる、下手横は襖、衣桁に緋の法衣が掛つて居り、宜き所に青きもじ張りの西瓜行燈が點つてゐる、床の間に髭題目の掛軸傍に經机、香爐、經文等。

雨の音が續いて。

道具納まる。

やがて正面の襖が開き日當、条村（好みの扮裝）が肩を並べ頭を垂れて思ひ／＼の考へに沈みながら出て來り。

条村　日當樣。

日當　条村殿。

条村　眞に女は罪深い者でござります。

日當　それを今更申されたとて。

条村　嬉しい悲しい妾の願ひは叶ひましたが、お痛はしい貴僧のお身の上。

日當　此方の色香に心を奪はれ、墮落いたしたこの身が、それ程までに淺猿しう見えまするか。

条村　そ、それは。（口籠る）

日當　昔は昔、法門に、精進持戒の難行苦行を此方樣の、情けに代へてタツタ今、貴き佛心佛性から、元の凡夫の惡業へ、還俗いたした此の日當、それを惜いの耻かしいのと何、何の後悔するどころか、マダ見ぬ眞如の月よりも、ツイ目の先の煩惱の花の眺めが嬉しい、法衣の下には人間の、温い血が通つて居りまする、シャカ此方樣ヨ

モヤ愚僧を此のまゝにお見棄てはなされまいなア。
粂村　まア水臭いその疑ひ、寧そお恨みに存じまする、見棄てねばこそ二世三世まで、添ひ遂げたいが妾の一念、互ひの心を結び合ふ、此上の願ひといふは。
日當　ナニ此上の願ひとは。
粂村　何にも云はずに日當様、お命を下さいませ。
日當　えゝッ！
粂村　お覺悟を。（と脇差を抜いて斬つてかゝる）
日當　（その手を捕へ）これは又近頃理不盡千萬、譯も話さず唐突に、愚僧の命が欲しいとは、此方、正氣の沙汰とも思はれぬが。
粂村　正氣、正氣、貴方様が只お愛しいばつかりに。
日當　ます／＼合點の往かぬ言葉、してその仔細は。
粂村　申し日當様、この粂村は貴僧の御本心、イイエ今夜の深いお企圖を何も彼も、殘らず存じて居るのでございます。
日當　ゲツ？
粂村　サ、その淺猿しいお心を知つて居ながら彌増す思ひに、冥土へお連れ申さうとした、妾の素性を御存じでござりますか。
日當　うむ？
粂村　何處の何者ぢやと思召します？

日當　俺の本心、企圖を底の底まで知つて居るといふ此方は？
粂村　寺社奉行脇坂淡路守様お屋敷のお奥を勤める中老粂村、纖弱い女の耳一ッにて、當時世上に噂に高い延命院の祈禱の祕密、竝びに院主日當の身分素性を探らうための通夜日參、これ皆殿の内命により我身を捨てた忠義の働き、何と合點が參りましたか？
日當　何、寺社奉行の廻し者、あの脇坂の奥女中、……然うか、や其奴は夢にも知らなかつた、罠に掛けたと思ひの外、逆に一杯喰はされたはよく／＼此方が大間抜、ダガこの俺の素性まで、何處でどうして突き止めたのだ。
粂村　此方も悪黨のやうでもない、コレ、今夜本堂へ參詣の群衆に紛れて寺社方の與力同心、手先が大勢。
日當　ゲ、シ、失策つた。（と刀を逆手に屹つとなる）
粂村　而も先程、内陣の小座敷で、柳全との話のあらましを、通り掛つた障子越し、聞くともなしに妾の耳へ……況して女犯の生證據、既に合圖で捕方一同、出口々々を張り廻した上は、所詮は脱がれぬ此方の命、どうぞ妾と兩人一緒に死んで下され頼みまする。
日當　待つてくんねえ、マア鳥渡待つてくんねえ、成程女難に身を滅ぼすと易者の言葉に嘘はなかつた、其所まで八方拔目なくお手が廻りやアもう是れまで、どう手對ひ

の仕様もなし、娑婆の名殘と觀念して、器用にお繩を戴いた上、御牢屋敷の柳の下で、刀の錆になる身體、死ぬなと云つても生きられねえ先の詰つた俺の命だ、それに引換へお前の方は、大事な役目を仕終ふせたお手柄、こんな所で無駄死をしようなぞとは惡い了簡、今夜の事は假且の惡い夢だと諦めて。

条村　イヽエ妾は諦められない、忠義の道ももうこれまで、大事な役目を仕終ふせたからは、譬へ果敢ない契りにもせよ今から後、貴僧の情を身に沁み〴〵と女の操を大切に、死んで未來で添ひ遂げたい。

日當　ウム、世に怖ろしい惡黨と、知つて愛想を盡かさねえで、良人と思ひ貞女を立て、彼した佗な惡戯を眞の戀にしようといふのか。

条村　今夜の事は妾から、お詫び申さねばなりませぬ、可愛い良人を殺す女、嘸憎いと思召しませうが、貴僧に別れて唯一人殘つた此身はどうなります、せめて不愍と望みの通りに。

日當　然うか、よく云つて呉れた、一度濁つた俺の心は此方の眞で淨められたか、佛の德にも見放された日當、どう藻掻いたとて袋の鼠。

条村　せめて捕方の手の廻らぬ先。

日當　オ、死なう！

条村　死にませう。

日當　と云ひながら落ちつく先は、劍の山か火の車か。

条村　三惡道の苦しみも、厭はず夫婦一心同體。

日當　地水火風もやぶれ法衣（と衣桁の緋法衣を刀にて引裂き）形を變へて紅蓮の臺に。（と法衣を敷く）

条村　半座を別けて。（と經机を引寄せその法衣の上に坐る）

日當　必ず死出を迷ふたよ。

条村　三途の道を一足お先へ。

日當　直ぐに追つつく。

（この内、香を焚き、条村懷紙を口に啣む。）

日當　臨終の題目。

（と日當、条村の胸倉を摑んで片手に脇差を構へ、顔見合す。）

（この模樣よろしく。）

（雨の音。）

（この道具廻る）

二幕目

同じく、裏手卯塔場

正面、背後一面の藪畳前に、大小いろ〳〵の墓石、輪塔なぞ、眞中少し下手に桔梗の井戸、上手、下手に二本の椎の樹。上手の端に寺の一部が少し見える。

雨、次第に歇むと。

蛙の聲。

（上手より寺男の銀兵衛バッチ笠を冠り尻端折り、手に「延命院」と記した弓張提燈を持ち、足駄穿きにて出て來り。）

銀兵衛　どうやら小歇みはしたやうだが、空ア眞暗、この鹽梅だと、容易に雨は上るまい、それに何だか寺の中が妙にザワザワするやうだが、物騒たから油斷は ならねえ、ドレ向うの方を一廻りして來よう、南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

（と下手へ入る。）

（直ぐ上手にて。）

聲　ウワー。

聲　キヤー。

（と二人續いて悲鳴、倒れる音。）

（納所柳全、着物は雨に濡れ雫、尻端折素跣足、拔身の一刀を提げ出で來り、椎の樹を小楯に四邊を窺ひ、探り足に井戸側へ近づき、釣瓶を汲み上げんとする、上手奥、墓の間より捕方三四人、地上を這つて窺ひ出る、柳全はつと氣がつき、井戸側を廻つて下手の椎の木の蔭へ隱れる。）

（凡て暗中の探り合ひ。）

捕手頭　オイ、オイ其處に居るなア誰だ。

捕手一　誰だ〳〵？

（ト、柳全、刀を背に廻し。）

柳全　ヘイ、ヘイ。

捕手頭　返辭だけちやア解らねエ汝（てめえ）何だ。

柳全　ワ、私でございます。

捕手頭　變な奴たなア、モツとハツキリ口を利け、ハツキリ。

柳全　ヘイ、エエ私、グ愚僧はその。

捕手頭　愚僧たア何だ？

柳全　ト、當山の納所坊主で、ヘイ。

捕手頭　納所だ？

柳全　柳全、ハイ柳全と申しまする。

捕手頭　何でもいゝから此方へ出ろ。

柳全　ナ、ナ、何か御、御用でございますか。

捕手頭　用があるから呼んで居るんだ、爰へ來い。

柳全　ヘイ。

捕手一　來ねエのか汝え。

柳全　イエ參ります、直ぐに參ります。

捕手頭　早くしろよ！

柳全　只今々々。

（ト、柳全忍び寄る。）

捕方一　何處だ〳〵。

捕方二　オい、何處にゐるんだ。

（と窺ひ寄る尖を、柳全不意に。）

柳全　茲だ！

（と斬りつけ、烏渡立廻り一二人傷つき、一同下手へ逃げ込む。）

（柳全ホッと息。）

（再び井戸側によりて片足かけ、釣瓶をあげて水を呑む、上手よりおころが轉び出で、口も利かずに這ひ廻る。）

柳全　（低聲）誰だ、オッ汝誰なんだ？

おころ　アア、死んぢまつた。

柳全　おころだな。

おころ　アア、お、お、お上人樣か先刻の女中と兩人とも、死んぢまつた〳〵。

柳全　ゲッ、日當が死んだ。

おころ　（大聲）オ、オ柳全さん！（と縋りつく）

（この内上手より目明し三四郎が忍び出で、後より柳全に組付く。）

柳全　オヤ、何をしやアがるんだ、エエッ。

（と刀で拂ふ、切尖がおころに當り。）

おころ　キヤッ。（と井戸側の蔭へ仆れる）

三四郎　神妙にしろ、御家人岩田長十郞御用だ。

柳全　ゲ、それが露顯しちやアモウこれまでだ野郞。（と組まれた腕を振り解く）

（上、下より捕方大勢、一度にかゝる、柳全大立廻り一同を追込み、上手椎の木に寄り凭れ。）

柳全　命延ひると文字に書く、寺の壽命も俺達の運もモウ駄目だ。

（捕方再び忍び寄り。）

柳全　アッ。

捕方一　御用！

（柳全遂に繩に掛り。）

（三四郎駈出で。）

柳全　日當は巧え事をしやアがつたなア、畜生々々々々。

三四郎　神妙にしろい！

（と繩を曳く。）

（木の頭。）

柳全　へ、どいつとも儘にしやアがれ。

（地上を蟲がり廻る、下手より銀兵衛提灯をかざし窺ひ出る。）

（雨また降り出て。）

（この模様よろしく、拍子木。）

――幕――

中内蝶二篇

大尉の娘（一幕二場）

人

森田愼藏　豫備大尉
露子　森田の娘
川本吉藏　村長の兄
齋藤嘉兵衛　村の助役
おたき　隣家の女
竹三郎　おたきの子
村越乙吉　おたきの夫

所

信州木曾に近き△△村

時

或年の初夏

一　森田愼藏の家（夕）

道具帳に依る。

主人愼藏、二重上手の部屋にて障子を張つてゐる。獨身生活の寂しさと、侘しさとが現はれねばならぬ。格子戸を明けて、川本吉藏と、齋藤嘉兵衛がやつて來る。

齋藤　御免なさい。森田さんは御いでゝすか。ヤ、森田さん、齋藤ですよ。

森田　おゝ齋藤さんか、まアお上んなさい。

齋藤　森田先生、今日はね、一寸御引合せをしたい方がありましてな、それで伺つたのですよ。

森田　左樣ですか、サア何卒、貴君も、お上り下すつて、サア〳〵。

川本　ハイ〳〵、御免下さいませ。

森田　サア齋藤さんも何卒、サア〳〵。

齋藤　森田先生、此方に、アノ村長の令兄で川本吉藏さんです。鹽尻の町で大きく肥料問屋をして居られる、縣の有力者です。

森田　エ、左樣ですか、初めまして。森田愼藏です。

川本　ハイ、始めてお目にかゝりますだ。俺はナ、川本吉藏と申しましてな、此村長の吉兵衛の兄ですが、色々はア、村の子供達が御丹精いたゞきまして。

森田　イヤとんと行屆きません。

齋藤　森田先生、此川本さんはね、教育の方面にも大分御熱心で、色々學校の事でも心配をして下さるんですよ。

森田　ヤ、左樣ですか。

川木　教育も大切な事だが、先づ我が國では殖林事業が事一でがすよ。子供を仕込むのは、それ六年か八年ですが、山林は三十年五十年で、やつと伐り出せる。其間の丹精は、中々學校どころではねえでがして、其代りには、それ、苗木の二三錢のものが、一本三百圓にもなるんですからナア。

齋藤　左樣々々、それが貴君のお説でしたな。山林の利益で人間の教育費を出さうといふのが。

川木　教育ところでは無えだ。山林からでも、力さへ入れれば、やんがて税金もなにも要らなくなるでがすからな。此村でもハア、第一番にアノ朝日山の山林を拂ひ下げて、奈良井川の流れで水力電氣をおつぱじめるだ。其電力で、製材も、電燈も何んでもはア、一手でやる事にすれば、此村も鹽尻に負けねえ、大都會になるでがすよ。

齋藤　さうなれば學校の新築も出來ますね。森田さんはね、前から、高等科を置いて貰ひたいつて云つてゐられるんですよ。ね、先生。

森田　ハアそれは是非必要な事ですからナア。

川木　イヤ俺等が今考へてる通りになればでがすな、中學も大學も、病院も拵へますだ……。ア森田さん、貴君は風邪だとか、聞きましたが。

森田　イヤ、大した事もありません。

齋藤　左樣ですか。それなら宜しいが、その實は、今日の六松さんの結婚式に就てゞすが、

川木　御叮嚀な手紙拜見しましたゞ。が、大した御病氣でねえなら、是非なア。

森田　ハイ。

齋藤　六松さんの婚禮に就ては、そりやア森田さんも氣持の悪い事があるんですからね。

川木　サア其事でがすよ。俺、少つとも知んねえでがしたが、其節聞いて誠にはや、驚いたでがす。六松が、以前、貴方のお孃さん露子さんと譯があつて、子まで出來た間柄だといふ事をね。

齋藤　若い中には有り勝ちの、一寸した綻で、今更誰が悪いと詮議立てもならない譯ですよ、ナア森田さん。

森田　…………。

川木　イヤ左樣でねえ。實は俺も豪く六松を叱つたでがす。六松もはア豪く恐縮仕りまして。それでその……お孃樣は、只今は何處に居られますだ。東京とか聞きましたゞが。

森田　私の手一つでは、娘の世話は焼き切れませんし、學校へもやれないもんですから……舊藩侯のお邸へ上が

つて居りますよ。

川本　イヤ、それは御出世でムいますだ。ではいづれよい御縁談もあらうといふもんでがすな。

（土鍋が吹き出す。齋藤見付けて。）

齋藤　ア森田さん、鍋が吹いてますよ。

森田　一寸失禮。（立つて七輪の方へ行き土鍋を動かし、味噌汁の鍋をかける。）

齋藤　時に川本さん、何時か、御話の草雲の軸は如何なさいました。

川本　あれですか。アレ、それ原さんが見えた時に大變褒めて下すつてな、是非にと云ふ事でがしたが、お斷りしましたよ。……俺の家の寶でがすもの。其にやもうあべこべに、原さんに尺八の紙へ書いて頂きましたでよ。

齋藤　左樣でしたか、それは……。

川本　イヤ流石に、あれだけの大政治家、立派なものでがすな。田中がね、あの黨派でがせう。是非呉れ〳〵つて云ふでがすもの。一體アノ田中といふ仁は、此近鄉近在を自黨で堅めて代議士にならうといふ、それだけに欲しがるんでがすよ。

齋藤　中々の勢力家ですから、此村でも田中さんの御世話になる事か、澤山ありませう。

（此時、森田座に就て聞いて居る。）

森田　ハア其田中さんといふのは。

川本　ヤ、それが、其六松の嫁の父親でがしてな。

齋藤　其方も今晩列席されますし、郡長さんも……、此邊での有力な方が皆揃はれるのですから、ね、森田さん。

森田　それは、結構ですな。

川本　それでその、御孃さんの事でがすが、其事で六松も心配しとりますだがな。全體此緣談は、その何にも此方から言ひだしたでは無えでがす。先方から達つてと云ふのでがして……六松さへ早くお孃さんの事を云つてくれさへしたら、斷り樣もあつたんでがすが、……それに困つた事には、二人は何か約束の印とか云つて書いた物を取りかはせて居りましたさうでがして。

齋藤　若い人達のしさうな事ですよ。愚にも付かない事が書いてあるんでせう。

川本　六松がそれを、お返してくれと云はれたで、何卒。（折に乘せて書付ぐるみ、火鉢の傍へ押し出す。）

川本　お孃樣の方のも、願へればお返しが願ひ度えのですが、……何にその、それは、どちらでも宜しいのでは御ざりますだが、その。

森田　飛んでもない奴です。イヤ何を書き居りましたか、假令何の樣な書付があつたにしても、娘はもう何にも申

上げは仕ますまい。イヤ私もまさかに六松さんの緣談に就いて故障がましい事を申す筈もありません。此點は御安心なすつても、よろしい。

川本　ヤ、それを伺つて安心しましたゞ。

森田　ハイ、六松さんさへ好ければ、それで好いです。もと〳〵娘のいたづらから起つた事なのですから。

川本　ハイ。

齋藤　アノ二人の間に出來た赤さんも、亡くなんたんですね。

森田　エ、里にやつて置きましたが、急にわづらつて亡くなりました。

齋藤　それでまア、跡くされはない譯ですね。

川本　御孃樣には全く濟まない事ですが、赤も亡くなつたと云ゃア、或は因緣がなかつたとも云へる事でがせう。何卒一とつ此事は洗ひ立てをせずと、俺に免じて今日の處は一寸でもあア御臨席あらん事を願へますだ。

森田　はア。

齋藤　村の爲めですし、學校の擴張の事もある、田中さんにも逢つといて頂きたいし、ね森田さん、ね先生、是非何うか、御出席が。

森田　ハイ。

川本　矢張り娘つ子の事で、來て下さらねえお積りでがすか。

森田　イヤ私は其樣事を考へては居りませんよ。

川本　左樣ですか。

齋藤　では、お出でが願はれますね。森田先生、村全體の式見たいなもので、村中がみんな喜んでる事なのですから、村の爲め、學校の爲めにね。

川本　では何卒來て下さいまし。

森田　ハ、伺ひませう。

齋藤　是非何卒。七時です。

森田　ハイ〳〵。

川本　それでと、時に演習があるさうですな。

齋藤　ナーニ五十聯隊の將校連のでせう。弱るですなア、百姓の忙しい時に。

川本　ハ……

（隣の女おたき入り來る。手に菜の煮たのを皿に入れて持つて來る。）

おたき　先生、お、お客樣たね。ア、これは旦那樣。

齋藤　では失禮仕りませう。

（おたきは立つて次の間に行き、膳の上に皿をのせ、洗濯を置く。森田、二人を送つてから折を見る。書類を讀んで懷に入れる、窓の處へかけて行くが、二人の姿は見えぬ。）

森田　あ、おたきさん。
おたき　先生、洗濯物は、ねえだかね。
森田　ア、、難有う……。乙吉さんは今夜村長の處へ行くのかね。
おたき　ハイ、餘り行きたくもねえつて云つてますだが、行かなきやアならねえでがすよ。行かねえで、又憎まれでもするといけねえつてね、泣く子に地頭だからね。
森田　左樣だよ。それで乙吉さんに賴みがあるんですがね。
おたき　何でがすか、俺も少し……。
森田　アノ、此折をね、川本さんへ屆けて貰ひ度いんです。御叮嚀に恐れ入りました。書類は慥かに受取りましたが、これは、御心だけで結構ですから、お返ししますとね。
おたき　ハイ。
森田　いや。まア好い／＼。私も行かなければなるまい。イヤよろしい／＼、私が持つて行く。
おたき　左樣でがすか。……あの先生。
森田　なんです。
おたき　先生にお願ひがあるのだが。
森田　なんです。
おたき　先生に、袴を貸して頂きてえだが。
森田　ア、、好いのはないが。
おたき　何でもハア、形があれば好いのだよ。
（森田簞笥から袴を出して側に置く。）
森田　是を、お持ちなさい。
おたき　ハア、何うも、ありがたうございます。何でもハア、今夜の御婚禮は近鄕近在の豪え人たちが、五十人から集まつて來るさうだね。福島から藝妓が大勢來て、大した事ださうだよ。ヤ、嫁ッ子が鹽尻から來る。福島から藝妓が來る。何でも汽車でくるたア、便利な世の中だね。
（隣の子供竹三郎駈けて來る。）
竹三郎　お母ア／＼大變だ。早く來てくれろよ、飯が焦げてるぞ。
おたき　お……、さうか。
（慌てゝ挨拶もせずに出て行く。森田は跡見送り、膳立てをなし、鐵瓶に銚子を入れて燗をしながら寂しく膳に向ふ。）
露子　（露子入り來る。）
御免下さい、……お父樣。
（森田には、聞えぬ。露子土間より上り口に近づく。）
露子　お父樣、お父樣。
（怖は／＼に云ふ。森田振り向く。顏見合せる。）

露子　お父様。（駈け上り、又遠慮勝ちに、近寄り平伏してしまふ。）
森田　露子か……、何しに歸つて來た。サアお上り。
露子　お父様、すみません、慈様に早く歸つて來てしまつて……。何卒叱らずに置いて下さい……。何卒。
森田　叱りはしない。お父さんは決して、叱りはしない。マア此方へお出で。
露子　早く歸つて來て、本當に申譯がありません。お父様何卒御宥し下さいまし。（お露上にあがる。）
森田　まア、好い、此方へお出で。（露子、側へ寄る。改めて挨拶あり。）
露子　暫くでムいます。いつでも御無沙汰しまして。お變りはムいませんか。
森田　ハイ、難有う。私しは健全だつた。併しお前は、脚氣を煩つたさうだが、其後は何うした。
露子　いゝえ、病氣は癒りましたの、お蔭様で。でも、まだ、はつきり致しません。
森田　ア、さうか。身體は、何より大切に世話しなければいけない。
露子　えゝ……、お父さま、御やつれなさいましたのね、……朝晩が、御不自由でせうね。
森田　アゝ、お前が居てくれた時分から見れば寂しいよ、不自由は最早慣れたがね。
露子　御飯や、何かゞ大變でせうね。
森田　ナーニ色々隣の神さんが手傳つてくれるから。（お露の顔を見て）大變やつれたなう。
露子　お父さまこそ、大變おやつれに成りましたね。
森田　お父さんはモウ年のせゐで。それはさうと、お前御腹が空いてゐたらう。御飯はまだなのだらう。
露子　エゝ。でも何だかお腹が一杯で、私澤山ですわ。
森田　イヤ、喰べなくつちやいかん。お父様の炊いた御膳だ……ア、お邸ではお米の御飯だらう。それだから脚氣になるのだ。麥を食はなけりやいけない。久し振りで、お父さんの炊いた麥の御飯をお上り、サア此方へ來て。
（茶の間へ來り。）
森田　御前様も奥様も御無事だらうな。
露子　ハイ、御無事です。
森田　それは結構だ。
（手酌で酒を呑む。二杯目にかゝる。露子酌をしようとして、思ひ出す。）
露子　お父様一寸お待ち下さい。私好いものを持つて參ります。
（信玄袋を持ち來り、新聞紙に包んだ葡萄酒を出す。）

露子　これは殿様から、お父さまにと仰やつて。

森田　此の葡萄酒を殿様から（頂き）もつたいな　。ア、こりや舶來だな、明日の樂しみに取つて置かう。

露子　奥様からはね。

（駈け戻つて上り端の洋傘と草履を持つて來て、先きの新聞紙の上に草履を並べる。）

露子　コレ、好いでせう。

森田　オヽ立派なものだな。絹張だな。

露子　それから汚れてるけれども、見て下さい。（草履を示す）

森田　フム、是れは羅紗だな。

露子　フエルトです。

森田　さうか。

露子　私勿體ないから履くまいと思つたのですけれども、奥様が履いてけ似合ふから履いてけつて仰やつたものですから。

（草履を元の土間へ、新聞紙をたゝんで置く。）

森田　左様か、御前様も奥様もお前を可愛がつて下すつたのか。

露子　エヽ。それに若様が。

森田　フム。

露子　まだお四つなの。

森田　フム。

露子　お可愛いつてないんですの。

森田　フム。

露子　露や〳〵つてお慕ひ遊ばすものですから、そりやお可愛く〳〵つて、私も……歸る時でも逃げる様にしてお邸を出て來ましたのですわ。お父様、子供つて眞實に……

森田　露子。

露子　ハイ。

森田　夫程に大事にして下さるお邸から何故歸つて來たのだ。何か譯があるだらう。

露子　…………。

森田　何か聞いた事でもあるか。

露子　何をです。

森田　誰れかに何か話しでも聞いたか。

露子　何をです、何の事をです。

森田　イヽヤ、國の話でも聞いて急に歸りたくなりでもしたのぢやないかと云ふのだ。

露子　いゝえ、私何事も聞きもなにもしません。お父さまからは、無事々々つてお手紙だけでせう。外の人には、お友達にも所書さへ知らせないのですもの、手紙なんか、來やしませんわ。

森田　左様か。

（安心の體。）

露子　ですから、私ほんとうに此方の事が、いゝえお父樣の事が氣になつて、病氣の時なんか、何だか、私には家も何にも無くなつて、歸る處もない樣な氣がしてなりませんでしたわ。病氣が少し癒くなつてからも、もう何だか、心細くつて堪らなかつたんです。奥樣のお目にも止つたのでせう。まだ身體もほんとうでないから、氣保養にもならうから一度歸つても好いつて仰有つたものですから。

森田　左樣か。お父樣はそれを聞いて安心したよ。

露子　私も安心しました。お父樣にさへお目にかゝつて、色々のお話を伺へば、私もう明日東京へ往つても好いんですわ。

森田　ム……。

露子　お父樣、お酒をやめて、折角の葡萄酒を上りませんか、私拔きますから。

森田　イヤ勿體ない。俺は葡萄酒より酒よりも、お前の顏を見たので、すつかり醉つてしまつたよ。

露子　ハ……。

森田　アハ……。

露子　お父樣、まだ／＼お土産があるのよ。

森田　左樣か、出してお見せ。

（露子いろ／＼なものを信玄袋から出す。）

露子　これは、お隣りの伯母さんに上げる半襟、似合ひますかしら。

森田　お父さんには、そりや分らんよ。はゝゝゝ。

露子　竹ちやんには、この鉛筆を……それから、アノ………。

森田　嘸喜ぶだらうよ。

露子　坊やは。

森田　エ、。

露子　坊やに、これを、やり度いんですけれど……。

（おもちやを出す。）

森田　坊やにか。

露子　もう二つですね。

森田　ウム二つだ。

露子　可愛くなつたでせうね。

森田　ウム、可愛い。

露子　私一寸で好いんですが、逢つては、いけないでせうか。

森田　いけない。逢ふ事は出來ないよ。

露子　なぜですの。何處に居るんですの。

森田　ウーム。

露子　遠い處ですか。行く先が分らないんですか。

森田　イヤ、分つてるとも……今ぢやアもう、親切な人の處に里にやつてあるんだから。お前も知つてるではないか。

露子　ですから私……逢ひたいんです。懐しくつて堪らないんですが、お父樣、何卒是非、一と目で好いから逢はして下さいまし。

森田　ヨシ、明日にでも都合を見て逢はせてやる。

露子　明日と云はずにお父樣、これから逢はせて下さい。一と目でいゝのですから。

森田　我儘を云つてはいけない。時節の來るまで逢へないと、承知でやつたんぢやないか。お前は、お父樣を一人殘して何の爲に東京へ往つたのだと思ふ。

（怒つて見せる。）

露子　ハイすみません、すみません。では、何時でも、コノおもちやを、序の時に屆けてやつて下さい。坊やに見せてやつて下さい。

森田　ア、好いとも、其樣に謝罪まらないでもいゝ、……御飯を食べないか。

（臺所へ行つて、そつと眼を拭ふ。）

露子　私もうよしますわ。

森田　左樣か。草臥てるだらう。東京から……昨晩の十一時の汽車だね。寢られなかつたらう。

露子　エ、、ウト／＼して居るうちに甲府で夜が明けましてね。こんで居ましたわ。ア、お父樣／＼。

森田　何んだ。

露子　此村に何處か御婚禮がありますか。

森田　何うして。

露子　今日ね、驛尻たつけかしら、マア綺麗なお嫁さんが參りましたよ。

森田　草臥れてるだらうから、寢たら何うだ。

（戸棚から夜具を出す。）

露子　エ、、マア其お孃さんの綺麗でした事。此驛で下りたんですよ。何處でせう。誰でせう。お父樣御存じでせう。

森田　知らないよ。コノ村ぢやなからう。洗場の方だらうよ。もうおやすみ。

露子　イ、エ、確かに此村ですわ。だつて、車で此方へ來ましたもの、二十臺ばかりで、此方へ來ましたもの。お蔭で歩かされちまつて、私口惜しかつたわ……。

森田　…………。

露子　お父樣は吃度御存じよ。誰の處ですの。

森田　知らんよ、……アもうぢき七時だ。お父樣は出て來るからね、御飯を食べないんなら、もうお寢み。疲れたらう。明日また、ゆつくり話をしよう。

露子　何處へ往らつしやるの。
森田　役場まで行つて來る。
露子　まア、今頃役場に何かあるんですか。明日ぢやいけないんですか。
森田　演習があるんでね、昔の友達が來て居るから、夜でなけりや逢へないんだ。
露子　昔の友達つて軍人。さうですか。袴をはいていらつしやるのでせう。
（袴をはかせ、羽織を着せる。）
森田　何處へも行つてはいけないよ。
露子　何故ですの。
森田　だつて、露子が歸つて來たなんて云はれると、又いやな思ひをしなけりやならないからね。
露子　エ、ハイ。
森田　ぢや、お休み早く。お父様も直き歸つて來ますから。
（森田出て行く。）
（露子膳を片付ける。蒲團をのべて、床の上に坐つて、後より寫眞を出して眺めて居る。慌しく隣の乙吉入り來る。露子、見て隱れようとする。）
乙吉　先生々々。おたきにお願ひさしたもの、おたきが忘れて歸りましたで、先生。オヤ居なさらねえかね。先生袴ア頂きに來ましたどなア。アレまア、お嬢さんでねえかね。オ、矢つ張りお嬢様だ。
（乙吉に見つけられ此方へ出て來る。）
露子　伯父さん、暫くでしたね。
乙吉　暫らくでムいますなア。まアお變りもなくて。
露子　伯父さん、父が何時も大變お世話になるさうで、難有うムいます。
乙吉　飛んでもねえ、俺等の方こそ、御厄介はかりかけてますだ、子供も學校の方で世話して頂いてるしな。
露子　オ、竹ちやん、もう學校ですつてね。さう／＼私おみやげを買つて來ましたわ。コレ伯母さんに、コレ竹ちやんに、上げて下さい。
（半襟と文房具を出す。）
乙吉　ヤ、こりやどうも何とも御禮の仕樣もねえで、難有う。御辭儀なしに頂きますだ。
露子　アノ何か、父に御用ですの。今出かけましたが。
乙吉　ヘイ、ぢやア先生、そウお出かけになりましたどか。ハテ困つたどな。其處邊に在りましねえかね。
露子　何です。
乙吉　袴でがすよ、先生に拜借する約束したどがなア。
露子　アラ、袴は父がはいて行きましたわ。
乙吉　ぢや先生も行かれたどな。俺もいやでも行かなきや

なんねえに、困つたもんだな。外にどんなでもねえだか。あア、そこにかゝつてゐるのを拜借してえもんだな。

露子　汚れてますよ。

（帽子かけにつるしてあつた袴を取つて）

露子　これで好いでせうか。

乙吉　結構で御せえますよ。

露子　何があるのですか。伯父さんが袴なんか、宴會、御婚禮でせう。

乙吉　エ、左樣で御せえますよ。先生も行きなすつ　たかね。もう七時だね。ソロ／＼行かねえでは。

（急いで行かうとする。袖を控へて露子が近寄つて行く。）

露子　伯父さん、御婚禮と云ふのは、鹽尻から來たお嫁さんでせう。

乙吉　好う知つてるだね。

露子　だつて私、汽車で一緒でしたもの。

乙吉　オ、其汽車でな。着物が七荷とか、十荷とか。お嫁さんの親類緣者が二三十人も來たと云ふ話でがすよ。村中までがお祭り騷ぎよ、馬鹿々々しい。

露子　左樣なの。

乙吉　何でもハア、村長が今度縣會議員とかに出るとか、出せとか云ふんで、イヤ左樣ぢやねえ、息子さんがお嫁さア貰ふと出世が出來るとかてつてな、貰つて來たお嫁さんだもんでの、これで、今日の盃には郡長さんから、大林區署の役人から、何でもハア豪く人を集めるでがすよ。

露子　そりやお婿さんは仕合せねえ。

乙吉　仕合せでがすとも、綺麗な花嫁を貰つて。それも松本の女學校を出たさうで、六松さん、イヤもう嬉しいと見えて、誰に逢つてもニコ／＼して、何時にもねえ、えらく叮嚀にして居るでがすよ。

露子　六松さんが、そのお婿さんなのね。

乙吉　エ、左樣でがす。アノ人も、ねつからのやくざかと思つたら、今度豪い仕合せさ。いつも惡い噂の種ばかり蒔いて歩く人だつたがなア。

露子　…………。

乙吉　ね、お孃樣。先生が貴女を東京へやらつしやつたのは、アノ噂の立たねえ樣にするのと、行儀見習のためとで、歸つて來なすりや村長樣へお嫁入される事だと思つてゐたゞにナア。それでわし六松の今度の緣談を聞いた時、六松に逢つて聞いて見ましたゞ、貴女の事をさ。

露子　六松さんが何んて云つてました。

乙吉　處かの、六松は、今度の嫁つ子に酷く惚れ込んでるでがすよ。鹽尻の嫁つ子が如何に美しいからつて、心が

悪かつたら、何うだと云つてやりました。さうすると、心など何うだつて構はねえ、何んでも、彼んでも、あれが貰へなければ死ぬと云ふ、馬鹿な、騒ぎでがさア。それで村長様が拜むやうにして、やつと貰ふ事になつたんでがす。

露子　伯父さん／＼、六松さんが私の事を何んて云つてました。聞かして下さい。

乙吉　怒つちやいけねえ。お孃様、貴女は全く欺されて居なすつたんだよ。ようございますか、六松さんはね、あんな教員の娘なんか貰つたんでは出世が出來ないつて。なら先の事はどうしたと云ひましたら、昔の事なんか、疾うに忘れちまつたつて。

露子　エ。

乙吉　昔の事なんか、忘れちまつた。お露の事なんか、もう眼中に無いつてね。

露子　エ、六松さんが。

乙吉　何うなつたつて構ふもんかつてね、悪い奴ですよ。

露子　ウーム。

乙吉　酷え奴ですよ、六松は。今に何うせロクな事はねえでがすよ。……こんな心の美しいお孃さんを、あんな事をして置いて、構はねえつてんですもの……。

（此時七時の時計が鳴る。）

乙吉　アツ、七時！　遲くなつた。御免なせえましよ。

露子　伯父さん／＼。

（出掛けようとする乙吉を呼び留める。乙吉行つてしまふ。お露はヒステリカルに歩き廻りて、終に血相をかへて格子の外へ走り出る。）

—— 幕 ——

二　森田愼藏の家　（夜半）

もとの道具——火事を知らせる半鐘の音聞ゆ。半鐘の音、次第にはげしくなる。

露子、息を切つて格子戸を開けて這入ると、暫く戸につかまつて休む。直ぐ二重に上る。窓際に凭つて外の方を眺む。火光漸くはげしく、火光窓にさし込んで來る。火光を眺めて居たが、やがて思ひ付いた風に立ち上つて、ヨロ／＼と臺所へ行き水を飲む。

又窓際へ來て外を眺めつゝ、人の氣配に驚いて身を潜める。又眺める。

立上つて次の間へ行き、又窓際へ行く。

安心した樣子で床の上へ坐る。獨りで會心の笑みを漏らす。

愼藏歸つて來る。格子の音にハッとして、露子は夜具

を被つて寝てしまふ。愼藏二重に驅け上がつて次の間を覗く。露子の居るのに安心の様子。又頻に物を探しはじめる。袴の破れたのに氣が付き、是れを脫ぐ。露子の信玄袋を探し、又外を透かす。草履を探して居るので、土間の納戸に落ちてゐるのを見付け出す。それを拾ひ取り、慌てゝ懷中より取り出した草履と見くらべて驚いた様子。再び露子を覗く。又二つの草履を拾つて新聞紙に包む。表戸をしめる。窓の戸も締める。火光は稍々薄れ行く。暫く落ち付いて居る。露子の部屋へ歩み寄り坐る。

森田　露子。

露子　…………

森田　眠つて居るのか。オイ露子。

露子　…………

森田　露子、露子。

露子　ハイ。

（逆上してゐる聲。）

森田　オヽ、目が覺めたか。

露子　おゝ、お歸んなさいまし。

森田　露子、火事があるんだ。

露子　エ、左様ですか。

森田　大火事だよ。半鐘が聞えるだらう。ホレ、また聞える。

露子　左様ですか。

森田　村長の邸が焼けたんだよ。

露子　さうですか。

森田　露子、お前ほんとうに知らないのか。

露子　エ、知りません。

（ぢつと父の顔を見る。愼藏もぢつと見る。）

森田　可哀想に、今日來た花嫁は焼け死んださうだ。

露子　本當ですか。

森田　勝手が分らないから逃げ損つたのだらう。

露子　本當に花嫁さんは死にましたか。

（森田ぢつと、露子の顔を見る。）

森田　露子、お前火事を知らなかつたのか。火事を見に出て往きはしなかつたのか。

露子　エ、。いゝえ火事、知りません。何處へも往きはしません。

森田　左様か。露子、その足袋は何うした。泥だらけだが何うしたんだ。それは。

露子　エッ。

（足を見て足袋に泥の付いてるのに驚き、思はず隱してしまふ。）

露子　これは……

森田　露子。お前草履はどうした。奥樣に頂いたと云ふアノ草履は。

露子　エ、あります。

（急に立上り、沓ぬぎの方へ往つて見る。草履の無いのに驚いて方々探し始める。）

森田　まア此處へ來い。幾ら尋ねても有る筈はない。

露子　イヽエ、有り升〳〵。

森田　心配せんでもいゝ。親子の間だ、草履は俺が拾つて來た。お父さんは叱りはせん。遠慮はいらぬ。氣兼ねは入らぬ。ナゼ、いさぎよく、見に行つたら見に行つたと、打ち明けて云はぬのだ。

露子　お父樣、御免なさい。

森田　火事を見に行つたか、川本の家へ。

露子　私、六松さんの御婚禮の事を聞いたんです。

森田　誰れに。

露子　お隣りの伯父さんが務を取りに來らつしつて……私全然聞いてしまひました。

森田　左樣か。

露子　……それで私、飛んだ事をしてしまひました。

森田　左樣か。では、お前が火を放けたんだな。花嫁を燒き殺したんだな。

露子　私ツイ御婚禮を見に行つて しまひ ました。さうして、見たものですから、口惜しくつて〳〵、私、納屋へ……、お父樣叱らないで下さい。

森田　無理はない。お前のした事を決して無理だとは思はないよ。

露子　お父樣、本當にですか。

森田　決して無理とは思はない。

露子　お父樣、私の仕た事は惡くはないんですか。では叱らずに置いて下さいますか。

森田　叱りはしないよ。決して叱りはせん。お前のした其の勇氣は賞めてやる。併し方法が惡かつた。お前は復讐の手段を誤つたのだ。

露子　何うしてゞす。

森田　何うしてといつて、あれは法律上の大罪だ。殊に人まで死んでるとしたら、容易ならぬ犯罪だ。

露子　左樣ですか……私何うなるでせう。牢へ行けばいゝのでせう。

森田　さうだ。監獄へ行くのだ。併し、行くだけでは、すまないかも知れない。

露子　では……、エ、私お仕置を受けますわ。

森田　露子、やす〳〵と云つてのけるが、仕置にもいろ〳〵あるんだぞ。死刑もあるんだぞ。

露子　死刑。

森田　わしはお前に其仕置きを受けさせたくないのだ。露子、お前は誰れの子だ。お父様は何う云ふ人間だか知つてるだらう。此の森田の御先祖が何う云ふ家柄だと云ふ事を。
露子　エ、。
森田　露子……死んでくれ。自分の手で死んでくれ。罪人になつて死ぬるよりは、潔く自分の手で死んでくれ。外に道はないんだぞ。わしも一度は陸軍の官職にあつたものだ。今とても、多くの子弟に人の道を教へて居る。縄目の恥を吾子に與へたくはないのだ。
露子　エ、分りました。家の名も汚しますまい。私は死にます。もう私は怨むだけの怨は晴らしたのですから、乾度立派に死にませう。さうして敵の奴等に見せ付けてやります。
森田　おゝ、好く覺悟が出來た。立派に死んでくれ。
（森田立つて押入の方へ行かうとする。）
露子　お父様、私お願があります。
森田　何だ。
露子　私、アノ……坊やの顔を……一と目見てから死にたいのですが。
森田　エッ。
露子　好いでせう。私今度歸つて來たのも……まつたく坊やの事が氣になつて、逢ひたくつて仕様がなかつたのですもの。
森田　………。
露子　ね、お父様、好いでせう。
森田　お前は、不仕合な奴だ。因果な奴だ。
露子　それは、もうあきらめてますの。
森田　左様ではない……お前が最後の今になつて、逢ひたい坊やは死んでしまつたんだ。
露子　エッ。
森田　丹精したかひもなく、麻疹から肺炎になつて、此二月に死んでしまつた。
露子　………。
（驚く。）
森田　泣け。俺も泣く。餘りにむごい廻り合せだ。あきらめろと云ひたいが、あきらめられまい。泣け〳〵。
（立つて泣く。）
露子　お父様、お父様泣かずに居て下さい。お父様の泣いて下さるのを見ると、私胸が、胸が裂けさうです。
森田　どうぞあきらめてくれ。
露子　エ、……坊やは死んだんですね、……私もうあきらめました。
森田　左様か、死んでくれるか。サアこれで死んでくれ、

（ト短刀を持たせ）決してお前一人を殺すんぢやない。俺も直ぐ後から行く。坊やも屹度待つてるだらう。恁様汚れた、イヤな酷い世の中に居るより、極楽へ行かう。坊やも居るんだよ。親子三人、樂しく暮らせよう。露子サア死んでくれ。お父様が此處に居ては、決心がつくまい。お父さんは、あちらに行つてゐる。

（次の間に去る。露子決心つかず、短刀を前に置く。森田出で來り。）

森田　決心はつかぬか。

露子　お父様私しまだ……

森田　お前は若い。若いお前に死ねと云ふのは無理だ。併し其無理もお前の最後を飾らせたい爲だ。お前が火を附けた時は、勇氣ある決心をしたのではないか。其勇氣を出してくれ。

露子　私し六松さんの行末が如何うなるか、見てやりたいんです。

森田　ナニ、未練な事を云ふな。六松の事が、まだ心にかゝるのか。彼の人でなしの男の事が、忘れられんといふのか。

露子　左様ぢやありません。

森田　俺はお前の身を思ふからだよ。荒い言葉を掛けるのもお前が可愛いからだぞ。サア俺が頼む。何卒死んでくれ。お父さんとお前と二人潔ぎよく死んで、コノ汚い世の中でも、せめて二人だけは美しく終りを全うして死にたいんだ。

露子　お父様。どうしても。

森田　ナニ、何うしても死ねない。

（部屋へ入る。）

森田　お父様の心がお前には分らんのか……エ、どうして死ねないんだ。

露子　かんにんして下さい〳〵。

（表の戸を叩く音がする。露子は短刀を手にして咽喉まで持つて行つたが、ハッとして躊躇してしまふ。）

（森田は戸の音を聞いていら〳〵する。）

森田　サア誰か來てしまつた。早くしろ。おくれゝば死に恥をさらさなければならないんだ。露子頼む。何卒、死んでくれ。さア。

（ト短刀を持ち添へるばかりにする。戸を叩く音が次第に强くなる。）

（「森田さん〳〵」「先生々々」「開けて下さい、急用ですよ」と大ぜい聲がする。森田堪らなくなり、短刀を持つた露子の手を持ちそへて其胸を刺す。露子の倒れるを見ると、土間へかけ下り大戸を開ける。乙吉、齋藤を先きに男女大勢、「川本」のと「村役

場にのと提灯を持つてドヤノ〵と這入つて來る。）

森田　サア、這入つて下さい……貴方がたの御用の筋は分つて居ます。露子を、イヤ、私の娘を捕へに來たのでせう。エ、娘は歸つて來て居ます……。娘を捕へて警察へ渡さうと云ふのですか。警察へ。左樣でせう。娘は村長の家へ火を附けました。娘は花嫁をやき殺したのです。……何んで露子が……何で露子が村長の處へ火を放けたか。何んで、こんな怖ろしい罪を犯したか。貴君方は、それを好く知つてるでせう。本當に娘は健氣な振舞に出たのです。サア娘を……露子を見てやつて下さい。自分の仕ただけの責任は、アノ通り立派に……立派に贖ひをしました。立派にノ〵自分で自殺して居ます。ほめてやつて下さい。ほめてやつて下さい。私は娘を立派に育てた。娘は立派に死んだ。森田愼藏は立派な娘を持つたんだ……

　（此間一同呆氣にとられて、尻込みして何事も云はずに、互に囁き合ひつゝ、一人二人づつ出て行く。森田はぢつと一同の居なくなるのを見すまし、次の間へ驅け入る。）

森田　露子々々。お父樣を怨んで居たらうな。すまなかつた。無慈悲な事をした。死にたくはなかつたらう。わしはお前に何事も聞かせないやうに、さうして明日は此村を親子二人で立つて行かう、二人きりの世界もあると思つてゐたんだ。宥して〈れ、お父さんも遲れはせぬ。

　（ト軍刀を引寄せる。）

―― 幕 ――

木村錦花篇

研辰の討たれ（五幕七場）

人物

守山辰次　研師
平井市郎右衛門　家老
同　九市郎　同　弟
同　才次郎　同
八見傳內　侍
宮田新左衛門　同
小平權十郎　同
湯崎幸一郎　同
山田三左衛門　同
吉田三作　同
水田虎十郎　同
高橋三左衛門　同
萩の江　粟津の奥方
市助　仲間
五助　仲間
德五郎　番人
柿六　上手のつな引
八兵衛　下手のつな引
淸兵衛　亭主
お駒　下女
お市　同
その他、茶坊主、腰元、仲間、町人、駕舁、
大師參り町人　大勢

序幕

粟津城中侍溜りの間の場

平舞臺、侍溜りの間、若侍が大勢詰めてゐる。尤も泰平の御代、別段取り立てゝする程の用向きなし。碁を打つたり、茶を立てたり、書見をしてゐる者などばかり。時を知らせる時計の音して幕明く。

中央に守山辰次、下手に八見傳內、宮田新左衛門、小平權十郎、下手に湯崎幸一郎、山田三左衛門等居竝び其他、高橋三右衛門は書見をして居り、吉田三作、水田虎十郎の兩人は碁を圍んでゐる。宮田新左衛門は茶を立てゝゐる。やがて宮田茶を立て終り小平權十郎に向ひ。

宮田　サア小平氏、一服如何でござる。
小平　これは恭い近頃は大分御熱心の程あつて、イヤ是れは仲々結構でござつた。
（この中守山辰次、小平の茶の服みやうがをかしいので。）
守山　フフ……（と冷笑する）
小平　守山氏、貴殿、何がをかしいのだ。
守山　何がをかしいと云つて、雨蛙が蚊でも呑むやうな恰好をして、お茶を呑んでゐらつしやるから、をかしうございますよ。
小平　無禮な事はおいて貰はう、人の事を兎や角と申すなら、貴殿茶道の心得はあるのか。
宮田　そりや小平氏、如何に守山殿が昨日今日の成り上り者とは言ひながら、侍の仲間入りをしたからには茶の湯位、御存じあるは知れてゐる、それでなくては貴殿の様を見て笑ふわけはない筈だ。
小平　成程、それたら是非お願ひ申さう、拙者の事を笑はれたからは、此のまゝではすまされぬ、サア守山氏、早速にお願申さう。
守山　手前、その様な事は一向に存じませぬ。
宮田　何、知らぬ。（と、態と）イヤその様の筈はない、能ある鷹は爪をかくすの譬だ、それは貴殿が遠慮をしてゐるのであらう、侍が茶の湯を知らぬ筈はない。
守山　笑談おつしやつちやいけません、そんな事をあなた方に遠慮をして何が徳になります、私は本當に存じませんので……
小平　何、知らぬ、是れは不思議だ。
守山　ちつとも不思議な事はないぢやムいませんか、お茶を呑むに、あんな眞似をなさるとは、私の方が餘程不思議でございますよ。
宮田　どうだ各々、守山辰次は、侍でありながら茶道のたしなみがないと申す。
（これを湯崎と言ふ侍が引取り。）
湯崎　併し宮田氏、守山氏なら、知らぬ方が當然でござる。もとが職人町人上りの假侍に、茶を所望するのは、貴殿の方が無理でござらう。
（高橋と言ふ侍、本から目を離し。）
高橋　イヤ、呆れ返つた侍があればあるものだ。
守山　高橋様、あなたは何があきれ返るのでございますね。
（これを山田ト云ふ侍が引取り。）
山田　つまり貴殿には侍たるの價値がないと申す事なのだ。
（守山、此度は山田の方を振り向き。）

守山　山田様、あなたも變な事を仰つしやいますね……アア分りました。又いつもの樣に、私をいぢめるのでムいますな、よろしうムいます、皆樣がそのお心なら、私も默つちやゐられません、若し山田樣、茶の湯を知らなければ、何故侍でないのでございます。

（それた湯崎幸十郎が引取り。）

湯崎　それはなア守山、町人は算盤、秤りの心得があるのと同じ事、腹からの侍なら、誰しも茶道の心得はある筈、又さう言ふ事を知つて居て、初めて侍の交際も出來ると言ふもの、商しお手前などは、身分の變り樣が激しかつたのだから、無理はない。第一其方如きを侍たと思つて居たのが、我等の失策たつた。なう何れも。

皆々　いかにも、その通り。

（守山、湯崎の方へ向き直つて。）

守山　イヤ、湯崎樣、今度はあなたの番でムいますね、何誰でも宜敷うございます、湯崎樣、あなたは全體、商人を何と思つてゐらつしやいます、金を儲けるのが商人、たとへ算盤、秤は知らなくとも、金儲けのうまい商人なら宜敷ムいませう、侍にした處が其の通り、御主に忠義の心得さへあれば御奉公は勤まります、それだのにあなた方は、やれ茶の湯を知らなければ侍でない、やれ劍術を知らなければ侍でないなどと、イヤ馬鹿々々しい、まろであなた方は、それでは茶の湯侍、裃侍も同じ事、その上又二タ口目には、身分々々と仰しやるのから質のよくないお薩れつきだ。

（是れにて一同顏を見合せて。）

小平　何れも、まるで我々とは、住む世界が違ふ、相手にたら貴方がよろしい。

守山　イヤ全く、質がわるい、私がおとなしくしてゐる者を、皆樣が、種々な事を言ひ出して敵になくなると、いつでもそんな事を言つて逃げてしまひなさる。

（此の時、茶坊主、菓子を持つて出る。）

坊主　皆樣、お奧からの下され物でムります。

皆々　有難うござる。

守山　ハア、是れはどうも、何卒御前へ宜しう御禮をお願申上げます、手前、守山辰次でムいます。

坊主　畏りました。

（坊主這入る。）

（八見傳内一同を見て。）

八見　どうだ各々、今のを聞かつしやつたか。

守山　又何か仰つしやるのでございますか。

八見　貴殿一人に下されたのではないから少しは遠慮をしたらどうだ、よく追從を言ふ奴だ。

守山　追從を？　これは恐れ入りました、只お禮を申上げ

た計り、こんな事にまで、皆様に氣兼ねをするんでムいますか、面倒臭い世の中でございますな……あゝ分つた、八見様、あなた、ひがみでございますな。

八見　何、ひが……。

守山　さうでなければ、私しの事をお氣にかけるわけがムいません……其様に仰つしやるあなた方だつて滿更、お禮を申したくない事はムいますまい……。

八見　何だと、侍たるものが、そんな卑怯な、馬鹿なまねが出來るものか。

守山　アヽ、痩我慢でございますな、つまらない、あゝ申しましたのは、手前、戰場で申す一番槍も同じです、これ位にしなけりやあ、却々世の中の荒波は、乘り切つては行かれませんので……。

八見　よく〳〵、つべこべと、事毎に氣にいらぬ奴、研屋の職人風情に、侍の作法がわかるものか、各々がおとなしく相手になつてゐればよいかと心得、一人で利口振つた口の利きやう、手におへぬ奴だ、其方如きは口で言つたのではわかるまい、侍の作法が間違つてゐるか、汝の申すことが本當か、サアはつきりと申して見ろ。

（イキナリ辰次の頭を打つ。）

守山　アイタ……何を亂暴をなさいます。……口で申して居りますものを其様な……。

八見　何……。

守山　まあ、よろしうムいます〳〵。

八見　よろしいでは分らぬ、悪いと思うたら兩手をついて詫びろ、それとも強情を張り通すか。

守山　誰れが強情を張ると申しました。

八見　そんなら、悪かつたと詫びを申せ。

小平　イヤ、侍なら、頭を打たれては兩手もつけまい……。

守山　おだてたつて駄目でムいますよ、手前、何時、あやまらぬと申しました、侍といふものはずゐぶん氣の早いものだ、何も自分の意地を張つた處で儲かるわけでもなし、あやまつたからつて寢つかれない事もないのでムいますから……宜しうムいます、あやまります、すぐあやまります、なんでもない事でムいます。エヽ、八見様、手前重々の失禮、平に御容赦下さいまし、……これでよろしう宜いませう。何ならもう一度申し上げませうか、……これであなたも、いゝ御心持でムいませうよ、フン困つた侍だ。

八見　それ、さう云ふ口の下から、馬鹿に致すか。

小平　八見氏、相手にならぬが宜しうムる。

八見　フン……馬鹿な奴め。

（八見、元の席に歸る。山田三左衛門一同に向ひ。）

山田　モウ、其様な、町人侍には、おかまひなく、一つ御

菓子を頂戴いたさうではござらぬか。

皆々「左樣々々」「頂戴いたさう」

（などと皆々云ふ。山田、菓子の蓋をあける、そして隣席の湯崎に向ひ。）

湯崎　イヤ、折角だが、拙者、甘いものは好みませぬ。

八見　湯崎氏、サアお戴きなされ。

（辰次、是れを聞き。）

守山　何、なんでございますと。

湯崎　何も申しはせぬわえ。

守山　でも、只今、あまいものは……何とやら仰つしやいましたた、實に怪しからぬ。

（これにて又一同辰次の方を見る。）

高橋　エヽ、又何か言ひ出しをるな（本を見ながら）うるさい奴め。

八見　某のげんこを忘れたのか。

守山　イヤ、外の事とは違ひます、假りにもお奧からの下されものに對して、手前は好まぬの嫌ひだのとはそりやおだやかでは厶いませんな……。

（大音に言ふ。）

富田　藪から棒に、……又追從が初まつたな。

守山　いや、さつきのとはわけが違ひます、辰次は一生懸命ですぞ、假りにもお奥からの下されもの、甘いもの一ついただくのに、苦い顏をするとはあきれたものだ、手前なども酒飲みだがお奧からの下されもの故、二ツや三ツは我慢をする、お手前はその樣の事で御奉公が勤まりますか、こりや重役に申上げねばなるまい。

湯崎　エヽ、おのれその樣な事を申すと容赦せぬぞ。

（此時、下手より家老平井市郎右衛門出る。）

平井　何を聲高に申し居るのぢや。

（辰次、市郎右衛門を見て。）

守山　オヽこれは御家老樣、丁度宜い處にお出で下さいました。

平井　エヽ、騷々しい靜かにせぬか。

守山　靜かには出來ませぬ、斯樣で厶います、只今、お奥からお菓子を頂戴いたせし處、「こんなものは食へるものか」と仰しやる方がございます。

平井　それは、誰だ。

守山　ハイ、湯崎樣で厶います、餘の事故只今、私も一寸申してやりましたので。

湯崎　イヤ御家老樣、それはちがひまする、手前元來、甘きものは好まぬ故、好まぬと申せしまでの事、それを辰次め、その樣な云ひがかりを……。

平井　宜しうござる、わかつてをります、誰も嫌なものは、嫌ひと申せばとて、少しも憚る處はござらぬ。

守山　併し、それも、お奥よりの、……

平井　たとへ何であらう共、何の心もなく菓子は好まぬと申せしまでの事、それとも湯崎氏がお上まで好まぬとでも申したのか。

守山　イヤ、……その、……さうはつきりとは申しませぬが、……

平井　それなれば、その様に騒ぐ事はない、第一嫌ひなものを好きと申すは、それこそ所謂へつらひ侍……ウム……思ふにこれは其方が殿様を引合ひに出して、何かお褒めにでも預かる心組にて左様に騒ぐのだらう。して見ると其方は、勿體なくも殿様を御道具にした様なものだ、不埒千萬な奴、次第によつては此儘には相濟まさぬぞ。

（これにて、辰次、急に態度を變へる。）

守山　ハヽ、左様でムいますな、元々嫌ひなものでございますからなア、第一、正直で宜しうムいますなア。

平井　其方そりや何を申すのだ。

守山　（それにもかまはず）全體、酒呑みに甘いものは全く食はれませんよ。

平井　その様な事はどうでもよい、殿様を笠に着た不埒者の返答を承らう。

守山　イヤ其の儀なれば、コレデ打限りに願ひます、拙者の思ひ違ひ、何卒帳消しに願ひます、是れは拙者の負け、眞ッ平御免を。……

（皆々苦笑する。）

守山　併し御家老様、矢張りあなた様は偉い御方でございまする、惣じて物事の御捌きに手落のない、……いや恐れ入りました……何事も穩便な御計ひ……常日頃、辰次が、逢ふ人毎に、あなた様の事をお褒め申すは、こゝの事、粟津の御家の大黒柱……人の上に立つて……。

平井　モウよい、うるさい奴だ。

（此の時二三人の腰元にかしづかれ、粟津の奥方が廊下を通る。）

（一同これを見て、高橋は書見から眼を放し、吉田水田の兩人は碁を打つ手を休める。）

皆々　アヽ、御部屋様。……

奥方　毎日のつとめ、嘸、大儀であらうのう。

（此の時、辰次ずつと前へ出て。）

守山　これはお部屋様……勿體ない仰せ、御奉公でムりまする故、守山辰次一生懸命でムりまする。

奥方　おゝ、守山か。

（ト奥方は平溜りの間に足を止める。）

守山　ハア、また先程は結構な下されもの誠に有難……イヤ、又この様な事を申上げると、皆様方に、いぢめられ

ます。（辰次、下を向く）

奥方　何、皆がいぢめる。……

守山　イエ、何、これは御部屋様の御耳に入れることでは御座いません、何卒御聞き流しにお願ひ申ます。

奥方　其方は大層、しをれてゐるなう何か心がかりの事があらば申して見よ。

守山　左様で厶りますか、では申上げます……御承知の通り、親が町人の私し故、如何に御奉公に精を出しても、する事、なす事、御朋輩衆の御氣にさからひ、いつもけものゝ扱ひに致されます、とても、この工合では、手前の命がたまりません、さうなりますれば、勿體ない事ながら御役御免を願はねば、ならぬやうな事になりはせぬかと、……それが心がかりで厶います。

奥方　其方を退け者にする、それは誰がするのぢや。

守山　誰れ彼れと申しまして、皆様がで厶います、第一八見様には、手前今日、目のくらむ程、打たれました。

八見　イヤ、御部屋様、恐れながらそれは斯様でございます、餘り辰次が出すぎまして、我々をないがしろに致しますので……

奥方　たとへ、どうあらうとも、城中に於てそのやうな手荒な事はなさぬもの。

八見　御言葉を返し恐れ入りますが、口で申してきく人間ではござりませんので……。

守山　大嘘で厶います、頭から私を馬鹿になさいましてやれ研屋の職人だ、成り上りものだなどと、それ程卑しい私なら、殿様の御目がねに預り御奉公申し上げてゐるのが悪い様な氣も致しまする、又、皆様も、さうと言はぬばかりの御口振、第一それでは殿様に對し勿體ない事で……。

奥方　そち達は、何故、その様に守山を、寄つてたかつて……。

宮田　いえ、決して左様な事は……。

奥方　でも、守山が、あの様に申して居るではないか、妾には、守山の言ふ事がまことゝ思はれるぞ。

小平　是れは恐れ入ります、全體彼れは非常に辯口のうまい人間で。

奥方　では、妾が、守山に欺かれてゐるとでも申すのか。

小平　イヤ、決して左様な事は……。

守山　イヤ、御部屋様、それは私があまり、御家のお爲めを思ひ、身の冥加を考へまして、一生懸命に御奉公いたしまする爲めに、それ追從の、やれへつらふのと、それが皆様の御氣にさはるので厶います、尤も氣　張の溜りの間詰め、四角張つて居りますよりも、茶を立てたり、本を讀んだり、碁でもなすつてゐらつしやる方が氣樂で

は厶いますから……と申して、皆様に責められますのも貴につらう厶います、何卒御推察の程、お願申上げまする。

奥方　それは不憫な事ぢや、そちは兎角内氣故、皆に責められるのぢや、古參・新參の別はあれ、妾も、殿様も、そちが好きなのぢや、ちと氣を大きく持つたがよい。

守山　有難う厶います。

（市郎右衛門にがり切つて。）

平井　これ辰次、最前から黙つて居れば御部屋様の御足を止め、朋輩共の讒訴、おのれそれでも追從とは思はぬか。

守山　エ、、何と仰しやられても私は、御用が大事で厶りまする。

平井　何を申すのだ……誰が御用が大切でないと申した。

奥方　市郎右衛門、守山は根が町人故、言葉遣ひや行狀に粗違する事がある故、時には、追從とも思はれるのぢやが、氣立は誠によい者ぢや、これ、守山、これから皆の者か、又その方に何か申す様な事があつたら妾につげるがよい、悪い様にはせぬ。

守山　有難う厶います、……それで私も少しはおちつきましてござります。

奥方　市郎右衛門・妾はちと殿様に御用がある故、其方も一緒に來てくれぬか。

平井　畏りました。

守山　御免下さいまし。

（奥方は下手へ這入る。平井あとにて。）

平井　各々（辰次を指さし）其奴には餘りかまはぬ様になされい。

皆々　ハア……。

（市郎右衛門、下手へ這入る。）

（あとにて、皆々、顔を見合せる。）

高橋　イヤ、呆れた人間だ、全くいやな奴だ。

守山　それ、その通り、あなた方は……。

八見　黙れ、なんと言ふ白々しい奴だ、あれで立身出世が出來ると思つてゐるとは情けない性根だ。

守山　なんでも宜しう厶いますよ、人前でお利口振つて居たのでは、泰平の今日、御加増は思ひもよらぬ事で厶いますから……ちとあなた方も、商賣御熱心におなりなさいませ。

湯崎　そんなことを聞きはせぬ、併し、おのれ、あのやうに我々の讒訴を申すとは許し難い奴だ。

守山　然しこれも、商人が品物を披つて儲けるのと同じ理屈ではムいませんか。

（八見、又席を立つて守山を打つ。）

守山　アイタ……。

（これを宮田とめて。）

宮田　八見氏、およしなさい、犬畜生に等しい奴には、おかまひなさるな、又、お奥へ行つて、何か申すと困るから。

八見　何、かまふ事は厶らぬ。

小平　まア、およしなさい、とても眞劍勝負を望める奴ではないのだから。

（八見、辰次を睨みつけて自席に歸る。）

八見　おのれ、何んとかして、ひどい目に遇はせてやらないでは。……

守山　御勝手になさいましよ。

（此時、市郎右衛門下手から出て。）

平井　又何とか申してをるのか。

八見　イヤ、數の知れない大馬鹿者で厶ります。

（平井市郎右衛門、辰次の側に來り。）

平井　是れ守山、今日まで目に餘る事もあれど何事も申さなかつたが、御部屋樣にあれ程の事を申す奴、この後は何を仕出かすか判らぬ、所詮はお家の爲めにもならぬ其方、折を見て殿樣に申上げ、望みの通り御役御免を願うてやるぞ。

（辰次、市郎右衛門の顏を見て。）

守山　これは御家老樣、何もあなたが先きに立つてそんな事を仰しやる事はないでは厶いませんか、あなた樣は御家老、私は平侍、どう間違つたからつてあなたと太刀打ちの出來やう筈はなし、大人氣ないぢや厶いませんか。

平井　何を申す、その樣な性根故、同輩共にも、うとまれるのぢや、所詮その方如き人間の住める世界ではないのだ、町人なら町人らしく大小捨てゝ何故世を渡らぬ、自分を僞り、世の中を僞つて心苦しとは思はぬか、それで出世が出來ると思ふか馬鹿な奴め。

守山　又、その樣な事を仰しやいますね、手前そんな堅苦しい事は大嫌ひ、どうあらうと、出世が出來ればよい世の中で厶いませう、何も私だつて侍の勝手を知らぬと思へばこそ、これまでに、お刀の一本でも只で研いで上げてみたり、手前の家內までお宅に差し上げ御用をさすは何の爲め、あんまり義理を知らない仰しやり樣、其上これまで暑いにつけ、寒いにつけ持つて行つた贈り物は、どんな御心持で受取つたのでございます、少しは私の身にもなつて下さいましよ。

平井　あきれた奴だ、その樣なことを申すからは尙以つて此のまゝには致されぬ、あすにも殿樣に申上げねばならぬわい。

守山　御家老樣、何故私のいたします事が其樣に御氣に入らぬので厶います、不思議でございますな、手前至つて

理窟がましい事は大嫌ひの人間、世の中は臨機應變、例へ何であらうとも、御家の爲をさへ思へば、それで宜しいではムいませんか、なんと言ふ不器用な世の中だ。

平井　己れの事ばかり思うてゐる其の方が、お家の爲めになると思ふか、茶坊主侍め。……

八見　茶坊主侍とは、いゝお捌きでムるな……イヤ、泰平の御世は有難いものだ、斯樣な素町人とも同席せねばならぬとは。

宮田　御家老、祿盜人とは、斯樣な奴の事を申すのでムらうな。

山田　よく、これで侍だと言つて大手の門が潜ぐれるものだ。

守山　何でムいますね、山田樣お頭をはげらかして、お孫さんのおありなさる方まで一緒になつて、そんな事を言ふにやア當らないぢやムいませんか。

山田　餘計な事を申すな。

守山　あなたもいゝかげんになさいましよ。

平井　各々、手前が承知故、あすからは茶坊主扱ひにしてやりなさい、所詮は一生をそれで送る奴、それが分相應と申すものだ、早速殿樣に申上げて置かねばなるまい。

守山　エ、御家老、どうでもそんな事を仰しやるのでムいますね、これ程手前一生懸命になつてゐるのに……よろしうございます、エヽ、よろしうムいます……手前とても根が町人と思へばこそ氣兼苦勞をしてゐるのに、何處まで言つてもその樣な事を言つて拙者の出世の邪魔をするなら……そウ御家老とも申すまい、何が御家老だ……いゝ年をして融通のきかぬ人間だ、かうと知つたら、進物などをするんではなかつたのに、エヽ、いま〳〵しい……

平井　何と云ふ卑しい奴だ、顏を見ても蟲唾が走る。

（辰次の顏につばを吐きかける。）

（辰次、口惜しきこなし。）

（一同苦笑する。九ツの太鼓にて。）

——幕——

二幕目

大手馬場先き殺しの場

栗津城の書割り、杉の立樹、中央の松の立樹の前に穴を掘る仕かけあり、幕明く。

下手から六尺棒に提灯を持つた仲間二人、上手に通り過ぎる。

研屋辰次、提灯を持ち、そのあとから平井家の仲間市

助、鍬を擔ぎ出る。

守山　なんと云ふ暗い晩だ。

市助　提灯がなけりやひと足もあるけねえ。

守山　足許の根つこに氣をつけろ。

（兩人舞臺に來り、辰次、松の立樹を見て。）

守山　コヽ、この松だ〳〵、ソレ、この松の前に穴を掘り、市郞右衞門を突き放し、只一ト討ちと言ふ寸法だ。

市助　なんであらうとおまへさんも侍にまで取り立てられて、今更それを棒に振るとは、氣の短い人だなア。

守山　かうなれば手前も意地……とは言ふものゝ、拙者の事だから、ちやんと見積りをつけてやる仕事と申すのは、手前もこの栗津にをつたのでは、兎角前身が邪魔をいたし、出世は愚か、茶坊主扱ひにされ通し、いくら奧方を丸めても、そばから家老に邪魔をされ、とても物になりさうもない所から、すつかり侍には見限りをつけてしまつたのだ、どうせ先きが見えたからはいまゝで腹癒せ、あの老ぼれを嬲り殺しにしてやらねば、手前料見がならぬのだ。

市助　なんぼ老ぼれとは言ひ乍ら、武藝自慢の市郞右衞門、こりや十兩ぢや合はねえ仕事だ。

守山　今更足下を見るとは圖太い奴だなア。

市助　一ツ間違へば笠の臺が飛ばうと云ふあぶねえ仕事の合棒だ、云ひなり放題出す處だ。

守山　何を申す、まだ仕上げも見ぬ中に云ひなり放題に出してたまるものか……それはさうと、モウ夜も大分更けてゐる、ソロ〳〵穴掘りにかゝらねばなるまい。

市助　まだ六ツを打つたばかりだから、提灯は見えねえだらうよ。

守山　今から來られてたまるものか、……無駄話しに夜が更ける、サア市助、早くその鍬で掘つてくれ。掘つてくれ。

市助　なんだ、穴掘りか、笑談云つちやいけねエ、そんな事は約束の金の中には這入つてはゐねえ、いはば今夜は大事なお客様だ、穴なら自分で掘りなせえな。

守山　イヤ、何と云ふ現金な奴め……エヽ、身共も侍……ツベコベ云はぬわ。

市助　駄賃を出すと言ふ處か。

守山　イヤ……身共が勝手に掘るのだわへ。

市助　そんなら……それ鍬。

（市助、鍬を辰次に渡す。辰次、松の立樹の前に來り。）

守山　よし〳〵何も穴を掘るのにまで、人手をかりねばならぬ事はないわい。

（これより穴掘りにかゝる。）

守山　ムヽ、昨夜の雨で土がやはらかいのか、何より仕合、

……手前穴掘りは今日が始めてだ……だが思ひ出しても腹の立つは、家老を始め青侍、よつてたかつて、到頭拙者に穴掘りまでさせるとは……意地の悪いやつ等だわ……併し手前世の中なんてものは極く安値にすむものと思つてゐた處、ヤレ侍は劍術がどうの斯うのと……そのくせ彼奴等だつて一から十まで知つてゐるものはあるものか……思ふとそれを無氣になつて怒つて見たのは、少し人がよすぎたかな……何も拙者として餘り物事を氣にかけるゝでもないが……侍に見切りをつけたと云ふ事が……かうして穴掘りをすると云ふ氣になつた第一ゝ入札眼目、この次手が家老を切つて……某に惡口を言つた腹いせ。……第一あの老ぼれに、とられた品物だけでも……安い金ではない筈だ。（穴のまはりを廻りながら）これは骨が折れる……中々深くならぬわい……コレ市助、市助何をしてゐるのだ。

市助　一寸煙草を一服。

守山　とは又薄情な奴め、少し手傳ふ氣にならぬか。

市助　そのあとは一雨だ。……

守山　誰れが頼むものか。

（又穴掘りにかゝる。）

守山　こんな骨を折つて、暗い晩に、堀端に穴を掘る、考へると馬鹿々々しい……何も侍を捨てゝしまへばこんなことをしなくつてもいゝ譯だが……一寸殺して見たい氣にもなる……それに、明日の城中の噂が聞きもの、市郎右衛門が馬場先きで斬られてゐた……相手は守山辰次、彼れは餘程の使ひ手であつたのだ……だが、拙者がゐなくなつたあとで褒められてもつまらない噺し……併し少し心細い氣がする……あんな老ぼれ一人に大の男が二人がかりで……穴まで掘つて……それも只、殺してしまへばそれでいゝのだから。オヤ、何か鍬の先きに當つたぞ、オヤこゝに大きな石があつた、惡い所を掘つたものだ。併し今更外を掘るのも大變だ、ヨシ此の石から取つてやれ。

（ト石をとる。）

オヤ、この石はなか／＼いゝ石だ、研石にはもつて來いだ。（穴の中を見て）よし／＼餘程深くなつた。ヤア、市助、提灯が見えるぞ。

市助　むゝ、たしかにあれだ……だがお前さん大丈夫かね。

守山　ウム、……だが今夜は止めて、あすの晩にしてもよい。

市助　イヤ臆病な侍だ。

守山　エヽ、何が臆病だ、手前に損をさせた上、こんな穴まで掘らせる奴、もう斯うなつたら是が非でも殺してし

まふばかりのことだ……ソレ市助、忍べ〳〵。

（兩人、提灯を消し、忍ぶ。）

（平井市郎右衛門、酒に醉ひ、仲間吾助提灯を持つて先きに立つ。）

吾助　市助は何處に參つたのか、旦那樣のお下りに間に合はず困つた奴で厶りますな。

平井　今夜は歸藏が殊の外遲い故、油斷して何處かへ參つたのであらう……。

（言ひながら、出る。）

コレ吾助、急に煙草がほしうなつた、提灯の火をかしてくれ……。

吾助　畏りました。

平井　少し御酒を戴きすぎてか、きつう煙草がほしうなつた。

（煙草に火をつける事あり。）

（辰次、この中、松のうしろより首を出し。）

守山　コレ市助、提灯を消すのが合圖だ、いゝな〳〵。

（市郎右衛門、舞臺に來る。）

平井　此の味は又格別ぢや。

（この時辰次、提灯をおとす。）

吾助　狼藉者！

（云ひながら、上手へにげて這入る。）

（市郎右衛門、身を引く。）

（辰次、市助に突かれて穴におちる。）

守山　コレ、間違つた〳〵。

平井　何、まちがつた。

市助　それ、守山、落した〳〵。

守山　エヽ落ちたのはおれだ〳〵……。

（守山言ひながら白刃が頭上に落下するやうな、豫感におそはれて。）

（思はず。）

守山　人殺し！（叫ぶ）

（そして、滅茶苦茶に白刃を振りまはす。）

守山　助けてくれ！……。

（是にて市郎右衛門、「何助けて」と云ひながら無用心に穴の側に來る。辰次のやたらに拂ふ横薙ぎに逢ひばつたり倒れる。辰次そのまゝ穴より飛び出し、下手に逃げて來て大地にへたばり樣子を窺ふ。）

（市郎右衛門のうめき聲がする。）

平井　ウーム。

守山　ウーム――しめた。

市助　エ、びつくりした。

守山　市助か。

市助　うまくいつたか。

守山　エヽ拙者を穴に突き落しておきながら何を申すのだ……だがあの唸り聲は市郎右衛門、拙者がたしかに斬りつけたに相違ないな。が拙者まだ人を斬つた事がないから、人の當りか松の根か一向に見當がつかぬ。

平井　おのれ、守山、だまし討ち……。

（辰次、また大地に伏してしまふ。）

守山　ウン、大分弱つてゐるらしいぞ。

（手探りに小石を拾ひ打つ事あり。）

よし〳〵びくともせぬわい。

（やつと側に寄り。）

エヽ、おのれ婆婆ふさげの老ぼれめ、よく〳〵拙者の一生を棒に振らしたな、義理しらずめ……。

（辰次、めつた斬りに斬りつける。）

（平井市郎右衛門が無念とばかり最後の一刀、辰次の足をかすりそのまゝ撞となる。）

（辰次びつくりして飛び退き。）

守山　ヤ、おのれ、あゝ痛い〳〵斬られた〳〵。

市助　何、斬られた。

守山　だまし斬りだ、いきなり足を……拙者、びつこになるのではあるまいなア、痛い〳〵〳〵――コレ市助、モウ一足も歩けぬ、肩を貸してくれ〳〵。

市助　エヽ、仰山な――それはほんのかすり疵だ。

守山　エヽ、こんな目にあふ程なら、よせばよかつたに……ぞウ〳〵侍なんかは眞平だ。

市助　エヽ、そんな弱音を吐いて、今逃げた吾助の注進で九市郎や才次郎が來たら何うするのだ、敵を討たれぬ中早くこゝを逃げると仕様。……

守山　何――敵討――イヤ面倒臭い世の中だ――（立ち上り）おゝ立てるは〳〵、ではさのみの疵ではなかつたのか――有難い〳〵、エヽ今の騒ぎで刀を落してしまつたわい。（刀を探す事あり）オツト、あつた〳〵併し身共初めて人を殺して見たが、案外にもろい者だが、相手は何しろ武術の達人、滿更拙者が弱いのでもなかつたのだ、さう思ふと急に偉くなつた樣な氣もするわ……

（この時、上手から吾助の案内にて九市郎、才次郎の兩人出る。）

九市郎　コレ吾助何處ぢや〳〵。

吾助　なんでも、このあたりで厶います。

（この聲をきゝ、市助、辰次の兩人吃驚する。）

才次郎　兄上はどうなされたのか。

（此の中辰次、花道に行きかける。）

（九市郎それをすかし見て、一寸さぐり合になり、市助は下手に逃げて這入る。）

（才次郎は市郎右衛門の死體に躓付く。）

（トヾ辰次、逃げて這入る。）

――幕――

三　幕　目

信州越中の國境倶利伽羅峠の場

下手に畚渡しの番小屋あり、それより下手の大柱の中へつまさき上りの岩を突き出し、其處を登つて畚に乘る心持、上手の方は全く見えない、只二本の綱が張られてある。下は數千丈の谷間の體。幕明く。畚小屋の番人徳五郎煙草を呑んでゐる。

平井九市郎旅姿にて出る。

九市郎　守山辰次が信州路に入り込みしときゝ、弟才次郎と別れ〳〵に國を發足なし、甲府にて出合ふ約束なるが、何かよい便りをきゝたいものである。

（ト舞臺に來て。）

さ、此所が名代の獅子戻りと申す難所ぢやな。

徳五郎　ハイ、左樣で厶います、お侍樣お越しなさるかね。

九市郎　シテ價は何程ぢや。

徳五郎　ハイ二十四文でござりますだ。

九市郎　左樣か、では二十四文。

徳五郎　エヽ有難う厶えます。

（この時、上手の蔭にて聲がする。）

上手の聲　オーイ、八よ、そりや引け、客人だ。

下の聲　オヽ、合點ぢや。

上の聲　ソラ、引け〳〵。

（上手から町人風の男、畚に乘り出る。）

九市郎　オヽ、あの樣にして渡すのか、氣味の惡いものぢやが、間違はあるまいな。

徳五郎　何、旅人一人を落したら、下手人にとられますわ。

九市郎　左樣か。

（この中町人の畚は下手にはいり、畚は上手に引いてとる。）

（やがて町人は、下手の岩から下りて出る。）

町人　アヽ、地獄の一足飛びぢや。

徳五郎　何がそんなものかね。

町人　ヤレ〳〵又歸りに此谷を通らねばならぬと思ふと苦勞ぢやなう。

徳五郎　エ、臆病な人だ。

町人　それ、二十四文おきますぞ。

徳五郎　有難うござります。

（町人、花道へはいる。）

徳五郎　サア、旦那樣、御待遠樣でごぜえました。あすこ

までいつて乘つて下せえまし。
九市郎　よし／＼。
徳五郎　狹いからお刀は兩手に持つて下されよ……それからあまり下は見ねえでな……
九市郎　承知ぢや／＼。
（九市郎、下手へはいる。この時上手にて聲。）
上の聲　オーイ、八よ、こんだは侍の客人だ。
下の聲　オツト合點だ、おれの方もお侍だ補六ヤアイ、引いたり／＼。
上の聲　合點だ、おぬしの方も引いたり／＼。
（これにて、下手から九市郎、上手から笠を冠りし守山辰次出る。）
（辰次、笠越しに九市郎を見てびつくりする。）
（九市郎は氣づかぬこなし。）
（やがて、相方の畚の接近する時辰次は刀を拔き、九市郎の畚の綱を斬る。）
（九市郎は谷間に落ちる。辰次、大急ぎにて笠を取り下を見る事よろしくあり。）

――幕――

四幕目

吾妻屋の場

平舞臺下手の奥より、花道にかけてが街道の心、いつものところに門口、上手に中二階あり、正面に六段ばしごあり、その上、下手に小ざしき、正面あけたてあり、その上手は狹い廊下の事、はしごの下に奥に通ずる出入口あり、門口に「吾妻屋」と記せし、かけ行燈あり。馬子唄にて幕あく。
吾妻屋の亭主、清兵衞、下女のお駒、お市の兩人門口より往來を見てゐる。
下手の奥より歸り馬又は二三人の旅人通りすぎる。その度毎に。
清兵衞　エヽ、お早いおつき樣で、お泊りなすつてゐらつしやいまし、吾妻屋は當方でムいます。
お駒　お風呂も湧いてをりまする。
お市　お泊りなすつてゐらつしやいまし。
（言つてゐる。）
（奥から守山辰次、手拭を持つて出る。）
守山　あゝ、いゝ湯であつた。
清兵衞　これは／＼御侍樣、モウおあがりでムりまするか。

只今すぐに御膳を差し上げます。
守山　これ／＼亭主、ちと承り度い事があるが、今夜の泊り客は何人あるのだな。
清兵衛　へイ、お侍様の外に、お百姓さんのお泊りお二人、商人が一人、それだけで厶ります。
守山　左様か――では侍の泊り客は某より外にはないな。
清兵衛　左様で厶ります。
守山　よし／＼……早く膳を出してくれ。
清兵衛　畏りました、只今すぐに差し上げます。
（辰次は、そのまゝ上手の中二階に上つて行く、障子をあけて中を見て。）
守山　コレ／＼、亭主々々。
清兵衛　ハイ／＼。
守山　手前が風呂に這入つてゐる間に是に菓子が置いてあるが、身共申付けた覺えはないぞ。
清兵衛　イエ――それはその――ハヽ――是は又御笑談を。
……
守山　イヤ、笑談ではない、身共菓子は大嫌ひだ、下げておけ／＼。
お駒　でも、きらひでも出しておかねえと。
守山　エヽ、いらぬと申すに。
清兵衛　コレ／＼お駒、早く下げて來ればよいのだ――へいこれはまアとんだ失禮を。
（お駒、菓子を下げに來る。）
（辰次、障子を閉める。）
清兵衛　イヤしみつたれな侍だ……時にもう大分表も靜かになつた、今夜はもう泊り客もあるまい……表の行燈を入れておけよ……。
お市　ハイ／＼。
（お市行燈を入れる。）
清兵衛　それから中二階のお侍にお膳をさし上げてくれよ、氣むづかしさうな客人だから、氣をつけな。
お駒　ハイ／＼畏りました。
（お駒、奥に這入る。）
（前幕の平井九市郎、駕にのり出る。）
九市郎　ヤレ／＼駕や、まだ宿屋迄は餘程あるのかな。
駕屋一　イエ何、それ向うに見えるあの家がさうで厶いますよ……
九市郎　左様か、どうか早くやつて貰ひたい。
兩人　エイ、よろしう厶います。
（駕を吾妻屋の前に置き。）
駕屋一　若し旦那様、參りまして厶います。
九市郎　それは大儀であつた……それから其方誠にすまぬが、次手にあないを頼んでくれまいか。

駕屋一　エヽ、宜敷うムいます、少しお待ちなすつて下さいまし。

（吾妻屋の門口をあけて。）

エイ、今晩は……旦那、ゐるか。

（淸兵衛これを見て。）

淸兵衛　オヽ、作十どんか、今歸りかね。

駕屋一　何にね、私等今日、客人を乘せて獅子戻りに行つた歸り道、あすこの番人の德五郞どんや柿六どんがお武家を介抱してゐるだ、話を聞くと、何んでも惡る者に、脊の綱を切られて仕舞ひ、倶利迦羅の谷底に落されたと云ふことでな——

淸兵衛　オヽ、それは、怖い目にあはされたものだな。

駕屋一　それでもな、運が强いお侍でな、命にかゝはる程な怪我もなく、ほんのかすり疵を受けた位のもの、丁度私共が通り合せ、駕に乘せてお前の家に案内をして來ただ。

淸兵衛　それは御苦勞たつた、丁度奥の座敷があいてゐるから、すぐ此方へお入れ申してくれ……そりやまアいゝ事をしてくれた。

駕屋一　もし旦那樣、サア御出でなせえまし。

九市郞　左樣か……

駕屋二　どうだね、まだ足は痛むかね。

九市郞　イヤ、どうも動くと痛んでならぬわい。

駕屋一　やア、早く今夜は寢さつしやれませよ。

（九市郞駕より出る。）

淸兵衛　サア、旦那樣、どうぞお入り下さいまし、どうもまア、御足がお痛みでは、お二階はかへつて御難儀でムりませうから……コレ〳〵お市、早く御洗足を上げぬかい。

お市　ハイ〳〵。

（洗足をとり。）

お市　旦那、洗つて下せえまし。

九市郞　これは忝けない。

（足を洗ふ事あり。）

淸兵衛　モウ、あの獅子戻りと申す處へは、時に惡い奴が出まして、よく旅のお方などは御難儀をなさいます、でもまア、御怪我がなくつて重疊でムいましたナ。

（足を洗ひ終り。）

九市郞　コレ〳〵駕屋、今日は種々と厄介に相成つた、是は拙者禮心ぢや、納めておけ。

駕屋一　これはどうも御多分に有難うムいます。

淸兵衛　サア、お市、御案内申上げろ。

お市　アイ〳〵。

（この時、辰次、中二階の障子を細目にあけて、九市郞と顏を見合し、びつくりして閉める、九市郞不審の

こなし。）

お市　さあ、お出でなせえまし。

（九市郎、そのまゝ奥にはいる。）

駕屋一　旦那様、あす、早立ちに駕に乘つてくれる客人はねえかね。

清兵衞　よし〳〵今聞いてやる、まて〳〵（清兵衞、大聲にて）エ、お客様、明日の御立ちにお駕の御用は厶いませんか、エ、御駕の御用は厶いませんか、エ、御駕の御用は。

（皆默つてゐる。）

（清兵衞、駕屋に向ひ。）

清兵衞　作十どんや、あすは用はなさそうだ。

駕屋一　さうかね、ではお休みなせえまし。

清兵衞　氣の毒だの。

駕屋二　何、ハイ、左樣なら。

（駕屋、下手の奥に這入る。）

（守山、上手の中二階より大小な抱へ、あわてゝ表へ出ようとする。）

清兵衞　お客様、只今から何れへお出なさいます。

守山　イヤ、何、身共は一寸。

清兵衞　お見受け申せば御立ちの御樣子……何んぞ御氣に障りし事でも……。

守山　エ、、是れ靜かにいたせ〳〵。人の氣も知らないで……別に何も氣にいらぬと申す事は……イヤ氣にいらぬ。

（奥からお駒床をもつて來る。）

お駒　あれ、お侍様、何處かに行くのかね。

守山　うるさい奴だナ、靜かにいたせ〳〵。

清兵衞　是は又心づかぬ事をいたしました、そしてそれは一體、何がお氣に入りませぬか。

守山　それはその、あの、あの座敷が氣に入らぬ、あまり端近かで、騷々しくてならぬのだ……

清兵衞　左樣ならあのお二階の小座敷、あすこにお變へ申しませうに。

守山　エ、、大きな聲を出すなと言ふのに、身共なんとしても此處にはいられぬ、亭主、勘定ぢや〳〵。

（辰次、土間に行き足拵へにかゝる。）

清兵衞　で厶りまするか、それなれば是非が厶りませぬ、併し只今からお立ちなされても此の宿場に、外に宿屋も厶りませぬのに。

守山　よく、しやべる奴だな……モウ〳〵默つてゐろと申すのに。

（と、金を出し。）

サア、勘定さへ拂へば、別に口をきく事もあるまい、ソ

レ金。
清兵衛　是はどうも、御多分にありがたう存じます。
守山　いゝから默つてゐろと申すのに。
（この中辰次、脚絆をつけ、わらぢをはいてゐる。）
（この時、花道から、平井才次郎出る。）
才次郎　入口のうどん屋で、教へてくれた旅籠屋ゝ目印し、吾妻屋と申す行燈があると申すが、どれであらう、ソウ大分、夜も更けた樣子、早く宿がとりたいものだ。
（本舞臺に來る。）
（その時、辰次、身支度なして、表に出て才次郎を見て、びつくりして戸を閉てかぎをかける。）
（才次郎は氣のつかぬこなし、そして才次郎は宿屋を探す心持ちにて左右を見て、やがて下手に入る。）
清兵衛　お客樣、どうなされました。
守山　イヤ、何、身共、急病ぢや、急に寒氣がして參つた、亭主、早く、その二階に案内してくれ〳〵。
清兵衛　それはお困りで厶いませう、おゝ顏の色も大そう惡う厶いますな。
守山　よく、いらぬ事を申す奴だ、二階の何處だ、何處だ。
（辰次、わらぢのまゝ二階に上る。）
清兵衛　アヽ、モシ土足で。
守山　エ、わかつてをるわい（二階に上り）コレ〳〵亭主手前急病故、たれも參ることはならぬぞ。よいかよいかよいか。
（ト二階の下手のざしきに上る。そして障子をしめる。）
（この時、才次郎下手より出て。）
才次郎　許せ〳〵、當家は宿屋の相ぢやが許せ〳〵。
清兵衛　ハイ〳〵、只今々々コレ〳〵お駒、そこいらをふいてくれ、方々泥だらけで、困つた侍だ。
才次郎　コレ〳〵許せ。
清兵衛　ハイ〳〵只今、あの侍は、なんと思うて鍵をかけてしまつたのだ、餘つ程變な侍だ。（戸をあけ）これは旦那樣。
才次郎　當家は宿屋ぢやなう。
清兵衛　ヘイ、左樣で厶います。
才次郎　夜が更けて、氣の毒ながら手足を延ばせればそれでよいのぢや、泊めて貰ふわけには行くまいか。
清兵衛　ヘイ〳〵宜敷う厶ります共、サア〳〵お這入り下さいまし。
才次郎　では許せよ。
（この時、奥からお市出る。）
清兵衛　コレお市、お洗足を持つて來い。
お市　ハイ〳〵。

（足を洗ひながら。）

清兵衞　旦那樣、すぐ御風呂をお召しなされまし。

才次郎　イヤ〳〵手前、風呂は澤山ぢや、それに夜食もすませて參つたから、すぐ床をのべて貰ひたい。

清兵衞　ヘイ〳〵畏りました。

才次郎　今日は事の外草臥れた。

清兵衞　御道中は定めしおつかれでムいませうな。

（足を洗ひ終り。）

サア、お市や、中二階へ案内申せ。

お市　畏りました。

（お市、才次郎を辰次の居りし中二階に案内して上つて行く。）

清兵衞　ヤレ〳〵、今日は騷々しい晩であつた、時にもう何刻かね。

お駒　モウ、四つでムりませう。

清兵衞　ではもう表を閉めて、お前達もねたがいゝ。

（中二階からお市おりて來る。）

お市　お寢みなさいまし。

（行燈を消して來る。）

清兵衞　コレお市よ、おまへも、モウ寢たがよい。

下女兩人　では旦那樣、御めんなせえまし。

（兩人奥へ這入る。）

清兵衞　ドレ、俺も一ト寢入り仕樣か。

（行燈を消し。）

火の用心〳〵。

（奥に這入る。）

（夜番太鼓、割り竹の音、この時、九市郎下締を襷になし、上手の中二階に目をつけ忍び寄つてそつと障子をあける、九市郎、刀を取つて斬りつける。才次郎、起き上つて、兩人暗中の立廻りあり。）

才次郎　狼藉者め、名を名乘れ。

九市郎　なんと。

才次郎　仔細を申せ。

九市郎　ムヽ、其の音聲は弟、才次郎ならずや。

才次郎　さう言ふのは、中兄九市郎殿か。

九市郎　待て〳〵。

（探り寄つて行燈をつけ。）

九市郎　おゝ、誠に弟才次郎、危い事であつたな、して其の方は宵より此の家に泊つてをつたのか。

才次郎　イヽヤ、半時程前に着いたばかりでムりますが、兄上、如何なされたのでムりまする。

九市郎　さては辰次め。

才次郎　何、辰次……。

九市郎　イヤ、其の方と甲府に再會の約束なし今日倶利迦

羅峠にかゝりし折、辰次の爲に思はぬ不覺、またもや、最前この家にて、チラと見受けし辰次の姿……扨は早くもそれと知りて逃げ延びしに相違なし、其の方にも種々話もあれど、心が急ぐ、何はしかり、亭主を呼んで尋ねると致さう、コレ亭主。

（この時、辰次、二階よりそつと首を出し、下の行燈に水を流し、行燈を消す。）

九市郎　ヤ、灯を……

才次郎　兄上、御油斷あるな。

（是にて兄弟、辰次探り合ひになり。）

（辰次とはしごの處にてすれちがひ、辰次下に來る。）

（この時、亭主奥から出る。）

清兵衞　ハイ〳〵、御呼びでムりまするか。

（この中、辰次かぎをはづし、そつと表に出ようとして、清兵衞に突き當り、持つたる火を消してしまふ。）

清兵衞　誰れぢや。

（辰次、鼻を押へ。）

守山　あの大和屋と云ふ家は何處でムります。

清兵衞　そんな家は知らぬわい。

（辰次、そつとぬき足にて、門口をはなれ、一散に逃げて這入る、兄弟は門口をすかし見る。）

――幕――

大詰

第一場　丸龜在二本松の場

平舞臺、下手に茶店あり、中央に栗の立樹あり、こゝは大師參りの道、二本松の場。幕開く。

茶店娘、お琴、店を出してゐる。

下手から大師參りの仕出し大勢出る。時々百舌の聲。

お琴　お休みなすつていらつしやいまし、お早い御參詣でムいます。

（萬遍なく言つてゐる。下手から出る仕出しにかまはず、花道から平井九市郎弟才次郎の兩人、三度笠、大小、旅姿にて出る。）

才次郎　兄上、御氣分は如何でございます。

九市郎　宿を出る時はとても今日は、あるけないと思つたが、只今は餘程心持がよくなつた。

才次郎　それは結構でムいます、それにこの様な、天氣の良い日には、宿にゐるより、かうして出かけた方がよいかも知れません。

九市郎　さうかも知れぬ。

（兩人は話しながら來る。）

お琴　お參詣でムいますか、お休みなすつていらつしやい

まし。

才次郎　兄上少し休んで參りませう、今日は御病後の事故あまり無理をなさるといけません。

九市郎　左樣でもないが、では休んで行かう。

（兩人は茶店に休む、お琴は茶などすゝめる、門附なく、仕出しが上から下に通る、土産を持つた町家女房娘二人出る、百姓一人青物をつけし牛に水をやつて入る。）

（下手から三人づれの町人が出て休む。）

お琴　お休みなすつていらつしやいまし、お早いお參詣で御座います。

（茶を出しながら言つてゐる。）

才次郎　まア、お笠でもおとりなさいまし。

九市郎　左樣いたさう。（笠を取る）

九市郎　まことに、今日は靜かな好い朝だ。

才次郎　ゆうべからの雨も上りまして、近頃にない良い天氣で御座います。おゝ兄上、百舌鳥が啼いてをります。

九市郎　（茶を飲みながら）おゝ、百舌か、もう秋だやな、朝夕はめつきり冷えて來た。

才次郎　月日の經つのは早いと申しまするか、いつの間にか今年も秋になりました。

九市郎　私達の樣に敵を探してゐる身の上では、いつ秋になつたものやら、春が過ぎたのやら、すこしもわからぬ。

才次郎　浮世の事はまるでわかりません。

九市郎　故鄕の樣子など知りたいものだな。

才次郎　ずゐぶん變つた樣な氣がいたします、モウ二年になりまする。

九市郎　二年になる、早いものだな、姉上にお別れ申したのがまだ昨日の樣にさい思はれてゐるのに。

才次郎　定めし、私達の歸りを待つておいでゝムいませうな。

九市郎　去年の秋は九州に過ごしたが、今年の秋はかうして四國で迎へる、每日々々西から東と、この樣に探し廻つて居ながら、いまだに敵の行方はわからぬ。

才次郎　まるで雲をつかむ樣な事でございます。

九市郎　あてもなく、あるいてゐると云ふ事は苦しい事だ。

才次郎　私達は敵と背中合せに歩いてゐるのかも知れません。

九市郎　そんな氣もする、二年はおろか、三年、五年、十年、いや私達が死ぬ迄も、敵に會ふ事は出來ぬかもしれぬ。

才次郎　怖ろしい氣がいたします、がしかし、そんな事は

御座いますまい、私達が常にきかされてゐる敵討の話は、首尾よく敵を探しあてた話ばかりで御座います、神佛のお引合せかも知れません、死ぬまで廻り會ふ事の出來ぬ敵に、明日にも出合はぬとも限りません。

九市郎　勿論の事だ、只私達にはとかくいつの事か、わからない物足りなさがあるばかりだ、なんにもせよ、早く國へ歸りたい、國へ歸つてゆる〳〵と手足をのばして見たいものだ。

才次郎　私も近頃はその樣な氣がいたします、同じ事をいつ迄も思ひ詰めてゐるといふ事はつまらないものでムいます。

九市郎　敵討はもと〳〵詰まらないものだ、武士の家には妙な定めがある、どうでも、かうでも私達は敵討に出なければならない結果になつたのだ。

才次郎　しかし國元を出ます時は大變嬉しい氣がいたしました。

（九市郎は莨入を出して莨をのむ。）

九市郎　私は近頃、敵が憎いとは思へなくなつて、亡き兄上には申譯がないが、どうしても本當に憎めない。でも時々憎いと思ふ氣持にはなる、しかし、それは兄を討たれた憎しみよりも、私達にこのやうな苦勞をさせる敵が憎い心持だ。

才次郎　兄上も、私と同じ事を思つてゐらつしやる、しかも私達は敵を討たねば國へ歸れません。

九市郎　それは立派においとまを願つた以上は。……

才次郎　討つて歸れば平井の家も立ち再び仕官も出來るやうになり、人々にも褒められます。

九市郎　只それだけの事だ。

才次郎　この上は一日も早く敵を討つてしまはねばなりません。

九市郎　彼の首には私達のいろ〳〵な幸福がつながつてゐる。

（町家の女房下へ入る、この内にも仕出し三四人上手に通る。）

（此の中に柿栗賣りなど出る。）

九市郎　大分人出がいたすな。

才次郎　この先きの大師堂に、年に一度の開帳があるとか申しますので、それへ參詣の人出でムいませう。

九市郎　では道すがら參詣いたし、武運長久をお願ひ申さう。

才次郎　左樣いたしませう、今の私達にはそれがせめての慰めでムいます。

九市郎　ではそろ〳〵參らう。

才次郎　左樣いたしませう、茶代をこれへおいてまゐるぞ。

お琴　有りがたうムいます、モウ御立ちで御座いますか。

（兩人は、笠を冠りわらぢの紐を結びなほしなどしてゐる。）

（猿廻しなど通る。）

九市郎　このやうに休んでゐる時は、埒もない事を思ひ出すが、歩いてゐる間は氣が張つてゐるせゐか、心持がよい。

才次郎　左樣で御座います、向ふから敵が來る樣な氣が始終いたしてをりますから……では御供いたしませう。

（才次郎は立上る、不圖花道の方を見る、九市郎はまだ支度をしてゐる。）

才次郎　兄上、兄上。

九市郎　何だ。

才次郎　兄上、兄上。

（才次郎、九市郎の袖を引く。）

九市郎　どうしたのだ。

才次郎は一心に向ふを見てゐる。）

才次郎　私の目違ひかも知れません。

九市郎　何が。

才次郎　敵で御座います。

九市郎　何！

才次郎　オ、、彼れだ、正しく辰次だ、兄上、兄上、矢張り彼れめで御座います、敵が參りました、敵が。

（狂喜する。）

九市郎　何れ〳〵。

（矢張り向ふを見る。）

才次郎　あすこに、それ〳〵これへ來るのでムいます。

九市郎　オ、たしかに研辰だ、敵の辰次に相違ない。

（この中參詣人出て、兩人の樣子を見てゐる。）

才次郎　逃つてはをりますまいな。

九市郎　彼れに相違ない。

才次郎　兄上、いよ〳〵廻り合しましたなあ。

九市郎　私達の仕合の日は、今日だつたのに。

才次郎　不思議な氣が致します。

九市郎　私も不思議だ、探してはゐたものゝ、探し當てたのが不思議な氣がする、有り難い、有り難い。

才次郎　夢の樣でムいます。

九市郎　全く夢だ……選りに選つてこの道へ來るとは彼の運のつきだ、今一足早く出立いたしたら、この先きどんな事になるか知れなかつた、有りがたい、有りがたい。

才次郎　名のりかけて、すぐに斬つて仕舞ひませう。

九市郎　左樣だ、それで事はすむのだ、町人上りの俄武士、袋の鼠同然だ。

才次郎　しかし兄上を討つた野狐故、めつたに油斷は出來

ません。

九市郎　オ、、如何にも彼は兄上を殺した敵なのだ。

才次郎　彼れを殺せば國へ歸れます。

九市郎　左様だ、かう言ふ間にもアレ／＼向ふからやつて來た、吾々を見て逃げられては面倒だ、忍べ忍べ。

（兩人は下手にかくれる。百舌の聲。花道から研辰出る。）

辰次　久し振りに生れ故郷に歸つて參つたが、矢張生國はなつかしい。おゝ、向うの茶店も昔のまゝだ。

（參詣人は不思議相に辰次を見る。）

辰次　大變な人だかりが致してゐるが……コリヤ町人何があるのだ。

（手近な參詣人にきく、きかれた人は默つて辰次の顔を見てゐる。）

辰次　其方は唖か、人がものを尋ねるのに何故默つて某の顔ばかり見てゐるのだ。

（又、外の群集に氣がつき。）

辰次　其方も某を見てゐるな、をかしな奴共だ、某の顔に何かついてゞもゐるのか。

（此時、九市郎、才次郎の兩人下手から出る。襷をかけ寸分の隙もない出立。）

九市郎　研屋辰次。

（大喝する。）

辰次　エ。

九市郎　平井市郎右衛門が弟、九市郎ぢや。

才次郎　同じく弟才次郎、兄の敵、勝負いたせ。

（いきなり、才次郎は辰次の腰の邊を蹴る。）

（辰次、まりの様に轉る群集は騒ぎ出す。）

皆々　敵討だ、敵討だ……

（是にて上手、下手より大勢出る。）

參詣の町人の一　何、敵討だと。

參詣の町人の二　どつちが敵だ、討つ方が弱かつたら加勢してやれ。

皆々　加勢してやれ／＼。

（騒ぐ、その隙に辰次は煙草盆を投げつける。）

辰次　親の敵だ、親の敵だ。

（呼はり乍ら脱兎の如く群集の中にかくれる。）

二人　それ！

（兄弟は追うて行く、參詣人は「敵討ちだ、敵討ちだ」と騒ぎながらあとにつゞく。）

―― 道具廻る ――

第二場　大師堂百萬遍の場

舞臺、平舞臺處々に丸柱、白壁、障子にかこまれし大師堂の内部。
朝日が障子に映つてゐる。
開帳を知らす太鼓の音にて道具止る。
坊主三四人忙し氣に右往左往する。
參詣人は神妙に百萬遍を繰つてゐる。
百香の聲。
上手から、いきなり辰次が逃げて來る。
彼は大小を懐にかくし頬冠りをしてゐる。
群集の中に割り込み、すまして念佛を唱へ出した。
障子の外に九市郎、才次郎の影が映る。
やがて兩人は堂内に這入つて來る。
九市郎　たしかに、この大師堂に逃げ込んだのだ。
才次郎　こゝより外に、逃げる處はございません。
九市郎　それ、片端より探せ〳〵。
（兄弟は血眼になつて參詣人を見廻す。）
（辰次はいろ〳〵な面相をして人相をかへて見出されまいとする。）
（やがて才次郎が辰次を見つける。）
才次郎　あすこに居りました、兄上居ました〳〵。
九市郎　おのれ、卑怯者め。
（參詣人をかき分けて辰次の側に來り、辰次の襟をつかむ。）
（參詣人は驚いて逃げる。）
才次郎　もう逃がさぬぞ。
九市郎　表へ引き出せ。
才次郎　サア立て、立て。
辰次　どうぞ、御勘辨を、御勘辨を。
九市郎　たわけた事を、サア早く出ろ。
（襟元をぐい〳〵引つぱる。）
辰次　ア、苦しい、苦しい、息がとまります、出ます、出ます、どうぞ手をゆるめて下さい。
九市郎　ゆるめてやるから早く出ろ。
辰次　ハイ只今出ます、只今……。
才次郎　サア早く出ろ、ぐづ〳〵いたしてゐると斬つてしまふぞ。
（刀に手をかける。）
九市郎　まて、堂内で血を流しては後が面倒だ、とにかく表に出せ、サア早く出ろ。
辰次　只今、只今、表に出ます、ハイ……
（辰次、二足三足あるき出し、いきなり丸柱につかまる。）

辰次　どうぞ御勘辨を、御勘辨を……助けて下さいまし。
九市郎　その樣な、卑怯なまねばかりいたす、世話のやける奴だ、仕方がない。
（辰次に當て身を入れる。辰次、落入る。）
九市郎　ソレこの間に表へかつぎ出せ。
才次郎　ハア。
（兩人は假死の辰次をかつぎ、本堂の表に出て行く。參詣人はその後から續く。）

――道具廻る――

第三場　大師堂裏手の場

舞臺。平舞臺柿の立樹、木材等入用、道具止まる。敵討を見ようとする人達が大勢詰めてゐる。猿廻し、西國巡禮、町人、百姓等思ひ／＼の仕出し。
町人の一　さつき逃げ出した侍は見つかりましたか。
百姓一　なんでも御本堂の內に逃げ込んだ相です。
猿まはし　モウ、今頃はつかまつただらう。
百姓二　オヽ、こつちにやつて來るぞ。オヤ／＼二人の侍が最前の侍をかついで來るわ。
町人二　それではモウ殺されてしまつたか、つまらない。
（がや／＼言つて居る。）
（上手より九市郎、才次郎の兩人、辰次をかつぎ出る。）
才次郎　兄上、この邊がよいでございませう。
九市郎　オヽよからう。
（辰次の身體をおろす、上手から僧、良觀出る、九市郎、良觀を見て。）
九市郎　おゝ、只今は堂內をおさわがせ申して相すみません。
良觀　いや、いや、して敵といふのは見つかりましたか。
才次郎　大師堂の群集の中にをりましたのをやう／＼連れて參りました。
良觀　左樣か。（辰次を見て）このお方か、最早や敵をお討ちなされたか。
九市郎　イヤまだ尋常の勝負をいたしません。
良觀　しかし、相手は死んでゐるではござらぬか。
九市郎　こやつ此上もない卑怯者にて手に合ひません、殊に御本堂を血に汚してはと存じ餘儀なく息の根をとめ、只今これ迄連れて參つたのでございます、これから勝負をするのでございます。
良觀　それは／＼、では敵討はこれからでござるか。
才次郎　左樣でございます。
良觀　ハヽ……して討たれたは御身達の父御か、母御か。
才次郎　私共の兄でございます。

眞觀　オ、兄御を。

九市郎　こやつ元は膳所の町人にて刀の研師辰次と申しまして御城内の御出入の都度、辯才利口を以つて殿様に取入り俄か武士となつて、武藝の事の口論より身の程を忘れ、我れ等兩人の兄を討つて立退きました奴、二年の間探しまはり今日やうやう此處にて出合ひましたのでございます。

眞觀　ヤレ〳〵それは定めし御苦勞をなされた事であらう、いや、後ち程茶飯など進ぜます程に敵討ちがすんだら御立寄りなされ、お待ち申して居る。

二人　有難うございます。

（眞觀はそのまゝ上手に入る。）

（九市郎は群集に向ひ。）

九市郎　いづれも、あまりそばによらぬ樣にして下され。

才次郎　また、最前のやうに人込みの中に逃げ込むと我々が困る故、あまり邪魔にならぬ樣にして下さい。

九市郎　サア、弟邪魔が這入らぬ中、早くいたさう。

才次郎　ハア。

九市郎　活を入れい。

才次郎　ハア。

（才次郎、活を入れる。辰次息を吹きかへす。兄弟は刀を拔いて左右から詰めよる。）

辰次　ワアい……

（逃げ出す。）

（九市郎はその頭髮をつかむ。）

九市郎　辰次、もう駄目だぞ、この上はいさぎよく勝負をいたせ。

才次郎　モウ逃がしはせぬ、もし少しでも逃げるやうな事があつたら、有無を言はさず斬つてしまふぞ。

九市郎　とても助からぬ命だ、卑怯な眞似をして笑はれるな。

才次郎　サア、立て、立ち上つて尋常に勝負いたせ。

九市郎　サア立たぬか、サア立て。

（左右から辰次に迫る。辰次は猫の前の鼠の樣に小さくなつて默つてゐる。）

九市郎　何故、だまつてゐるのだ、サア立て。

才次郎　立たぬか、おのれ。

（蹴る。辰次倒れる。）

辰次　あなた方は私をどうなさるのでございます。

九市郎　勝負して打果すのだ。

辰次　何故、その樣な事をなされます、そんな、そんな怖ろしい事を何故なさいます。

九市郎　汝を殺したいから二年の間、苦勞をしてゐたのだ。

才次郎　汝を殺さねば我等は國元へ歸れぬのだ。

辰次　私は、あなた方に何も惡るい事をした覺えはございません、それにそんな恐ろしい事を。それはあの時、市郎右衞門樣にいたしました事は私が惡いかも知れません、併し私だつて何も先方が何もなさらないものをあんな事をするわけはありません、あの時は隨分ひどい事をなさいました、私の事を犬侍、茶坊主侍、研師職人のなんのかのとその上滿座の中で私の顏に唾を吐きかけました、あの事を見て居た人は皆私の事を可哀想だと言つてました、もしあれがあなた方でしたらどうなさいます、そのまゝ御我慢なさいますか、そんな事はありますまい。……意地を御知りなさるあなた方なら、やつぱり私の樣にして相手を斬つてしまふでせう、それが本當でせう、それを今更敵討ハヽヽヽ。それに市郎右衞門樣と私の仲はあれですんでゐるのでございます。

（辰次、兄弟の樣子を見て馴々しく。）

辰次　イヤ何しろ暫らくでございました、隨分永くお目にかゝりませんでしたが、イヤ、いつもながら御機嫌よく御目出度うございます、かうしてお目にかゝつてをりますと、今更のやうに思ひ出しますは二年前の事……よく私にお金の御用を仰せつけ下さいました、平井樣の若旦那、私の伜によく學問の御けいこをして下さいました、平井樣の若旦那方そのあなた方が私しを殺す、ハヽヽヽ馬鹿……馬鹿らしいそんな事のあるわけがありませんハヽヽ、武士のあなたと町人の私が勝負をするハヽヽヽ、そんな間違つた事はありません。

九市郎　默れ、以前のよしみはよしみ、只今は其方は敵だ、われ／＼の兄を殺した敵だ。敵討は武士の習ひだ。

辰次　しかし、私は前に申上げた通り、あなた方に惡い事をいたした覺えはございません、何卒御勘辨を願ひます、御勘辨を。……

才次郎　コリヤ、辰次、此の場になつて未練を申すな、たとへどの樣な事があらうとも今更汝を助ける事はないのだ。

九市郎　時が延びると面倒だ、かれこれ申すな、サァ辰次立上つて勝負しろ。

才次郎　サア立て、立て、立上つて尋常に勝負いたせ。

辰次　勝負を、まアお待ち下さいまし、なんの爲にそんな馬鹿々々しい事をやるのでございます、私はあなた方には、何のお恨みもございません。

九市郎　マア、なんとでも申せ、よい、よい、立たぬなら立たぬでよい、ソレ弟……。

才次郎　ハア……覺悟いたせ。

辰次　ア、お待ち下さいまし、おまち下さいまし、立ちま

すく\/、立てとおつしやるのなら立ちます、なんの爲めに立つかわかりませんが、立てとおつしやるなら立ちます、何んだか私にはさつぱり譯が判りません。

才次郎　立つなら早く致せ。

辰次　ハイ、只今立ちます、只今立ちます。

九市郎　サア、早くいたせ。

辰次　ハイ、立ちます、立ちます。

（辰次、やうやく立つ。）

辰次　これで宜しうございますか、サア立ちました、これでよろしうございますか。

九市郎　サア、立つたらその刀を持て。

辰次　エ、刀、そんなとんでもない、なんでそんなものがお二人樣、私はこれで澤山でございます、これでもう御許し下さいまし。

才次郎　おのれ又その樣な、一寸免れを申すな、面倒た、持つのがいやなら持たなくともよい、サア覺悟いたせ。

辰次　イヤ持ちます、持ちます、ハイ只今持ちます、暫らく\/お待ち下さいまし、持てばよろしいのでございませう、持ちます\/。

（刀を持つ。）

辰次　あゝ……この刀で斬り合をするのでございますか。

（辰次、いきなり刀を投げ出し。）

辰次　九市郎樣、お草鞋の紐が解けてをります、結ばせて下さいまし。

九市郎　エヽ、いらぬ事をいふな、何といふいやな奴だ、サア刀を持て。

辰次　ハイ、ハイ、持ちます、持ちます。

（辰次、仕方なく刀をやつと拾ふ。）

九市郎　それでよし、その方も兄を討つたる程の手並がある、サア用意よくば、イザ。

才次郎　イザ。

（兩人は左右から詰めよる。）

（辰次は いきなり刀を投げ出して 大地に坐つてしまふ。）

辰次　マア、おまち下さいまし、おまち下さいまし。

才次郎　おのれ、またその樣な卑怯な眞似をいたす、武士の作法と存ずる故、尋常の勝負をいたせと言ふに、おのれ左樣な事をいたすなら、モウ容赦はないぞ。

辰次　左樣ではございません、卑怯からではございません、たつた一言、たつた一言申上げたい事がございます、それから、斬る共突く共御勝手になすつて下さいまし。

（この時、群集の中から。）

町人の一　よく\/の臆病だ。

町人の二　あきれたものだ。

町人の三　まつたくだ。
才次郎　默つて居て下さい。
辰次　この辰次が一生のお願ひ、私は腹からの町人、武藝の心得は更にございません、立合つたら私の殺されるはわかりきつてをります、勝負と云ふ事は判からぬからするのでございませう、處が私の負けるのは分りきつてをりますから、せめて髮の毛なりと手の指なり、まアその位の處を斬つて我慢しておいて下さいまし、何卒その位の處で御勘辨下さいまし、私は聾になつても生きてゐたいのでございます、死ぬのは怖ろしうございます、この上のお願ひは尻か股の處へ一、二ヶ所、それもかすり疵位の處で御勘辨下さいまし。
才次郎　世迷ひ言を申すな。
（又群集の中から。）
百姓　ソレ、うまく言つて、また親の敵と云つて逃げるぞ……
才次郎　えゝ默つて居て下さいと申すのに、兄上……歯がゆうございます、兄上がお斬りなさらぬなら私が代つて助太刀を致します、いらざる事ばかりつべこべと、サア覺悟いたせ。
（辰次の前に白刃を差しつける。）
（辰次は横つ飛びに飛び退く。）

辰次　あゝ危い、お待ち下さいまし〳〵、勝負いたします勝負いたします、この樣な處を不意にお斬りなさるのは卑怯です、亂暴です、どうでも殺されるのなら立ち上つて勝負を致します、それまで暫くの間待つて下さい〳〵。
才次郎　そんなら早く立て。
辰次　立ちます〳〵、しかしあなた方は、お情け深い方だ。どうで死なねばならぬ私故、せめてもの申譯に坊主になつて市郎右衞門樣の菩提を弔ふ爲に諸國を廻つて歩きます事を御許し下さい、ハイ、今すぐ坊主になつてお目にかけます、譯なく殺される事が分りきつてゐる、私をお殺しなさるよりは、坊主になつた私を見てお笑ひ下さる方が本當の敵討ちではございませんか、何も命をおとり遊ばすばかりが敵討ちではございません、私は弱いのでムります、弱い者をお殺しなさるのはつまらぬ事でございます、御兄弟樣、さうでございませう。
才次郎　兄上、古狐めが何にか申して居ります。
九市郎　勝手な理窟をつけて此場を逃がれる下心だ、もう申すこともあるまい、そこで最後に一言、その方の決心のつく樣に言つてつかはす、我々は決して汝を助けないといふ事を……。
辰次　えゝ……。
才次郎　サア立て、サア立て。

九市郎　立たぬか、サア立て。
（刀の先にて、チョイ／＼辰次の尻や股を突く。その度毎に。）
辰次　ア、痛い、痛い……。
（言つて飛び上る。）
九市郎　サア、辰々苦痛はさせぬ、一ト思ひに殺してやる、サア立て、立て。
（又突くので、辰次は苦痛に堪へられなくなつて方々逃げ廻る。）
（トヾ絶體絶命となり。）
辰次　立ちます／＼。
（言ひながら、仕方なく立つ。）
九市郎　よし、よし、しかし又坐つて仕舞つたり何にか言ひ出すに於いては容赦なく斬つて了ふぞ。
辰次　ハイ、ハイ、わかりました、わかりました。
（辰次は立上る。兄弟二人は上手に立つて白刃を中段につける。辰次は一寸見てブル／＼ふるへだす。そして醉拂ひか骨なしのやうた身體をクニャ／＼させて、一向敵對する態度になつて來ない、半ば意識してやつてゐるらしい。）
（兄弟は抵抗力のないものを討つ事も出來ず、殆んど持て餘しの氣味。）

才次郎　兄上、仕方のない奴でございますな。
九市郎　イヤ言語道斷の腰拔け武士、ヤイ辰次……その方如き人間が暗討とは申しながら如何いたして兄上を討つた、助太刀あつてか申せ。
辰次　（刀を投げる）ハイ、ハイ、左樣でございますか。ハイ、ハイ、有難うございます、申上ます、申上ます。
才次郎　その方、劍法を存ぜぬ故、めつた斬りに兄上を斬つたな。
（辰次は苦しい思ひ出をさけようとつとめる。この時、開帳の太皷の音、百舌の聲。）
辰次　あゝ、太皷が聞えます、おゝ若旦那百舌も啼いてをります、いゝ天氣でございます、まア暫くお休みなさいまし、未だ午前でございます、暫くお休みなされまし。
（柿の木を見て。）
辰次　おゝこの柿の木もよく色づきましたなあ。
九市郎　左樣な事を聞いては居らぬ、兄上を討つた樣子を話せ。
辰次　ハイ、申上げます、申上げます、……あの粟津樣の御庭には澤山の柿の木がございましたが……市郎右衛門樣は柿がお好きでございましたなア……今思ふと夢のやうでございます、魔がさしたのでございますなア……その頃よく御二人共紫屋町におあそびに御出でなさいまし

たなア、そのお歸りに私の宅にお立よりなされて、コリヤ辰次兄上には内密で五兩たのむ三兩たのむとその頃は誠に御盛んでございましたな、その時分お庭の離れを御普請最中でございましたが、其後出來上りましてございますか。

九市郎　おのれ、……默つてゐればよい氣になつて、さまざまの事を申す。

辰次　ハイ、ハイ、御氣に障りましたら、何卒御勘辨を願ひます……御勘辨を……。

（辰次、兄弟を盗み見て。）

辰次　ア、、長い御苦勞なされましたな、今日お目にかゝりまして、今更申譯のない氣がいたします、お許し下さいまし……。御許し下さいまし。……ア、私は坊主になる御約束でございました……

才次郎　兄上、こやつを殺さねば私達は國へかへる事が出來ませぬ、家中の者に顏向けが出來ません……サア斬つて了ひませう……。それでいゝのでございます。

九市郎　さうだ、今迄なんの爲にためらつてゐたのか。こやつを殺す爲に、いかに苦しんでゐたのか分らない、ソレツ……

（弟に目配せする。）

（辰次あわてゝ逃げろ、そして大聲にどなる。）

辰次　勝負いたします。

（これにて兄弟はまたためらふ。）

九市郎　勝負いたすか。

辰次　いたします、だまし討はいけません、得心させて殺して下さいまし、勝負いたします、いかにも承知いたしました、私も覺悟を極めました、この上はそウおせきなさる事はございません、ですからお安心なさいまし、いかにも研屋辰次、御兄弟に討たれます。

九市郎　よい覺悟だ、左樣なくては叶ふまい。

才次郎　いらざる事にて時が移つた、然らば改めて、サア用意はよいか……

辰次　用意も何もございません、あなた方は狼、私は鼠でございます、弱い者を御殺しなされて何かお手柄になります、御自慢になります。

（一寸とした反抗。）

九市郎　默れ……又初めをつた、サア立てッ……。

（又刀の先にて腰をつく。）

辰次　痛い、痛い、この樣な苦しい思ひをするなら一ト思ひに殺して下さい、その方がようございます、……サア勝負しませう、よろしうございますか、よろしうございますか。

（辰次、殆んど泣かんばかりなり。）

九市郎　おゝ、サア參れ、その刀を持て。
（辰次刀を持つ。）
辰次　サア、よろしうございますか、まだでございますぞ、私は弱いのですから、私の方から斬り込まして下さい、まだでございます、まだ、まだ……私はまだ、構へが出來てゐません、今討ち込んで來ては卑怯でございます、まだ〳〵。
（手の甲で涙を拂ひ、刀を持つて立つて居る辰次は勝負をするのが怖しくなる。刀を投げ出して又絕叫する。）
辰次　卑怯だ……御前樣達は卑怯だ。
二人　なにッ……。
辰次　どう思つても算盤に合ひません、あなた方は刀の尖で私の腰を突いて無理に勝負をさせようとする、そして、やたらに私を殺さうとする、私は命が惜しい、私はあなた方に只殺される樣な氣がします。あなた方は兄を殺された敵と云ふにきまつてゐる、それが私には分らない、武士の習ひとおつしやるが私は武士ぢやない、そんな掟は通用しない、それに私は勝負をするのはいやなのだから其の私を討つのは人殺しだ、敵討ちと人殺しとは違ふ、私を殺してあなた方は大手を振つて故鄕に歸るでせう、敵討ちでない、人殺しをして……。

才次郎　兄上、兄上、如何いたしませう。
九市郎　（せき込む）憎い奴め、たとへ何んとあらうと世間の手前我々はおのれを殺さねばおかぬ、敵討でないと罵りたくば罵れ、只汝を殺せばそれでよいのだ、問答無益だ。
辰次　えゝ、そんな亂暴な事がありますものか、あなた方は人殺しだ、人殺しだ。
（辰次泣く。）
二人　………。
辰次　この樣にお詫びしても御きゝ入れ下さいませんか、研屋辰次は武士ではございません、おゝ私は犬でございます、犬を切るのはお刀の汚れ、何卒御勘辨を〳〵這つて步けとおしやるなら、ソレこの通り這つてもあるきまする。
（辰次、犬のまねをする。）
辰次　これ程にお願ひ申上るのでございます、何卒、何卒、御勘辨を……。
（平身低頭する。）
才次郎　兄上、兄上、如何いたしませう。
九市郎　始末の惡い奴だ。
（兄弟は仕方なく木の根に腰を下ろしてしまふ。）
（辰次いゝ氣になつて長々と臥てしまふ。）

（彼はウン〳〵とうなつて居る。）
百姓一　いや、めづらしい敵討だ。
百姓二　とても、今日の間には合ふまい。
百姓三　この間に御参りの方を先にして來ようか。
百姓四　それがいゝ〳〵。
（四五人上手に這入る。上手から前の僧良觀出る。）
（この體を見て。）
良觀　おゝ、モウすみましたか。
九市郎　イヤまだでございます、この上もない卑怯者、困つてしまひます。
良觀　勝負をなさらぬのか、おゝ長々と臥てござるな。
才次郎　刀を持たすと坐つてしまひます、手に合ひませぬ。
良觀　それは〳〵おゝ喉がかわいたと思うて麥湯を持つて參つた、おのみなさい。
二人　有りがたう存じます。
良觀　誰しも死ぬのは嫌なものでございます、まア出來る事なら助けておやりなさい、では後にお出で下さい。
（良觀這入る。）
九市郎　あの僧は中々親切なお人だ。
辰次　左樣でございます。
才次郎　助けてやれとおつしやつてございました。

辰次　左樣でございます。
九市郎　助ける事は出來ぬ。
辰次　左樣でございますか。
九市郎　たわけ者め、その方に申して居るのではないわい。
（辰次はそのまゝ首をうなだれてしまふ。）
町人　助けてやれやい。
町人　助けてやれ、とても駄目だ。
（かういふ群集の聲に兄弟は仕方なく。）
九市郎　辰次、如何にも其の方は犬だ、畜生だ、犬を切る刀は持たぬ。
辰次　え……
才次郎　勝手な處に行けッ、再び私達の目にかゝるな。
辰次　…………
九市郎　犬侍め……
（辰次を蹴る。）
辰次　有りがたうございます、よく御けり下さいました、ありがたうございます。御立派な御仕打ちでございます、ありがたうございます。サアあなたも兄上と同じ樣に少しおけり下さいまし、私は犬でございます、有りがたうございます。
才次郎　卑怯者めッ、兄上參りませう。
九市郎　臆病、腰拔け武士。

辰次　ハイ〳〵ありがたうございます。

（兄弟は辰次を蹴り、上手に這入る。）

百姓一　いやたうとう助かつてしまつた。

百姓二　ずゐぶん骨が折れたらう。

百姓三　しかし思ひ切つて弱い侍だ。

（口、口にそしろ。）

（辰次はがつかりして居る。）

皆々　サア〳〵歸らう〳〵。

（群集は捨て臺詞にて左右に這入る。）

（辰次は坐り直し、ホツト溜息をつく。）

（太鼓の音。）

（辰次ビツクリする。柿の根方まで飛んで行き、其所にて茶をのむ。）

（そしてやがて兄弟の立去つたのと反對の方に脫兎の如くかけ出す、物かげより兄弟は躍り出て、兄は後から袈裟がけに一刀、弟は前に廻つて横薙に一刀。）

（辰次血潮を浴びて撞と仆れる。）

（兄弟は顔を見合せる。）

九市郎　やつと殺せた……ずゐぶん骨を折らせた。

才次郎　これで安心して國に歸れます。

九市郎　然し、何だか私は急に國に歸るのがいやになつた。

才次郎　何故でございます。

九市郎　敵討をしたやうな、氣がしない、辰次のいふ通り人殺しをした氣がしてゐる。

才次郎　然し、此まゝ歸らずにもゐられません。

九市郎　それはさうだが、國に歸つて人々に褒められる事が苦しい。

才次郎　立派に敵討をして歸つたと思ひませう、故鄕の人は……。

九市郎　まさか、人殺しをしたとは申すまいなあ。

才次郎　だれが申しませう。是れでも我等は一生の務を果したのです。

九市郎　では、ともかく歸國する事にしよう。

（兩人は刀を納め、襷をとる。）

（御詠歌の聲、靜かに。）

――幕――

稽古中の研辰

此の「稽古中の研辰」は、通し狂言にてする時は、序幕粟津城内侍溜りの間の場の次ぎに第貳幕目として上場せらるゝもの也。

登場人物役割

研屋辰次
三上傳十郎
早川幸内
八見傳八
小平權十郎
湯崎幸十郎
宮田新左衛門
山田三左衛門
水田虎十郎
一色左内
内山大作
同弟　定吉
同　平助
同　甚吉
外に町人の門弟見物人大せい

第一場　城下町道場の場

幕あくと、舞臺一面に、矢張り幕が引かれてある。その幕の下か持ち上げて、研屋辰次が出る。そして、見物に向つて、丁寧に會釋する。

辰次　皆樣、私は研屋辰次で御座います。是で皆樣方にお目にかゝるのは、三度目で御座います、定めし御客樣方の中には、又かと思召す方も御座いませうが、それさへなければ、私は又演らせて戴かうと存じます、實は昨日私は城中の侍溜りの間で、劍術を知らぬ所から、若侍共に嘲弄されました、根が町人の私、これは劍術の一ト手位は稽古をしておかねばならぬと思ひ付きまして、是から稽古を始めようと思ひます、併し私の事故、侍だから、劍術を知らねばならぬと言ふ事でなしに、つまり、世渡りの方便に、稽古を始めるのです。何卒、其のお積りで御覽下さいまし。

（辰次、幕の中に向ひ。）

お待遠樣で御座いました、私の方はすみましたから、お願ひ申上げます、皆樣、失禮をいたしました。

（辰次、悠々と花道へ這入る。同時に、幕あく。）

（舞臺は三上傳十郎の道場、玆に、三上傳十郎、粟津家の家臣、八見傳内、代稽古人、早川幸内、其の他町人風の門弟共、大勢稽古をしてゐる。）

幸内　稽古をやめい。

（一同、稽古を中止する。）

幸内　又しても、其の樣な亂暴な事をする、眞劍の場合、其の樣な事が出來ると思ふか。

門弟共　へえ。

（ト言ひ乍ら、下手に來り、面小手を取り、汗などふいてゐる。）

幸内　どうもいつ迄たつても駄目だ、犬おどし、西瓜畑の番人位が、精一杯の腕前だ。

八見　早川氏、町人同志の立合はなか〳〵面白いもので御座るな。

三上　時には、侍も及ばぬ意氣がある。

八見　左樣で御座いますな、時に先生、手前今日は殊の外長座をいたしました、モウ、お暇願はうと存じます。

三上　折角の御出に、おかまひも出來ず、失禮仕つた。

幸内　次は其方達の番だ、只今の樣な亂暴な事はせず、昨日の組合せ通りに、やつて見なさい。

（ト此の中、幸内は、別の門弟共に向ひ。）

門弟共　畏りました。

（門弟共、稽古道具をつけ、支度する。）

八見　では先生、御免下さいまし。

三上　何卒御母堂へ宜敷う。

八見　有難う存じます、それ、お送り申せ。

（ト宗吉と言ふ門弟、立ち上り。）

宗吉　へイ。

（ト、此の時、門弟共の稽古始まる。）

八見　ホウ、又始まりましたな。

（ト、八見は、そのまゝ見てゐる。花道から、研屋辰次、手に大きな土産物を持ち出る。）

辰次　劍術指南……オヽ、大分竹刀の音が聞える、併し手前の、此所に參つた事を家中の者共には見られては面倒。

（ト、四邊りを見廻し）よし。賴まう〳〵。

宗吉　へエー。

（ト、宗吉出る。）

宗吉　何誰樣で。

辰次　手前は、粟津の家中、守山辰次と申す侍、先生お出なら、御取次ぎを願ひたい。

宗吉　あの、粟津樣の御家來樣。

辰次　左樣。守山辰次と申します。

宗吉　暫くお待を。

（ト、宗吉、奥へ來る、幸内は一同に向ひ。）

幸内　稽古やめい。

門弟共　ハア。

（ト、一同下手に控へる。）

宗吉　先生へ申上げます、栗津様の御家來、守山辰次と申す方が、お取次ぎを願つてをります。

三上　何、栗津様の御家來。（ト、八見に向ひ）貴殿と御同藩、御承知かな。

八見　（宗吉に向ひ）守山辰次と申しましたか。

宗吉　左樣で御座います。

八見　先生は御承知なので、御座いますか。

三上　イヤ、一面識もなき御人ぢや。

八見　左樣で御座いますか。先生分りました其の守山が參つたと申すのは、コリヤ必ず、先生へ劍術の御指南を願ひに出たので御座りませう。

三上　何、指南を……

八見　左樣で御座います、其の守山と申す人間は、町人上りの、至つての横着者、昨日溜りの間にて、劍術の事から、同輩共に散々の恥辱を受けたので御座います、彼奴、其れが口惜しさに、御指南を願ひに出たものかと存じます。

三上　併し、それは不愍な事ではないか。

八見　處が先生、守山は非常にずるい人間で御座います、今更彼が、劍道修業を思ひ立つたとも考へられませぬ。

三上　兎に角、御面會いたさう。

（ト、此の時、辰次、大幕を揚げ。）

辰次　お取次ぎは、まだで御座るか。

三上　宗吉、御案内申せ。

宗吉　ハイ、お待遠樣で、何卒、お上り下さいまし。

辰次　左樣なれば御免を。

（ト、手土産をぶら下げて、悠然と通る。）

宗吉　先生、お案内申しました。

（ト、下手に控へる、八見傳内の居る事を知らない。）

三上　守山氏と言はるゝか、手前、三上傳十郎で御座る。

辰次　ハア、是は申し遲れました、手前、守山辰次、何卒、以後は御別懇に――

三上　御丁寧な事、して、當道場をお尋ね下されし御用は。

辰次　へイ、實は、その――少し折入つて、お願ひ申したき事が御座いまして。

（ト、言ひ乍ら、始めて、八見の居る事に氣がつき。）

辰次　時に先生、今日は曇りました爲か、うつとしいお天氣で御座りまするな、ハア、あれが御門弟衆の御名札、大層な人數で御座るな。

三上　して、貴殿の御用と申すのは。

辰次　ハイ、實はその、時に先生、是は甚だ粗末な物では

御座れ共、手前今日お近附きの爲、お受取りを、して、先生は御酒の方で御座りませうな。

三上　守山氏、御用件は、何事で御座る。

辰次　イヤ、その、實は、……併し先生、世間ではよく承知いたしてをりますな、當方の先生は劍術がお上手だ、彼所の鮨司がうまいと相場が極れば、だれしも横町を通り越しても買ひに參る道理、イヤ、恐れ入りました。

三上　是守山氏、御用件は何かと、最前から伺つてゐるのが、お分りにならぬのか。

（ト、是にて辰次、八見に向ひ。）

辰次　若し八見樣、貴方は何んと思つて、こんな所に居るので御座います。

八見　何を申す、手前、先生とは御別懇故、伺つたのぢや。其の方こそ何んの爲に參つたのぢや。

辰次　それは——その。

八見　ア、分つた、其の方劍術を習ひに參つたな。

辰次　貴殿よく御存じで御座いますね、手前劍術が習ひたければ、御家中の御指南番にお願ひ申す、誰が町道場などに來るものか。

八見　成程、是は其の方の申す通り、先生、守山は御指南を願ふのではない相で御座います。

辰次　どうも餘計な事が仰つしやりたいのだな、先生に何か言つたので御座いますね。

八見　まアいゝ、拙者が是に居たのでは、其の方も勝手が惡からう、では拙者は歸つてやるから、後でよく先生へお願ひ申せ。

辰次　併し八見樣、そんな事を言つて、又、明日城中で、守山が劍術を習ひに行つたなどと言はれては大迷惑で御座いますから。

八見　まア、何んでもよい、それならそれにしておいてやる、處で拙者は歸つた方がよいだらうな。

辰次　御勝手になさいまし。

八見　どうも其の方がよささうだ。ハ——イヤ先生、重ね重ねの御邪魔、では是で失禮いたします。

辰次　まア、よろしいでは御座いませんか。

八見　まア、よい〱。

（ト、三上に會釋して這入る。）

辰次　やつと歸りましたな。……イヤ、先生手前勝手な事ばかりを申し上げて、なんとも恐縮で御座りました。

三上　それはよろしいが、御用件は何か。

辰次　ハイ、では申し上げまするが、手前、その、本日御伺ひ致しましたのは、實は、先生に、劍術の御指南を願ひ出ましたので。

三上　何、當道場へ、入門が願ひたい。

辰次　左樣で御座ります。
三上　それはならぬ。
辰次　エ、。何故で御座りますな。
三上　貴殿は、栗津家の御家來では御座らぬか、貴殿が最前申す通り、お抱への御指南番があられる筈、其の人を差し置き、當道場へ御入門とは心得ぬ次第、又拙者に於ても迷惑御覽の通り町道場は、町人相手の指南場所、御家中の侍の入門はお斷り申す。
辰次　エ、其の樣な、掟があるので御座りますか。
三上　さうぢや。
辰次　それはその、その樣な、御交際(おつきあひ)筋も御座いませうなれ共、それはそれで、是非一つお願ひ申し上げたいので——
三上　如何申されても、出來ませぬ。
辰次　左樣で御座りまするか、では先生、手前本當の事を申し上げます、其の斯樣な事を申し上げますのは、甚だ恥入る次第で御座りまするが、實は手前は、元からの侍では御座りませんので……以前は御城下で研屋渡世を致し居りました者、それが、當栗津樣の御見出しに預り、斯樣に大小を差してゐられる身分となりました者で、それが爲に家中の若侍共から、何かにつけて惡口を受けまする、其の爲に侍を、やめさせられる樣な事が出來ましては大變と、少しばかり劍術を稽古しておかうと、斯くは御指南を願ひ出ました次第、其れ故手前何分家中での稽古もなり兼ねまする所から、……實は斯樣な事は、人樣の前では、中々言へる事では御座いませんが、明瞭申し上げて置きませんと間違ひの種と存じまして申上げます、で御座りますから何卒侍一人を仕上げると思召して、何卒御入門の儀、御許しをお願ひ申上げますので。
三上　町人故、劍術は知らぬと申さるゝか。
辰次　左樣で御座ります、これでも手前、刀劍の研磨、新刀古刀の目利にかけましては、子供の時から年季を入れました者で、其の方で暮して行きますには、少しも不思議はないので御座いますが、同じ暮して行くのなら士農工商と人の上に立つ、侍渡世の方が、面白いと存じまして……で御座りますから劍術の方は、全然(まるつきり)の素人なので、それで手前も少々元手を入れる氣になりましたので。
三上　貴殿が其れ程の事打あけられた上は、承知いたした、お教へ申さう。
辰次　エ、、では御教へ下さいますか、有難う御座ります。扨、斯く話が極りますれば、早速に御伺申上度いのは、手前の樣な、成り上り者でも大丈夫で御座いませうな。
三上　大丈夫ぢや、何事も其の人の心掛け一つぢや。
辰次　さうで御座りませうな、何も竹刀が人見しりをする

害がないので御座いますから。時に先生、是は又一番肝心な事で御座いますが、凡そ、どの位稽古をいたしましたら、よろしいもので御座いませうな。

三上　どの位の稽古、そりや何を申すのだ修業に月日はない、修業は一生ぢや。

辰次　エ、、一生？　實は先生、其所が御相談なので御座いますが、如何なもので御座いませう、二日或は三日、精々五七日位で、間に合ひます、劍術を願ひ度いので、——

皆々　ハ、、、。（ト、一同笑ふ）

三上　何、三日、何を馬鹿な事を申す、其方は劍道をなんと心得て居る、修業を何んと心得てゐる、怪しからぬ事を申す御人だ、其の樣な性根を持つて劍道修業が出來るか、入門は許さぬ。御斷り申す。

辰次　先生、御立腹では困ります。實は手前その修業は修業で御座りまするが、只今は侍の一分の相立たぬ事が澤山に御座りますので急場の間に合せ、侍らしくなりたいので……何、其の方さへ、うまく行きますれば、手前の修業は愚か、孫子の代迄も、御稽古を願ふ心組み、併し、先生が仰つしやつた劍術は心がけ一つとの言葉もあり、又手前は生れつき、至つて器用な質で、其の心がけのよい人間の樣な氣のいたしまするのも、不思議な位で、それに、先生の樣な大名人の御稽古故、鬼に金棒、手前死物狂ひになつて必ず稽古を致します、つまり五七日と申しましたのは、手前の心意氣を申し上げましたので御座ります、何卒其のお積りで、極く筋のいゝ所を、一ト手、二タ手、早い所で、御願ひ申し上げたいもので。

三上　三日、五日と申す程の精神を以て稽古致すと申すのか。

辰次　手前、石にかぶり付いても、必ず、覺えて御覽に入れます。

三上　其の心掛けは天晴れぢや、ぢやが、呉々も、修業は一生との事を忘れてはならぬ。

辰次　エ、、その方は、それで宜敷う御座ります、が、手前も折角の處故、極く早い所で御願ひ申し上げます、では一つ、早速にお願ひ申し上げます。

三上　宜敷い、支度をなさい。

辰次　畏りました。

三上　幸內。敎へてやりなさい。

幸內　畏りました。

辰次　では、先生では御座いませんので。

三上　始めは、幸內氏に賴みなさい。

辰次　…………

幸內　早く、支度をなさい。

辰次　畏りました。――時に甚だ申兼ねまするが、手前本日は急場の事故、道具の用意が御座りませぬ。何誰か、本日一日だけ、お道具をお貸しを願ひ度いので――

幸内　平助、其の方のを貸してやれ。

平助　ヘイ。

（ト、平助と言ふ町人、自分の道具を取つて）

平助　それ、お使ひなさいまし。

辰次　是は恐縮で御座るな。

（ト、辰次、面、小手をつけ乍ら平助に向ひ。）

辰次　貴殿には、何日位お稽古をなされてゐるな。

平助　私は、一年にもなるかね。

辰次　ハア、一年、して其方は。

門弟一　私は、二年近くもなるね。

辰次　ホウ、二年、それで、一體、何にするのだ。

門弟一　何、只、覺えておくのだね。

辰次　ハア――只おぼえておく、ても物好きな御人だナ。

幸内　サア、支度が出來たら、眞中に出なさい。

（ト、辰次、支度を終り。）

辰次　承知いたしました、此の道具を身につけましたら、急に武者振ひがして參りました、モウ、これだけで、一ト手二タ手いけるやうな氣持ちが致して參りました。成程、これは又眞劍とは異なり、操り工合のよいもので御座りまするな、これで――「お面ン」成程これなら面白相だ、併し此の面と申す物は、重い物で御座るな、是なら、打たれても、さのみ、痛くも御座るまい。（ト、自分の面を打ち）ウン、痛くはない、是なれば大丈夫。

幸内　サア、用意よくば、早く來なさい。

辰次　畏りました。

（ト、辰次、眞中に出る。門弟共、面白がつて見る。）

幸内　まづ、竹刀の持ち樣。足の構へ樣から、教へる。

辰次　イヤ暫く、如何なもので御座らう、急場の事故、成可く早手廻しに御願ひ申し上げます、何、竹刀にした所で、それ……斯樣に持てば宜敷いので御座いませう、足の構へにした所で、先方から打たれぬ樣にさへすれば、いゝわけで、それ故、何卒、筋のいゝ所から、お始めを願ひたいので。

幸内　宜敷しい、では貴殿の方から、打ち込んで來なさい。

辰次　えゝ。

幸内　拙者を打つて見なさいと申すのだ。

辰次　よろしう御座いますか、本當に、よろしう御座いますか。

幸内　いゝから、早く打つて見なさい。

辰次　左樣仰つしやつても、何も身體に、おつけなさらないのに、打つても宜敷しいので御座いますか。

幸内　その樣に、一チ／＼饒舌つたのでは仕樣がない。手前を親の敵と思つて打つて見なさい。

辰次　併し手前、そんな氣持は存じませんので。

幸内　餘計な事を申さず、早く參れ。

辰次　では打ちますぞ、すぐ打てる樣な氣がいたしますが。

幸内　いゝから打つて見なさい。

辰次　では一ツ。

（ト、辰次いろ／＼の形をなし、最後に「やア」奇妙な聲を出して打ちにかゝるが、手もなく擊退されて、したたか、お面をなぐられる、一同大笑する。）

辰次　アイタ――。

幸内　如何いたした、サア早く、只今の樣に打ち込んで參れ、サア早く參れ、打ち込んで參れ、參らぬか――それお面だ。

（ト、二度目のお面を頂戴する。）

（辰次は、おろ／＼してなすべき術を知らない、竹刀を投げ出し、大急ぎで面をとつてしまふ。）

幸内　如何いたした、稽古中に面を取る奴があるか。

辰次　暫く／＼、お待ちを願ひます、どうも、只今のは、腦天を直かに打たれた樣で御座います、暫く／＼。

幸内　其の樣な筈はない、貴殿ちやんと、面をつけてゐるではないか。

辰次　イヤ、たしかに直かに打たれたので御座います、左樣でなければ、あんなに痛いわけはない、面の上が、ほころびてゐるのでは御座いませんか、鼻から腦天へかけて煙硝臭い臭ひがいたしました、頭の筋でも斬れたのでは御座るまいか。

（ト、辰次、其場に坐し、ハア／＼息を切つてゐる。）

三上　其樣な事はない、皆、其の樣な思ひがするのぢや。

（ト、辰次、三上の方を向き。）

辰次　大丈夫で御座りまするか。

三上　大丈夫ぢや、その樣な事におくれは駄目ぢや早く支度をいたせ。

辰次　承知いたしました。（ト、辰次立ち上り、面を取り上げ）併し先生、只今の拙者の工合は如何で御座りました、初めてにしては上出來で御座らうかな。

三上　早く面をつけなさい。

辰次　承知いたしました、つまりあの意氣で御座るな、拙者が一生懸命に打ち込んで行くすきを見計つて「ポン」と打つて來るので御座るな、イヤ分つて參りました、では此の次ぎは、早川氏、貴殿の方から拙者を打ち込んでもらひたい。

幸内　何、拙者が最初に打込む……それは何故で御座るな。

辰次　色々にやつてみませぬと、呼吸がわかりません、つ

きり劍道と申すものは、形の物で御座る故、それを覺えてしまへばなんでもないもので（ト、辰次面を冠り）サア一つお願ひ申す。

幸内　では、よいなア。

辰次　サア、いらつしやい。

幸内　よいな、乾度よいな。

辰次　サア、何處からでも――。

幸内　よし、エイ。

（ト、辰次、一も二もなく、お面をしたたか頂戴する。その度に笑聲どつと起る。）

辰次　アイタ――。（ト、又大急ぎでお面を取る）

幸内　一チ一チ打たれる度每に、面を取つたのでは仕方がない。

辰次　イヤ決して左樣では御座いません、只今のはまだ早川氏の竹刀が、何處から飛んで來るか見當のつかぬ中に、いきなり「お面ッ」を打たれたので御座います、貴殿の竹刀がつばめの樣に、拙者の眼の前をかすつて横つ腹でも打たれる事と思つてをりまするると、頭の方で「グワン」としたので、びつくりいたしました。つまりあの意氣で御座るな、横に拂ふと見せかけて頭を打つ、ペテンで御座るな、イヤ拙者、大分見當がついて參りました。（ト言ひ乍ら面をつける）

辰次　では此の度は拙者の方から打ち込みまするぞ、宜敷う御座るか。

幸内　サア、參れ。

（ト、辰次は、竹刀を妙な處から振り廻して横の方から相手のお面を打たうとする。が直ちに擊退され三度目のお面を戴く。笑聲又起る。）

辰次　アイタ――。（ト、又、面に手をかける）

三上　待テ、面を取る事はならぬ、其の樣な心がけで覺えられるか。

辰次　イヤ、鼻血が〱。

（ト、かまはず取つてしまふ、辰次の顏は眞赤になつてゐる。）

三上　守山、思ふ樣には行かぬであらうなア。

辰次　何、あなたそんな事のあるわけは御座いません、そんなに早くわかつて仕終(しま)つたのでは商賣になりませんや……サア次は早川氏が打込んで來る番だ、モウ最前の樣にもろくは打たれません。（ト言ひ乍ら辰次面をつける）

幸内　よし。（ト、わざと、竹刀の先きを方々に廻す、その度に辰次首を八方に振り身體を働かせて、その竹刀の先きを追ふ。よき程に幸内に又お面をやられる。此の辰次の動作(うごき)に從つて門弟共は低笑から高笑、やがて爆發的な笑ひになる。）

（此の時分から正面の武者窓の處へも、二三の顏が現はれ（武者窓は高い所にあること）同時に笑ふ。）

幸内　如何で御座るな、守山氏。

辰次　（やゝ刹那的の敵愾心にかられる）何分で御座います、併しモウお面の方は大分わかつてをりますので御座るから、少し外の方、小手とか、お胴とかに御願ひ申します、どうも手前共の竹刀の飛んで來る先きが見當がつきません、最初は胴なら胴、小手なら小手と、極めて戴かなくては無理で御座います、何しろ本日が始めてなので御座ゐますからなア。

幸内　よし、では今度はお胴へ參るぞ。

辰次　さう最初から極つてゐればなんでも御座いません。

幸内　よいな――。

辰次　ようムります。

幸内　お胴――。

辰次　アイタ――。

幸内　それ又、お胴。

辰次　アイタ――。

幸内　それその樣な事でどうなるのだ、サア又お胴に行くぞ、何故其の竹刀を遊ばせておくのだ、何故防がぬのだ。

辰次　何も遊ばせておきたい事はムいませんが、どう言ふ風にして防ぐのか、形がわかりませんので――

幸内　それ又お胴へ參るぞ〳〵。

（ト、幸内いろ〳〵にあしらふ、辰次その度に身體ごと逃げる樣な事をする、笑聲以前通り起る。）

幸内　どうした〳〵。

辰次　イヤ、その竹刀が胴に來るとはわかつてをりまするが、防ぐ恰好がわかりませぬ。（ト、又面を取り、三上に向ひ）恐縮乍ら先生、御門弟衆の立合ひを一つ拜見いたし度いもので、さすれば兩方が一度にわかつてしまひます、どうも、面をつけてをりましたのでは、まるつきり見當がつきませんので――。

三上　ム、それもよからう。

三上　三吉、幸兵衞、兩人立合つてやれ。

兩人　畏りました。（ト、兩人支度をする。）

辰次　御兩所種々と無理を申して相すまぬ、是非拜見させて戴きたい。

（ト、此の中兩人、中央に來り、形通りあつて左右に別れ、）

兩人　ヨウ〳〵。（トあまり、上手でない立會ひ宜敷くある。）

三吉　お面。（ト是を幸兵衞見事に受ける）

辰次　成程見てゐりやなんでも御座らぬ、お面と來るのを、只今の町人の樣に。（ト、仕方をなし）斯うで御座る

な。

幸兵衛　お小手。（ト是を三吉見事に拂ふ）

三上　そウよい――。（ト、兩人は下手に控へる）

三上　どうぢや、あれでよいか。

辰次　有難う存じます、只今のお小手の時に、（ト仕方をなし）斯うで御座つたな、イヤあれなら竹刀の逐りがすつかりわかりました。忝う厶つた、では幸内氏、今一ト手お願ひ申さう。（ト面を冠りかけ、又取り）恐れ乍ら御門弟衆、御湯を一杯頂戴いたし度い、拙者殊の外咽がかわいてな。（ト門弟の一人、湯をくんでやる）忝う御座る。

（ト辰次湯を呑み面をつけ）

辰次　お待遠で厶つた。

幸内　サア參れ。（ト、辰次、自重した積りにて）

辰次　お面。（ト打ち込むをはね返される）

幸内　駄目だ、その樣な事では。

辰次　左樣で厶りまするか。

幸内　餘計な事は言うてはならぬ。

辰次　では、こんどはお小手。（ト、又打ち返される）

幸内　どうもその樣に饒舌乍らでは困るな。

辰次　左樣で厶いますか。（トこんどは幸内の方から）

幸内　それお面だ。（ト辰次、今見た通りに竹刀をつける）

辰次　矢張りぶたれる。

幸内　受け方が遲いからだ。

辰次　どうもあなたはずるい、お面と言ふ聲の方がおそくかゝりますぞ、打つてからお面と言ふのだからやりきれない。

幸内　眞劍勝負に一チ〳〵斷る奴があるか。

辰次　成程。

幸内　それ又お面。

辰次　アイタ。

幸内　打たれてしまつてからいつ迄も頭の上に竹刀を横にしておく奴があるか、サア早くその竹刀を取り直して、參るのだ〳〵ヨウ〳〵。

辰次　ハア――。

幸内　そ、それお小手。（ト、是にて辰次、竹刀を飛ばして仕舞ふ）早く竹刀を拾はぬと又打たれるぞ。

辰次　竹刀が何處かに行つてしまつて……。

（ト、辰次、不恰好に、面の格子の間から、板の間を這ひ廻り乍ら、やつと竹刀を拾ふ、此の間失笑聲續き起る、辰次立上る。）

幸内　それお胴。

門弟の一　そんな事では駄目だ。

三上　默つてゐぬか。

幸内　それ又參るぞ、お突き。

（ト是にて辰次、あとずさりして道場の隅に尻もちを突く。）

辰次　そんな乱暴な手があるので御座いますか、息が止り相になりました、先生別に命にはかゝはりませぬか。

三上　なんとも言へぬ。

辰次　戯談仰つしやちや困ります、こんな事で命に別條があつてたまるもので御座いません。

幸内　えゝ、そんな弱い事でどうなると思ふのだ、早く、眞中へ參れ〳〵。（ト、無理に、辰次を、引ずり出し）

幸内　サア參るぞ。それお面。お小手、お突きだ、お胴だ。

（ト、是にて、辰次、中心を失ひ、散々に、打たれて、氣絶する。）

宗吉　先生、眼を廻しました。

三上　面々、取つてやれ。

皆々　ハイ。

（ト、一同にて、辰次を介抱する、辰次、心づく。）

三上　どうぢや、守山、どう致した。

辰次　…………。

三上　何を致してゐるのぢや、氣がついたら早く、立會へ立會へ。

辰次　…………。

三上　何を致してゐるのぢや。幸内、立ち上がらせい。

幸内　畏りました。

辰次　暫く〳〵。何卒暫く、手前、急に身體中の、節々が痛み出して、立つ事が出來ませぬ。

三上　何を申す、其の樣な事でどうなる早く立ち會へ。

辰次　意地にも我慢にも立つ事が出來ません。今日は何卒、此の位な所で、打ち切りに御願ひ申します。モゥ〳〵手前、澤山で御座ります。

三上　何を申す、では其方、何んの爲めに修業に參つたのだ。

辰次　それはその修業には違ひ厶いませんが、最前も申上げた通り只今のところはその職を覺えまする爲に——

三上　怪しからん、侍の武藝を、世渡り道具と心得て參つたな、コリヤ、劍道はな、永年の辛苦艱難を經て、おのれの心を磨くものなのぢや、一朝一夕の用に立つるものではないぞ。

辰次　併し、今時は皆一足飛び、正直に年季を入れてゐたのでは、おいて行かれて終ひます、お願ひで御座います、是非一つ——イヤ、手前の事ばかり申し上げてゐたのは、心得違ひ、處で先生、手前、少々位な處は奮發もいたしまする故、何卒一つ、特別に、御手づから、早い所を一つ。

三上　無禮者め、何んと言ふ不埒者だ、禮物を口にして、

指南せよとは、見下げ果た奴だ。
辰次　左樣仰つしやられると、手前、先生の、どの邊迄が心を繋ぐ劍術で、どの邊迄が世渡りで御座るか、一向に見當がつきませんので――つい。
三上　馬鹿者め、幸內。其奴を追ひ出せ。
幸內　ハア。
辰次　歸ります／＼手前かうなると、何處から話しを持ちかけていゝか、わからなくなつてしまひました。
平助　サア、俺の道具を、ぬいで行くのだ。
辰次　アイタ、、暫らく／＼、あまり手前の身體に障らぬ樣に願ひます、お道具なら、すぐ手前お返し申上ます、そんな亂暴なことをして、身體中が痛んでなりませぬから。
（ト、辰次、やつと道具を脱ぎ。）
幸內　では、劍術は思ひ切る氣か。
辰次　そりや、知らぬより知つてゐる方がよろしいまでの事、只それ丈けの事で、手前の樣な場合は、そウ侍になつてゐられるのですから、今更藪蛇も氣のいゝ話で御座いますから。
三上　幸內、早く、歸してしまはぬか。
辰次　只今歸ります／＼。
幸內　サウ極つたら早く歸れ／＼。

辰次　そろ／＼おいとまを、いたしませうかな。
幸內　サア早く立たぬか。
辰次　只今歸ります。（ト、身體中が痛み容易に立てぬ）
辰次　幸內樣、御厄介で御座いましたな。
幸內　いゝから、立ちなさい、貴殿も折角に氣がついて來たが、その樣では氣の毒だ、侍でありながら淋しい氣もいたさうな。
辰次　さのみ淋しくは御座いませんね、劍術なんてものは、竹刀を振り廻すばかりが能でも御座いませんよ、喧嘩は度胸と申しますからね。
幸內　マア、その位の處で、折れ合つて慰めておくがいい。
辰次　何、大丈夫で御座います、現在手前斯うして侍でゐられるのですからそれで澤山だつたのです。
幸內　いゝから早く歸りなさい。（ト、又立てぬ事）
辰次　甚だ恐縮乍ら拙者の大小羽織を一寸これへお取り下さい。
門弟　それ大小、羽織。
辰次　忝うムる、アイタ――。
（ト、坐したまゝ、大小を帶し羽織を着る。）
それから何れも手前も明日から參らぬので御座るから最前の八見氏には、今日の事は內々に願ひますぞ。
幸內　いゝから早く歸りなさい。

辰次　只今々々併し幸内様の御商賣も骨が折れますね。

三上　それ玄關迄つれ出してやれ。

皆々　ハア。

（ト、捨臺詞にて辰次の身體にさはる辰次。）

辰次　アイタ――、

（ト、飛び上る、此の模様にて舞臺廻る。）

第二場　同道場横手の場

道場の横手、茲に以前の八見傳内、同家中の小平、湯崎、宮田、山田、水田、内山、一色の八人、或は立木越しに或は石など臺にして道場の武者窓から、内部を覗いてゐる。

通りかゝりの町人四五人居る。

八見　來るぞ〳〵辰次の奴立つ事が出來ぬわい。

湯崎　餘程弱つてゐるな。

水田　それ又五體に障られて飛び上つたぞ。

小平　あの大小のさし様はどうだ。

山田　見得も外聞もあつたものぢやない。

一色　ア、又坐つてしまつた。

（ト此の時、道場の中から笑聲起る。）

宮田　たうとうかつぎ出された。

内山　ヤア來るぞ。

（ト口々に言ひ、皆々辰次の來るのを待つ、やがて横手に聲がする。）

門弟一　氣をつけてお出なさい。

門弟二　それお履物――

辰次　イヤ忝なう御座る、――何卒先生へよろしく。

（ト、辰次會釋して出て來る足の運びがにぶくなり腰のまはりをさすりなどしてゐる處へ八見以下の者が、いきなり辰次の眼の前に現はれる。と同時に武者窓の中から、門弟共の顏澤山に見える。）

八見外一同　ヤア守山。

（ト、辰次はつとする、そして無理からに虚勢を張る。）

辰次　各々方は何處から出て來たのだ。

皆々　ワハ――。

八見　どうだ守山、妙な腰つきをしてるな。

（ト、思はず辰次の顏を見て爆發的に一同笑ふ。）

湯崎　免許皆傳かハ――五日劍術の本體は。

皆々　ワアハ――。

水田　どうだ其の恰好では歩け相にもあるまい。

辰次　何を馬鹿な事を申すのだ、何があるけぬ事があるものか。

八見　世渡り侍か。

皆々　ハ――。

辰次　馬鹿な、そんな事を仰つしやる、あなた方だつて矢張りさうだ、お前さん達は劍術を知つてるばつて御奉公をして本當の侍の樣な氣をしてゐるが、あなた方よりもつと強い奴が出て來たら矢張り世渡り侍だ。
宮田　馬鹿。
皆々　ハ――
小平　各々守山は一人であるける相だから、我々は一足お先へ參らう。
一色　左樣いたさう、では守山氏、お先きへ。
（エ、皆々苦笑し乍ら下手へ入る。）
辰次　ヘヱ、八見のおしやべりめ、それにしても是はとてもたまらぬエ、身體を動かすと痛い、我慢が出來ぬ、えらい目にあつたものだ。（ト辰次上手に向ひ）
辰次　駕屋々々（ト呼ぶ返事なし）駕屋々々（ト下手へ呼ぶ返事なし）駕屋々々。
（ト、段々悲鳴になる。思はず大地に撞となる。見物人。門弟共一聲に笑ふ。）
（辰次の「駕籠屋」の呼び聲して。）

――幕――

戀の研辰

此の「戀の研辰」は通し狂言にてする時は四幕目、宿屋吾妻屋の場の次ぎに第五幕目として上場せらるゝもの也。

道後溫泉蔦屋の場

登場人物

守山辰次
黑川仁兵衞
町田定助
友七　番頭
甲　旅客
乙　同
手先
お由　姉娘
お峰　妹娘
お鈴　黑川娘
小君　藝者
太郎　お酌
國の井　後室
松江　腰元
外男女の浴客　大ぜい

道後溫泉の蔦屋。上手に第一の座敷、前面に葭戸が立切つてある。第二第三の座敷は棟續きで、第一第二の座敷の間が庭を隔てゝ、廊下續きて浴室へ行けるやうになつて居る。此の家體すべて廻り緣、座敷には肱掛窓、床の間及戸棚、室の中には衣桁、鏡臺、柳行李、火鉢、茶道具、行燈、燭臺など、軒には靑簾と提灯、庭には秋草の茂み、石のつくばひへ筧から淸水が垂れて居て、その傍に蟲籠などが置いてある。石燈籠と庭木の配置よろしく、所々竹の床几が出してある。夏の夜で月が一杯庭に射して居る。幕が明く。

（と浴客の町人二人と、盜賊調べの役人町田定助を中心にして、主要なる役の人も端役の人も、惣出で、それを圍んでがや／＼騷いで居る。蔦屋の番頭友七は、手傳つて町人の荷物を檢めて居る。その後に三人の手先と、男女の浴客が立つて居る。）

町人甲　それで私の方は宜しうムいますか。

町人乙　この外には笠と糸立が有るばかりでムいます。

町人甲　何なら、夫も此處へ持つて參りませう。

町田　もう好い／＼、其方等には用は無い。行け／＼。（と

帳面が繰つて）これ番頭、未だ此處に一人殘つて居る。肥後の浪人、加藤[illegible]之助と記してあるが、此の者は如何致した。何[illegible]此處へ參らぬのだ。

友七　へい。そのお客樣は、何度お呼び申しましても、腹が痛いとか、身體がだるいとか仰有つて、却々出て參りませんので、實に困つて居ります。

町田　それは怪しからん奴だ。武士とて容赦はない。これへ引摺つて來い。夫でも兎や角と申さば、繩うつて引立ると、嚴重に申して參れ。

友七　はい／＼、畏まりました。

（と友七は、辰次の居る第一の部屋へ入る。町田は群がる人々を顧視つて。）

町田　これ／＼、此の暑いのに、然う身共を取圍んでは困るではないか。

手先　サア退いた／＼。

（とこれにて群集の人は、二三歩後へ下る。此の時第一の座敷から、守山辰次が出て來て、町田の前へ住ふ。）

辰次　お役人、何ぞ御用でムるか。

町田　此の宿帳に記してある、肥後浪人と云ふはお手前か。

辰次　いかにも左樣でムる。

町田　然らば御用の趣を申上るが、五六日前より當家に宿泊する、大阪の町人、菱屋三藏の胴巻紛失なし、中には莫大な金子が入つて居るが爲に、同宿の方々を詮議する事に相成つた。甚だ御迷惑で有るが、一應お尋ね致す。先づ御姓名が承りたい。

辰次　拙者の名は守山、（と言ひかけて更に）いや、その帳面に認めて有る通りでムる。

町田　身共も盲目でないから、帳面を見て解つて居るが、取調べの順序として、御自身の口から伺ひたい。

辰次　自分が自分の名を名乘る事は、三歳の子供にも出來る事、それが盗賊詮議の種にもなりますまい。

町田　名乘らぬとあらば、それでも好い、宿帳などと云ふものは、得て變名を用ひ、夫を忘れてしまひ、後日迷惑する事などは、往々ある事で、たいした惡事でもないなら、夫は夫として、肥後の御浪人と云ふ事だが、言葉は正しく江州訛り、何故僞つて道中召さるゝか、夫が承りたい。

辰次　さあ、その儀は申し兼る仔細あつて……。

町田　御返答が出來ぬと言はるゝか。

辰次　如何にも……。

町田　此の上は是非がムらぬ。國名を僞り、變名を用ひて、上役人を欺く不埒な奴、繩打つて松山へ曳く。拙者と御同道召され。

辰次　その儀は……。

町田　ウム、盜賊と極つた。それ繩打てッ。
手先　はッ。神妙にしろ。
（と手先は十手を閃かして取圍む。辰次は慌てゝ。）
辰次　暫く／＼、お待ち下さい。然らば拙者の身分來歷を申上げたら、夫で宜しいのでムるな。
手先　早く申上げろ。
辰次　然らばお人拂ひを願ひたい。
町田　承知致した。それ。
（と合圖をすれば、手先も心得て。）
手先　退いた／＼。
（と云つて群集の人を追拂ふ。皆々一度は座敷又は物蔭へ入つたが、すぐ出て來て、かくれて立聽きして居る。）
町田　四邊の人は遠ざけたが、此の上かくし立致しては、爲に相成らぬ、つゝまず申すが好い。
辰次　然らば申上るが、生國姓名を僞りしは、仇討の望みが有つての事でムる。
町田　なに仇討……それは本當の事でムるか。
辰次　何の僞りを申さうか。御他言下さるな、拙者は江州粟津家に仕へし守山辰次と申す者。父は代々家老を勤め、巨萬の富をもつて、裕福の聞え高き爲、同じ家中の嫉みを受け、貸借の遺恨により、平井市九郎、同く弟才次郎の爲に、下城の砌り暗殺され、拙者が駈附し時は既に遲く、父は絶命、敵は逐電なして行方知れず、その後四國にて、出合ひし者ありとの噂を聞き、敵討御免の許しを得て、國元を出立なし、今日で恰度半年餘り、所々方々と探し廻れど、未だに何の手係りもなく、此のまゝ望みもかなはず、一生を埋れ木に朽ち果るか、弓矢神にも見放されたかと思へば、無念の淚に袖濡らす、悲しい夜もあれば、又ある時は、虎と見て石に立つ矢の例もあり、孝子の一念、ヤワか此のまゝ置くべきかと、樹木の枝など切つて、心を慰めた事もムりました。いやこれはほんのかい摘んだお話、兎に角仇討志願の者には、僞名又は虛言を構へる事が多いので、心苦しい次第でムる。（と故と後の人に聽かすやう、時々大きな聲で喋舌る。）
町田　左樣でムつたか。かゝる大望ある御人と存ぜず、盜賊の疑ひかけしは身共の遲失、平にお免し願ひたい。
辰次　それでは却つて痛み入る。斯く申上る以上は、武士は相身互ひ。若しも平井兄弟が、此の近邊を徘徊して居らぬか、お役柄なれば、誰よりも先に知れる筈、もしお耳に入らば、他人の知らぬ中に、拙者へ御內通下さるまいか。枉げて此の儀お願ひ申す。
町田　承知致した。斯くお打明け下さる上は、拙者も充分注意して、夫らしき者見當らば、即刻お知らせ申すでム

らう。

辰次　夫は千萬忝ない。

町田　一とまづこれで、詮議も相濟んだ。他に用事もあれば、これにてお別れ申す。

辰次　御縁もあれば又重ねて。

町田　お目にかゝるでムらう。九市郎に才次郎でムるな。

（と町田は手先を從へて入る。第三の座敷から、老いたる侍黒川仁兵衞、同じく娘おすゞを連て出る。）

仁兵衞　守山氏、委細はあれにて承つたが、實にお見上げ申した。未だお馴染となつて日は淺いが、初見參のその時に、普通ならぬ御器量と、睨んだ眼の圖星は外れず、仇討のお心懸とは遖れ／＼。仇討は忠孝兩全の道、粟津家に於いては、好い御家來を持たれたな。遖れ／＼。

辰次　これは御老體、お耳に入つたとあれば、是非もムらぬが、千丈の堤も蟻の一穴より崩るゝ例もあり、御内聞に願ひたい。

仁兵衞　仰せまでもない事、そこには如才はムらぬが……いやなに守山氏。天下の英傑ともなるべき御貴殿に、內助の妻が必要であると云ふ事を、お心附き召されぬか。昔高田の馬場に於て、堀部安兵衞仇討の節、襷の代りに扱帶を與へた、彌兵衞の娘に勝るとも、決して劣らぬ身共の娘、武藝一通りは仕込である。かゝる娘を妻に迎へなば、御身も仕合せ、身共も滿足、いざ仇討の場に臨んでも、武士の妻としての用意は充分でムる。又身共も舅の緣により、老いたりと云へど助太刀なし、佐分利流の槍の切尖、見ん事敵の度膽を冷やしてくれようと、今からそれが待たれてならぬ。（乘氣になつて言ひ、氣が附いて）これは飛んだ失禮、些か話が前後致した。處で御相談ぢやが、不束なる娘なれど、是非とも妻に娶つて貰ひたい。此の儀お願ひ申す。

辰次　その御親切は忝ないが、本懷遂ぐる夫までは、木にも萱にも心を置く、大切な身の上なれば……。

仁兵衞　夫も呑込んで居る。貴殿の御都合によつて、今祝言を致さず共、約束だけで結構でムる。十八年の天津風、目出たく吹返すその時までは、蟲にも食はさぬやう大切に預つて置く。

辰次　御老體は然う仰せられても、肝腎のお娘御が……。

仁兵衞　その御心配は入らぬ事、父より娘の方が、疾うからでござつて居るわい。

すゞ　あれ父上、そんな事を……。

仁兵衞　言つては惡いか。夫でも嬉しさうな顏をして居るではないか。

すゞ　又そんな事を……あなた御免下さいまし、失禮な事ばかり申上げて……。

辰次　いや、何とも思つては居りませぬ。
仁兵衛　して婚禮の儀式は、お國元にて舉げる事になりませうか。身共も妻に知らして、早く喜ばしたく思ひます。
辰次　然う早急に仰せられては、手前甚だ迷惑致す。いづれとも思案の上で……。
仁兵衛　ウム、能く解りました。では明日緩くりとお目にかかつて、何かの相談……今日はこれでお開きと致さう。
辰次　何とでもそちらの御都合任せ。
仁兵衛　ではおやすみ、娘來い。
（と仁兵衛はおすゞを連れて、第三の座敷へ入る。この時奥の廊下を傳はつて、腰元松江が袱紗に包みし短册を持つて出て。）
松江　守山様。後室様よりのお屆け物にムります。（と袱紗包みを辰次に渡す。）
辰次　もう拙者の姓名をお覺えなされたか。恐れ入つた儀でムる。（と袱紗から短册を出して見て）これはお歌でムるな　見事な御筆蹟で、（と云ひながら默讀して）いよ〳〵恐れ入つた。これは戀歌でムるな。御心中能く解りました。宜しくお傳へ下され。
松江　御返事を伺つて參れと申されました。
辰次　夫では後ほど、人目に立たぬやう、お座敷へ推參致すでムらう。
松江　いゝえ夫では困ります。是非御返歌を戴いて來いと申されましたから、夫を戴くまでは何時までも、此處にお待ち致します。
辰次　これは困つた。拙者元來無風流にて、武藝十八番の心得はあるが、三十一文字と來ては、大いに困るよ。お前の口から、そこを何とか巧く言つてな……。
松江　いゝえ、是非ともお願ひ致します。
辰次　いや困つたな。では一寸お待ち下され。
（と第一の座敷へ入つて考へる。柱にかけた聯の短册を見て、しめたと思ひ、夫を外して來て、机の上で書く眞似をして松江に短册を渡す。）
辰次　お言葉に甘え、腰をれをお目にかけます。お恥かしい次第でムる。
松江　てもまあお早い事で……能ある鷹は何とやら、お皆みのほど感心致しました。（と短册を見て）あざやかなお手でムりますた。松花堂をお學びなされましたか。
辰次　まあ〳〵、その邊を少々學びました。
松江　定めし後室様もお喜びの事でムりませう。夫では失禮致します。
（と松江は廊下を傳はつて、元の處へ入る。辰次は四邊を見廻して）
辰次　すつかり汗をかいてしまつた。何にしろ急に風向が

變つて來たのは面白い。世の中の事などは嫌にむづかしく考へるのは馬鹿だ。何でも出た處勝負に、安直に片付てしまふに限る。さあ恁うなると、家には巨萬の富、仇討の大望、此の二つの金看板で、俺ア段々豪く見えて來る。然し此の上は、好いが上にも好くしなければ、萬全の結果は得られない。どれ今の中、髭でも剃つて、男振でも上げて置かうか。

（と第一の匣簞へ入つて、縁側へ鏡臺を持出し、剃刀で髭を剃り初める。此の時、處の藝者小君が出て、辰次の容子を窺ひ、筧の水で手拭を搾つて、持つて來る。）

小君　ちよいと汝樣、大そう粧して居ますねえ。冷たいのを搾つて來ましたよ。

辰次　いよう誰かと思つたら小君か。白魚のやうな指で、手拭を搾つて呉れるなんて、その心意氣が忝ない、昨夜とは大違ひだ。

小君　昨夜はすつかり飲んでしまつて、何が何だか少しも知らなかつたの。怒つて居て……。

辰次　いゝや怒つちや居ない……。

小君　夫おや好かつた。私心配したのよ。夫から今聞いたら、汝樣は豪いお方なんだつてねえ。これから精々失策らないやうに、私や勤めるから、汝樣が本望を遂げてお國へ歸る時、私も連れて行つてねえ、私や近江八景が見たいわ。

辰次　夫や隨分お前の心持次第で、近江八景は愚か、京都見物でも何でもさせる。

小君　そりや有難う。私や汝樣のやうなキリツとした、嫌味のない人が好きよ。

辰次　俺もお前のやうな、心意氣な藝者が好きさ。

小君　だつてお前さんは、些と浮氣だよ。

辰次　御冗談でせう。そんな事が……あゝ痛い、痛い。

小君　如何したの。

辰次　ニキビを引かけてしまつた。（と顏を押へる）

小君　私が嘗つて上げようか。

辰次　フン、それほどの面でもねえや。

小君　でも好い男だつて、評判だよ。

辰次　巫山戯なさんな。昨夜人を突飛はして逃出しやがつた癖に……。

小君　ありや醉つて居たから、仕方がないよ。

（と此の話の中に、お前の太郎が出て。）

太郎　姐さん此處に居たの。先刻から探して居たのよ。

小君　何なのさ。

太郎　小川屋さんの大一座で、姐さんが居なくなつたからと云つて、皆で大騷ぎ……早く行つてお上げよ。

小君　夫ぢや一緒に行くから……ちよいとお待ちよ、ねえ

汝様、直ぐ歸つて來るから、待つて居て頂戴な。

辰次　待つて居るよ。

小君　きつとねえ。

辰次　大丈夫だよ。

（と小君は太郎と共に入る。此の間に第二の座敷から、町家の姉娘およしが出て、二人の話をすつかり聞いてしまふ。辰次が額剃りを止めて、鏡臺などを片附初めると。）

およし　守山様、お樂しみで厶いましたね。

辰次　これはおよし様、いつの間に……。

およし　あゝ云ふお話を伺ひますと、人情本を讀んで居るやうな心持がして、面白う厶いました。

辰次　これは恐れ入りました。兎角藝者なとと申す者は、あゝ云つたやうな、互に心にもない事を言合つて居るのが、客であり、藝者である譯で……私なとは武家に生れ、幼少の折から、弓馬槍劍の道に心を委ね居りますれば、彼等の甘言に乘るやうな事は厶らぬが、世の中には隨分彼等の爲に、家を失ひ、女房子を捨てる輩も厶ります。

およし　その言譯には及びませぬ。私は汝様の藝者遊びを、お咎め申した次第では厶いません。昨夜汝様から伺ひました、お話に就いて、御返事を申上げたいと存じまして……。

辰次　おう左様で厶つたか。昨夜は遲くまでお邪魔を致し、申譯ないと存じて居ります。餘り話に身が入りまして、些か露骨過ぎたやうで厶りましたが、私があなたへ對する誠心誠意と戀の一條、お汲分下さいましたか。

およし　昨夜は御冗談とのみ思ひ、碌に御返事も申上げませんでしたが、先ほどお役人のお調べの時、汝様の立派なお心持を承り、實にお見上げ申しました。かゝる健氣なお侍に思はれたのが此の身の仕合せ、私のやうな者で宜しくば……。

（と恥かしき思入。）

辰次　左様で厶るか。早速の御承知、千萬忝なく存じますが、能く〳〵考へて見ますと、私のやうな身分の者は、いつ何時敵に廻り合ひ、首尾よく敵が討てれば好し、若し返り討にでもなつた時は、あなたに御迷惑をかけねばならぬ。私一人の戀は此の道後の靈泉に流してしまへば濟む事、思召はこれで充分で厶る。私を無い者と諦めて、他へ御縁附き遊ばすのが、あなたのお爲かと存じます。

およし　何と仰せられます。夫では昨夜のお話は、私への御冗談で厶いましたか。

辰次　決して左様な譯では……。

およし　そんなら急に私が嫌になり、あの藝者の情にほだされて……。

辰次　これは又迷惑な……。
およし　そんなら私の望みをかなへて……。
辰次　夫ほどまでに拙者をば……。
およし　あい。（と云つて辰次に寄添ふ。此の時妹おみれは湯上りの體にて出て）
おみれ　おや姉さん、其處にお出でムいましたか。今お風呂が空いて居ますから、ちよいと這入つてお出でなさい。
およし　でも私や此處に……。（と立兼ろ）
おみれ　もう少し經つと混合つて、お湯が汚くなりますよ。
およし　夫では一寸入つて參りませう。守山樣御免下さいまし。
辰次　御緩りと行つてお出でなさい。
（およしは止むを得ず、手拭を持つて廊下傳ひに浴室へ行く。おみれは四邊を見て。）
おみれ　守山樣。あなたは此處で姉さんと、何をお話なさいました。
辰次　それは、その……（と詰る）
おみれ　私の事でムいませう。私の事なら、姉への御相談は御無用に願ひます。姉妹で氣が合はないので、常に喧嘩はかりして居りますから、私の縁談と聞けば、屹と邪魔をするに違ひありません。姉は何と申しませうとも、私から直に御返事を申上げます。昨日あなたが仰有つた事が眞實なら、明日にも家へ歸り、父の許しを得て參ります。父は町人でこそあれ、苗字帶刀をも免されて居ります。御裕福で立派なお家柄たと、あなたの事を申上げたら、父も喜んで承知を致しませう。
辰次　もし親御が、御承知なかつたら、如何なさいますな。
おみれ　そんな筈はありますまいが、萬一異議を申立てたなら、家を飛出しても、あなたのお傍へ參ります。
辰次　それを聞いて安心致した。然し此の事は姉上へ内々にて、今夜四つを合圖に、裏山までお出で下さい。篤と談合致すでござらう。（と此の中、後室國の井は腰元松江を連れて出て）
國の井　守山樣、一寸御意得たい。
辰次　拙者でムるか。
國の井　左樣でムります。
辰次　はゝあ。（と辰次立つて國の井の傍へ行く。）
國の井　先程の御返歌、確かに拜見致しましたが、如何云ふお心持で、あのやうな歌をお詠み遊ばしたか。ちと御冗談が過ぎませう。（ときつと云ふ。辰次面喰つて）
辰次　あの歌に何か間違ひがムつたか。
國の井　よくも白々しい事を仰せられます。あれは猫に寄する戀歌でムります。私を猫と思召すのは、餘りと申せば無禮ではムりませぬか。

辰次　やあこれは飛んだ粗忽を致した。これには些か仔細がムる。實は當家の女中に頼まれて、戯れに書いて置いた物を、餘りに松江殿に急かれた爲、夫を間違へてお手許へ差出した物と見える。夫にしても思ひ當つた事がムる。母の遺言に、決して歌などを詠むな、大きな間違ひが起るからと言はれたが、ウム慥かにこゝの事だ。然し是は飛んだ失禮、平にお許し下され。

國の井　お間違ひとあれば、以後御注意を願ひます。夫について私から、先程差上げました歌の意味、能くお解りになりましたか。

辰次　えゝちやんと解つて居ります。私も弓矢八幡へ誓ひを立てゝ……。

國の井　あゝもし、めつたな事を……。

（と辰次の言葉を制める。此の時後から姉娘およし、上手から太郎を連れた小君、下手の座敷からおすゞが一時に出る。）

およし　守山樣、一寸お顏を……。

辰次　何でムるな。

（とおよしの方へ行きかけると。）

小君　ちよいとあなた、話があるのよ。

辰次　俺にか。

（と小君の方へ行かうとすると。）

おすゞ　我夫、みだらな事をなさいますな。

國の井　守山樣。

おみね　守山樣。

皆々　守山樣。

（と四方から呼ばれるので、辰次は困つてしまひ、遂に庭に下りて、床几に腰を下し。）

辰次　暑い〳〵。おう暑い。

（と大きな聲で云つて、やけに團扇で煽ぐ。此の時番頭の友七が出て來て。）

友七　お武家樣、先程のお役人が、あなた樣に急用があると云つて、又御出張になりました。

辰次　なに御出役だと……。夫は大變だ〳〵、取散して居ては失禮に當る。なあ番頭。女子供がこゝに居ては、お目障りだと仰有るであらうな。然うか〳〵……。

（と獨り呑込で云ふ。夫を聞いて女連は慌てゝ引込む。番頭も入る。辰次一人になつて。）

辰次　旨いな〳〵。十本の中一本當れば好し、當らなくても元々で、損はないと思つて、覗ひも定めずめちや〳〵に放つた矢が、一本も外れなしとは、研辰近年の大當り……何でも此の頃は薄利多賣に限る。然し恁うして見ると、敵を討つと討たれるとでは、人氣の上に天地の相違がある。全體俺の親父なぞは間違つて居た。疝氣などで

死ないで、人に殺されて死んでくれたなら、俺なぞはもつと早く、面白い思ひを澤山したのだらう。夫を思ふと市九郎や才次郎が羨ましい。今頃は何處かでさぞモテて居るだらう。俺もこれからだ。

(と喜んで居る時に、番頭の案内で町田定助が出て來る。)

町田　守山氏、そこに厶つたか。

辰次　先程は失禮致した。して拙者へ御用は……。

町田　一大事で厶れば、お耳をお貸し下され。

(と辰次にさゝやく、辰次は腰を拔かさんばかりに驚いて。)

辰次　夫れでは平井兄弟が、此の道後へ參つたとか。

町田　いよ〳〵本懷遂げる時節到來、拙者に於いても祝着に存ずる。

辰次　御厚意有難う存じます。

町田　もし又相應の御用もあらば、拙者の宅まで……。

辰次　いづれお世話になるで厶らう。

町田　吉左右を相待ち申すぞ。

(と町田は友七を連れて入る。後に辰次は慌てゝ座敷へ入り、荷物を振分にして大小を抱へ、一散に逃げて向ふへ入る。此の時番頭友七が先に立ち、同じく若い者二三人と、浴客の男女四五人が附いて出る。)

友七　さあ大變だ〳〵。家に泊つてお居での守山樣の、父御を討つたと云ふ敵が、此の道後へ入り込んだと云ふから、今夜か明日は、敵討が始まりますぞ。

(と一同此の噂で騷いで居る。これを聞いて第三の座敷から仁兵衛が飛出して來る。)

仁兵衛　これ番頭、今の話は本當か。

友七　この場合嘘なぞ云つちや居られませんよ。

仁兵衛　然うして守山氏は……。

友七　お座敷にお居でゝ厶りませう。

仁兵衛　ウム、よし。

(と仁兵衛は第一の座敷の前へ來て。)

仁兵衛　守山氏、お喜び申上げる。堀部彌兵衛が參つて厶る。守山氏……守山氏。

(と呼んで見たが返事がないので、襖戸を明けて見て驚く。)

仁兵衛　や、守山氏は何處へ行かれたか。番頭その方は存じ居らぬか。

友七　御入湯で厶いませう。

仁兵衛　馬鹿を申せ。荷物を持つて入湯致すか。よく調べて見ろ。

(と友七も座敷を見て驚き。)

友七　こりや荷物が無い。

仁兵衛　何處かへ行かれたものと見える。（と云つて一寸考へ）ウムよめた。先刻身共が助太刀致すと申した故、老人風情に加勢されては、武士が立たぬと云ふ考へから、身共を出し拔いたに相違ない。守山氏は何處まで豪いか、數の知れない人だ。岩見重太郎の再來とも云つべし。適れ〳〵。

友七　然うして仇討はいつ始まりますな。

仁兵衛　明朝と極つた。朝日のさす時分がお定りだ。（と云つて後を向き）如何に同宿の各々お立合下され。明日早天に、松山の城下に於いて、富士の裾野の曾我兄弟、伊賀の上野の仇討より、十倍二十倍も、もつと豪い敵討が始まりますぞ。

（と怒鳴る。種々の人が出て來て、寄り〳〵に噂をはじめる。）

――幕――

曾我廼家五郎篇

喜劇 寶の拍手（二場）

桑名街道の茶店の場

桑名の舊家米相場師仙臺屋彌兵衛は家運傾き商賣の手違ひにて、今は浮沈の界とて必死の金策して最後のケントク取りに來る、通行の石工富藏は主家の再興の望みを抱いて江戸に働きに行かんとて來懸り未知の彌兵衛と出合ふ、彌兵衛富藏の言葉をケントクとして四十兩の賣買利金を見て富藏を無理に招待す。

仙臺屋の店先の場

番頭五兵衛は主人の手紙に富藏は大切の客人にて福の神とかいて有るので大事に招待する、主人不在中米一升と千石舟一杯の思ひ違ひて、富藏は問屋神崎屋より取引する、主人夫れ聞いて驚愕、富藏死を決する時、其相場一躍三百兩の利金、見て神崎屋より持參する一同喜涙安堵。

場所　伊勢桑名街道
　　　　仙臺屋の店先

人物

富藏　石工
甚兵衛　茶店
おとら　村女
十兵衛　船頭
五兵衛　番頭
吉三　手代
太兵衛　神崎屋
彌兵衛　仙臺屋
幸兵衛　旅商人
淸七　旅商人
龜吉　仲仕
德松　仲仕
虎吉　走り
兵助　手代
大勢　若者

桑名街道。
中央茶店有り、下手海岸遠見街道筋、村端茶店の體、賑かな囃子にて幕明く。

中央捨床几に仙臺屋彌兵衛無言物思の樣子で茛のむ。
茶店甚兵衛茶釜の側にゐる。
上手より村女おとら出る。

おとら　甚兵衛さん御商賣物の茶を何日も貰えに來て濟まぬなア。

甚兵衛　何の同じ村の人間ぢや、野良仕事の中食に我家まで每日茶取りに歸つてゐてはたまるかい、遠慮なしに每日取りに來いよ。

おとら　大きに、皆も寄ると夫れを云ふのぢや、甚兵衛さんは正直で親切なそして物知りぢやと、誰でも云うてゐる、隨分若い時は村の娘達が騷いだであろのと此間も話して居たのぢや。

甚兵衛　何ぬかすのぢやサア〳〵茶か這入た早う持つてゆきなされ。

おとら　大きに〳〵背戸の南瓜が太つたら持つて來るぞ。

甚兵衛　夫れは有難い此方から今夜でも貰ひにゆくわ。

おとら　今夜來てもまだないぞ。

甚兵衛　何日貰ひにゆくのぢや。

おとら　來年の二月頃になつたらぢや。

甚兵衛　今の事やないのか。

おとら　今頃まだ太いのがないわ、爺さん氣か早いな。

甚兵衛　違ひなしぢや。

二人　ハ、、、。

仙臺屋　八釜しい。人が思案中に大聲出して笑ふなへ。

甚兵衛　おとらさんチトたしなみなされ。

（ト目で仕方、おとら呑込み去る。）

甚兵衛　旦那樣女の笑聲は耳に立ちますなア。

仙臺屋　お前の聲の方が耳に立つがな。何お前方が笑うたとて俺が腹を立てる譯はないが、ツイムシヤクシヤしてゐると何んでも無い事でも疳が立つてなア、まア〳〵氣にしてくださるなや。

甚兵衛　イエどう致しまして心配事の有る人の前で高笑ひは出來ませぬ、然し心配事が有るとは、矢張り御商賣の手違ひで御座りますか。

仙臺屋　お前達の耳に迄內の店の手違ひが聞えてゐるか。

甚兵衛　イエ何の老舖の有る業名切つての仙臺屋さん、近鄕近在鳴り響いた大相場師、よしや手違ひが御座りましても何の世間が知りますかいな、然し太腹と評判の旦那樣が、朝早うからこんなむさい甚兵衛の茶店へお出でなさるさへ不思議で御座りますに、誰にお逢ひなさると云ふぢやなし、モ二タ時にも成りますのにチツト思案なされて御座るお姿、常からお世話になつてゐる丈に一としは心配で御座りますわいな。

仙臺屋　ヨウ親切に云うて吳れる、世間にまだ尻尾を見せ

ぬのは先祖が殘した仙臺屋ののれんのお蔭ぢや、お前ぢやで云ひますがモ乘るか反るかの瀨戸際、思案の果てが此村端でケントクを取りに來てますのぢや。

甚兵衞　そんな物が私の店に御座りますかいな。

仙臺屋　此店に無い、此處は名にしおふ東海道ぢや、上り下りの旅人が、一日何人も通る街道浮世話の寄合場所と、問はず語りの人の言葉を聞いて、今日の相場は賣か買かと腹をきめて場所へ行かうと思うてゐるのぢや。

甚兵衞　成程大ぎや御座りませんな、私で間に合ふ事なら何樣な事でもしやべりますがな。

仙臺屋　親切は嬉しいがモ云うてからではケントクにならぬわい。

甚兵衞　此年になつて居乍ら何のお役にも立たぬ親爺、旦那さん私は一寸阿呆で御座りますな。

仙臺屋　今では私も其阿呆が羨しい。

甚兵衞　ハクシヨン。

仙臺屋　イヤお前の事でないぞやハヽヽヽ。

甚兵衞　お旦那のお笑ひ顏を今日初めて見ましたがな、ドレ〳〵熱いお茶でも入れませう。

（茶汲に入る。船頭十兵衞下手より出る。）

十兵衞　甚兵衞さん今日は。

甚兵衞　オ之れから沖へ行くのかいな。

十兵衞　今日は少し沖へ出よと思ふがあの雲が惡いので、殊によつたら一雨下(ふる)るかも知れんでな――。

仙臺屋　ウム下るか。

十兵衞　ア、吃驚した、仙臺屋の旦那ぢやないかい。

甚兵衞　どうぢや下ろかな。

十兵衞　下ると思ふが、西のあの雲がすいてゐるで上るかとも思ふのぢや。

仙臺屋　ヒエツ上るか。

十兵衞　ヘイ上る　思ひますが甚兵衞さんお前どう思ふ。

甚兵衞　俺に聞く奴が有るかい、お前が船頭稼業で判らんかいシツカリせい阿呆奴。

十兵衞　偉いポン〳〵いふのぢやなア。

甚兵衞　云はいでかい老舖のついた大きな店を潰すか潰さぬかの瀨戸際ぢやわい。

十兵衞　大きな事を云ふなえ、一寸濱風が吹いたら此樣(こんな)な茶店はスグ潰れるわい。

甚兵衞　エイ緣起の惡い事をぬかすない。

仙臺屋　コレ〳〵甚兵衞年甲斐の無い何を云うてゐるのぢや、十兵衞早う沖へ出て働いて來い。

十兵衞　ヘイ〳〵相濟みませぬ今日は甚兵衞爺さんどうかしてゐますワイハヽヽ、左樣なら。

（ト上手へ入る。）

甚兵衛　何と旦那、人の氣も知らいであんた惰たれ口を吐(ぬか)しますのぢや、グワンとはり倒してやろかと思ひましたがな。

仙臺屋　イヤ其の御親切は有難いが先は何も知らぬのぢや、夫れにお前が喧嘩腰になつて呉れては私がケントクも何も取れぬでな偉い勝手ぢやが、之れからも此處に休む人が有つても必ずお前は物を言はぬ樣、さすれば私に物いふにきまつてゐる、其の言葉をケトンクに取つて見るでな、どうぞだまつてゐておくれ。

甚兵衛　成程々々之れから決して物は云ひませぬ、誰が何を云ひ掛けても滅多に此舌を動かす事ぢや御座いませぬ。

仙臺屋　無理な事許りたのんで濟まぬなう。

（無言手眞似で返事する。）

仙臺屋　氣の毒に丸で啞ぢやがな。

（之れにて旅商人清七上手より出る、床几の端に腰おろす。）

清七　茶店の一寸休まして貰ひます。お茶一つ下され、コレ親爺どの、アヽ此の親爺さんはつんぼぢやなア。

（之れにて旅商人幸兵衛下手より出る、床几の端にかけろ。）

幸兵衛　ヤレ〳〵くたびれた〳〵。オ御油の宿で合ひました小間物やさんですなア。

清七　オー之れは〳〵又お目に懸りましたな。

幸兵衛　お互に東海道を股にかけてゐますと、逢ひかけたら宿々で幾度會ふか判りませんな。

清七　眞實ですな、旅から旅を巡る身は行先は我家で、女郎が嬶ですわい。

（幸兵衛莨の火をさがす、中央の仙臺屋莨盆を出さんとする時清七は火繩の火をさし出すので、幸兵衛夫れで莨の火をつける。）

幸兵衛　あほらしい、女にもてる顏やおまへんでな。

清七　でも顏や形に迷はぬけれど、主の實意にや泣かされる。

幸兵衛　コリヤ〳〵。

仙臺屋　（だしぬけに）八釜しいわい。

清七　吃驚した、何ぢや此人は。

仙臺屋　たいがいにしておけ。

幸兵衛　何をたいがいにするのぢや、わしの口でわしが唄ふのに誰に氣兼が有るのぢや、代官樣の樣た大きな面をさらして、八釜しいとわ何ぢやい。

仙臺屋　云うて惡けりやあやまりもするが、大事な思案をしてゐる俺の前で大きな聲で宿場女郎の惚氣話、揚句の果てが調子はづれのドラ聲上げて、歌を唄ふとは浮世に

なれた商人衆に似合はぬ。

清七　似合ふか似あふまいか大きなお世話ぢや、女郎の惚氣がどうしたのぢやお前に錢出して買うて貰ふぢやなし。

仙臺屋　何でわしがお前方に女郎をあてがふ義理が有るのぢや。

幸兵衛　なけりや文句ぬかすなえ。

仙臺屋　別に文句を云はぬなれど、旅は道つれ世は情かうして私が二人の眞中に腰をおろしてゐるのぢや、何も私を飛ばして二人で話をせいでも一寸位私にもの云うて呉れてもよいぢやないか。

清七　ハーンすると俺達の惚氣をききたいといふのか、聞かしてほしくば聞かしてやるわ、俺と彼奴の馴染はな。

仙臺屋　エイ五月蠅わいグヅ〳〵ぬかすと、若い者よびにやつて此宿からほり出すぞ。

清七　オ甲斐性有れば放り出して見い、流れ渡りの旅商人ぢや、そんな毛ゞにおどされて震へ上つて稼業が出來るかい、度胸があればやつて見い。

幸兵衛　コレ〳〵申し、やめなされ〳〵。

清七　夫れでも餘り云ひ草が過ぎますがな。

幸兵衛　サア夫れが所でなかぬ犬はないの、諺の通り殊に相手が悪いがな〳〵あの目附見なされ目がすわつてますがな、只の人と違ひますがな。

清七　只の人間と違ふとは彼奴何ですやろ。

幸兵衛　判つてますがな、小金持つた商人と見れば知らぬ人間に云ひ懸りを見せてレコにしよとの魂膽ですがな、東海道にはあんなのはチョイ〳〵御座りますわいな、つまり金儲けにしよとな。

仙臺屋　さうぢや金儲けぢや金儲けにかゝつて居たら、どうしたのぢや。

幸兵衛　夫れ見なされ彼は口から、若い奴と云ひましたのはつまり手下ですがな。

清七　成程さういひなさると血走つたあの目附、眞青のある顔色怖ヤ〳〵、君子危きに近よらずぢや又御目にかゝります。

幸兵衛　どうぞ御きげんよろしく。

（ト兩人荷を手早くかつぎ乍ら、挨拶して上下へ別れ入る。）

仙臺屋　甚兵衛さん聞いたかい、何と腹の立つ奴等ぢやないか、わしをゴマの蠅か何ぞの樣に人相が悪いの何のとぬかすのぢや。

甚兵衛　又人相が悪う御座りますがな。

仙臺屋　ナニッ。

甚兵衛　此様に申上ては失禮で御座りますが、御心配が有るせゐかお顏の色は悪るし人に物を云うて貰ひたげにジ

ロジロ御覽になる、私でも其のお顏の色を見ましたら濟まぬと思うても物が云へません、不見不知の者なら僞の事ゴマの蠅とまちがひもしますわいな。
仙臺屋　ア、羨しい、思ひ内に有れば色外に表はれる、わしはそんな氣ぢやないが生死の境に迷うてゐる仙臺屋ぢや、モ地獄の門口まで行つてゐる私、鬼の樣な顏に見えるであろ、之れではよいケントクも取れぬわい。
甚兵衛　サアそこで御座り升、浮世話は世辭愛嬌と申しまして此處へ休んだ客人にニコ〳〵笑うて世間話でもしかけて御覽なさいませ、偉い馴れた方ぢやと嬉し相に物も云ひます、其の内によいケントクをお取りなされませ。
仙臺屋　成程おうた子に敎へられぢや、カウこはい顏をしてゐては誰もものゝ云ひ手も有るまい、ヨシ人が來たら笑ひませう〳〵ニコ〳〵と嬉しさうになア。
甚兵衛　オ其のかほ〳〵かはいらしい、おかほで御座りますな。
仙臺屋　甚兵衛なぶつてくれなえ。
二人　ハヽヽ、、、。
（トこれにて花道より石工富藏旅裝にて石やの玄能を手拭に包み出で來る。）
（物尋ねんと思へど仙臺屋のニヤ〳〵笑ふので氣味惡氣に上手へ行きかける。）

甚兵衛　コレ〳〵旅の人お休みなされ、お茶一つ上つて行きなされ。
富藏　誠にすまぬが水一杯頂かして下さるまいか。
甚兵衛　水と云はず茶のんで行つたらどうぢや。
富藏　茶のんだら茶代取るやろ、其の茶代が拂へる位なら初めから水くれと賴まぬが、旅したから僅かの路金で江戸へゆきますもの、水で結構でございますで一杯惠んで下され。
甚兵衛　ア氣の毒な錢無しで江戸へ行くのかいな。
富藏　ヘイ野宿し乍ら參りますので。
甚兵衛　それは〳〵わしも若い時分に覺えがある、よしよし錢と何も入らぬあの床几に腰かけて熱い茶を一杯のんで行きなされ。
富藏　ハイ〳〵夫れではお客が見えたらスグのきますだ、暫く休まして貰ひます。
甚兵衛　サア〳〵。
（富藏腰かける。）
甚兵衛　サア〳〵お茶ぢや。
富藏　御馳走樣で御座います、また江戸まで餘程御座りますかいな。
甚兵衛　何いふのぢや、此所はまだ伊勢ぢや、こんな所で江戸きいて判るかいな。

富藏　左樣で御座りますか、夫れでは暫く休まして貰ひます。（ト仙臺屋の笑ふのに氣味悪く）モシアンタ此家のお方かいな。
仙臺屋　ヤー占めた、物云うて異れた何ぢや〳〵。
富藏　吃驚した云うて悪かつたのかいな。
仙臺屋　何の悪い事はない、先刻から物云うてくれるのを待つてゐた、サア云うてくれ〳〵。
富藏　別に六ヶ敷い事ぢやないのぢやが、實は江戸へ行きますのぢや。
仙臺屋　一寸まつた私の氣の靜まるまで一寸待つてくれ、待てよ〳〵一ぷくしてからぢや。サアよし云うてくれ。
富藏　此の人氣は慥かいな。私は江戸へ行きますのぢや、東海道から行かうか中仙道から行こかと迷うてますのぢや
仙臺屋　待つた氣が迷うてゐる。わしも氣が迷うてゐる、よしツサア次ぎ。
富藏　變な人ぢやな、私の云ふ事判つてるのかいな、わしは此處の者ぢやない泉州堺の人間ぢや。
仙臺屋　ナニ堺、ウム賣るか買ふかの堺か、よし次ぎ。
富藏　此人私の言葉判つてるのかいな。わしは石屋の職人ぢや。
仙臺屋　待つた、ナニ石屋か、難い此のケントクは慥かに固い、次ぎ。

富藏　石屋の職人で富藏といふのぢや。
仙臺屋　名は富造といふのか。
富藏　イヤ富ロウといふのぢや。
仙臺屋　富ロウ、妙な名ぢやな。
富藏　富といふ字と藏といふぢや。
仙臺屋　ウム〳〵富藏か。
富藏　イヤ富ロウ。
仙臺屋　富造。
富藏　お前さん一寸舌が廻らんなア。
仙臺屋　お前が廻らぬのぢやがな、富藏とは藏か富むフーム縁起がよいな、次ぎ。
富藏　一時も早う江戸へいて一番頭を上げよと思うて。
仙臺屋　ナニ頭を上げる。
富藏　頭を上げねば故郷の堺へ歸れぬからぢや。
仙臺屋　キツト上げるか。
富藏　必ず上げる。
（ト此時走り虎吉來る。）
虎吉　オ仙臺屋の旦那様これにおゐでゝ御座りますか、只今場が立ちますが今日はお越しになりませぬか、如何なされます。
仙臺屋　オ場が立つか、よしツ、サア此の財布のまゝ小判で二百兩お前に渡す故これで買ひぢや買うてくれ。

虎吉　ヘイ買ひで御座りますか。
仙臺屋　さうぢや早よ行け。
虎吉　ヘイ買つた〳〵。
（ト勢よく虎吉走り入る。）
仙臺屋　ヒヤー有難い〳〵、コレお前さんのおかげで氣が決まつた　買うた〳〵。
富藏　コレお前さん何を云うてゐるのぢや、私の返事はどうぢやいな。
仙臺屋　オ何やら云うてゐたな。
富藏　便りない人ぢやな、江戸へ行きますのに東海道が近いか中仙道が得か、夫れをきいてますのぢや。
仙臺屋　オさう〳〵何ぢやそんな事いうてゐた樣な氣がする。夫れは中仙道は廻りみち東海道は本街道ぢや。
富藏　ヤハリ箱根を越えてなア。
仙臺屋　さうぢや〳〵。
富藏　大きに〳〵夫れきいてますのぢや、お前さん何をきいてたのぢや。
仙臺屋　わしはケントクを見てゐたのぢや。
富藏　ケントクとは何ぢや。
仙臺屋　まア早くいへば辻占ぢや。
富藏　お前さんは八卦見か。
仙臺屋　イヤわしは米屋ぢや。
富藏　米屋か。
仙臺屋　相場師ぢや。
富藏　相場師とは何ぢや。
仙臺屋　まア〳〵米屋ぢや。
富藏　その米屋が私の云ふ事きいて商ひしてゐるのか、お前は此の頃餘ほど貧乏してゐるな。
仙臺屋　そんな事が判るか。
富藏　判る譯ではないが不見不知の人の云ふ事を便りにして商ひしてゐる樣では氣が迷うてゐるワイ、貧乏すりやこそ氣が迷ふのぢや、商ひに迷うたらあかんぞ、迷はず働け、かはい相に顔色も惡いチト甘いものでも食へよ。
仙臺屋　イヤ大きに星さゝれて面目ない、さう云うてくれるで話をするが私は此の桑名の宿で相當人に知られた商人ぢやが、二三年此の方手が合はずにする事なす事イヽカのはし程食ひ違ひモ此頃はつまる丈けつまり果て、家藏を質に入れてこしらへた金、お寺開くか緋衣きるか地獄の上の一足飛びと度胸はきめても氣が迷ひ、賣るか買ふかの六道の辻を迷つてゐる亡者同樣、お前さんのケントクを取つてヤツト心も決まり今商ひさしましたのぢや、然し私も苦しい手元ぢや、先刻チラト耳に這入つたが、お前さんも野宿してから江戸行くとは餘程手元が苦しいな。

富藏　私はお話にならんワイ。
仙臺屋　オヽさうで有らう／＼、一體お前さんは、どんな身の上ぢや。
富藏　見ず知らずのお前さんに身の上話す譯もなし、又お前さんも聞いたとて面白い話でもないでな。
仙臺屋　何の面白い話と思ふかい、初めて逢うた人の身の上話をきくといふ譯はないけど、變な破目から我の身の上もお前にきかしたのぢやないか、袖すり合ふも他生の緣、話をきいて見た上で、わし等で役に立つ事なら相談にも乘らうぢやないか。
富藏　わり方親切な方ぢやな。
仙臺屋　わり方といふ事があるかい。
富藏　ハヽヽ、私は此の泉州堺の南の方に石るといふ里がある。
仙臺屋　石るハテ私も商用で泉州大和の方へ行く事が有るが、石るといふと。
富藏　それ晒木綿の出來る處ぢや。
仙臺屋　ハヽヽ、それなら石津ぢや。
富藏　石る。
仙臺屋　石津ぢや。
富藏　俺は處の者ぢや、間違はぬ。そこに和泉屋といふ石ロイヤが有る。
仙臺屋　ハテナ石ロイヤとは。
富藏　判らぬかいな、石の燈籠や手洗鉢をこしらへるイシロイヤぢや。
仙臺屋　それなれば石問屋ぢや。
富藏　可哀想にお前一寸舌が廻らんなア。
仙臺屋　お前の方が廻らぬのぢやがな。
富藏　俺は其家に九歳から奉公して今年三十六ぢや、一人前の職人に仕上げてもろたのは皆其家のお蔭、その內一昨年親ランナ樣が死んだので若ランナが一切。
仙臺屋　まてワカランナとは何ぢや。
富藏　此邊で云はぬかいな泉州では親ランナの伜を若ランナといふわい。
仙臺屋　夫れなれば若旦那。
富藏　お前一寸分らんな。
仙臺屋　お前の方が判らんのぢやがな。
富藏　夫れから先といふものは、何ぼか有つた身代は皆若旦那の自由になるわ、堺の土地に龍神といふ廓が有る、何日の程に通ひつめたやら去年の盆までに皆使ひ果した、俺が知つてゐたら意見もするなれど、俺は一寸も知らぬ悲しさ、ナゼか若旦那は毎晩おかへりにならぬが、不思議なと思ふ內たうとう去年の盆に先祖代々傳つた家藏まで八十兩の抵當に入れた、さうなると店の番頭は大金持

つて逃げて仕舞ふ、澤山有つた奉公人も一人へり二人へりあげ句の果が若旦那は女にだまされ、其上わづらうてなア、たうとう去年のくれに大晦日の日限がきて、其家は人手に渡さねばならず、若旦那の仰有るのは富藏やとんでもない心得違からこんなになつた。お前は手に職が有る故どこなりと行き働いてくれ、俺は竹杖ついて四國八十八ケ所をまゐつてくると仰るのぢや、考へて見てくれ九ツや十からお世話になつて、どうぞかうぞ一人前の職人に仕上げて貰うて、其の御主人がさうなつたとて左樣で御座いますかと、わしが人間なら別れられるかい、兎も角私の在所へおいでなされませと、三里離れた百舌鳥村といふ俺の田舍へお供して內の伯父なア。

仙臺屋　俺は知らぬだな。

富藏　お前さんは知らぬが伯父貴が有るのぢや、其の伯父貴に賴んで、若旦那をあづけて、俺は每日仕事して一緒にくらしてゐたのぢやが、めし食ふ時になると若旦那がすまぬ〳〵と仰有つて、澤山奉公人の有つたになぜお前にかうおせわになるので有らうと、奉公人のわしに手をついて禮を仰有る、俺はたまらぬ、御主人が奉公人に禮をいふ事が御座りますかいな、當前で御座りますがな（と、泣く〳〵）若旦那の仰有るに金は仕方がない、只殘念なのは先祖代々傳つた家藏を人手に渡したのは、死んでも御先祖に顔が合はせぬと明けてもくれても泣きくらし、俺も何とかして取戻したいと思ふなれど、八十兩もの大金田舍でどうして儲かるものか、俺の村のお庄屋樣の仰有るに、江戸は將軍樣のお膝元だけ、土一升に金一升、一番江戸へ出て働いたらモシヤ儲からぬ事は有るまいと、夫れきいてから矢もたてもたまらず、難がる若旦那に因果をふくめて、二年の間暇もろて若旦那を伯父貴にあづけ、先月十六日一貫八百の路銀をもつて來たのぢやが、俺の立つ時は若旦那が病氣の身を村はつれの地藏堂たア。

仙臺屋　俺は知らんがな。

富藏　サアお前は知るまいが、其地藏堂迄送つて來てそこでお別れ申ますと云ふと、若旦那は其街道筋へベッタリ坐つて、お前歸つて來るまでは死んでも死ねぬ、キット待つてゐると仰有つて、泣きなされたお姿、また目の前に見える、一日も早う江戸へゆき若旦那を救ふのぢや。

仙臺屋　ム救ふか、相場師に緣起がよい必ず救ふか〳〵。

富藏　必ず救ふ。

仙臺屋　偉い。コレ甚兵衛救ふとい〳〵。

（ト此時以前の虎吉走り出る。）

虎吉　オ旦那樣只今御注文の通り買ひましたら、見る〳〵內に上を見て、二丁上りで四十兩のおまうけ、後場はどうなされます。

仙臺屋　ナニ。二丁上り。有難い後場は賣つて〱。
虎吉　賣りで御座りますか。賣つた〱。
（ト引返す。）
仙臺屋　コレ聞いたか、甚兵衛ケントクが圖に當つて二丁上りで四十兩儲けた。
甚兵衛　御目出度御座います。
仙臺屋　イヤ皆此人のお蔭ぢやアンタ有難う御座います。
富藏　お前さん私に何の禮をいうてゐるのぢや。
仙臺屋　サアお前さんのおかげで今四十兩まうけさせて貰ひましたのぢや。
富藏　俺はそんな事知らぬ。
仙臺屋　イヱお前さんのケントクでなア。
富藏　夫れは俺は知らぬ、覺えのない事を禮いはれて心もちが惡いでな。
仙臺屋　感心々々。オイ甚兵衛さんきいたか、僅かの事でも恩にきせる人が多い世の中に、俺は知らぬ〱と云ひ切つて、割竹破つた樣なお胸の内恐入つた、此人には頭が上らぬなア。
甚兵衛　世に珍らしい人で御座いますなア。
仙臺屋　惚れたな。男ぢやな。禮いうて氣に入らねば申しますまい、わたしの胸の内で兩手合してをります。
富藏　夫れはお前さんの勝手ぢや。

仙臺屋　ハイ〱。したがお前大望持つた身で野宿許りでは身體もたまらぬ、どうぢや今晩一晩わしの家へ來て泊つてゆきなされ、甘味ものものもくはさねどせめて茶づけでも、あたゝかい蒲團で手足休めてゆきなされ。
富藏　ハイ御親切は嬉しいが、今初めて此所で逢うて、どこの牛の骨やら馬の骨やら判らぬお前。
仙臺屋　これ〱夫れは何をいふのぢや、それは此方がいふのぢやがな。
富藏　ハヽ、蟲にさはつたら勘忍しておくれ、成程お前さんの目からわしを見ればどこの牛の骨やら判らんが、わしからお前さん見ればどこの……御親切は嬉しいが、何のかゝり合もない人に厄介になるのも心苦しいで、お志だけ頂きます、わしは氣がねするのがイヤでなア。
仙臺屋　氣がね等させぬわい。
富藏　此方がするのぢや、氣兼といふのはお前からさすものぢやない、勝手にするのぢや、お前の親切は判つてゐるが、お前も女房が有るであろ。
仙臺屋　わしは女房はない。
富藏　その年まで女房がなけりや身がもてぬわい。
仙臺屋　イヤ去年死んだ。
富藏　まアお力落しぢや、お前一人でくらしてゐるのか。
仙臺屋　イヤ一人ぢやない奉公人が有る。

富藏　其の奉公人がゐかん、お前の親切は奉公人にないキツト厄介者がきたの居候が來たのと蔭で云ふ。

仙臺屋　そんな事云はさぬ。

富藏　蔭で云ふのぢや。そんな事でも云はれて見よ俺の氣ぢやそのツイ文句の一ツも云ふ、此の儘別れておけば氣持よう別れられるに、一晩厄介になつたので氣まづい別れやうせねばならん事になるとも知れぬ、御親切は嬉しいが此の儘別れて緣が有れば歸りによる、まア達者でくらせ。

仙臺屋　甚兵衛さん恐入るな。

甚兵衛　感心な男で御座いますな。

仙臺屋　カウなると何一晩の宿かしたいな、コレわしは決して居候とも厄介者とも思はぬのぢや、お前さんのおかげで儲けさして貰うたわしの恩人としてお宿申し上げたい、大事の〳〵お客樣ぢやお前さんに逢うたおかげで浮世の明るみへ出られた氣がする、永らく福の神に見放されてゐた仙臺や、お前さんといふ福の神に助けられた氣もするのぢや、夫れを此まゝ別れては折角の福の神が逃げてゆかれる樣な氣もする、どうぞ聞入れて泊つてくれわしの方から賴みます〳〵。

富藏　面白い人やな。わしも一晩暖い蒲團の中で寢ても見たし米の飯もたべたいが、氣がねするのがつらさになア。

仙臺屋　その氣兼はささぬといふのぢや。

富藏　キツトさゝぬか。

仙臺屋　エライための押樣ぢやな、お客樣に氣がねさしては濟たすまぬわい。

富藏　ア有難いおせわになつた御恩はきるか、居候でも厄介ものでない賴まれてゆくのぢやでお客樣ぢやな。

仙臺屋　さうぢや〳〵。

富藏　恩にきてもベンチヤラは云はぬぞ。

仙臺屋　そんな事にいらぬ。

富藏　その替りお前も俺にベンチヤラは入らぬ、お前も俺に氣兼せいでもよい。

仙臺屋　わしが氣がねするかい。

富藏　さう〳〵俺はお前に旦那といはぬ。

仙臺屋　さう共。

富藏　お前も俺に旦那樣といふなよ。

仙臺屋　わしがいふものか。

富藏　どつちも氣がねなしに富藏〳〵とよんでくれ、わしもお前よぶ時は、お前名は何といふのぢや。

仙臺屋　わしは彌兵衛と云ふのぢや。

富藏　八重さん女の名の樣ぢやな。

仙臺屋　八重ぢやない彌兵衛といふのぢや。

富藏　彌兵衛か夫れでは彌兵衛とよぶ、お前も富藏とよべ

よどつちも氣がねなしに、それでは早ういて飯よばれよか。
仙臺屋　偉い氣が早いな。甚兵衛ヤット御得心して頂いて今晩はお越し下さる。時にわしは一緒にゆきたいが今閊く通りこれから會所へ金を上げにゆかねばならぬ、お前一足先にいてくれまいか。
富藏　わし一人かい。
仙臺屋　わしは後へすぐ歸るでな。
富藏　夫れは彌兵衛都合が悪い、顔も知らぬものが一人ではなア——。
仙臺屋　よし〳〵夫れでは店の者はわしの手を知つてゐるで一筆手紙かかう。
富藏　そしてくれ〳〵、然しお前早よ歸つてくれよ、斯うなれば矢張り彌兵衛一人たよりぢやでな。
仙臺屋　これさう彌兵衛々々々々と丁稚見たよに云うてくれるな。
（ト矢立出す。）
富藏　コレ夫れ彩公人に渡す手紙ならどないかいてもよいのやな。
仙臺屋　よい共〳〵。
富藏　同じ事なら俺の云ふ通りかいてくれ、其の手紙一本で先のあつかひが違ふでな。
仙臺屋　ナカ〳〵ぬからぬなサア何んでも書かう。
富藏　まづ初めは申附ける一札の事とかけよ。
仙臺屋　丸で奉行所の呼出しぢやがな。よしそれから。
富藏　それから一此のお客様は。
仙臺屋　お客様とは。
富藏　わしぢや。
仙臺屋　成程々々。
富藏　コレ忘れてはどもならんなわしはお客様ぢやでな。
仙臺屋　さうぢや〳〵、ツイうつかりとお客様を忘れてゐた濟まぬ〳〵夫れから。
富藏　大りの〳〵。
仙臺屋　大りとは何ぢや。
富藏　此邊で云はぬかいな大切といふ事ぢや。
仙臺屋　ハー大事の〳〵。
富藏　大りの〳〵。
仙臺屋　大りの〳〵。
富藏　可哀想に餘ほど舌がまはらぬなア。
仙臺屋　お前がまはらぬのぢやがな、夫れから。
富藏　家の福の神に御座候。
仙臺屋　ハヽヽ福の神とは、面白いなヨシ〳〵それから。
富藏　たべものは。
仙臺屋　食べ物の事など云はいでもよいやないか。

富藏　同じ禮を云ふなら甘味い物喰べたいでな。
仙臺屋　仲々抜け目ないお方な、それから。
富藏　榮耀な御方故酒肴……。まアよいわ、萬りは御相談下され度候でよいわ。
仙臺屋　萬りとはなんぢや。
富藏　何もかもと云ふ事ぢや。
仙臺屋　それならバンジぢや。
富藏　お前さんそんな事云うたら人に笑はれるぞ。
仙臺屋　お前が笑はれるのぢやがな。宛名は番頭五兵衞でよいな。
富藏　それはなんぢや。
仙臺屋　これは内の番頭ぢや、此男を尋ねて行つて呉れたら直ぐ私は後で歸るでな。
富藏　よし〳〵腹が空いてゐる故に歸らぬ先に此五兵衞と云ふ男に頼んで飯喰はして貰うてよいか。
仙臺屋　よい共〳〵五兵衞に云ひ付けて何なりとよい物食べて呉れ。
富藏　マア五兵衞に逢うて見る、これが氣持樣云うて呉れたら私が氣ぢやモシモ此男が變な男であつたら直ぐ立つて仕舞ふぞ、殊によると此まゝお前に逢へぬも知れぬ。
仙臺屋　まアさう云はずにな、そんな男ぢやないでな。
富藏　行つて見ねば判らん、緣の者ぢやで。

仙臺屋　ハイ〳〵左樣で御ざいます〳〵。
富藏　それでは先に行きますぞや、オ、忘れてゐた、お前の家は何處ぢや。
仙臺屋　ア、これはうつかりしてゐた、今來た道を引返してあの松原を拔けると桑名の町、街道の中程で山形に仙の字の店のれん、仙臺屋と聞けば直ぐ判りますぢや。
富藏　さうか殘念な事をした。
仙臺屋　どうした。
富藏　モット向うで逢へばよかつた後戻りぢや、モシ亭主御聞きの通り妙な緣で今晩一晩彌兵衞方で厄介になります で、又明日早う此街道を通りますでお禮を云ひます、二文の茶代でも置きたいが天にも地にも二十四文よりないでな彌兵衞に貰うておいてくれ。
仙臺屋　よい〳〵私がおいて行く〳〵。
富藏　それでは早う歸つて呉れよ。
（ト石工道具を忘れ行きかける。）
（仙臺屋それを見て取り上げ。）
仙臺屋　コレ〳〵忘れてる物がある〳〵。
富藏　オ、大事な物を忘れてゐた、それは私の身代ぢや。
仙臺屋　ホウ大分重いな。
富藏　重い筈ぢや中は金ぢや。
仙臺屋　何、金とは。（ト驚く）

富藏　金は金ぢやが石やの玄能。

（ト包を解く中から玄能とのみ現れる此ト端。）

仙臺屋　アッ玄能のよい事を云ふ男ぢやハ、、、、

（ト此模様よろしく。）　（木の頭）

（道具一轉）

第二　桑名宿仙臺屋店先の場

本舞臺正面三間の二重家臺上手土藏の入口を見せ下手は臺所へ通じる出入り、その下手格子の表構に紺のれん、山形に仙の字染め拔いてかけある、穀物問屋仙臺屋の店先の模様よろしく、道具、納る。

正面二重の上にて番頭五兵衛帳面を調べゐる、帳場には手代吉三帳付なしてゐる。

吉三　水上げやぞ。

德松　オーイ。

（仲仕德松龜吉兩人は揚幕より上手倉の中へ俵を運んでゐる、此時花道より富藏出來り七三にて龜吉は德松と間違へ米俵を富藏の肩の上にのせる、富藏は不意の事とて倒れる。）

龜吉　ヤイ阿呆め何をこんな處にぼんやり立つてゐるのぢやい、仲仕と間違へるわいボンヤリめ何を面をふくらしてけつかるのぢやい、早くのかんかい往來の邪魔になるわいのけ〱。

富藏　ヤイうぬは何處の奴ぢや、往來に立つてゐる俺の頭の上からこんな物をガンとのせて、倒れて痛い目をしてゐるのに貴樣の方から文句ぬかす、そんな譯の判らぬ話があるかい。

龜吉　うぬがそんな處にボンヤリ立つてけつかる故間違へるわい。

富藏　伊勢の桑名街道に人が立つてならぬのかい、これはお前の街道かい天下の往來ぢやろ邪魔になれば初めにのけと云へばのきもするわい、旅の者ぢやと思うて馬鹿にするない、話が判らにや代官か奉行樣へ行つて白砂をつかんで話を仕樣か、うぬはジクツの判らぬ奴ぢやなあやまれ。

龜吉　文句の多い奴ぢやな、あやまりやよいぢやないか、かんにんしてや。

富藏　旅の者は心細う歩いてゐるわい、あんまり大きな面をするな。

龜吉　へイ〱あんたはん一寸御免なはれや。

（ト倉の中へ俵を運ぶ。）

德松　お前もさうぢやないかい、後から來るのが判らんか。

富藏　判らぬ、俺は頭の後に目はないわい、マア〱すん

だらよいわ、一寸たづねるが仙臺屋と云ふのは此處か。
德松　仙臺屋は此處ぢや。
富藏　お前は。
德松　おれは仲仕ぢや。
富藏　名前は。
德松　德松ぢや。
富藏　そつちのは。
龜吉　おれは龜吉と云ふのぢや。
富藏　どつちも違ふな、お前の内に五兵衛と云ふ男は居らぬか。
龜吉　それは内の御番頭さんぢや。
富藏　オヽそれぢや一寸五兵衛を呼んで吳れ。
龜吉　五兵衛なんて呼んたら叱られるわい。
富藏　大事ない者ぢや、五兵衛をよべよ。
龜吉　五兵衛なんて云へぬわい。
（ト大聲に云ふ。）
五兵衛　へヽエ――。
（ト五兵衛返事し乍ら表へ出て。）
五兵衛　誰ぢや、俺を呼んだのは。
富藏　私ぢや。
五兵衛　なんぢやい橫柄に五兵衛なんてぬかすなへ。
富藏　お前五兵衛ぢやないのかい。
五兵衛　五兵衛ぢやわい。
富藏　それではよいぢやないか、五兵衛に六兵衛と云へば可笑しいが五兵衛なら當り前ぢやなア五兵衛。
五兵衛　煩い奴ぢや何の用ぢや。
富藏　今の先向うの立場茶屋でお前とこの彌兵衛に逢うたのぢや。
五兵衛　コラッお前とこの彌兵衛なんて失禮な事、吐したら、田舍者の貴樣なんか知るまいが、此桑名の宿で家の旦那を彌兵衛なんて呼び捨てにさらしたらお前の口がゆがむぞ。
富藏　どつちへゆがむのぢや。
五兵衛　そんな事判るかい。
富藏　彌兵衛と呼ばねば何と呼ぶのぢや。
五兵衛　旦那樣とか仙臺や樣とか吐かせ。
富藏　そんな事云ふ位なら初めからやつて來ぬわ。
五兵衛　來ず共よいわ、見れば薄きたない身なりで大孫無心者であらう歸れ〳〵。
富藏　アヽ張り私の目は高かつた、それでは歸つう彌兵衛が歸ればさう云うておくれ、富藏と云ふ者が來たなれどかう云うたら歸つたと、緣がなかつたなアと俺が云うてたと、出世の出來ぬ面四ッ、並べて彌兵衛に叱られるわ。
（ト行きかける。）

五兵衞　コレ待てお前は逢うて行けと云はれて來たのかい

富藏　賴まれて來てやつたのぢや、お前方は私の身なりがきたない故、無心者と思ふであらうが俺は大切なお客樣ぢや、江戶へ大金を儲けに行く、こんな處に用は無いが彌兵衞がどうぞ來て下されと賴んだ故やつて來たお客樣ぢや。

五兵衞　それならそれとなぜ初めから云うて來ぬのぢや。

富藏　それを云ふ間のない內にお前の方から歸れ〳〵と吐したのぢや、マアこんな處で大聲上げてゐても近所へ聞えが惡いマアこつちへ這入れ〳〵。

（ト先へ入る三人も後より入る。）

富藏　商人の店先でガア〳〵大聲上げるとのれんに疵がつくお前五兵衞ぢやな。

五兵衞　さうぢや。

富藏　それではこれを見てくれその上で今の樣な調子で有つたら直ぐ出立するでな。

龜吉　番頭はん大方此野郞街道で空腹かゝへてゐたのを家の旦那のお情で拾はれて來たのですわい。

富藏　誰か拾はれたのぢやい矢張り歸るわ。

五兵衞　まア〳〵待つて〳〵龜吉お前も默つて居れ。

（ト手紙を讀む。）

富藏　早う讀めよ。

五兵衞　さう云うたらウロ〳〵するがな。ナニ〳〵これは旦那の手ぢや。

富藏　彌兵衞の手ぢやろ。

五兵衞　フムーッ此のお客樣は大事の〳〵御客樣に御座候家の福の神に御座候、ハテナ福の神。

（ト富藏を見る、富藏鼻を押へる。）

五兵衞　喰物は榮耀な御方故萬事は御相談被下度候、仙臺屋彌兵衞、番頭五兵衞殿——。これお前方は何と云ふ失禮な事を申し上げるのぢや、一寸身なりがきたないと直ぐ口がゆがむなんて吐しやがつて。

龜吉　それはあんたが云うたのですがな。

五兵衞　左樣か。へ、——誠に存じません事で失禮申し上げまして何共申譯も有りませぬ、今の手紙でチヤンと判りました、イヤモウお恥しい田舍者と云ふ者は目先が見えませんでへ……。

富藏　俺も田舍者ぢやでな、お前方も餘りぢや、あの龜と云ふ男なぞはポン〳〵吐してな。

五兵衞　何共申譯も御ざいませんサア〳〵どうぞ御すゝぎを取らんかい。

二人　へイ……。

（ト水を持つて來て富藏の足を洗ふ。）

富藏　その樣にされては痛み入る、さう大切にして貰ふ程

の客ぢやない。
德松　イエどう致しましこ結構なお御足で。
五兵衞　阿呆奴馬ぢやあるまいし足をほめる奴があるかいへ、……。
富藏　獨兵衞が一所に歸れば判るのぢやが、あれは會所とやらん行つて後で歸る故歸れば委細聞いてくれ。
五兵衞　イヤモウチヤンと判つて御ざります、初めから私が出ましたらこんな粗忽もなかつたのですが。
富藏　初めからお前が出たのぢやがな。
五兵衞　アッ左樣か誠に早やへ……。
富藏　此のわらぢはまだ新しいであす又入用ぢやでな。
德松　ヘイ〳〵チヤンと私が日に當てゝ置きます、泥も落して置きます。
富藏　こんた男は便りないオイお前さん頼むぜ。
（ト龜吉に渡す。）
龜吉　ヘイ〳〵畏りました。
富藏　此脚絆は。
德松　それは私がチヤンと洗うて置きます。
富藏　此男大丈夫かいな。
五兵衞　ヘイ〳〵大丈夫で御ざります。
富藏　お前德ぢやな、德に脚絆、龜にわらぢ覺えて置いてくれ、扨てあすは早い故此笠はオ、お前さんに頼んで置きます。
吉三　ヘイ畏りました。
富藏　そして此荷物は五兵衞に預ける。これも一所に頼みます。
（ト石工道具を渡す。）
五兵衞　ヘイ〳〵イヨ此包は。
富藏　大切にして置いてくれ、私の身代ぢや。
五兵衞　ヘエ御身代とは重う御座いますな。
富藏　重い筈ぢや中は金ぢやもの。
五兵衞　ヘエッ金へエ――。
（ト三人手を出して持つ。）
富藏　コレ〳〵何をしてゐるのぢや、障るない五兵衞樣に預けたぞ。
五兵衞　ヘエ番頭五兵衞樣に預り申します。
（ト帳場の引出しに入れる。）
富藏　厚かましいが、腹がへつたで米の飯喰はして貰へぬか。
五兵衞　ヘイ直にお支度申しますが御料理の御注文に。
富藏　何んでもよい久々に米の飯が食ひたい。
五兵衞　御冗談許りそして御料理は。
富藏　此邊は海邊で肴があるな。
五兵衞　ヘイ肴丈けは新しいのがウンザンに御ざいます。

富藏　ア、肴が食ひたいな。
五兵衛　ヘイどんな物がお好みで御ざいます。
富藏　鯛が食ひたい、鯛がなければ鯔でもよい。
五兵衛　ヘイ畏りました。
富藏　厚かましいが、酒が手廻れば酒も少し。
五兵衛　ヘイ承知致しました。
富藏　酒はぜい澤ぢやでどうでもよいが、飯だけは米から焚いてくれよ。
五兵衛　御冗談許りこれ德松お前は料理やへ大急ぎ、龜は酒やへ、これ吉三お前直ぐお湯の支度をなア。
吉三　ヘイ畏りました。
（ト奥へ入る富藏は、鼻紙を捨てる、五兵衛氣づかず拾ひ。）
五兵衛　旦那これは何で御ざいます。
富藏　ア、失禮したハナぢや。
（ト五兵衛は祝儀と間違へ。）
五兵衛　ヘエお花有難う、御ざりますどう致しませう。
富藏　そこらにほつておけばよいぢやないか。
五兵衛　アノこちら共へ、コレ兩人お禮申し上げぬか。
二人　これは〳〵有難う御座います。
（ト三人表へ出て。）
德松　何んとあの身なりで人は見かけによらんな。

龜吉　サア初めからさうと知つたらあんな事を云ふのやなかつたのに、これは山分ぢやぞ。
（ト中を開けて鼻汁を見て其處へ捨て花道へ入る、後を五兵衛見乍ら、それを拾ひ上げ。）
五兵衛　何んと云ふ失禮な事をする奴ぢや例へ巾は僅にしろ、捨てる奴があるかい（巾を見て）何ぢやほんまのはなぢや、ハーン上方の旦那はなさる事が違ふ粹ぢや、花をやろとほんまのはなをくれておいて後で小判とかへてやろ。イヤ有難う御座います。（ト懐中する）
富藏　五兵衛よ。
五兵衛　ヘエ。
富藏　まだ彌兵衛は歸らぬか。
五兵衛　モウ程なく御歸りで御ざります。
富藏　仲々大きな店がまへ倉もあるな。
五兵衛　イヤモウ納屋同樣で御座います。
富藏　イヤ見事な物ぢや、此家屋敷は抵當に這入つてゐるとの事ぢやな。
五兵衛　ヘイ旦那樣エライ事御存じで御ざいますな。
富藏　先き彌兵衛がさう云うた。
五兵衛　ア左樣で御座いますかイヤモウ當家も此桑名で可成り人に知られた店で御ざいますが、二三年此方の手違ひでトン〳〵拍手に手が合はず、主人も一生懸命元の仙

臺屋にしたいと、あせつて居ります、此家も人手に渡すか渡さぬの境目で御ざいます。

富藏　ア氣の毒になア、お前は此家に何歳頃から奉公してゐるのぢや。

五兵衞　私は十二の年から御奉公に上つて居ります。

富藏　そんな時から此年まで奉公してかんじんの主人の家が左り前になつては主人よりはお前の方がたまらんな、私も人事に思へぬわい御主人樣の心得違ひが元になつてイヤモウ此話をすれば又泣かねばならぬマアくよ／＼するなよ、人間は何時迄も悪い事許りぢやない七轉び。

五兵衞　八起きでたア。

富藏　そいつぢやオ、五兵衞茛一服くれい。

五兵衞　ヘイ／＼どうぞ。

（ト此時船頭十兵衞揚幕から走り出て。）

十兵衞　ついた／＼／＼船がついた／＼／＼。

（ト下手へ入る。）

富藏　ヒヤツ火事か。

五兵衞　イエ火事でも何んでも御ざりませぬ。

富藏　でも今大きな聲で男がついた／＼と云うて走つてゐたぞ。

五兵衞　ヘイ今のは此桑名の港へ千石舟が入りますと町中ふれて歩きますので處の風で御座ります。

富藏　何ぢや船がついたのかい。俺はまた火事かと思うた處かはれば品かはるで吃驚さしよつた。

（此時花道より神崎屋手代兵助出て直ぐに内に入り。）

兵助　今日は。

五兵衞　オこれは／＼まあお上りサアおしき。

兵助　ヘイ有難う。

五兵衞　一寸失禮致します。

富藏　オ火がないで炭をついで置きませう。

（ト富藏火鉢に炭をつぐ。）

兵助　此間はよく降りましたな。

五兵衞　サア／＼此調子なら御天氣も續き相で結構で御座りますな。

兵助　此間の若狭やさんのは丁度山崎やさんと手が合うて片付きましたので偉い御心配かけましてすみません。

五兵衞　それは結構で御座ります、モウ此頃は大きな口は手が出せませんので御恥しい事で御座います。

兵助　何を仰有いますやら。

（ト茛の火を付けに行く。）

富藏　エイ此の人は何をするのぢや。

兵助　吃驚した何んぢやい此男は。

五兵衞　コレ神崎やさん失禮な事を云うて下さらぬ樣になア。何ぞ粗忽致しましたか。

富藏　僕が折角炭を積んだのを默つて煙管でメチャ〱にして氣が悪いがな。

兵助　これ物を大層に云ひなさんな莨の火を一寸つけたのがどうしたのや。

五兵衛　これ神崎やさん〱氣をつけてものを云うて下されや、あの方は何處の方と思うて居なさるのぢや。

兵助　あんな田舎者ぢやありませんか。

五兵衛　失禮な事云ひなさんな家の大事のお客樣ですがな。

兵助　エツお客樣で御ざりますか。

五兵衛　お客樣も〱大事の御客樣ですがな、江戸へお出でになる途中宅の主人がお賴み申して立寄つて頂いた家の福の神さまで御座りますがな。

兵助　それは〱存じませぬ事とてとんだ失禮を致しました、どうぞ御引合せ方々どうぞ御詫びをさしてお吳れなされませ。

五兵衛　チトたしなみなされませ、とんだ失禮を致しました。

兵助　何共申譯も御ざりませぬ存ぜぬ事とて失禮を致しまして相すみませぬ。

富藏　イヤ別にあやまる事ぢやないが、人間と云ふものは僕の事で氣持が悪いでな。

兵助　御尤樣で私は矢張り此桑名で御當家同樣の稼業、神崎や太兵衛の若い者兵助と申ます、どうぞお見知りおかれましてチト手前の方の店にもお立ちよりを願ひます。

富藏　そんな處へ行くかい。

兵助　へイ〱恐入ります、五兵衛さんどうぞよろしうお取りなしをお願ひ申しますとんだ失禮を致しましてお立腹の樣子で御座りますな。

五兵衛　イヤ無理も御ざりませぬ私も先程エライ失策をやりましてな、と云ふのが身なりがなア。

富藏　そんな事を云ふものぢやない、身なりがきたないとてお前達にぬの子一枚買うてくれとは云はぬ。

五兵衛　御尤樣で。

兵助　時に只今ふれさしましたが御開きで御座いませうが、此間から知らせのあつた舟が二杯はいりました一杯は手前の方で引受けますが一杯は此方樣で水揚をして頂き度うて伺ひましたが如何で御座りませう。

五兵衛　どう致しまして只今の仙臺屋一杯の事はさておいて半分の水上げも出來ませぬ、此度はどうぞ他の御店で仕切つて頂きます樣にお願ひ申します。

兵助　何を仰有いますやら仙臺やさんがそんな事を仰有たら桑名の町が暗やみで御座りますがな、旦那に一寸御相談して見て下さりませ。

五兵衛　相憎留守で御座いまして又よしやお店においでゝも、とても／＼どうぞ今度は他の方へ御願ひ申ます。
兵助　困りましたな、お店を當に參りましたのに何とかなりませんか折角這入つて來た物を水上げも出來なんだとは外の港へ聞えても榮名の衰微、モシ五兵衛さん彼方に一寸御願ひ申しては如何で御座います。
五兵衛　サア氣の付かぬ事も御座いませんが主の留守に私一存ではなア、出過ぎたものぢやと叱られるかと存じましてな。
兵助　何が叱られますかいな、店の東の御番頭御留守の内に取引が出來たと云ふのは自慢にこそなれ、叱られる筈が御座りませぬがな一寸御伺ひして見なされ。
五兵衛　それもさうぢやな、それでは一寸へイ旦那に申し上げます、主の留守に出すぎた御話で御座りますが只今買うて頂くと云ふ樣な御話には出來ませぬかいな。
富藏　買へとは何ぢや。
五兵衛　恐入りますな買へとはなんぢやなぞと、煙に卷かれてボーッと致しますがな。
富藏　お前は何屋ぢや。
兵助　何屋ぢやとは正面から一本參りますな、米屋と云ふのも恥しいほんの糊米や程の商人で御座います。
富藏　米屋か。

二人　米屋かとは恐入ります。
富藏　買へとは俺に米を買へと云ふのか。
五兵衛　どうです神崎屋さん米を買へかと云つ樣な方で御座いますな。
兵助　田舍の商人は度ぎもを拔かれますな、どうぞ御願ひ申します。
富藏　五兵衛よ俺の顏見てから直ぐ米を買へとはお前の店も餘程苦しいな。
五兵衛　御恥しい事で御座ります。
富藏　ニッ仕方がないわ、買はねばならぬのなら買うて置く、早う持つて來いよ。
五兵衛　ヘエ恐れ入ります一口商ひ大きい物で御座りますなそれではせめて一杯丈け。
富藏　タッタ一杯か。
五兵衛　タッタ。
富藏　俺丈けぢやで一杯でもよいが俺の商ひで氣の毒ぢやた、俺處の堺の親方なぞは一日に五六杯は毎日あけたぜ。
五兵衛　ヘイ一日五六杯。神崎やさん聞きなはつたか。
兵助　モウ御話丈けで氣が遠くなりますな。
富藏　此邊の人は何を食うてますのぢやいなア芋かいな、まあ俺一人ぢや一杯でよい早い事しておくれ。
五兵衛　ヘエ神崎屋さん相場は立つてゐますかいな。

兵助　ヘイコレ〳〵が水上げになつてゐますので。
五兵衞　成程――ヘエ且那樣只今一杯の相場はこれ〳〵で
御座います。
（ト算盤を見せる。）
富藏　なんぼでも仕方ない時の相場なら買うて置くわい。
五兵衞　ヘーどうです神崎屋さん聞きなさつたか、時の相
場なら買うて置くと小百一トつかたげなさらずエライも
のですな。
（ト指二本ヅツ見せる。）
兵助　イヤモウ胸がすいと血が頭に上りますな、それでは
お手を拜借しませうか。
五兵衞　イサイ承知ヘイ且那お手一トつ。
富藏　一杯位の米買うて手を打つのかい、尻の穴の小さい
處ぢやな、與あたりでそんな事云うたら笑はれるぞ買う
たら買うたに違ひない早う持て來い〳〵。
五兵衞　ヘイお言葉で御座りますが處の風で御座りますの
でどうぞ一トつ御手拜借を。
富藏　しよみ貝程の氣の小さい處ぢやな。
二人　ヘイヨー〳〵〳〵。
（ト三人手を打つ。）
兵助　有難う御座いますそれでは直ぐに水揚げを。
五兵衞　神崎屋さん一寸、且那誠に申かねますが何程でも
よろしう御座いますが少しでもお手附を。
富藏　金かよしッ手附などで僕の商ひに面倒臭い皆拂ふ
ぞ。
兵助　モシ且那一寸お待ちを……。五兵衞さん一寸表まで。
（ト五兵衞と共に表へ出て。）
兵助　五兵衞さんしつかりしとくなはれ、あのお客の云ひ
草を聞きなはつたか桑名と云ふ處は芋喰うて暮してゐる
のか尻の穴の小さい處ぢやとエライ云ひ草やおまへん
か、よしやそれに違ひなうても餘りよい氣持ちがしまへ
ん、其處へ一寸お手附けなんて云ひなはんな又云はれま
すがな、しかも江戸へ行く大商人桑名の町で米買うたら
直ぐに手附けと手を出した、田舍商人は度胸がないと江
戸の町で云はれたら、手前の店やお店の恥ですみません
桑名の町にキズがつきますからな。
五兵衞　サア私も思はぬでは御座りませんが、何を云うて
も主人は留守なり。
兵助　よろしい例へ手前の店の主が何と申しますとも、桑
名男の度胸の見せ處一番私が引受けて手附けは御立替へ
致して置きます。
五兵衞　それでは貴方の方のお店で御立替へ下さいます
か。
兵助　大丈夫引受けますから五兵衞さんお客樣の事は大丈

夫で御座いませうな。

五兵衛　此方なれば安心しておくなはれ　あきれましたな、あのお姿で道中して然も大金を手拭に包んで平氣で下げて歩いて御座るのには吃驚しましたな。

兵助　ヘエそれでは大丈夫直ぐに水揚げにかゝります。

五兵衛　頼みますせ。

兵助　萬事承知、旦那樣有難う御座います、オーイ水揚げぢやぞ〳〵。

（ト足早に揚幕へ入る。）

五兵衛　旦那樣有難う御座います。

富藏　五兵衛伊勢は泉州より米が高いな。

五兵衛　ヘイ左樣で座御いますかいな。

富藏　堺では大抵一杯十六文か七文止りぢやが此方は二十二文ぢやとな。

五兵衛　十六文へイ〳〵白米の小賣値段で御座ります、それなら當地もその樣な値段で御座います。

富藏　伊勢の奴は人が悪いな旅の者と思うて二十二文に賣つたな。

五兵衛　イエどう致しまして。

富藏　イヤ今の米の話ぢや今一杯買ふたであらうがな、一升枡に一杯二十二文は高いと云ふのぢや。

五兵衛　旦那御冗談許りそんな冗談被仰つて旅をしておゐでなされますと面白い事で御座りませうなア。

富藏　イヤ冗談ぢやない今の米の話ぢや一升枡に一杯買うたであらうがな。

五兵衛　何を被仰いますやら今のは千石船に米が一杯で御座りますがな。

富藏　千石船に米が一杯俺は繪に描いたのを見た事があるが、本まの物はまだ知らぬ見事な物であらうな。

五兵衛　なぞと眞顔で冗談許り、田舍の番頭をなぶつてやろとお人の悪い、へゝゝゝ。

富藏　何のなぶるのでもない一杯二十二文の米は高いと云ふのぢや。

五兵衛　イエ今のは千石船に米が一杯二千二百兩と申しますので御座ります。

富藏　千石船に米が一杯二千二百兩おそろしい話ぢやなア。

五兵衛　なぞと眞顔でお人の悪い商ひ中場にそんな洒落被仰います、田舍者の私等はチョイ〳〵ほんまに致します、モウよい加減になぶらずお助け下さいませ。

富藏　五兵衛お前なんぞ間違うてへんか、俺は二十二文で米が一升買うたのぢやで。

五兵衛　何ぼおなぶりなされても、旦那の身代は私がチャンとお預りして居り升でな。

富藏　何私の身代とは
五兵衛　先き程の手拭包みチヤンとお預り申して居ります。
富藏　あの中は玄能と石火矢ぢや。
五兵衛　石火矢と玄能と石火矢ぢや。
富藏　お前なんぞ感違ひしてやせんか、俺は石やの職人であれは石火矢と玄能、私の商賣道具ぢや。
五兵衛　ヒヤッ中は小判と違ふのか。
富藏　そんな金がある位ならなんで苦勞して江戸まで行く、開けて見い中は金の槌ぢやわい。
五兵衛　へー。
（ト以前の手拭包を持ち來り中を開けるとヒヤと玄能出る。）
富藏　五兵衛お前なんぞ間違へてやな。
五兵衛　エヽ、納まるない、お客〳〵と吐す故田舍者の大金持と思うてかゝつた此方があやまり、何故こんな物を身代ぢやと吐したのぢや。
（ト富藏を押へ付ける。）
富藏　堪忍してくれ〳〵。ヒヤと玄能は石やの身代、それ故身代と云うたのぢや。
五兵衛　サアその身代は兎も角なんで金ぢやと云うたのぢや。
富藏　石屋の使ふ玄能に土や木では間にあはぬ、それゆゑ金と云うたのぢや。
五兵衛　エイこんな金がどうなるかい。
富藏　見てくれ金ぢやわい〳〵。
五兵衛　金は金に違ひはないわい此金故に此騷動、お前は何も知るまいが我々仲間で取引して賣つた買うたと手をしめて、金がないと云うた日には天下法度の空相場盜みかたりよりも重い罪、代々つゞいた仙臺屋も欠所になつたその上で旦那は白州でしばり首、主の首に繩打てるか、俺は此まゝ名乘つて出る今にも旦那が歸つたら此譯云うて置いてくれ。
富藏　五兵衛待つてくれ〳〵、世間を知らぬ悲しさにこんな騷動にならうとは俺は夢にも知らなんだ、俺がお世話になつた許りにお前の首に繩かけて、どうして俺が見て居られよ、奉公する身は皆一とつ、俺も主人で憂き苦勞、忠義といふ字に二ッはない、行かねば叶はぬ御白州なら、俺がこれから名乘つて出る俺をやつてくれ〳〵。
五兵衛　お前をやつては話がつかぬ放せ〳〵。
富藏　まつてくれ〳〵。
五兵衛　エヽ放せ〳〵と云ふのだ。
（ト手荒く振り切り花道へ走り入る、富藏はその後を追ひ行き七三にて。）

富藏　オイ五兵衞まつてくれ〱オーイ。

（ト氣落ちして倒れる此時花道より以前の兵助出來り富藏を抱き起し乍ら。）

兵助　オヽ旦那樣何をしておゐでなされます、又五兵衞がお氣に召さぬ事でも申し上げましたのかサア〱御機嫌直して。

（ト内へ連れ入り持ち來た角樽を前に出し。）

兵助　あれから歸りまして今水揚げの最中に阿波から大盡が參りまして四丁上げで買ひたいとの事、相場は立てゝ參りましたが只今お賣りなされますと貴方のお儲が四百兩、手前共の店口錢が四十兩元々强氣の旦那樣お賣りなさる樣な氣づかひ御座りますまいが、一應伺つて見よとの云ひ付けで參りました如何な事で御ざりませう。

富藏　ナニ、モ一遍云うてくれ。

兵助　ヘイ只今お賣りなさいますと貴方のお儲が四百兩手前共の口錢が四十兩頂けますので

富藏　ウムそれでは俺が賣ると云うたら。

兵助　ヘイ四百兩のお儲け。

富藏　オ神崎屋賣つてくれ〱〱。

兵助　ヘイ。

（ト再び兩人手を打つ。）

兵助　賣つた〱〱。

（ト兵助元の處へ入る。同時に花道より仙臺屋彌兵衞、同じく五兵衞走り來り、富藏に打つてかゝるをよけて。）

富藏　彌兵衞か、千石船に米一杯買うた。

仙臺屋　サアそれ故に此騷動ぢや。

富藏　相場が立つた。

仙臺屋　ヒエーツ。

富藏　上つたツ。

仙臺屋　ヒエーツ。

富藏　賣つた、四百兩儲けたツ。

二人　ヒエーツ。

（ト二人ヘタバル、同時に揚まくより、神崎屋太兵衞先頭に兵助は四百兩の金を三寶にのせ若もの大勢連れて出來り。）

太兵衞　仙臺屋樣御免下されませ、早速乍ら商人冥利、承りました上方の旦那樣に御目にかゝり度く、御引立てになりました御方御引合せをお願ひ申します。

仙臺屋　ヘエ旦那は此方で御座います。

太兵衞　オこれは〱初めて御目にかゝります、神崎屋太兵衞と申します、今日は御引立に預りまして私は桑名の町人神崎屋太兵衞と申します、これを御緣に幾久しく御引立の程偏にお願ひ申します。これは仙臺屋樣から旦那

様へ。

（ト三寶を出す仙臺屋は富藏の前に持つて行き。）

仙臺屋　ヘイ旦那お納め下さいませ。

富藏　オヽこれ皆．俺の金か此金どうしよう〳〵、有難い〳〵此百兩は國へ歸つて御主人様を助けるお金。

（ト百兩を懐中へ入れる。）

富藏　此二百兩は仙臺屋彌兵衞への志これを元手に精出してゆがんだ家を持ち直せよ。此五十兩は番頭五兵衞へのテンカン料。

五兵衞　有難う御座います

富藏　殘る黄金の五十兩は神崎屋御一統への志。

太兵衞　それでは餘り。

富藏　ナニやせてもかれても堺の富藏、此處が男の。

（ト胸を叩くを。）　　　　（木の頭）

富藏　度胸ぢやわい。

（ト芽出度々々の唄にて小判を撒く、皆々有難う御座いますと禮を云ふ。宜敷。）

――幕――

喜劇　十六形（三場）

場所
一、木管會社横手の場
二、本田秀吉宅の場
三、積川專務室の場

人物
本田秀吉　工夫
山本金太郎　同
篤吉　本田の父
菊子　積川の夫人
田川辰三　工夫
積川清　社長
河村十助　工夫
田中四良吉　同
土屋梅吉　同
八木仲吉　同
山形正吉　支配人
おみつ　女中
木下松藏　工夫
小野はる　女工
おみね　義太夫
河内留吉　工夫
原田佐吉　同
池端らく　女工
榎本菊松　工夫
吉田とら　女工
山本長吉　工夫
吉井萬作　同
鈴木さと　女工
おたか　秀吉妹
おとみ　女工

一、木管會社横手の場

本舞臺、通りの煉瓦造り、上手斜に奧へ通ずる心、所所に立木あり、總て會社内の横手、午後六時前後の舞臺、光線稍々暗し淋しき誂への囃子にて幕開く。

幕の内より工夫萬作、長吉、菊松、佐吉、留吉、松藏仲吉、四良吉、十助、梅吉、辰三は、何れも紙袋に四五十錢を入れたる『日給袋』を持ち口々に小聲にて社長に對する不平を並べ居る體、舞臺一面不穩の情態漂

ひ殺氣を帶ぶ、稍々有つて工夫辰三はツット上手に立
ち上りて。

辰三　エ、面倒臭えから、潰て仕舞へ、爰許りが木管會社
おやれえ、餘り弱い者虐めを、仕やがるぢやねえか、此
の會社叩き壞して仕まへ、俺れ一人で引受けて、喰ひ込
んでやるから。

十助　待ちねえ……。潰ちまふのは、何時でもやれる、三
人寄りや文殊の智慧だ、亂暴な眞似しちや、後が面倒だ
ぜ。

四眞吉　ヒヤ／＼。

辰三　誰だえ、ヒヤ／＼なんて、吐しやがつたのは。

松藏　オイ／＼辰三、マア／＼宜いわえ、お前丈けやがな、
會社を打潰すなんてえのは、マア／＼待ちいなア。

辰三　だから、上方の奴は嫌れえだい、江戸ッ兒は氣が短
けえや、話が判らなきや潰ちまふのだい。

松藏　上方者かて、東京の者かて、詰り物の道理は同じや
がな、東京も大阪も冬は寒むいし夏は暑いよつてなア。

辰三　何に、云やがるんだえ贅六め。

梅吉　マア／＼待て／＼、内輪喧嘩しても、始まらぬわえ、
俺れは東海道の濱松生れで、東京も大阪も贔屓はせぬが、
會社を、叩き壞すなんて、亂暴ぢや、職長の本田も心配
して呉れて居るし、山田の金太も今話に行て呉れてるん
ぢやないかまあ其の返事を聞いてからの事にせい。

仲吉　爾うぢや／＼喧嘩をするより、穩かに、話をつけて、
手間賃を貰ふ方が、賢やせ。

辰三　俺れを、阿呆ぢやと吐すのかい。

四眞吉　お前を阿呆ぢやとは云やせんがな、お前職場で、
一番賢しこい男ぢやがな。ア、賢しこい／＼、怒るなや。

辰三　變な、口の利き方をするなえ、ヨシ其れぢや、俺れ
は、支配人に逢うて、話をつけて來てやるから、皆んな
待つてろい。

十助　待ちねえ／＼、山田の金太が、行つて、居るぢやね
えか。

辰三　箆棒め、ぼんやりの金太か、行つて、話がつく筈が
ねえや。

萬作　此奴は、全くだ、辰兄に、行つて貰はうよ。

梅吉　其りや不可ねえ、金太の奴は、駄目でも、職長の本
田が、行つて居りや、宜いぢやねえか。

佐吉　本田は、行つて居ねえやうだぞ、先き、職場の隅で、
青い顏して、腕組して何んか、考へて居たよ。

四眞吉　矢張り之れで、心配して居るのぢや。

松藏　今、職工場には、見えなんだぞ。

十助　歸つて、仕舞つたのぢや有るめえか。

辰三　此の話が、煩せえから、逃げて仕舞つたのぢやねえ

か。

仲吉　眞逆、其麼男やおまへんやらう。

辰三　あの、口の利き方が厭やなんだ、此の場合おまへんやらうなんて生溫い、口を利くなえ。

（ト此の話中に上手より女工おとら、おとみ、おさと工女の拵へにて各自手に辨當包を提げていで來る十助は之れを見て、）

十助　オイ、モウ仕舞つたのかえ。

おとみ　五時で上がりぢや。

四貫吉　大きな尻ぢやなア。

おさと　ほといて。

（ト云ひ捨てゝ下手へはいる同時に上手より同じ工女の拵へにて辨當包を提げておはる、おらくの兩人いで來る。）

おらく　何方も左樣なら。

辰三　オイ〳〵本田の妹は、未だ工場に居るかい。

おはる　本田の妹とは、誰れやいな。

おらく　おたかはんの、事やろな。

十助　爾うだ俺れん處の、職長の、妹よ。

おはる　今日は用が出來たと云うて、十二時限りで仕事を休んで歸へつて仕まうた。

松藏　何んの用でや。

おはる　其麼事知らんで。

松藏　何んで、聞いとかんのぢや。

おはる　フウン偉い、濟まんな。

松藏　何にをッ。

おらく　おはるはん、相手に仕ないな、これ阿呆やかな。

（ト言ひ捨てゝ下手へ兩人はいる。）

松藏　何んかしてけつかるのぢやえ、オイ職長の妹は歸つたと、云ふとるぞ。

梅吉　夫れぢや、本田も歸つたのぢやなからうか。

辰三　俺れ支配人の部屋へ、行つて來てやらうよ。

（ト立ち上る時上手より。）

金太　其麼無茶な話がおますかいな〳〵、來ておくなはれ來ておくなはれ。

山形　何處へ引張つて行くのだ。

（ト言ひながら上手內より金太郎は支配人山形の手を取り好みの職工の拵にて山形は背廣服四十格好の拵へにていで來る。職工一同は此の聲に皆々上手を向く。）

一同　オイ〳〵金太、怎うした〳〵。

（ト皆々口八釜敷兩人を取り捲く。）

金太　怎うも怎うも有るかいなア、餘んまり、判らんよつて、皆に聞いて貰ふと思うて、支配人さんを引張つて來たのぢや。

一同　怎うなと、して貰らへ、やつて貰へ〳〵〳〵。

（ト口々に各自ガヤ〳〵と騷ぐを山形之れを見て。）

山形　オイお前方、何にをして居るのか、モウ退けてから、一時間も成るに、まだ此處に居るのか、ナゼ歸らない。

金太　モシ〳〵支配人さん、歸しますかいな、歸れますかいな。五十人の職工が、一週間夜仕事をしたのも、一日に十二錢の手間代を、遣ろと、仰有つたのを、樂みに、皆働きましたのぢや、其れが、今日になつて、都合で拂へんなんて、贅生過ぎますかな、我々は一日十二錢でも大金で、夫れを、貰へると思へばこそ朝から働いて、疲れた體を、空腹抱へて　夜仕事したのやおまへんか、夫れが今日になつて、拂へんなんて、言はれて、あゝ左様かいなと言うて、皆歸れますかいな〳〵。

山形　其の間には先刻から、貴様に云つて居るぢやないか、一同の職工には、氣の毒だけれども、本會社も、先々の日限を間違つて、相手が、西洋人だけに、お前方が、夜間事業をして、製作をした木管は、全部駄目に成つたのぢや、會社は材料は損失たし、其の上、お前方の賃金を仕拂ふと言ふ事は、會社　經濟上、許せないのだ、爲めに、此の結果を見たのだ、根本の損害が、枝葉の職工等に、來るのは、免れない事ぢやないか、お前方も、其麼無理な事を云うて社長を虐めるものぢやない。

金太　御尤もで御座りますけれども、我々と、社長さんとは、身分が違ひますので。

辰三　オイ〳〵、金太、何を云つてるのだえ、何にが御尤もだえ、此方へ寄つてゐねえ。

（ト金太を引き退けて山形の前に進み出で。）

辰三　オイ支配人さん……山形の正公……

山形　何んだ、失敬な、正公なんてツ。

辰三　手前は山形の正吉と云ふ名前ぢやねえか。俺も、此の會社の雇人なら、支配人たつて雇だえ、正公と云つたのが怎うした、サア、金太に云つた、口上をモウ一度言つて見ろい。

山形　貴様は喧嘩を賣りに來たのか。

辰三　時節柄、割引してやるから、俺の拳骨を、買つて見ねえ。

四良吉　オイ〳〵辰、辰、其れは、お前無茶ぢや、此處へ寄つていゝな、喧嘩やないのやよつてなア。

（ト辰三を引退けて前に進みながら。）

エヘヽヽヽ。

（ト追従笑ひをしながら。）

支配人さん、辰は、あんな質たすさかいに、堪忍して遣つとくなはれ、詰り何んたす、今度の夜業の錢を頂けん事になりましたのかいなア。

山形　サア氣の毒だけれども、會社は、損害の上の損害、到底拂へない事になつて居るのだ。

四頁吉　其れは、まあ〳〵尤もで……。

十助　馬鹿野郎　何にを云つて居るんでえ、此方へよつてゐねえ、オイ支配人さん、何にかえ、怎うしても、拂へねえのかえ。

（ト屹度駄目を押す。）

松藏　オイ〳〵爾う言つたら、又支配人さんかて、御立腹やがな、物は言ひ樣うやがな、物の言ひ樣の下手な男や、ア、ヘエツ……詰りなんだすか、其のエ、、何んだすなア……

山形　お前の言ふ事は更に要領を得ない。

松藏　一寸、誰ぞ變つてんか。

仲吉　ハア、支配人閣下。

（ト前に出て敬禮をなして。）

自分は軍隊に、居つた者で有ります、工賃仕拂ひにならんと云ふのは、上官の命令で有りますか。

山形　爾うだ、社長からの命令だ。

仲吉　上官の命令、萬止むを得ません。

（ト失敬して元の處へ來る、梅吉は焦れ出して勢ひ能く）

梅吉　オイ支配人、俺れは、丹波市の若え者で、少し計り頬い人間ぢや、大盡。

（ト云ひかけると山形は煩さ相にして上手へ行きかけると金太はツカ〳〵と前へ出て山形の手を捕へ。）

金太　モシ、貴方、話も纏めんと、何處へ行きなさる。

山形　貴樣等を相手に、貴重な、時間が費せるか。

辰三　何にを云やがるんだい、此の蛻螭蛉め。

（ト打たんとする時上手より本田秀吉ツカ〳〵といて來り辰三の振り上げる手を捕へて。）

本田　手前何んと云ふ、眞似をするんだえ。

（ト云ふ、山形は之れに勢を得て。）

山形　貴樣我達を打つ積りか、オ、打つて見よ、天下の法律を無視して、打つて見よ。（ト強くなる）

本田　山形さん、其麼事を仰有つて、此の手を、放せば、打ち兼やしませんよ。

山形　夫れでは其の手を放すな。

本田　大丈夫ですか、貴下も大人氣ないぢや有りませんか、多寡が、其の日暮しの職工相手に、天下の法律も、御座いますまい、ヤイお前等又、何んと云ふ眞似をするのだい。

金太　夫れでも、職長、まだ今日も、夜業の勘定を、拂うて貰へんのぢやがな。

一同　オ、爾うだ〳〵。

（ト口々にワイ〳〵と云ふ。）

本田　マア〳〵いよ〳〵、山形さんが、拂はぬと、仰有るのぢやない、社長さんが、拂はぬと仰有るのぢやらう、さすりや、仕方がないぢやないか、ねえ山形さん。

山形　宜しく足下の、御同情を仰ぐ。

辰三　あの口の利き樣が、癪に觸るのだえ。

本田　手前だつて、餘り、宜い口の利き樣ぢやねえや、山形さん、濟みませんでした、今皆の者を、引取らしますから、御安心なすつて、お歸り下さいまし。

山形　ヨシ、職長の權利を持つて、速に引取らすべし、世に無教育の奴程度し難い者はない。

金太　其れが、怎うしましたのや。

山形　何にかッ。

本田　山形さん、此奴が馬鹿に力が、强いんですよ。

山形　ア、左樣かイヤ失敬。

（ト早足に上手へ引返す。）

辰三　オイ本田、手前支配人に、あんな事云つたつて、今日は話が、つかなきや歸らねえぜ。

十助　俺等は、事に依つたら、怎うと、覺悟をして居るのだ。

梅吉　夜が明けたつて、話のつく迄、此處は、歸らねえ。

松藏　俺等も、其の積りで、懷爐入れて、晩飯の用意の、辨當まで、持つて來て居るのぢや。

四郎吉　俺に、其の辨當半分お吳れや。

本田　皆も其の積りか。

一同　爾うだ〳〵。

本田　そシモ、夜通し、怎うして居て、吳れなかつたら、怎うする積りだ。

仲吉　辰の奴が、會社を潰すと云ふよつて、俺も手傳ふのぢや。

本田　皆も其の積りか。

一同　爾うだ〳〵。

本田　其れぢや、お前等は、社長に怨みが、なうて、喧嘩の相手は、此の會社の硝子窓や、社に怨みが有るのか、、喧嘩の相手は此の會社の建物かえ、昨夜から、俺が、あんなに止めても、遣りたけりや、それサア此の煉瓦から、壞して見い。

（ト屹度なつて云ふ、之れにて皆々顏見合せる、金太はポカンとしたる科にて。）

金太　矢張り役者だ、一枚上ぢやわい。

辰三　何にを、云やがるんでえ。

金太　何にを、云うて、お前本田の云ふ事と、俺の言ふ事と、同じ事ぢやがな、詰り、馬のお腹で、同腹やがな。

辰三　何にを言やがるんだえ、オイ本田、手前其の位な言

ふのなら、此の話をつけて、一週間の、夜業の賃金、一人前八十四錢と云ふ物を、乾度取つて呉れるかえ、大丈夫かえ。

本田　其程、俺れが、便り無けりや、手前等勝手にしろい、昨夜五十人の、口を揃へて、俺に任すと、云つて呉れたぢやないか。

四良吉　其れ見い、職長が怒つて居るがな、俺は始めからストライキは、不可というて、居るのぢや、ナア皆の連中。

一同　爾うぢや〳〵。

（トロ々に云ふ。）

辰三　オイ〳〵其麼に、云ふと、俺れ一人が、暴れ者になるぢやねえか。

金太　お前一人ぢやあねえな、二つ言目には、會社を潰せ〳〵と云ふのは。

辰三　何にを、云やがるんだえ、昨夜の寄合に、手前が、一番先きに、石油で一番の職場へ火を注けると吐したぢやねえか、酒を食らひやがつて。

金太　今宴で、其麼事言ひないなア、あれは、酒の上やがな。

本田　金太、手前だつて、宜くねえぞ、馬鹿力が有るだけに、直ぐ其麼事を、吐しやがるのだ。

金太　堪忍……。

十助　マア本田、我慢して、賃金貰つて呉んねえ、俺等は此の、八十四錢を宛にして、嬶の、襦袢を、買つたのだからねえ。

（ト皆を振り見て。）

オイ皆ゝ茫然りせずと、職長に、頼みねえ〳〵。

一同　職長頼むよ〳〵。

（トロを揃へて云ふと本田の傍へ寄る。本田は一同の顔をジツト打眺めて溜息をつき。）

本田　アヽ皆も、氣の毒だ――些でも、取ツ組む、説明許りだが、貧乏には叶はねえなア、ヨシ俺れも職長とか、兄イとか、言はれて居るのだから、乾度社長に逢つて、貰つて、遣るから、今晩の十時迄待つて呉れ、此處の社長たつて、積川清と云へば、隨分世間で、羽振りの利いた方なんだから、之れから俺れが、御目に掛つて、譯を話しや、萬更判らねえ人でもなからう、だから、一ト先づ温順しく皆内へ歸つて呉れい、手前等が、此處に居て呉れると、何んだか、尻押をされて來た樣で、俺れも、話が仕悪いからねえ、俺の、顔を立てゝ、一ト先づ、歸つて居て呉れ。

辰三　ヨシ夫れぢや、萬事兄貴に頼んで、一ト先づ皆んな、引取らうよ、然し、お前が、話に行つて呉れて、社長の

口から、怎うしても、拂はねえと言へば、お前は怎うする積りだ。

木田　弱うだなア、若しも話がつかなけりや。

（ト顔紅をして深く考へ込む金太は突然に。）

金太　火を點けようか。

木田　馬鹿めッ。

（ト叱り飛ばして睨み付けるが木の頭、金太は不首尾の體にて、皆々木田の傍へ集りてヒソ／＼と密談をする此の模樣にて宜しく靜に道具一轉する。）

二、木田秀吉宅の場

本舞臺、二重人形飾り、上下落間、上手に裏長屋の便所へ通る庭先を見せ、古びたる植木棚に緣日の安物の植木が二三素燒の鉢に植ゑて並べ有る。正面上手に新聞張交ぜの障子、其の上に古き神棚、其の上手に間中の押入、其上に古き箱を佛壇にして、中に古き大師の像に位牌、花立、蠟燭立、等有りて、明火を上げ有る。其の前に古き竹の臺に五分心洋燈に破れたる紙の笠を冠せて有る、正面は間中の落間になり表口の心、其の向に古新聞にて破れたる處を、切り張りしたる腰高の障子續いて下手に古き櫺子窓の裏を見せる、之れに小障子をはめ有る下手に臺所口を見せ、置竈、蠅不入等を置き蠅入らずの上に櫃、膳、布巾、茶碗、箸箱、小鉢に漬物を入れ伏せて有る其の横に古き米櫃、涼爐、團扇、土瓶、茶呑茶碗、炭箱等を置き涼爐には大土鍋を掛けて本物の飯を焚き居る事、本舞臺には一面坊主疊、角火鉢、破れたる座蒲團二三枚上手に古き衝立に木田秀吉の着替の綿入、手拭、古きメリヤスのシャツ等を掛け有る。總て秀吉宅裏長屋の體にて誂への囃子にて道具納る。

ト父僞吉は涼爐の土鍋より飯櫃に飯を移し居る、宜き處へ正面入口より娘義太夫おみね肩付き義太夫娘の持にて淨瑠璃三味線を持ち編笠を冠り入口の外より顏を出し。

おみね　今ばんは。

僞吉　オ、おみねさん、今お歸りかえ。

おみね　アイ今日は朝から、出たのぢや。

僞吉　これから又晩は、色町へ流ぢやなア。

おみね　イヽエ、今晩は、長屋の衆の註文だ、内で義太夫の會ぢや、二錢宛の、持ち合ひぢや、聞きにおいでなされ。

僞吉　ア、折角子供等に、甘い漬物を、食はさうと思うて買つて置いたのに、災難ぢやがなアハヽヽヽ。

おみね　違ひなしぢや、おぢさん、お飯焚かいなア。

僞吉　今、ヤット出來上つたのぢや。

おみれ　おたかはんは、まだかいなア。
爲吉　お高も兄も、まだぢや、此の頃は、チョイ〳〵會社に、夜業が、有るので今晩も亦爾うかと、思うて居るのぢや。
おみれ　兄さんも、お高さんも宜う働いてやな。
爲吉　サアお蔭で、兄妹仲宜う働いて、私しを大事に掛けて呉れるので、幸福者ぢやと思うて居るのぢや。
おみれ　をぢさん、飯焦げて居ると見えて、焦げ臭いで。
爲吉　アッしもた、涼爐から、下ろさずに、移して居るのぢやがなアハヽヽヽヽ。
（ト此の時下手にて。）
金太　其麼馬鹿な事が、有るかえ〳〵。
木田　まあ〳〵、靜かにせい〳〵。
（ト此聲にておみれは一寸下手を見て。）
おみれ　ア、兄さんが、歸つて來たぜ。
爲吉　何んぢや大きな聲を出して居るなア。
（ト此の內おみれは入口を見て。）
おみれ　何時も來る金太さんと一緒ぢやで。
爲吉　金太が、酒を吞んで居るのかいなア。
（ト宜しく捨臺詞の內、下手より木田先きに金太以前の姿にて出て來り入口へ這入る。）
木田　お親父さん、今歸つた。

金太　お爺さん、今晩は。
（ト大きな聲で言ふ。）
爲吉　金さん、偉い勢ひぢやなア。
金太　一寸怒つてゐるのぢや。
おみれ　又、酒吞んで居るなア。
金太　誰が酒吞んで居るかえ、素面ぢやえ。
おみれ　ハアン、不景氣やで、酒吞まんと、醉うて居るんやなア。
金太　何にを、吐しやがるんだい。
（ト手を振り上げる。）
おみれ　オヽ怖は〳〵。
（ト言ひ〳〵三味線を抱へて表へ出て行く木田は此の內二重へ上り。）
木田　オイ金太、靜にしてくれ、隣は、壁一重だよ。
金太　だつて、あんまり判らんやないか。
爲吉　金さん、何にを、怒つて居るのぢやいな。
金太　お爺さん聞いて。
木田　ヤイ金太、何にを言やがるんだい、年寄に、其麼事を聞かして、心配さして呉れるない、手前の樣な目先きの見えねえ奴てものは、有るものぢやねえ、宜いから、俺に、任して置け、社長がお留守なんだから、仕方がねえぢやねえか。

金太　それが、留守使うて、けつかるのぢや。
本田　サア假令、爾うでも、俺が、モ一度、飯を喰つてから、行くのぢやねえか、手前今晩の十時迄で、俺に任したのぢやねえか、まだ今八時前ぢやねえか、モウ二時間位の我慢が、出來ねえのか、我慢が出來なきや、怎うでも、勝手にしろ。
（トポンと云ひ捨てる金太は面を膨らして無言の儘手荒く入口を開けて又ピッシャリと荒く閉めてツット這入る、爲吉は呆れて後を見送り居る。）
爲吉　偉い勢ぢやなア、秀よ、怎うしたのぢやい。
本田　ナニ……心配な事でもねえのだ、相變らず、酒呑みやがつて會社へ、金貸せ／＼と吐すのだ、本統に、あんな奴つて有るものぢやねえ。
爲吉　ア、爾うか、金太さんも、好い人ぢやが、酒が病ちやなア、私しや又何事かと思うて、喫驚した。
（ト此の内本田秀吉は事業服を脱ぎかける爲吉は衝立の着物を後より着せかける。）
本田　父さん宜いよ、打遣つて置いて下さい。
（ト捨白詞にて着物を着替へる爲吉は膳、飯櫃等を前に持ち來りて。）
爲吉　サア／＼腹が空つたであらう、今日は、お前の好きな、鮭の鹽燒が有るから、お父さんが、久し振りで、飯炊いてなア、焦かしてなア……。
本田　父さんが、炊いたのかい。
爲吉　爾うぢや。
本田　お高は怎うしたんだい。
爲吉　まだ會社から、歸らんぞ。
本田　冗談云つちやいけねえ、彼奴は今日用があると云つて、十二時限りで、會社を休んで歸つたと、職場で聞いたよ、夫れにまだ歸らねえ、畜生、何處へ行つて居やがるのだ、又活動寫眞へでも、潜り込んで、ゐやがるのだなア、畜生、仕方の無い女だ。
爲吉　イヤ／＼秀よ、お高は十二時過ぎに、歸つて來てなア。
本田　夫れから、怎うしたんだ。
爲吉　エ、あの……風呂へ行くというてなア。
本田　十二時から、お湯へ行つて、まだ歸らねえのですかえ。
爲吉　夫れから歸つて、金比羅さんへ參ると、言うてなア。
本田　讃岐のですかえ。
爲吉　イヤ、横町の。
本田　誰れとですえ。
爲吉　エ、……あの隣のかみさんと。
本田　隣りのかみさんと、隣の、かみさんは、昨日國へ歸

つたよ。

爲吉　其の又お國の……。

木田　何にを云つてるんだよ父さん何にも俺に、氣兼して、其麼噂を言つて異れたくとも宜いぢやないか、一人より、無い女の子だから、父さんの、可愛いのも無理はねえが、餘んまり甘いと、爲にならねえ、女は十六と云や、一人前だモウ劍呑な年頃だ、半日も行方を知らさねえで、親に倶を欲すてえ、不孝者がありますかえ、歸つて來やがつたら、只置かねえ。

爲吉　爾う怒つて遣りないなア、あれかて十六と云へば、遊で盛りの最中ぢや、之れが、毎度と云ふ譯ぢやなし、今日始めてやないか、お父さんが、歸つたら、叱るよつてになア、お前がガン〳〵吐つてやりなや、氣の弱い處へ、蟲の氣が有るよつてになア、蟲でも出て見いな、又心配やがなア、堪忍してやり、エ、お前も飯喰べたら、十錢上げるよつて、活動へ行つておいで。

木田　お父さん、俺れに三十二だよ。

爲吉　三十二でも、活動見られるがな。

木田　へイ〳〵有難ゥ御座います。

爲吉　イヽエ怎ゥ致しまして。

（ト此の時正面の入口よりお高は工女の姿、桃割の髮を結ひ、亂れ毛を出して手には料理屋の折を持ち懐中に十六形の鎖付き金時計サック入を入れて帶つと不首尾に入口を開けて。）

お高　只今……。

（ト叮嚀に兩手をつく、爲吉はハツト思入する、木田はジロリとお高を眺めた儘、飯を喰つて居る、爲吉はお高を座敷へ上げて、手眞似で兄が怒つて居る、と知らす、お高はモジ〳〵する、爲吉は詮れと仕方をするお高は折を爲吉に渡して下手へ坐し叮嚀に手をついて。）

お高　兄さん、遲くなつて、濟みません。

（ト木田にはジロリと睨んだ儘無言で又飯を喰ふ。）

爲吉　秀よ、謝つて居るのぢや、何んとか言うてやりなア。

木田　お早う御座います。

（ト無愛想に云ふ、お高は稍々涙組んで居る、爲吉はお高を下手へ寄せて火鉢を傍へ遣り帶はつてやる事有つて。）

爲吉　モウ捨てゝ置き〳〵、兄さんに、今日一寸御機嫌が惡いのぢや、サア〳〵寒むかつたであらう、サア〳〵暖れ〳〵、お前今迄何處へ行つて居たのぢやエ、。

お高　………。

（ト無言にて俯向き居る。）

爲吉　お前泣いて居るのか、夫れ見よ秀よ、泣いて居るぢやないかい、始めから、私しが云うて居るのぢや、氣の

弱い子ぢやと云うて居るのぢや、泣かいでも宜いわえ〳〵、兄さんはな、お父さんが、叱つてやる〳〵、爾うして此折は何んぢや……エ、怎うしたのぢや。

お高　頂いたの……。

爲吉　オ、爾うか誰れにぢや、エ、お友達にかえオ、そうか〳〵其れで兄さんに持つて歸つたのか。

お高　………。（首肯く）

爲吉　それ見いよ秀よ、お前は、ガン〳〵云うても、矢張り遊びに行ても、お前に喰はしたいと、思うて自分が喰はずに、チヤント、持つて歸つて居るぢやないかえ、此處が兄妹ぢや。

（ト云ひつゝ折を開けて見て。）

イヨーこれは〳〵、御馳走ぢや、玉子の厚燒に蒲鉾ぢや恰度何喰うて居る時ぢや、サア〳〵機嫌直して、喰うてやつておくれ〳〵。

（ト本田の傍へ下手から立ちながら出づ。）

本田　大きに御馳走樣だ。

（ト皮肉に云ひながら玉子を挾んでグツト折の儘引寄せ、ズツト、お高の傍へ行き。）

オイお高。

お高　………。

本田　高つたら、高ツ。

（ト切張り言ふト隣りにて柳のキヤリの淨瑠璃の三味線を微に聞かす。）

手前、此の折は、誰れに貰らつて來たのだ。

爲吉　秀よ、誰れでも、宜いぢやないか、今日はお前餘ッ程怎うかして居るなア。

本田　イヤお父さん、不可ねえ、此の馳走と、折の卵を見なせえ、住の江の風月の御馳走だ、此方人の樣な、貧乏人が、夢にも喰へる、御馳走ぢやねえ、慥に變んだ、父さん、怎うか、暫らく默つて居て下さいよ。サアお高、誰れに貰っつた、云つてしまへ、言はなけりや、敲るぞ。

（ト爲吉と顏見合せて氣味合。）

サア、兄さんは叱りやしないから、サア誰れに貰つたのだ、サア言ひねえ言ひねえ。

（ト色々と尋ねられてお高は口の内にて。）

お高　社長樣に……。

（ト微に答へる。）

本田　ナニ、社長さんだ……會社のかえ。

（トお高首肯く。）

會社の社長さんに、何處で貰つた。

お高　住の江公園の風月樓で……。

本田　お前風月なんて處へ、誰れと行つたのだ。

（ト強く尋ねる。爲吉はハラ〳〵しながら。）

爲吉　モツト、優しう聞いてやりいなア。
本田　父さん默つて、居なさい。
（ト又顔見合して氣味合。）
サア、有りの儘を、言つて呉れい。
お高　今日ねえ、社長さんが、仕事場へ見えてねえ……一寸用が有ると仰在るから……仕事を止してお供をして行たら……裏門に自動車が有つたの……。
爲吉　あのボー／＼と云うて走る車ぢやなア。
本田　默つて居なせえ、其れから怎うした。
お高　これへ乘れと仰有るから、乘つたの……。
本田　手前、怎んな考へで、其れへ乘つたのだ。
お高　何にも、考へ無いで乘つたの。
本田　フム……其れから怎うした。
お高　すると、住の江の、風月と云ふ內へ行つたの……其處で御馳走になつたの。
本田　お前と社長と二人切りかえ。
お高　エ、社長さんがねえ、お前が仕事を、能くして呉れるから、御褒美に御馳走をするつてねえ。
爲吉　ア、成る程。
本田　成程つて判つて居るのですかえ。
爲吉　判つて居いでかえ、此の子が、勉强するものぢやで、社長さんは、御目が高いわえ、其れで、御褒美に連れて行きなさつたのぢや。
本田　父さん、お前さんは、何處まで、人が良いのだ、多寡が、女工の褒美に、誰れが風月あたりへ連れて行くものか、能く胸に手をおいて、考へて見て下せえ。
（ト爲吉は胸に手をあてゝ、ヂツト考へる。）
本田　サアお高、云つて仕舞へ、其の外に何か御座つたゞろ。サア御馳走の外に何か、貰つたらう。何に、貰はねえ、箆棒め貰はねえ譯はねえ。
（トお高の懷中を見て。）
手前の、懷中の、脹らんで居るのはなんだ。
（ト云はれてお高は隱す。）
何にを、隱すのだえ。之れは何んだ。
（ト無理にお高の懷中へ手を入れて十六形サック入の時計を取り出して驚きながら。）
父さん、之れを見させえ。
爲吉　其れは何んぢや。
本田　時計だよ。
（トサックを開けて爲吉に見せる爲吉は時計丈けを取り上げて。）
爲吉　イヨー見事なものぢやなア。
（ト見るサックの中に時計屋の保險證の有るを本田は心附き夫れを取り出して見る。）

本田　十六形丸金女持懐中時計代價五十二圓也。
（ト讀む僞吉も不審らしく。）

僞吉　秀よ、怎麼物を、下さる樣では、こりや、只事ぢやないで。

本田　父さん、分つたらう。

僞吉　判つた、こりや社長さんが、お高に惚れて御座るのぢや、エヽ兄よ、結構ぢやないかえ。

本田　父さん結構かえ。

僞吉　結構ぢやないかえ、其の日暮しの、我々の樣なものの娘が、會社の社長さんに、惚れて頂くとは、結構ぢやないかえ。

本田　それぢや、此奴を十六まで、育てたのは、金持の玩弄にする積りで、育てたのかえ。

僞吉　エッ。

本田　俺れや情けねえや、貧乏すると、其麼氣になるかえ、父さん昔の内の身分でも、矢張り其麼に云つて喜ぶかえ、我々兄妹は、昔しはお乳母育ちだと、能く寢物語に言つたぢやないかえ、其の時分に、五十圓の時計で娘を玩弄にされても結構たと喜ぶかえ、其麼に嬉しけりや、お高の奴を、女郞に賣つて仕舞ひねえ。サアお高……。
（トお高に突まつて。）
此の時計を、貰つて後に怎うしたのだ、オイ手前お母アが、死ぬ時に云つた事を忘れたのかえ、覺えて居るか、怎麼事が、有つても、お高丈けは、詰らねえ亭主でも、亭主を持たして呉れいと云つたぢやねえか、風呂敷包でも、嫁入をさして呉れよと、俺りや、お母アに賴まれて居るのだえ、手前は忘れたのかえ。父さんは、お年の加減で忘れたか、知らねえが、手前はまだ、物忘れをする年ぢや有るまい、ナゼ此の時計を、社長の前へ叩き付けて、逃げて歸へつて來ねえのだ、怎麼ものを、ブラ／＼胸へ下げてえのか、コラお高見ろ……兄さんはねえ、三年越し、破れた布子を、着て居るだ、貴樣にや、今年の正月も、操物でも大島の書生羽織を着せたぢやないか、十二時から今頃迄、手前風月で、何にをして居たのだ。
（ト感極まつてポントお高を蹴るを木の頭、お高はワツト泣く、僞吉は途方に暮れて俯向く、本田は涙と共に飯を喰ふ。隣家にて淨瑠璃柳の段切りを聞かす此の模樣各自氣味合にて道具一轉する。）

三、積川滿宅事務室の場

本舞臺、正面一間木硝子戸の入口、續いて稍々斜に上手に硝子窓、これにオリーブ色のカーテンを掛ける、入口上手に通りの大硝子障子を四枚、向う往來を見せる事、其の前に大なる簿記臺、用紙、インキ壺、ペン

筆等を置き、卓上電話器を置く事、下手正面に世界地圖の大軸を掛け其の下手に大なる金庫を置き、上に洋式の大なる帳簿を五六册積み有る、平舞臺は一面絨氈を敷き中央に高價なるテーブル、灰皿、呼鈴、貰箱等を置き、皮張の安樂椅子並に客椅子五脚を置き總て讀州家事務室の模様、誂への囃子にて道具納る。

ト同時に金太は手に酒の入りたる四合瓶を提げて酒に醉つたる心にて正面入口を開けていで來り。

金太　御免なされや〱。

（ト言ひながらヒヨロ〱としながら、下手の椅子に腰をかけて、呼鈴を叩くと同時に奥より女中お光は。）

お光　ハアイ――。

（ト答へてハイカラの下女の拵へにて白のエプロンをかけていで來り。）

お呼びになりましたのは。

金太　私いだすね。

お光　オヤ厭やだよ此人は、お前何處から來たの。

金太　今奏から來ましたのや。

お光　ナゼ聲を掛けないんだよ、お客さんかと思つたよ。

金太　お客様ぢやがな。

お光　お前さん、何處の人だよ。

金太　俺は、此處の會社の職工で、山田金太郎と云ふ者で、ヘイ旦那に御目に掛りたいので一寸呼んで貰らへまへんか、御禮に一杯恋つだす。

（ト酒の盞を前へ突き出す。）

お光　厭やだよ此人は、職工なんて、其麼處へ來るものぢやないよ、旦那の御目に止まつたら、叱かられるから、早く御歸りよ、お上に知れては大變よ。

金太　お互に、知れぬが花よ世間の人に、知れちや、互の身の詰りヨイ〱。

（ト歌を唄ふ。）

お光　チヨイト、お前さん冗談ぢやないよ。

（ト此の聲に山形以前の拵にて上手より出で來り）

山形　誰れだ〱、其麼處で大聲を出すのは。

金太　今晩は……。

山形　オヤ金太ぢやないか、馬鹿ッ、何んと云ふ醜態ぢや。何に用有つて事務室へ來るのか、何んと云ふ體裁をたすのだ。

金太　私は、少し御用が有つて、參つたもので、決して失禮をしに來たのやおまへん、失禮をしたら、此奴がさしますので、

（ト四合壜を一寸見せて。）

不足が有れば、此の四合壜に御有い、女中さん、一寸社長さんを呼んでおくんなはれ。

山形　イヤ〳〵呼ばんでも宜い〳〵。
金太　呼んでおくなはれ〳〵。
山形　煩い奴ぢや。ヨシ〳〵夫れでは呼んで來い……なア……。
（ト山形は女中に奥へ去れと目で知らすお光は呑み込み。）
お光　ハイ〳〵畏りました……。
金太　酔うてもチヤンと判つてますせ、目で物を云うて、可笑しい事をしなはんな、呼んで貰らへねば、奥へ行きますぜ。
お光　ハイ〳〵呼んで參ります〳〵。
（ト思入有つて上手へはいる。）
山形　オイ金太、貴様其麼裝りで、其麼處へ來ては、爲になるまいぞ、俺が内々にして遣るから、早く歸れ〳〵。
金太　お前さんでは、判りまへん、社長はんを、呼んどくなはれ〳〵。
（ト大聲にて云ひ出す山形は困じて。）
山形　ヨシ〳〵ぢや用件を俺が聞かう。
金太　お前さんでは判らん、社長さんに逢ひますのや。
（ト又立上つて行きかける山形は金太を捕へて突出さんとする兩人捨白詞にて高聲を出し爭ひ居る處へ社長積川清立派なる拵にて出來りて。）

積川　社長は私ぢやが、何か用か。
（ト云ふ之れにて金太はハツト驚く科有つて前を合して叮嚀に御辭儀をする。）
金太　ヘイ今晩は。
積川　貴様は見た樣な男だなア。
金太　ヘイ第二の工場に居りますもので、山田金太郎當年三十五歳、産れは……。
積川　オイ〳〵其麼事は、聞いて居らん、何用が有つて來たのだ。
金太　ヘイ昨日から、此の支配人の正やんに、賴のんでます、一週間の夜業の賃錢の、八十四錢なア、旦那はん……一杯愈うだす。
（ト舌の廻らぬ口調にて墨を出す。）
積川　オイ〳〵、大變な上機嫌ぢやな、お前酒を呑む位の錢が有れば、何にも拂へ無い賃金を、無理から脅迫がましい事を云うて、此處まで來ないでも、宜いぢやないか。
金太　酒呑む錢が、おますかいなア。
山形　貴樣呑んで居るのぢやないか。
金太　見とくなはれ、此の姿だす、半纏を曲げて、燒糞で呑んでますのや。
積川　ナゼ爾う燒けになるのぢや。
金太　何んで燒けになる、申し旦那、燒に貴下がしなはる

のぢやがな、此の間内の夜業も、一日十二錢宛貰へると思うて、遣つて居ましたのや、其れに呉れんとは何事や、僅な錢貰うて、働いて居ます、蟲けらみたいなものだす、其の蟲けらの、上前を、はねて五十人の者が……。

（ト、シク／＼泣き出す。）

積川　此奴泣上戸だ、オイ山形警官を呼んで、引張り出せ。

金太　コラッ、俺が、何にを惡い事をしたのぢや、サア突出すなら、突出せ、拋いて行てやるぞ／＼。

（ト仰向きに寢ろ、山形は金太郎の手を取つて無理に引き起して、突出さんと爭ふ、宜しく捨白詞にてヤイヤイと云ふ。此の時本田秀吉は正面の入口より出て來る、上手奥よりは此の聲を聞き付け夫人菊子出で來る。本田は金太郎の傍へツカ／＼と來りて。）

本田　ヤイ金太、手前又……何んと云ふ有樣だ。

金太　オ、本田、……俺は……這麼口惜しい事は無い。

（ト泣き出す。）

積川　オ、本田か、此奴は、實に困る奴だ、更に要領を得ないのだ。

金太　要領は、判つて居るわい、錢呉れたら宜いのぢやえ。

本田　何にを言ふのだえ、金太手前は、俺の顏を潰すのか、十時迄待てと云つたのを忘れたのか。

金太　モウ十時過ぎてるわい。

本田　馬鹿な事を言ふな、まだ九時半だぞ。

金太　汽車でも、少々は、延着するわい。

本田　延着やない、早く來すぎて居るのたい。

金太　そんなら、出直すわい、オイ／＼兄貴頼むぜ、十時打つたら、ザットかけて、ぼうと、燃やうして、皆んなが寄つてバリ／＼やで。

本田　馬鹿た事を言ふな。

積川　何の事だ今のは。

金太　ヘエ、ン、ザットかけて、バアット、燃えてぢやい。

本田　馬鹿な事云ふな、サア早く歸れ／＼。

（ト宜しく宥める、金太は三尺帶の間に挾みし錢を六錢落したるを探す科有る、本田は捨白詞にて共に探してやる、トヾ錢を拾ひて渡す。）

金太　兄貴頼むぜ……。

本田　宜いよ／＼。

金太　本まに……オイ俺の下駄怎うしたい。

山形　貴樣跣で來たのぢやないか。

金太　何にを、誰れが……。

（ト突き掛からんとするを、本田は止めて正面の入口の外へ連れて行きて金太を歸らす、本田は積川の前に來りて叮嚀に頭を下げて。）

本田　旦那、誠に相濟みません、御挨拶も後になりまして、今晩は。

積川　マア其れへ掛け。實に今の奴は、怪しからん奴だなア。

菊子　私も何事だらうと思つて參りましたよ。

本田　オヤ奧樣でゐらつしやいますか、先日は有難う御座います。

菊子　何に……博愛主義勞働者仲間として、一同へ、おかちんを、上げたのだから、御禮に恐縮ねえ……。

（ト茶菓をくはらす。）

積川　本田、聞けは過日來の夜業の賃金の問題で、何んだか、ゴタ〳〵して居るさうだねえ。

本田　ヘイ……二三日前から、ゴタ〳〵して、困つて居りますので。

積川　お前も今晩は、其の話で來たのか。

本田　イエ、兩うぢや御座いません、元々あの仕事は、旦那の方も、御損たさうで、其の上、職工に賃金を拂ふなんてえ事は、出來やしません、其の理窟が、判らないのですからねえ。

積川　中々……（菊子の顏を見て）之れには、物の眞理を、解して居る、要するに頭が宜いんだねえ。

菊子　全くですね、身は勞働者にして、明晰なる頭腦を備ふ、以て他山の石とすべしですねえ、チョイト五色の酒如何。

本田　イ、エ五色の息を吹いて居る身分で、五色の酒處ぢや御座いません。

山形　其れぢや、君、何か外の問題で來たのか。

本田　ハイ一寸お願ひが御座いまして。

山形　何んの用だ。

本田　ヘイ少し、內々ですから、一寸暫らく。

山形　ア、兩うか、御主人一寸暫らく此の場を。

本田　イ、エ、貴下が、暫らく一寸此の場を。

山形　ア、我等の方か。

本田　ヘエー……左樣で。

山形　飛んだ間違ひだ。

本田　頭が宜いんですねえ。

山形　之れはイヤハヤ、恐縮、御主人御免。

（ト一禮なして上手へはいる。）

積川　人を遠ざけて、何か秘密の用件か。

本田　一寸變な物が……妙な處から、手に入りましたので、買つて頂きたいと存じまして。

積川　お前が、我等に賣物とは、可笑しいねえ。

本田　ヘイ旦那樣より、奧樣向きかと存じますので、……ヘイこれで御座います。

（ト以前の時計を懐中より出して卓上に置く、積川は之れを見て驚く、本田は積川をキツト睨み付けて。）
旦那馬鹿に、お寒い晩ですねえ。
積川　イヤに、冷えるねえ。
（ト氣味合、菊子は何の氣も付かずに其の時計を取り上げて。）
菊子　オヤ、ウオツチなの、一寸貴方、御覽なさいねえ、流行の形よ、アラ十六形だわ、オヤ九金だよ、ねえ貴方、私が貴方に、此の間買つて下さいと、御願ひしたのは之れですのよ、一寸買つて遣つて下さいねえ。
積川　……ウム……買つても宜いだらう。
（ト苦しき思入れ。）
菊子　併し一寸、お前此麼物を、怎うして、手に入れたの。
本田　其れが奥さん可笑しいのですよ、實は私の妹が貰つて來ましたので、旦那、貴下も序にお聞きなすつて下さい。
（ト力を入れて言うて。）
世間にや隨分、助平な馬鹿野郎が有るぢや有りませんか、然も立派な身分の旦那でねえ、藝者狂ひも妾狂ひも出來る身をもつて、私の妹に、白羽の矢を立てゝねえ、其れも、お前さん、惚れたの好いたのといふ、色とか戀とか云ふのぢや有りませんので……只だ十六の娘盛り、假令面は不味くとも、其生娘と云ふ丈けに、一寸自由にして遣らうと、其の金時計を、餌にして、蕾の花を踏躙らうと、何んの事はねえ、狒々でさあねえ。
菊子　要するに、情慾の奴隷だねえ、相當の階級の紳士として、少女の貞操を、蹂躪しようとは、一種の惡魔だね、爾う云ふ奴は、社會制裁上、大いに、膺懲してやる價値が有りますわねえ貴方……。
積川　全く紳士の風上にも置けないねえ。
本田　其れが平氣で、大きな面をして、馬車で大道を歩いて居るのですからねえ。
菊子　オヤ可也、身分の有る人ねえ、何處の何んと言ふ人なの。
本田　ヘエ……名前も面も、知つて居るのですが、其れ迄言つちや、氣の毒ですから、其れは申し上げますまい。
（ト之れにて、冷や〳〵思ひ居りし積川は、ホツト安心の科し。）
菊子　全く美徳だねえ、人の名譽を重じて、名を發表しないのは、感歎、讃美の極ですねえ貴方……。
積川　之れは、頭が宜いからねえ。
本田　頭は宜いか、惡いか知りませんが、人間並に血が御座いますから、當り前なら、此の時計を持つて、其の助平野郎の、面へ投げ附けて、貧乏しても、俺れ處の娘は

まだ、浮賣は、さゝねえと、面を逆さに引ん剝いて遣りますかね。
菊子　痛快だねえ。
本田　其處は、貧乏人の悲さに、其麼意氣地は御座いませんや、其れより寧ろ樣に御願ひ申して、此の時計を買つて頂いて、昨日から八釜敷く、血を見ろ樣に騷いで居る、職場の連中に、其の金を分けて遣りまさあ、怎うせ、御損の上、賃金は旦那はお出しになる事は出來ますまいから、此の時計さへ、無いものにすりや三方四方、甘く納りますから、ねえ旦那、成丈け、宜い値に買つて下さいませ。
積川　ア、有難い……買つて置いて上げ。
（ト菊子に云ふ。）
菊子　恰度私も、欲しいのだからねえ、お前幾許に賣るの……。
本田　ヘエ其麼もの、相場は、私より旦那の方が、能く御存じですからねえ。
菊子　ねえ、貴方、成丈け高く買つて上げませうよねえ。
積川　五六十圓に買つて上げなよ。
菊子　爾うだね、五十圓なら宜いだらう。
本田　ヘエ……。八十四錢が五十人、其れ丈け有れば結構です。

菊子　ザウ。暫らくお待ちよ。
（ト腰の鍵を持つて正面の金庫より金を取り出しに行く。）
積川　然し其の金を、全部職工に、分配して仕舞つては、お前の取る金が、無いぢやないか。
本田　何に……宜う御座います。怎うせ穢れた金ですもの、妹一人が玩弄にされて、五十人からの人間が甘い酒の一杯も、笑つて呑んで呉れますりや、好しや操は、破れても、貧乏人の小娘には、過ぎた手柄で御座います……。
積川　君は何んと云ふ、美しい人間ぢや、ア、其の惡魔が、聞いたれば、殆ど熱湯を呑む思ひがするだらう、將來悔悟して、其の厚意に報ゆるだらう、謹んで爰に感謝の意を表す。
（ト本田の手を取りて無言の儘謝罪をする、此の途端菊子は表を向く。）
菊子　オヤ丸で、貴方が、謝つて居るやうねえ。
積川　フム……獨り本田に同情してねえ……。
菊子　それ五十圓……。
（ト本田に渡すと同時に裏にて無數の人聲、足音騷しく聞ゆ、積川、本田、菊子は何れも其の方角を見てハツト驚く、本田は時計を見て。）
本田　オヤ十時だ……。

（ト立上ると同時に正面の扉を蹴り開けて、金太に好みの兇器を持つて入り來る、本田は之れを見て驚く、矢庭に金太の傍へ走り。）

それ金太……金だ……。

（ト紙幣を握らして勢ひよく正面の入口より外へ飛出す、金太は渡されし金を見て拍子拔けのしたる科し、菊子は人聲に驚いて上手へ逃げてはいる、積川は立上つて、沈默の體、金太は紙幣を數へながらウロ〳〵して居る、裏手には大勢の人聲にてヤレ〳〵と叫ぶ、本田は待て〳〵話が附いた〳〵金は金太に渡したと叫ぶ此の聲を聞き金太は倘ほ狼狽する科、積川は腕組をした儘無限の思入れ宜き處へ本田は片袖を割かれ着物は所所に破れを生じ、顏腕等に微り傷を負ひて、稍々裏手の聲の靜りたる時、ツカ〳〵といで來りて卓の下手にホツト息をつき。

本田　モウ大丈夫です……。

（ト金太を見て。）

何にを、して居るのだい。

（ト云ふ此の聲に金太は喫驚してペツタリと坐す、暫らく氣の拔けたる如く茫然として居り、手に有る紙幣を見て一枚宛數へ始める、積川と本田は互に顏見合して氣味合、菊子は時計を片手に窃つと上手より顏を出す、同時に以前の職工全部下手硝子窓より顏を出す、本田を見て各自口々に謳を云ふ、此の模樣宜しく各自氣味合木なしにて靜に。）

——滿　來——

喜劇 五兵衞と六兵衞（一場）

泉州葛の葉在の二軒家の場

上手六兵衞の住居、下手五兵衞の住居にて、家貧しけれど村て評判の仲よしにて、互に六十近い身の寄る邊なき事とて、互の女房お樂お辰の二人も夫と同じく仲よし、車力六兵衞米代に困るを五兵衞助ける、或る日六兵衞の親類和歌山の資産家に世繼なき爲め六兵衞に流れ込みしと、辯護士と村長來りて語る、六兵衞夢心地にて、明日の大名暮しを空想する、五兵衞のひがみ根性と衝突の末、終に金故不仲となる。僅少の事にも爭ふ處へ、辯護士來りて間違ひなりと報らす、六兵衞夫婦失心の側、五兵衞喜ぶ、六兵衞の妻お樂癪起す、これにて又も以前の通り眞情あふれて五兵衞が介抱する、六兵衞の喜び、互に貧乏て仲よくする事契ふ。幕

場所
泉州葛の葉在の二軒屋

人物
熊野六兵衞　車力
おらく　同女房
岸本五兵衞　職工
おたつ　同女房
山崎屋重助　米屋
おこま　村の娘
圓福寺一念　番僧
岩村豐松　村長
田村伊助　小使
土井喜之助　公證人
中川順一　辯護士

本舞臺上手五寸高の屋臺、正面上手に破れたる襖の押入、中央に破れ障子の奥の間へ通じる出入口、其下手同じく破れたる鼠壁、古き膳棚、涼爐、土瓶、手拭かけ、角火鉢、二枚折、座蒲團等亂雜に置いて有る、上手に破れたる油障子、往來へ出る門口、稍々下手に枯松垣を斜に隣家へ續く、其の垣に續いて下手に片開きの破れたる門口、其の下手に二重の屋臺、古き廻り緣、家根のひさしに千切大根を繩にて長くつるしある、二重

下手に古びたる箪笥を置き、其の上に古き押入と佛壇、針さし、古新聞の張まぜの襖にて次の間へ通じる出入口、下手の壁の上に神棚を設へ、其の上に竹の衣紋竿に古めの子が、かけてある、古き長火鉢、座蒲團、土瓶、盆、茶道具等を置く、本舞臺中央は一面の藪の心にて、唐物の太き竹を數本宜しく背景に大藪を配置よく描く、總て或る田舍の藪際の家の體、誂への唄にて幕開く。

下手佛壇の前に圓福寺一念番僧の拵へにてお經を上げて居る、其下手に老けたるお辰は小錢を紙に包み盆に載せて、布施を僧へ出す、上手の庭に老けたる六兵衛の女房お樂は、古き張板を前にのりつけものをなして居る。

一念　南無阿彌陀佛〳〵。

（宜き念佛の切にて、お駒は田舍娘の拵へにて上手の表戸を明け入り來る、皿に鯛の付け燒をふきんをかけて持つて居る。）

お駒　をばはん今日は。

お樂　オヽ、お駒はんかいな、マアおあがり、見なさる通り一寸手が離されんのでナ。

お駒　イヤ〳〵構ふとくれな、おつさんは仕事かいな。

お樂　まだ歸らんのぢや、留守の間に一寸のりつけものを片附けて置かうと思うてな。

お駒　よう、精が出るな。コンナ仕様もないものやけどな、内のお親父さんが釣に行て、持つて歸つて來た鯛ぢや、今晩いた許りぢやでな、六兵衛さんが歸つたら、晩酒の肴にして貰へと云うてな持つて來たのぢや。

お樂　それは〳〵氣の毒な折角釣つて來た物を、私しの方へ貰うて濟まんな。

お駒　なんの濟まん事があるかいな、宿替への時に、すつかり荷物を六兵衛さんが運んで呉れて大助かりぢやで、お親父さんもお母アも喜んでな、其の御禮やがな。

お樂　何んのいな、内のお爺は車力が商賣ぢやがな、何んの禮がいるかいな。

お駒　サア〳〵其の商賣ぢやのに、錢を取つて呉れんのぢや、餘んまり氣がヅツナイと云うてな、ほんの御禮の印に持つて來たのぢやがな。

お樂　夫れは〳〵義理堅い、お前の店には、酒の借金も有るので、夫れで賃も貰はんのぢやわいナ。

お駒　まあ夫れは夫れ、之れはこれぢや。あの膳棚へ一寸入れておくぜ。

（トお駒は上へあがりかける。）

（お樂思入有つて。）

お樂　夫れは〳〵濟まんな。これお駒さん待つてお呉れ、折角ぢやが、今日精進ぢや、肴が食へられんのぢや、倖

い殘念ぢやが、其譯を云うてな、お父さんが氣を惡う
せんやうに宜しく云うて、持つて歸とくれ。
お駒　まあ／＼精進の日とは、間の惡い時に持つて來たな、
誰れぞの命日かいな。
お樂　折り惡しうお父さんの命日でなア。
お駒　へーン……お父さんの……お父さんのかいな。
お樂　イエ隣りの五兵衛さんとこの、お父さんの命日ぢや
でな。
お駒　へーン……隣が親の命日ぢやと云うてお前とこが精
進するのかいな。
お樂　其處が近所の交際(つきあひ)ぢやがな。
（トお辰は此の話を小耳に立チ聞きして居る、此の時
立チ上つて稍々大聲にて垣根越しに。）
お辰　お樂さんお前。内も佛日に精進するかいナ。
お樂　オ、お辰さん聞えたかいな、實は今日お爺が仕事に
行きしなにな、五兵衛さん所が今日は佛日ぢやで精進せ
よと云うて行つたのぢや、お前さんに知らさんと默つて
せいよと云はれて居ながら、知つての通りの阿呆聲でな、
耳へはいつたかいなオホヽヽヽ。
お辰　夫れは心苦しい事ぢや、何んぼ隣同士で仲好うして
貰つてゐるからとて、内の命日にお前さん處まで精進し
て貰ふのは心苦しいがな、何うぞ其麼事をせんとおいて
おくれ。
お樂　水臭い事を云ひないな、根を洗へば他人でも、内の
お爺とお前さんところの五兵衛さんとは、不思議な程心
が合うて、今は親類と云ふか兄弟と云ふか、遠い親類よ
り近い近所とは云ふなれど、去年の秋に内の爺の大病に
介抱してくれて、何べん夜通しして貰ふたいな、あの世
話が他人で出來るかいな、せめて此方の心丈けでも精進
せねばならぬと云うてな、今日の晝の辨當も、おかずに
梅干一ツ入れていたがな。
お辰　マア／＼氣の毒やの、何時も此方こそ世話ばかり成
つてゐるのやないかいな、夫れに其麼事をして呉れては、
内の人の耳にはいつたら、わたいが叱かられるがな。
お樂　さうやつて、默つてゐてお呉れいな、わたいも内の
人の耳にはいつたら內證にして置けと云はれてゐて、恩
に着せがましい事をナゼ吐かしたと、わたいも欠張り叱
かられるがな。
（これにて一念布施を袂に入れて立ちあがり。）
一念　噫々實に美しい話ぢや、人はこけようが仆れようが、
我が身に構ひ物が無い事なら高見で笑うて居ると云ふ薄
情な世の中に、如何に親しい間柄とて隣りの佛日に精進
して上げるとは、進めゑ功德共に成佛。これお隣りのお
樂さん六兵衛どんが戻つたら、私しが感心して居たと言(こと)

附けをしておいて下されや。
お樂　イヽエ何時も隣りの五兵衛さんには、世話になつて居ますので、當り前の事だすわいな。
お辰　イヽエ一念さん此方が世話になり通しでなア。
一念　噫々美しい、僅な事でも世話してやつた／＼と、鼻にかける人の多い世の中に、ア、お二人共美しい。にごりゑにりんと咲いたる花一輪。白蓮の樣な淸らかさぢや、南無阿彌陀／＼。
お駒　坊さん、ベンチヤラ云ひなはんないな、五十過ぎたお婆さんに美しい／＼なんて、云はれる方がテレクサいがな。
一念　阿呆云ひなされ、姿形が美しいと云ふのぢヤない、二人の心が美しいと云ふのぢや、親類縁者でも、之れ程仲の好いのは一寸聞かんわいな。
お駒　其れは村中でも評判ぢや、喧嘩する奴が有つたら、何時も五兵衛爺さんと六兵衛爺さんを見習へと、誰でも二タ言目には云ふわいな。
一念　噫々一村一郡の美談ぢや、ドレ／＼歸つて御住持にも、此の話をして喜ばせませう、南無阿彌陀々々々々。
（ト云ひながら下へ降る。）
お辰　御苦勞樣で御座ります。
一念　ハイ／＼五兵衛さんに宜しう云うて下されや。

（此の内お駒も腰を上げてお樂の傍へ來り。）
お駒　そんならをばさん、折角持つて來たけれど、爾ヽ云うて持つて歸らうか。
お樂　誠に濟まんな志だけは難有う頂きますとなア、内の人が歸つたら孰れお禮にやるでな。
お駒　なんのお前上げもせんのに、禮がいるかいな。
お樂　イエ貰はいでも持つて行てやらうと云ふ、お志に御禮を云はな濟まんわいな。
お駒　ハアン詰り内のお父さんの心も美しで、なア坊さん。
一念　これ大人嬲りをしなさんいな。
（お辰此内佛壇に供へたる蜜柑を持つて上手へ來りお駒に持たして。）
お辰　サア／＼お駒さん、コレお使ひ賃やで。
お駒　大きに……。
お樂　お辰さん氣の毒なア、内へ來て呉れたお使ひに、お前さんからお賃を上げて呉れて濟まんナ。
お辰　まあ他人見たいな、物の云やうせしないナ。
お樂　大きに……。
お駒　チヨイと坊さん此の二人の美しい事見なはれ。にごりゑにりんと咲いたる花一輪、白蓮の樣な淸らかさぢや、南無阿彌陀々々々々――。
一念　此の子は惡い娘ぢやナアハヽヽヽ。

皆々　アハヽヽヽ。

（宜しく捨ぜりふにて一念、お駒は表へ出て中央の垣の外にて行合ひ會釋して、一念は上手へお駒は下手へ入る、同時に汽笛の音聞ゆ。）

お染　アヽ日が短いな、モウ工場の四時がなつてるがな、お辰さんモウ今に五兵衛さんが歸つて來るぜ。

お辰　ほんにナ、モウ何にをするひまもない、之れから內の人の、ごぜん焚きぢやがな。

お染　飯なら內に有るで。

お辰　ハア大きに……。

（ト飯の用意にかゝる、お染は張板を片付ける、此の時上手表口より米屋の𢌞へにて重助スーと入り來る。）

重助　內に居るか。

お染　オヽ山崎屋さんかいな、マアマアお上り。

重助　これ納りないな、今日持つて來ると言うた米代、今店へ歸つて聞いたらまだ持つて來て吳れんさうやな、之れ子供の使ひぢやないで、頭の禿げた者を、餘んまりなぶりものにしてくれなよ。

（ト腰を下ろして煙草をふかす。）

お染　ハイハイ誠に濟みません事で御座ります、知つての通り昨日はへヽ大雨でなア、內の人の仕事があぶれましたので、錢がはいりませんもので御座りますでナ。

重助　雨が降らうが、鎗が降らうが、持つて來ると云うて持つて來なんだら、詰りかい、昨日持つて來ると云うた其麼事を此方が知る此方が欺されたのぢやい。

お染　滅相な欺す譯では御ざりませんか、車力なんて云ふ仕事は、雨が降ると働けません日が多いのでな。

重助　そんなら、なんで雨が降つたら拂へませんと、ナゼ先きに云うて置かんのぢやえ、雨が降つたら錢になるかならんのかお前處の內の事まで、心配して居られんわい。

（お辰は此の時下手二重より大聲にて。）

お辰　山崎屋はん。

重助　アツ吃驚した何處から呼ぶのぢやい。

お辰　此處や此處や。

重助　なんぢやい五兵衛とこの嬶かい、年寄りのくせに大きな聲ぢやなア、何ぞ用かい。

お辰　そないにポンポン云ひなはんないナ、モウ六兵衛さんも仕事から歸つて來るであらうで、晩にでも來て上げなはれいな。

重助　偉い世話燒ぢやナ、晩に來たら乾度お前が拂ふとお前が引受けるかい。

お染　重助はん何にも隣りの內が知つた事やないやないか、そないにお辰さんに云ふとくれないナ。

重助　知つた事ぢやなけりや默つてゝいゝよ、甲斐性も無

いのに大きな聲で文句ぬかすない。
お辰　偉い文句云うて濟まなんだなア、宜しい晩に來てお
くれ拂うて上げますわい、金高は、なんぼぢやい。
重助　五圓八十錢ぢやい、乾度引受けるかい、又雨が降つ
て錢にならんと吐すなよ。
お辰　云ふとくれナ、內は紡績へ通うてゐるのぢや、雨が
降らうが鎗が降らうが、チヤンと月給が這入つて來るの
やでナ、憚りながら、內のおやぢさんは、關西紡績の月
給取やでな。
重助　ハヽヽ、立派な者ぢや、朝から晩まで眞黑になつて、
機械の油をさして居る人間やら、油蟲やら判らんといふ
御立派な月給取さんぢやわい。
お粂　これ重助はん其麼言ひ草云ひなはんないナ、油さし
が油蟲なら米屋の貴方は米の蟲ぢやないかいな。
重助　お粂さん偉い言ひ草ぢやナ、俺れも懸取りに來て蟲
と云はれたのは初めてぢや。オイ油蟲晩に來るで耳を揃
へて乾度拂へよ。
お辰　心配しなさんな一寸の蟲にも五分の魂ひやでなあ―
―。
重助　オヽヨウ吐した。オイお粂さんあの言ひ草覺えて貰
けよ、逃げ足の早い油蟲ぢや、晩に逃げたなんて云はさ
んやうに、お前處のヒキガヘルが歸つたらさう云ふとけ
よ。
お粂　ヒキガヘルとは誰の事ぢやいな。
重助　永年連れ添うて居て判らんかい、お前處の六兵衛の
事ぢやい。
お粂　重助はん餘んまり口が過ぎはせんかい。
重助　此の位の事は云はして貰ふかい、目の前に居る私を
米の蟲まで言うたぢやないかい、此方も默つて歸れるか
い、云はして貰はにや蟲が納まらんわい。
（トプン／＼云ひつゝ表戸を明けて重助は上手へはい
る。）
お粂　お辰さん濟まなんだなア。
お辰　なんのいナ。併しマア癪に觸る奴やなあ――。
（ト兩人宜しく舞臺中央へ來り。）
お粂　あんな奴の處で米買ふまいと何時も云うて居るのぢ
やがな、ツイ／＼貸して吳れるものやでな、背に腹はか
へられぬよつて買うて居るのぢやがな、モウ／＼言葉は
しともないわいなア――。
お辰　マア／＼キナ／＼しいないな、世間は廻り持ぢやわ
いな、內の人が歸つたら五圓や六圓なら怎うでもなるわ
いな。
お粂　大きに內の人も今日は少し持つて歸つて吳れるで有
らうし、晩には何んとか工面がつくが、お前さんこそ偉

い災難やつたナア、油蟲ぢやなんて吐しくさつてナ、何卒五兵衞さんが歸つて來ても、其麼事云はずに置いておくれや。
お辰　誰れが云ふかいな、お前さんにな、六兵衞さんが歸つて來てもヒキガヘルなんて云ひなさんなや。
（此の内六兵衞車力の拵へにて、下手より出て垣の外に一寸聞いて居る。）
お染　ハイ／＼眞箇運合に其麼事は云はぬけれど、あの樣に云はれて見ると内の人は一寸ヒキガヘルに似てゐるわいな。
お辰　阿呆らしい、あんな優しいヒキガヘルが有るかいな。
お染　サア氣は優しい人やけど、一寸ヒキガヘルに似て居るでなオホヽヽヽ。
（此の時六兵衞出し拔けに垣の外より。）
六兵衞　誰れが似て居るのぢやい。
（これにて兩人ハツト驚き。）
お染　オヽお歸り……。
（ト此の聲か聞き流して六兵衞は上手表口より這入り來る、お染、お辰は宜しく思入れ。）
お辰　六兵衞さんお歸り。
六兵衞　只今。五兵衞さんはまだか。
お辰　サツキ四時の笛か鳴つたよつてモゥ歸る時分ぢやわいナ。
六兵衞　偉い、ゆつくりぢやなあ。
（ト云ひつゝ二重へあがる、お染は水なくんで捨ぜりふにて足を洗はす、お辰は再び飯の支度にかゝる。）
お染　まあ／＼今日は宜かつたやらうな、飯もチヤンと出來て居るしお酒も用意して肴に大根と油揚げも焚く積りぢや、内の人此の竹の皮は何んぢやいな。
六兵衞　堺まで行つたよつて、大寺餅を買うて來たのぢや。
お染　それは大きに御馳走さん。
六兵衞　お前ぢやないわい、隣りの五兵衞さんに買うて來たのぢや、お辰さんに渡して置け。
お染　アヽさうかいナ。お辰さん一寸。
お辰　ハイ何ぢやいナ。
お染　内の人がナ、堺まで仕事に行たので、五兵衞さんに大寺餅を買うて來たといな。（トお辰に渡す。）
お辰　夫れは／＼氣の毒な、五兵衞はん何時も／＼貰ふ許りで濟まんな。
六兵衞　イヤ滅相な、此の間大寺餅か喰ひたいと云うて居たでな、今日堺まで行つたので下げて歸つて來たのや。
お辰　夫れは／＼有りがたい、マア／＼一寸佛さんに供へて置かう。
六兵衞　オイ一寸待つた、其の風呂敷の中に藥がはいつて

居るぞ、夫れも渡して置いて。
お樂　ハイ〱（ト藥を出して）赤蛙の黒燒……。
お辰　これお樂さんヒキガヘルやなんて云ひなはんなや。
お樂　イ、エ、ヒキガヘルやない赤蛙ぢやがな。
お辰　どつちでも惡いやないかいな。
六兵衛　何にが惡いのぢやい、疳藥には其れが一番宜いのぢやと聞いて、序に五兵衛さんに買うて來たのぢやがな。
お樂　オ、爾うかいな、お辰さんお前處の五兵衛さんに疳の藥を買うて來たのぢやいとな。
お辰　夫れは〱御親切に、内の人のあの病は迚も治らんと諦めて居るのぢやわいな。
六兵衛　其麽物やないわいな、マア〱呑まして見いよ、何が利くか判るかいた。
お樂　さう共〱西洋の藥よりも又恁麽物が利くかも知れんわいナ、別に疲い病氣でも有るまいが、産れつきとみえて、一寸腹の立つ事があつたら顏も腕も引き付けてナ、此の間も一寸見たが恁麽顏をするな。
（ト宜しく痟でツル顏なして見せる科し。）
六兵衛　ヤイ莫迦、お辰さんの前で變な事をするない、誰にも持病と云ふものが有るわい、お前でも一寸した事で直ぐ癪が起るぢやないかい。
お樂　夫りや私も癪と云ふ病が有つて一寸吃驚したり、ハツト思ふたら直ぐ癪が差し込むけれど、鹽水一杯が合ひ藥で直ぐに治るぢやないかいナ……。
お辰　さう〱貴女は合藥の鹽水で直ぐに治るなれど、内の人は、なんの合藥もなし若い時分からの病でな、あの顏見ると傍に見て居ても賦やな氣持ぢやわいな。
お樂　マア〱何にが合藥になるや判らないでな、利いても利かいでも、之れをせんじて氣永う呑まして見なはれな。
お辰　色々と有りがたう御ざります。六兵衛はん大きに。
（ト二重へ置きに行く、上手より五兵衛老けたる工夫の拵へにて辨當箱を持ち出て來り垣根越しに聞いて居る。）
お樂　サア〱貴下着替へたら、どうぢやいな。
六兵衛　オ、俺れよりはお前下駄買うて來てやつたぞ、此の風呂敷に有る、早う出して履けよ。
お樂　まあ〱大きに。（ト下駄を出して嬉しげに）大きに貴方今日は儲けて呉れたなあ。
六兵衛　ウン一寸好い仕事が有つて堺へ往復したで五圓程儲けてな、一圓七十錢で買うて殘りで俳や藥を買うて歸つたのぢや。
お樂　エ、お前皆使かうて歸つたのかいな。
六兵衛　心配するない、又あしたはあしたの風が吹くわい。

お樂　内の人、お前といふ人は暢氣ぢやな、米屋の山崎屋へ今日五圓八十錢拂はんならんがな。

六兵衞　アッ仕舞つた、すつかり忘れてゐた、よいわい、あした働いた金で、あすの晩でも、持つて行けばよいわい。

お樂　其麼暢氣な事云うて居られんのぢやわいな、今の先き内へ來よつて例のツムジ曲りの重助めが、ヒキガヘルぢやの油蟲ぢやのと毒吐きよつたよつて、隣のお辰さんが聞き兼て晩迄に拂うてやると引受けて吳れて居るのぢやがな。

六兵衞　其れは偉い事をしたな、何うしよう、

お樂　何うしようと云うて仕樣が有るかいな、あんたは若い時分から有つたら有りつたけ使ひやよつて、何の位、わたいが氣苦勞するか知れぬわ、隣から其麼金取代へて貰へるかいな、チト後先考へて錢使ひなはれイ、貧乏な癖に氣の大きい、ちつとは考へておくれいナ。

（これにて六兵衞はペコ〳〵頭を下げて。）

六兵衞　誠に濟みまへん。

（ト宜しく思ひ入れ有つて、お樂の一度庭を履いた下駄をぬがしかける。）

お樂　何をするのやいな。

六兵衞　濟まんが、ぬいでいな、モウ一遍下駄屋へ返し行て來るわ。

お樂　こんな土のついたもの、かやせるかいな。

（ト此の樣子を二重よりお辰は思ひ入れ有つて見ながら。）

お辰　お樂さん折角履いて居るのに、ぬぎなはんなや。六サン、ぬがしなはんないな。

お樂　イエナ聞いておくなはれ、五圓から儲けて皆使うてきよつたのだすがな、丸で算盤の判らん人やよつてな。

お辰　まあ〳〵宜しいがな、何にも悪い事に使うたのぢやなし、あんたが欲しからうと思うて下駄買うて吳れたのやがな、禮を云ひなはれいな、其麼親切な聟さんが、たんと有るかいな。

六兵衞　ソレ見い、隣のをばさんでも、ア、云うてるわい。

お樂　親切に判つて居るけれど山崎屋は何うするのぢやいな。

お辰　宜しいわいな、内の人が歸つたら五圓や六圓の金なら持つて居るわいな。

お樂　デモ其麼氣の毒な事が出來るかいな。

お辰　水臭い事を云ひなはんないな、折角あんたの下駄を買うて歸つて來て又怎麼事で下駄返しに行たなんで、後で知れたら乾度わたいが内の人に叱られて又疳でつる顔を見るがな――。

（ト宜しく疳つりの眞似をする此の時突然に。）

五兵衛　ヤイ何んと云ふ面をさらしてけつかるのぢやい。

（トこれにて皆々一寸驚く。）

お染　オヽ五兵衛はんおかへり。

五兵衛　ヘイ只今、六さん今日は早やかへつたな。

六兵衛　ヤアーお先きへ。

（此の捨ぜりふの内 五兵衛下手の 表口より 這入り來る。）

お辰　お歸り。

五兵衛　何にをさらしてくさるのぢやい、俺の疳の眞似をしやがつて、モウ一度やつて見い。

（之れにて又やる。）

コラツ、やつて見いと云うても、やらいでもよいわい、阿呆めッ。六さん見てやつて恁麼阿呆もやがな。

六兵衛　其れがをばはんの宜い處ぢやがな。實はナ……五兵衛さん米屋の山崎屋かなア……。

五兵衛　イヤ一寸聞いた五圓や六圓の金を借るも貸すも有るかいな、何んの緣やら隣同志に住んでから、妙にお前と氣が合うて、俺の方では兄弟の樣に思うて居るのに氣の毒の濟まんのと姉はん水臭い事云うてなや。

お染　イエ其麼氣でも無いが、誰も積りの有る事ぢやでな。

五兵衛　サア其處が兄弟共親類共思ひ合うて此處の垣迄取つた時に互に心の垣も取つて仕舞うて胸も腹も隔のない樣にしようと約束したのやないかいな、變な遠慮して呉れては、夫れこそ俺が腹を立てゝ、レコが起るがなハハヽハヽ。

六兵衛　そんなら濟まんけど五圓八十錢だけ取り代へて呉んか、あしたは返すぞナア……。

五兵衛　宜いわいナ丁度あいた金が、あるで使うて置きいナア。

お辰　おまはん其麼金が有るのかいな。

五兵衛　ウン、此處には無いが、岸和田の竹公に貸した金を今日取りに來て呉れと云はれて居たが、別に入用もなかつたよつて其の儘にして有るのぢや、一寸お前一ト走り行て、出來るだけ貰うて來いナ……。フン。

（ト目顔で知らして自分の銀時計をお辰に握らす、お辰は呑みこんで。）

お辰　ア、さうや〳〵。先きへ一ト走り行てくるぞえ。

五兵衛　早う歸つて來いよ。

お辰　通帳は何處に有つたいな。

五兵衛　シーツ。

（叱られて口に手を當て隣へ氣を兼て箪笥より質屋の通帳を出す。）

お染　五兵衛はん、ほんまに何時も〳〵濟みまへんな。

五兵衛　姉はん夫れを云ひないた、と云ふのに、世話になつても世話しても恩に着ちせねば着せもせず、俺は何樣仕合せな事はないと思うて居る。ナア七兵衞はん――。
（之にて六兵衞は委細を悟つて、無言の儘ヂッと思ひ入れ。）
お樂　これ内の人何んとか云ひなはらんかいな。エ、何ぢやいな俯向いて涙ぐんでゐるは、チョイと五兵衞さんあれ見とくはれいな。
五兵衞　偉い陰氣な事云うて濟まなんだた、コレ六さんふさぎないな、貧乏はお互ぢやないかい、まあ氣直しに好きな酒でも呑みなされな。オ、酒と云へば鮭の片身肴に買うて來たのぢや、オイ婆さん其れ此方へ持つて來い。
お辰　ハイ〳〵。
（ト五兵衞の持ち歸りし鮭を前に持ち來る。）
お前さん鹽物は嫌ひぢやないかいな。
五兵衞　俺が喰ふのぢや無いわい六さんの酒の肴に買うて來たのぢやい。
お辰　マ、折角やけれど六兵衞さん處は今日精進ぢや。
五兵衞　ハン……誰ぞの命日かいな。
お辰　イエイナ、内の佛日ぢやで精進してくれてゐるのぢやといな。
五兵衞　エッ俺の親の命日に六さん精進してくれてゐるのかいな。
お樂　イエ夫れも心の恩返しぢやと云うてな、あんたに内內でやつて居たのが、變なはずみで、お辰さんに聞かれたのぢやがな、笑ふとくれなや。
五兵衞　ア、何と云ふ嬉しい志ぢや、現在の俺でさへ精進して居らんのに、謂はゞ他人の六さんが精進して呉れたとは、噫々死んだ親父の前も面目ない。六兵衞さん大きに。位牌に代つて俺が禮を云ひます。併し精進は日の入りまでぢや、モウ彼れ是れ暮れる精進上げにお樂さん、之れで六さんに一杯つけて上げてお呉れ。
お樂　ハイ〳〵大きに有りがたう。
（此の内お辰以前の餅と藥を持つて來りて下へ降り。）
お辰　これ内の人あんたもヨウお禮を云うて置きなはれや、今日六兵衞さんが堺へ仕事に行たとやらで、ソレソレお前さんの好きな大寺餅。之れはなお前の疳の藥で赤蛙の黑燒之れを呑んだらお前の疳が治るといなア。（之れにて五兵衞はヂット涙ぐむ）これ内の人六兵衞さんに禮を云ふとくれいナ。まあ何んぢやいな、俯向いて此の人も涙ぐんで居るわ。チョット お樂さん、内の人も六兵衞さんか、傳染つて居るがな。
お樂　マア〳〵濟まん事。コレ内の人あんたが嫌やな顏をするよつて五兵衞さんもふさいでやがな。

六兵衛　オヽ夫れは／＼濟まんなア。五兵衛さん貧乏はお互ぢやがな、モウふさぎないな。
五兵衛　イヤ決して貧乏に負けてふさぐ樣な私ぢやないが餘んまりお前の親切に心の奥までヅットしみ熱い涙が湧いて來る、俺とお前は先きの世で一體何んな因緣やら。六さん、モシヤ俺が死んだなら、お前の手で骨を拾うてや。
六兵衛　當り前ぢやがな、併し俺れが先へ死んだ時は、お前の手で埋めてや。
五兵衛　誰が人の手をかけさすものかい、離れた時は違うても、骨は一緒の土へ埋めような。
（これにてお樂は顏をそむけて泣くお辰も共々。）
六兵衛　オイ又二人に傳染つてるぜ。
五兵衛　ハヽヽ、今日は妙に陰氣な話をしたナ、オイお辰よ早う岸和田へ行つてこんかい。
六兵衛　ヤイお樂よお前も早う飯拵へをせんかい。
お樂　餘んまり二人の話が嬉しいので何にもかも忘れて居るのぢやがな、今日は大根を焚いて五兵衛さんとお前のお菜にしようと思うて油揚も買うて有るのぢや、一寸裏の流れで洗うて來ますわ。
お辰　何時も／＼お樂さん濟みまへんな。
お樂　水臭い事を云ひたはんないな、あんたもわたいも死んだ時は同じ穴へ埋めて貰ひませうなア――。
お辰　大きに／＼お邪魔はんやけど一緒に入れておくなはれや。
五兵衛　阿呆め風呂へ這入る樣に吐してけつかる。
皆々　アハヽヽヽ。
（誂への囃子になつて捨ぜりふにてお樂は裏手へお辰は表口より出て行く、五兵衛も捨ぜりふにて下手へあがりかける。）
六兵衛　五兵衛はん一寸。
五兵衛　エヽ何ぞ用か。
（これにて六兵衛下手へ降り來り手招きなする、五兵衛も傍へより來る。）
六兵衛　お前時計がなうても仕事に差支はせんかい。
五兵衛　エヽ。お前知つてるのかい。
六兵衛　先ッキお辰さんが通帳はと云うた一ト言ではてなと思ふとお前の腕時計がない、折角隱してくれて居るのに、嬶アの前で云ふでも無いと默つて居れば居る程濟まん／＼が込み上げて、思はずポロ／＼涙が出たがな。
五兵衛　ハヽヽ、別に隱してした譯ぢやないがお前の心をつかはすのも、厭やぢや思うてたア、併し目の早いお前に見られたら逃らんはい、心配せんと置いてや、紡績には時計は有るし油差しになけりやならんと云ふ時計で

もないわいな。

六兵衛　イヤ／＼俺等と違うて時間仕事のお前ぢや、あすは儲けて質受けをするよつて、あしたの晩まで借して置いてや。

五兵衛　オイ水臭い事云ひないな、お互に親兄弟もなければ子供もなし、便りに思ふ親類は……さう／＼俺にないがお前は有ると云うて居たなア。

六兵衛　有つた所が糞の役にも立つかいな。

五兵衛　腹違ひの妹が有ると云うてゐたな。

六兵衛　ウン死んだ父親の妾腹でナ、まあ體よう其奴に少しの物も有つたが取られたのやがな。

五兵衛　お前相續人やなかつたのかいな。

六兵衛　相續人やつたけど其の時分に横道が過ぎてな、詰り放り出されて其妾腹の妹が後へはいつて養子して、今でもチヤント和歌山で、大きな材木屋をやつてゐるがな。

五兵衛　フーン、お前其の妹と云ふ人に逢うたのか。

六兵衛　七八年前に一ぺん逢うたら物も吐さんなんだよつて腹が立つて、我等の世話になるかいと言うて別れたまゝやがな、兄弟や親類と云うた處が貧乏してたら、あかんわいな……。

五兵衛　又其麼所へ行かいでも宜いわい、行くなよ、親類や兄弟でも此方が何うぞ恁うぞやつてゐてこそ親類ぢやわい、其麼奴の事忘れてしまへ／＼。

六兵衛　忘れてゐたのをお前が思ひ出さしたのやがな。

五兵衛　アツ其れは濟まなんだナハヽヽ。

（此の時上手表口より小使伊助出て來り。）

伊助　六兵衛さん居るかな。

六兵衛　オヽ役場の伊助さんかいナ何ぞ用かいな。

伊助　これ六兵衛さん偉い事が出來てな、今村長さんがお客さんを二人連れて此處へ見えるぜ。

六兵衛　はてな。五兵衛さん何ぢやらう。

五兵衛　サアー。伊助さん何が出來たのぢやい。

伊助　マア／＼今見えるで聞いて見い。オイ六兵衛はんフンドシ締めて氣を確に持ちや。

六兵衛　オイ／＼氣味の悪い事を云うて呉れない。

五兵衛　オイ伊助さん氣の小さい男を吃驚さしてやつて呉れない。

（此時表口より村長岩村、辯護士中川、公證人土非の三人スーと出て來る。）

岩村　六兵衛はん内に居たな。

六兵衛　オヽこれは／＼村長様ナア、何卒此方へ。

岩村　ハイ／＼。サア／＼何卒此方へ。

中川
土非　御免下さい。

（三名上手へヌーと通る、二重へ腰を降す、六兵衛はウロウロして居る、五兵衛は宜しく不審の思ひ入れあつて、下手の二重にて着物を着替へる。）

岩村　コレ〳〵六兵衛、何にをウロ〳〵して居るのぢやい、火でも持つて來ぬかい。

（之れにて六兵衛不氣味らしく火鉢を前に出す。）

中川　何うか捨てゝ置いて下さい。此方は。

岩村　ハイ先程役場で申し上げました之れが本人の熊野六兵衛で御ざります。コレ前へ出て挨拶をせんかい。

中川　イエ〳〵別に挨拶も入りません、我輩はかういふ者です。

（出す名刺を六兵衛受取つて小首をかたげ。）

六兵衛　辯……ベン辯士。ハアン活動寫眞の御方かいな。

岩村　これ何を云ふのぢやナ、辯士ぢやないがな、眞中にモウ一字有るがな。

六兵衛　其の眞中の字が讀めんよつて飛ばして讀んでますのぢやがな。

岩村　ズボラな讀み方をしいないな、眞中の字は卽ち守ると云ふ字ぢやがな。

六兵衛　ハアン辯マモル士ですかいナ。

岩村　何に言ふのぢやい、辯護士ぢやがな。

六兵衛　ヘーン貴方はん辯護士さんですか。

中川　ハイ辯護士の中川順一です。

土井　私しは生憎名刺を忘れて來たが、公證人の土井壽之助と云ふのです。

六兵衛　公證人と云ふと何ぢやいな。

伊助　これ何ぢやなと云ふ事が有るかいな御役人さんぢやがな。

六兵衛　ヘーン御役人さんですか。オイ五兵衛はん。

五兵衛　何ぢや。

六兵衛　一寸來て與れ御役人さんが來てるのぢやがな。

岩村　これ〳〵何も隣の五兵衛を呼ばいでもよいぢやないか。

六兵衛　私しは氣があきまへんよつて、五兵衛さん來てゝ貰はんと便りないので御座ります。

（此の内二重より五兵衛降り來りて。）

五兵衛　オ、之れは〳〵村長さん御無沙汰致しました。

中川　岩村さん彼の方は何か關係者ですか。

岩村　イエ之れは隣に住みます、此の關西紡績の職工で、岸本五兵衛と云ふ者で御座います。

中川　夫れでは別に何の關係もない人ですなあ。

六兵衛　イエ中々死んだら一緒に骨を埋めようと云ふ仲でなア――。

中川　其麼事は聞いて居りません、詰り親類でも何でもな

いのですな。
六兵衛　アイエ親類より、まだモット上で御座ります。
中川　親類より上と云ふと何う云ふ關係ですか、肉縁の兄弟なんですか。
六兵衛　イエ他人です。
土井　其辺下らん事は云はいでも宜しい、取り調べる上に複雜になりますから注意して下さい。
五兵衛　モシ氣のあかん人間で御座りますで、餘んまり叱られましたら物が云へまへんよつてなハ、、。モシ村長はん、何ぞ六さんの身の上に心配な事でも御座りますかいナ。
岩村　イヤ〳〵心配ぢやない偉い事が、實はソノフ、、、。
中川　イヤ岩村さん私しからお尋ねします。熊野六兵衛さんとは貴下ですな、御產れは。
六兵衛　ヘイ。五兵衛さん產れは和歌山やナ……。
伊助　六兵衛はんお前さんに聞いてゐなさるのぢやがな。
六兵衛　さうぢや和歌山ぢやがな。
伊助　俺に云はんと彼方へ云ひんかいな。
中川　よろしい〳〵。和歌山の何處です。
（ト鞄の中より書類膽本を出して開く。）
六兵衛　何んでも、和歌山の西濱の今鰻屋の有る隣の角の……。
中川　爾う云うては判らん、町名番地を云うて下さい。
六兵衛　五兵衛はんお前云うてな。
五兵衛　俺は知らんがな。
中川　よろしい〳〵。現在の本籍地でせう和歌山市西濱町二十五番地ですか。
六兵衛　ヘー其處で產れてますかいな。
中川　爾うです、明治四年二月十日の產れです。
六兵衛　偉いものやなア。
岩村　何が偉い者ぢやい。
六兵衛　私しが忘れて居るのに他人さんがチヤンと覺えてゐて下さるがな、御親切に有難う御座ります。
中川　何も禮を云ふ事はない、戶籍謄本にチヤンと載つてゐます。夫れから母のクメと云ふ人は明治十三年十月二日死亡、同年十一月に本田花と云ふ後妻入籍になつて居りますね。
六兵衛　イエ夫れは後妻と違ひますのや、親父の妻でなア。
中川　サア何であらうと、戶籍面は妻として結婚屆が出て居りますから、父熊野七兵衛と云ふ人は明治二十五年九月二十日に死亡してますな。
六兵衛　ヘイ南無阿彌陀佛〳〵。
（ト泣く。）
五兵衛　コレ何を泣いて居るのぢやいな。

六兵衛　其の時やがな今の親父の妾が内へ這入りよつて、俺を窘めてな、燒糞で女郎買をしかけたのぢやがな。
伊助　ヘエン……六さんは中々偉い内の息子はんやなア。
土井　オイ〳〵尋ねて居る內に外から物を云ふと取調中甚だ複雜だ、外の人達は默つて居て下さいッ。
伊助　へ……。
中川　其の時の十二月に貴下は別家した事になつてゐますナ。
六兵衛　イエ別家と違ひます、其の妾に放り出されましたのぢや。
伊助　フ、、ン、お前が放り出されたのかいな。
土井　おだまりなさい。
中川　それから戸主相續人は貴下の母妹の熊野ツネと云ふ人になつてますね。
五兵衛　ハアン、夫れが先き話をしてゐたお前が喧嘩したと云ふ奴やな。
六兵衛　さうやがな其のおツネと云ふ奴がな……。
岩村　默れッ。
五兵衛　ヘイ――。
中川　夫れからツネの養子壻として山田清三入籍同時に結婚、明治三十八年長男幸一出生、明治四十五年二月二十日山田清三死亡。

六兵衛　ヘーン、おツネの壻は四十五年に死によりましたか、ざま見されッ。
岩村　コレざま見されと云ふ事があるかいな。
六兵衛　其れでもお前其の養子がなア――。
岩村　サア假令何うあらうと共、妹壻……。
五兵衛　默れッ。
岩村
六兵衛　ヘイ――。
中川　其れから大正十一年十一月五日戸主熊野ツネ死亡とかうなつて居ります。
六兵衛　ヘーン、妹の奴死にましたかいな、何と五兵衛さん、去年の十一月に死んで居ながら、俺に葉書一枚よこしよらんがな、何と云ふがきぢやらう。
五兵衛　愚痴を云ひないな、夫れも矢張り此方が貧乏して居りやこそぢや、第一。默れッ。ヘイ……。
（ト土井の顏見ながら一人で云ふ。）
中川　モウ宜しい〳〵ハハ、、、。
五兵衛　大事御座りませんかいな。これ六兵衛さん假令知らして呉れいでも、お前の爲には矢張り腹違ひの妹ぢや、今日恁うして判つたら線香でも上げて念佛でもあげて上げなされ。
六兵衛　阿呆らしい、俺等の樣な貧乏人に交際(つきあは)ぬと吐した

奴に何んで念佛上げんならんのや。

五兵衛　サア／＼其處は矢張り、親は泣きより、死んで仕舞へば黑猫も恨みも有るものかいな。

岩村　さう共／＼殊に其のおツネさんと云ふ人の十萬圓からの財産は受取り手が無いので、お上樣がお調べの上でお前に其の財産が流れ込んで來たのぢやがな。

六兵衛　へーン、夫れはまあ、眞實かいな／＼。

中川　事實です、其れで我々が態うして當村まで來たのです。

六兵衛　へーン。サア／＼まあ／＼上へおあがり下さい下さい／＼。

中川　ハヽヽ、之れで宜しい／＼。實は法律上熊野ツネと云ふ人の動産不動産は、其の人の長男幸一と云ふ人のものなんですが、大正三年に失踪屆が出てゐます、目下行方も生死も不明ですから、其の人が現はれない以上、當然熊野家の財産は熊野六兵衛と云ふ人の物であると、私の法律上の見地から昨日決定したのです。

（之れにて六兵衛は嬉しさに、ホーとなる科。）

五兵衛　これ／＼六さん、ぼんやりせんと早う禮を云ひんかいな。

（此の以前よりお藥大根の切りたるを持つてヂツト上手に聞いて居て、ブル／＼慄へて居る思ひ入れ。）

土井　イヤ決して禮を云ふ必要は有りません、民法上貴方の權利に屬したものですから、本公證人は其の財産の相續手續を履行する爲に同行をした譯です。

中川　明日午前九時に今の名刺の私しの事務所まで來て貰へば、直ちに裁判所へ同行して、初めて法律上の決定を見るのです、實印携帶で來て下さい。

五兵衛　これ／＼六さん畏りましたとお禮を云はんかい。

六兵衛　ウフ――。五兵衛はん、水一杯おくれ。

五兵衛　オイショ――。

（ト水なくんで來る。）

伊助　コレ六兵衛さん宜いかいな／＼氣を確に持ちや、十萬圓からの財産が流れ込んで、喫驚して氣が變になつたのと違ふかいな。

岩村　イヤ／＼夫れは無理はない／＼、これが眞實の夢に牡丹餅やでな。

伊助　全くです、俺の親父も妾を置いて何處ぞへ、腹違ひの妹を拵へてくれてないかいな。

岩村　ハヽヽ、お前の親が妾を置く程の財産が有つたのかいな。

伊助　それはおまへんわ。其處へくると村長さんはお妾の二人もある……。

岩村　コレシッ／＼。

中川　ハヽヽ、際どい處で素破抜かれもしたなあ。夫れでは土井さん失敬しませう。

土井　ハイ御面倒ながらモウ一度村役場へ御同行を願ひまして萬事の手續を、お序にね――。

中川　ハイ承知しました。夫れでは熊野さん間違はぬ樣に來て下さいよ。

五兵衛　これ六兵衛さん、モウお歸りぢやがな、何とか云はんかい。

六兵衛　南無阿彌陀佛〳〵。

岩村　コレ挨拶に念佛云ふ人があるかいな、氣狂ひぢやがな。

中川　イヤ無理は有りません、急激に境遇の變化猛烈な刺激に遭へば、誰だつて腦の一部に異狀を來たしますよ。

五兵衛　モシ氣狂ひになる樣なことは、ござりませんかいな。

中川　ナニ大丈夫ですよ、僞麼氣狂に本職もなつて見たいねアハヽヽヽ。

（之れにて囃子になり岩村、伊助は六兵衛にお世辭な云ひながら中川、土井と共に表口へ出て行く、同時にお樂ツヵ〳〵と走りより六兵衛に縋り。）

お樂　内の人ツ。

六兵衛　婦ア聞いたかツ。

お樂　聞いたツ餘んまりの嬉しさに持病の積が差込みさうで、まだ慄ひがとまらんわいな。

五兵衛　無理はない〳〵。サア六さん確りしいやサア〳〵まあ〳〵あがり〳〵。（ト上手二重へ腰をかけさす）併しお樂さん結構な事やないか、餘んまり嬉しさに、とまどひして持病の積を起しなや。

お樂　ハイ〳〵大きに。結構にもなんにも私しや先きにから聞いてゐて、氣がぼうとなつて仕舞つた、コレ内の人お前十萬圓からの財産が這入つて來て、何うするのぢやいナ。

六兵衛　俺は確に起きてゐるな。

お樂　お前起きて居るぢやないかいな。

六兵衛　起きて居るやら夢見てゐるのやら、まだハツキリ判らんのぢやがな。

五兵衛　夫れは無理はない〳〵、五圓八十錢の米代に困つて居たお前が十萬圓からの大金が、ころげ込んでくるのぢやもの、夫れと云ふのも矢張りお前は金持の家に生れた一徳ぢやがな、其處へ行くと私等は腹からの貧乏人で、先祖代々福の神に嫌はれてゐるのぢや、ア、僞麼夢でも見たいなア。

六兵衛　コレ五兵衛はん心配しいないな、之れからが御恩返しやがな、モウお前も紡績の油差はさして置かんで安

心しいや。

お樂　さう共〳〵。內も車力なんてモウ今日限りぢや、マア第一に內の人一番先きに宿替へせんならんな。

六兵衛　當り前やがな、這麼豚小屋見たいな家に暮して居られるかいな、何處ぞ矢張一寸門構の家ぢやないと、うつらんわいな。

お樂　オヽ丁度昨日（こない）港の濱を通つたら、別莊の貸家が有つたで、不取敢あれでも貰うて這入らうかいな。

六兵衛　新しいかな、餘んまり、古い家はどんならんで。

お樂　イヽエまた新建で、內風呂まで有ると云うてたで。

六兵衛　それは便利でよいな、風呂と電話はなけりや不自由やでな。

お樂　さう共〳〵あの家なら自動車も橫附ぢやがな。爾うたつたら五兵衛さんも每日自動車で迎へにおこすよつて遊びに來てお見れや。

五兵衛　ヘイ大きに――。
　（ト不快の思ひ入れ。）

六兵衛　每日遊びに來て貰ふのも大儀ぢやがな、其の二階一間丈けでも五兵衛さんに家賃なしで貸して上げて、一緒に暮してもよいやないかいな。

お樂　阿呆らしい。貧乏人見たいに合住居が出來るかいな、マア宜いわいな、其の近所に小さい借家でも有つたら、家（うち）が借りたげて其處へ入れて上げようやないか、ナア五兵衛さん……。

五兵衛　イエ私などは其麼立派な家へはいる柄ぢやなし、矢張り這麼豚小屋が分相應ぢやでな――。

六兵衛　其麼遠慮しいないな、今までの恩返しやないかいな。ナア嬶ア。

お樂　さうや共〳〵、我々が絹物を着て貧逆五兵衛さんに這麼なりもさして置けんわいな。

六兵衛　さうや共俺も這麼なりはして居られんわ。

お樂　當り前ぢやないかいな、貴下は矢張り大島にしなされ、私いは錦紗が好きやよつて、長襦袢も着物も羽織も襟も、腰卷も皆錦紗にしたいわいな。

六兵衛　爾うしんかいな、モウ足袋も下駄も錦紗で拵へたな。

お樂　オホヽ、錦紗の下駄が履けるかいな。五兵衛さんは何がうつるやらう、矢張り結城が宜いかいな。

五兵衛　オイお樂さん嬲らんと置いてや、俺等は其麼物着る身分ぢやないでな。

お樂　サア其處が恩返しやないかいな、這麼お辰さんの仕立直しのネンネコを着せて、我々夫婦が見て居られるかいな。

五兵衛　偉い婆の仕立直しで濟まんな、油差しには之れで宜いよつてになア。

六兵衛　其の油差しにはモウ止めさすかな。
五兵衛　止めさすとは何おやい、お前に其麼權利が有るかい、俺は油差しは好きでやつて居るのおやい。
（ト、キツパリ云ふ、之れにて六兵衛思ひ入れ、お樂も六兵衛の袖を引いて思ひ入れ。）
お樂　オホヽヽ五兵衛さん、何もお前さん氣に障はつたのかいな、ツイ〳〵心安よつて、ベラ〳〵喋舌つて堪忍してや。
五兵衛　オイ喧嘩買ふやうな事云うてなさ、俺はお前に謝つて貰ふ事にないよつてな。
お樂　其んなら機嫌の宜い顏を見せとくれいな、內の人も心配するがな。
五兵衛　それは濟さなんだなア、人間おやて機嫌の宜い時も惡い時もあるよつてナ、さう〳〵お前處の機嫌を取つて居られんわいな。
六兵衛　又機嫌を取つて吳れと云うたかいな。
五兵衛　又機嫌取らんならん樣な、お前に弱い尻が有るかいな、有るなら云うて貰ふかい。
お樂　コレ內の人貴下の物の言ひ樣が惡いわいな、謝りなはれ〳〵。
六兵衛　イヤ云ひ樣が惡るかつた堪忍してや。
（ト五兵衛莨のない科。）
六兵衛　ナヽ莨はないのか、なけりや之れ少し入れてやらうか。
五兵衛　莨位恩に着せんと眞實の親切が有れば、默つて入れてくれても罰はあたるまい。
（ト莨入れを投げ付けるお樂は其れを拾ひて。）
お樂　マア〳〵機嫌直しておくれな。まあ何の緣やら眞身も及ばぬ程仲好うして貰うて、世話になつて居たし、又內の人もお前が咳一つしても風引いたのおや、あるまいかと直ぐに心配してゐるし、何方が先き、死んでも同じ土で埋めようとまで、約束した仲おやないか。然うして內の人が運が向いたのやよつて、お前も喜んで吳れたら宜いおやないかいな。
五兵衛　其れは結構な事おやと、初めから喜んでゐるわい。
（ト泣く。）
六兵衛　喜んで吳れるなら泣かいでもよいやないか。
五兵衛　喜んで居るけれど、何おや知らんが腹が立つのおやわい。
六兵衛　ハアン矢張り持病の癪の精おやなア。
お樂　この病氣も矢張り貧乏がわざして居るわいな、此の年になつて紡績で偉い働きをして居るのおやもの、モウモウ早う止めて貰うて樂をして貰ふな。
六兵衛　さうや〳〵之れから一生五兵衛さんを立て養ひに

しても、何ぼ入るかいな、先きの知れた人やがな。
五兵衛　オイ六さん、妙な事を云ふな、先きの知れた人とは俺の死ぬのを待つてゐるのかい。爾うやらう金持になつて恁麼貧乏人の友達が有つては、お前の顔に拘はると云ふのやらう、オイ心配して呉れなよ、何ぼお前が立派になつても、五厘の無心にも行く氣遣ひはないよつてナ安心してや。
お樂　五兵衛さん爾う云うたら角が立つがな、其麼積りで云うたのぢやないわいナ、貴下も取る年で仕事も偉いよつて、止めさして内で養はうと云ふのぢやないかいナ。
五兵衛　云うてなや、俺はなあ此の兩腕が動く内は他人樣に養ふて貰はひでも、立派に食つて行くのや、よつてなア、まだ赤の他人の世話になる程耄碌はせんわい。
お樂　サア今はさうでも、だん／＼年取つて働けんやうになるわいナ。
五兵衛　働けなんだら野垂れて死んだら仕舞ひぢやい。
（ト有合ふ煙管を投げつける、六兵衛はキッ　トなつて。）
六兵衛　ヤイ五兵衛ッ、宜い加減にして置けよ、何が氣に入らいで物を投げるのぢやい、心安うしたと思へばこそ、此方は親切に養うてやらうと云うてやつたら、禮の一つも云ふのが當り前ぢやないか。

五兵衛　貴樣に何の禮を云ふのぢやい、一飯の飯も呼んで貰うた覺えはないわい。
六兵衛　オイ云ふなよ、今夜も内で飯食らうたやないかい。
五兵衛　其の代りに寄に芋を五百目もやつたわい、お前の嬶は泣いて喜んだわい。
お樂　爾う云ふと私いも云はんならんで、今朝醬油がないと困つて居たよつて、お辰さんに二合からの醬油上げてあるぜ。
五兵衛　オイをばはん恩に着せなや、此の間お前處の爺に酒の五合もやつたわい覺えてるか。
六兵衛　知つてるわい、其麼事もあつたよつてに大寺餅の一つでも買うて來てやつたわい。
五兵衛　誰れが買うて呉れと頼んだい、其ないに惜しけりや返してやるわい。
（ト足早に以前の餅と藥を取り來りて。）
サア返すわい。
（ト投げつける六兵衛に當る。）
六兵衛　ヤイ何にをさらすのぢやい。
五兵衛　喧嘩かッ。
（ト雙方氣味合ひ。）
お樂　内の人相手になりなはんな、モウ五兵衛はんも恁麼事するのやよつて交際はん積りやらうかいな。

五兵衞　當り前ぢや、誰が貴樣等とつき合ひするかい。
六兵衞　オヽそつちがさうなら此方もつき合ふかい。
五兵衞　オヽ宜う吐した道で逢うても物云ふなよ。
六兵衞　誰れが云ふかい、此方も大助かりぢや。
五兵衞　洒落た事を吐すない、僅かな金が這入つたと思うて大きな面をするない。
六兵衞　大きな面は産れ附きぢやい。
五兵衞　フウン其の面附きで大縞の着物着てヨウ似合ふ事ぢやい。
お樂　大きに憚りさん、顏で着物は着よへつてな。
五兵衞　さうぢや／＼狆猫でも、いうぜんの、チンペを着てるでな――。
六兵衞　ナニモウ一遍吐して見い。
（ト立ちかけるをお樂は止めて。）
お樂　內の人ほつときなはれツナ、金の有る人は餘んまり喧嘩するものやないわいな。
六兵衞　成程なぐり合は下等社會に多いでナア――。
お樂　さうやがな一寸身柄のある人は、毆り合ひなどしたり物を投げたりするものぢやないわいな、モウお前に人樣が旦那樣と云ふぞえオホヽヽヽ。
（ト云ひつゝ以前の鮭を持ち來り、五兵衞の前に小腰をかゞめ。）
オホヽヽあのお隣のお爺さんコレナ折角頂きましたけれど、生憎內の旦那の口に合ひませんので、誠に失禮ながらお志し丈け頂戴致して置きますよつてナ何卒不惡。
（ト五兵衞の前におく、五兵衞思はず手を振り上げるお樂は飛び退いて。）
お樂　何卒お氣に障つたら御免遊ばせオホヽヽヽ。
（之れにて五兵衞カツトなつて下手へ鮭を投げつけるトタン表口より中川ヌート入り來る拍子に鮭が當る。）
中川　痛いツ。
五兵衞　フワー。
中川　フワーと云ふ事が有るか注意しないか莫迦ツ。
六兵衞　オホ之れは／＼先程の旦那樣で御座りますか。
お樂　サア／＼何卒此方へ御通り下さいませ。
中川　有りがたう。此の男は先き見た人ですなア。
お樂　ハイお隣のお爺さんで御座います。
中川　何にか大事の用で見えてるのですか。
五兵衞　怎麼內に何の用が有るかいツ。
中川　何と云ふ物の云ひ方だ、實に下等社會の人間は、禮義のないものだナハヽヽ。
六兵衞　ナア爺誰れの目も同じやな。
中川　貴女が熊野さんの妻君ですか。
お樂　ハイ女房のお樂と申す者で御ざります。

中川　先刻の事件に附いて一寸密談が御座りますから、此の人に歸つて貰つて下さい。
五兵衛　歸れと云はいでも係累家に誰か居るかい。
中川　夫れでは早く歸れッ。コラッ何と云ふ面をするのだッ。
五兵衛　これは俺の持病ぢやい。
（ト、ブン〳〵猜ッリを起しながら下手へ來て餅と鹽を持ち來り、火鉢にて燒いて居る、此の內お槃茶を入れて中川に出す。）
お槃　何卒番茶一つ。一寸內の人から聞きましたが、今度は色々と御親切に御手數にあづかりまして、有りがたう御座ります。
中川　イヤ爾う云はれると甚だ恐縮するです。實は其の事件に附きまして再び伺つたのです。
六兵衛　ヘイ〳〵明日は間違ひなう實印を持つて參上致します。
中川　イヤ夫れがモウ來て頂かなくつてもいゝのです。
お槃　ヘーン參らずとも宜いとは怎うなつたのです。
中川　甚だ粗忽な話ですが、本件の相續者たるツネといふ人の實子幸一と云ふ人間の所在が判明したと、今村役場の方へ電報が來たのです。
六兵衛　ヘーンおツネの倅の所在が判つたのですか。

中川　さうなんです。
お槃　すると和歌山の熊野幸一と云ふ人の物です。
中川　無論其の熊野の財產は怎うなりますので。
六兵衛　ヘーン、すると私しは何うなります。
中川　詰り何の權利もないので、其の財產は貴下には這入らぬ事になるのです。
六兵衛
お　槃｝ヘエーン。
（ト兩人顏見合して思ひ入れ、同時に五兵衛は大聲にて。）
五兵衛　樣見やがれウハハ、、、。
中川　默れッ。
お槃　モシ辯護士さん夫れでは我々夫婦には一文も這入らんので御座りますなア。
中川　お氣の毒ぢやが、法律上何等の義務も權利もなくなつた譯になつたのです。
（之れにて六兵衛ヌーと前に出て。）
六兵衛　オイ大將ッ。
中川　何た大將とは。
六兵衛　云うたが怎うしたい。餘んまり人を膨りものにするなよ、一文も這入らんのなら、始まりから仕様も無い事を云うて來て、寢てる子を起しに來るない。

中川　其麼不平は本職の知つた事ぢやない、本辯護士は法律の指さすまゝに公明正大の手續を履行したのだ、本件に對して不平が有らば、自然民法の制裁を仰いで法廷で堂々と爭ふがよい、苟も人權保護の職に有る我輩に對して、何と不穩の態度を示すのだ、少し言葉に注意をなさいツ。

（ト、キッパリ云ふ、同時に下手にて五兵衛は拍手を打つて。）

五兵衛　ヒヤ〳〵。

（之れにて中川隣に向ひ。）

中川　莫迦ッ

（ト叱りつけて怒りをふくんで早足にて元の表口より出て行く、六兵衛お樂は顏を見合してウットリとなつてゐる、五兵衛は下手より延びあがりて。）

五兵衛　お隣の旦那はんお心持は怎うぢやいな。

六兵衛　八ケ釜敷いツ。

五兵衛　ハヽヽお氣に障つたら、民法の制裁を仰いで法廷で堂々と爭ひなさいハヽヽヽ。

六兵衛　ナニヲ。

（ト立ち上がるトタンお樂は其の前より癪の差込むに堪へ兼ねた思入れにて。）

お樂　ウーン……。

（そりかへる六兵衛慌てゝそれを押へて。）

六兵衛　オイ〳〵お樂確りせい〳〵。

（之れにて五兵衛は思はず延びあがり。）

五兵衛　オイ〳〵怎うしたのぢや〳〵。

六兵衛　お樂が癪を起しよつたのぢやい。

五兵衛　癪なら合藥の鹽水を呑ましてやらんかい。

六兵衛　押へてゐて夫れが出來るかい、お前手が空いて居るなら持つて來てやつてくれ。

五兵衛　オットショー。

六兵衛　濟まんなあ。

五兵衛　滅相な。

（ト宜しく思ひ入れあつて手早に鹽水を持ち來る。）

サア之れを呑ましてやれ俺が押へて居てやるわい。

六兵衛　オットショー。

（ト宜しく捨ぜりふにて五兵衛はお樂を押へる、同時に六兵衛は水を呑ます。）

五兵衛　オイお樂さん確りしいや〳〵。

六兵衛　氣がついたかい〳〵。

（お樂よろしく稍々治りし思ひ入れ、同時に上手表口より以前の重助ツカ〳〵といで來り。）

重助　オイ内に居るか約束通り貰ひに來たぜ。

五兵衛　オイ重助はん向先き見てやれ、此の通り取込んで

居るのぢやいモツト後に來い。
重助　大きな事吐すない晩に來たら拂ふと云うたで、モウ日の暮れなら取りに來たのに不思議が有るかい、オイ五兵衞はん而もお前處の婆が此の金は引受けて居るのぢやぞ。
（此の時お辰下手入口より歸り來り一寸五兵衞を探がす思ひ入れ。）
五兵衞　知つてるわい今婆が歸つたら拂うてやるわい。
重助　其の婆は何時歸るのぢやい。
（これにてお辰突然に。）
お辰　先きから歸つてるわい。
五兵衞　歸つて居れば早う金を持つて來んかい。
お辰　ハイ〳〵。
（足早に上手へ來り五兵衞に金を渡す。）
サア十圓貸して呉れたで。
五兵衞　ヨシツ。サア重助はん十圓でつりを呉れツ。
（ト重助の前に十圓札を突き出す、お樂之れを見て堪まらぬ科にて。）
お樂　內の人禮を言ひならんかいな。
（ト六兵衞を五兵衞の前へ突きやる、六兵衞無限の思ひ入りにて五兵衞の手に縋りつき。）
六兵衞　五兵衞はん堪忍してや……。
（感極まつて云ふ、五兵衞もヂツト思ひ入れあつて六兵衞を抱きしめ。）
五兵衞　六兵衞はんツ。
（トよろしく氣味合の木頭。）
矢張り貧乏して仲好う暮さうな――。
（宜しく無限の思ひ入れ、お樂は椽に有る以前の餅と藥を持つて極まり惡るげに五兵衞の前に置いてヂツト泣き伏す、お辰は落ちて有る以前の鮭を拾うて不思議相にヂツト眺めて居る、重助も怪訝な顏にて財布よりつり錢を出し居る、此の模樣皆々よろしく各自の表情の內謊への囃子にてキザミ。）

――滿　來――

曾我廼家十郎篇

喜劇

小町と少將（三場）

登場人物

次郎松　仕丁
おさか　おはした
深草の少將
小野小町
植野　侍女
平八　次郎松の父
槌松　仕丁
八吾郎　同
倉作　同

一、御所築地内の場

舞臺の上手に御所の一部を近く見す。下手には松などが植ゑあり。

（仕丁槌松、八吾郎、倉作庭掃除道具を持つて居る。疲れたる體。）

八吾郎　やれ／＼。草臥れた／＼。なんぼ人數が多いとて、この廣い御苑の内を毎日々々のお掃除。足も腰もメキメキ言ふわい。

倉作　どれ。一休やらかさうかい。

槌松　これ／＼。勿體ないことをいふな。地下の者には覗く事さへ出來ぬこの御所の内を、我物顔に出入の出來るのは、何の爲めぢやと思うて居る。八瀬で生れたそのお影。何かの時には八瀬童子と召されて、尊い御用も勤められる。こんな冥加が又とあらうか。一生懸命働かねば罰が當るぞ。

倉作　成程。村に居れば百姓仕事。其泥足で、勿體ない、御所のお砂が踏めるとは。

八吾郎　あゝ、痛た……。

倉作、槌松　どうした／＼。

八吾郎　罰が當つて足が動かぬ。兩人(ふたり)で掃除をして置いてくれ。

菊松　こんな横着な奴ぢや。こんな奴に關はずと、さあ精を出せ。精を出して。

倉作　働いてくれ。

槌松　お前はどうする。

倉作　まあ、一服ぢや。

槌松　そんなら、俺も休むわ。

三人　はゝゝゝゝ。

八吾郎　時にこの天氣模様なら、村も豐作ぢやなあ。

倉作　さうとも〳〵。去年の様に日照續ではやくたいぢや。

槌松　その日照も小町様のお蔭で、降つた〳〵。偉く降つたなあ。

八吾郎　俺も話には聞いて居るが、歌を一首讀ましやつて、雨を降らせるとは、器用な事ぢやなあ。

菊松　それも、一つは美人のお影ぢや。

八吾郎　そないに美人かなあ。

倉作　皆人々々も王城一の美人ぢやげな、俺は運が悪うて未だ一度も拜んだことがない。

槌松　いや〳〵。拜まぬが幸ぢや。

倉作 八吾郎　とは、またどうして。

槌松　さあ、俺は神泉苑に雨乞に、遠見ながら拜んだが、いや美しいの何のと。あれは人間界のものぢやない。一目拜んで眼を廻した。

倉作、八吾郎　ふゝゝゝ。

槌松　それから家へ歸て嬶の顏を見て、さて〳〵不器用なもの。是も人間界のものではないと思ふと、立ても坐ても居られん。

八吾郎　また眼を廻したか。

槌松　いや。嬶を二つ三つ、どやしてやつた。そん様に美しい小町様が、銀の鈴を振る様なお聲で、（鼓の鳴く様な聲で身振し）「ことわりや日の本なれば照りもせむ

八吾郎　むべ山風を嵐といふらん。（とこれも身振す）

倉作　エヽ、間違へるな。それは康秀様のぢや。

槌松　さあ、その小町様の歌が、終るか終らぬ内に、空は黑雲、雨は車軸。

八吾郎　小町様も、濡れたであらうな。

槌松　濡れぬことかい。美人が濡れて。

八吾郎　ビショ（美女）濡か。

槌松　こちと達もシチョ（仕丁）濡ぢや。それから一層名も高く、殿上人をはじめとし、凡そ男と名の附くもので、小町様に想を懸けぬ者はないわい。

八吾郎　わけて深草の少將様は、人一倍の御執念とやら。

倉作　ふゝゝゝ。そして、戀が叶うたか。

槌松　詳しい事は知らぬが、小町様が瞞を振て、未だ物に成らぬさうぢや。

倉作　はてな。少將様は名代の歌讀。お年は若し、お家柄はよし。（調子づき）男はようて、金持で、なぜに小町が。

三人　コリヤ何だい惚れなんだ。コリヤ〳〵。（と踊出す）

（この時深草の少將上手より登場。）

少將　仕丁共。はしたない。何を申居るのか。

槌松　おゝ。これは〳〵少將樣。
八吾郎　噂をすれば影とやら。
少將　ハアクション。
倉作　お風でも、お引きなされましたか。
少將　風は風ぢやが、麿のは戀風。
三人　エ、。
少將　いや。次郎松は居らぬか。
槌松　御用なれば私共が。
少將　いや〳〵。次郎松に少々用事がある。呼んでたもれ。
槌松　へえ。かしこまりました。（下手向ふを見）向ふの楓の下を掃除して居るのは次郎松ぢや。おーい。次郎松。
（次郎松聲に應じて、下手より登場。）
少將　おゝ、次郎松。待兼ねたぞよ。
次郎松　へい〳〵。昨晩もあの處へ參りますと。
少將　（他の三人の仕丁に向ひ）これ〳〵。其方たちに用事はない。
次郎松　むゝ。成程。さあ向ふの方へ、散つた〳〵。
三人　人を木の葉の樣に云ひよるわい。（下手に這入る）
少將　毎夜の名代。大儀ぢやなう。
次郎松　いえ。どういたしまして。
少將　今宵で丁度七十五夜。後未だ二十五夜。頼むぞよ。（と短册を出し）千々の想を一すぢの筆に云はする心の中、推量あつて小町殿。願を叶へてたび給へ。
次郎松　それは何の呪で御座ります。
少將　あ、いや。想の丈の此戀歌。（と短册を渡す）
次郎松　えらうたんと御座りますなあ。
少將　十日ぶりの十枚ぢや。
次郎松　一夜々々は面倒と、束でお渡しに。
少將　些少ながら麿が寸志。（と一封を渡す）
次郎松　毎度有難う御座ります。
少將　あゝ、これ。聲が高い。かんまへて人に語りそ。穴かしこ。（上手に這入る）
次郎松　（後見送り）人に語りそ穴かしこ。（意味わからず、けげんな思入。）
（この時、槌松下手より登場。）
槌松　次郎松。何を云うて居るのぢや。
次郎松　今少將樣が、人に語りそ穴かしこと仰有たが、何の事やら、サツパリわからぬ。
槌松　むゝ。それか。それはな。お前が内密で、何ぞ少將樣から頼まれ、それを人に話しせんよつて、人に語らんあゝ賢い。」とかう仰有たのや。
次郎松　あゝ。成程。
槌松　なあ、次郎松。お前持とる物は何や。
次郎松　さあ、これで困て居るのや。といふ譯は、少將樣

お小町様を引張たと思へ。

槌松　ふむ〳〵。

次郎松　その返事には、男の心は浮氣なもの。百夜の間、妾の許へお通ひになれば、其心の底を見た上で、何とかお返事をいたしませうとのことで、雨の降る夜も、風の夜も、小町の元へ少將は百夜通の體で御座い。

槌松　よを〳〵。テン〳〵か。

次郎松　そこで、毎晩行つた印に、短册を投込んで來るのぢや。

槌松　まあ、判取帖の様なもんやな。そして、それは何をかいてやるのや。

次郎松　戀歌というてな。千々の想を一すぢの筆に云はすので、まあ一寸いうて見ると、「お前はんとなら手鍋下げても厭やせんどうぞ婦になつておくれやす。」こんな様なことを毎晩々々。ところが二十日や一月は續いたが、肝心の御本尊の顔も見ず、たゞ短册だけを入れに行くのは本意ない事と。

槌松　厭氣が出たのか。

次郎松　というて今やめては、百日の說法。ところで俺が頼まれて毎夜々々短册だけを入れに行くのや。

槌松　其駄賃は貰うて居るやろな。

次郎松　ふむ。で未だ二十日餘日が殘て居るが、俺はもう二三日で御所を下つて、村へ歸らなくてはならんのやが、斷ることも出來ず、困つて居るわい。

槌松　そんなら、俺が後を引請けようか。

次郎松　そんなら、こなたやつてくれるか。

槌松　駄賃はよいなあ。

次郎松　少將様へ申上げ、

槌松　代の代の其又代、

次郎松　人に語りそ穴かしこ。

（折しも、平八上手より登場。）

平八　其處に居るのは、次郎松ぢやないか。

次郎松　おゝ、阿父さん。お許も受けずこんな處まで。

平八　さあ、今御門の處で、村の作内に逢うてた。他の者ではなし。同じ八瀨で生れた者。別にお咎もなからうとて通してくれたので、あちらこちらを拜ましてもらふ内についうか〳〵と。

次郎松　おゝ、さうかいなう。さうして何ぞ俺に用事でも。

平八　むゝ、一寸あるのぢや。

次郎松　併し、其身形では人目に立つ。

槌松　そんなら、よい事がある。さあ、これを羽織れば咎めもない。（と白丁を平八に貸す）

平八　おゝ、槌松どん。忝けない。（白丁を着ける）

槌松　此處で、ゆつくり、話をさんせ。人に語りそ穴かし

こ。
次郎松　（下手に這入る。）そして、用事とは。
平八　外でもないが、そら、あの許嫁の大原のおさがな。あれが近い内に、御殿から下つて、村へ歸るさうな。
次郎松　そゝさうやなあ。俺も二三日で御殿を下つて歸る積でした。
平八　そして、目出度い祝言の盃。あれも、お宮仕をして居るだけに、それは〳〵見違る樣に立派に成た、でお前の事を根掘り葉掘り、聞いて居たぞえ。
次郎松　（乘出し）本まに。あの、俺のことを。そないに。
平八　むゝ。でな。先方が餘程立派ゆゑ、お前がまさか仕丁とも云ひ惜いによつて、後で知れても、まゝの皮と、伜は此頃は官位も進み、大分偉く成たという〻あるのや。
次郎松　えらい山こをはつたなあ。
平八　次郎松の持てる短册に目を付け）それは何ぢや。
次郎松　むゝ、これは。これは戀歌ぢや。
平八　（短册を次郎松の手より無理に取り）むゝ。見事に書いてあるらしいが、何人が書かしやつたのや。
次郎松　むゝ。それはその……。むゝ。俺が……。
平八　えゝ。そなたがふむ――。己にはわからん。一寸讀んで聞かせてくれい。
次郎松　親の前で戀歌が讀めますものかいなあ。
平八　成程なあ。御所奉公はさせればならぬなあ。村に居る時は、いろはもろく〳〵書けぬ者が、戀歌の短册。ふむ――。おゝ、丁度幸。これをおさがのところへ持て行つて俺の伜は、こんなものやと、一番自慢をしてやらう。
（立かける）
次郎松　いや。阿父さん。それは俺が……。（と短册を取返さうと平八に縋る）
（木の頭。）
（平八次郎松を振放て上手に入る。次郎松後に呆然。）

返し

二、小野小町邸の場

舞臺二重。御殿造。正面より上手にかけ、正殿及次の間を見す。正殿の欄干の中頃に階段を懸く。下手に枝折戸あり。折からの雪は、この庭をも銀と化し、猶ほ頻に降落つ。正殿の御簾内より琴の音聞ゆ。やがて御簾上る。
（琴の主は小町姫。下座で侍女おさが、居眠をして居る。柏野次の間より登場。緣を廻つて、小町の下に進み。）

柏野　申上ます。折角のお楽を妨げますのは、如何かと存じますれども、先程のお使にも、今宵は夜と共、中宮様にてお歌合せのお催。

小町　自らも參るべしと。

柏野　さあ、其刻限には早けれども、またいつものお方様の短冊の刻限には間もなくに、お爪音でも洩れましては、我を待つ間の徒然に、思を運ぶ望み音は、抔と兎角男は自惚の強いもの、取分け美男の少將様、若し考へ違ひで裏門から呼ばれでもいたしましては厄介。見るのは邪魔。

小町　思ひながらも興に乘り。

柏野　時刻のうつるも上の空。

小町　面ない事をしたわいなう。

柏野　さうお氣が附いたら重なれど、今夜は一番少將様に空をつかましてあげませう。もし、さが殿。今宵のお供は妾がする。そもじは殘つて短冊の受取役を。

ホヽヽ御免じませ。この通り、灯を見ると漕ぎ出す、白河夜舟。おつと。危い。當ります。

（と扇子にて輕く、さがを打つ。）

（おさが眼を覺し、狼狽。）

さが　ようく／＼いつもながらのお爪音。結構なことで御座ります。

柏野　お琴は、さつきに濟んだわいなあ。

さが　えゝ。

柏野　何が結構ぢやえ。

さが　其結構と申しましたのは。

柏野　其の居眠する添乳にかえ。

さが　はいー。

柏野　はいもないものぢや。ホヽヽヽ。したが、毎夜の裏門の事は知つて居やるかえ。

さが　そりや毎夜の事なれば、大概の事は

柏野　知つて居るかえ。

さが　居やつたり、居なんだり。

柏野　うす／＼位は

さが　存じませぬ。

柏野　それは、いつかう何も奈良の八重櫻、今日九重の宮居から、お召によつてお上のお供は妾に

さが　お留守は私

柏野　その留守中に裏門を、ホト／＼叩いて、短冊を出したら、默て受取ておかんせ。

さが　受取には及びませぬか。

柏野　なんの、それには及ばうぞ。

さが　それでは、まるで、たゞ取山の時鳥

柏野　本篠缺けた伽藍堂

さが　そのお前立の御開帳。

柏野　今宵一夜は小町樣。
さが　えゝ、そんなら私が身代に
柏野　銀にはあらぬ。錯の企業
さが　それでもどうやら
柏野　讒譏に及ばぬ影法師
さが　えゝッ。
柏野　いや。王城一の美人の元へ。よー、お美しいと申します。
さが　私や恥しいわいなあ。（袂で顏を隱す。拍子に袂より短册を落す）
柏野　（目早く見附け）これは……。（短册を拾ひ上ぐ）
さが　あゝ、それは……。（と取戻さんとする）
柏野　隱すには及ばぬわいな。小町樣に宮仕する私共假令おはした、おすゑでも、敷島の道を辿るとは
小町　てもしをらしい事ぢやなあ。
さが　いえ〳〵。それは殿御から、私へ參つた戀歌とやら。
柏野　何に。そもじに戀歌を。あゝ、世の中は廣いもの。さういふ茶人があればこそ、化物の賣口も。
小町　これは。
柏野　どういふことが書いてあるか、話の種に御覽じませ。
さが　いえ、それは……
柏野　はて、まあ。よいわいなあ。（短册を小町に渡す）

（小町短册を見て、机上の短册と見比べ思入あり。）
小町　おゝ寸分違はぬこの手跡。
柏野　何人樣の御手跡に。
小町　これを見や。（と兩方の短册を柏野に渡す）
柏野　（不思議想に、あちらにやり、こちらにやり比べ見）おゝ。こりや少將樣の（さがの持て居たのは平六がさがにやつたもの）ふうん。似たりや似たり花あやめ。引手の多い貴女樣に命をかけて、百夜通。女猫も抱くまいと思うて居たのに、おさが殿まで當つて見るとは、底の知れぬ惡性男今宵來たなら赤恥かゝせ。
小町　あゝ、これ。もとより、何とも想はぬお方。
柏野　成程々々。ヤキモキ思ふは壽命の毒。どうとも勝手にしろ痛。はいて廻はるはお心任せ。時刻のうつらぬ其內にいざお召換遊ばされませう。（小町柏野次の間に這入る）
さが　さあ〳〵。えらい事に成て來た今宵一夜はお姫樣。小野の小町ともあらう者が、この身形でも居られまい。おゝ丁度幸。あのお召物を。（と後に懸けある十二單を無雜作に羽織る頗る珍形）馬子にも衣裳髮形。我身ながらも見違へる樣。はて美しい者ぢやわいな――。（これより小町の座に坐り小町の眞似抔をなし御簾を下す）
（折から次郞松立派な身形をし下手より登場裏門に窺

ひ寄る足を滑らし、門内に轉げ入る。立つことも出來ず、笠で面を隱して居る。さが御簾を上げ出で來たり、次郎松を起し、力まかせに、御殿へ押上ぐ。次郎松笠て面を隱し、ウロ／＼ガタ／＼。）

さが　さあ、どうぞ、それへお坐りを。今宵は妻一人故、ゆつくりお話しくだされませ。

次郎松　また、出直して參ります。

さが　まあ、それでも。（と次郎松を引張る）

（拍子に次郎松の面笠より出て、兩人面見合せ。）

次郎松　おゝ。そなたは、大原のおさがどの。

さが　さういふお前は次郎松さん。あゝ。平八さんから、えらい出世をしたと聞いたが、それでは深草の少將様とはお前の事であつたかいなあ。

次郎松　むゝ。まあ、そんなものや。

さが　人の出世は、わからんもんやなあ。

次郎松　わからぬと言へば、こなたの姿が、立派になつたと聞いて居たが、今評判の小町とはそなたの事か。

さが　まあ／＼。な……。

次郎松　へえー。美しいな――。

（兩人互に人品にふさはしからぬ身形を我物顔に、しかし何處となく、キヨト／＼しながら見せびらかし合ふ。）

さが　然し、お前は惡性者ぢやさかい。

次郎松　なんで、私が惡性ぢや。

さが　さあ、惡性ではあるまいか。私といふ許嫁がありながら、毎晩々々短冊を。

次郎松　えゝツ。

さが　危(あぶ)うて都に置けん。何んでもかでも、今夜直に村へ歸つて、祝言してくだしやんせ。

次郎松　そんなら、小町さん。これから直に歸つて下さるか。それこそ、俺の望むところ。うつかり油斷をして居ては、可愛い女房を深草の……。

さが　えゝツ。

次郎松　いや。草深い田舍でも、二人で一緒に暮すなら

さが　飯(まゝ)も焚いたり、針仕事

次郎松　畠仕事のひま／＼に

さが　お前の作つた細工物

次郎松　頭(つむり)へのせて賣歩く

さが　京の町々聲高に

次郎松　梯や、打ばん、

さが　（次郎松の笠を頭に載せ、調子づけ、大聲で）　椎茸いらんかへ。

次郎松　しツ。

（木の頭。）

返し

三、一條戻り橋の場

舞臺一面に、京の雪景色を遠に見す。上手の橋。下手土手に立木二三本。

（上手より柏野下手より深草の少將同時に出づ。）

柏野　そつじながらあなた樣は、深草の少將樣では御座りませぬか。

少將　麿を見知りし其方は。

柏野　小野の小町が召使柏野と申します。

少將　それは〱。

柏野　してまた、この夜更けに、いづ方へ。

少將　宵の程より、中宮樣のお歌合せへ。

柏野　それでは、今宵に短冊にお休みで御座りますか。

少將　えゝツ。

柏野　百夜通は一と夜でも、間がぬければ、フイで御座りまするぞ。

少將　む……。

（爰へ上手より次郎松おさが身支度をして、一本の長い桃色の扱（しごき）の兩端で、各々頬被をし、手に手を取て出て來る。）

柏野　あゝ、これ待ちや〱。おさが殿ではないか。

さが　おゝ、柏野樣。

柏野　そんな形をして、今頃何處へ。

次郎松　實はその……。

少將　次郎松ではないか。

次郎松　へえー。

少將　深夜に及んで怪しき振舞。

柏野　仔細を語りや。

さが　もう、かうなれば何事も申します。實は毎晩裏門へ、短冊を入れに參ります深草の少將は私の夫で。

少將、柏野　えゝツ。

次郎松　小野の小町と申しますは私の許嫁で、女房。

少將、柏野　えゝ。

さが　これから村へ歸りまして、

次郎松　二人仲よく暮します。どなたも左樣なら。

（次郎松おさが下手に這入る。少將柏野後見送り呆然。顔見合せ。）

――幕――

唐木の看板（三場）

登場人物

江戸屋清三郎
越後屋源兵衛
お雪（源兵衛の娘）
お淺（盲の旅藝人）
久助（茶店の亭主）
金太（仕事師）
其他旅人等出づ

一　東海道新井の宿茶店の場

舞臺正面に腰掛茶店。上下立木の按排も宜敷く、松並木を透して遙に海見ゆ。浪音を聞かせ、幕明く。

（茶店前に三度笠、引廻を着たる旅人が馬に乘つて居る。茶店亭主久助は馬の口を取つて居る。側に盲お淺、お馬に蹴られた體にて倒れて居る。邊に通り掛の旅人が大勢集て居る。）

お淺　目の見えぬ者を、あんまりひどいぢやないか。あゝ、いたゝゝゝ。

久助　（馬上の旅人に）お前さんはまた、どうして馬子も連れずに、道中をしなさるか。えゝ、

馬上の旅人　いや、誠に濟まんことをしました。馬子も連れて來たのですが、實は立場で馬子が酒を呑んで居るのを待つて居りまして、つい馬の上で居眠しましたのぢや。で馬の手綱が解けて居たか、馬が勝手に歩き出し、盲殿を蹴つたのです。こりや、どちらも目がなかつたのです。どうぞ赦してくだされ。

久助　馬の上で舟を漕ぐとは、隨分器用な人ぢやなあ。

旅人大勢　あはゝゝゝ。

お淺　笑ふどころぢや御座りません。商賣道具の三味線を捨られては、食ふ事も出來ぬわいなあ……。（と泣く）

馬上の旅人　それは氣の毒ぢや。（と馬を下り）これは僅ぢやが……。（と一分金を盲にやる）

久助　こんな所で、邪魔をしてくれては困る故、馬を何處ぞへ連れて行つてくだされ。

馬の主　えらい災難ぢや。そんなら向ふの松並木へでも、繋いで置かう。（と馬の手綱を引けども〳〵、馬動かず）

旅人甲　おい、馬を動かすには、馬子歌を歌つてやらねば、動かぬぞ。

馬の主　あゝ、さうか。ではさあ「箱根八里は馬でも越す

が越すに越されぬ大井川」、と馬子歌を唄ひ、馬を引き上手に入る。集つて居た大勢の旅人も散り行きて、跡には茶店の亭主、お淺、旅人甲乙の四人）

お淺　人の戀路の邪魔もせぬのに、馬に蹴られるとは、理に合はぬ。

久助　然し一分貰へば、折れた三味線の代も出來るぢやないか。

お淺　さあ、これが三味線ゆゑよけれども、以前の様に琴でも持つて居たら、それこそ大事（琴）ぢや。

旅人甲　お前は餘程洒落者ぢやなあ。

旅人乙　以前は琴を持つて歩いたのか。

お淺　嵩張るゆゑ、三味線に換へました。

久助　然し、この邊で見掛けぬ人ぢやが……。

お淺　はい、大抵島田の宿に居りました。

旅人甲　元は反者ぢやなあ。

お淺　いえ／＼、武家出で御座ります。

久助　うーん、そして島田は、どの邊で……。

お淺　はい、宿屋の徳兵衛さんに、いろ／＼世話になりました。今も馬子歌で「越すに越されぬ大井川」とありましたが、忘れもせぬ私が十八の時、大井川で川止に逢ひました時は、つく／＼天道様を恨めしく思ひました。

旅人乙　道中で川止は大禁物ぢや。して、子供の時から盲かえ。

お淺　いえ／＼、中年の盲で御座ります。

旅人甲　はゝあ……。言葉の様子では、大分遠くの生れの人ぢやなあ。

お淺　はい。「元私は中國生れ、様子有つて都の住居、

久助　はゝあ、京にも居たのか。

お淺　一年宇治の螢狩、

旅人甲　なか／＼よいさうぢやなあ。

お淺　こがれ染めたる戀人と、語ふ間さへ夏の夜の、短い契に本意ない別、所尋ぬる便さへ、思ふに任かせぬ國の迎。

旅人乙　おや／＼。

お淺　親々に誘はれ、難波の浦を船出して、身をつくしたる憂き思ひ、泣いて明石の風待に、たま／＼逢ひは逢ひながら、つれない嵐に吹き分けられ、

久助　縁がないのぢやなあ。

お淺　國へ歸れば父母の、思ひもよらぬ夫定め、立つる操を破らじと、屋敷を拔けて數々の、憂き目を忍び都路へ、上つて聞けばその人は、吾妻の旅と聞く悲さ、

旅人乙　よーつ。（と調子に乗り）

お淺　またも都を迷ひ出で……」（愈義太夫本調子に、振付とまで漕ぎ出し）

久助　はつ。チッ、チンーチ、チン、チン。（と三味線を彈く身振宜敷く、浮れ出す）
旅人甲　おい〳〵、それは朝顏日記ぢやないか。
お淺　こんな事が、何處ぞに御座りまするかなあ。
旅人甲　子供でも知つて居るわ。
お淺　あゝ、世にはよく似た事も、御座りますなあ。
旅人甲乙　はゝゝ。馬鹿にするな。
（是にてお淺、旅人甲乙入る。）
久助　なんの事ぢや。
（茲へ上手より、順禮姿の源兵衞、お雪出で來る。お雪は疲れて、足を引摺つて居る。）
お雪　父さん。私や、もう歩けんわいな。
源兵衞　困つたなあ。おゝ、丁度幸、これなる茶店。では一休みしようかいなあ。
久助　まあ、お休みなされませ。
源兵衞　有難う御座りますが、見ればお獨の樣子、御家内はないのですか。
久助　へい。去年家内に死なれまして、今は獨身で。
源兵衞　困つた事ぢやなあ。
お雪　申し、父さん私やもう………。（と疲れ果て泣き出し相）
源兵衞　さあ、なんぼお前が疲れても、上方へ行き、婿殿の手に渡す迄は大事の身體。男ばかりの此の茶店。こりや、めつたに休まれぬわい。
久助　あゝ、順禮の親父さん。なんぼ男猫でも、六十過ぎたこの親父。まさかお娘御の袖も引かぬわいな。
源兵衞　なぞと油斷をさすのが、そつちの奥の手。
久助　まるで盜賊ぢやがな。
源兵衞　子を思ふ親心は、まあ、こんなもので御座ります。それでは、一寸休まして貰ひませう。
久助　まあ、ゆつくりお休みくだされませい。
（折しも花道より江戸屋清三郎、旅姿にて出で來る。何やら知らぬが、板樣の物を大事相に荷造して、脊負うて居るのが目立つ。軈て木鐵臺に掛り。）
清三郎　一寸一服さしておくんなはれ。
久助　いらつしやい。さあ、どうぞお掛けくだされませ。
（清三郎が腰を掛けようとすると、源兵衞は飛び退き、娘を庇ふ。）
清三郎　あゝ申し。御遠慮には及びまへん。旅は道連世は情。
源兵衞　えゝ、滅相な。道連どころか、この娘には口もきく事も出來ぬわい。
清三郎　それはお氣の毒な事で。見れば何處一つに言分のない顏容。それで口がきけぬとは。

源兵衞　あゝ申し、何被仰る。嘘ではありません。

清三郎　それでも、あなたが、口きく事が出來ぬと被仰りましたがな。

源兵衞　きけぬのぢやない。きかぬのぢや。

清三郎　あゝ、嘘だすか。

源兵衞　分らぬ人ぢやなあ。この娘はなあ、男と名の附くものは犬でも、猫でも側へは寄せぬ。殊さら若い男とは、もつての外。

清三郎　はゝあ……。色狂人か。

お雪　まあ、父さん。あんな事を……。

源兵衞　あゝ、大事ない／＼。これ、何被仰ります。この娘には、歴とした亭主が御座ります。

清三郎　はゝあ、それに死に別れなはつたか。但しは、その男さんが外に女でもこしらへて、それが原で、そんなお病氣になりなはつたか。

源兵衞　縁喜の悪い事被仰るな。婿と云ふのは、まだ死んでも居りません。また極道者でも御座りません。これから其側へ、連れて行くので御座ります。

清三郎　須運を押付けられた婿殿は、いやはや誠にお氣の毒な事で、定めて困られる事でおまつしやろ。他事とは云ひながら、ほんになあ。然し、どう見ても狂人とは、見えんなあ。

お雪　あれ、あんな事を……。

源兵衞　よいわいな。狂人結構。狂人なれば誰も、相手になる人もなし。狂人で無事に道中を濟まし。お婿さんの手に渡せば、親の役目も濟み、お前の望も叶ふのぢや。人を狂人扱するあの人こそ、なんやら變な物を背負うて御座る。眞魚板でもなし。金比羅様のお札でもなささうな。

清三郎　これはなあ、御先祖様から傳つて居る、私の家の看板ぢや。

源兵衞　教障のか。

清三郎　なに。

源兵衞　そんな重い物を背負うて、道中をせねばならぬとは因果ぢやなあ。

清三郎　重いか、軽いか分りますか。

源兵衞　看板なら、まさか桐の木でもなし。樫か。欅か。但しは栗の木か。

清三郎　憚ながら唐木の看板、假令少しは重くとも、我が物と思へば輕き傘の雪。戀の重荷を肩に掛け……、

源兵衞　妹許ゆけば冬の夜の、川風寒く千鳥鳴く、待つ身につらきおき炬燵、實にやるせがないわいな。」

清三郎　いよ／＼、親子の狂人ぢや。

久助　やれ／＼、お氣の毒な。

お雪　あゝゝ。（泣く）

源兵衞　これ〳〵、何も泣く事はない。あれは馬鹿者ぢや。何も馬鹿の云ふ事を、取上げんでもよい。なあ御亭主。

久助　へい。

源兵衞　自慢ぢやないが、私の娘は容色、氣立はいふに及ばず、讀書から縫針まで、何一つとして言分のない、町内の評判娘ぢや。

清三郎　あゝ、評判々々。代は見てのお歸り。

源兵衞　何ぬかすのぢや。なあ、御亭主。世の中は馬鹿が多い。人の事には吝をつけたがり、人の賞められる事は貶したがる。こんな奴は道中などで、暴馬にでも蹴殺されるのが落ぢや。

清三郎　何にッ。

源兵衞　なあ、御亭主。

清三郎　何に言ひくさる。目と鼻とさへ附いてれば、小野小町か、照手の姫かの樣に思うてけつかる。これがほんまの親馬鹿チャンリン。

源兵衞　何に。

清三郎　お前さんと、言うてはいまへん。なあ、御亭主。

源兵衞　人の顏の惡口を言うて、己が人中へ出せる顏かい。晝歩いて居ればこそ無事ぢやが、夜中になれば人が、化物と間違へて、目を廻はすは、なあ御亭主。

清三郎　さう被仰る御自分樣も、うつかり山道を歩いたら、獵人が鐵砲を向ける狸親父に、六六目の編んだ樣な娘。いよ〳〵揃ひまして御座い。

源兵衞　己ッ。

久助　まあ〳〵、お待ちなされませ。何も敵の末ぢやなし、袖振り合ふも他生の緣。喧嘩はもうこれ位で、仲直をなされませ。さうしていたゞけば私の方も、酒と肴の儲備喧嘩は小さくして、仲直を大きくするのが、當世で御座います。

清三郎　然しその仲直も、また後で、附合ふつもりもなければ、二度と顏合はすでもなし。

源兵衞　また物言ふ事もなし。

清三郎　何處の牛の骨やら。

源兵衞　馬の骨やら。

久助　猫の鼻やら。

清三郎　犬の足やら分らぬ者と、仲直は眞平ぢや。

源兵衞　こつちも、いやぢや。

久助　丁度幸ひ。

清三郎、源兵衞　まあ、止めぢや。

久助　それでは何も、奈良の南圓堂。「春の日は、南圓堂に……

（と詠歎とであれば、源兵衞も共に歌ふ。お雪も咏聲

に手を合はす。）

清三郎　とうと、狂人の正體を現はした。

源兵衛　順禮が詠歌を勸めるのが、何が狂人ぢや。

清三郎　詠歌狂人ぢや。

源兵衛　何となと言へ。御亭主、えらいお邪魔を致しました。仲直はいたしませんが、これはほんのお茶代……。

清三郎　私も仲直はしやへんが、これはほんのお茶代……。

久助　どちら樣からも戴きまして、有難う御座います。

（是にて雙方立上る。お雪は自分等の二つの笠を持つ。源兵衛も側にある笠を持ち、出掛けようとする。清三郎は笠を取らうとすると、置いてあつた所にない。軈て源兵衛が自分のを持つて居るのを見附け。）

清三郎　やい、順禮の盜賊。おい、順どろ。盜賊待て。

源兵衛　こりや、言ふ事と言はぬ事があるぞ。順どろとは誰の事ぢや。盜賊とは、誰に言ふのぢや。

清三郎　この邊に順禮は、お前方だけぢや。お前の事ぢや。

源兵衛　何にツ。なんで、私しが盜賊ぢや。

清三郎　人の物を取るから、盜賊ぢや。

源兵衛　何を取つた。

清三郎　その笠は。……

源兵衛　これは……（と、間違へたるに氣付く）

清三郎　娘が二つ持つて居るわい。

源兵衛　あゝ。

清三郎　體が二つで、頭が三つか。化物めッ。

源兵衛　えゝ、返してやるわい。（と投出す）

清三郎　こりや、親父。待て。人の物を間違へて置いて、斷りも言はずに投出して、濟むのか。

源兵衛　これから言ふのぢや。「順禮に御容赦（報謝）」。

清三郎　ざまあ、見くされ。訛りやがつて。

源兵衛　可哀相ぢやから、言うてやつたのぢや。

清三郎　うえ／＼／＼。

源兵衛　うえ／＼／＼。笑うてやれ。

（雙方「うえ／＼」と惡口を言ひながら、清三郎は上手源兵衛親子は花道へ入る。）

久助　（後見送りて）あゝ一寸したことから喧嘩。然し茶代を張り込んで貰うて……。（とホク／＼喜ぶ）

（この時、上手より馬ノソ／＼出て來る。下手より馬子出て來り。）

馬子　コン畜生ッ。

久助　えゝッ。

（にて。）　　木の頭。

返し

二　江戸と浪速の場

舞臺眞中に、

右江戸　此間百五十三里三丁
左大阪

と記したる大なる木標を建つ。木標の上手は江戸の元の越後屋源兵衞の家、貸家札が張つてある。下手は大阪の元の江戸屋清三郎の家を見す。兩都の家の造方の異つて居るのが目立つ。

（茲へ花道より、大師詣の老婆出て來る。續いて、源兵衞親子出て來り。）

源兵衞　あゝ、申し〳〵。一寸ものをお尋ねいたしますが、江戸屋清三郎さんのお家は、どちらで御座りますか。

老婆　あゝ、江戸屋清三郎さんは、向うの家でおます。

（と下手の大阪方の家を指し敎ゆ。）

源兵衞　有難う御座ります。

お雪　清三郎さんのお家は、もう此處かえ。私や恥しいわいな。

源兵衞　さあ、早う行つて、お目に掛りませう。（と本舞臺に掛ると）

老婆　あゝ、申し此處は江戸屋の家で……。

源兵衞　御座りませう。

老婆　御座りまへん。

源兵衞お雪　えゝツ。

老婆　さあ、元は江戸屋清三郎さんの家でおましたが、お母はんが死なはつて、店を閉めるに就いて、私が跡へ移つて參りましたのだす。

お雪　そんなら清三郎さんは……。

老婆　えゝ、息子さんの事かえな。然し、あなた方は大阪のお方ではおまへんなあ。

源兵衞　江戸の者で御座ります。

老婆　それにしては、どうも大阪訛が……。

源兵衞　江戸ッ子に見えませんか。爭へぬものですなあ。實は大阪で生れまして、十三の年に江戸へ行き、越後屋といふ家へ奉公をいたしました。ところが御主人の御目鏡で、その家の娘さんの養子となりました。これでも昔は業平、そつち退けといふ男前、町内は申すに及はず……（老婆の笑ふを見て）笑ひなさんな。で、そんな樣な工合で出來ましたのが、是なる娘。清三郎さんとは許嫁で御座ります。

老婆　あゝ、さうだすか。しかし間の惡いもの。折角遠方お越しくだはれましたが、息子はんは、その江戸へ行く

というて……。
源兵衛　ふうん。して江戸はどちらへ。
老婆　聞いた様子では、許嫁のお嫁さんの……、あなたの處へ……。
お雪　こちらも。
源兵衛　そんなら、あちらも。
老婆　合子でポイ。
お雪　うーん。(驚の餘り癪を起す)
　(源兵衛、老婆驚き側に寄り介抱す。)
老婆　こりや〳〵、どうしなはつた。しつかりしなはれ。私の家へでも來て、お藥でも服みなはれ。
源兵衛　有難う御座ります。
　(是にて、皆々家に入る。)
　(同時に、江戸の方上手より、清三郎出て來る。後より五月鯉の金太、清三郎をギロ〳〵と見ながら附け廻はす。清三郎氣味惡氣にしてたが。ヤツトして。)
清三郎　一寸お尋ねいたしまんが、この邊に越後屋源兵衛はんといふ家がおまへんかなあ。
金太　お前さんは贅六だな。(チヤキ〳〵の江戸ッ子辯)
清三郎　贅六とは失禮な。これでも江戸ッ子でがす。
　(と江戸言葉に、大阪訛。)
金太　おい、止せよ。唾が掛るわ。
清三郎　大阪で暮して居ましたが、この江戸へ嫁を探しに來ましたのだす。
金太　それぢや、お前さんは江戸屋清三郎といふ人ぢやねいか。
清三郎　どうして御存じで。
金太　俺は一寸聞いた。越後屋の家は此處……。
清三郎　へえ、有難う。あゝ、貸家でおますなあ。(と驚き)
金太　それが越後屋も、お母が死なれてから店を閉め、親父殿と娘殿が、上方の許嫁の婿……お前さんのところへ行くと言うて立たれた。俺も品川まで送つてやつたが、丁度今頃は大阪へ着いて、お前さんの家を探して居る時分。
　(この時大阪方にては、源兵衛、お雪、老母家より出で。)
源兵衛　有難う御座います。お蔭樣で、スツカリ様子も分りました。
老婆　隨分氣を付けて行きなはれや、私の思ふのは、今頃は丁度江戸へ着いてお前はんの家を探して居やはる時分。
お雪　そんなら、父さん。ちつとも早う引返し。
　(江戸方之に應じ。)
清三郎　直に是から大阪へ。
金太　引返しても其の人を、お前さんは知つて居るか。

清三郎　別に目當がないけれど。

金太　さう云ふ事なら道中で、親子連の順禮姿、それを目當に氣を付けて。

清三郎　えゝッ、それぢや、もしや、新井の茶店で逢うた順禮……。

金太　知つて居るのか。

清三郎　むー……。

金太　分つて居るのか。

清三郎　かうつと……。

金太　逢うて來たのか。

清三郎　待てよう……。

（大阪方。）

老母　私の思ふのでは、息子はんはキット引返し、戻つて來ると思ふ故、道中筋に氣を付けて、目當にするは唐木の看板、そんならこれで御免を……。（と家へ入る）

源兵衞　そんなら、もしや新井の宿で喧嘩をした、あの時の……。

お雪　えゝ、父さん。何としよう。

源兵衞　心配するな萬事は、私に任しておきなされ。

お雪　「今頃は清三郎樣。

源兵衞　どこに、どうして御座らうやら、

（江戸、大阪兩方の渡臺詞となり。）

清三郎　今さらかへらぬ事ながら、行末連添ふ女房や、男御様を相手取り

源兵衞　舅親父ぢや、順拜ぢや

清三郎　夜出るお化や、何んやかや

源兵衞　惡口言ふも内同士

清三郎　情の籠るあの喧嘩

源兵衞　荒い言葉の何處やらに

清三郎　柔しい姿のお孃はん

源兵衞　あれが、お前のお婿さん

清三郎　あれが、私の嬶かいな。へゝへん。

金太　止しやがれ。（と上手へ入る）

源兵衞　さう聞くからには一刻も（身繕ひし）

清三郎　猶豫はならぬ東海道（身繕ひし）

源兵衞　五十三次引返し

清三郎　逢うて目出度う祝言の

源兵衞　盃するもいま暫。

雙方　大急ぎぢやあッ。

（鼓にて賑なる囃に連れ、雙方木標な中に、向ひ合ひ、同じ場所で韋駄天走となる。）

（同時に家の道具引割れ、街道の景となり、木標上方兩側より左右に、夫々大阪、江戸に近きところより順順東海道宿々の驛名を書きたる、幕を引き出す。）

（雙方は交々出て來て驛名を讀み上げながら、一生懸命に走る。）
（軈て幕出來せて、木版割れて大樹となり。）

三　東海道見附の宿場

清三郎　あゝ〱、むゝ。見附ぢや〱、見附た〱。
源兵衞　むーん、疲れた。おゝ、見附ぢや〱。見附た〱。
雙方　先日は、いやはや、えらい失禮……。（と頭を掻く）
源兵衞　その失禮よりお尋ねしたいのは、あなたは江戸屋の清三郎さんぢや御座りませんか。
清三郎　さう仰有るあなたは、越後屋の伯父はんぢやおまへんか。
お雪　そんなら、あなたが清三郎さん。
清三郎　お雪はんか。
源兵衞　お氣の毒ぢやが、この娘……。
清三郎　結構々々。（と行きかける）
源兵衞　待て〱。お父さんが附いて居る。急いては事を間違へる。
お雪　間違うても、大事ないわいな。
源兵衞　やくたいぢやがな。
清三郎　いや、間違ひは御座りません。長崎傳來家の目印。伯父はん。看板に僞はおまへん。
皆々　あはゝゝ。

木の頭

——幕——

解　説

川村花菱篇

川村花菱氏、名は正平、明治十七年二月二十一日、東京市牛込區若久戸町に生れた。早稲田大學英文學科卒業後、早く演劇方面の活動に入り、戯曲及び演劇評論の著作頗る多い。「花菱脚本集」「岡定忠次」「大正むさしあぶみ」等のほか、飜案にメリメエの「カルメン」、トルストイの「生ける屍」等があり、その著書は裕に六十種を越えて居る。

本篇に收錄したのは數多い氏の戯曲中の一小部分に過ぎないが、道に長い戯曲生活を送つて來た作者の戯曲集だけあつて、それ〴〵の戯曲の間に著しい時代の差が反映されて居るのが面白い。

「死」は輕い喜劇的雰圍氣のうちに、他人の死に對する人間の冷淡さを浮き上がらせて、逆說的な效果を覘つたもの、三つの忠次物は、何れも新國劇風の侠客劇で、かうしたものが著しく流行した最新劇壇の時代相を語つて居る。最後の「馬鹿野郎の死」では、觀念的な虚名にばかり眩惑されて、物の眞相を觀ようとしない衆愚を嘲つてゐる。正直一圖な「馬鹿野郎」は所詮此人生では「馬鹿野郎」たるに過ぎないのである。

氏の戯曲は、此篇中の數種に就いて見ても明かであるやうに實に多様の形態をもつて居るが、實演に適するといふ一點はどの戯曲にも共通してゐる。氏もまたさういふ意味での實際的戯曲家の一人である。

瀬戸英一篇

瀬戸英一氏は、明治二十五年七月二十一日、大阪市北區曾根崎新地に生れた。學歴と稱すべきもの殆となく、曾ては新聞記者等をしたことがあつたが、大正五年、松竹合名會社附作者となり、以て今日に及んで居る。

本集に採錄した作品の多くも最初から松竹のために執筆されたものであることといふまでもない。従つてその作品が總て頗る大劇場むきであること當然である。

行友李風篇

行友李風氏は、明治十二年、備後國鞆ノ津に生れた。某商業學校卒業後、大阪新報社に入り、社會部記者となり、副部長に昇進し、次いで同部長となつた。後、松竹脚本部に入り、更に澤田正次郎の新國劇顧問となつた

澤田の上演に依つて有名な「月形半平太」を始めとして「北海熊」等小說脚本の著作が頗る多い。

本篇中の「新撰組」は澤田の好んで上演したところ、所謂劍劇中の典型的なものゝ一つである。「延命院祕事」では嫌態的な性格を主人公として、過去に纏はられて展けぬ運命と、二人の女の肉體的な戀と精神的な戀とが描かれて居る。

中村蝶二篇

中内蝶二氏、本名は義一、明治八年五月五日、土佐莊濱に生れた。明治三十三年東京帝國大學文科卒業、直ちに博文館編輯部に入り、三十八年九月、轉じて萬朝報に入つた。

脚本數種のほかに、支那哲學及文章に關する著書が數種ある。

此篇に收めた「大尉の娘」は氏の戲曲中の代表作であつて、既に上演を繰返へさるゝこと何回といふことを知らず、所謂新派脚本中の古典の一つになつて居る。

木村錦花篇

木村錦花氏、名は錦之助、明治十一年五月、牛込區岩戸町に生れた。

大正元年、松竹合名會社に入り、のち同會社理事となつた。更らに大正十一年一月、日蓄演藝部の顧問に聘せられた。

數種の戲曲のほかに、「日本演藝大辭典」の著作がある。

本篇に載せられた「研辰の討たれ」その他は、「研辰」といふ一種特異な人物を創造することに依つて昭和初頭の劇壇を大いに騷がし、菊五郞、猿之助等が競つて上演したところの名作である。常人が等しく持ちながらも出來るだけ匿さうとする賤しい氣持を、研辰に依つて忌憚なく積極的に暴露して居るところに、この研辰ものの面白さがある。

曾我廼家五郎篇

曾我廼家五郎氏、本名は和田久一、明治十年九月六日、堺市宿院町に生れた。

中學一年にて退學、十六歲にして孤兒となり、十八歲にして大阪舊俳優中村珊瑚郞の門に入つて中村珊之助と名乘つた。

のち明治三十七年、自から曾我廼家を創立して今日に及んで居る。

かくの如く、氏は寧ろ、劇作家としてよりは喜劇俳優として大いに名聲がある。そして日本にたゞ一つの喜劇々團

を創立して且つ之を旺ならしめた氏の功績は實に偉大だといはねばなるまい。

たが、俳優である氏はまた同時に頗る多産なる戯曲家である。氏は二十有餘年間の上演に、すべて自作の戯曲を用ひて居たのである。從つてその作るところ實に數百種を超え居るのだ。

本篇にのするところはその九牛の一毛に過ぎないのである。

曾我廼家十郎篇

曾我廼家十郎氏は、曾て五郎氏と組んで一座を組織して居たがその後分裂獨立したのであつたと思ふ。氏も亦自作を自演する。

本篇中の二作もそのうちの一部分である。何れも舞臺にのせた時の可笑味を思ふと讀みながらも微笑まざるを得ない底のものである。

（編　輯　部　編）

編輯校訂

吉田甲子太郎

佐藤十三郎

清水義致

日本戲曲全集・第三十九卷
現代篇第七輯・第十六回配本

昭和四年八月二十七日印刷
昭和四年八月三十日發行
（非賣品）

著作者　川村花菱
　　　　瀨戶英一
　　　　行友李風
　　　　中內蝶二
　　　　木村錦花
　　　　曾我廼家五郎
　　　　曾我廼家十郎

發行者　和田利彥
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目
發行所　春陽堂
電話日本橋
一三六五
六七四
一八
七八一一
振替東京

東京市本鄕區眞砂町・日東印刷株式會社印刷